公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（13）

東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT）建設に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

永吉天神段遺跡２
第２地点－１

（曽於郡大崎町）

旧石器時代・縄文時代早期・後期編

２０１７年３月

鹿 児 島 県 教 育 委 員 会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋 蔵 文 化 財 調 査 セ ン タ ー

遺跡遠景 第２地点北東部（西側上空から）

第２地点東部中央 縄文時代早期 集石検出状況遠景

縄文時代早期 集石２号と散礫

旧石器時代・縄文時代早期の出土遺物

序　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ）の建設に伴って，平成 24 ～ 27 年度に実施した曽於郡大崎町に所在する永吉天神段遺跡第２地点の発掘調査の記録です。

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターは平成 25 年４月に発足しました。当調査センターの役割は，近年増加している国事業に係る発掘調査に円滑に対応するため，従来鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施してきた発掘調査を引き継ぐとともに，新規の国事業に係る発掘調査を実施することにあります。永吉天神段遺跡については，平成 24 年度は，鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行いましたが，平成 25 ～ 27 年度発掘調査と平成 27，28 年度整理作業及び報告書刊行は当調査センターが担当することになりました。なお，発掘調査と整理作業及び報告書作成作業は，株式会社パスコに支援業務を委託し，業務の更なる効率化を図っております。

永吉天神段遺跡第２地点では，旧石器時代から近世の遺構・遺物が発見されました。本報告書では，そのうち旧石器時代・縄文時代早期・後期の報告を行っています。

旧石器時代では，ナイフ形石器文化期の石器製作跡や台形石器など，大隅半島の旧石器時代を考える上で，貴重な情報を得ることができました。縄文時代早期では，調理施設と考えられる多数の集石や，食材加工のための石匙・磨石・石皿等が多く発見されています。縄文時代早期の人々の生活の在り方を考える上で，有効な情報を得ることができました。

本報告書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後に，調査にあたり本県の埋蔵文化財保護のために御指導・御助言いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿児島県教育庁文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター，大崎町教育委員会，調査中に御指導・御助言をいただいた先生方，株式会社パスコ，発掘作業員，整理作業員，本遺跡の所在する大崎町永吉の档ヶ山集落の皆様，その他関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 29 年３月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長　堂込　秀人

報　告　書　抄　録

ふりがな	ながよしてんじんだんいせき２　だい２ちてん－１
書名	永吉天神段遺跡２　第２地点－１　旧石器時代・縄文時代早期・後期編
副書名	東九州自動車道（志布志 IC～鹿屋串良 JCT）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	13
編集者名	隈元俊一・湯場﨑辰巳・株式会社パスコ（池畑耕一・浦辻栄治・関口昌和・黒沢聖子・関口真由美・翁長武司・松村由記・相川薫）
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL0995-70－0574　FAX0995-70-0576
発行年月日	2017 年 3 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ながよしてんじんだんいせき 永吉天神段遺跡 だい２ちてん 第２地点	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曽於郡 おおさきちょう 大崎町 ながよし 永吉 あざてんじん 字　天神	46468	468-104	31° 26’ 38”	130° 58’ 58”	確認調査 2011.07.01 ～ 2011.09.28 本調査 2012.07.02 ～ 2016.01.27	22.734 ㎡	東九州自動車道（志布志 IC～鹿屋串良 JCT）建設に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
永吉天神段遺跡 第２地点	散布地	旧石器時代	礫群１基 石器ブロック７箇所	ナイフ形石器，尖頭器，角錐状石器，台形石器，削器，掻器，剥片，石核，敲石	
	散布地	縄文時代 早期	集石 82 基 土器埋設遺構１基	前平式土器，加栗山式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，押型文土器，手向山式土器，妙見式土器，平栫式土器，塞ノ神式土器，苦浜式土器，条痕文土器，石鏃，石匙，打製・磨製石斧，磨石，石皿，異形石器	
	散布地	縄文時代 後期		岩崎上層式土器 北久根山式土器 中岳Ⅱ式土器	

要　約

本遺跡は持留川とその支流に挟まれた標高約 50 mのシラス台地縁辺部に位置し，旧石器時代～近世の複合遺跡である。本報告書は，そのうち旧石器時代・縄文時代早期・後期を報告する。

主体となる時代は，旧石器時代（ナイフ形石器文化期）と縄文時代早期である。

従来，大隅半島の旧石器時代は発掘調査事例が少なく，詳細に調査･研究されてこなかった。本遺跡では，ナイフ形石器文化期の石器製作跡や台形石器など，大隅半島の当該時期を考える上で，貴重な資料となる。

縄文時代早期では，調理施設と考えられる多数の集石が検出され，食材加工のための石匙・磨石・石皿等が多く出土した。キャンプサイト的な役割を担っていたものと推測され，周辺遺跡との比較検討することで，縄文時代早期の人々の行動範囲・生活の在り方を考える上で，有効な情報を得ることができた。

第１図　遺跡位置図（1:50,000）

例　言

1　本書は，東九州自動車道（志布志 IC ～鹿屋串良 JCT）建設に伴う永吉天神段遺跡第２地点旧石器時代・縄文時代早期・後期の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町永吉字天神に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局から鹿児島県が受託し，鹿児島県立埋蔵文化財センター及び公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施した。

4　発掘調査は，平成 24 年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターが，平成 25 ～ 27 年度に公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施し，発掘調査（本調査）の全てを終了した。

5　整理・報告書作成は，平成 27・28 年度に公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターが実施し，平成 27 年度に第１地点を刊行した。

6　発掘調査支援業務を株式会社パスコへ委託し，平成 24 年度は川口雅之，平成 25 年度は湯場﨑辰巳・彌榮久志，平成 26 年度は湯場﨑・彌榮・隈元俊一，平成 27 年度は隈元・上村俊洋の，指揮・監督のもと調査を行った。また，空中写真撮影は株式会社ふじたに再委託した。

7　整理作業及び報告書作成作業支援業務を株式会社パスコへ委託し，平成 27 年度は湯場﨑・隈元，平成 28 年度は隈元・上村の，指揮・監督のもと業務を実施した。

8　遺構図・遺物分布図の作成は，各年度担当職員が，株式会社パスコの協力を得て行った。

9　出土遺物の実測・拓本・トレースは，各年度担当者が株式会社パスコの協力を得て行った。なお報告書の作成には adobe 社製「InDesignCC」,「IllustratorCC」,「PhotoshopCC」を使用した。

10　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場にて，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センターの隈元・吉岡康弘・辻明啓が行った。

11　本報告に係る自然科学分析は，株式会社　パレオ・ラボ，株式会社　古環境研究所へ委託した。

12　執筆担当は以下のとおりである。また本書の編集は隈元が株式会社パスコの協力を得て行った。

第１章　　隈元　俊一　湯場﨑　辰巳
第２・３章，第４章２・３節，
第５章　第１節，第６章　　隈元　俊一
第４章　第１節　　関口　昌和
　　第２節　土器　　翁長　武司
　　浦辻　栄治
　　石器　　関口　昌和
　　関口　真由美
第５章　第２節　　株式会社パレオ・ラボ
　　第３節　　株式会社古環境研究所

13　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。なお，遺物注記等で用いた遺跡記号は「NTJ」である。

14　使用した土色は『新版 標準土色帖』(1970，農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。

15　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高度である。

16　本書で使用した方位は，すべて座標北（G. N.）であり，測量座標は国土座標系第Ⅱ系を基準としている。

17　遺構種別ごとに略記号を付して調査を行った。以下に遺構の略記号を示す。
　RG：礫群　SS：集石　SK：土器埋設遺構

18　遺構の縮尺は次のとおりである。
礫群 1/10，土器埋設遺構・土器出土状況 1/20，集石 1/20・1/25・1/30
各図中にスケールは示してある。

19　遺物の縮尺は次のとおりである。土器 1/3，小型石器 1/1 ～ 1/2，大型石器 1/3 ～ 1/4（大型土器・一部大型石器・拓本についてはこの限りでない)。各図中にスケールを示してある。

20　掲載遺物番号はすべて通し番号であり，本文，挿図，表及び図版の番号は一致する。

21　掲載土器の拓本を表裏とも貼付の場合，表面が左，裏面が右に配置してある。

本文目次

第１章　発掘調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第１節　調査に至るまでの経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２節　確認調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第３節　本調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第４節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
第５節　整理・報告書作成作業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第２章　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第１節　地理・地質的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
第３章　調査の方法と層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第１節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第２節　層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
第４章　調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第１節　旧石器時代の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
第２節　縄文時代早期の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
第３節　縄文時代後期の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 163
第５章　自然科学分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
第１節　自然科学分析の種類と目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
第２節　永吉天神段遺跡出土の炭化物分析・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 166
第３節　永吉天神段遺跡出土の植物珪酸体分析・・・・・・・・・・・・・・・・・ 167
第６章　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170
第１節　旧石器時代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170
第２節　縄文時代早期・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 170

挿図目次

第１図　遺跡位置図
第２図　周辺遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・11
第３図　東九州自動車道(志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ)
　　建設に伴って調査された遺跡・・・・・・・19
第４図　確認調査トレンチ位置図・・・・・・・・・・21
第５図　グリッド配置及び調査範囲図・・・・・・・23
第６図　基本土層図・・・・・・・・・・・・・・・・25
第７図　土層断面図（１）・・・・・・・・・・・・・26
第８図　土層断面図（２）・・・・・・・・・・・・・27
第９図　土層断面図（３）・・・・・・・・・・・・・28
第10図 土層断面図（４）・・・・・・・・・・・・・29
第11図 土層断面図（５）・・・・・・・・・・・・・30
第12図 旧石器時代調査範囲と遺物出土区域図・・・32
第13図 東部調査区出土遺構・遺物分布図・・・・・33
第14図 第１礫群・・・・・・・・・・・・・・・・・34
第15図 ブロック外Ｃ－50・51区出土遺物分布図 ・36
第16図 第１礫群，第１・２ブロック及び
　　ブロック外出土遺物分布図・・・・・・・・36
第17図 第３ブロック及びブロック外出土遺物分布図 ・37
第18図 第１～３礫分布，第４～７ブロック及び
　　ブロック外出土遺物分布図・・・・・・・・38
第19図 ブロック外Ｆ・Ｇ－52区出土遺物分布図 ・39
第20図 東部調査区出土遺物垂直分布図・・・・・・40
第21図 Ｅ－47区出土遺物分布図 ・・・・・・・・41
第22図 Ｆ－38区出土遺物分布図 ・・・・・・・・41
第23図 Ｇ－23区出土遺物分布図 ・・・・・・・・41
第24図 第２ブロック及びブロック外出土石器・・・43
第25図 ブロック外Ｃ－50・51区出土石器 ・・・・43
第26図 第３ブロック及びブロック外出土石器（１）44
第27図 第３ブロック及びブロック外出土石器（２）45
第28図 第３ブロック及びブロック外出土石器（３）46
第29図 第４ブロック及びブロック外出土石器（１）46
第30図 第４ブロック及びブロック外出土石器（２）47
第31図 第５ブロック及びブロック外出土石器・・・47
第32図 第６ブロック出土石器・・・・・・・・・・48
第33図 第７ブロック及びブロック外出土石器・・・49
第34図 ブロック外Ｆ－52，Ｇ－52・53区出土石器50
第35図 Ｅ－47区出土石器 ・・・・・・・・・・・50
第36図 Ｅ－47，Ｆ－38，Ｇ－23区出土石器・・・51
第37図 土器埋設遺構及び出土土器・・・・・・・・53
第38図 縄文時代早期　東部遺構配置図・・・・・・54
第39図 縄文時代早期　中央部遺構配置図・・・・・55
第40図 縄文時代早期　西部遺構配置図・・・・・・56
第41図 集石１・２号・・・・・・・・・・・・・・・57
第42図 集石３号・・・・・・・・・・・・・・・・・58
第43図 集石４～６号・・・・・・・・・・・・・・・59
第44図 集石７・８号・・・・・・・・・・・・・・・60
第45図 集石９・10号 ・・・・・・・・・・・・・・61
第46図 集石11～15号・・・・・・・・・・・・・・62
第47図 集石16号 ・・・・・・・・・・・・・・・・63
第48図 集石17号 ・・・・・・・・・・・・・・・・64
第49図 集石18号 ・・・・・・・・・・・・・・・・65
第50図 集石19・20号 ・・・・・・・・・・・・・・66
第51図 集石21号 ・・・・・・・・・・・・・・・・67
第52図 集石22号 ・・・・・・・・・・・・・・・・68
第53図 集石23・24号 ・・・・・・・・・・・・・・69
第54図 集石25・26号 ・・・・・・・・・・・・・・70
第55図 集石27号 ・・・・・・・・・・・・・・・・71
第56図 集石28～30号・・・・・・・・・・・・・・72
第57図 集石31・32号 ・・・・・・・・・・・・・・73
第58図 集石33・34号 ・・・・・・・・・・・・・・74
第59図 集石35・36号 ・・・・・・・・・・・・・・75
第60図 集石37・38号 ・・・・・・・・・・・・・・76
第61図 集石39・40号 ・・・・・・・・・・・・・・77
第62図 集石41・42号 ・・・・・・・・・・・・・・78
第63図 集石43号 ・・・・・・・・・・・・・・・・79
第64図 集石44号 ・・・・・・・・・・・・・・・・80
第65図 集石45号 ・・・・・・・・・・・・・・・・81
第66図 集石46～48号・・・・・・・・・・・・・・82
第67図 集石49号 ・・・・・・・・・・・・・・・・83
第68図 集石50・51号 ・・・・・・・・・・・・・・84
第69図 集石52号 ・・・・・・・・・・・・・・・・85
第70図 集石53～55号・・・・・・・・・・・・・・86
第71図 集石56～58号・・・・・・・・・・・・・・87
第72図 集石59～62号・・・・・・・・・・・・・・88
第73図 集石63・64号 ・・・・・・・・・・・・・・89

第 74 図 集石 65 ～ 68 号・・・・・・・・・・・・・・・90
第 75 図 集石 69・70 号 ・・・・・・・・・・・・・・・91
第 76 図 集石 71・72 号 ・・・・・・・・・・・・・・・92
第 77 図 集石 73 号 ・・・・・・・・・・・・・・・・・93
第 78 図 集石 74 ～ 76 号・・・・・・・・・・・・・・・94
第 79 図 集石 77・78 号 ・・・・・・・・・・・・・・・95
第 80 図 集石 79 号 ・・・・・・・・・・・・・・・・・96
第 81 図 集石 80・81 号 ・・・・・・・・・・・・・・・97
第 82 図 集石 82 号 ・・・・・・・・・・・・・・・・・98
第 83 図 縄文時代早期 集石出土石器 ・・・・・・・・99
第 84 図 縄文時代早期 東部出土土器（１）・・・・ 100
第 85 図 縄文時代早期 東部出土土器分布図 ・・・ 101
第 86 図 縄文時代早期 東部出土土器（２）・・・・ 102
第 87 図 縄文時代早期 東部出土土器（３）・・・・ 103
第 88 図 縄文時代早期 東部出土土器（４）・・・・ 104
第 89 図 縄文時代早期 東部出土土器（５）・・・・ 105
第 90 図 縄文時代早期 東部出土土器（６）・・・・ 106
第 91 図 縄文時代早期 東部出土土器（７）・・・・ 107
第 92 図 縄文時代早期 東部出土土器及び
出土状況図（８）・・・・ 108
第 93 図 縄文時代早期 東部出土土器（９）・・・・ 108
第 94 図 縄文時代早期 東部出土土器（10）・・・・ 109
第 95 図 縄文時代早期 東部出土土器（11）・・・・ 110
第 96 図 縄文時代早期 東部出土土器（12）・・・・ 111
第 97 図 縄文時代早期 東部出土土器（13）・・・・ 112
第 98 図 縄文時代早期 東部出土土器（14）・・・・ 113
第 99 図 縄文時代早期 東部出土土器（15）・・・・ 114
第 100 図 縄文時代早期 東部出土土器（16）・・・ 115
第 101 図 縄文時代早期 東部出土土器及び
出土状況図（17）・・・ 116
第 102 図 縄文時代早期 中央部出土土器分布図 ・ 117
第 103 図 縄文時代早期 中央部出土土器（１）・・ 118
第 104 図 縄文時代早期 中央部出土土器（２）・・ 119
第 105 図 縄文時代早期 西部出土土器分布図 ・・ 120
第 106 図 縄文時代早期 西部出土土器（１）・・・ 121
第 107 図 縄文時代早期 西部出土土器（２）・・・ 122
第 108 図 縄文時代早期 西部出土土器（３）・・・ 123
第 109 図 縄文時代早期 東部出土石器分布図 ・・ 131
第 110 図 縄文時代早期 東部出土石器（１）・・・ 134
第 111 図 縄文時代早期 東部出土石器（２）・・・ 135
第 112 図 縄文時代早期 東部出土石器（３）・・・ 136
第 113 図 縄文時代早期 東部出土石器（４）・・・ 137
第 114 図 縄文時代早期 東部出土石器（５）・・・ 138
第 115 図 縄文時代早期 東部出土石器（６）・・・ 139
第 116 図 縄文時代早期 東部出土石器（７）・・・ 140
第 117 図 縄文時代早期 東部出土石器（８）・・・ 141
第 118 図 縄文時代早期 東部出土石器（９）・・・ 142
第 119 図 縄文時代早期 東部出土石器（10）・・・ 143
第 120 図 縄文時代早期 東部出土石器（11）・・・ 144
第 121 図 縄文時代早期 東部出土石器（12）・・・ 145
第 122 図 縄文時代早期 東部出土石器（13）・・・ 146
第 123 図 縄文時代早期 東部出土石器（14）・・・ 147
第 124 図 縄文時代早期 東部出土石器（15）・・・ 148
第 125 図 縄文時代早期 東部出土石器（16）・・・ 149
第 126 図 縄文時代早期 東部出土石器（17）・・・ 150
第 127 図 縄文時代早期 中央部出土石器分布図 ・ 152
第 128 図 縄文時代早期 中央部出土石器（１）・・ 153
第 129 図 縄文時代早期 中央部出土石器（２）・・ 154
第 130 図 縄文時代早期 中央部出土石器（３）・・ 155
第 131 図 縄文時代早期 中央部出土石器（４）・・ 156
第 132 図 縄文時代早期 西部出土石器分布図 ・・ 157
第 133 図 縄文時代早期 西部出土石器（１）・・・ 158
第 134 図 縄文時代早期 西部出土石器（２）・・・ 159
第 135 図 縄文時代後期 出土土器分布図 ・・・・ 163
第 136 図 縄文時代後期 出土土器 ・・・・・・・・ 164
第 137 図 暦年較正結果・・・・・・・・・・・・・ 167
第 138 図 永吉天神段遺跡の植物珪酸体・・・・・ 169
第 139 図 永吉天神段遺跡における
植物珪酸体分析結果（２）・・ 169
第 140 図 県内の埋設土器検出遺跡位置図・・・・ 170
第 141 図 札ノ元Ⅶ類土器出土遺跡地図・・・・・ 173
第 142 図 各遺跡出土の札ノ元Ⅶ類土器・・・・・ 174

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表・・・・・・・・・・・・12・13
第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡・・14 ～ 18
第３表　旧石器時代出土石器観察表・・・・・・・・・52
第４表　縄文時代早期埋設土器観察表・・・・・・・99
第５表　縄文時代早期集石出土石器観察表・・・・・99
第６表　縄文時代早期出土土器観察表・・・ 124 ～ 129
第７表　縄文時代早期出土石器観察表・・・ 160 ～ 162
第８表　縄文時代後期出土土器観察表・・・・・・ 165
第９表　測定試料および処理・・・・・・・・・・・ 167
第 10 表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 167
第 11 表 永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析結果（１）169
第 12 表 県内の土器埋設遺構一覧表・・・・・・・ 170
第 13 表 各層・形態別集石遺構分類・・・・・・・ 171
第 14 表 札ノ元Ⅶ類土器出土遺跡一覧表・・・・・ 173
第 15 表 縄文時代早期石器の器種別数と割合・・・ 174
第 16 表 黒曜石製石器別の産地割合・・・・・・・ 174

図版目次

巻頭図版１　遺跡遠景
巻頭図版２　縄文時代早期の調査状況
巻頭図版３　旧石器時代・縄文時代早期の出土遺物
本文中写真１　第２地点の土層・・・・・・・・・・25
本文中写真２　Ｄ－ 22 区 土層断面・・・・・・・・25
図版１　旧石器時代の調査
図版２　旧石器時代の調査
図版３　旧石器時代の調査
図版４　縄文時代早期の調査
図版５　縄文時代早期の調査
図版６　縄文時代早期の調査
図版７　縄文時代早期の調査
図版８　縄文時代早期の調査
図版９　縄文時代早期の調査
図版 10　縄文時代早期の調査
図版 11　縄文時代早期の調査
図版 12　縄文時代早期の調査
図版 13　縄文時代早期の調査
図版 14　縄文時代早期の調査
図版 15　縄文時代早期の調査
図版 16　縄文時代早期の調査
図版 17　縄文時代早期の調査
図版 18　縄文時代早期の調査
図版 19　縄文時代早期の調査
図版 20　旧石器時代出土石器（１）
図版 21　旧石器時代出土石器（２）
図版 22　縄文時代早期出土土器（１）
図版 23　縄文時代早期出土土器（２）
図版 24　縄文時代早期出土土器（３）
図版 25　縄文時代早期出土土器（４）
図版 26　縄文時代早期出土土器（５）
図版 27　縄文時代早期出土土器（６）
図版 28　縄文時代早期出土土器（７）
図版 29　縄文時代早期出土土器（８）
図版 30　縄文時代早期出土土器（９）
図版 31　縄文時代早期出土土器（10）
図版 32　縄文時代早期出土土器（11）
図版 33　縄文時代早期出土土器（12）
図版 34　縄文時代早期出土土器（13）
図版 35　縄文時代早期出土土器（14）
図版 36　縄文時代早期出土土器（15）
図版 37　縄文時代早期出土土器（16）
図版 38　縄文時代早期出土土器（17）
図版 39　縄文時代早期出土土器（18）
図版 40　縄文時代早期出土土器・集石出土石器（19）
図版 41　縄文時代早期出土石器（１）
図版 42　縄文時代早期出土石器（２）
図版 43　縄文時代早期出土石器（３）
図版 44　縄文時代早期出土石器（４）
図版 45　縄文時代早期出土石器（５）
図版 46　縄文時代早期出土石器（６）
図版 47　縄文時代早期出土石器（７）
図版 48　縄文時代後期出土土器

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志ＩＣ～末吉財部ＩＣ区間の事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育委員会に照会した。

この計画に伴い鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）は，平成 11 年１月に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間を，平成 12 年２月には志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50 か所の遺跡（調査対象表面積 854,100 ㎡）が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，県文化財課，県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減を検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の厳密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査や確認調査が実施されることとなった。

そこで，県文化財課は，まず，平成 13 年１月 29 日から２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石縊遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに，平成 13 年７月 10 日から７月 26 日に鹿屋串良ＪＣＴ～末吉財部ＩＣ間の工事計画図をもとに 33 か所の遺跡について詳細分布調査を実施し，同年９月 17 日～ 10 月 26 日及び 12 月３日～ 12 月 25 日の２期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成 13 年 10 月１日から平成 14 年３月 22 日にかけて確認調査を実施した。

平成 14 年４月には，志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡について再度分布調査を実施した結果，遺跡の調査対象範囲が 678,700 ㎡となった。

その後，日本道路公団民営化の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成 15 年 11 月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年 12 月に大隅ＩＣ（平成 21 年４月 28 日，「曽於弥五郎ＩＣ」へ名称変更）から末吉財部ＩＣ間の発掘調査協定書締結，平成 16 年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書が締結され，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま継続されることになった。

また，日本道路公団からの委託業務は曽於弥五郎ＩＣまでで終了し，曽於弥五郎ＩＣからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

第２節　確認調査

永吉天神段遺跡の確認調査は，県内遺跡事前調査事業で平成 23 年７月１日から同年９月 28 日に実施した。

１　調査体制

事業主体	鹿児島県教育委員会	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文の森調査室長	井ノ上秀文
	調査第一課長	堂込　秀人
	調査第一課第二調査係長	大久保浩二
調査担当	文化財主事	馬籠　亮道

２　調査の経過

調査の経過は，日誌抄を月ごとに集約して記載した。写真撮影は適宜行っているので記述を省略した。

７月

調査開始。調査施設設営及び環境整備。１～ 31 トレンチ（以下，Ｔ）を設定・掘削。

８月

トレンチ調査。遺物取上げ。１Ｔ：旧石器時代剥片・縄文時代早期被熱破砕礫出土。２Ｔ：方形竪穴住居跡検出。弥生土器･石剣出土。４Ｔ:柱穴検出。下剥峯式土器･被熱破砕礫出土。８Ｔ:柱穴検出。磨製石鏃出土。15 Ｔ:縄文時代早期土器片出土。16 Ｔ：Ⅱ層遺物集中部下部硬化面検出。23 Ｔ：Ⅱ層土器片及び柱穴検出。Ⅴ層被熱破砕礫検出。24 Ｔ：柱穴検出。隣接地の民家敷地から古銭を多量に採取。27 Ｔ：Ⅱ・Ⅲ層土器片が密集して出土。Ⅶ層（サツマ層上面）柱穴検出。30 Ｔ：Ⅱ層土師器出土。Ⅲ層縄文時代後期土器片出土。

９月

29･30･31 トレンチ調査。遺物取上げ。埋め戻し。16 Ｔ:硬化面を竪穴住居跡と判断。６・15・18 Ｔ：縄文時代早期土器片（石坂式土器）出土。12・13・16・21・27 Ｔ:弥生・古墳時代土器片（山ノ口式土器・東原～辻堂原式

土器）出土。30･31 T：縄文時代晩期土器片（組織痕土器）出土。文化庁林調査官来跡（14 日）。

第３節　本調査

確認調査の結果，遺物の集中は調査対象地の広い範囲で確認され，主に中世～古代，古墳・弥生時代，縄文時代晩期・早期，旧石器時代の包含層が確認された。調査対象範囲が広大であり，各地点で存在する包含層の時期や内容には差があるが，調査対象表面積 37,100 ㎡，調査対象延面積 87,588 ㎡と確認した。

確認調査の結果を踏まえ，改めて遺跡の取り扱いについて県文化財課，国土交通省，埋文センターの３者で協議し，遺跡の現地保存は困難であることから，埋文センターが本調査を実施することとなった。平成 24 年度は埋文センターが本調査を実施し，発掘調査は，「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき，株式会社パスコへ発掘調査業務の委託を行い実施した。

平成 25 年度からは，東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を含めた国事業関係を円滑に進めるために発足した公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下，埋文調査センターという）が，県から受託して発掘調査を進めることになった。

平成 27・28 年度の整理作業・報告書作成業務は，「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要綱」に基づき，株式会社パスコへ整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行い実施した。

本調査は，平成 24 年７月２日から平成 25 年１月 28 日（第１地点含む），平成 25 年６月 13 日から平成 26 年１月 28 日，平成 26 年５月 12 日から平成 27 年１月 28 日，平成 27 年５月 11 日から平成 28 年１月 27 日（第３地点含む）までの期間実施した。調査体制は，以下のとおりである。

１　調査体制

１）平成 24 年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	新小田　穣
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第二課長	冨田　逸郎
	調査第二課第一調査係長	八木澤一郎
調査担当	文化財主事	川口　雅之
調査事務	主幹兼総務係長	大園　祥子
	主査	岡村　信吾
現地指導	鹿児島大学大学院理工学研究科	
	准教授	井村　隆介
	福岡大学人文学部教授	武末　純一

２）平成 25 年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	（公財）鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター長	冨田　逸郎
調査企画	総務課長兼総務係長	山方　直幸
	調査課長	鶴田　靜彦
	調査第一係長	八木澤一郎
調査担当	文化財専門員	湯場﨑辰巳
	文化財専門員	彌榮　久志
事務担当	主　　査	岡村　信吾
現地指導	福岡大学人文学部教授	武末　純一

３）平成 26 年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	（公財）鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター長	堂込　秀人
調査企画	総務課長兼総務係長	山方　直幸
	調査課長	八木澤一郎
	調査第一係長	中村　和美
調査担当	文化財専門員	湯場﨑辰巳
	文化財専門員	彌榮　久志
	文化財専門員	隈元　俊一
事務担当	主　　査	岡村　信吾
現地指導	福岡大学人文学部教授	武末　純一
	福岡大学人文学部教授	桃崎　祐輔
	鹿児島大学法文学部教授	本田　道輝
	鹿児島大学教育学部教授	日隈　正守
	鹿児島国際大学	
	国際文化学部教授	中園　聡
	鹿児島県立短期大学	
	生活科学科教授	揚村　固
	鹿児島女子短期大学助手	下野真理子

４）平成 27 年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局	
	大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	（公財）鹿児島県文化振興財団	
	埋蔵文化財調査センター長	堂込　秀人
調査企画	総務課長兼総務係長	有村　貢

	調査課長	八木澤一郎
	調査第一係長	中村　和美
調査担当	文化財専門員	隈元　俊一
	文化財専門員	上村　俊洋
事務担当	主　　査	荒瀬　勝己
現地指導	鹿児島大学大学院	
	理工学研究科准教授	井村　隆介
	大分県立歴史博物館	
	企画普及課長	原田　昭一

２　発掘調査の民間委託

発掘調査の実施にあたり，埋文センター及び埋文調査センターは「鹿児島県埋蔵文化財発掘調査（民間委託）実施要綱」に基づき，株式会社パスコへ発掘調査の委託を行った。

なお，埋文センター及び埋文調査センターの各年度調査担当職員が常駐監理して，統括，指揮及び運営を行った。委託内容等は以下のとおりである。

１）平成 24 年度

委託先　株式会社パスコ
契約期間　平成 24 年６月８日～平成 25 年２月 22 日
委託内容　発掘調査業務　１式
　　測量業務　１式
　　土工業務　１式
担当者　主任技術者　新川　浩
　　主任調査員　池畑　耕一
　　調査員　西田　茂　丸山　清志
　　黒沢　聖子
　　測量技士　小林　進哉
検　　査　中間検査　平成 24 年 10 月 18 日
　　完成検査　平成 25 年２月 13 日（実地検査）
　　平成 25 年２月 15 日(成果物検査)

２）平成 25 年度

委託先　株式会社パスコ
委託期間　平成 25 年６月３日～平成 26 年３月 14 日
委託内容　発掘調査業務　１式
　　測量業務　１式
　　土工業務　１式
担当者　主任技術者　川野　勝弘
　　主任調査支援員　池畑　耕一
　　調査支援員　西田　茂　秀嶋　龍男
　　黒沢　聖子　翁長　武司
　　宮本　栄二
　　測量技士　小林　進哉
検　　査　中間検査　平成 25 年 10 月 10 日
　　完成検査　平成 26 年２月 19 日（実地検査）
　　平成 26 年３月４日（成果物検査）

３）平成 26 年度

委託先　株式会社パスコ
委託期間　平成 26 年４月 11 日～平成 27 年３月 12 日
委託内容　発掘調査業務　１式
　　測量業務　１式
　　土工業務　１式
担当者　主任技術者　川野　勝弘
　　主任調査支援員　西田　茂
　　調査支援員　池畑　耕一　上屋　眞一
　　秀嶋　龍男　小柳　太一
　　関口　昌和　関口　真由美
　　黒沢　聖子　翁長　武司
　　玉城　乾一朗　宮本　栄二
　　測量主任技士　中野　広行
　　測量技士　河野　正博
検　　査　中間検査　平成 26 年 10 月 16 日
　　一部完成検査　平成 26 年 12 月 19 日
　　（工事着手に伴う一部引き渡しのため）
　　完成検査　平成 27 年３月３日（実地検査）
　　平成 27 年３月５日（成果物検査）

４）平成 27 年度

委託先　株式会社パスコ
委託期間　平成 27 年４月 13 日～平成 28 年３月 11 日
委託内容　発掘調査業務　１式
　　測量業務　１式
　　土工業務　１式
担当者　主任技術者　川野　勝弘
　　主任調査支援員　西田　茂
　　調査支援員　上屋　眞一　浦辻　栄治
　　関口　昌和　翁長　武司
　　宮本　栄二　島田　由利佳
　　測量主任技士　中野　広行
検　　査　一部完成検査　平成 27 年８月 10 日
　　（工事着手に伴う一部引き渡しのため）
　　中間検査　平成 27 年 10 月 21 日
　　完成検査　平成 28 年２月 23 日（実地検査）
　　平成 28 年３月１日（成果物検査）

第４節　調査の経過

第２地点の調査は，平成 24 年度から 27 年度まで実施したが，平成 24 年度および 27 年度は，第２地点に関わる部分のみを記載している。なお，各年度とも表土から旧石器時代の全調査経過を記載している。

１）平成 24 年度

第１地点と，第２地点の 48 区以東を調査対象とした。第１地点の調査経過については，「埋蔵文化財調査センター報告書（８）」に記載してある。

７月

調査開始（２日）。新規入場者教育。環境整備。表土

剥ぎ。Ⅱ層調査。
８月
Ｈ～Ｋ－ 52 ～ 55 区Ⅱ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。全景写真撮影。
おおさきっこ歴史探検隊発掘体験（３日）。
９月
Ｂ～Ｉ－ 49 ～ 53 区，Ｆ～Ｉ－ 57 ～ 61 区表土剥ぎ。Ｂ～Ｄ－ 49 ～ 53 区，Ｆ～Ｉ－ 50 ～ 53 区，Ｋ・Ｌ－ 51 ～ 53 区Ⅱ･Ⅲ層調査。竪穴住居跡多数検出。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。
10 月
Ｃ～Ｆ－ 49 ～ 53 区，Ｄ～Ｈ－ 47 ～ 49 区，Ｉ－ 48・49 区表土剥ぎ。Ｄ～Ｋ－ 48 ～ 54 区Ⅱ層調査。遺構調査。地形測量。竪穴住居跡 21 軒・円形周溝 1 基検出。
南日本新聞社取材（24 日）。
11 月
Ｅ～Ｈ－ 47・48 区表土剥ぎ。Ｃ～Ｅ－ 47 ～ 50 区，Ｆ～Ｈ－ 47 ～ 49 区Ⅱ層調査。遺構調査。地形測量。中世の竪穴建物・土坑検出。
12 月
Ｄ－ 48 区Ⅱ層調査。Ｄ－ 48・49 区で土坑 2 基検出。遺構調査。下層確認調査（５×５ｍのトレンチ８本設定）。空撮（４日）。
南日本新聞社取材（５・８日）。福岡大学武末純一教授現地指導（６・７日）。現地説明会（８日：見学者：270 名）
１月
弥生時代中期の遺構調査。ＳＩ 23 は次年度調査へ。下層確認調査で縄文時代早期の包含層が全面にあることを確認。旧石器時代包含層をＣ～Ｇ－ 50 ～ 53 区約 1,400 ㎡で確認。遺物水洗い。遺構埋土フローテーション。調査終了。

２）平成 25 年度

平成 24 年度調査継続区Ｃ～Ｌ－ 48 ～ 55 区（縄文時代早期・旧石器時代調査）をＡ地点，Ｃ～Ｊ－ 26 ～ 47 区（縄文時代早期～近世調査）をＢ地点として調査を行った。調査経過は，各地点ごとに記載する。本年度から，民間委託支援業務として，基礎整理作業（水洗い･注記･接合）も併行して行う。
〔発掘調査〕
６月
調査開始（10 日）。新規入場者教育。環境整備。
Ａ地点（旧石器時代・縄文時代早期調査）
Ｄ～Ｋ－ 48 ～ 55 区Ⅳ層重機掘削。Ｄ～Ｉ－ 48 ～ 51 区Ⅴ層調査。Ｆ・Ｇ－ 49・50 区Ⅲ層での掘立柱建物跡調査（調査番号ＳＢ８・９）。
Ｂ地点（縄文時代早期～中世調査）
Ｇ～Ｉ－ 38 ～ 43 区表土剥ぎ。Ⅱ層調査。土坑墓（ＳＫ 30）・溝状遺構の検出・調査。遺物取り上げ。
県文化財課中村和美文化財主事監理業務（11 日）。
７月
Ａ地点（旧石器時代・縄文時代早期調査）
Ｅ～Ｌ－ 48 ～ 53 区Ⅳ層重機掘削。Ｄ～Ｉ－ 48 ～ 51 区Ⅴ層調査。遺物出土・取り上げ。Ｅ・Ｆ－ 52・53 区，Ｇ･Ｈ－ 53･54 区遺構の広がりを調査のため，表土剥ぎ，Ⅱ層調査。
Ｂ地点（縄文時代早期～中世調査）
Ｆ・Ｇ－ 49・50 区Ⅲ層掘立柱建物跡調査終了。Ｄ～Ｆ－ 32 ～ 35 区，40 ～ 45 区表土剥ぎ。Ｄ～Ｆ－ 32 ～ 35 区・40 ～ 45 区・Ｇ～Ｉ－ 38 ～ 43 区Ⅱ層の遺構調査。Ⅱ層から縄文時代晩期～中世の遺物が多数出土。
中村和美文化財主事監理業務（３日）。鳥取県埋蔵文化財センター長他２名現地視察（19 日）。姶良市チャレンジ！遺跡発掘体験＆キャンプ泊（23 日：38 名）
８月
Ａ地点（旧石器時代・縄文時代早期調査）
Ｃ～Ｅ－ 47 ～ 53 区表土剥ぎ。Ｃ～Ｌ－ 49 ～ 55 区Ⅴ層調査。集石 45 基検出・調査。遺物取り上げ。地形測量。
Ｂ地点（縄文時代早期～中世調査）
Ｅ～Ｊ－ 37 ～ 43 区表土剥ぎ・Ⅱ層調査。土坑墓より白磁･湖州六花鏡（ＳＫ 30），土師皿３点（ＳＫ 32）出土。弥生時代中期竪穴住居跡多数検出・調査。
霧島市キッズ発掘体験（６日：18 名），埋文センター堂込秀人調査課長監理業務（７日）。熊本大学社会教育主事講習（８日:15 名）。喜界町教育委員会現地視察（９日：７名）。
９月
Ａ地点（旧石器時代・縄文時代早期調査）
Ｃ～Ｆ－ 48 ～ 53 区，Ｇ～Ｉ－ 52 ～ 54 区Ⅴ層調査。集石 13 基検出・調査。遺物取り上げ。地形測量。
Ｂ地点（縄文時代早期～中世調査）
Ｄ～Ｆ－ 30・31 区・37 ～ 39 区・44・45 区表土剥ぎ。Ｄ～Ｊ－ 37 ～ 45 区Ⅱ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。
古環境研究所（19 日：植物珪酸体分析現地採取）。京都府立大学生見学（24 日：６名）
10 月
Ａ地点（旧石器時代・縄文時代早期調査）
Ｃ～Ｇ－ 50 ～ 53 区Ⅵ～Ⅸ層重機掘削。Ⅹ層調査。礫群・石器製作跡調査。ナイフ形石器等出土・取り上げ。地形測量。Ｃ～Ｌ－ 48 ～ 55 区調査終了。
Ｂ地点（縄文時代早期～中世調査）
Ｄ・Ｅ－ 29・30 区表土剥ぎ。Ｄ～Ｆ－ 37 ～ 39 区Ⅳ層重機掘削。Ｅ－ 45・46 区，Ｇ－ 36・37・43・44 区，Ｊ－ 40 ～ 43 区Ⅱ層調査。竪穴住居跡・掘立柱建物跡等遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

福岡大学武末純一教授現地指導（１・２日）。湧水町田尾遺跡作業員一行見学（１日：24 名）。志布志市有明地区高齢者学級見学（４日：24 名）。中間検査（10 日）。空撮（16 日）。埋蔵文化財発掘調査現地研修会（29 日：15 名）

11 月

Ｂ地点（縄文時代早期～中世調査）

Ｄ・Ｅ－ 37 ～ 47 区，Ｆ～Ｉ－ 36 ～ 39 区Ⅳ層及びＦ－ 38 区Ⅶ～Ⅸ層重機掘削。Ｄ～Ｆ－ 30 ～ 35 区Ⅱ・Ⅲ層調査。土坑墓１基等検出。竪穴住居跡・掘立柱建物跡等遺構調査。Ｄ・Ｅ－ 37 ～ 47 区，Ｆ～Ｉ－ 36 ～ 39 区Ⅴ層調査。

ＳＩ 23 ～ 41 調査終了。Ｆ－ 38 区Ｘ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

現地説明会（９日：見学者 310 名）。鹿児島県大隅地域振興局局長・建設部長見学（12 日）。パリノ・サーヴェイ（15 日：テフラ現地採取）。埋文センター堂込秀人調査課長監理業務（22 日），埋文センター井ノ上秀文所長監理業務（25 日）。曽於地区文化協会見学（27 日:13 名）

12 月

Ｂ地点（縄文時代早期～中世調査）

Ｃ－ 27・28 区，Ｄ－ 28・29 区，Ｇ・Ｈ－ 44 ～ 46 区，Ｉ－ 44 区表土剥ぎ。Ｄ～Ｈ－ 30 ～ 44 区Ⅳ層の重機掘削。Ｄ～Ｆ－ 30 ～ 34 区Ⅵ～Ⅸ層の重機掘削。Ｃ・Ｄ－ 27 ～ 29 区Ⅱ・Ⅲ層，Ｄ～Ｆ－ 30 ～ 34 区・Ｇ～Ｊ－ 40 ～ 43 区Ⅴ層，Ｄ～Ｆ－ 30 ～ 34 区・Ｄ～Ｇ－ 36 ～ 47 区Ｘ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

１月

Ｂ地点（縄文時代早期～中世調査）

Ｅ・Ｆ－ 36 区表土剥ぎ。Ｅ～Ｇ－ 33 ～ 36 区・Ｅ～Ｉ－ 40 ～ 47 区Ⅳ層，Ｈ・Ｉ－ 40・41 区Ⅶ～Ⅸ層重機掘削。Ｅ～Ｇ－ 33 ～ 36 区，Ｈ・Ｉ－ 43 ～ 45 区Ⅱ・Ⅲ層，Ｅ～Ｇ－ 33 ～ 36 区，Ｆ－ 40 ～ 47 区，Ｇ～Ｉ－ 43・44 区，Ｇ－ 45 ～ 47 区Ⅴ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

埋蔵文化財専門職員養成講座（17 日）

〔整理作業〕

24 年度出土遺物について，水洗い・注記等が未済のものがあったため，６月からこの作業を優先とした。６・７月に水洗い・注記。７～９月に分類・接合。25 年度出土遺物については７月から水洗い・注記を始め，その後，分類・接合・台帳作成を行った。２月５日に埋蔵文化財センターに収納。

３）平成 26 年度

26 年度は，Ｃ～Ｌ－ 18 ～ 41 区を中心に，縄文時代早期から中世の調査を行った。また，地形観察用の土層ベルト沿いに２ｍ幅のトレンチを設定して，Ⅶ層（サツマ火山灰層）上面にて縄文時代早期の遺構確認を行い，さらに旧石器時代の下層確認調査を行った。遺物の出土が見られた箇所については一部拡張し，遺物の広がりがないかを確認した。なお，Ｄ～Ｊ－ 24 ～ 28 区は弥生時代から中世に造られた墳丘等が予想されたため，表土から人力による掘削を行った。

〔発掘調査〕

５月

調査開始（７日）。Ｃ～Ｋ－ 18 ～ 22 区表土剥ぎ，Ⅱ層調査。Ｄ～Ｊ－ 24 ～ 28 区人力掘削による調査。

県文化財課黒川忠広文化財主事監理業務（20 日）。

６月

Ｃ～Ｋ－ 18 ～ 23 区Ⅱ層調査。Ｄ～Ｊ－ 24 ～ 28 区Ⅱ層調査。

弥生時代中期の土坑墓等多数検出，遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

７月

Ｃ～Ｋ－ 18 ～ 23 区Ⅲ層・Ⅴ層調査。Ｄ～Ｊ－ 24 ～ 28 区Ⅱ～Ⅲ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。

文化庁高橋宏治記念物課長現地視察（１日）。

８月

Ｉ・Ｊ－ 36 ～ 38 区表土剥ぎ，及びⅡ・Ⅲ層調査。Ｋ・Ｌ－ 38 ～ 40 区，Ｃ～Ｅ・Ｈ・Ｉ－ 20 ～ 22 区Ⅴ層調査。Ｊ－ 19 ～ 22 区Ⅶ層重機掘削，及びⅧ～Ｘ層調査。Ｄ～Ｊ－ 24 ～ 28 区Ⅱ・Ⅲ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

空撮（12 日）。鹿児島大学本田道輝教授，鹿児島国際大学中園聡教授，鹿児島県立短期大学揚村固教授現地指導（19 日）。福岡大学武末純一教授現地指導（20・21 日）。大崎町おおさきっこ歴史探検隊発掘体験（20 日:15 名）。志布志市立宇都中学校職員研修（20 日：２名）。

９月

Ｆ～Ｈ－ 21・22 区，Ｉ～Ｌ－ 36 ～ 38 区Ⅳ層重機掘削，及びⅤ層調査。Ｄ－ 20 ～ 22 区，Ｋ・Ｌ－ 39 区Ⅶ層重機掘削，及びⅧ～Ｘ層調査。Ｅ～Ｋ－ 27 ～ 30 区表土剥ぎ，及びⅡ・Ⅲ層調査。Ｄ～Ｊ－ 24 ～ 28 区Ⅱ・Ⅲ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

大崎町ひまわり女性講座見学（４日：28 名）。弥生時代中期墓域についての現地報道発表（10 日）。鹿児島女子短期大学下野真理子助手現地指導（10 日）。現地公開（13 日：370 名）。

10 月

Ｅ～Ｋ－ 27 ～ 32 区，Ｉ～Ｌ－ 36 ～ 38 区表土剥ぎ，Ⅱ・Ⅲ層調査。Ｄ・Ｅ－ 23 ～ 26 区，Ｉ～Ｋ－ 23 ～ 26 区Ⅴ層調査。Ｄ～Ｉ－ 23 区，Ｇ－ 22 区Ⅶ層重機掘削，及びⅧ～Ｘ層調査。Ｄ～Ｊ－ 24 ～ 28 区Ⅱ・Ⅲ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。

全埋協の四国・中国・九州ブロック会議見学（３日：

22 名)。福岡大学桃﨑祐輔教授現地指導（７日)。中間検査（16 日)。大崎町立菱田小学校見学（23 日：17 名)。
11 月
Ｊ・Ｋ－ 33・35 区，Ｈ～Ｌ－ 36 ～ 38 区Ⅱ・Ⅲ層調査。Ｄ～Ｋ－ 23 ～ 30 区Ⅳ層重機掘削，及びＶ層調査。Ｄ～Ｆ－ 27 区，Ｇ－ 23 ～ 26 区，Ｊ－ 25・26 区，Ｊ・Ｋ－ 27 区Ⅶ層重機掘削，及びⅧ～Ｘ層調査。
鹿児島大学日隈正守教授現地指導(６日)。現地公開(８日：210 名)。大隅教育事務所埋蔵文化財現地研修会（11 日：10 名)。大崎町立中沖小学校見学・地層学習（13 日：19 名)。
12 月
Ｋ－ 24 ～ 26 区，Ｋ・Ｌ－ 33 ～ 35 区Ⅲ層調査。Ｅ・Ｆ－ 28・29 区，Ｇ－ 27・28 区，Ｈ～Ｋ－ 27 区，Ｈ～Ｌ－ 36 ～ 38 区Ｖ層調査。Ｇ～Ｉ－ 23・24 区，Ｇ－ 27 区Ⅶ層重機掘削，及びⅧ～Ｘ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。
黒川忠広文化財主事（12・22 日)・埋文センター前迫亮一調査課長（19 日）監理業務。一部完成検査（19 日)。
１月
Ｋ・Ｌ－ 27 ～ 31 区Ⅲ層・Ｖ層調査。Ｆ～Ｌ－ 28 ～ 32 区Ｖ層調査。Ｇ－ 29・30 区，Ｇ～Ｉ－ 27・31 区，Ｊ・Ｋ－ 23・24 区，Ｋ－ 31 区，Ｈ～Ｋ－ 36 区，Ｊ－ 36 ～ 38 区Ⅷ層～Ｘ層調査。遺構調査。遺物取り上げ。地形測量。調査終了。
〔整理作業〕
未済であった 25 年度出土遺物について，６月に水洗い・注記を行った。26 年度分については７月から水洗い・注記を始め，９月～１月は併行して分類・接合を行い，２月４日に埋蔵文化財調査センターに収納した。

４）平成 27 年度

平成 27 年度は，第２地点と谷を挟んだ遺跡西側にある第３地点と併せて，第２地点の町道部分の調査（８月から）を行った。地層観察用の土層ベルト沿いに４ｍ幅のトレンチを設定して，Ⅶ層（サツマ火山灰層）上面にて縄文時代早期の遺構確認調査と旧石器時代の下層確認調査を行った。遺物の出土が見られた箇所については，一部拡張を行い遺物の広がりがないかを確認した。なお，第３地点については今後報告書刊行を予定しているため，調査経過については除外した。５～７月は第３地点のみ調査を行い，８月以降に第２地点を含めて調査を行った。
５月～７月
調査開始（５月 11 日)。７月までは第３地点のみ調査を行った。
埋文センター福山徳治所長監理業務（５月 14 日)。大崎町高齢者講座遺跡見学（６月 11 日：13 名）。黒川忠広文化財主事監理業務（７月 16 日)。
８月
Ｋ・Ｌ－ 32，Ｉ・Ｊ－ 34・35 区表土剥ぎ。Ｋ・Ｌ－ 32 区Ⅱ・Ⅲ層調査。Ｋ・Ｌ－ 32 区Ｖ層調査。
空撮（５日)。一部完成検査（10 日)。
９月
Ｌ－ 31 区表土剥ぎ，Ⅱ・Ⅲ・Ｖ層調査。
大崎町モニターツアー鹿児島大学学生（18 日：８名）
10 月
Ｇ～Ｊ－ 33・34 区，Ｇ・Ｈ－ 35・36 区，Ｇ～Ｉ－ 37 区，Ｉ・Ｊ－ 38・39 区表土剥ぎ。Ｇ～Ｊ－ 33・34 区，Ｇ・Ｈ－ 35 区，Ｇ－ 36 区Ⅱ・Ⅲ層調査。
中間検査（21 日)。
11 月
Ｄ・Ｅ－ 28 区，Ｄ～Ｆ－ 29 区，Ｅ～Ｇ－ 30・31 区，Ｆ・Ｇ－ 32 区，Ｉ・Ｊ－ 32 区，Ｆ～Ｊ－ 33 区，Ｇ～Ｊ－ 34・35 区，Ｇ～Ｉ－ 36 区Ⅱ・Ⅲ層調査。
鹿児島大学大学院井村隆介准教授現地指導（２日)。電柱撤去作業終了（24 日)。
12 月
Ｅ～Ｇ－ 30・31 区，Ｆ・Ｇ－ 32 区，Ｉ・Ｊ－ 32 区，Ｆ～Ｊ－ 33 区，Ｇ～Ｊ－ 34・35 区，Ｇ～Ｉ－ 36 区Ⅱ・Ⅲ層調査。Ｊ－ 33 区，Ｇ・Ｈ－ 34 区Ｖ層調査。Ｊ－ 33 区Ⅷ～Ｘ層調査。
大崎町教育委員会来跡（２日：２名)。空撮（４日)。大分県立歴史博物館原田昭一企画普及課長現地指導（９～ 10 日）
１月
Ｅ～Ｇ－ 31・32 区，Ｉ・Ｊ－ 32 区，Ｈ－ 36 区Ⅱ・Ⅲ・Ｖ層調査。Ｊ－ 34・35 区，Ｇ・Ｈ－ 34 区，Ｅ～Ｇ－ 31 区旧石器調査。
地下式坑報道発表(18 日)。報道機関現地公開(21 日)。
〔整理作業〕
未済であった 26 年度出土遺物について，５・６月に水洗い・注記を行った。27 年度出土遺物については６月から水洗い・注記を始め，併行して 10 ～１月に分類を行い，１月は接合を行った。２月４日に埋蔵文化財センターに遺物を収納した。

第５節　整理・報告書作成作業

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は，県から受託を受けた埋文調査センターが平成 27・28 年度に実施した。平成 27 年４月～平成 28 年３月（作業期間５月～２月）は，永吉天神段遺跡整理作業場を中心に行った。平成 28 年４月～平成 29 年３月（作業期間５月～２月）は，上野原縄文の森の第二整理作業所で行った。なお，平成 25 ～ 27 年度は，発掘調査の一部作業として基礎的整理作業（水洗い・注記中心）を行った。

作業内容は，以下のとおりである。

１　整理作業

１）　遺構

実測図と図面台帳との照合，遺構別・時代別に実測図の仕分け等

２）　遺物

ア　土器・石器共通

水洗い，遺構内出土遺物と包含層出土遺物との仕分け，遺物と遺物台帳や遺構実測図との照合

イ　土器の注記，分類，実測する土器の選別

ウ　石器と一般礫の仕分け，分類，実測する石器の選別

２　報告書作成作業

１）遺構図のデジタルトレース，遺構配置図の作成，報告書掲載用写真選別

２）土器の実測，拓本，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載用写真撮影

３）石器の実測及び実測委託，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載用写真撮影

４）土器・石器以外の遺物の実測，トレース，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載用写真撮影

また，南九州縄文研究会代表の新東晃一先生に縄文時代早期の土器に関する指導をいただいた。

３　作成体制

１）平成 27 年度（平成 27 年４月～平成 28 年３月）

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター長　堂込　秀人
作成企画　総務課長兼総務係長　有村　貢
　　調査課長　八木澤一郎
　　調査第一係長　中村　和美
作成担当　文化財専門員　湯場﨑辰巳
　　文化財専門員　隈元　俊一
事務担当　主査　荒瀬　勝己
報告書作成指導委員会
　　６月８日，８月 18 日，11 月９日，11 月 26 日
　　調査課長ほか　５名
報告書作成検討委員会
　　６月８日，８月 18 日，10 月 14 日，11 月９日，
　　11 月 30 日　センター長ほか　５名

２）平成 28 年度（平成 28 年４月～平成 29 年３月）

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
作成主体　鹿児島県教育委員会
作成統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター長　堂込　秀人
作成企画　総務課長兼総務係長　有村　貢
　　調査課長　八木澤一郎
　　調査第一係長　中村　和美
作成担当　文化財専門員　隈元　俊一
　　文化財専門員　上村　俊洋
事務担当　主査　荒瀬　勝己
報告書作成指導委員会
　　６月１日，８月 23 日，10 月６日，11 月４日
　　調査課長ほか　６名
報告書作成検討委員会
　　６月６日，８月 26 日，10 月 11 日，11 月８日，
　　11 月 28 日　センター長ほか　５名

２　整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託

整理作業・報告書作成作業の実施にあたり，埋文調査センターは「公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託実施要綱」に基づき，株式会社パスコへ整理作業及び報告書作成作業支援業務の委託を行った。委託内容は以下のとおりである。

１）平成 27 年度

委託先　株式会社パスコ
契約期間　平成 27 年４月 13 日～平成 28 年３月 11 日
作業期間　平成 27 年５月 11 日～平成 28 年１月 28 日
委託内容　報告書作成作業支援業務　１式
　　整理作業支援業務　１式
　　印刷製本業務　１式
担当者　主任調査支援員　池畑　耕一
　　調査支援員　黒沢　聖子　関口真由美
　　松本　拓
検査　中間検査　平成 27 年 10 月 21 日
　　完成検査　平成 28 年３月１日

２）平成 28 年度

委託先　株式会社パスコ
契約期間　平成 28 年４月 11 日～平成 29 年３月 10 日
作業期間　平成 28 年５月９日～平成 29 年２月 17 日
委託内容　報告書作成作業支援業務　１式
　　整理作業支援業務　１式
　　自然科学分析業務　１式
　　印刷製本業務　１式
担当者　主任調査支援員　池畑　耕一
　　調査支援員　浦辻　栄治　関口　昌和
　　関口真由美　翁長　武司
　　松村　由記　相川　薫
検査　中間検査　平成 28 年 10 月 25 日
　　完成検査　平成 29 年３月

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理・地質的環境

曽於郡大崎町は，鹿児島県の東南部，大隅半島の東部に位置する。東は志布志市，南は肝属郡東串良町，西は鹿屋市，北は曽於市と接し，南東は志布志湾に面している。

大隅半島は，南北方向に走る山地，その間の丘陵，台地及び低地などの低地帯から構成され，地質は大部分がシラス，ボラなどの火山灰土壌となっている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に張り出した形で北から南へと延びる鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119 m）である。

西側の山地は北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は，北部の白鹿岳・荒磯岳など 500 ～ 600 m級の山々と，南部の大箆柄岳（1,236.8 m）を主峰に横岳・御岳など 1,000 m級の山から成る山地で山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は，ともに九州山地の延長上にあり，それらの間は丘陵や台地及び低地帯となっている。これらの山間地を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は，南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や，湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流で，これらの火砕流をはじめとする噴出物の堆積がベースとなっている。噴出物は，堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開析されるが，丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず，広大な台地となっている。

一方低地は，高隈山地や鰐塚山地などを水源とする大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾などに注いでいる。この河川は上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また，幾段かの河岸段丘も認められる。海岸線には砂丘の形成される所もあり，特に東側の志布志湾岸では幅広い。

大崎町の地形は，北部に菱田川とその上流にあたる大鳥川，東部を田原川，中央部を持留川が南流し，志布志湾に注いでいる。大崎町の地勢は概ね２つに分けられ，北端部は大鳥川を中心として河川が溶結凝灰岩を切り開き，起伏の激しい渓谷を構成している。中部から南部地帯は北西から東南の海岸線に向かって，緩やかに傾斜している起伏の少ない平坦な地形であり，場所によっては志布志湾まで見通せる。これらの河川によって台地は区切られ，西部から永吉台地，仮宿台地，飯隈（中沖）台地に分けられる。永吉台地の西側を串良川，永吉台地と仮宿台地の間を持留川，飯隈台地の東側を菱田川が流れている。

台地の大部分は，約 29,000 年前の姶良カルデラ起源のシラス土壌の上に形成された「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌が広がっている。

大崎町は，志布志市から東串良町まで約 16 ㎞にわたって続く幅１～ 1.5 ㎞の砂丘海岸のほぼ中央部にあたる。菱田川河口から南西に弧状を描いて，東串良町に至るまで約７㎞の海岸線があり，弥生時代などの遺跡は数ｍにわたって砂に厚く覆われている。

永吉天神段遺跡は，永吉台地の東側縁辺部に位置し，志布志湾から直線距離で約６㎞ある。持留川とその支流に，東側と南西側を挟まれた標高約 35 ｍの河岸段丘及び標高約 50 ｍの舌状台地に立地する。調査前は宅地あるいは畑地であった。持留川の流域沿いには，下堀遺跡や荒園遺跡・麦田下遺跡・高久田Ａ遺跡などがあり，本遺跡同様，旧石器時代～中世の遺構・遺物が確認されている。また，台地の麓には彦三所大権現や档ヶ山古石塔群が所在し，付近の民家では多量の古銭が採取されていることから，中・近世においても歴史的に重要な地域であったことがうかがえる。

第２節　歴史的環境

大崎町では，主に田原川，持留川，菱田川，大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は，これまで本格的な発掘調査がなされていなかったため詳細は不明であったが，近年大隅グリーンロードや東九州自動車道建設などに伴う発掘調査によって，次第に歴史的様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

現在のところ，大崎町内における既知の旧石器時代の遺跡は少ない。野方の天神段遺跡でナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器類が，持留の二子塚Ａ遺跡で黒曜石･チャート製の剥片が発見されている。永吉天神段遺跡とは持留川を挟んだ対岸にある，仮宿の荒園遺跡では，細石刃文化期の石器類が発見されている。永吉大地の東端に位置する宮脇遺跡では，石器製作過程の所産と思われる石核，フレーク，チップ等が出土している。永吉天神段遺跡では，ナイフ形石器文化期と思われる台形石器や角錐状石器が出土している。

周辺の市に目を向けると，大崎町の東側に隣接する志布志市では，志布志町安楽の稲荷迫遺跡から礫群１基と細石刃・細石刃核・剥片尖頭器が出土している。また同町内之倉の八郎ヶ野遺跡から頁岩・黒曜石の破片が，倉園Ｂ遺跡，道重遺跡から細石刃・細石刃核，井出平遺跡から細石刃核・黒曜石片が出土している。同市松山町新橋の牧ノ原Ｂ遺跡からナイフ形石器，蕨野Ｂ遺跡から礫群５基，ブロック 15 基とともに，ナイフ形石器・三稜

尖頭器・台形石器・剥片等が出土している。

大崎町の西側に隣接する鹿屋市では，白水町の西丸尾遺跡から，礫群５基，ブロック７基とともに，ナイフ形石器・剥片尖頭器・台形石器・スクレイパー等が，隣接する西丸尾Ｂ遺跡から土坑１基が検出され，剥片が出土している。同市郷之原町榎崎の榎崎Ａ・Ｂ遺跡から礫群10基・ピット21基とともに，細石刃・水晶製細石刃核・削器・掻器・局部磨製石斧等が出土している。

縄文時代

本遺跡周辺では縄文時代の発掘調査が増えつつある。

早期では野方の天神段遺跡で，竪穴式住居跡・多数の集石・連穴土坑・落とし穴状遺構等と，前平式・桑ノ丸式・石坂式・塞ノ神式・苦浜式土器，石鏃・打製石斧が，二子塚Ａ遺跡で集石と，吉田式・石坂式・塞ノ神式土器，石鏃・石匙などが出土している。井俣では金丸城跡で石坂式土器・石鏃・凹石などが，岡別府の下堀遺跡では集石13基や土坑と，前平式・石坂式・桑ノ丸式・平栫式・塞ノ神式土器，石鏃・石錐等が発見されている。平良上Ｃ遺跡では，竪穴住居跡・集石・連穴土坑と，石坂式・下剥峯式土器が，仮宿の荒園遺跡では，集石や土坑と，前平式・石坂式・桑ノ丸式・平栫式・塞ノ神式土器，石鏃・石匙，耳栓などが出土している。串良川の東側，永吉台地の西端にある串良町細山田の益畑遺跡では，前平式土器の時期の竪穴住居跡２軒，連穴土坑16基，集石85基，土坑160基などが検出された。他に前平式・吉田式・石坂式・下剥峯式・辻タイプ・桑ノ丸式・塞ノ神式土器などをはじめ，石鏃・石皿・磨石・敲石・石斧・ハンマーなどの石器や，黒曜石・チャート・蛋白石などの石材も出土した。

前期では，天神段遺跡で曽畑式土器に伴い西日本最古となるその時期の石剣や，石鏃・石皿・磨石等の多数の遺物が出土している。野方の立山Ｂ遺跡で，曽畑式土器が出土している。

中期では，立山Ｂ遺跡で阿高式土器が出土している。持留の京の塚遺跡では前期末から中期前半の土坑が150基以上検出され，その性格などが注目されている。また，在地の深浦式土器とともに東海系土器，近畿地方の大歳山式土器，瀬戸内～北部九州系の鷹島式・船元式土器が出土していることから広域な交流を示している。石鏃・石匙など石器が非常に多く出土している。

後期では，京の塚遺跡で丸尾式・辛川式・西平式・中岳Ⅱ式土器，磨石・石皿などが出土している。下堀遺跡では，指宿式・擬似磨消縄文系土器が，細山田段遺跡では，土坑や丸尾式・北久根山式・西平式・御領式土器が確認されている。

晩期では，天神段遺跡で，竪穴住居跡・土坑群とともに，入佐式・黒川式土器，石鏃・打製石斧・磨製石斧・砥石が出土している。立山Ｂ遺跡と細山田段遺跡で，黒川式土器が出土している。京の塚遺跡では入佐式・黒川式土器が出土している。永吉天神段遺跡第１地点では突帯文土器の伴う竪穴住居跡や鉢・壺，打製石斧・石鏃・石匙・石皿などが発見されている。第２地点でも同時期の土器などが出土している。

弥生時代

砂丘後背地に立地する益丸の沢目遺跡は，砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成11年に行われた発掘調査で，竪穴住居跡53軒・土坑約20基・柱穴約180基が発見され，入来Ⅰ式・入来Ⅱ式・山ノ口Ⅰ式・山ノ口Ⅱ式・須玖式土器，鉄製品・軽石製加工品が出土している。近くの砂丘では戦前に人骨が発見されており，河口付近の横瀬では甕棺破片も採集されているので，埋葬遺構の可能性もある。岡別府の下堀遺跡では，山ノ口式土器や須玖式土器を伴った直径８ｍの円形大型住居跡２軒・掘立柱建物跡５棟などが検出されている。下堀遺跡と同じ台地にある仮宿の荒園遺跡でも吉ヶ崎式・山ノ口式土器を伴う竪穴住居跡が検出されている。下堀遺跡より一段下がった麦田下遺跡では，高付式土器，西南四国系土器，瀬戸内系土器など後期の土器溜まりが検出されている。

古墳時代

志布志湾岸沿いは，前方後円墳をはじめとする古墳群があり，畿内との関連をうかがわせる地域とされている。

横瀬古墳は古墳時代中期（５世紀前半頃）の大型前方後円墳で，隣接する東串良町唐仁大塚古墳に次いで県内第２の規模を誇る。墳丘からは円筒埴輪片，形象埴輪片が採集されている。

神領古墳群は，前方後円墳４基，円墳９基で構成されている。10号墳は墳長54ｍの前方後円墳である。主体部は６か所の縄掛突起のある刳抜式舟形石棺を軽石で覆った礫槨で，周辺から管玉・勾玉，鉄剣，短甲の一部，鉄鏃束などが出土している。６号墳（天子ヶ丘古墳）は墳長43ｍ，後円部の径19ｍ，高さ３ｍ，前方部の幅16ｍ，高さ２ｍの前方後円墳で，後円部に花崗岩質板石を使用した組合せ箱形石棺があった。日光鏡・仿製獣帯鏡各１面が採集され，石棺内から，鉄剣・鉄刀・鏡等の副葬品が出土した。

町内では他に，飯隈台地に飯隈古墳群・仮宿台地に田中古墳群・後迫古墳群・鷲塚地下式横穴墓群・下堀遺跡が知られている。

古代

古代の大崎は日向国諸県郡に属し，その南端にあったと思われるが郡境は定かでなく，西隅・南隅とも不明である。この周辺の古代の考古学的様相も今のところ出土例が少なく定かでない。

古代の遺跡としては，天神段遺跡で掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑・炉跡・土師器・墨書土器・刻書土器・

鍛造剥片が確認されている。

永吉天神段遺跡の第１地点では７棟の掘立柱建物跡や墨書土器・刻書土器・須恵器・焼塩土器・鉄製刀子・砥石などが発見されている。

中世

中世には各地で山城が造られ，大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野卸城跡・竜相城跡・金丸城跡・栫谷城跡・遠見ヶ丘などがある。金丸城跡では，溝状遺構・土坑が検出され，青磁・白磁・青花・東播系こね鉢・瓦質土器・備前焼擂鉢・天目碗など 14 世紀半ばから 15 世紀の遺物が出土している。また，近年の発掘調査では村落跡も各地で確認されている。天神段遺跡では，多くの掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓が検出され，中でも土坑墓１号からは，同安窯系青磁６点・青磁１点・青白磁１点・銅鏡１点・滑石製石鍋２点・鉄製品・木製品・土師器などの豊富な副葬品が出土している。下堀遺跡では，溝状遺構・畝跡とともに，青磁・青花・中国陶器などが発見されている。永吉天神段遺跡でも，湖州六花鏡・白磁碗・羽釜のミニチュア土器や土師器皿・坏の副葬された土坑墓等が検出され，青磁・白磁・陶器壺などの輸入陶磁器や，東播系須恵器・常滑焼・備前焼などの国内産陶器，楠葉型瓦器埦，滑石製石鍋，茶臼など多くの遺物が出土している。

近世

井俣の金丸城跡は中世から近世にかけての遺跡だが，17 世紀前半を主体とする陶磁器が多く出土している。多くの柱穴とともに，掘立柱建物跡７棟や水溜土坑（大型６基・小型２基），炉跡 16 基，溝状遺構，墓などが検出されている。炉跡はいずれも意図的に壊され，炉周辺に炉壁を構成していたと思われる軽石や熱変粘土片が集中している場所も確認された。周辺で椀形鉄滓が出土していることから，この炉については鉄生産に関連する可能性も考えられる。肥前染付・瓦器・中国製陶磁器・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓など多くの遺物も出土している。野方の天神段遺跡では，安永ボラ（1779 年）を埋土とする畠畝状遺構や薩摩焼などが発見されている。持留の京の塚遺跡では近代まで続く溝状遺構や古道が検出されている。永吉天神段遺跡でも薩摩焼や肥前系染付などが出土し，道跡や寛永通宝を副葬した墓坑５基が検出されている。

（参考・引用文献）

大崎町教育委員会　2001「立山Ｂ遺跡」
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（３）

大崎町教育委員会　2005「金丸城跡」
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

大崎町教育委員会　2005「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（５）

大崎町教育委員会　2006「美堂Ａ遺跡」
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（６）

大崎町教育委員会　2014「麦田下遺跡」
大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

志布志町教育委員会　1984「倉園Ｂ遺跡」
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

志布志町教育委員会　1990「道重遺跡」
志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（17）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005「二子塚Ａ遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（84）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2012「稲荷迫遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（169）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2008「西原遺跡・牧ノ原Ｂ遺跡・原村Ⅰ遺跡・原村Ⅱ遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（124）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2007「山ノ田遺跡Ｂ地点・蕨野Ｂ遺跡・松ヶ尾遺跡・谷ヶ迫遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（109）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　1992「西丸尾遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（64）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　1994「西丸尾Ｂ遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（９）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　1992「榎崎Ａ遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（63）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　1993「榎崎Ｂ遺跡」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（４）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2010「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡Ａ地点」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）

鹿児島県立埋蔵文化財センター　2012「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡Ｂ地点・柿木段遺跡２」
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（173）

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2015「天神段遺跡１」
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（３）

鹿児島県教育委員会　公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2016「天神段遺跡２」
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（６）

橋本達也　2010「古墳築造南限域の前方後円墳―鹿児島県神領 10 号墳の発掘調査とその意義」『考古学雑誌』第 94 巻第３号

第２図　周辺遺跡位置図（1:25,000）

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所　在　地	地形	種類	時　代	遺物等	備　考
1	468	116	佐土原	曽於郡大崎町野方佐土原	台地	散布地	縄文，古墳	土器	平成 12 年：農政分布調査
2	468	115	大久保 B	曽於郡大崎町持留大久保	台地	散布地	縄文	土器	平成 12 年：農政分布調査
3	468	3	大久保 A	曽於郡大崎町持留大久保	台地	散布地	縄文（後）	指宿式・市来式土器，打製石斧	
4	468	99	赤野原	曽於郡大崎町持留赤野原	台地	散布地	弥生，古墳	土器	平成 11 年：農政分布調査
5	468	2	川上神社	曽於郡大崎町持留中持留	扇状地	散布地	縄文（後）	指宿式・市来式土器	
6	468	67	持留牧	曽於郡大崎町持留牧，東尾ノ花	台地	散布地	縄文，古墳	磨製石斧片，成川式土器	平成 9 年：農政分布調査
7	468	135	西ノ上	曽於郡大崎町永吉西ノ上	台地	散布地	弥生		平成 18 年 7 月：NTT ドコモ九州の電話基地局建設に伴う分布調査
8	468	100	枦木段	曽於郡大崎町永吉枦木段	台地	散布地	弥生，古墳	土器	平成 11 年：農政分布調査
9	468	101	永迫	曽於郡大崎町永吉永迫	台地	散布地	縄文，弥生，古墳	土器	平成 11 年：農政分布調査
10	468	127	高久田 B	曽於郡大崎町永吉高久田	沖積地	散布地	弥生（前・末），古墳	弥生終末～古墳住居跡	平成 18 年：農政分布調査 平成 21 年：県営農総事業に伴い発掘調査
11	468	97	坂本原	曽於郡大崎町岡別府坂本原	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
12	468	96	五鳴	曽於郡大崎町岡別府五鳴	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
13	468	98	早馬	曽於郡大崎町岡別府早馬	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
14	468	128	小柳	曽於郡大崎町岡別府小柳	沖積地	散布地	弥生，古墳		平成 18 年：農政分布調査
15	468	137	麦田下	曽於郡大崎町岡別府麦田下	台地	散布地	弥生（後），古墳，古代	土器溜まり，高付式・西南四国系・瀬戸内系土器，勾玉，砥石，成川式土器，墨書土器	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (7)
16	468	129	宮田	曽於郡大崎町岡別府宮田	沖積地	散布地	弥生，古墳	弥生土器	平成 18 年：確認調査
17	468	130	高久田 A	曽於郡大崎町高久田・尾ノ迫	台地	集落	縄文（晩），弥生（前～終末），古墳，古代～近代	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構，入佐式・黒川式・刻目突帯文・山ノ口式・中津野式・東原式土器，磨製石鏃・石錐・ガラス玉・青磁・古銭	大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (8)
18	468	102	船迫	曽於郡大崎町永吉船迫	台地	散布地	縄文，弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
19	468	103	下原	曽於郡大崎町持留下原	台地	散布地	縄文（後），弥生，古墳	指宿式土器・市来式土器・弥生土器・土師器・磨製石斧	平成 11 年：農政分布調査
20	468	134	椎木段	曽於郡大崎町永吉椎木段	台地	散布地	縄文，古墳，中世	成川式土器・磨製石斧	平成 18 年：分布調査
21	468	104	永吉天神段（本報告書）	曽於郡大崎町永吉天神	河岸段丘・台地	集落墓域	旧石器，縄文，弥生，古墳，古代，中世・近世	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑墓・集石，ﾅｲﾌ形石器・尖頭器・縄文土器・弥生土器・成川式土器・土師器・銅鏡・古銭	平成 24 ～ 27 年度　発掘調査 平成 27 年度　第 1 地点埋文調査センター報告書 (8)
22	468	53	下堀	曽於郡大崎町岡別府下堀	台地	集落地下式横穴墓	縄文（早・後），弥生（中），古墳，古代，中世	集石遺構，大型住居跡，土坑を伴う掘立柱建物跡，地下式横穴墓等，縄文土器・山ノ口式土器・成川式土器	平成 13 ～ 15 年　大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査 平成 17 年度　大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (5)
23	468	90	干浅	曽於郡大崎町井俣浅瀬	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年度：農政分布調査
24	468	30	金丸城跡	曽於郡大崎町井俣小牧・金丸	台地・沖積地	城館跡	縄文（早），古墳，古代，中世，近世	掘立柱建物跡・土坑・溝，石坂式土器・石鏃・凹石・土師器・須恵器・青磁・白磁・青花・備前焼・砥石・硯・鉄製品等	救仁郷氏築城と言われているが，調査でも不明 平成 11・12 年　大隅グリーンロード建設に伴う発掘調査 平成 17 年度　大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (4)
25	468	86	井俣牧	曽於郡大崎町井俣井俣牧	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所　在　地	地形	種類	時　代	遺物等	備 考
26	468	122	井俣和田	大崎町井俣和田	沖積地	散布地	古墳	成川式土器	平成 18 年：確認調査
27	468	88	宮脇	大崎町井俣宮脇	台地	散布地	旧石器時代，縄文時代早期	集石，加栗山式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・平栫式・塞ノ神式土器，石核・石鏃・磨石	平成 27・28 年：発掘調査
28	468	89	堂園堀	大崎町井俣堂園堀	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査 平成 23 年：確認調査
29	468	87	坂上	大崎町井俣坂上	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
30	468	95	荒園	大崎町仮宿荒園	台地	散布地	旧石器，縄文（早），弥生（中），古墳，中世，近世	竪穴住居跡・溝状遺構，細石刃核・細石刃・集石・前平式・平栫式・塞ノ神式土器・山ノ口式土器・成川式土器・東播系須恵器・備前焼	平成 24 ～ 26 年　東九州自動車道建設に伴う発掘調査
31	468	49	美堂 A	曽於郡大崎町仮宿美堂	台地	散布地	古墳，中世，近世	古道・土坑，成川式土器・土師器・青白磁・備前焼・常滑焼	平成 14 年　県営農免農道整備事業に伴う発掘調査 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)
32	468	50	美堂 B	曽於郡大崎町仮宿胡摩	台地	散布地	古墳		平成 7 年：農政分布調査
33	468	34	大崎城跡	曽於郡大崎町仮宿城内ほか	台地	城館跡	中世（室町），近世		
34	468	33	胡摩ヶ崎城跡	曽於郡大崎町仮宿古城	台地	城館跡	中世（室町）		楡井氏の城
35	468	51	小園	曽於郡大崎町仮宿小園	沖積地	散布地	古墳		平成 14 年：確認調査
36	468	29	野卸城跡	曽於郡大崎町永吉前岡・深坂	台地	城館跡	古代，中世		平安時代末築城（1190 年） シラス採取で半壊
37	468	106	外園	曽於郡大崎町永吉外園	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
38	468	126	牧谷・白山	曽於郡大崎町永吉牧谷・白山	沖積地	散布地	中世	野卸城の堀の可能性有り	平成 17 年：農政分布調査
39	468	105	大迫	曽於郡大崎町永吉大迫	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年：農政分布調査
40	468	17	高井田	曽於郡大崎町井俣高井田（飛地）	台地	散布地	弥生（中）	土器	平成 17 年：農政分布調査
41	221	449	五色	志布志市有明町野神字五色，風穴	台地	散布地	古墳		平成 10 年度：農政分布調査
42	221	450	西ノ堀	志布志市有明町原田字西ノ堀，下五敷	台地	散布地	古墳		平成 10 年度：農政分布調査
43	221	407	坂ノ上	志布志市有明町原田字坂ノ上，前田，西原	台地	散布地	弥生，古墳		平成 11 年度：農政分布調査 旧遺跡名：坂ノ下
44	221	352	清水	志布志市有明町原田字清水	台地	散布地	弥生（中）	磨製石斧・打製石斧	昭和 58 年度：大隅地区埋蔵文化財分布調査　旧遺跡名：平田，原田，元宮の下，永田
45	221	439	東中原	志布志市有明町原田字東中原，大塚，藤原，中須	台地	散布地	古墳		平成 10 年度　農政分布調査 旧遺跡名：中須
46	221	504	大塚	志布志市有明町原田字大塚，出口，有本，竹塚	台地	散布地	縄文，古墳		平成 8・10 年度：農政分布調査
47	221	386	原田古墳群	志布志市有明町原田字大塚，竹塚	台地	円墳・地下式横穴墓	古墳	原田古墳（円墳直径 40m 高さ 5.6m 石棺露出）大塚 A 古墳（円墳直径 20m 高さ 4.5m 石棺露出長さ 1.3m 高さ 1.2m）大塚 B 古墳（円墳直径 10m 高さ 1.3m）坂ノ上 1･2 号古墳（小円墳）・地下式横穴墓（妻入型・軽石石棺・鉋・成人女性骨・刀子	昭和 58 年度　大隅地区埋蔵文化財分布調査 旧遺跡名：大塚殿，大塚古墳群，大塚 A 古墳・大塚 B 古墳，坂ノ上 1 号古墳，坂ノ上 2 号古墳・大塚 平成 26 年　鹿児島国際大学　発掘調査
48	221	366	長田	志布志市有明町原田長田，牧，春日免	台地	散布地	縄文，弥生（中），古墳，中世	竪穴住居跡（弥生 4・古墳 3）・土坑墓（中世）・掘立柱建物跡（弥生 3・古墳 4・中世 4），山ノ口式土器，成川式土器，白磁，竪穴住居跡（弥生・古墳）	平成 11 年度　発掘調査 平成 15 年　有明町埋蔵文化財発掘調査報告書 (2)
49	482	9	上市ノ園古墳群	肝属郡東串良町岩弘	台地	古墳	古墳	古墳群 1 ～ 5 号	

第３節　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間には，第２表に示すとおり 23 の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については各報告書等を参照していただきたい。

第２表　志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
1	見帰	志布志市志布志町志布志 台地上 標高約 70 m	Ｈ２５年度～調査中	作業中	旧石器	―	ハンマーストーン，剥片，打面調整剥片
					縄文早期	土坑	石坂式・下剥峯式土器，石鏃，磨石，石皿
					縄文前中期	落とし穴，土坑	―
					縄文後晩期	溝状遺構	磨消縄文・丸尾式・西平式・中岳Ⅱ式土器，磨石，敲石
		縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代は細石刃文化期に比定される。縄文時代早期の出土遺物は，土器の出土に比べ石器の出土が非常に少ない。前期の落とし穴は２基で，それらの底部には杭跡と考えられる小ピットが７～８つ確認されている（平成 25 年度は，県立埋セが隣接地の発掘調査を実施している）。					
2	宮ノ上	志布志市志布志町安楽 台地上 標高約 45 m	県文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物が無いことが確認されたため，本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市志布志町安楽 台地上 標高約 30 m	―	―	Ｈ 28 年度以降調査予定		
4	小牧古墳群	志布志市志布志町安楽 台地上 標高約 50 m	Ｈ２７年度～調査中	作業中	旧石器	―	細石刃核，細石刃，チップ
					縄文草創期	集石	黒曜石剥片，土器
					縄文早期	集石	前平式・石坂式・下剥峯式・押型文・平栫式・塞ノ神式土器，耳栓，石鏃，磨石，異形石器
					弥生	―	弥生土器，石包丁
		尾根と谷による起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心とした遺跡である。縄文早期の集石は検出層によって構成礫の大きさに差が見られ，時期差によるものか今後の調査が注目される。また，塞ノ神式土器の壺形土器や，耳栓，異形石器，円盤状石器が出土し，遺跡の性格を知る上でも重要である。古墳群として遺跡登録をされているが，これまでの調査では古墳が存在していた痕跡等は確認されていない。					
5	次五	志布志市有明町野井倉 台地縁辺部 標高約 50 m	終了	作業中	旧石器	―	畦原型細石刃核，細石刃，剥片
					縄文早期	落とし穴，連穴土坑，土坑，集石，磨石集積遺構	前平式・加栗山式・吉田式・札ノ元Ⅶ類，石坂式・中原Ｖ式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神Ｂ式土器，打製・磨製石鏃，石錘，局部磨製石斧，磨
		旧石器時代から縄文時代早期が中心となる遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期に比定される遺物が出土している。縄文時代早期は，早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認され，特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。					
6	大代	志布志市有明町野井倉 台地縁辺部 標高約 40 m	県文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物が無いことが確認されたため，本調査を実施せず。				
7	木森	志布志市有明町野井倉 河岸段丘 標高約 30 m	Ｈ２６年度～調査中	―	縄文早期	集石	前平式・加栗山式・吉田式・下剥峯式・押型文土器，石鏃，石匙，磨石・敲石
					中世	掘立柱建物跡	須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品，鉄滓
		縄文時代早期と中世を中心とする複合遺跡である。縄文時代早期の集石，中世の掘立柱建物跡等が検出され，縄文時代早期の土器，石器，石匙，磨石・敲石，須恵器，土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，鉄製品等が出土している。					

<table>
<tr><th rowspan="2">番号</th><th rowspan="2">遺跡名</th><th rowspan="2">所在地・立地</th><th rowspan="2">調査</th><th rowspan="2">整理・報告書</th><th colspan="3">遺　跡　の　概　要</th></tr>
<tr><th>時　代</th><th>主　な　遺　構</th><th>主　な　遺　物</th></tr>
<tr><td rowspan="6">8</td><td rowspan="6">春日堀</td><td rowspan="5">志布志市有明町蓬原

河岸段丘 標高約 30 m</td><td rowspan="5">Ｈ２６年度～調査中</td><td rowspan="5">作業中</td><td>縄文早期</td><td>竪穴住居跡，連穴土坑，集石，土坑，土器集中，炭化物集中，落とし穴</td><td>前平式・加栗山式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・手向山式・塞ノ神式土器，打製石鏃，打製・環状石斧，トロトロ石器，磨石，台石，石皿，砥石，穿孔円礫</td></tr>
<tr><td>弥　　生</td><td>竪穴住居跡</td><td>山ノ口式土器</td></tr>
<tr><td>古　　墳</td><td>溝状遺構，竪穴住居跡，土坑，棒状礫集積遺構</td><td>甕（笹貫式，東原式），壺，坩，高坏，須恵器高坏，棒状礫，磨製石鏃片</td></tr>
<tr><td>古代～中世</td><td>焼土跡，竪穴建物跡，土坑墓，掘立柱建物跡，柵列</td><td>土師器（坏，甕，椀）</td></tr>
<tr><td>近　　世</td><td>古道，溝状遺構，土坑，遺物集中</td><td>陶器，磁器</td></tr>
<tr><td colspan="7">縄文早期から中世を中心とする複合遺跡である。遺構は，縄文時代早期の竪穴住居跡，連穴土坑，集石（100基以上），落とし穴，弥生時代の竪穴住居跡，古代～中世の掘立柱建物跡が検出され，遺物は縄文時代早期の土器，打製石鏃，打製石斧，環状石斧，トロトロ石器，磨石等，縄文時代後期・弥生時代・古墳時代の土器，土師器，陶器，磁器等が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。</td></tr>
<tr><td>9</td><td>稲荷堀</td><td>曽於郡大崎町菱田
台地上
標高約 50m</td><td colspan="5">県文化財課の試掘調査・県立埋蔵文化財センターの確認調査により，本路線上には遺構・遺物が無いことが確認されたため，本調査を実施せず。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10</td><td rowspan="2">平良上Ｃ</td><td>曽於郡大崎町井俣
台地上
標高約 40 m</td><td>終了</td><td>作業中</td><td>縄文早期</td><td>竪穴住居跡，連穴土坑，集石，埋設土器，チップ集中</td><td>吉田式・石坂式・下剥峯式・押型文・平栫式土器，石鏃，石匙，打製・磨製石斧，扁平打製石斧，磨石，石皿，礫石器，石核，フレーク，チップ</td></tr>
<tr><td colspan="6">縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴住居跡，連穴土坑，集石，土坑が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">11</td><td rowspan="4">宮脇</td><td rowspan="4">曽於郡大崎町井俣
台地上
標高約 40 m</td><td rowspan="4">Ｈ２７年度～調査中</td><td rowspan="4">―</td><td>旧石器</td><td>―</td><td>石核，円礫，フレーク，チップ</td></tr>
<tr><td>縄文早期</td><td>集石，土坑，土器集中</td><td>加栗山式・小牧３Ａ・下剥峯式・桑ノ丸式・押型文・平栫式・塞ノ神式土器，打製石鏃，磨石，チップ</td></tr>
<tr><td>近　　世</td><td>―</td><td>土瓶（薩摩焼），寛永通宝</td></tr>
<tr><td colspan="6">旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代の遺構は検出されていないが，石器製作過程の所産と思われる石核，フレーク，チップ等が出土している。縄文時代早期の遺構は，集石，土坑，土器集中，ピットが検出されている。遺物は土器，石器等約 10,000 点が出土している。近世の寛永通宝，近世以降の土瓶（薩摩焼）が出土している。鬼界カルデラ噴火時に２度の大地震により発生した液状化現象を示す噴砂層が見られる。</td></tr>
<tr><td>12</td><td>堂園堀</td><td>曽於郡大崎町井俣
台地上
標高約 45 m</td><td colspan="5">県文化財課の試掘調査・県立埋蔵文化財センターの確認調査により，本路線上には遺構・遺物が無いことが確認されたため，本調査を実施せず。</td></tr>
</table>

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
13	荒園	曽於郡大崎町仮宿 台地縁辺部標高約 50 m	H 2 4 年度～調査中	作業中	旧石器	—	畦原型細石核・細石刃・水晶剥片
					縄文早期	素材剥片（頁岩）集石，チップ，剥片集中区，土坑	前平式・吉田式・加栗山式・下剥峯式・押型文・手向山式・平栫式・塞ノ神式・苦浜式・条痕文土器，壺形土器，石鏃，スクレイパー，石匙，耳栓，打製・磨製石斧，磨石，石皿，フレーク，チップ
					弥生中期	竪穴住居跡，土坑	吉ヶ崎式・山ノ口式土器，磨製石鏃未製品，砥石
					古　　墳	竪穴住居跡	東原式・笹貫式土器，須恵器，砥石
					古代以前	片薬研堀	—
					中　　世	掘立柱建物跡，土坑，溝状遺構，帯状硬化面	土師器，東播系須恵器，陶器，青磁，華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
		縄文時代早期から古墳時代を中心とする複合遺跡である。遺構は，縄文時代早期の集石，弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡，古代以前の片薬研堀，中世の掘立柱建物跡等が検出され，遺物は縄文時代早期の土器，石器，弥生時代・古墳時代の土器，土師器，陶器，磁器等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
14	永吉天神段	曽於郡大崎町永吉 台地縁辺及び河岸段丘 標高約 30 ～ 50 m	終了	埋文調査セ第１地点（８）2016.3 刊行 作業中 本報告書 2017.3	旧石器	ブロック，礫群	尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，剥片
					縄文早期	集石，土器埋設遺構	前平式・吉田式・加栗山式・手向山式・下剥峯式・押型文・平栫式・塞ノ神式・苦浜式・条痕文土器，石鏃，石匙，石斧，磨石，敲石，石皿，フレーク，チップ
					縄文前期	—	曽畑式土器
					縄文後期	—	岩崎上層式・北久根山式，中岳Ⅱ式土器
					縄文晩期	竪穴住居跡，落とし穴，土坑	入佐式・黒川式・刻目突帯文土器，管玉，打製石斧，磨石，石皿
					弥　　生	竪穴住居跡，円形周溝墓，土坑墓群，掘立柱建物跡，土坑	入来式・山ノ口式・黒髪式土器，鉄鏃，磨製石鏃，管玉
					古　　墳	竪穴住居跡，土坑	成川式土器，須恵器
					古　　代	掘立柱建物跡，土坑	須恵器，土師器
					中　　世	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑墓，地下式坑，火葬土坑，土坑	白磁，青磁，土師器，瓦質土器，東播系須恵器，備前焼，常滑焼，湖州六花鏡，砥石，石塔，古銭，茶臼，石鍋
					近　　世	近世墓	薩摩焼，染付，寛永通宝
		旧石器時代から近世までの複合遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群が検出された。土坑墓からは国内最古級に位置付けられる鉄鏃が出土した。中世においては白磁，青磁，瓦質土器，東播系須恵器等が多量に出土し，当時流通の拠点であったことをうかがい知ることができる。					
15	京の塚	曽於郡大崎町西持留台地上 標高約 95 m	終了	作業中	縄文早期	集石遺構	石坂式・下剥峯式・中原式・押型文・塞ノ神式土器，打製石鏃，石核
					縄文前期～中期初頭	土坑，土器集中	曽畑式・深浦式・大歳山式・鷹島式・船元式土器，打製石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，二次加工剥片，磨石，敲石，石皿，石核，フレーク
					近世以降	溝状遺構・古道	—
		縄文時代早期から中期初頭，近世以降の複合施設で，縄文時代前期から中期初頭が中心となる遺跡である。200 基を超える縄文時代中期の土坑が検出されている。また，在地系土器の深浦式土器，近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土しており，他地域との交流をうかがいしることができる。					

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
16	小牧	鹿屋市串良町細山田 台地上 標高約 60 m	H 2 7 年度～調査中	作業中	旧石器	—	細石刃，フレーク，チップ
					縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，土坑，集石	前平式・吉田式・下剥峯式・桑ノ丸式・平栫式・条痕文系土器，石匙，磨石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式土器，深浦式土器，磨石
					縄文後期	竪穴住居跡，伏甕，石斧集積遺構，集石，土坑，土器集中	指宿式・市来式・凹線文系土器，石鏃，横刃型石器，打製石斧，磨石，石皿
					縄文晩期	—	入佐式・黒川式・刻目突帯文土器
					弥生中期	—	入来式，山ノ口式，砥石
					古　　墳	竪穴住居跡，礫集積，土器溜，土坑	東原式・辻堂原式・布留系土器，須恵器，鉄鏃，鉄製品，敲石，勾玉，軽石加工品
					古　　代	土坑	土師器（甕・坏），須恵器短頸壺
					中世以降	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，溝状遺構，土坑，焼土域	土師器（坏），白磁，青磁，石鍋，鞴の羽口
		旧石器時代から中世までの複合遺跡である。縄文時代早期や後期の良好な竪穴住居跡やそれに伴う土器が出土している。また，古墳時代の竪穴住居跡や中世の掘立柱建物跡が検出されている。本遺跡は，各時期における集落跡と考えられ，周辺の遺跡を含めて串良川沿岸での人間活動の変遷を継続的に追うことができる遺跡である。					
17	川久保	鹿屋市串良町細山田 河岸段丘 標高 約 30 ～ 50 m	H 2 6 年度～調査中	作業中	旧石器～縄文草創期	ブロック，礫群	
					縄文早期	集石，連穴土坑，土坑	前平式・加栗山式・吉田式・倉園Ｂ式・石坂式・下剥峯式・押型文・塞ノ神式土器，石鏃，打製石斧，石皿
					縄文前期	集石	轟式・曽畑式土器，磨製石斧
					縄文晩期	集石	黒川式・刻目突帯文土器
					弥生中期	竪穴住居跡	高橋式・下城式・山ノ口式土器
					古　　墳	竪穴住居跡，鍛冶関連建物跡，竪穴状遺構，古道跡	笹貫式，鞴羽口，高坏脚転用鞴羽口，鉄鏃，鉄滓，勾玉，管玉
					古　　代	掘立柱建物跡	須恵器，土師器
					中　　世	掘立柱建物跡，古道跡，溝状遺構	青磁，白磁，瓦器椀
		旧石器時代から中世までの複合遺跡である。特に古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴建物跡が検出されている。これらの遺構の中には，鍛冶関連遺構を伴うものや専用の鞴の羽口が出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。					
18	町田堀	鹿屋市串良町細山田 台地縁辺部標高約 90 m	H 2 5 年度～調査中	埋文調査セ（7）2016.3 刊行 作業中	縄文早期	集石	下剥峯式・平栫式土器
					縄文後期	竪穴住居跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構	中岳Ⅱ式土器，石刀，打製・磨製石斧，石鏃，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉
					縄文晩期	—	刻目突帯文土器
					弥生中期	竪穴住居跡	山ノ口式土器
					古　　墳	竪穴建物跡，地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構	成川式土器（壺・高坏・坩），人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器
					古　　代	焼土跡，古道	土師器，須恵器
		縄文時代早期から古代までの複合遺跡である。縄文時代後期では，竪穴住居跡から橿原文を施す完全な石刀が出土している。また，古墳時代では 88 基の地下式横穴墓が報告されている。地下式横穴墓では初めて円形周溝を伴う例が確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性を持ち，志布志湾沿岸部の高塚と共存する地域の地下式横穴墓との比較をする事により，この地域の古墳時代の在り方を考える上で貴重な資料である。					

番号	遺跡名	所在地・立地	調査	整理・報告書	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
19	牧山	鹿屋市串良町細山田 台地縁辺部 標高約 110m	H 2 5 年度～調査中	作業中	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，土坑，集石，石器製作跡	吉田式・石坂式・下剥峯式・辻タイプ・桑ノ丸式・押型文土器，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石，剥片，チップ
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟式・条痕文土器
					縄文後期	土坑，落とし穴状遺構，埋設土器，石器集中部，掘立柱建物跡	市来式・西平式・丸尾式・太郎迫式・三万田式・中岳Ⅱ式土器，打製・磨製石斧，磨石，剥片，石核，台石，石冠
					縄文晩期	土坑	入佐式・突帯文土器
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式土器，打製・磨製石斧，磨製・打製石鏃，磨石，敲石，石皿，青銅鑿
					中・近世	古道跡	青磁，白磁，薩摩焼
		旧石器時代～中世にかけての複合遺跡である。中でも縄文時代後期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴群（300～400 個）が環状で確認されており注目される。また，埋設土器や祭祀用とみられる石冠も出土している。					
20	田原迫ノ上	鹿屋市串良町細山田 台地縁辺部 標高約 120m	H 2 2 年度～調査中	縄文前期以降編埋文調査セ（5）2016.3 刊行	縄文早期	竪穴住居跡，連穴土坑，集石，落とし穴，土坑，石器製作跡	前平式・吉田式・倉園Ｂ式・石坂式・下剥峯式・辻タイプ・桑ノ丸式・中原式・押型文・手向山式・平栫式・塞ノ神式土器，石槍，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，打製石斧
					縄文後期	落とし穴，礫集石	指宿式・市来式土器，石鏃，磨石
					縄文晩期	—	黒川式土器
					弥生中期	竪穴住居跡，大型建物跡，掘立柱建物跡，円形・方形周溝，土坑	山ノ口式・中溝式土器，擬凹線文系壺，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃，石匙，砥石，敲石，台石
					古墳時代以降	溝状遺構，畝状遺構	土師器椀，薩摩焼
		縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした複合遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構に伴う方形や大型の円形の竪穴住居跡，棟持柱をもつ２棟を含む掘立柱建物跡，柱穴列や円形・方形の周溝など，大隅半島中央部での当時の集落のあり方を知る上で貴重な資料である。また，大型建物跡の可能性が高いとして，一部が現地に保存されている。縄文時代早期についても竪穴住居跡 20 軒，連穴土坑 40 基など注目される遺構が多く検出されている。					
21	立小野堀	鹿屋市串良町細山田 台地縁辺部 標高約 125m	H 2 2 年度～調査中	作業中	縄文前・中期	—	深浦式土器
					縄文後期	—	指宿式・西平式・市来式土器
					弥生中期	—	山ノ口式土器
					古　　墳	地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構	成川式土器，須恵器，鉄器（刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等），青銅鈴，人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
		縄文時代前期から古墳時代までの複合遺跡である。特筆すべきは，古墳時代の地下式横穴墓が多量の土器，須恵器，鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴，人骨等を伴い 190 基発見されたことである。これだけ多くの副葬品を伴った地下式横穴墓の発見は，地下式横穴墓の研究だけでなく南九州の古墳時代の様相を解明していく上で貴重な資料である。					
22	十三塚	鹿屋市串良町細山田 台地上 標高約 140m	終了	埋セ報告書（164）2011.3 刊行	縄文早期	—	石坂式土器
					縄文後期	—	凹線文・市来式・三万田式土器
					縄文晩期	—	黒川式土器
					弥生中期	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式土器，土製勾玉，打製・磨製石鏃，棒状敲具，鉄鏃
					古墳時代	—	成川式土器
					中世～近世	道路状遺構	加治木銭
		弥生時代中期が中心となる遺跡である。竪穴住居跡は，花弁形･方形･円形に分類されている。出土遺物等から，王子遺跡（鹿屋市王子町）や前畑遺跡（鹿屋市郷之原町）等と同時期の集落跡と考えられている。また，集石遺構が竪穴住居跡内から検出されている。７号住居跡の埋土内から，松木薗遺跡（南さつま市金峰町）や永吉天神段遺跡（曽於郡大崎町）で出土した鉄鏃同様，無茎の鉄鏃が出土した。					
23	石縊	鹿屋市串良町細山田 台地上 標高約 140m	終了	埋セ報告書（164）2011.3 刊行	縄文早期	集石，土坑	岩本式・前平式・志風頭式・石坂式・平栫式・貝殻条痕文・鎌石橋・轟Ａ式土器，打製石鏃，磨石，敲石
					弥生中期	—	山ノ口式，須玖式土器
		縄文時代早期前半から早期末が中心となる遺跡である。鎌石橋式土器が１個体と轟Ａ式が２個体出土し，同時期に存在した可能性も考えられる。					

第３図　東九州自動車道（志布志 IC ～鹿屋串良 JCT）建設に伴って調査された遺跡（1：80,000）

第３章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理作業・報告書作成作業の方法について記す。

１　発掘調査の方法

永吉天神段遺跡の発掘調査は，平成 23 年度に確認調査，平成 24 ～ 27 年度に本調査を実施した。調査対象表面積は 37,100 ㎡，調査対象延面積は 87,500 ㎡である。

本遺跡の調査区割り（グリッド）は，平成 23 年度の確認調査時において工事用基準杭「ＳＴＡ 113」と「ＳＴＡ 105」の延長線を中心に，10 ｍ間隔で西から東に向かって１・２・３…，北から南に向かってＡ・Ｂ・Ｃ・・・と設定した。

このグリッドを基にして,Ｍ－１区の左下を原点（０，０），縦軸をＸ，横軸をＹとし，遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また，トータルステーションで測量作業を行う場合，公共座標に基づき基準点を設定した。

発掘調査は，基本的に重機で表土を除去した後，確認調査の結果に基づき，遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層，火山灰の一次堆積層は，一部重機を用いて慎重に掘り下げた。遺構は，移植ごて等の遺構掘削に適した道具を用いて慎重に調査し，実測，写真撮影等を行い，遺物は，トータルステーションを使用して取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法及び概要（詳細は第１章に掲載）は，以下のとおりである。

平成 23 年度

確認調査は荒園遺跡と同時に実施し，その結果，永吉天神段遺跡の調査延面積は 87,588 ㎡となった。

平成 23 年７月１日から９月 28 日までの約３か月間，調査対象地域にグリッドに沿ってトレンチを 31 箇所設定し，調査区全体の包含層の有無について調査した。トレンチの形状は１×８ｍの長方形を基本とし，必要に応じて拡張した。表面を覆う雑草の除去・雑木の伐採を人力で行った後，重機及び人力により徐々に包含層を掘り下げた。遺物・遺構を発見した場合には，重機による掘り下げを即時中止し，山鍬・鋤簾等による人力掘削で遺構・遺物の検出を行った。検出した遺構については，写真撮影，実測を行った。出土遺物はトータルステーションで取り上げた後，掘り下げを続けた。いくつかのトレンチでは，遺構に影響のない部分について，安全対策を施しながら下層確認トレンチを設定し，Ⅺ層（シラス）上面まで調査を実施した。しかしながらⅦ層（薩摩火山灰）より下位の旧石器時代相当層については，上層の包含層が厚く，十分な調査面積を確保することができなかったため,本調査にて範囲を確定させることとなった。

平成 24 年度

隣接する第１地点と並行して調査を実施した。調査期間は平成 24 年７月２日～平成 25 年１月 28 日で，調査延面積は第１地点が 2,262 ㎡・第２地点が 4,449 ㎡であった。第１地点の調査区は本遺跡の東側に位置しており，標高約 35 ｍに位置するＥ～Ｉ－ 57 ～ 62 区の河岸段丘の平坦面であった。Ⅱａ～Ⅴａ層上面まで調査を実施した。Ｆ～Ｈ－ 57 ～ 59 区にトレンチを６本設定し，約 40 ㎡で縄文時代早期の下層確認調査を行い，調査終了後，埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後，基本的には山鍬・鋤簾等による人力にて掘り下げを行った。縄文時代晩期が主体になることから，当初Ⅳ層上面の地形測量を行う予定であったが，古代の遺構・遺物が全面に確認されたため，まず，Ⅲ層上面での地形測量を行った。また，鬼界カルデラに伴う液状化現象（噴砂）の見られたトレンチでは，土層断面の記録保存調査を行った。

遺物包含層が残存している場合は，小破片はグリッドごとに一括して取り上げ，それ以外の遺物は，必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。まとまった遺物及び遺構に関わりのある遺物については，縮尺１/ ５～１/10 の実測を行った。

なお，遺構実測や遺物取り上げは，調査担当者の指揮・監督の下，発掘調査支援業務委託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

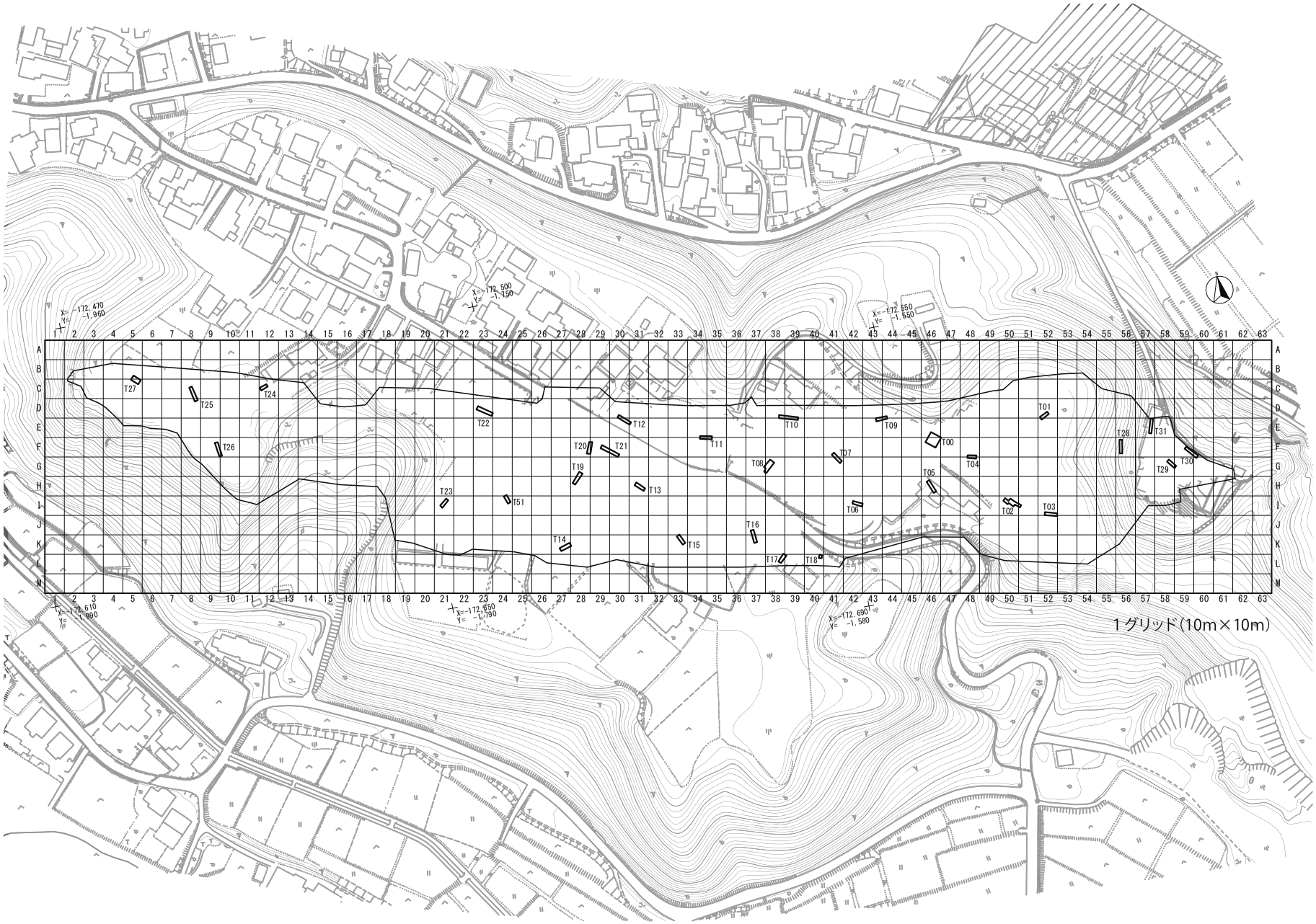
平成 25 年度

調査期間は平成 25 年６月 13 日～平成 26 年１月 28 日で，調査延面積は約 26,291 ㎡であった。第２地点の調査区は，本遺跡の中心であるシラス台地の縁辺部から中央部に位置しており，標高は約 50 ｍである。調査は用地境界などでは安全上の措置として約 1.0 ～ 3.0 ｍ程度内側に控えて調査範囲を設定し，重機により表土を剥いだあと，人力による掘り下げ作業を実施した。

Ｃ～Ｌ－ 48 ～ 59 区は平成 24 年度調査の続きで，縄文時代早期のⅤ層調査とＣ～Ｆ－ 50 ～ 53 区約 1,400 ㎡の旧石器時代調査を行った。また，Ｃ～Ｊ－ 27 ～ 47 区はⅡ～Ⅴ層（中世～縄文時代早期）の調査を行い，地形観測用の土層ベルト沿いに，Ⅶ層上面（サツマ火山灰）とⅧ～Ⅹ層の旧石器時代の下層確認を行った。調査終了後，埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後，基本的には山鍬・鋤簾等による人力にて掘り下げを行った。弥生時代中期と縄文時代早期が主体になることから，Ⅲｂ層上面とⅥ層上面にて，地形測量を行った。

遺物包含層が残存している場合は，小破片はグリッド



第４図　確認調査トレンチ位置図

ごとに一括して取り上げ，それ以外の遺物は必要に応じて写真撮影を実施した後に，トータルステーションを用いて取り上げを行った。まとまった遺物及び遺構に関わりのある遺物については，縮尺１/ ５～１/10 の実測を行った。

なお，遺構実測や遺物取り上げは，調査担当者の指揮・監督の下，発掘調査支援業務委託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

平成 26 年度

調査期間は平成 26 年５月 12 日～平成 27 年１月 28 日で，調査延面積 31,500 ㎡であった。調査は用地境界などでは安全上の措置として約 1.0 ～ 3.0 m程度内側に控えて調査範囲を設定し，重機により表土を剥いだあと，人力による掘り下げ作業を実施した。平成 26 年度調査区は，シラス台地の中央部に位置しており，標高は約 50 mである。

Ｃ～Ｌ－ 18 ～ 41 区を中心に，中世から縄文時代早期のⅡ～Ⅴ層の調査と地形観察用の土層ベルト沿いに２m幅のトレンチを設定して，Ⅶ層（サツマ火山灰層）上面にて縄文時代早期の遺構確認調査とⅧ～Ⅹ層の旧石器時代の下層確認調査を行った。なお，旧石器時代の遺物の出土が見られた箇所については，一部拡張を行い遺物の広がりがないかを確認している。また，Ｄ～Ｊ－ 24 ～ 28 区は弥生時代から中世の墳丘等も予想されたため，表土から人力よる掘削を行っている。調査終了後，埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後，基本的には山鍬・鋤簾等による人力にて掘り下げを行った。弥生時代中期と縄文時代早期が主体になることから，Ⅲｂ層上面とⅥ層上面にて地形測量を行った。なお，Ⅱ層調査中に中世の遺構・遺物が多数発見されたため，Ⅲａ層上面でも地形測量を行っている。

遺物包含層が残存している場合は，小破片はグリッドごとに一括して取り上げ，それ以外の遺物は必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。まとまった遺物及び遺構に関わりのある遺物については，縮尺１/10 の実測を行った。

なお，遺構実測や遺物取り上げは，調査担当者の指揮・監督の下，発掘調査支援業務委託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

平成 27 年度

平成 27 年５月 11 日～平成 27 年１月 28 日の期間に，第２地点より谷を挟んだ遺跡西端の第３地点と併せて第 2 地点の町道部分の調査（８月より）を行った。調査延面積第２地点約 4,650 ㎡・第３地点約 7,724 ㎡であった。調査は用地境界などでは安全上の措置として約 1.0 ～ 3.0 m程度内側に控えて調査範囲を設定し，重機により表土を剥いだあと人力による掘り下げ作業を実施した。

第３地点は中世から縄文時代早期のⅡ～Ⅵ層の調査，第２地点は町道の付け替え工事と並行して，中世から縄文時代早期のⅡ～Ⅴ層の調査を行った。地形観察用の土層ベルト沿いに４m幅のトレンチを設定して，Ⅶ層（サツマ火山灰層）上面にて縄文時代早期の遺構確認調査とⅧ～Ⅹ層の旧石器時代の下層確認を行った。遺構・遺物が検出された箇所については一部拡張を行い，遺構・遺物の広がりがないかを確認している。調査終了後，埋め戻しを行った。

調査は重機で表土を除去した後，基本的には山鍬・鋤簾等による人力にて掘り下げを行った。中世・弥生時代中期と縄文時代早期が主体になることから，Ⅲｂ層上面とⅥ層上面にて地形測量を行った。

遺物包含層が残存している場合は，小破片はグリッドごとに一括して取り上げ，それ以外の遺物は，必要に応じて写真撮影を実施した後にトータルステーションを用いて取り上げを行った。まとまった遺物及び遺構に関わりのある遺物については，縮尺１/ ５～１/10 の実測を行った。

なお，遺構実測や遺物取り上げは調査担当者の指揮・監督の下，発掘調査支援業務委託業者（株）パスコの測量士及び調査支援員と発掘作業員で実施した。

２　遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

（１）遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，調査担当者で検討したうえで遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

土坑及びピットについては，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土など総合的に判断し，検出した順に土坑はＳＫ，ピットはＰの略記号を用いた。検出面や埋土の状況で大まかな時期の判断はできたが，埋土の色調の違いや時期の違う遺物が混在するものについては，詳細な時期判定ができなかった。集石は礫の集中を確認したところで慎重に周辺を精査し，検出した順にＳＳの略記号を用いた。なお，遺構は検出の写真撮影後掘り下げ実測を行った。遺構に応じて縮尺１/10 と，１/20 の実測を行った。

（２）遺構の検出方法

遺構の検出及び調査方法として，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが，判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。特に，黒色土に掘り込まれた遺構埋土が黒色系になることが多い中世～弥生時代の遺構については，掘り過ぎたものもあり「検出面からの深さ」にばらつきがあったので，調査のあり方を再検討し，今後の調査に生かしたい。

第５図　グリッド配置及び調査範囲図

また，住宅や耕作地，雑木林があった箇所の調査では，撹乱を受けている箇所があり，遺構の検出をはじめ調査が難しかった。この場合はミニトレンチを設定し，撹乱部分の埋土除去等最善の調査方法を調査担当で検討し，遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

３　整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

平成 25 ～ 27 年度の発掘調査支援業務において，発掘調査と並行して，遺物の水洗い・注記を行った。

水洗作業の方法は，土器や石器の一部に関してはブラシを用いたが，黒曜石や剥片石器は超音波洗浄機を用いて進めた。

注記は，水洗い終了後，順次行った。注記を行う際，薬品を使用するため，換気に注意しながら手作業で進めた。これまでに刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり，遺跡名を表す記号を「ＮＴＪ」とした。その後に出土区，層，取り上げ番号等が記してある。

平成 27・28 年度の整理作業及び報告書作成作業支援業務で分類・接合から作業を行った。遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，包含層出土土器については，土器の胎土や文様等で時期ごとに分別し，接合する方法をとった。石器については，剥片石器と礫石器に分けた後，器種及び石材別に分類した。作業の効率化を図るため，整理作業及び報告書作成作業支援業務委託先である（株）パスコで出土土器・石器の実測を行った。

遺物出土分布図は，トータルステーションで取り上げたデータを統合し，図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は，実測図や写真等を用いて，発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。

土層断面や遺構の原図データの点検・修正後，デジタルトレースを行った。

原稿を執筆し，本報告書作成作業・印刷・製本を行った。

第２節　層序

永吉天神段遺跡は住宅地であったことや，長年の耕作の影響で一部に削平・盛土・撹乱等の影響がみられたが，表土が厚くⅡ層以下の残存状況は比較的良好であった。Ⅱ層は基本Ⅱａ層とⅡｂ層に分層したが，Ｄ～Ｋ－ 27 ～ 31 区では，Ⅰ層（表土）とⅡ層の間に，Ⅱ層より明るく，褐色が強い暗褐色土が見られた。基本層位には記載しなかったが，Ⅱ’層と位置づけている。また，Ⅸｃ層・Ｘａ層・Ｘｃ層については残存している部分が少ない。なお，包含層や遺構・遺物の年代を把握する手掛かりの１つとなる火山灰等の詳細については，以下のとおりである。

Ⅰ層：表土（造成土及び耕作土）である。３～５㎜程度の白色軽石を多く含み，しまりが有り固い層と白色の軽石粒を含み，軟質である層の２つに分かれる箇所もある。

Ⅱａ層：黒色腐植土層で，下層に比べてわずかに暗い。中世の包含層である。

Ⅱｂ層：黒褐色砂質土で 0.5 ㎜程度の褐色粒子を多く含む。上層に比べてわずかに明るい。古墳時代・弥生時代の包含層である。

Ⅲａ層：黒色腐植土層で若干光沢があり，保湿性に富み，わずかに粘りがある。縄文時代前期～晩期の包含層である。

Ⅲｂ層：褐色土で１～２㎝程度の黄色軽石粒（池田火山灰：約 6,300 年前の池田カルデラ起源の噴出物）を含む。粘りはないが，硬い粒子を多く含み，しまりがある。

Ⅳａ層：黄橙色土で，アカホヤ火山灰（約 7,300 年前の鬼界カルデラ起源の噴出物）の堆積層。

Ⅳｂ層：黄色パミス（３～５㎜）：幸屋降下軽石（アカホヤ火山灰一次降下軽石）である。

Ⅴａ層：にぶい黄褐色土で軟質な土である。縄文時代早期の包含層である。

Ⅴｂ層：褐色土で，粘性がありⅤａ層に比べて硬い。にぶい黄褐色土の２～３㎝のブロックを含む。縄文時代早期の包含層である。

Ⅵ層：黒褐色砂質土で，しまりがあり硬い。上層は縄文時代早期の包含層である。

Ⅶ層：灰黄褐色土：薩摩火山灰（約 12,800 年前の桜島起源の噴出物）

Ⅷ層：暗褐色粘質土。

Ⅸａ層：Ⅷ層に比べてやや明るく，粘性が弱い。

Ⅸｂ層：灰黄褐色粘質土。

Ⅸｃ層：褐色粘質土。

Ｘａ層：にぶい黄橙色粘質土。

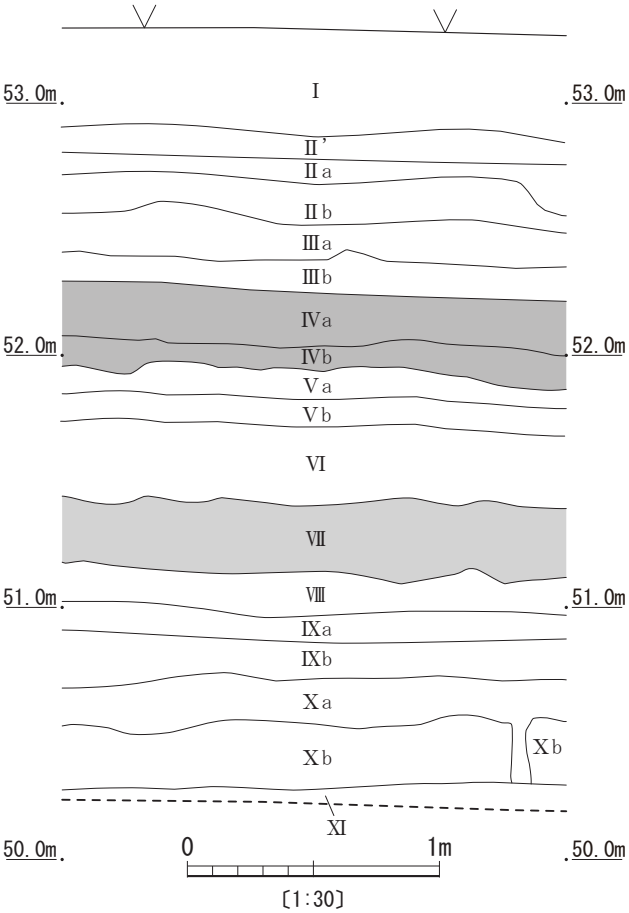
Ｘｂ層：灰黄色粘質土で，やや暗い暗褐色の硬質土がブロック状に含まれる。粘性は弱い。旧石時代の包含層である。

Ｘｃ層：暗灰黄色ロームで，粘性は弱い。

Ⅺ層：二次シラス（約 28,000 年前の姶良カルデラ起源の噴出物・ＡＴ）。

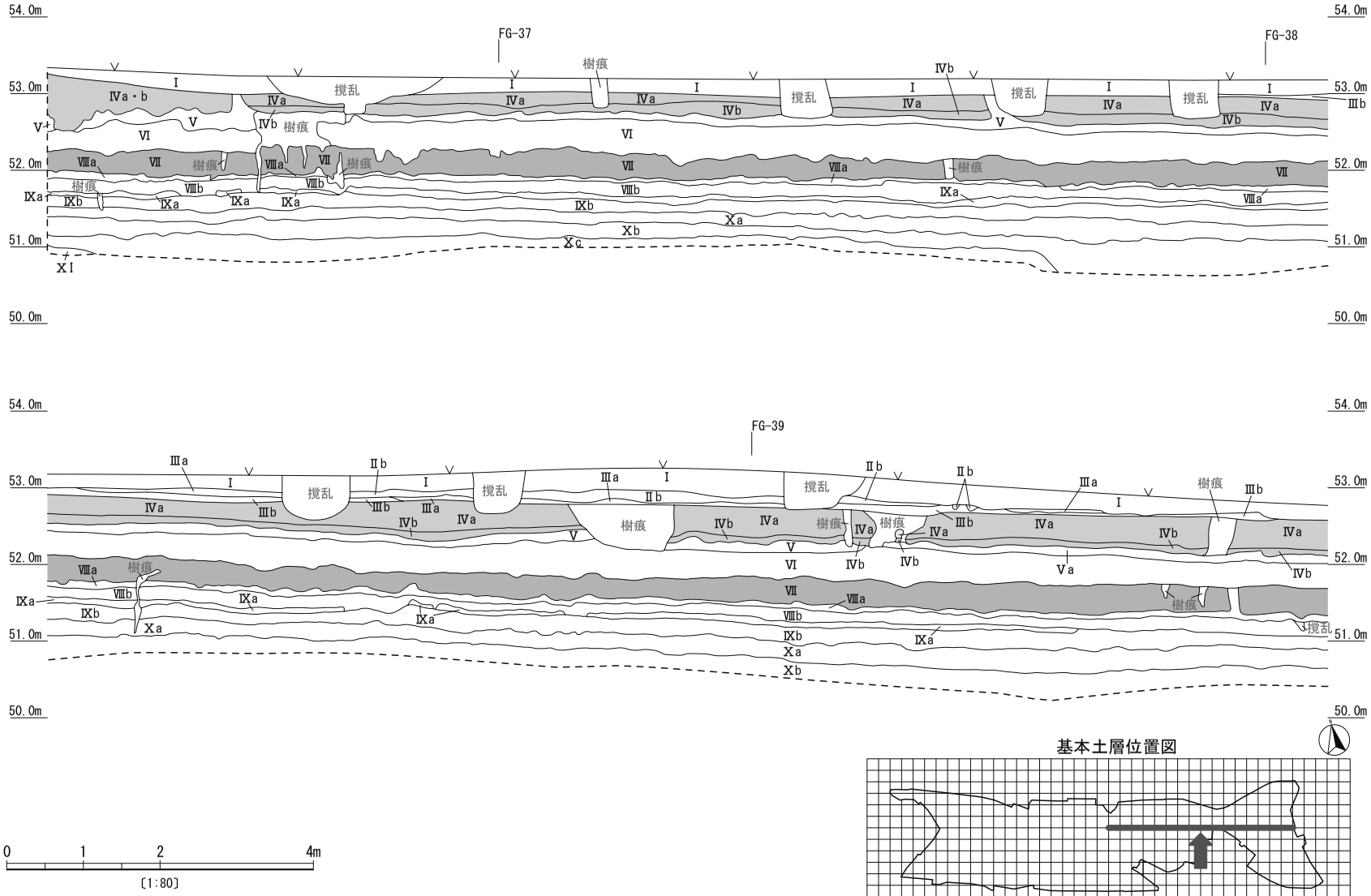
※　火山灰の年代については，町田洋　新井房夫著東京大学出版会　2003『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』（ｐ 108 ～ 110）から引用した。なお，年代は放射性炭素年代測定法で算出され，暦年較正した年代である。

写真１　第２地点の土層

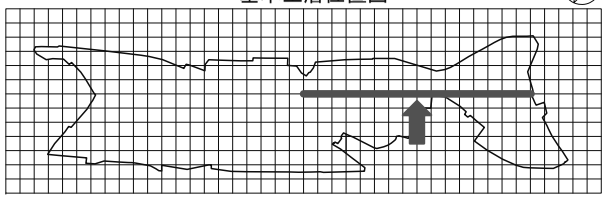


第６図　基本土層図

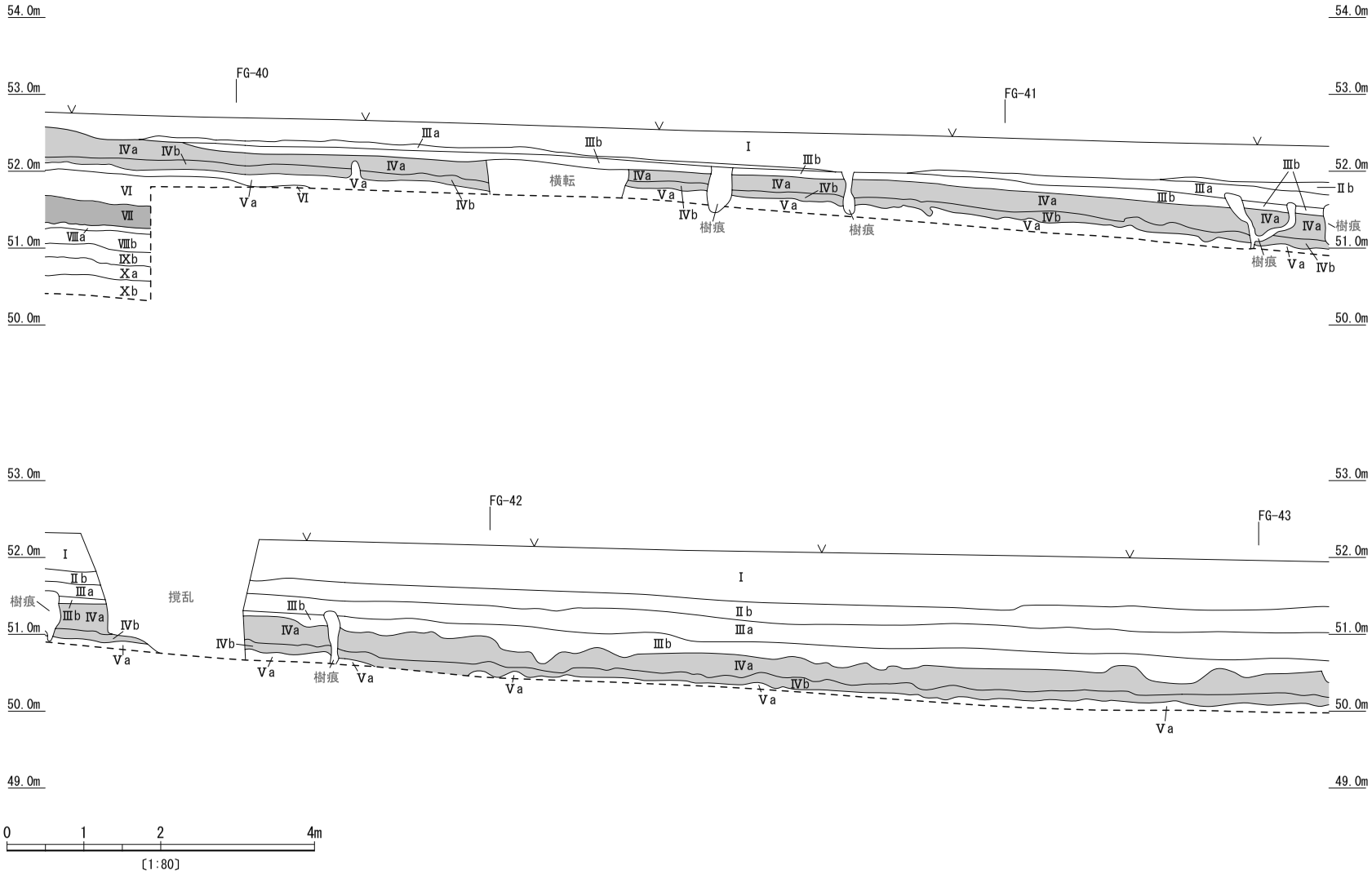
写真２　D-22 区土層断面



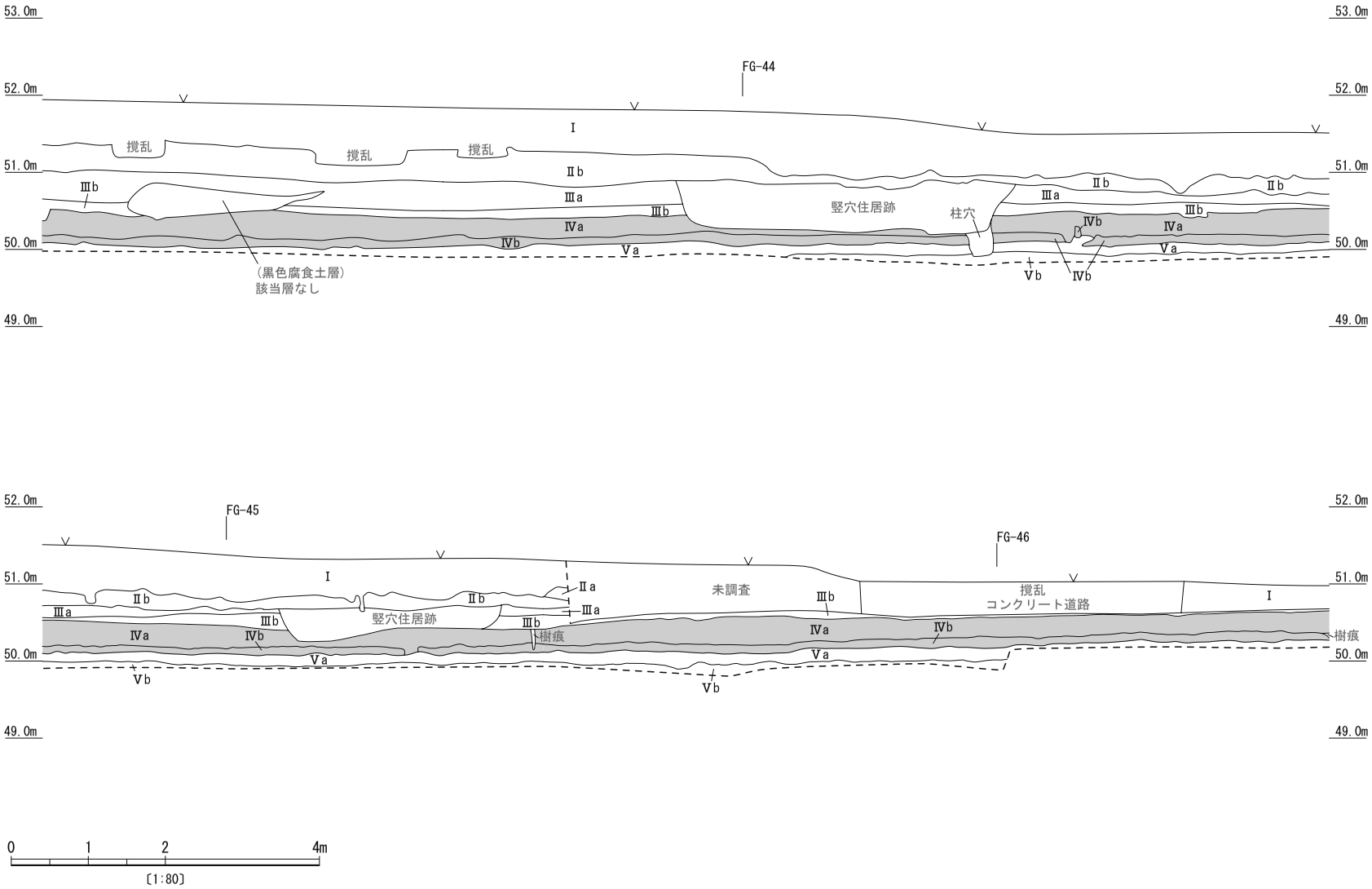
基本土層位置図



第７図　土層断面図（１）

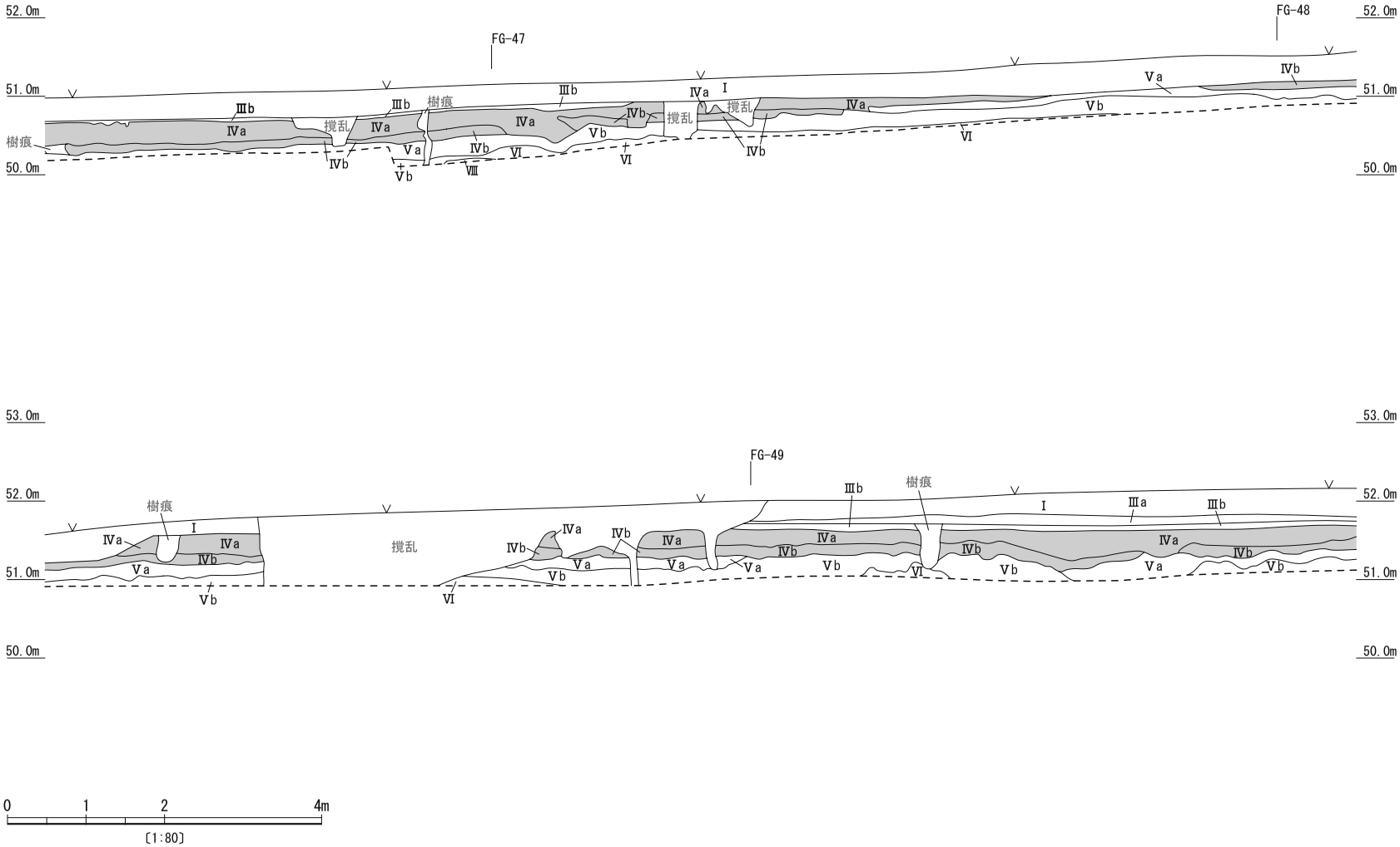

54.0m
53.0m
52.0m
51.0m
50.0m
49.0m
FG-40
FG-41
FG-42
FG-43
Ⅰ
Ⅱb
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳa
Ⅳb
Ⅴa
Ⅵ
Ⅶ
Ⅷa
Ⅷb
Ⅸb
Ⅹa
Ⅹb
横転
樹痕
撹乱
0
1
2
4m
〔1:80〕

第８図　土層断面図（２）

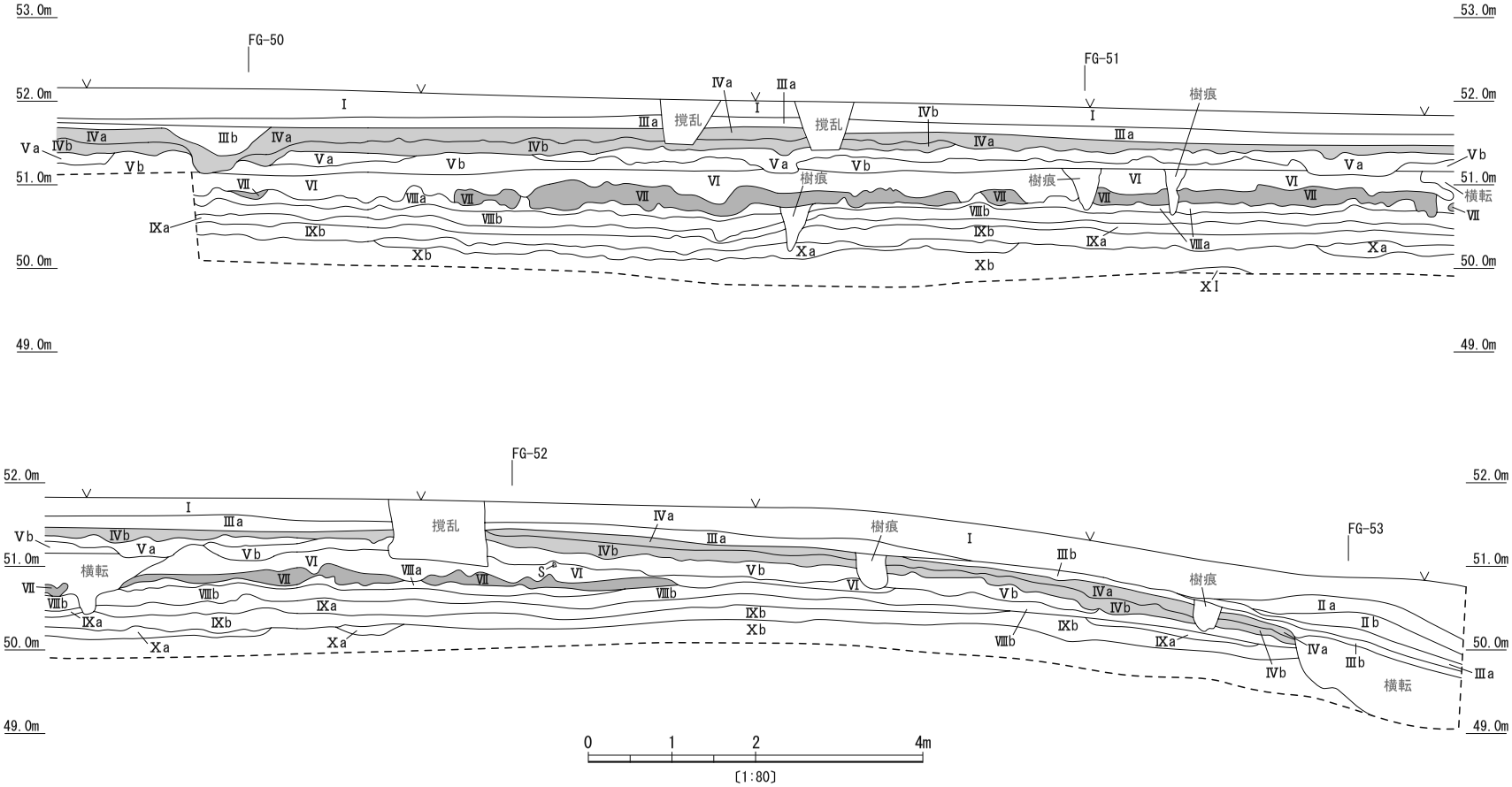


0 1 2 4m
〔1:80〕

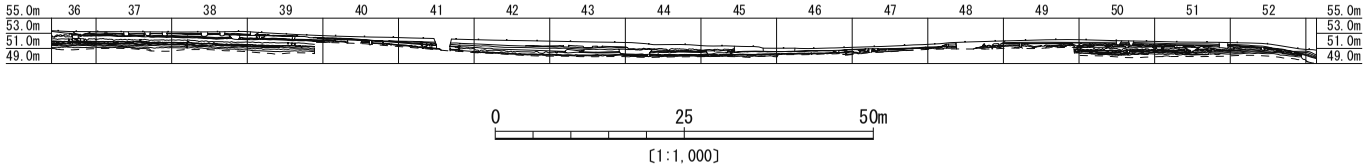
第９図　土層断面図（３）


52.0m
51.0m
50.0m
FG-47
FG-48
FG-49
樹痕
撹乱
Ⅰ
Ⅲa
Ⅲb
Ⅳa
Ⅳb
Ⅴa
Ⅴb
Ⅵ
Ⅷ
53.0m
0
1
2
4m
〔1:80〕

第 10 図　土層断面図（4）



FGライン基本土層図



第 11 図　土層断面図（５）

第４章　調査の成果

第１節　旧石器時代の調査

１　調査の概要

旧石器時代の調査は，その遺物包含層としてⅧ～Ⅹ層が対象となった。先ず，薩摩火山灰層であるⅦ層を重機掘削により除去した後，順次，鋤簾等を用いた人力掘削によって下層からの遺構遺物の検出に努めた。また，先行した旧石器トレンチ調査の結果に基づき調査範囲の拡張を行った。Ⅹ層にまで及んだ全調査面積は4,617㎡に達し，第２地点全体の調査対象面積23,346㎡の約20％に至った。本調査では，標準テフラＡＴ層より上部のⅩ層を文化層として，ナイフ形石器や角錐状石器等の保有を特徴とした石器群が発見された。一方，Ⅷ～Ⅸ層中の出土遺物については皆無であった。

主体は，調査区東部Ｃ～Ｇ－50～53区の舌状に張り出した縁辺部の微高地において散漫な遺物分布が認められ，都合，石器ブロック７箇所とブロック外分布，礫群１基と礫分布域等が識別された（第12・13図）。垂直分布では，礫群と石器類が安定しているⅩ層中部が生活面であると考えられるが，遺物の自然営力による上下移動を考慮して，ここではⅩ層全体を一括して捉えている。これらの出土石器類は合計166点であり，その内訳は，ナイフ形石器３点，角錐状石器６点，槍先形尖頭器１点，台形石器２点，削器・掻器類４点（接合実質３点），二次加工剥片５点（接合実質４点），微小剥離痕剥片９点，剥片及び砕片128点，石核５点，礫器１点，敲石２点（接合実質１点）となっている。また，礫は礫群以外のものを含めて合計38個が出土している。

他方，台地東西の局所で旧石器トレンチ調査にかかり，Ｅ－47，Ｆ－38，Ｇ－23区それぞれのⅩ層中より石器類４点の散発的な出土が認められている（第12図）。その内訳は順に，微小剥離痕剥片２点，敲石１点，削器・掻器類１点である。

次に，石器石材については，黒曜石をはじめ多様性がみられている。調査区東部では，敲石を除いて，黒曜石（113点69％），頁岩（29点18％），ホルンフェルス（13点８％），砂岩（５点３％），水晶（２点１％），流紋岩（２点１％）が用いられている。このうち黒曜石は肉眼観察により，多くの斑晶を含む日東系と三船系のものが主体をなしており，ホルンフェルスは粒子や風化度合が異なる数種類，頁岩はいわゆる珪質頁岩までの数種類が細分できる。砂岩は粒状による３種類である。なお，母岩別個体数の厳密な分類は割愛した。また，接合については，小砕片以外の全点で試み，４例の接合資料がある。

以下，礫群，石器ブロックと出土石器の説明を述べる。主要な石器類45点を図示した。

２　遺構

（１）第１礫群（第13・14・20図）

礫群としては１基のみが認められている。崖線沿いのＣ・Ｄ－53区境に位置する礫群で，西側約１ｍの至近に重複せずに第２ブロックが位置している。確認面はⅩ層中部である。規模は径0.6ｍ程の範囲に礫９個が疎らに分布しており，垂直分布は第２ブロック東側の分布幅と大差なく，やや低く下がるものの特に掘り込みなどは認められていない。また，中央部下面に被熱によるとみられる暗赤褐色の変質土が若干うかがわれたが，炭化物粒子の目立った混在は検出されなかった。構成礫の大きさは最大が径８㎝で210ｇであり，拳大以下の破砕礫を主体として，総重量は865ｇとなる。これらは全て焼け礫であるが，石材によって赤化の度合に差異があり，全体に著しく被熱した状態ではなかった。更に，ススタール等の付着物については認められていない。石材では大きく安山岩と砂岩の亜角礫がみられ，おそらくは，それぞれに同一個体のものである可能性が高い。

（２）第１～３礫分布（第13・18・20図）

礫群の他，調査区の広範囲に散在した少量の焼け礫の分布がみられており，29個を数える。特に南西側の石器分布域においてある程度の纏まりをみせ，礫群礫の拡散あるいは廃棄といった可能性からみて，一部を礫分布域として取り扱う。各分布域間での接合関係はみられていない。これらの総重量は3,670ｇとなる。

第１礫分布

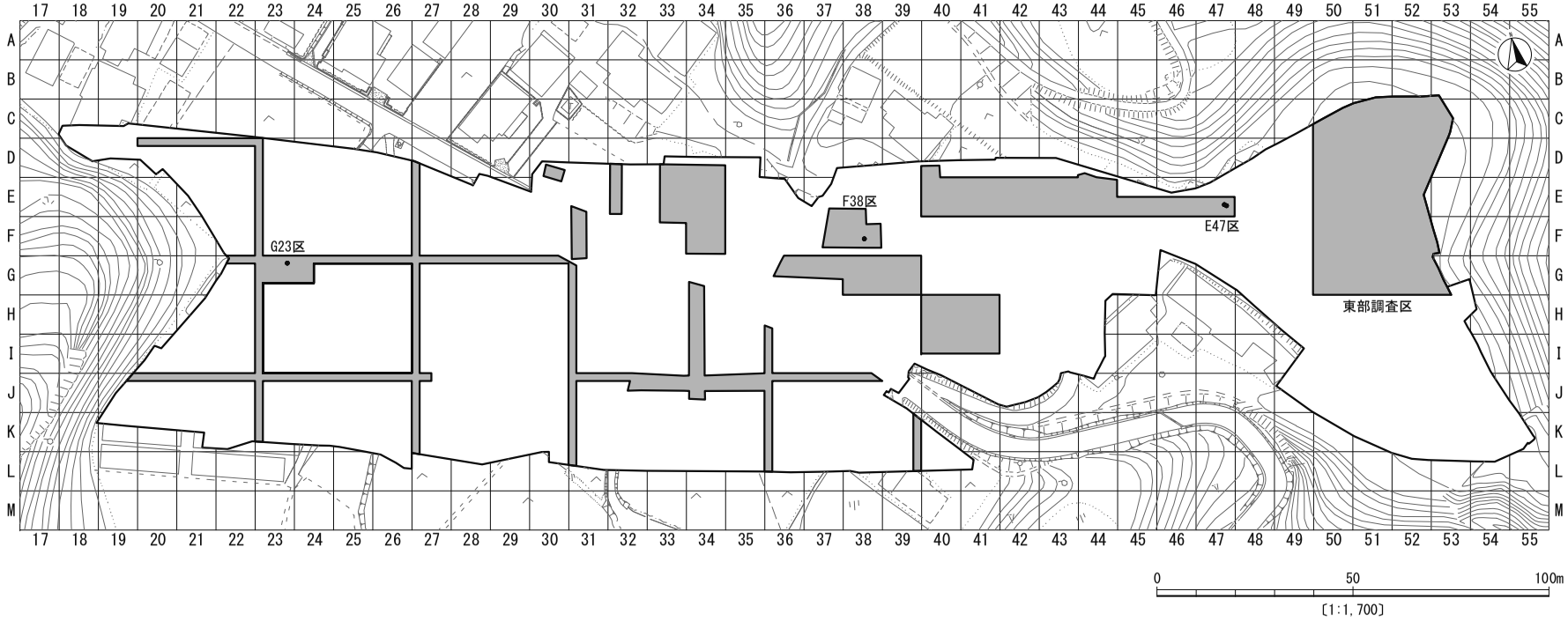
Ｆ－50・51区境に位置し，第４ブロックと重複するように，径約３ｍの範囲に礫９個が疎らながら纏まってみられる。垂直分布は大半が10㎝以内の高低差にあり，かかるブロック中の石器類と大差ない比高にある。構成礫は被熱赤化した径５㎝前後の破砕礫からなり，接合関係はない。石材は砂岩と頁岩の亜円礫である。

第２礫分布

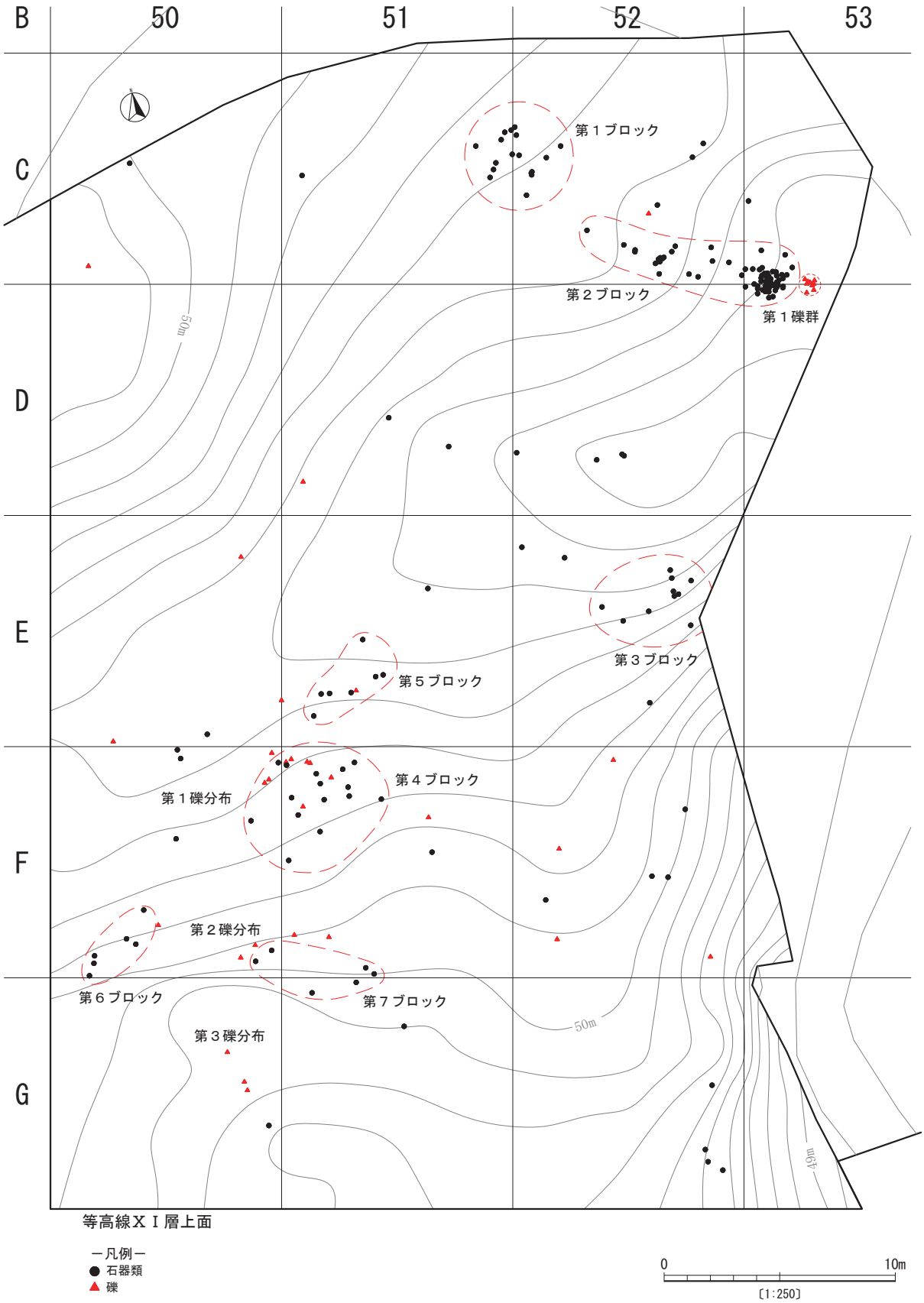
Ｆ－50・51区境に位置し，第７ブロックの外側で約４ｍ間に礫４個が近接してみられる。垂直分布は６㎝以内の高低差にある。構成礫は被熱赤化した径５～10㎝前後の破砕礫であり，接合関係はない。石材は砂岩の亜円礫である。

第３礫分布

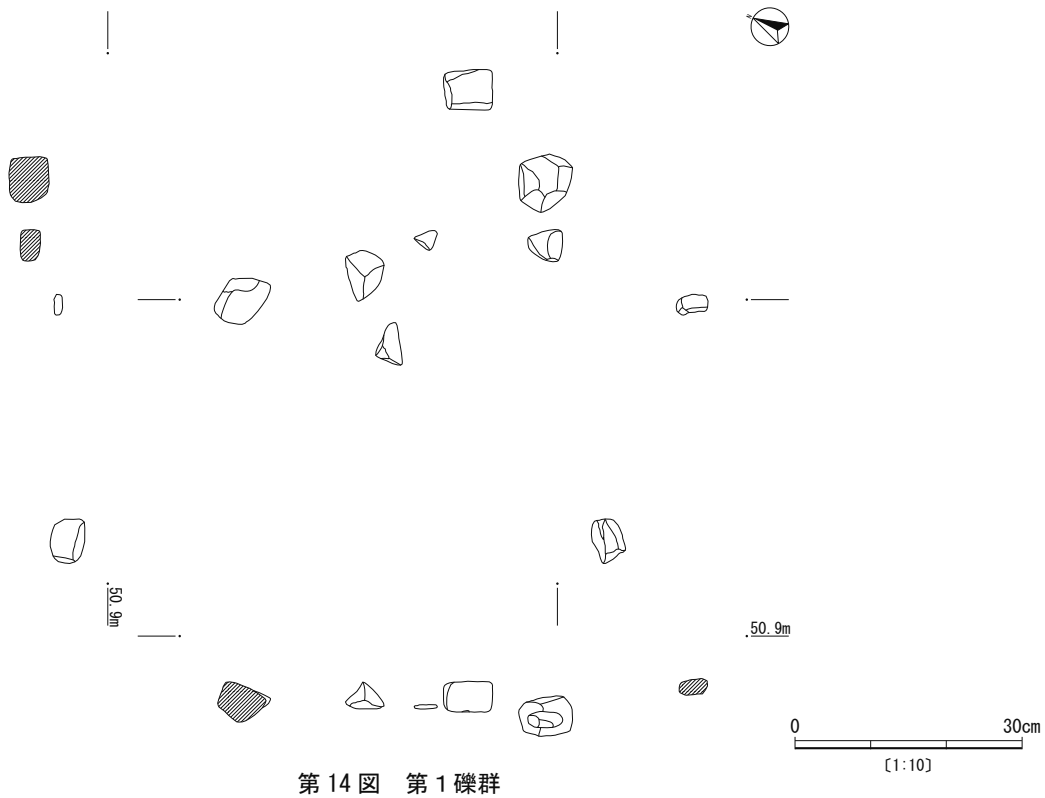
Ｇ－50区に位置し，比較的近接して礫３個がみられている。垂直分布は４㎝以内の高低差にある。北側の１個は著しく被熱赤化して半割れした径10㎝の扁平礫であり，他の礫には唯一ススの付着がみられている。接合関係はない。石材は砂岩である。



第 12 図　旧石器時代調査範囲と遺物出土区域図



第 13 図　東部調査区出土遺構・遺物分布図



第 14 図　第１礫群

３　石器分布

（１）第１ブロック（第 16・20 図）

北側崖線寄りのＣ－ 51・52 区境に位置し，南東側に約３m離れて第２ブロックが位置する。分布は径約４m の範囲にやや纏まった広がりをもち，垂直分布では最大幅 13 ㎝，大半が５㎝以内の高低差にある。出土石器類は合計 17 点である。組成は日東系・三船系黒曜石とみられる剥片 12 点，砕片５点からなり，石器製作に関わる可能性が高い。特に抽出はしなかったが，剥片では３㎝大のものを含んでいる。

（２）第２ブロック及びブロック外（第 16・20 図）

第１ブロックに近くＣ－ 52･53, Ｄ－ 53 区境に位置し，東側に隣接して第１礫群が存在する。分布は径約９m の範囲に纏まった広がりをもち，その東側に径約 1.5 m の密な集中部が形成されている。垂直分布では地形に沿って最大幅 40 ㎝, 東西で大半が 10 ㎝以内の高低差にある。出土石器類は合計 73 点であり，そのうち東側集中で 60 点程を占める。組成は珪質頁岩製のナイフ形石器１点（１），水晶製の小砕片１点の他，主体は日東系・三船系黒曜石による剥片 21 点（２～４･他), 砕片 50 点であり，東側集中に１㎝以下の剥片・砕片が数多くみられる。第１ブロックと同様に石器製作に関わる可能性がいえる。

次いでブロック外として, 第２ブロックの北側に離れ，頁岩製剥片３点（５・６・他），砕片１点の遍在がある。垂直分布は 35 ㎝間の高低差にあり，地形に沿って第２ブロックの平均値より下位にある。これらの石材はそれぞれに母岩が異なるものである。

（３）ブロック外Ｃ－ 50・51 区（第 15・20 図）

第１ブロックから西側に離れ，頁岩製台形石器１点（７）と砂岩製剥片１点（８）の点在がある。垂直分布は第１ブロックの平均値にほぼ等しい。

（４）第３ブロック及びブロック外（第 17・20 図）

東側崖線寄りのＥ－ 52 区に位置し，北側に約 12 m離れて第２ブロック，西側に約 10 m離れて第５ブロックが位置する。分布は径約５m の範囲に散漫な広がりをもち，垂直分布は地形に沿って最大幅 48 ㎝，殆どが 20 ㎝以内の高低差にある。出土石器類は合計 10 点（接合実質８点）である。組成はホルンフェルス製の削器・掻器類が実質１点（９a ＋ b），剥片１点（10），砕片１点，頁岩と黒曜石製の剥片２点（11・12），頁岩製の二次加工剥片が実質１点（13a ＋ b），石核１点（14），敲石１点（15a）であり，調整剥片や砕片類を欠き，石材ではそれぞれ単独で存在する。また，削器・掻器類（９）と二次加工剥片（13）のそれぞれに接合関係がみられている。更に, 東部一帯において１点出土した敲石（15a）は,

第５ブロック中に分布する破片（15b）と，約 12 m間の接合関係にある。

次いでブロック外として，第３ブロックの周囲及び北西側空間，Ｄ－ 51・52，Ｅ－ 51・52 区に点在する石器類を一括する。垂直分布は地形に沿って 75 ㎝間の高低差にあるが，多くは第３ブロックの分布幅とほぼ等しい。出土石器類は合計 10 点を数える。器種別では，頁岩製台形石器１点（16），砂岩・黒曜石・水晶製の角錐状石器３点（17 ～ 19），ホルンフェルス製のナイフ形石器１点（20），黒曜石製剥片２点，頁岩製剥片３点がみられている。石材では黒曜石を除いて，それぞれ単独で存在するが，頁岩製剥片は珪質のものが比較的至近に分布し，うち２点は同一母岩のものとみられる。

（５）第４ブロック及びブロック外（第 18・20 図）

崖線より内側に入りＦ－ 50・51 区境に位置し，北側１ｍの至近に第５ブロック，南西側にやや離れて第６・７ブロックがユニットを形成するように位置する。分布は径約６ｍの範囲に散漫な広がりをもち，垂直分布では最大幅 15 ㎝，大半が 10 ㎝以内の高低差にある。出土石器類は合計 15 点である。組成は砂岩製礫器１点（21），頁岩製二次加工剥片１点（22），頁岩製剥片２点（23･他），ホルンフェルス製剥片４点（24・他）と砕片１点，日東系・三船系黒曜石とみられる剥片２点，砕片４点からなる。石材では黒曜石を除いて，それぞれ単独で存在するが，風化著しいホルンフェルスの剥片３点が中央付近にみられ，同一個体の調整剥片である可能性が高い。

次いでブロック外として，第４ブロックから離れて，西側にホルンフェルス製の槍先形尖頭器１点（25）と剥片２点，東側に頁岩製剥片１点が点在する。垂直分布は第４ブロックの分布幅とほぼ等しい。なお，ホルンフェルス製の剥片については，槍先形尖頭器の調整剥片である可能性がある。

（６）第５ブロック及びブロック外（第 18・20 図）

第４ブロックに接近してＥ－ 51 区に位置し，東側に約 10 ｍ離れて第３ブロックが位置する。分布は径約４ｍの範囲に散漫な広がりをもち，垂直分布では最大幅 27 ㎝，殆どが 15 ㎝以内の高低差にある。出土石器類は合計７点である。組成は黒曜石製の二次加工剥片１点（26），石核１点（28），剥片２点，砕片１点，頁岩製剥片１点（27），敲石破片１点（15b）である。石材では黒曜石製，二次加工剥片（26）の１点は漆黒の色調を特徴として，上牛鼻系の可能性がある。

次いでブロック外として，第５ブロックから西側に離れ，黒曜石製石核１点（29）の点在がある。垂直分布は第５ブロックの平均値とほぼ等しい。

（７）第６ブロック（第 18・20 図）

第４ブロックから南西側に約６ｍ離れてＦ－ 50 区に位置する。分布は径約４ｍの範囲に散漫な広がりをもち，垂直分布は全てが５㎝以内の高低差にある。出土石器類は僅かに合計６点である。組成は頁岩製ナイフ形石器１点（30），頁岩製剥片３点（31・32・他），黒曜石製剥片１点，砕片１点である。石材はそれぞれ単独で存在する。

（８）第７ブロック及びブロック外（第 18・20 図）

第４ブロックの南側に約４ｍ離れてＦ－ 50・51 区に位置し，西側に位置する第６ブロックと約５ｍの距離を置く。分布は径約５ｍの範囲に散漫な広がりをもち，垂直分布は最大幅 23 ㎝，殆どが 10 ㎝以内の高低差にある。出土石器類は僅かに合計６点（接合実質５点）である。組成は黒曜石製の角錐状石器１点（33），砂岩製の削器・掻器類１点（36），頁岩製剥片が実質３点（34･35a ＋ b･他）である。石材ではそれぞれ単独で存在し，ブロック内として剥片１点（35）に接合関係がみられている。

次いでブロック外として，第７ブロックから南側に離れ，頁岩製の削器・掻器類１点（37），黒曜石製剥片１点の点在がある。垂直分布は地形に沿って低く位置する。

（９）ブロック外Ｆ・Ｇ－ 52 区（第 19・20 図）

ブロック外として，第４・７ブロックより東側崖線寄りの空間，Ｆ・Ｇ－ 52 区で南北に分かれて点在する石器類を一括する。垂直分布は地形に沿って双方とも，殆どが 10 ㎝以内の高低差にある。出土石器類は合計８点を数えるが，その他にＧ－ 53 区のＸ層中より位置不明の１点がみられている。器種別では，Ｆ－ 52 区に黒曜石製の角錐状石器１点（38）と二次加工剥片１点，３㎝大の流紋岩製剥片２点が分布し，Ｇ－ 52 区では黒曜石製の角錐状石器１点（39），石核１点（40），剥片１点，頁岩製剥片１点からなる纏まりがみられる。また，Ｇ－ 53 区内の１点は砂岩製の石核（41）である。石材では日東系・三船系黒曜石の他，それぞれ単独で存在する。

（10）Ｅ－ 47，Ｆ－ 38，Ｇ－ 23 区（第 21 ～ 23 図）

調査区東部以外のＸ層単独出土石器について述べる。

Ｅ－ 47 区

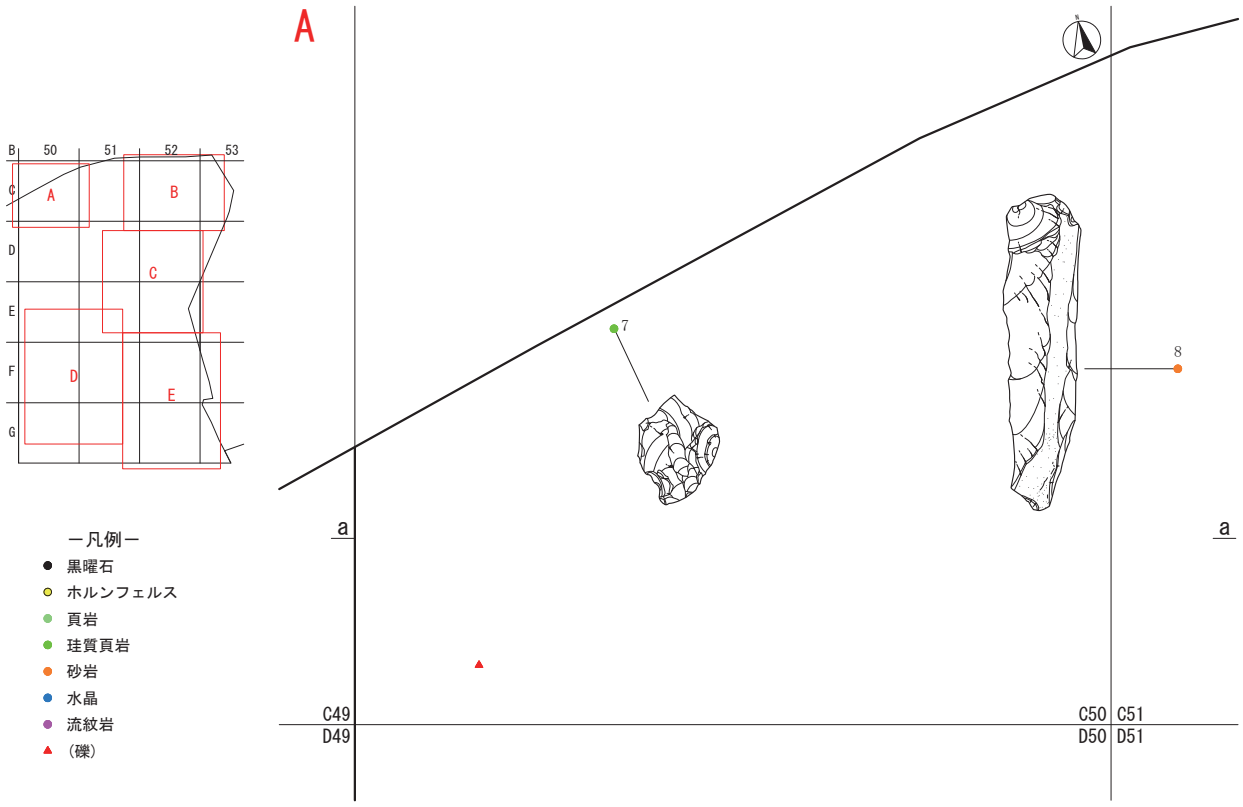
台地東側張出部の付根で北側崖線に面して，剥片２点（42・43）が接近してみられている。垂直分布では 25 ㎝の高低差がある。

Ｆ－ 38 区

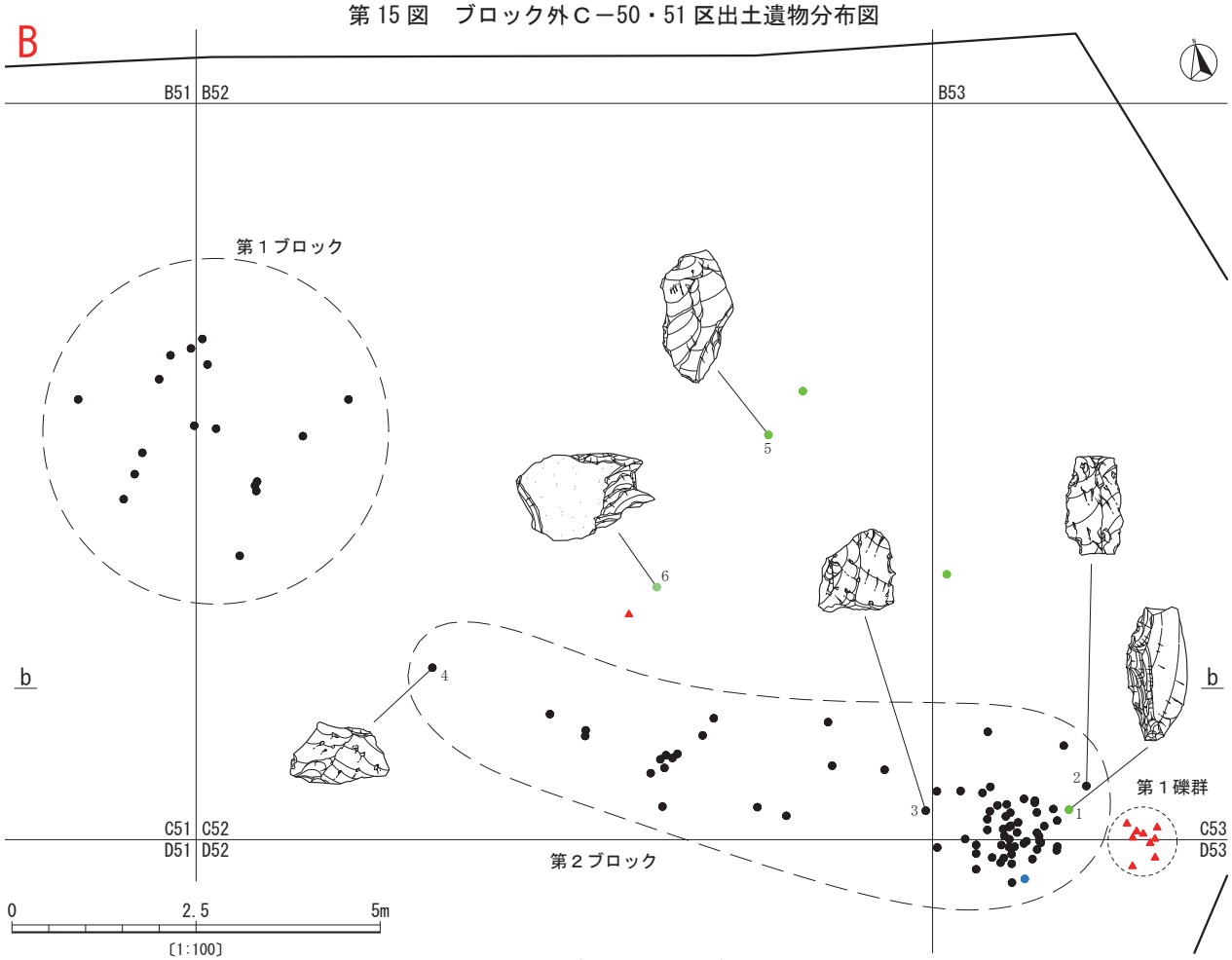
台地中央部から北側崖線にかけての緩斜面において，敲石１点（44）がみられている。

Ｇ－ 23 区

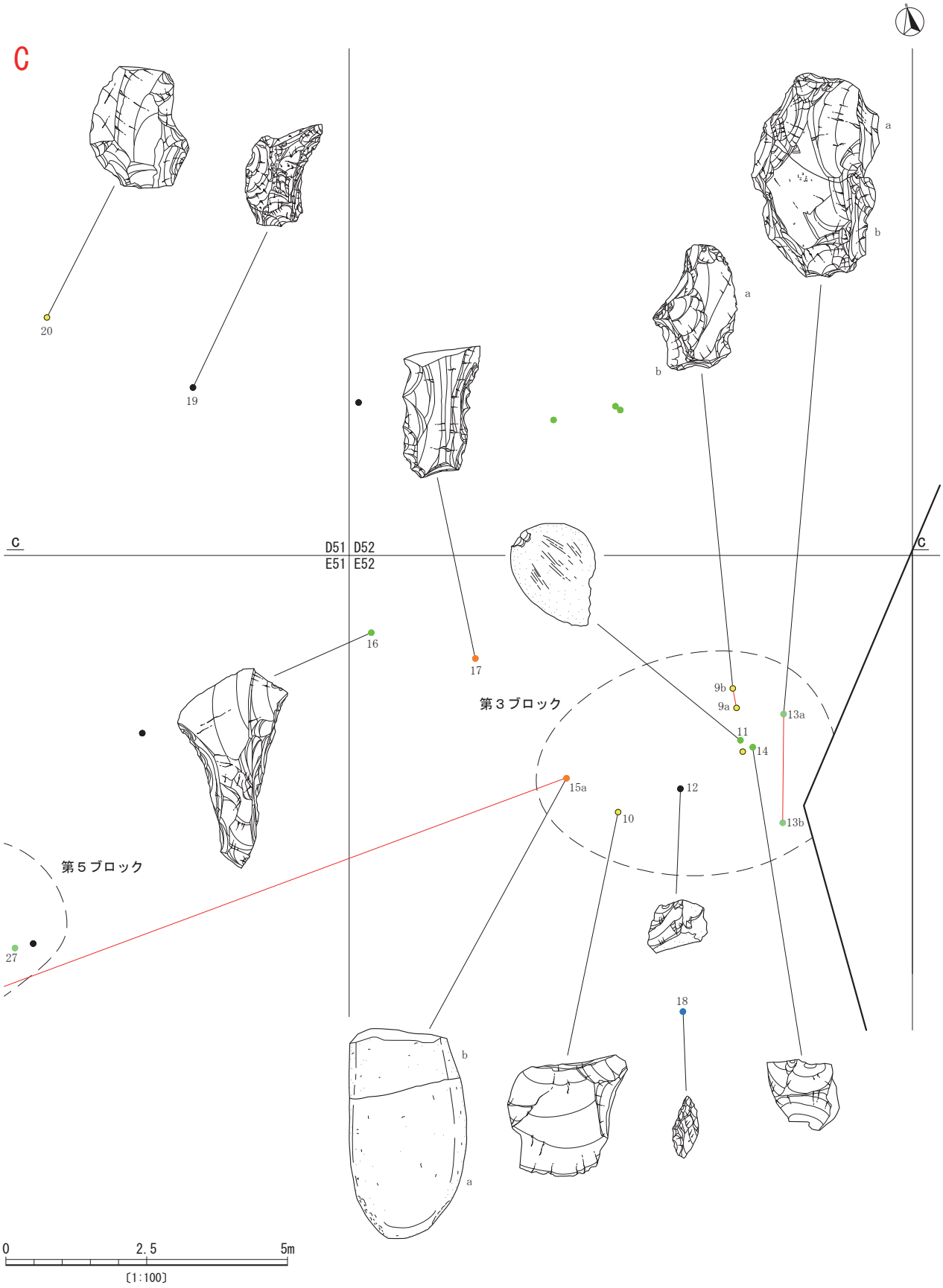
台地西側崖線より内側に入った緩斜面において，削器・掻器類１点（45）がみられている。



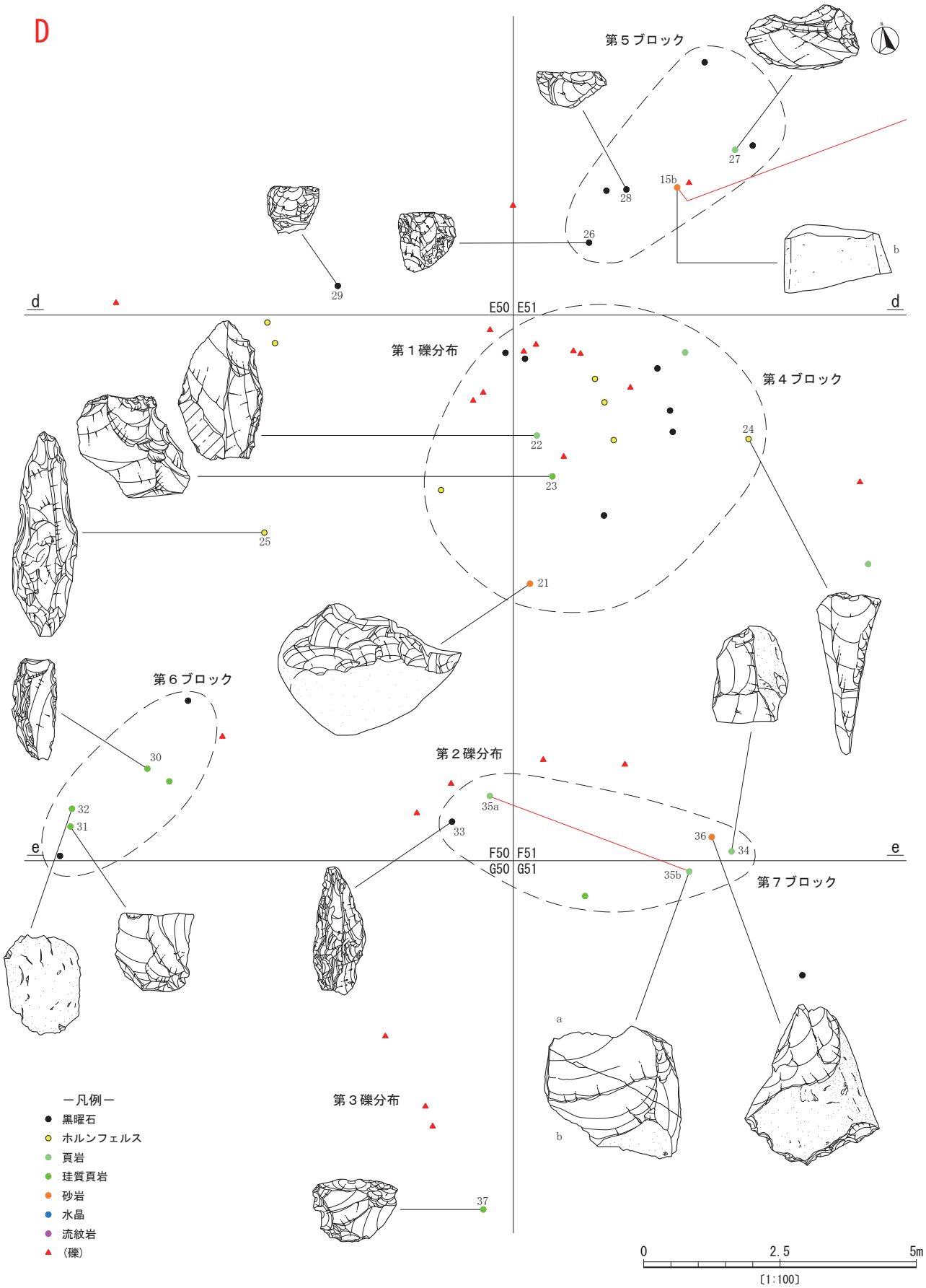
第 15 図　ブロック外Ｃ－50・51 区出土遺物分布図



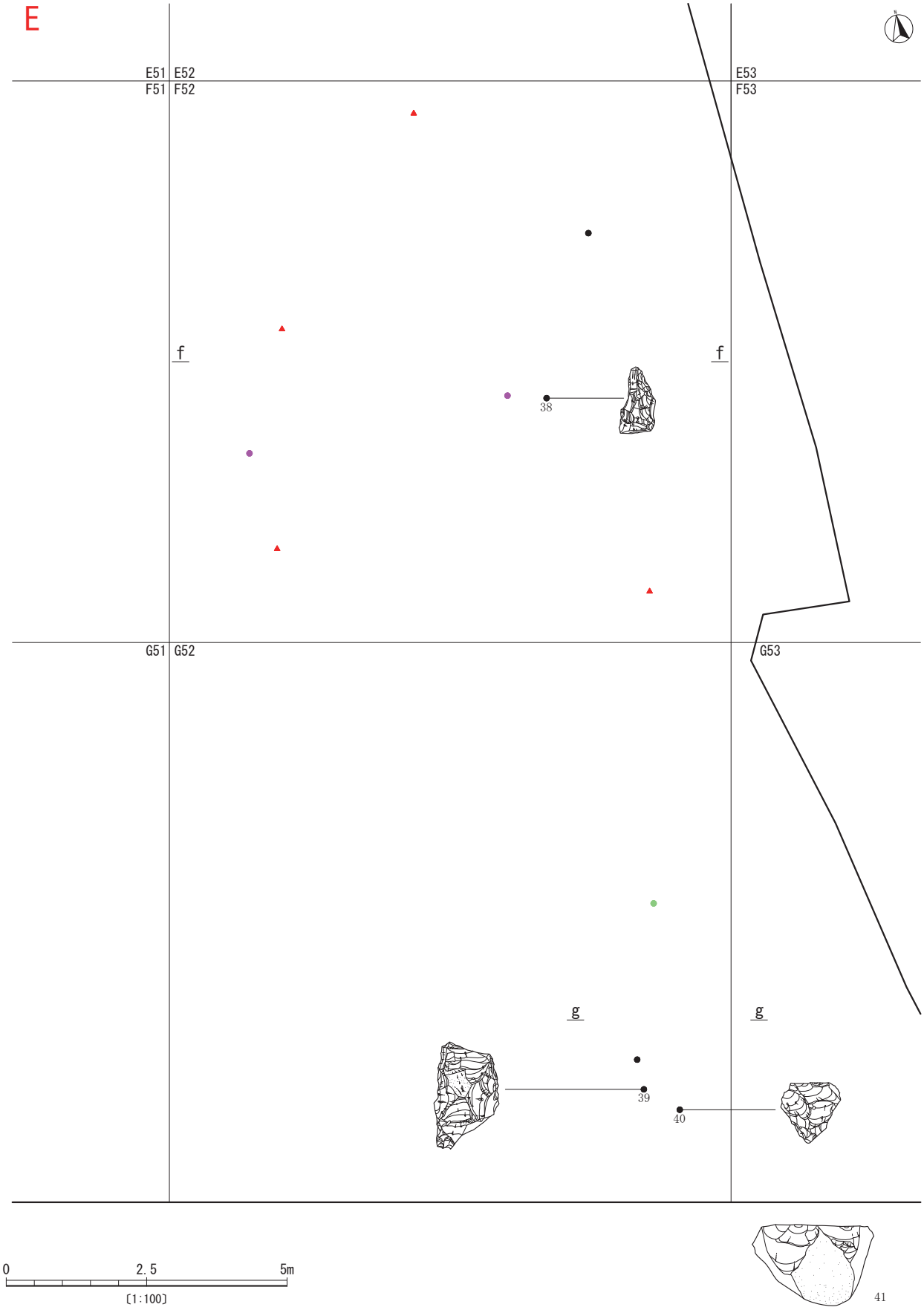
第 16 図　第１礫群，第１・２ブロック及びブロック外出土遺物分布図



第 17 図　第３ブロック及びブロック外出土遺物分布図

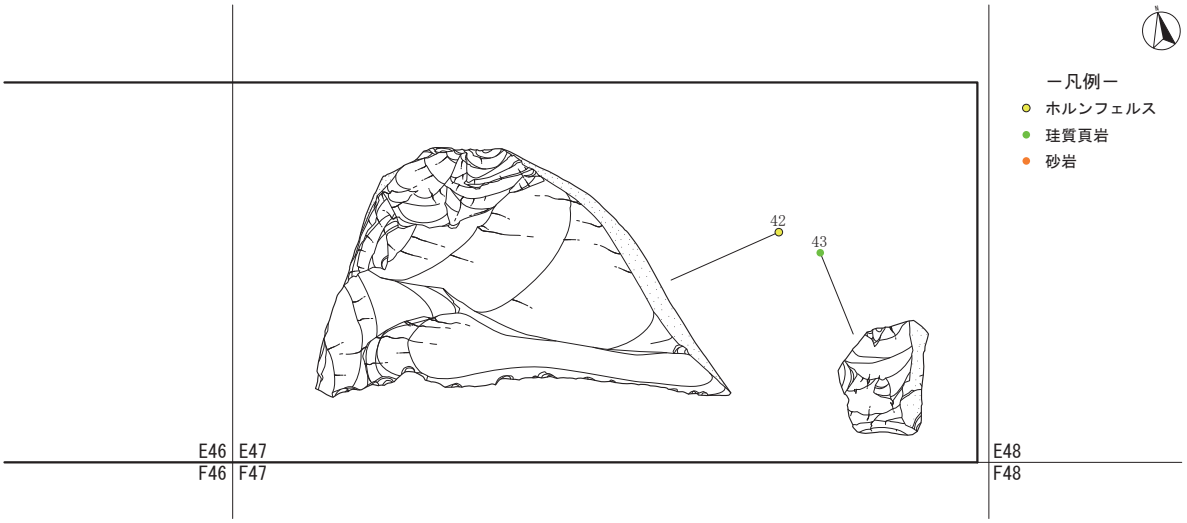


第 18 図　第１～３礫分布，第４～７ブロック及びブロック外出土遺物分布図

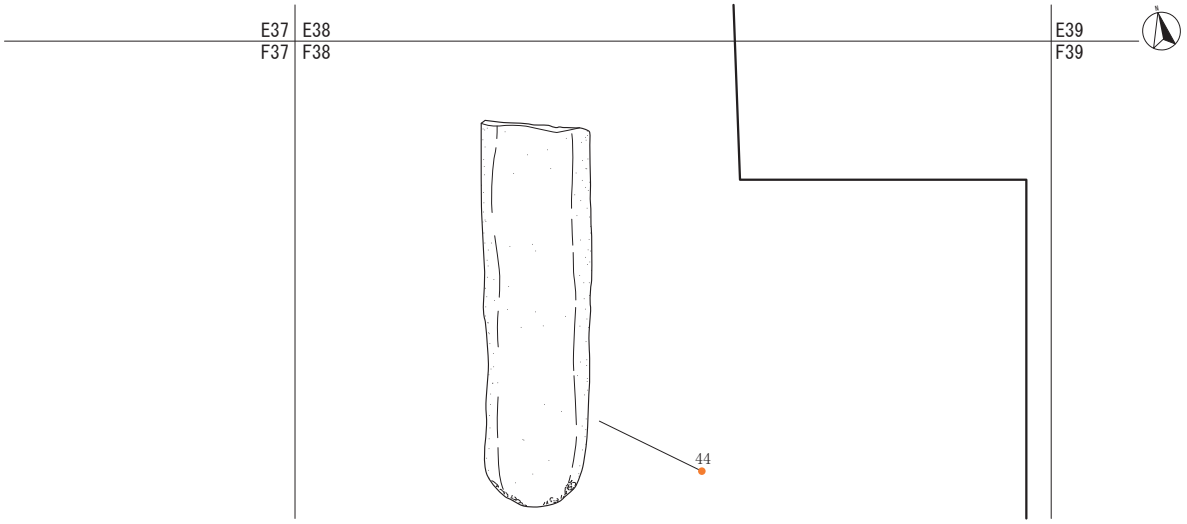


第 19 図　ブロック外Ｆ・Ｇ－52 区出土遺物分布図

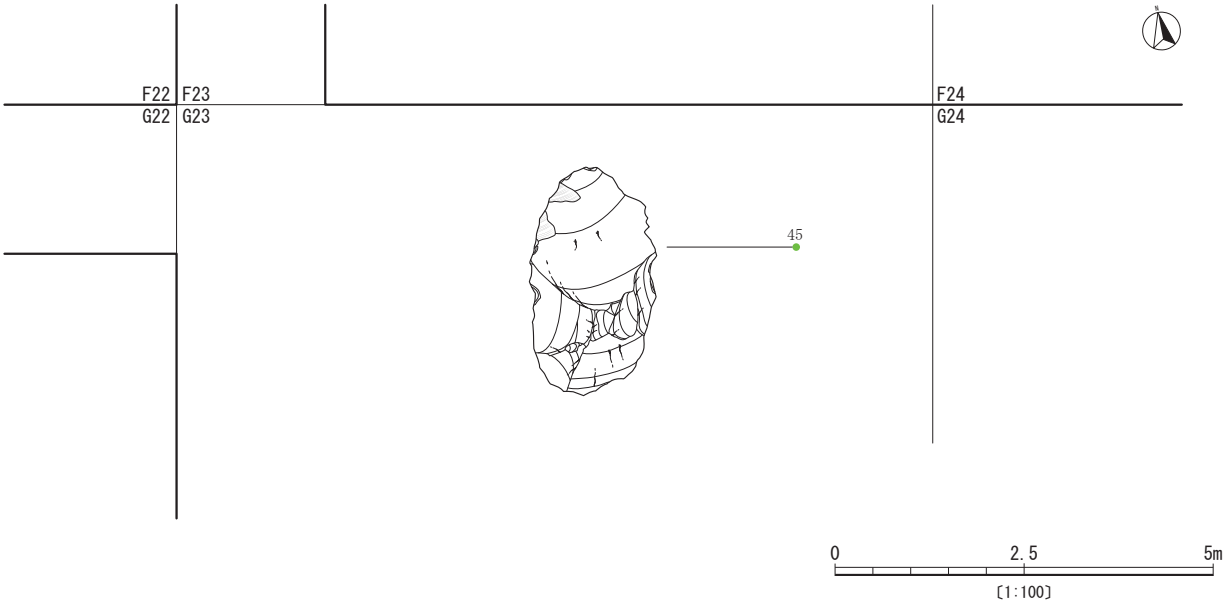
第 20 図　東部調査区出土遺物垂直分布図



第 21 図　Ｅ－47 区出土遺物分布図



第 22 図　Ｆ－38 区出土遺物分布図



第 23 図　Ｇ－23 区出土遺物分布図

４　出土石器

（１）第２ブロック及びブロック外（第 24 図１～６）

１は一側縁加工のナイフ形石器とし，角錐状石器と似通った形態を呈する。素材は寸詰まりの横長剥片とみられ，二次加工はその打面側に腹面から分厚くブランティングを施している。先端側は欠損する。石材は黒褐色の珪質頁岩であり,第６ブロック出土のナイフ形石器（30）と類似し，同一母岩である可能性がある。

２～４は日東系黒曜石製の剥片断片である。２・３は中軸に稜線をもつ比較的整ったもので，２の両側縁には微小剥離痕が顕著である。

５・６はどちらも珪質頁岩製の剥片であり，５は薄手の縦長剥片として両側縁に微小剥離痕が顕著である。

（２）ブロック外Ｃ－ 50・51 区（第 25 図７・８）

７は小型の台形石器である。素材は剥片剥離時の分離破片とみられ，基部の片側に素材面を残置し，側縁に部分的な二次加工を施す。石材は単独の珪質頁岩である。

８は整った背面構成をもつ石刃状の縦長剥片であり，両側縁に微小剥離痕を留める。石材は砂岩である。

（３）第３ブロック及びブロック外（第 26～ 28図９～ 20）

９は削器・掻器類である。ホルンフェルス製の縦長剥片を素材として，その末端側に掻器刃部にみられる急斜な二次加工を加えている。また，鋭い右側縁に生じた微小剥離痕がみられる。器体の末端側刃部は破損しており，接合破片（９b）の他,左側縁にかけて損なわれている。他に同一個体とみられる砕片１点がブロック内にある。

10 ～ 12 は剥片である。10 は浅黄色のホルンフェルス製で，直線状の下縁に微小剥離痕が生じている。11 は珪質頁岩製で，表皮全体が磨れており，縦線状の著しい擦痕を有する。縁辺の所々に微小剥離痕が生じている。12 は黒曜石製で，下端隅に微小剥離痕が生じている。

13 は二次加工剥片とした。やや珪質に欠ける頁岩製の分厚い剥片を素材として，その打面側と末端側から粗い剥離を行っており，横長ないし不定形剥片による階段状剥離痕を留める。器体は一端を欠くうえに中央から折損し，角錐状石器の未製品か，あるいは単に石核といった可能性も残る。なお,折れの方向は腹面側からである。

14 は珪質頁岩製の石核であり，小剥片を得た多面体を呈する残核である。部分的に著しく風化している。

15 は砂岩製の長楕円礫を用いた敲石であり，末端側作業面の小口左右に顕著な敲打痕が生じている。中間部の破片（15b）がみられ，更に上部を欠損する。

16 は珪質頁岩製の台形石器であり，基部が尖る長身の撥状を呈する。二次加工は幅広の素材剥片を横位に用い，両側縁を大きく剥離して粗いブランティングを施しており，腹面側にも浅く平坦な調整剥離を加えている。刃縁には微小剥離痕が生じている。

17 ～ 19 は角錐状石器である。17 は砂岩製で，甲高の稜線をもつ縦長剥片を素材に，鋸歯縁の二次加工を両側縁に行っている。おそらくは先端側の上半部を欠損する。18 は水晶製の小型の角錐状石器とみられる先端側の破片である。調整剥離が両面に及び先鋭に形作られている。19 は日東系の黒曜石製であり，粗い二次加工を両側縁に施して湾曲した不整な形状を留める。基部は素材剥片の打面を残置して腹面の打瘤を除去しており，斜行した上面については偶発剥離の可能性を残す。

20 はホルンフェルス製のナイフ形石器であり，縦長剥片の打面を残置した基部の両側縁に二次加工を施している。上部先端側の欠損に伴い，折れ面から腹面右側縁に生じた特徴的な衝撃剥離痕が認められる。

（４）第４ブロック及びブロック外（第 29・30図 21～ 25）

21 は重量感のある拳大の片刃礫器である。粗く剥離した厚みのある亜角礫に鋸歯状の刃縁が形作られている。石材は粗粒砂岩であり，石核とは判断しなかった。

22 は片方の側縁を整えた二次加工剥片である。背面右側縁の剥離はステップした素材面とみられ，腹面側の下半に調整剥離を加えている。石材は珪質に欠ける頁岩である。ナイフ形石器である可能性が残る。

23 は珪質頁岩製の不定形剥片である。階段状剥離の背面構成をもつ一方，鋭い左側縁全縁に使用痕とみられる微小剥離痕が生じている。

24 はホルンフェルス製の縦長剥片であり，先細りの石刃状を呈して整った背面構成にある。縁辺の微小剥離痕は風化によって不明瞭であるが,特にダメージはない。

25 は浅黄色に風化したホルンフェルス製の槍先形尖頭器である。粗い剥離の両面加工によって形作られ，基部に屈曲をもつ長幅比３：１の左右非対称形を呈する。調整剥離はブランティング状に急斜度に施され，先端は鈍く，ゴロっとして，分厚く不整な断面形を留める。

（５）第５ブロック及びブロック外（第 31 図 26 ～ 29）

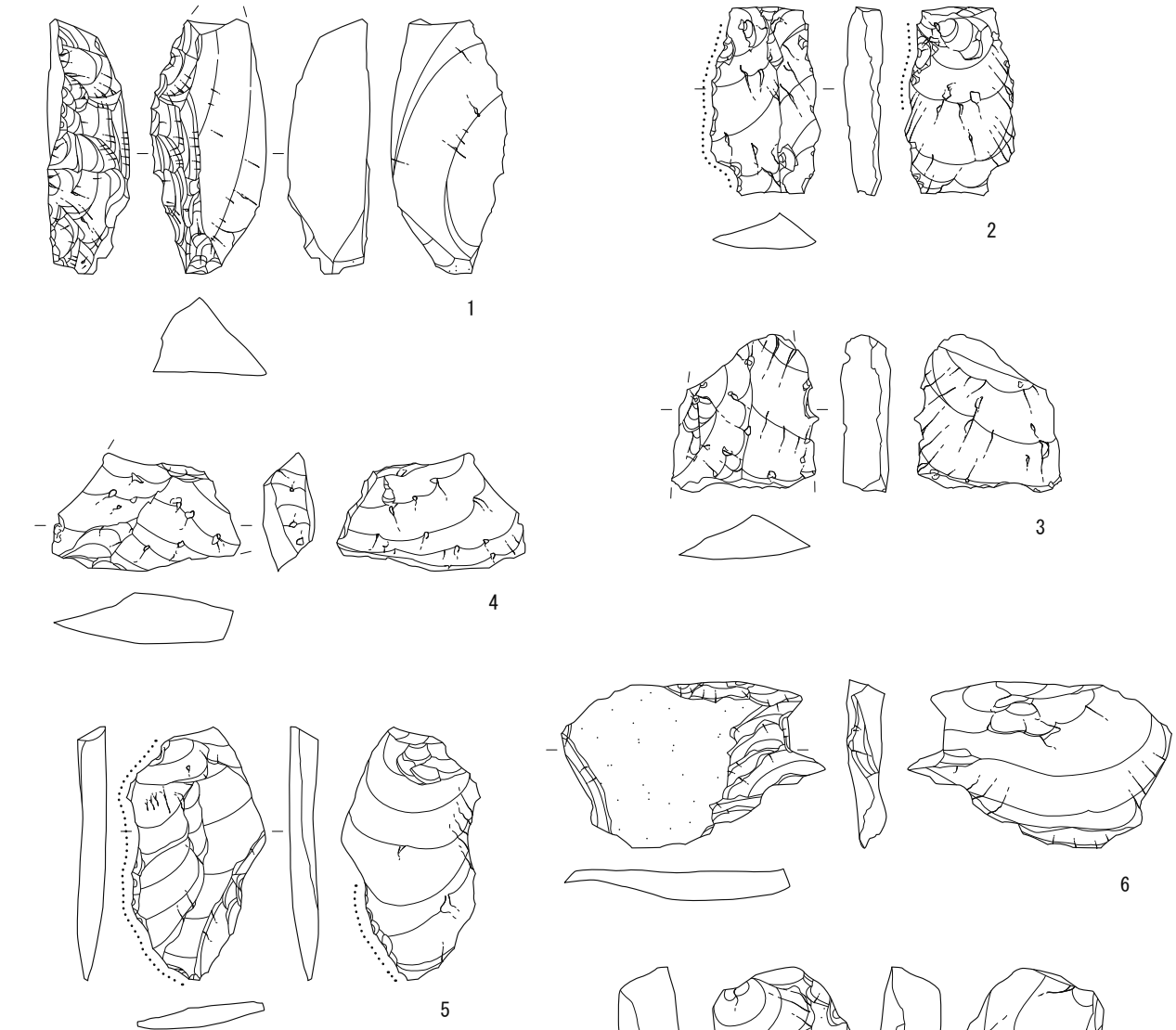
26 は上半部を欠損した二次加工剥片であり，ナイフ形石器である可能性をもつ。左側縁側が素材剥片の打面方向となり，腹面の打瘤を除去した後，背面側の両側縁に部分的な調整剥離を行っている。

27 は頁岩製の剥片であり，剥離時の分離破片とみられる。鋭い縁辺の所々に微小剥離痕が生じている。

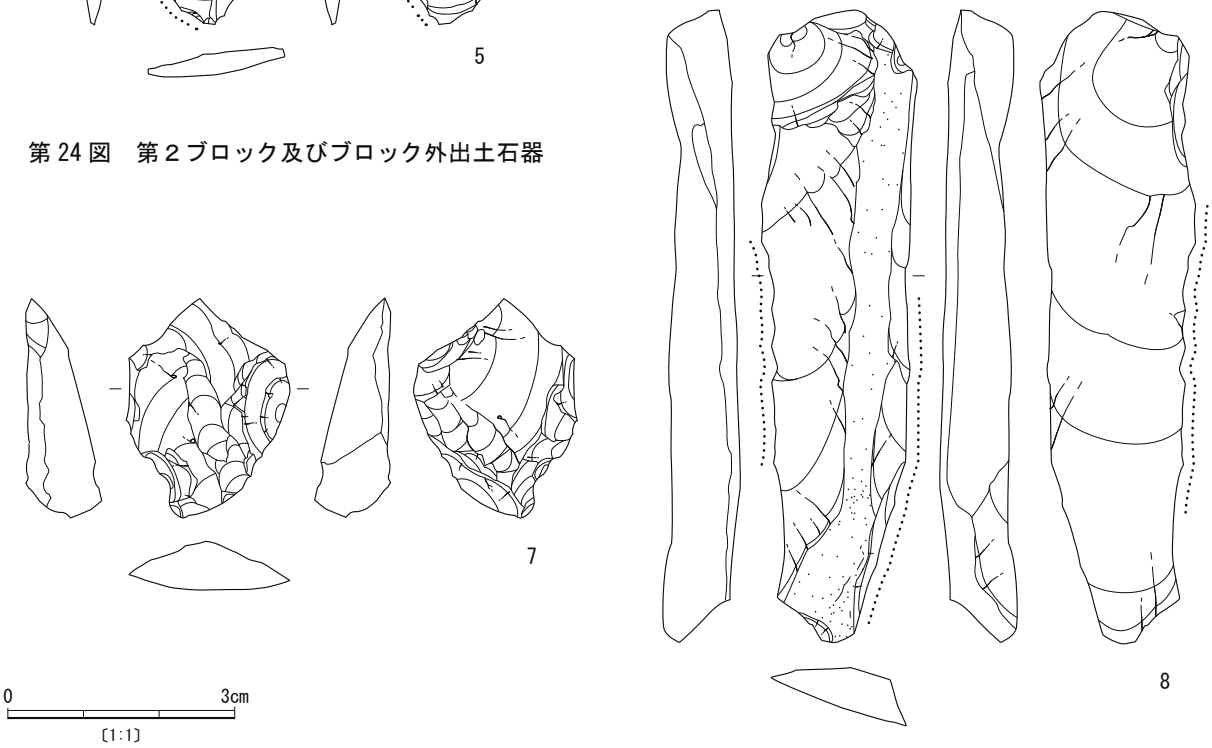
28 は三船系黒曜石製の石核であり，やや厚みのある不定形剥片から小片を剥離した残核である。

15b（第 27 図）は上下に折れた敲石の中間部であって，使用による敲打痕を全くもたない破片である。

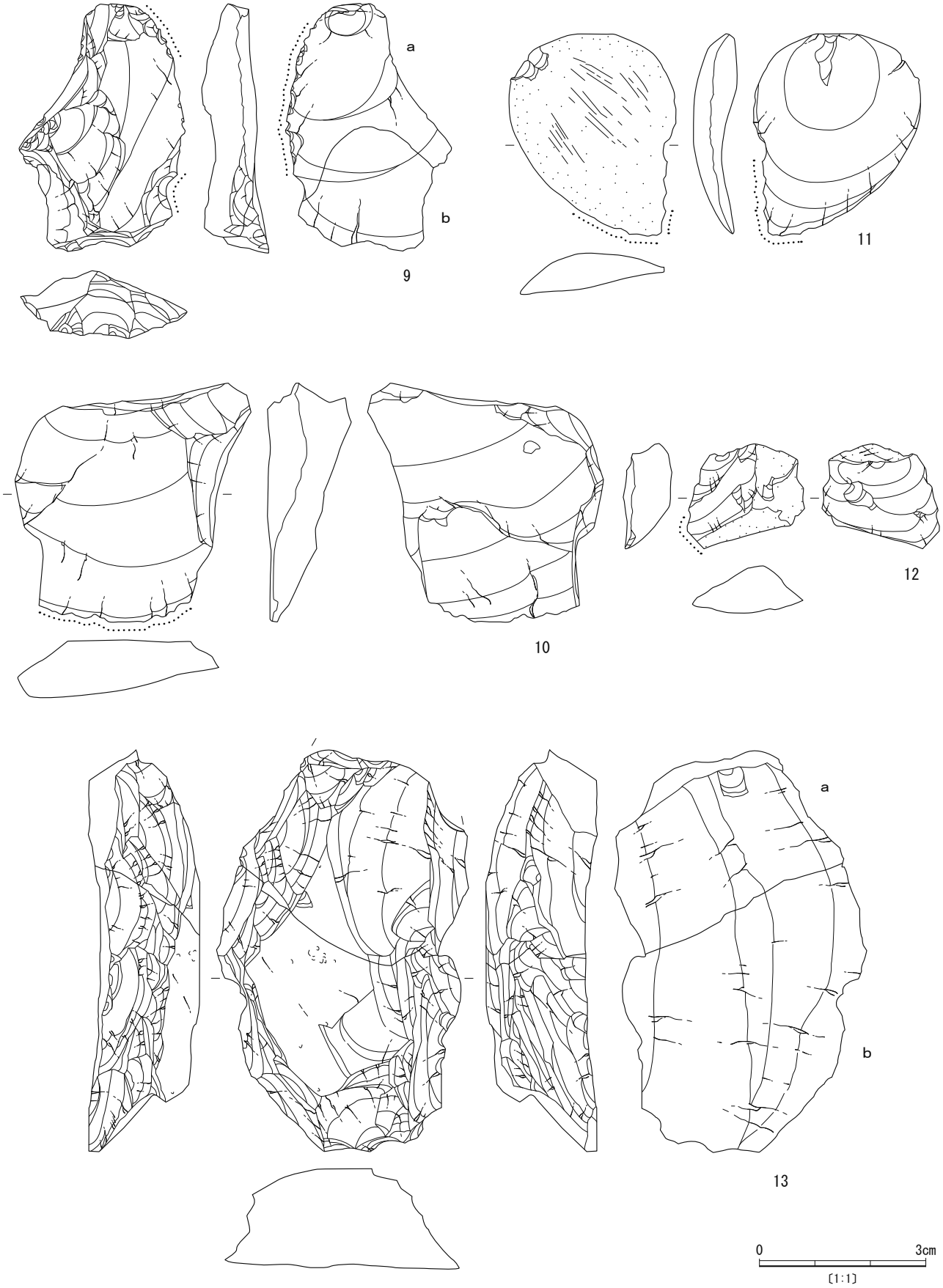
29 は日東系黒曜石製の石核であり，極限まで小片を剥離した角柱状の残核である。



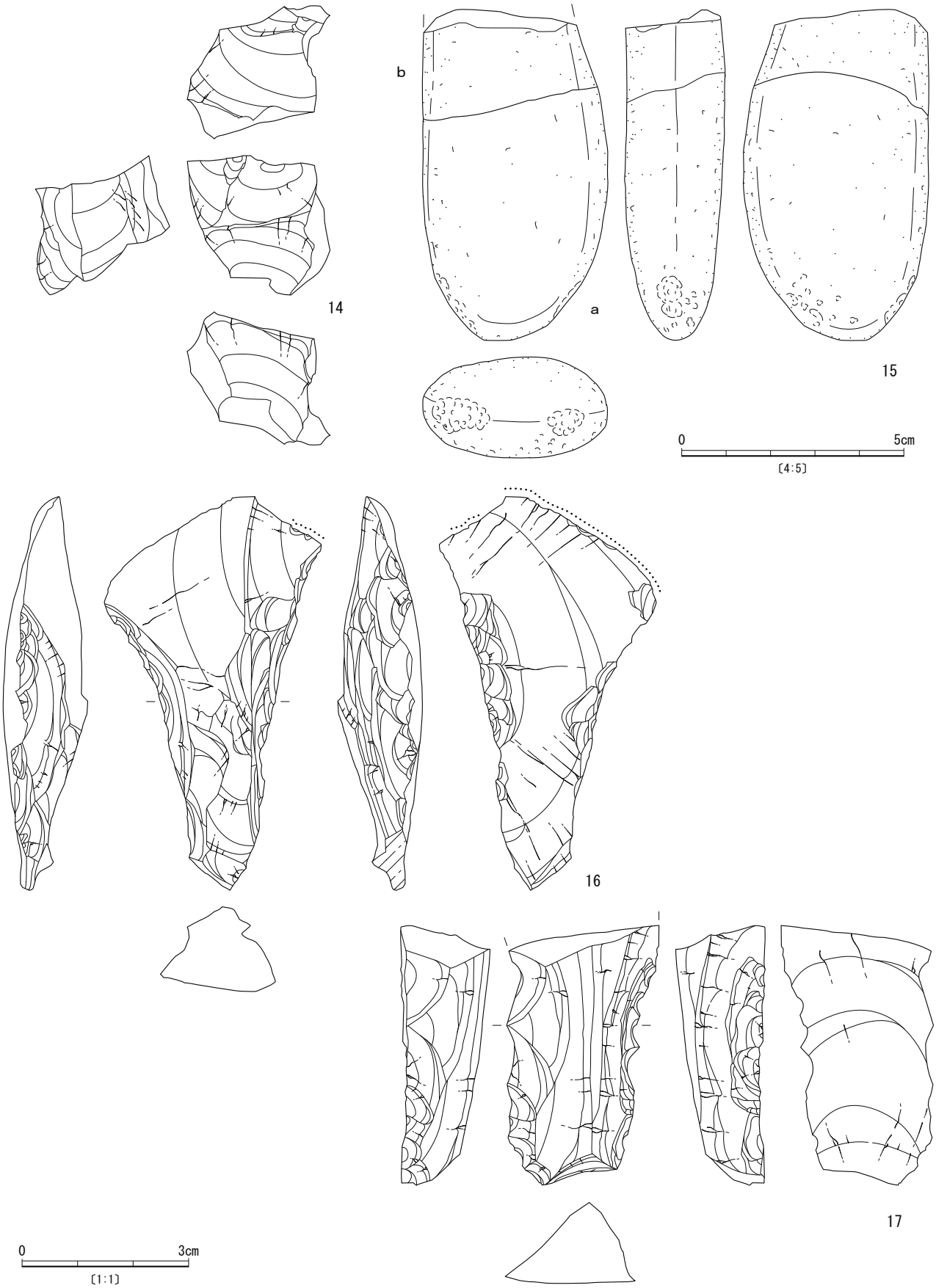
第 24 図　第２ブロック及びブロック外出土石器



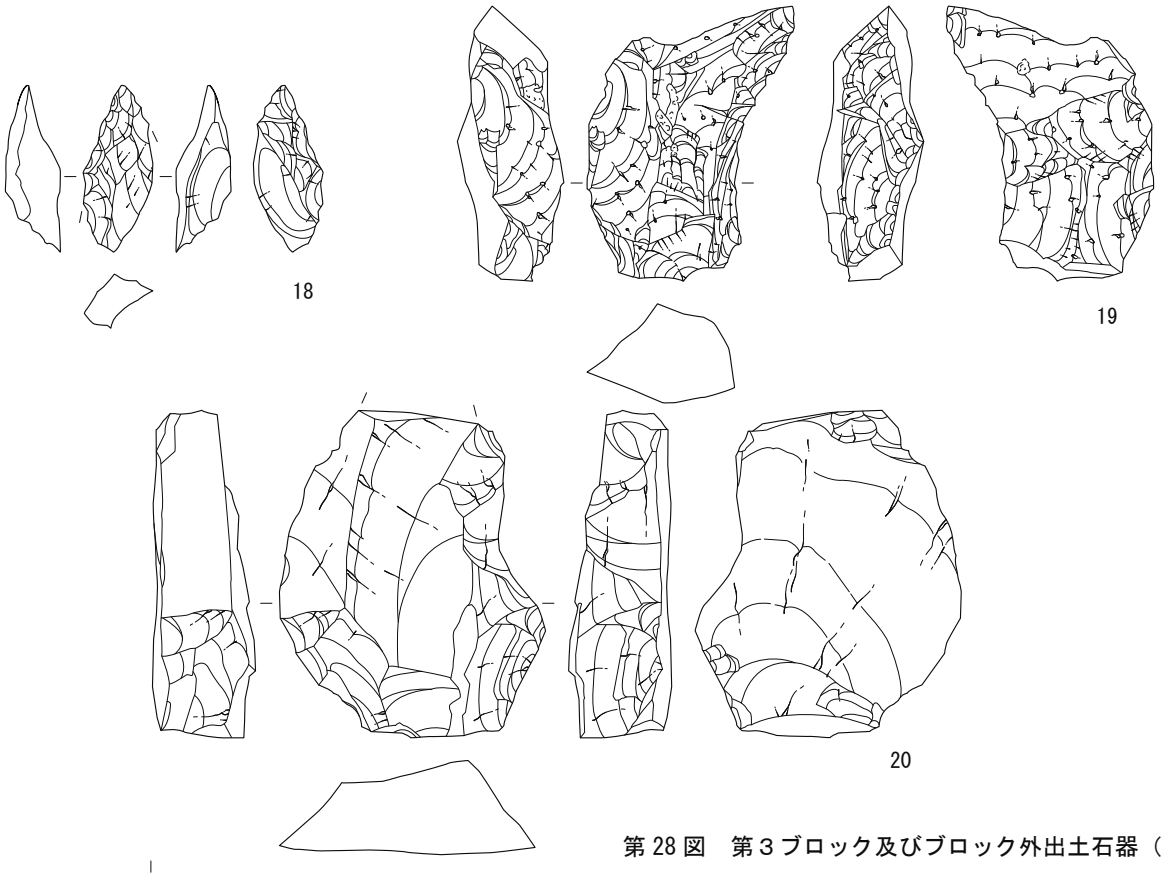
第 25 図　ブロック外Ｃ－50・51 区出土石器



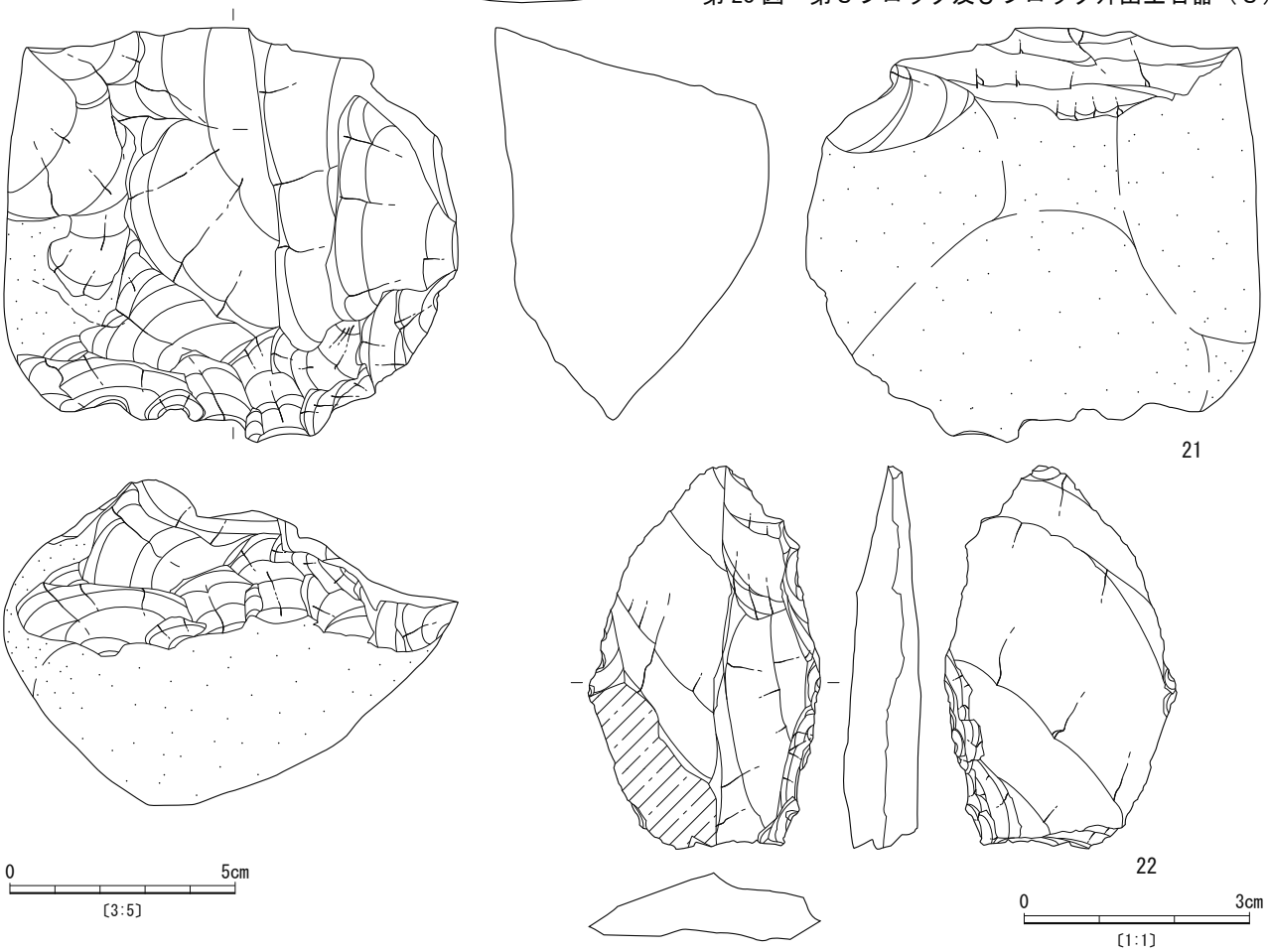
第 26 図　第３ブロック及びブロック外出土石器（１）



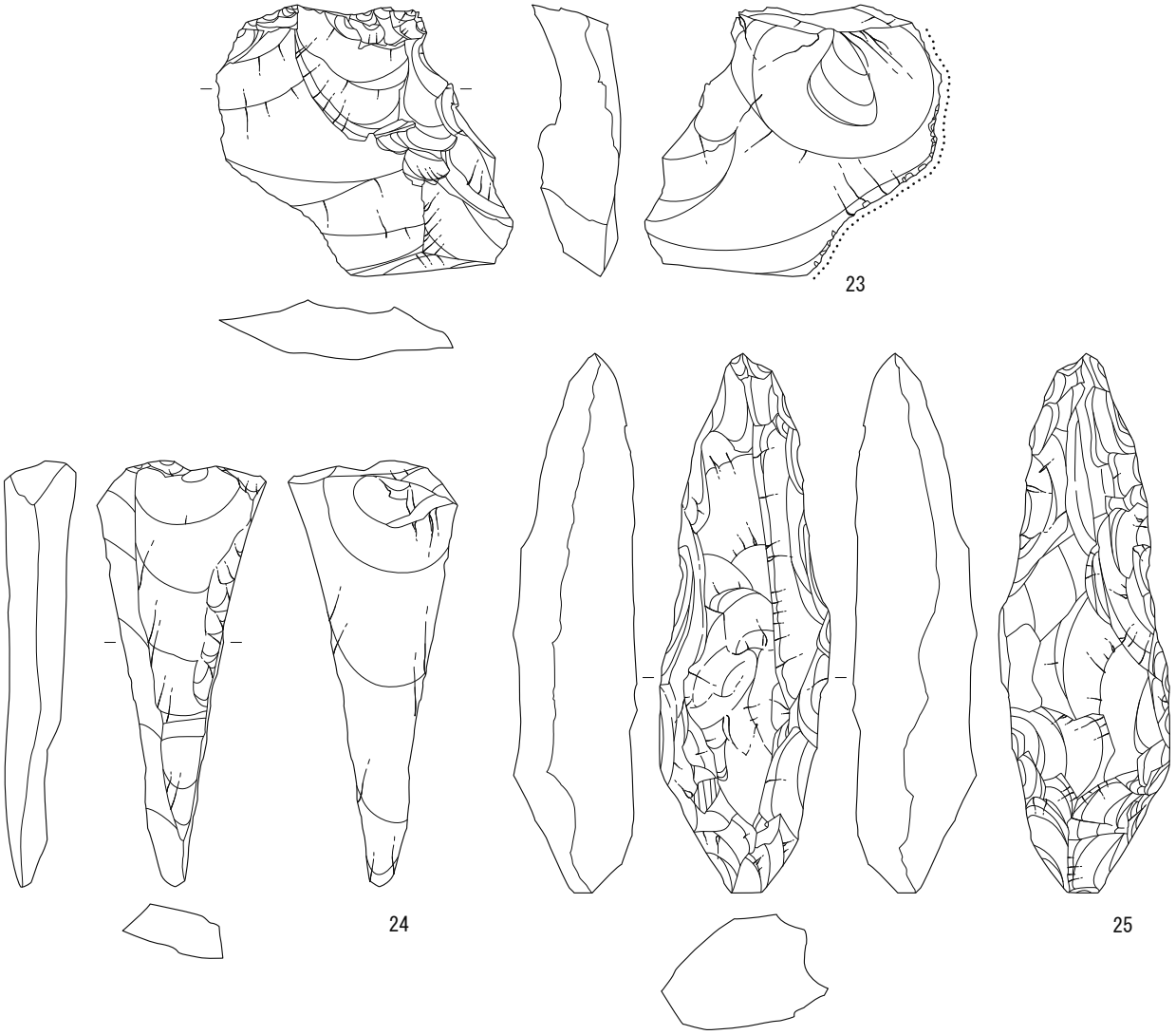
第 27 図　第３ブロック及びブロック外出土石器（２）



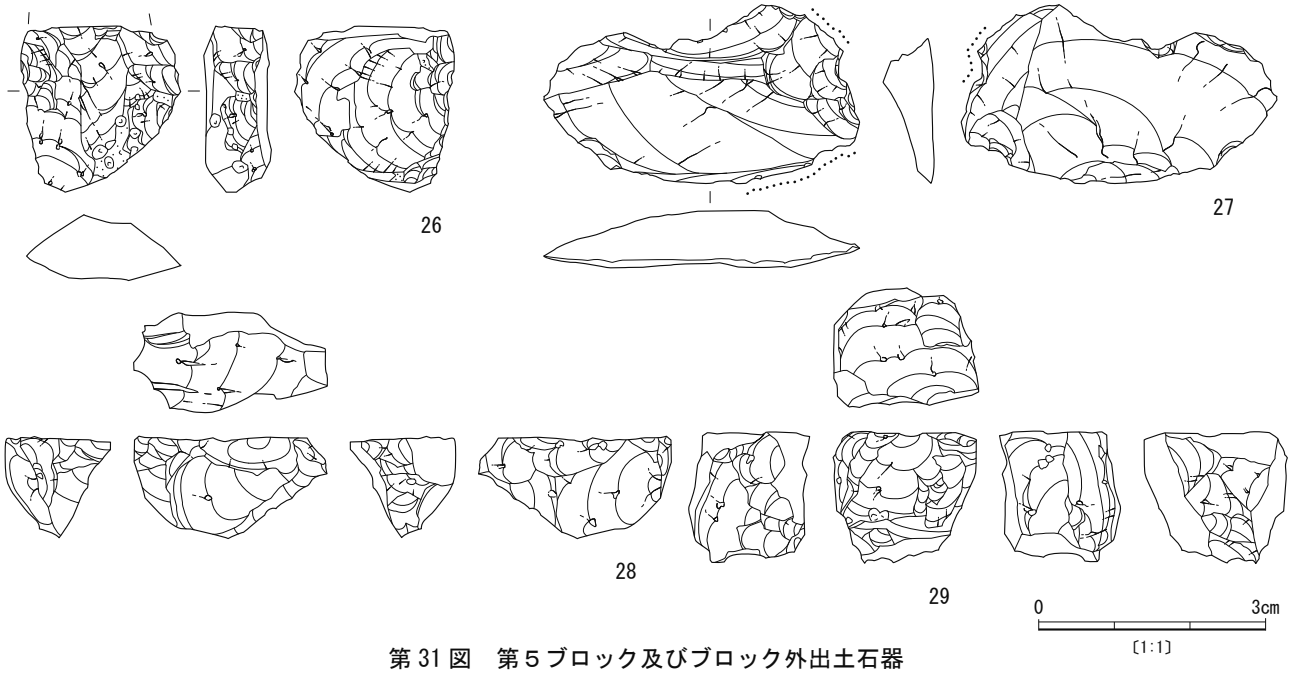
第 28 図　第３ブロック及びブロック外出土石器（３）



第 29 図　第４ブロック及びブロック外出土石器（１）



第 30 図　第４ブロック及びブロック外出土石器（２）



第 31 図　第５ブロック及びブロック外出土石器

（６）第６ブロック（第 32 図 30 ～ 32）

30 は珪質頁岩製のナイフ形石器である。素材は寸詰まりの横長剥片とみられ，二次加工はその打面側に背腹両面から分厚くブランティングを施し，反対側縁では浅い調整剥離を加えている。欠損する先端側からの剥離面がブランティング面を切っており，使用による衝撃剥離の可能性がある。

31・32 は珪質頁岩製の剥片であり，鋭い縁辺をもつ。31 は階段状剥離の背面構成をみせ，両側縁の所々に微小剥離痕が生じている。32 は滑らかな表皮をもつ。

（７）第７ブロック及びブロック外（第 33 図 33 ～ 37）

33 は日東系黒曜石製の角錐状石器である。厚みのある剥片を縦位に用いて素材としており，上半部稜線の一部にその背面を留める。二次加工は両側縁からの急斜度な調整剥離と一部稜上調整を施し，器体上半部では腹面側にも調整を加えて形作られている。なお，この腹面の剥離により先端部が若干損なわれている。また，基部は僅かに欠損している。

34・35 は頁岩製の剥片であり，35 は断片となる。

36 は砂岩製の削器・掻器類である。礫表皮をもつ分厚い不定形剥片を素材としており，二次加工はその扇状に開いた末端側を刃部として，腹面側から，弧状に鋸歯縁となる調整剥離を施している。石材の砂岩は，Ｇ－53 区出土の石核（41）と同一母岩である可能性が高い。

37 は削器・掻器類である。不定形剥片の素材縁辺一部を残して，腹面側から丸みを帯びた台形状に加工しており，その窄まった一端にやや急斜度の刃部調整を行っている。石材は単独の珪質頁岩である。

（８）ブロック外Ｆ・Ｇ－ 52 区（第 34 図 38 ～ 41）

38・39 は三船系黒曜石製の角錐状石器である。38 は小型品とみられる欠損した先端側上半部であり，不整形に雑な加工がみられる。39 は厚みのある素材剥片の打面と末端側を断ち切るように両側縁として，背面側に粗い急斜度剥離の二次加工を施している。先端側と基部を欠損するが，偶発剥離の可能性がある。クラックが目立つ石材石質である。

40 は三船系黒曜石製の石核であり，臨機的に極限まで小片を剥離した残核である。

41 は砂岩製の石核であり，表皮と節理面を留める分割礫の残核である。打面転移を行っての不定形剥片数枚の剥離面がみられるが，剥片剥離作業はあまり進行しておらず，石核原形ともいえる。

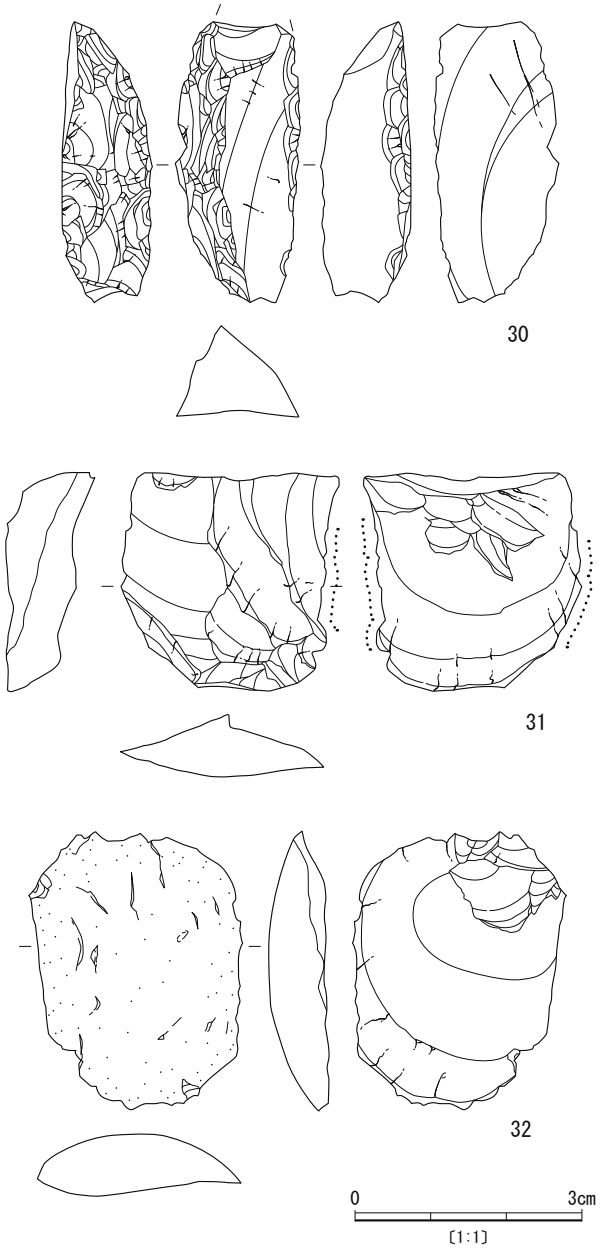
（９）Ｅ－ 47, Ｆ－ 38, Ｇ－ 23区（第 35・36図 42～ 45）

42 はホルンフェルス製の剥片である。原礫面から割り取られた大振りな不定形剥片であり，二次加工はなく，鋭い直線状下縁の背面側におそらくは使用痕とみられる顕著な微小剥離痕が生じている。

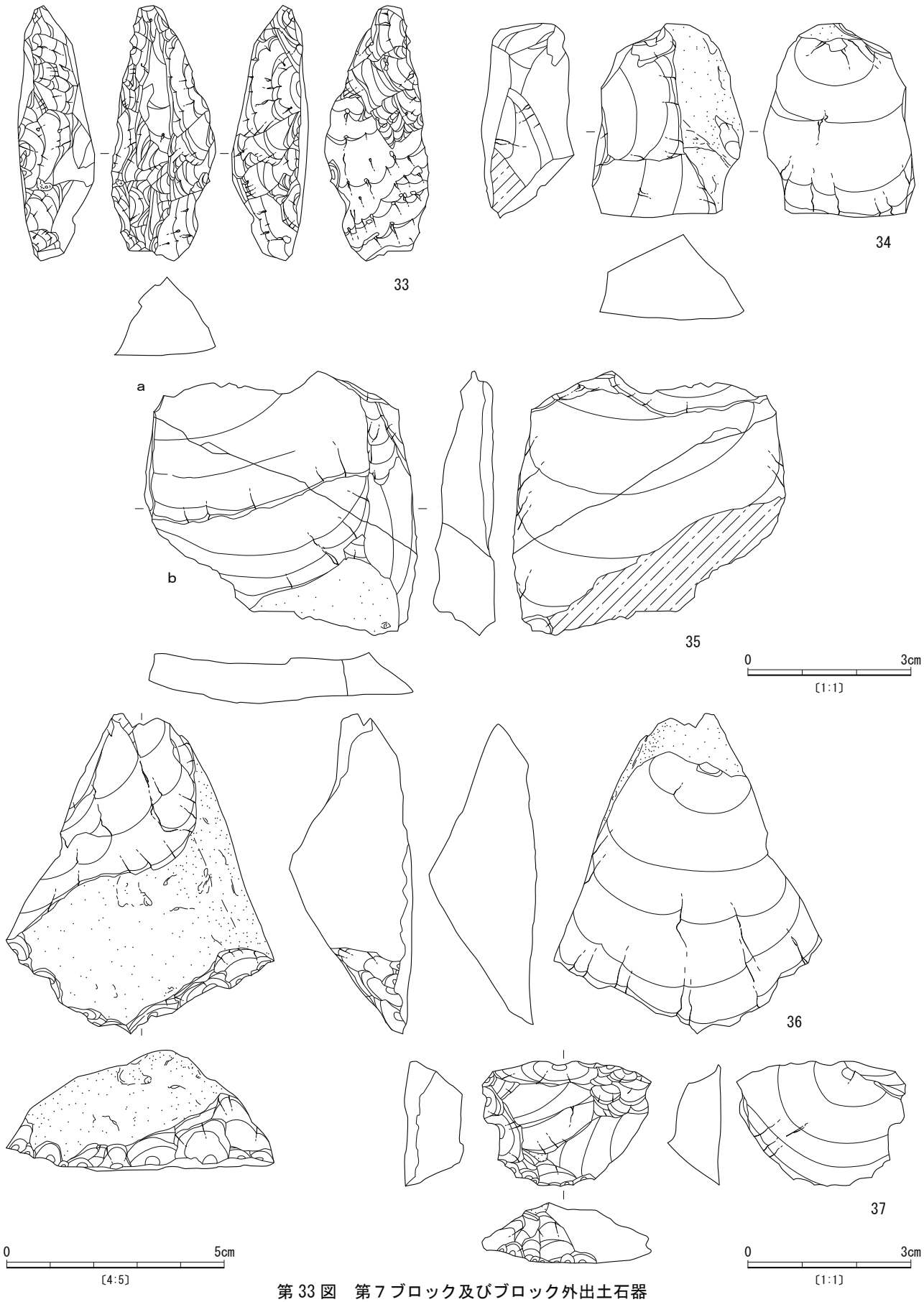
43 は変成著しい珪質頁岩製の剥片で，両側縁の一部に微小剥離痕が生じている。

44 は砂岩製の敲石である。非常に整った扁平の棒状礫を用いており，末端側作業面の小口左右に顕著な敲打痕が生じている。器体上部を欠損するものである。

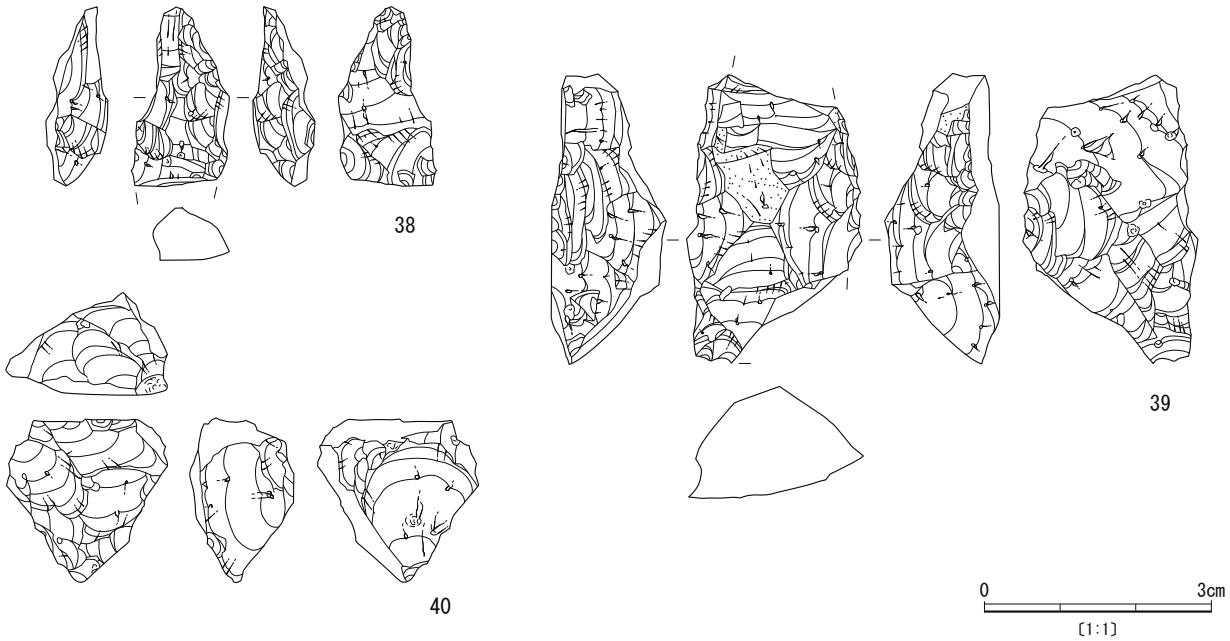
45 は珪質頁岩製の削器・掻器類であり，薄く丸みを帯びた篦状の形態を呈する。二次加工は，比較的大きな剥離面によって構成された剥片を素材として，主に腹面側の左側縁に粗い整形剥離を施しており，右側縁には浅い調整剥離を加えている。背面側左縁辺の上部２箇所に，浅く抉れた特異な擦痕が生じている。

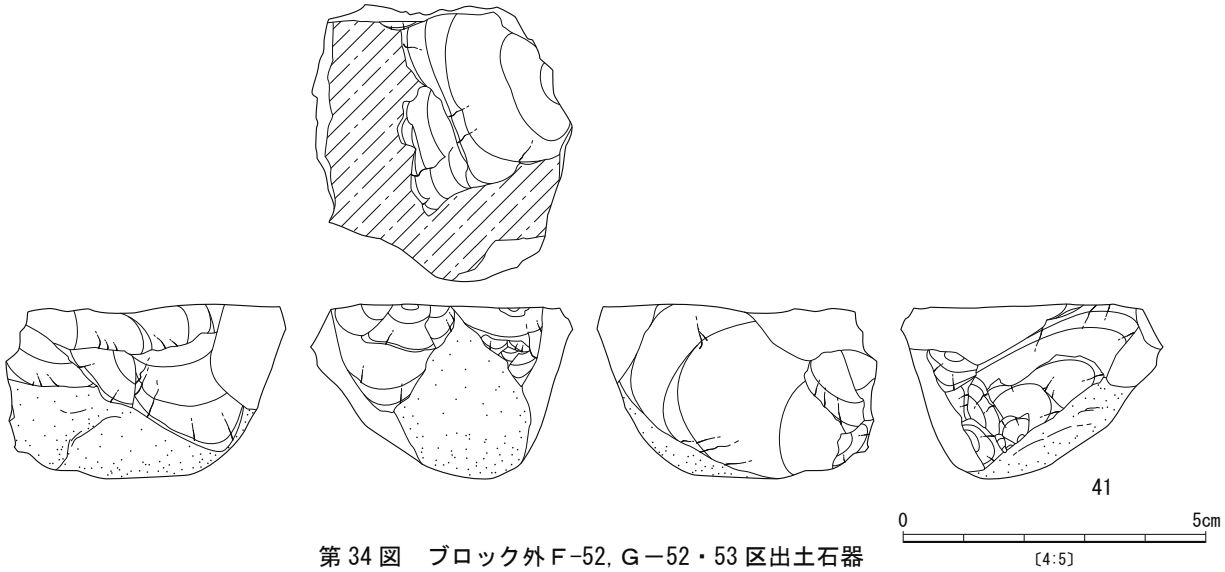


第 32 図　第６ブロック出土石器

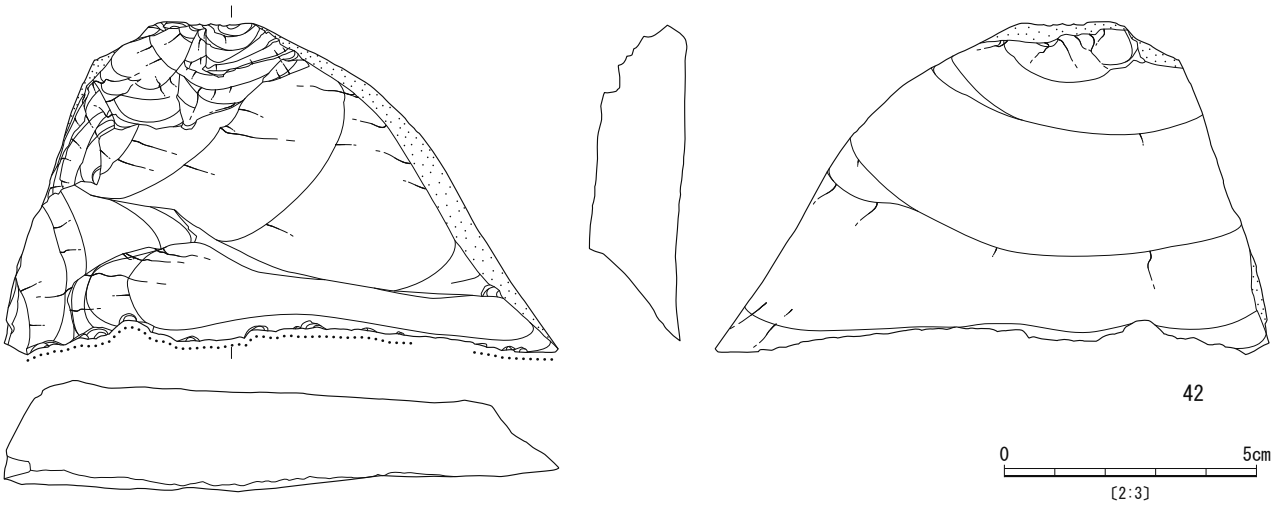


第 33 図　第 7 ブロック及びブロック外出土石器

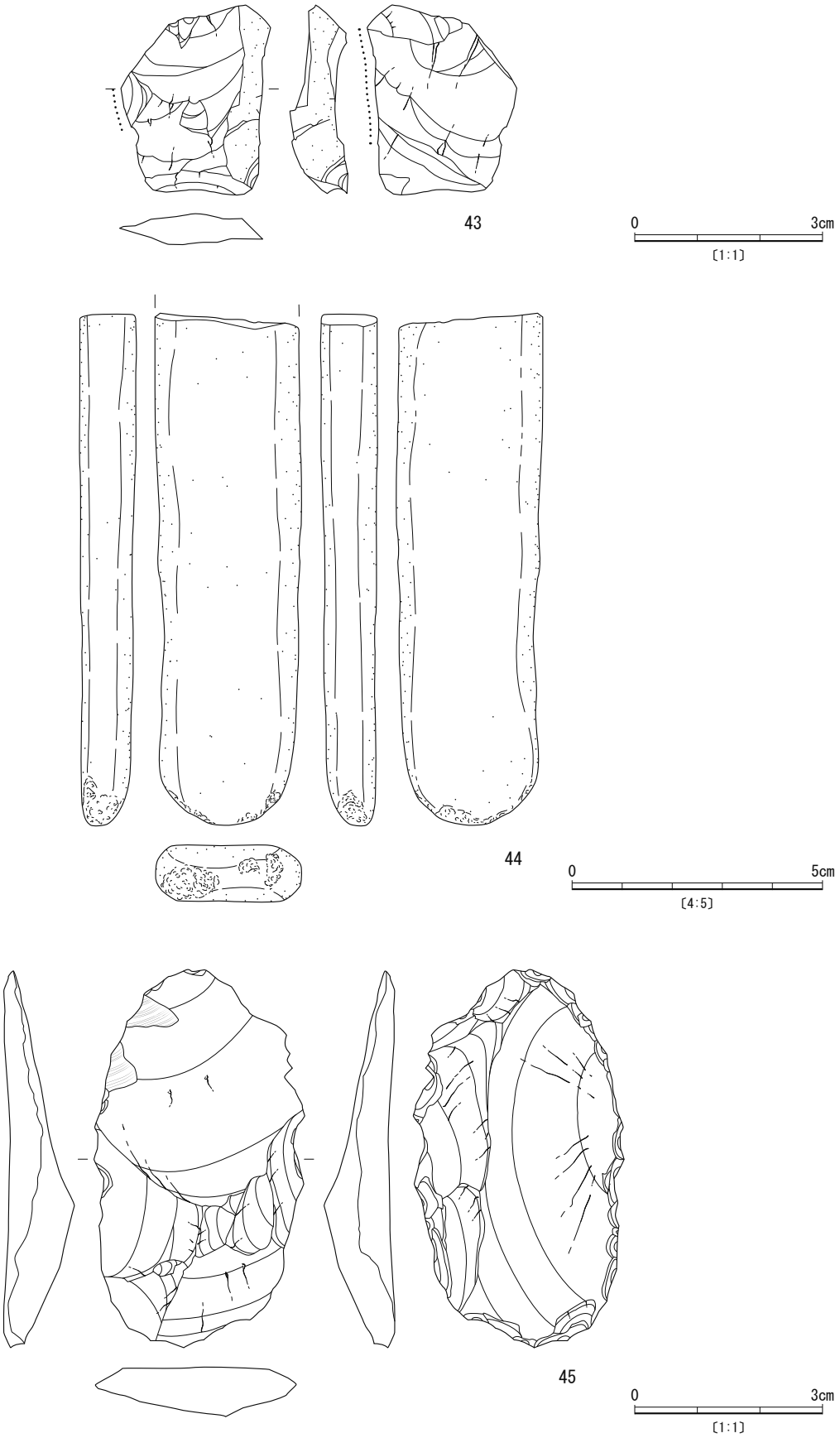




第 34 図　ブロック外Ｆ-52, Ｇ－52・53 区出土石器



第 35 図　Ｅ－47 区出土石器



第 36 図　E－47, F－38, G－23 区出土石器

第３表　旧石器時代出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
24	1	ナイフ形石器	2ブロック	X	15794	(3.65)	1.65	1.2	5.7	珪質頁岩	
24	2	微小剥離痕剥片	2ブロック	X	15671	2.7	1.6	0.6	2.0	黒曜石	
24	3	剥片	2ブロック	X	15815	(2.2)	(2.1)	(0.7)	2.9	黒曜石	
24	4	剥片	2ブロック	X	15739	(1.7)	(2.7)	0.7	2.7	黒曜石	
24	5	微小剥離痕剥片	C52	Ⅸc	8182	3.6	1.9	0.4	2.4	珪質頁岩	
24	6	剥片	C52	X	15874	2.4	3.7	0.5	3.4	珪質頁岩	
25	7	台形石器	C50	X	15738	2.9	2.2	1.0	4.2	珪質頁岩	
25	8	微小剥離痕剥片	C51	X	15734	8.3	2.0	0.9	13.5	砂岩	
26	9a	削器・掻器類	3ブロック	X	15686	(4.4)	3.0	0.7	9.3	ホルンフェルス	9bと剥離面接合
26	9b	削器・掻器類	3ブロック	X	15685						
26	10	微小剥離痕剥片	3ブロック	X	15694	4.3	4.2	1.5	21.7	ホルンフェルス	
26	11	微小剥離痕剥片	3ブロック	X	15687	3.6	3.0	0.8	8.3	珪質頁岩	
26	12	微小剥離痕剥片	3ブロック	X	15693	1.9	2.1	0.8	2.4	黒曜石	
26	13a	二次加工剥片	3ブロック	X	15691	(7.25)	4.55	2.0	65.1	頁岩	13bと折れ面接合
26	13b	二次加工剥片	3ブロック	X	15692						
27	14	石核	3ブロック	X	15690	2.5	2.6	2.4	8.6	珪質頁岩	
27	15a	敲石	3ブロック	X	15695	7.3	4.2	2.2	94.4	砂岩	15bと折れ面接合
27	15b	敲石	5ブロック	X	15756						
27	16	台形石器	E52	X	15704	7.1	3.9	1.5	24.8	珪質頁岩	
27	17	角錐状石器	E52	X	15703	(4.7)	(2.7)	(1.6)	17.9	砂岩	
28	18	角錐状石器	E52	X	15696	(2.2)	(0.9)	(0.7)	0.9	水晶	
28	19	角錐状石器	D51	X	15732	(3.65)	2.7	1.4	10.9	黒曜石	
28	20	ナイフ形石器	D51	X	15731	(4.35)	3.5	1.35	21.2	ホルンフェルス	
29	21	礫器	4ブロック	X	15757	9.2	10.1	6.1	638.0	砂岩	
29	22	二次加工剥片	4ブロック	X	15758	5.1	3.1	0.9	14.2	頁岩	
30	23	微小剥離痕剥片	4ブロック	X	15780	3.8	4.1	1.2	12.6	珪質頁岩	
30	24	剥片	4ブロック	X	15777	5.9	2.4	1.0	7.1	ホルンフェルス	
30	25	槍先形尖頭器	F50	X	15852	7.5	2.4	1.7	30.2	ホルンフェルス	
31	26	二次加工剥片	5ブロック	X	15846	(2.2)	2.1	0.9	4.1	黒曜石	
31	27	微小剥離痕剥片	5ブロック	X	15858	2.4	4.2	0.8	4.7	頁岩	
31	28	石核	5ブロック	X	15786	1.3	2.5	1.3	3.4	黒曜石	
31	29	石核	E50	X	15855	1.7	1.9	1.6	5.3	黒曜石	
32	30	ナイフ形石器	6ブロック	X	15724	(3.7)	1.65	1.2	6.8	珪質頁岩	
32	31	微小剥離痕剥片	6ブロック	X	15726	2.9	2.8	1.1	7.7	珪質頁岩	
32	32	剥片	6ブロック	X	15725	3.7	2.8	0.8	8.3	珪質頁岩	
33	33	角錐状石器	7ブロック	X	15718	4.7	1.95	1.4	9.8	黒曜石	
33	34	剥片	7ブロック	X	15712	3.6	2.8	1.6	15.9	頁岩	
33	35a	剥片	7ブロック	X	15819	(4.8)	5.0	1.1	22.8	頁岩	35bと折れ面接合
33	35b	剥片	7ブロック	X	15714						
33	36	削器・掻器類	7ブロック	X	15713	7.3	6.1	2.7	88.2	砂岩	
33	37	削器・掻器類	G50	X	15636	2.3	3.1	1.1	6.6	珪質頁岩	
34	38	角錐状石器	F52	X	15699	(2.35)	1.35	(0.8)	1.9	黒曜石	
34	39	角錐状石器	G52	X	15635	(3.8)	2.3	1.5	12.1	黒曜石	
34	40	石核	G52	X	15626	2.1	2.2	1.3	4.1	黒曜石	
34	41	石核	G53	X	－	2.8	4.3	4.6	63.9	砂岩	X層一括
35	42	微小剥離痕剥片	E47	X	17121	6.6	11.1	1.9	147.3	ホルンフェルス	
36	43	微小剥離痕剥片	E47	X	17120	3.0	2.4	0.9	4.7	珪質頁岩	
36	44	敲石	F38	X	17155	(10.2)	2.8	1.1	61.1	砂岩	
36	45	削器・掻器類	G23	X	31221	6.0	3.4	1.2	16.9	珪質頁岩	

第２節　縄文時代早期の調査

１　調査の概要

縄文時代早期の調査は，遺跡の調査範囲全域で行った。包含層は，Ⅳａ層・Ⅳｂ層のアカホヤ火山灰（鬼界カルデラ起源）とⅦ層の薩摩火山灰（Ｐ 14：桜島起源）に挟まれたＶａ層とＶｂ層・Ⅵ層である。

縄文時代早期の調査は，Ⅳａ層・Ⅳｂ層を重機掘削により除去した後，包含層であるＶａ層・Ｖｂ層・Ⅵ層上面を人力により，鋤簾等で徐々に掘り下げた。なお，Ⅵ層は，遺物の出土が止まった後に遺構の有無の確認を行ったあと，重機によりⅦ層上面まで除去した。その後，Ⅶ層上面にて再度遺構等の有無の確認を行った。Ⅵ層中・Ⅶ層上面では，遺構・遺物は確認できなかった。

当該時期の遺構は，土器埋設遺構と集石である。

遺物は，縄文時代早期前葉～後葉の土器とともに，石器は石鏃，石皿，台石，敲石，磨石，石匙等が出土し，狩猟具，調理具が目立つ。各遺物は量的に少なく，主に集石の周辺に散布した状況で検出された。各遺構・出土遺物は各項目で詳しく記載する。

２　遺構

（１）土器埋設遺構（第 37 図）

第２地点で検出された縄文時代早期の土坑は１基で，土器が埋設されていたため，土器埋設遺構（ＳＫ１）として調査を行った。

土器埋設遺構はＨ－ 21 区，Ｖｂ層で土器の口縁部を検出し，その後平面･断面ともに遺構のプランを確認し，土器埋設遺構と判断した。

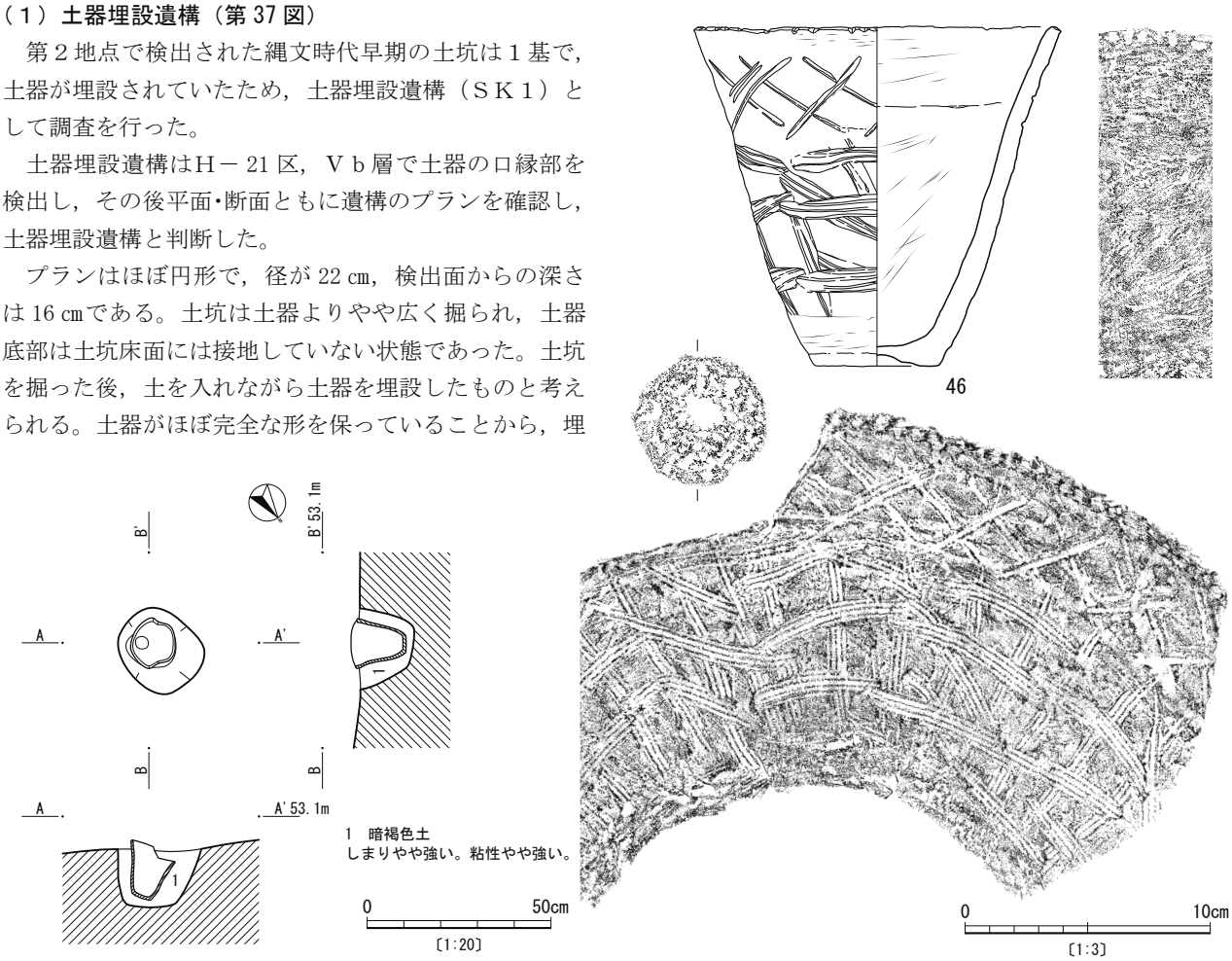
プランはほぼ円形で，径が 22 ㎝，検出面からの深さは 16 ㎝である。土坑は土器よりやや広く掘られ，土器底部は土坑床面には接地していない状態であった。土坑を掘った後，土を入れながら土器を埋設したものと考えられる。土器がほぼ完全な形を保っていることから，埋設時に完全に土で覆ったか，またはごく一部が地表面に露出した状態で埋設したものと思われる。

埋土は暗褐色土の単一層で，検出面のＶｂ層に比べてしまりが弱く，粘性はやや強い。土器内埋土も同様であった。土器内埋土についてはフローテーションを行ったが，特に遺物は検出されなかった。

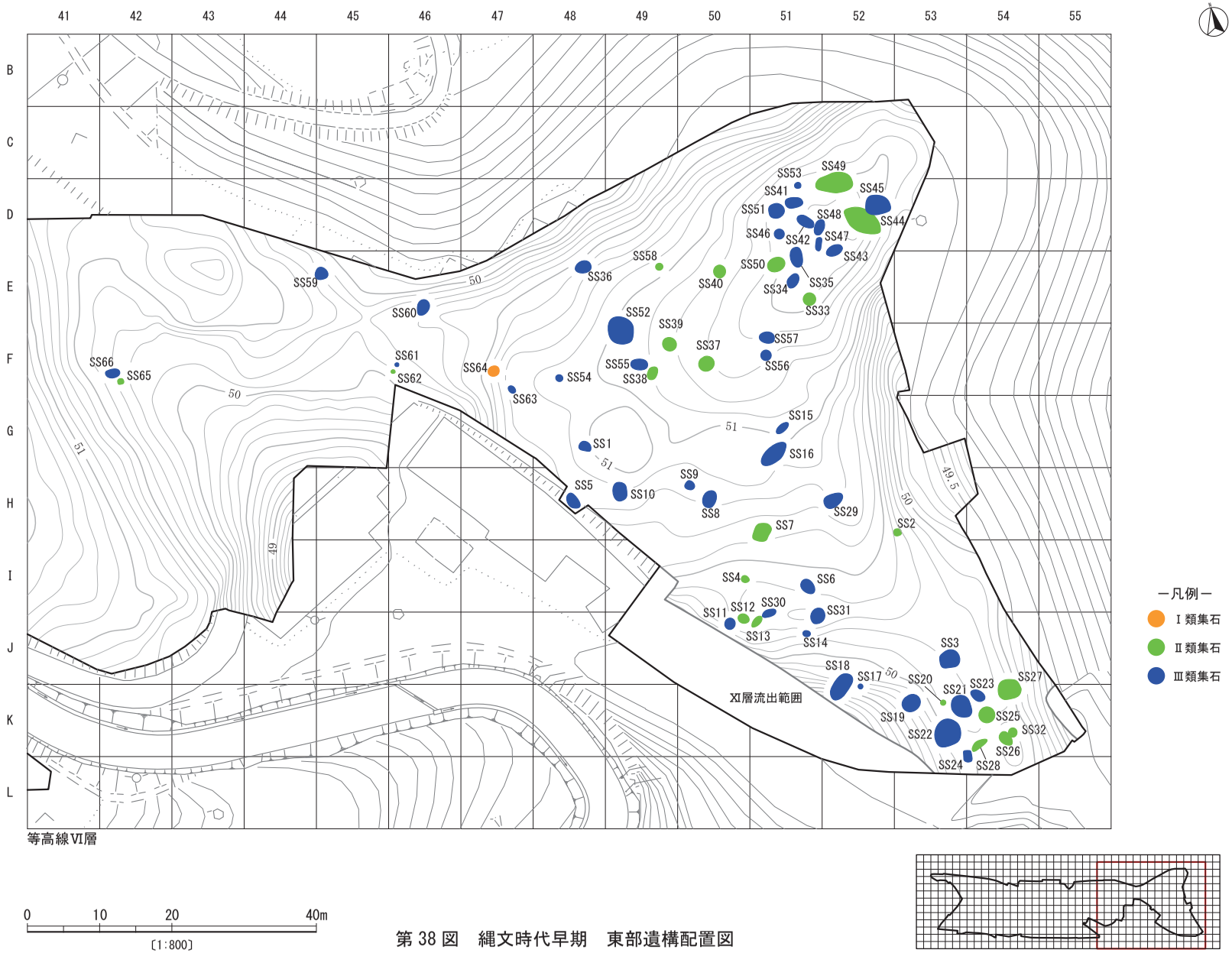
検出地点はすぐ西側が崖になっており，当時もおおよそ同じ地形だったと思われる。

土坑内に埋設されていた土器は，塞ノ神式土器に比定される土器１点である。46 は，口縁部から頸部にかけて一部欠損している。高さ 13.8㎝の小型の深鉢で，口縁部は緩やかに外反する。口唇部には刻目が施される。文様は，口縁に貝殻腹縁によると思われる沈線で斜め格子状の文様，胴部には同じく貝殻による格子状の条痕が明瞭に見られる。調整は，内面・底部から胴部にかけては斜位のナデ，口縁は横位のナデである。

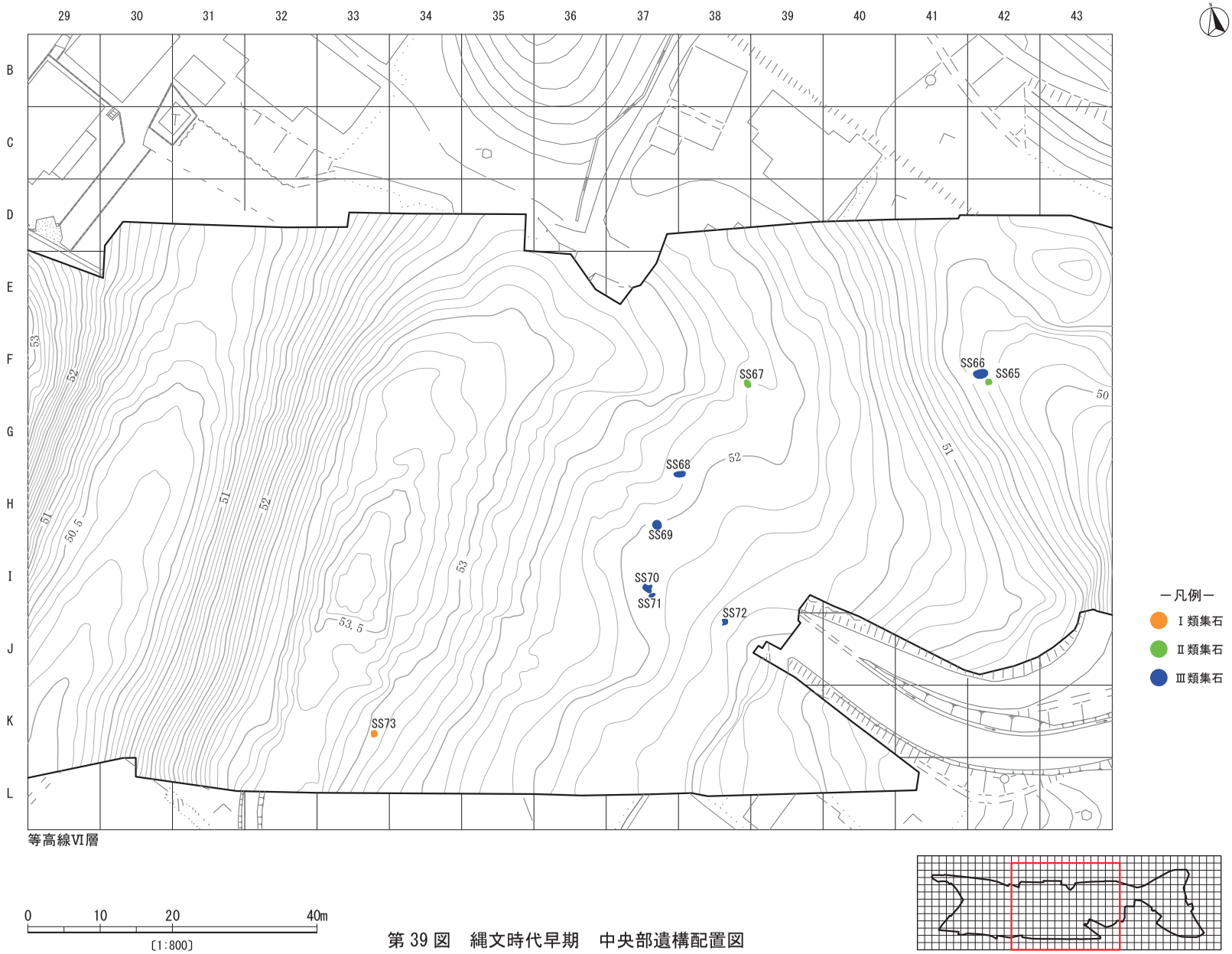
遺構の帰属時期は，埋設された土器から縄文時代早期後葉と思われる。



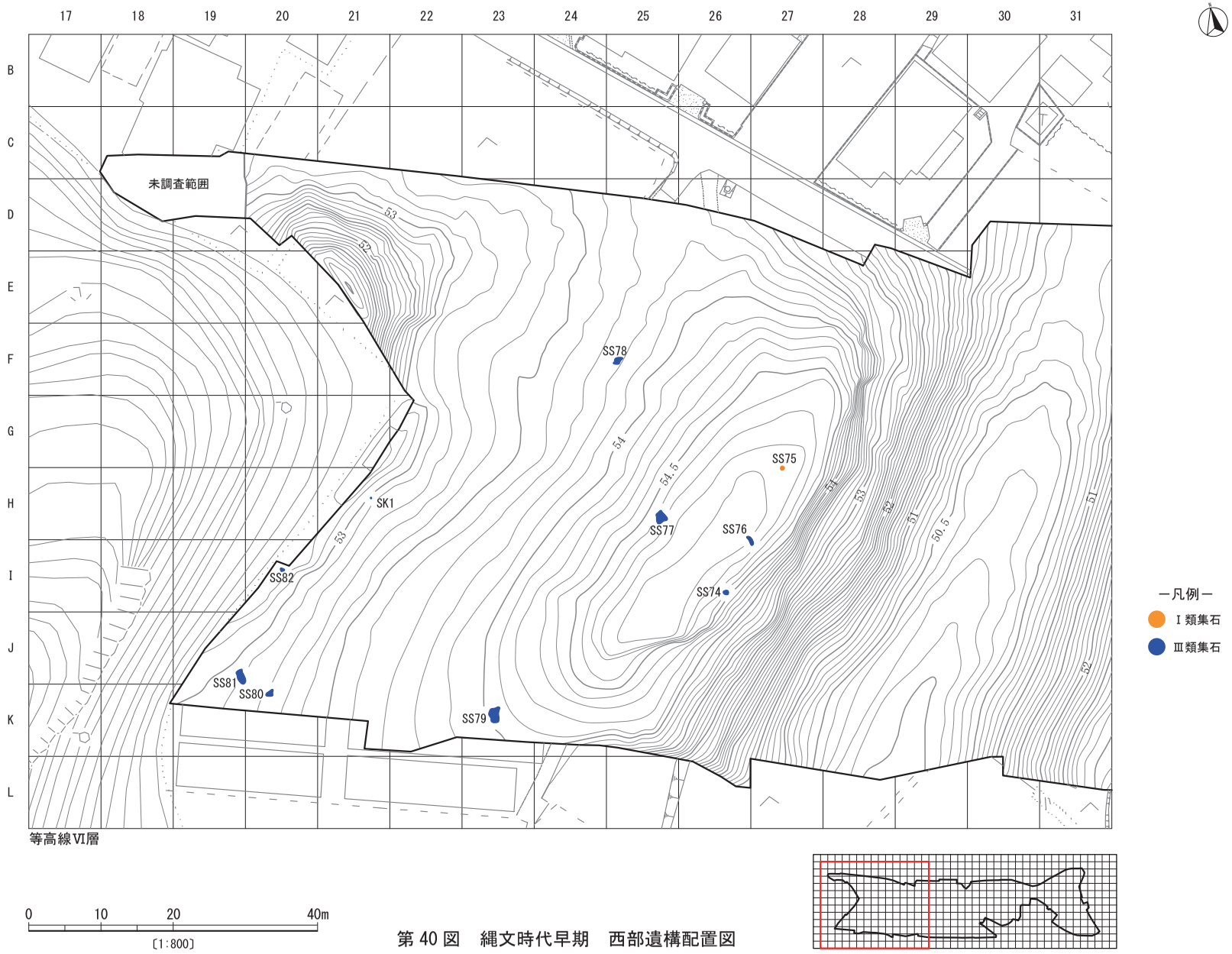
第 37 図　土器埋設遺構及び出土土器



第 38 図　縄文時代早期　東部遺構配置図



第 39 図　縄文時代早期　中央部遺構配置図



第 40 図　縄文時代早期　西部遺構配置図

（２）集石

概要

第２地点で検出された，縄文時代早期の集石は 82 基を数える。平成 25 年度の調査で 68 基，平成 26 年度の調査で 13 基，平成 27 年度の調査で１基である。

集石の認定は，礫がまとまって検出された所を集石とし，検出面とした。Ｖｂ層とⅥ層上面で検出されたものが多い。台地の中央部でも検出されたが，多くはＩ～Ｌ－ 50 ～ 54 区の台地縁辺部と，Ｃ～Ｅ－ 51・52 区の台地縁辺部の中でも高い地点で検出している。

実測については，礫の多い箇所と，２方向からの見通し断面に多くの礫が実測できる箇所を主軸に設定して行った。

形態分類

上野原遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000）では，集石の形態から次に示すように分類している。

Ⅰ．構成礫が集中せずに，掘り込み部も確認できずに検出された集石

Ⅱ．構成礫が集中するが，掘り込み部が確認できずに検出された集石。

Ⅲ．構成礫が集中し掘り込み部が確認できたが，底石や壁石などの施設は確認できずに検出された集石。

Ⅳ．構成礫が集中し掘り込み部が確認できたが，底石や壁石などの施設を検出した集石。

と，４類型に分類している。また，稲荷迫遺跡（鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012）や船迫・高吉Ｂ遺跡鹿児島県立埋蔵文化財センター 2014）でも同様の分類を行っている。それらの分類方法を参考にして本遺跡の集石の分類を行った。

Ⅰ類：構成礫の集中度が高く，掘り込み部のあるもの。

Ⅱ類：構成礫の集中度は高いが，掘り込み部のないもの。

Ⅲ類：構成礫の集中度が低く，掘り込み部のないもの。

なお，本遺跡では上野原分類におけるⅣ類に該当する集石は検出されなかったため，３類型に分類した。

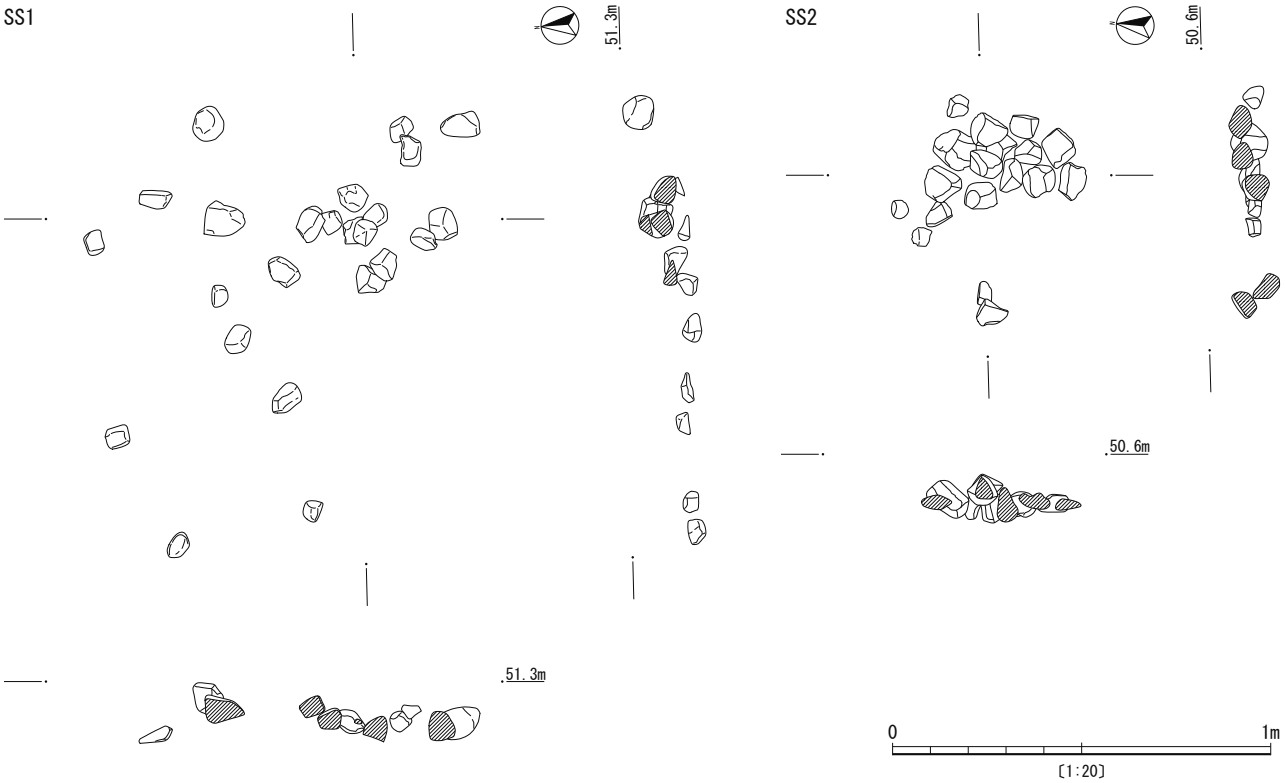
構成礫の集中度は感覚的であるが，礫と礫との間に空間があるか無いか，また礫が上下に重なり合っているか等を目安としている。

集石１号（第 41 図）

Ｇ－ 48 区のＶｂ層で検出された。130 × 112cm の範囲に，礫 24 個からなる集石である。その中の 70 × 60cm の範囲に 13 個の礫が集中している。集石中心部がかろうじて分かる程度の集中度である。拳大の安山岩の角礫が大部分を占める。礫総重量は約 6.8kg，平均約 283g である。形態分類はⅢ類である。

集石２号（第 41 図）

Ｈ－ 53 区のＶｂ層で検出された。60 × 50cm の範囲に，拳大の礫が 18 個集中している。石材は，いずれも安山岩円礫で，被熱痕のあるもの，破砕礫は少ない。集石の中心部のみが残った状態である。礫総重量は約 7.0kg，平均約 390g である。形態分類はⅡ類である。



第 41 図　集石１・２号

集石３号（第 42 図）

Ｊ－53 区のⅥ層上面で検出された。200cm 四方ほどの範囲に，39 個の礫がみられる。中央の 10 個ほどの礫群が中心部と思われる。石材はほとんどが安山岩の円礫である。拳大の礫も見られるが，５cm 程度の小さなものが多い。礫総重量は約 6.2kg，平均約 159g である。形態分類はⅢ類である。

集石４号（第 43 図）

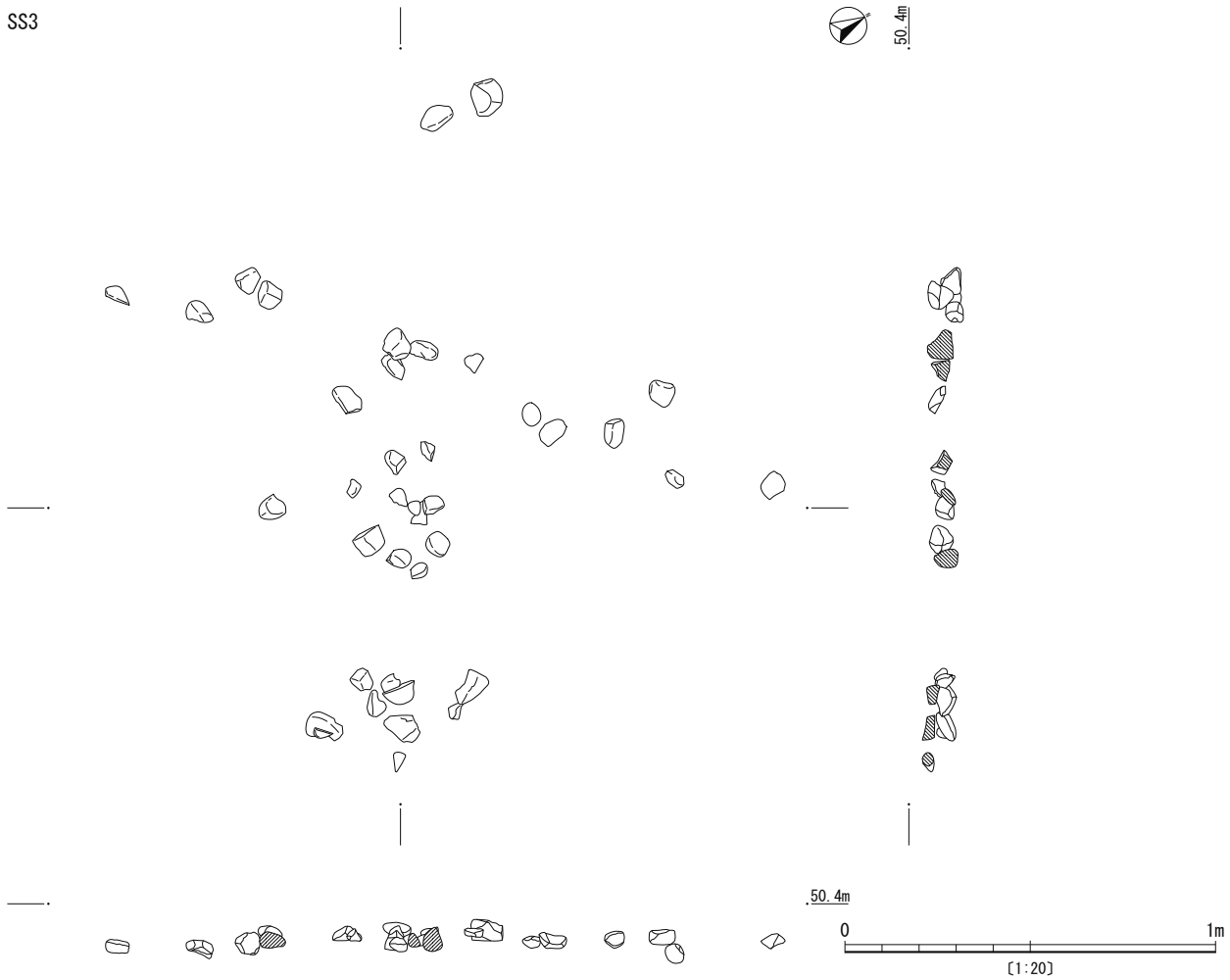
Ｉ－50 区のＶｂ層で検出された。38 × 37cm の範囲に，16 個の拳大の礫が集中している。石材は，安山岩の円・角礫が全体の約７割を占め，それ以外は砂岩円礫である。被熱痕のあるもの，破砕したものはない。礫総重量は約 3.4kg，平均約 212g である。形態分類はⅡ類である。

集石５号（第 43 図）

Ｈ－48 区のⅥ層上面で検出された。190 × 110cm の範囲に，拳大の礫 24 個がみられる。南側の 80 × 50cm の範囲に，礫 11 個の集中箇所がある。その北・西側に散礫状に礫が広がる。石材はほとんど安山岩の円礫であるが，角礫も含まれている。礫総重量は約 5.2kg，平均約 215g である。形態分類はⅢ類である。

集石６号（第 43 図）

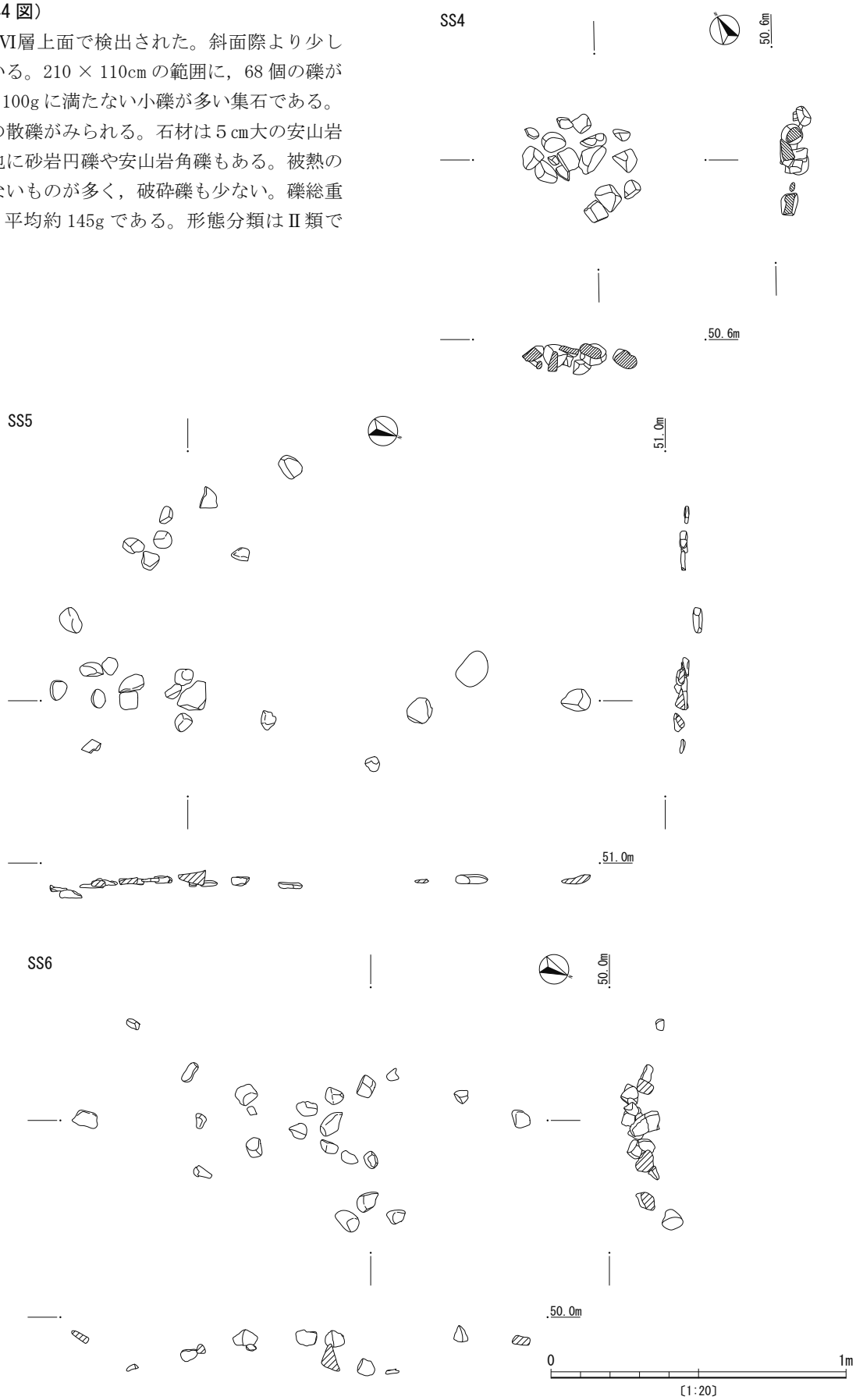
Ｉ－51 区のＶｂ層で検出された。160 × 90cm の範囲に，21 個の礫がみられる。拳大のものが多く，小礫は少ない。石材は安山岩円礫が多いが，安山岩角礫，砂岩円礫もある。被熱の目立つものはなく，破砕礫も少ない。礫総重量は約 3.0kg，平均約 142g である。形態分類はⅢ類である。



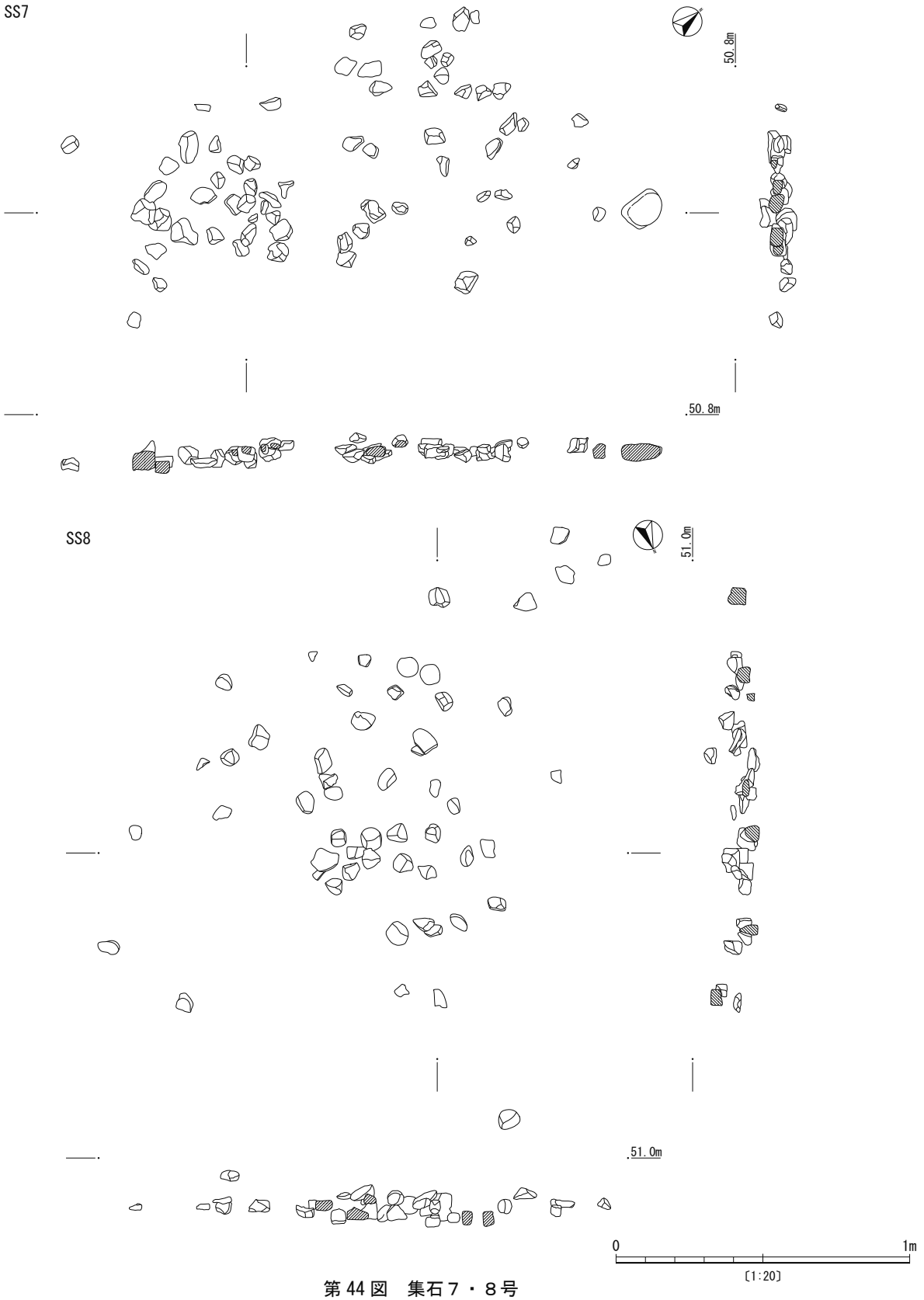
第 42 図　集石３号

集石７号（第 44 図）

Ｈ－ 51 区のⅥ層上面で検出された。斜面際より少し奥に位置している。210 × 110cm の範囲に，68 個の礫が集中している。100g に満たない小礫が多い集石である。周辺には多くの散礫がみられる。石材は５cm大の安山岩円礫が主で，他に砂岩円礫や安山岩角礫もある。被熱の痕跡が目立たないものが多く，破砕礫も少ない。礫総重量は約 9.8kg，平均約 145g である。形態分類はⅡ類である。



第 43 図　集石４～６号



第44図　集石７・８号

集石８号（第 44 図）

Ｈ－ 50 区のⅥ層上面で検出された。170 × 160cm の範囲に，54 個の礫がみられる。石材は安山岩角礫が中心だが，砂岩も見られる。被熱痕が目立つのは１点のみである。大きさは拳大のものが多い。礫総重量は約 8.4kg，平均約 156g である。形態分類はⅢ類である。

集石９号と隣接している。

集石９号（第 45 図）

Ｈ－ 50 区のⅥ層上面で検出された。90 × 80cm の範囲に，拳大の礫 23 個がみられる。石材はいずれも安山岩角礫で，被熱痕が目立つものはない。礫総重量は約 5.8kg，平均約 252g である。形態分類はⅢ類である。

集石８号と隣接しており，構成礫も似ている。

集石 10 号（第 45 図）

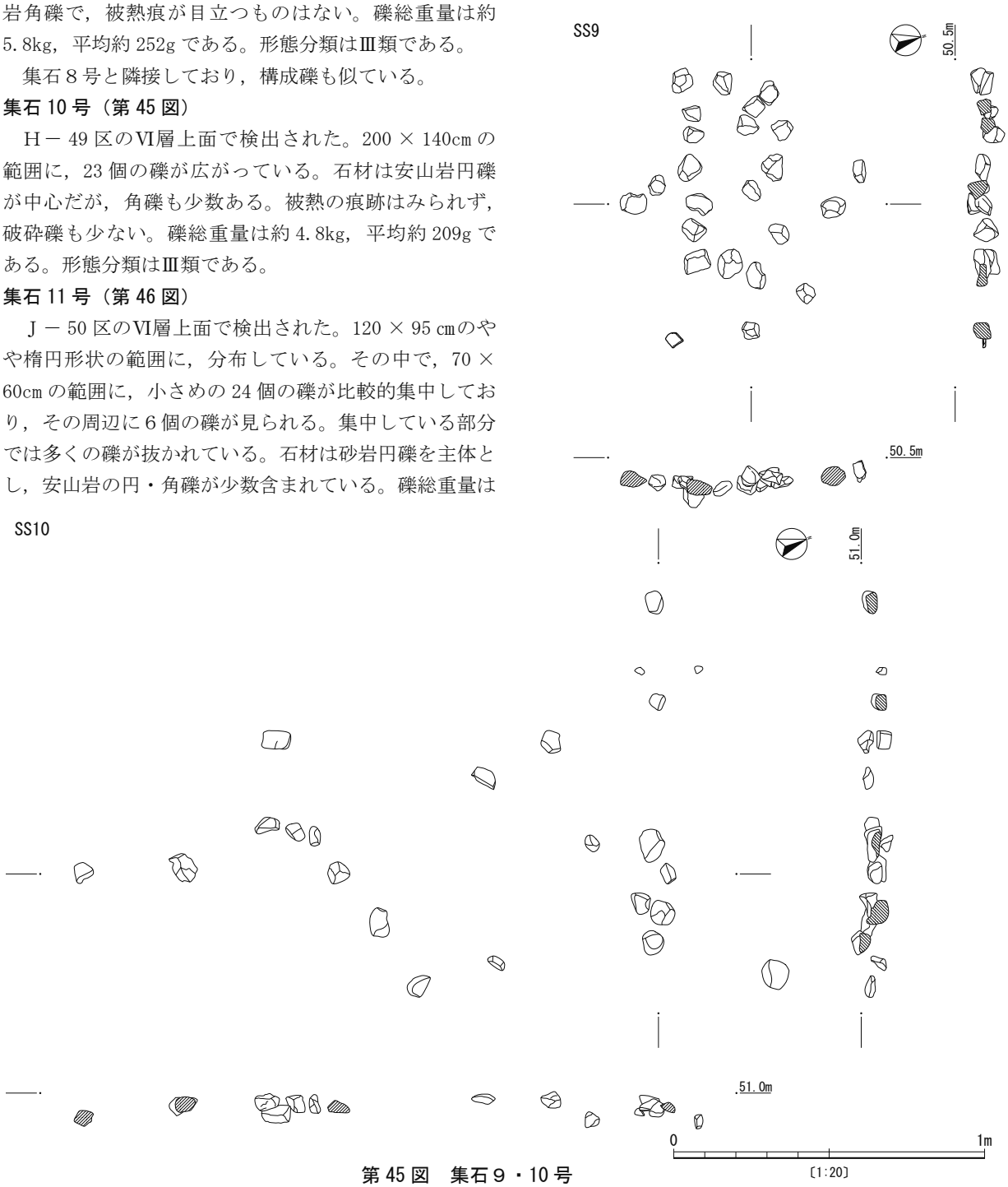
Ｈ－ 49 区のⅥ層上面で検出された。200 × 140cm の範囲に，23 個の礫が広がっている。石材は安山岩円礫が中心だが，角礫も少数ある。被熱の痕跡はみられず，破砕礫も少ない。礫総重量は約 4.8kg，平均約 209g である。形態分類はⅢ類である。

集石 11 号（第 46 図）

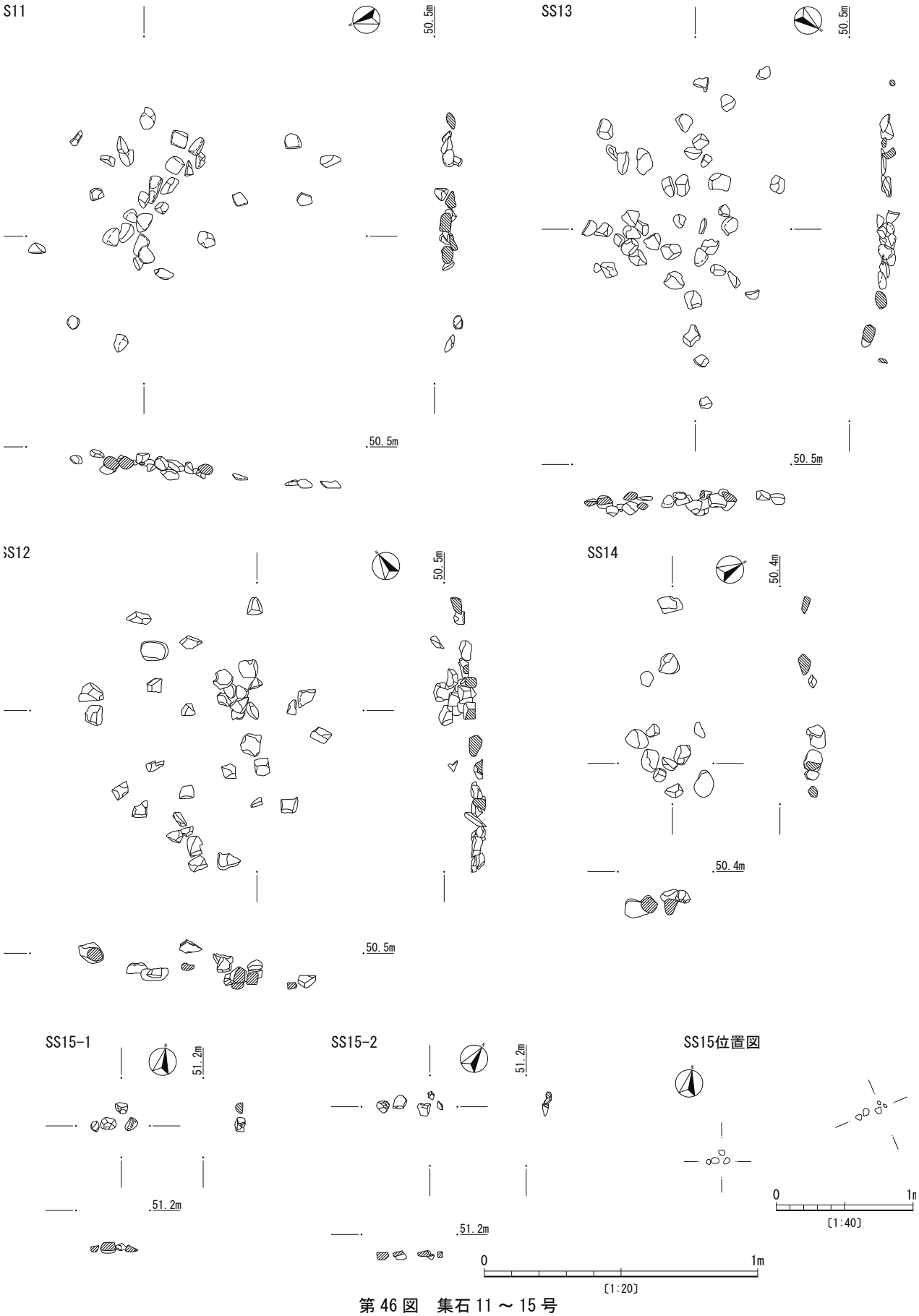
Ｊ－ 50 区のⅥ層上面で検出された。120 × 95 cmのやや楕円形状の範囲に，分布している。その中で，70 × 60cm の範囲に，小さめの 24 個の礫が比較的集中しており，その周辺に６個の礫が見られる。集中している部分では多くの礫が抜かれている。石材は砂岩円礫を主体とし，安山岩の円・角礫が少数含まれている。礫総重量は約 3.3kg，平均約 109g である。形態分類はⅢ類である。

集石 12 号（第 46 図）

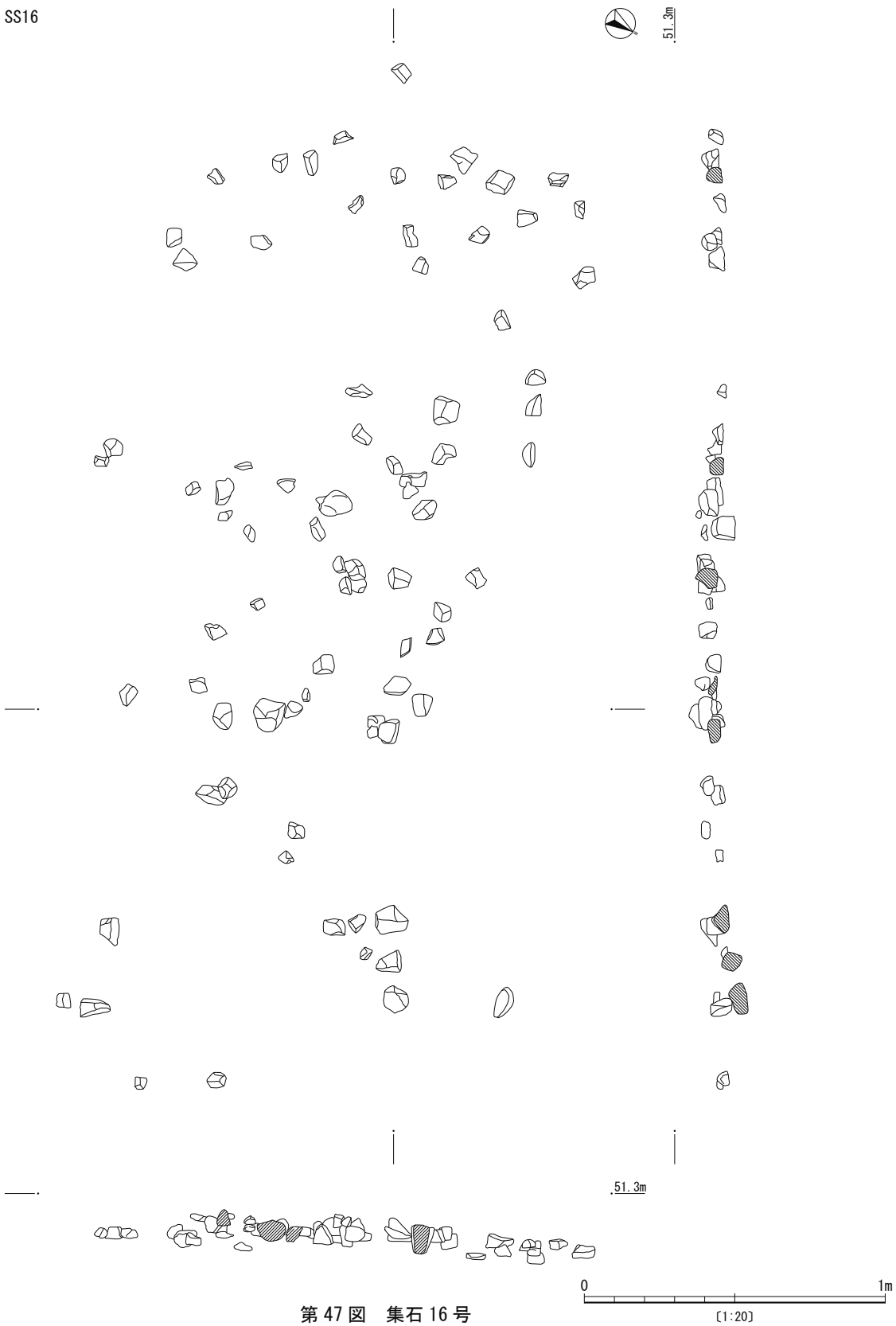
Ｊ－ 50 区のⅥ層上面で検出された。径１ｍの範囲に，35 個の礫がまとまっている。礫の集中度は低いが，もともと構成されていた多くの礫が抜かれたものと思われる。石材は安山岩円礫が多いが，安山岩角礫や砂岩円礫も少数含まれる。拳大程度の礫が多いが，100 ｇ以下の小礫も見られる。顕著な被熱の痕跡がある礫はほとんど無いが，破砕礫は多い。礫総重量は約 5.1kg，平均約 144g である。形態分類はⅡ類である。



第 45 図　集石９・10 号



第46図　集石11～15号



第 47 図　集石 16 号

集石 13 号（第 46 図）

Ｊ－51 区のⅥ層上面で検出された。130 × 90cm の範囲に，41 個の礫が集中している。必要な礫だけが抜かれたものと思われる。石材は安山岩円礫が多いが，砂岩円礫，安山岩角礫も少数含まれている。拳大のものが多いが，３cm程度の小礫も相当数含まれている。礫総重量は約 4.2kg，平均約 102g である。形態分類はⅡ類である。

周辺には集石 11・12・13・30 号と，礫集中度が低い集石が隣接している。その中でも，比較的礫集中部がしっかりしている集石である。

集石 14 号（第 46 図）

Ｊ－51 区のⅥ層上面で検出された。60 × 40cm の範囲に，12 個の礫が集中している。拳大の安山岩円礫・角礫で構成されている。被熱の目立つものはないが，破砕礫が少数含まれている。礫総重量は約 2.6kg，平均約 219g である。形態分類はⅢ類である。

集石 15 号 -1（第 46 図）

Ｇ－51 区のⅥ層上面で検出された。40 × 30cm の範囲に，６～ 12cm 大の４個の礫が集中している。いずれも安山岩円礫で，顕著な被熱痕はない。

集石 15 号 -2（第 46 図）

集石 15 号－２は，Ｇ－51 区のⅥ層上面で検出された。列状に５個の拳大の安山岩が並んでいる。円礫と角礫があり，顕著な被熱痕はない。

集石 15 号１・２合わせての礫総重量は約 3.6kg，平均約 394g である。形態分類はⅢ類である。

周辺には散礫が多くみられ，南側に集石 16 号がある。

集石 16 号（第 47 図）

Ｇ－51 区のⅥ層上面で検出された。350 × 190cm の範囲に，81 個の小礫を主体とした礫が散在している。中央の 140 × 170cm の範囲に，約 40 個が集中している箇所が中心部と思われる。石材はほとんどが安山岩円礫であるが，角礫も少量ある。被熱の痕跡のあるものはないが，破砕礫は多い。礫総重量は約 12.9kg，平均約 160g である。形態分類はⅢ類である。

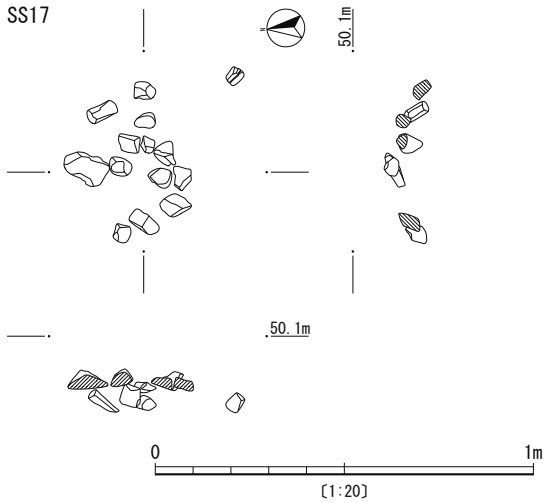
周辺には散礫が多くみられ，北側に集石 15 号がある。

集石 17 号（第 48 図）

Ｋ－52 区のＶｂ層で検出された。径 50cm の範囲に，拳大の礫 14 個が集中している。石材は安山岩角礫が主体で，他に砂岩の角礫がある。被熱の目立つものは少ない。礫総重量は約 1.8kg，平均約 131g である。形態分類はⅢ類である。

集石 18 号（第 49 図）

Ｊ・Ｋ－52 区のＶｂ層で検出された。南側へ下降傾斜する場所の，360 × 216 cmの範囲に，47 個の小礫が散在している。傾斜面上部の平坦部分に，径１ｍほどの範囲で小礫 20 個が集中しており，ここが中心部かと思われる。石材はほとんどが安山岩角礫か円礫で，他に少数の砂岩がある。礫総重量は約 4.4kg，平均約 93g である。形態分類はⅢ類である。



第 48 図　集石 17 号

集石 19 号（第 50 図）

Ｋ－53 区のＶｂ層で検出された。210 × 160cm の範囲に，小礫 50 個が集中している。石材は砂岩と安山岩の円礫が主体で，安山岩角礫は少数である。被熱により赤色化したものが少量あるが，破砕礫はほとんどない。礫総重量は約 5.8kg，平均約 116g である。形態分類はⅢ類である。

集石 20 号（第 50 図）

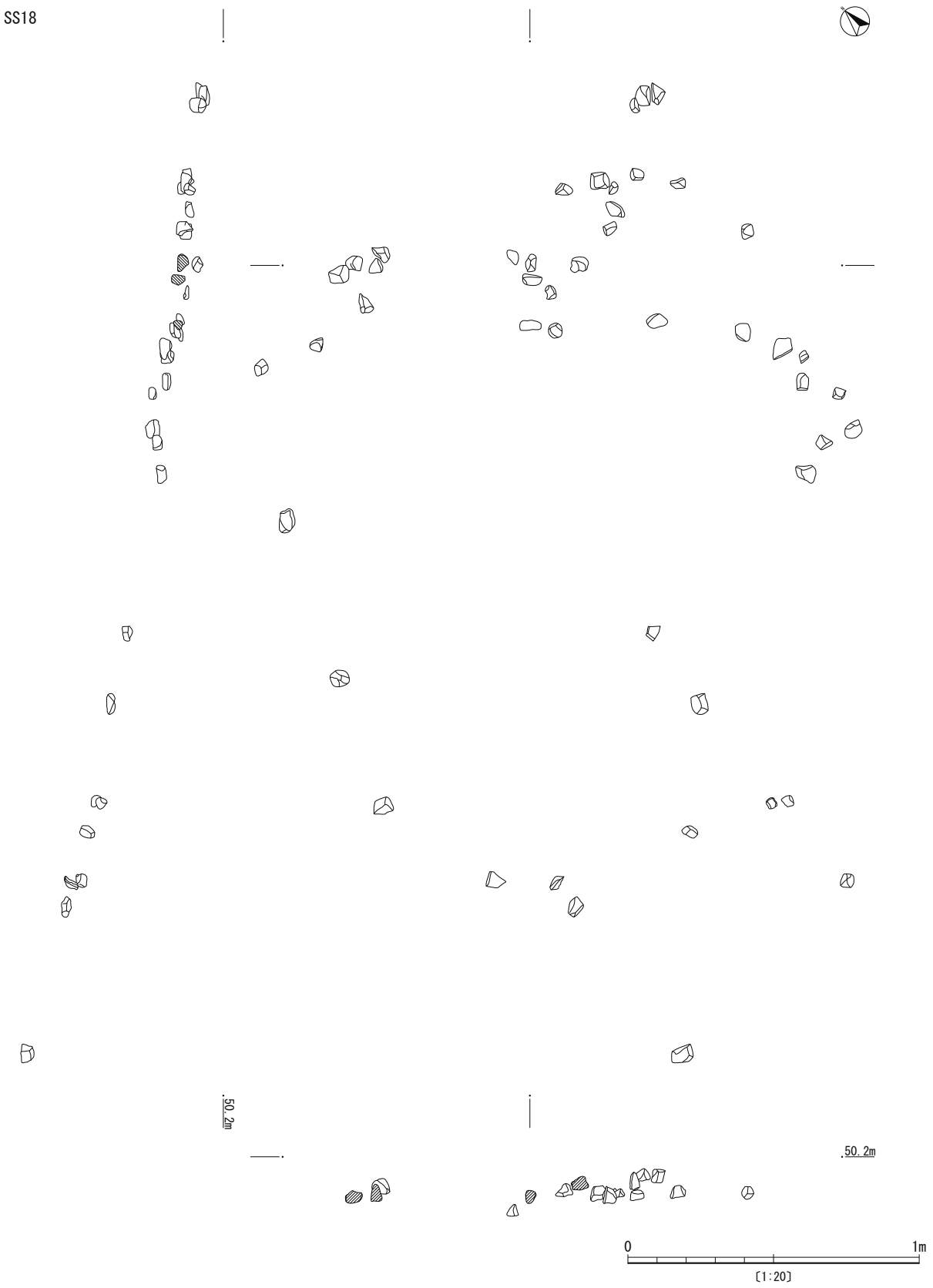
Ｋ－53 区のＶｂ層で検出された。60 × 50cm の範囲に，拳大の礫 13 個が集中している。集石中心部のみが残存したものと思われる。石材は，安山岩円礫が主体である。被熱をうけて赤色化・破砕した礫はない。礫総重量は約 4.7kg，平均約 363g である。形態分類はⅡ類である。

集石 21 号（第 51 図）

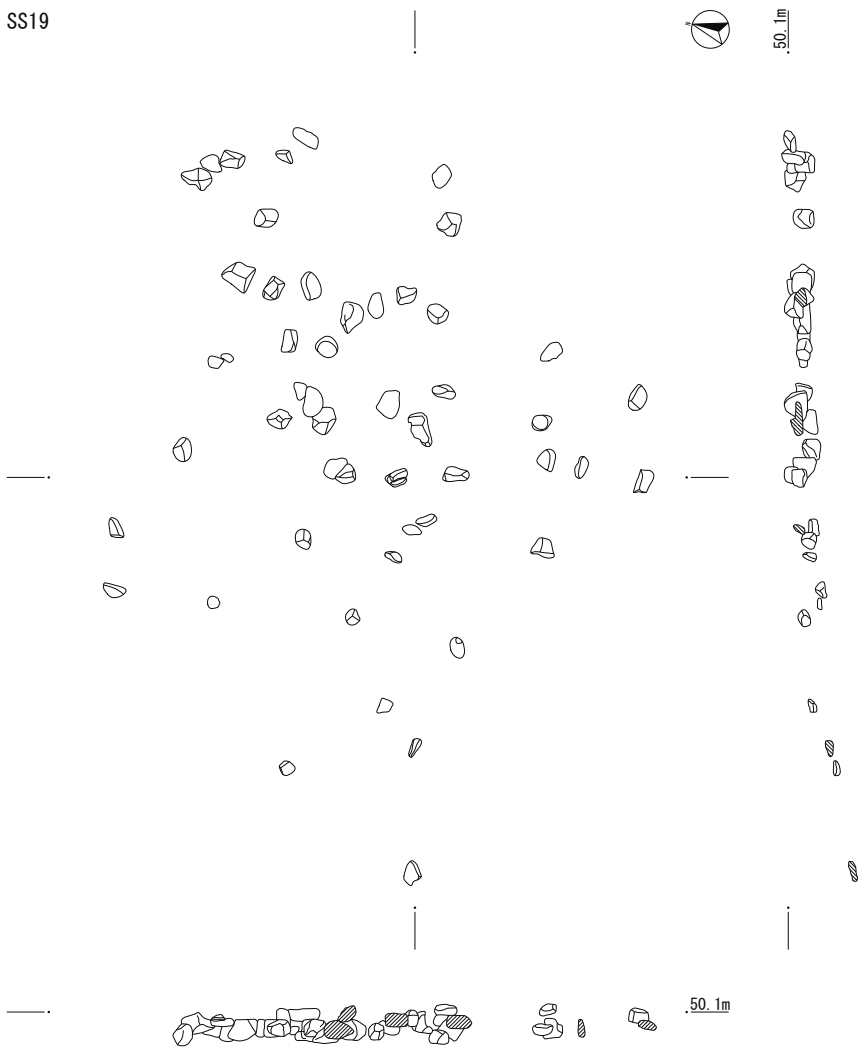
Ｋ－53・54 区のＶｂ層で検出された。３ｍほどの範囲に，106 個の礫が散在しているが，北側に直径 80cm ほどの範囲に，30 個ほどの礫が集中している。ここを中心として散乱したものと思われる。石材は安山岩の円礫が多いが，安山岩の角礫や砂岩の円礫も含まれ，破砕礫も多い。顕著な被熱痕を残すものは少ない。礫総重量は約 12.3kg，平均約 116g である。形態分類はⅢ類である。

集石 22 号（第 52 図）

Ｋ－53 区のＶｂ層で検出された。400 × 350 cmの広い範囲に，151 個の礫で構成される集石である。北側で 100 × 120cm の範囲に，集中箇所があることから，この部分が中心部と推測される。その後礫が散乱したものと思われる。１kgを超す人頭大のものから５cm 大の礫まで，大小さまざまなものから構成されるが，200g に満たない小礫が大半である。石材は安山岩円礫が多くを占めるが，安山岩角礫・砂岩円・角礫・球果状流紋岩もあ



第49図　集石18号



る。礫総重量は約 22.1kg，平均約 147g である。形態分類はⅢ類である。

集石 23 号（第 53 図）

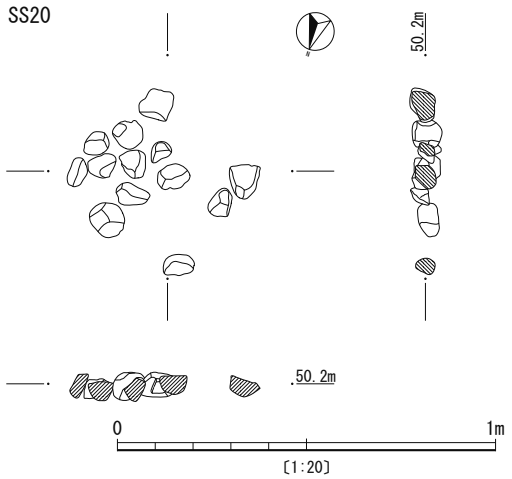
Ｋ－ 54 区のＶｂ層で検出された。210 × 110 ㎝ほどの範囲に,54 個の礫がみられる。石材は砂岩円礫が主で,安山岩の円･角礫，砂岩の角礫もある。破砕礫が多いが,被熱痕のないものが多数を占める。礫総重量は約 7.7kg,平均約 143g である。形態分類はⅢ類である。

集石 24 号（第 53 図）

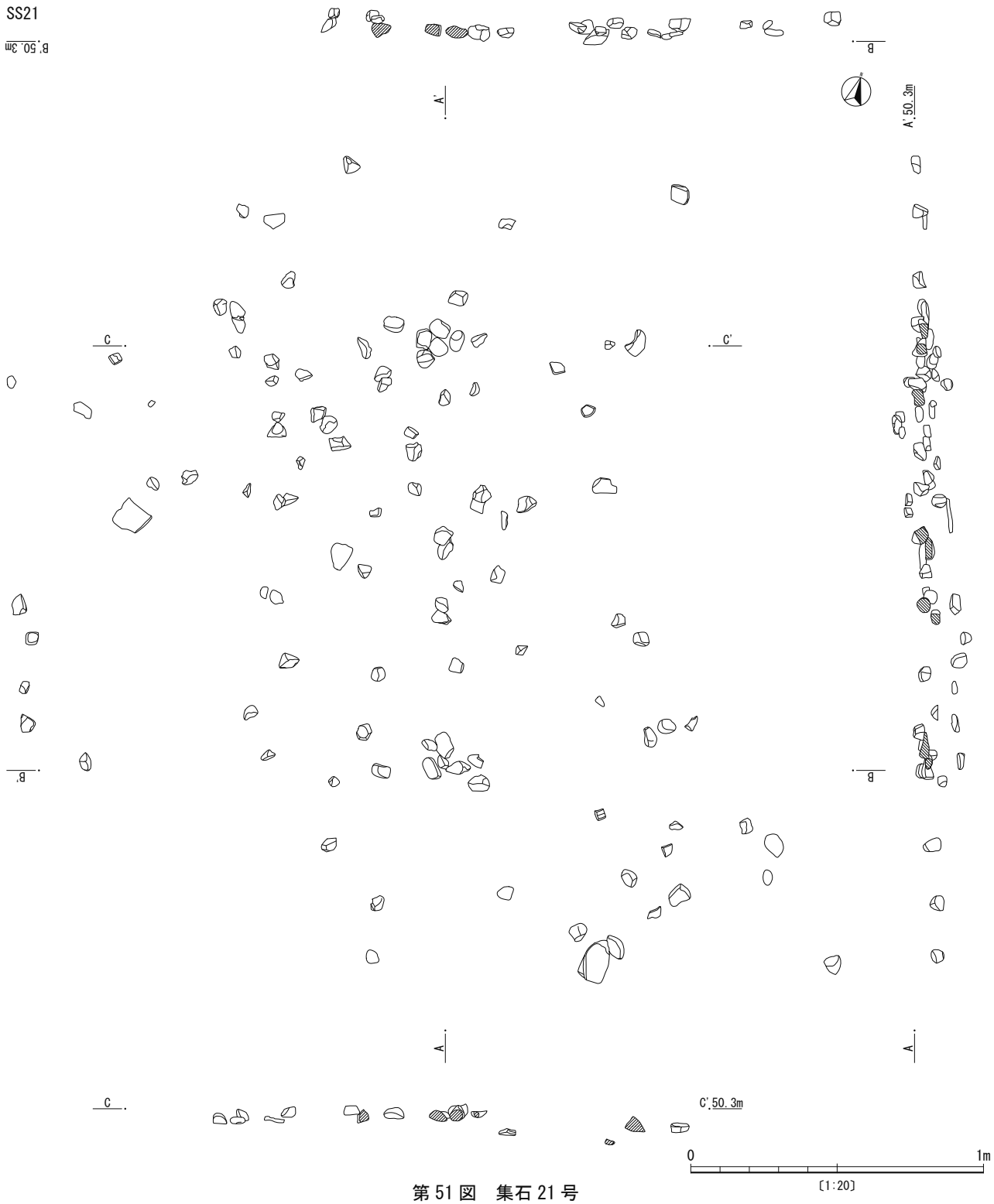
Ｋ・Ｌ－ 53・54 区のＶｂ層で検出された。155 × 115cm ほどの範囲に，42 個の礫がみられる。石材は３～10cm 大の安山岩の円礫・角礫が 30 個程度集中しており,その周辺に数個の散礫がみられる。600g を超える大きなものも２点あるが,多くは 200g 足らずの小礫である。礫総重量は約 7.2kg，平均約 171g である。形態分類はⅢ類である。

集石 25 号（第 54 図）

Ｋ－ 54 区のＶｂ層で検出された。160 × 150cm の範囲に，66 個の礫が集中している。集石の中心部，90cm の範囲に，60 個近くの安山岩の円礫・角礫が集中している。多くが 200g 足らずの小礫である。礫総重量は約 11.8kg，平均約 179g である。形態分類はⅡ類である。



第 50 図　集石 19・20 号

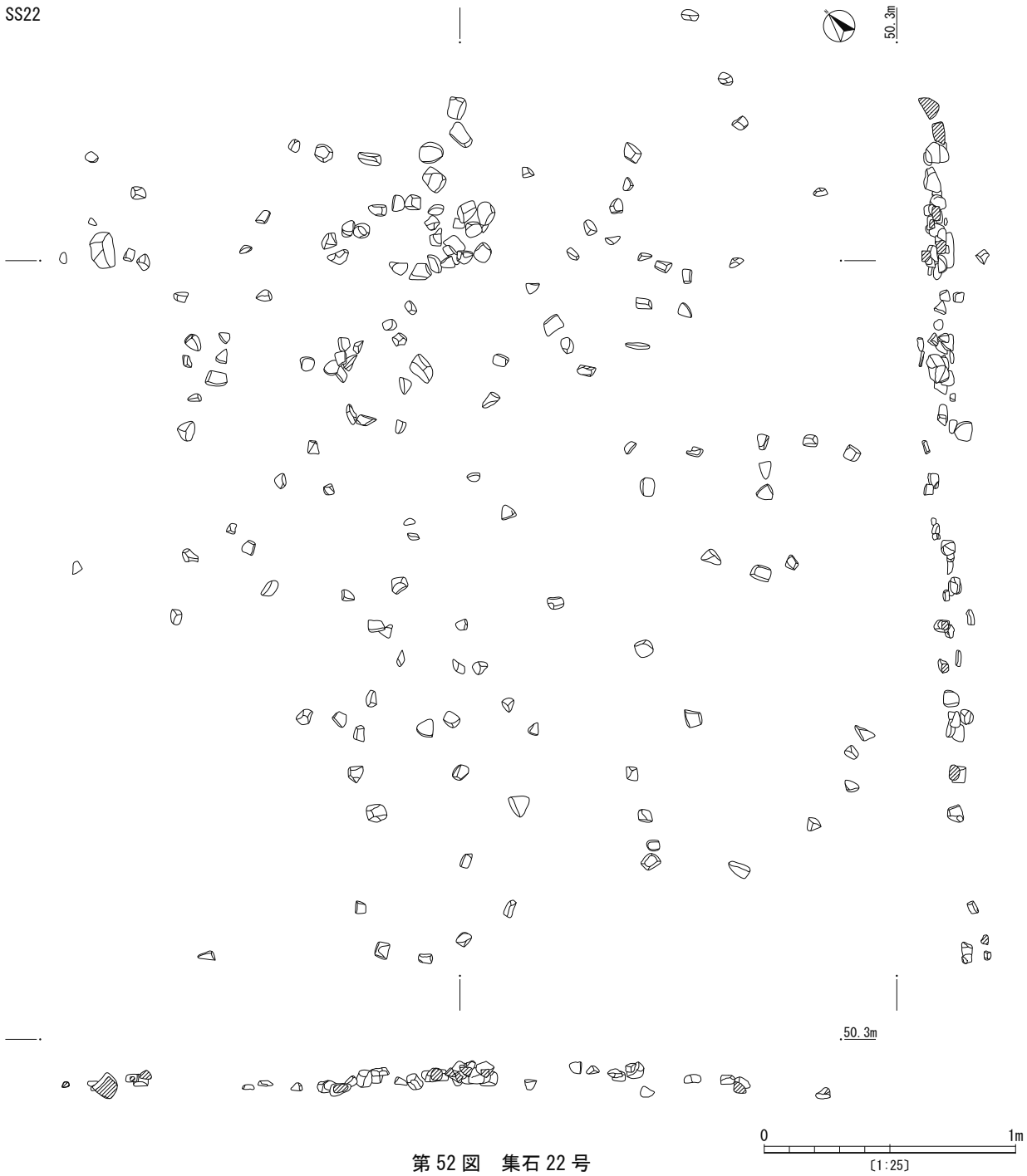


第 51 図　集石 21 号

集石 26 号（第 54 図）

Ｋ－ 54 区のＶｂ層で検出された。130 × 100cm の範囲に，131 個の礫が集中した密集型の集石で，中心部は上下に重なっている。大きさは３～ 10cm 大と比較的大きさの異なる礫で構成されており，被熱により破砕したものが 38 点みられる。ほとんどは安山岩の円礫だが，安山岩の角礫・砂岩の円礫なども含まれる。また，球果状流紋岩が２点含まれている。球果状流紋岩は本遺跡の集石石材としてはあまりみられない石材である。周辺で多くの集石が検出されているが，その中でも特に密集した集石である。礫総重量は約 28.1kg，平均約 215g である。形態分類はⅡ類である。

北東側に集石 32 号が隣接している。



第 52 図　集石 22 号

集石 27 号（第 55 図）

Ｊ・Ｋ－ 54 区のＶｂ層で検出された。270 × 240 ㎝の範囲に，173 個の礫で構成されている。特にその中央部の径 120 ㎝の範囲に，120 個ほどが密集している。南東側にゆるやかに下降しているが，ここには多くの礫が散在しており，それらは中心部から除去された礫と思われる。石材は安山岩の円・角礫が多い。また，凝灰岩・花崗岩が各１点ずつある。被熱痕のある礫，破砕した礫が少量見られる。礫総重量は約 34.7kg，平均約 200g である。形態分類はⅡ類である。

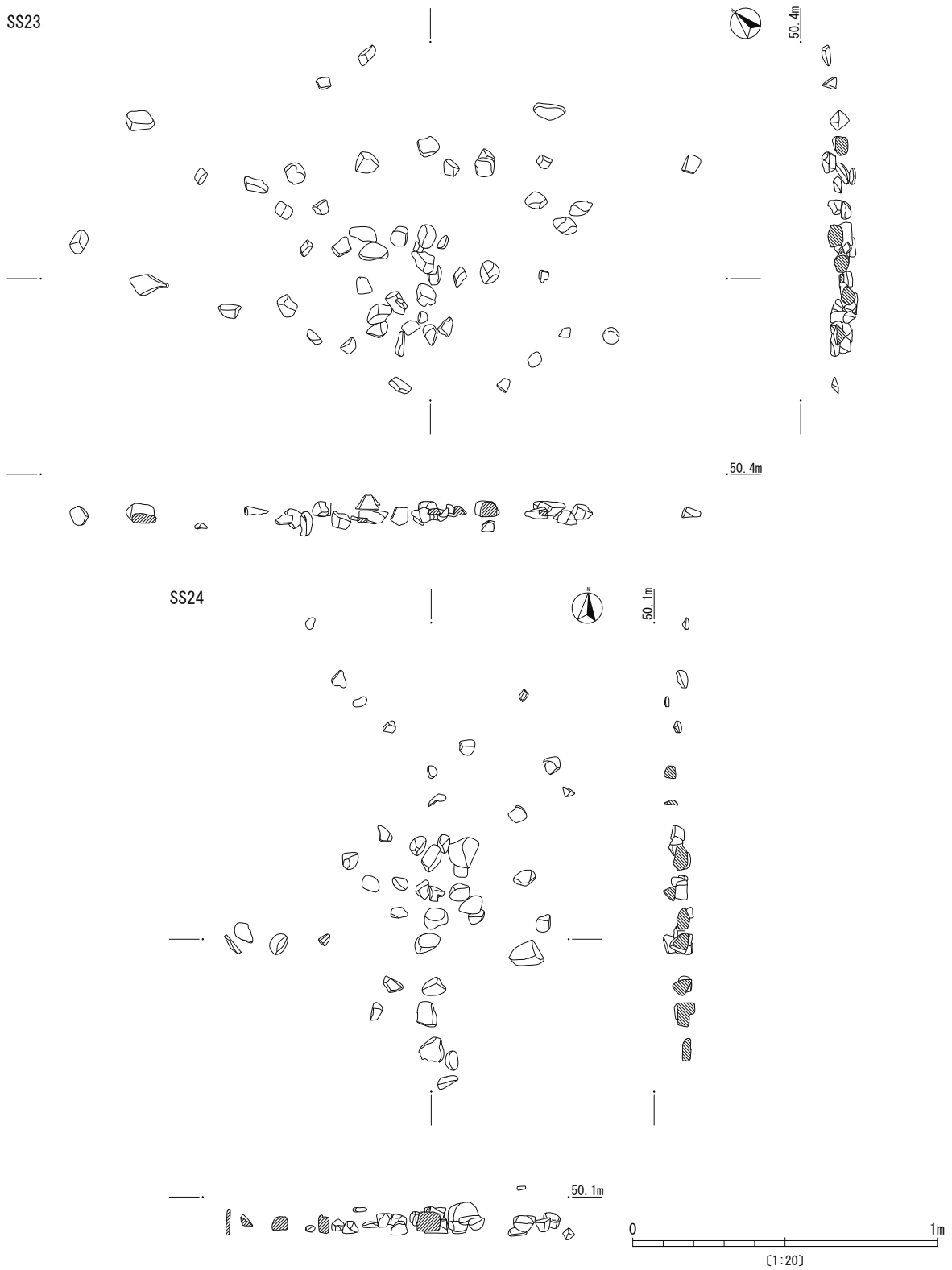
集石 28 号（第 56 図）

Ｋ－ 54 区のＶｂ層で検出された。径 40cm の範囲に，18 個の安山岩円礫を主体とした礫が集中しており，周りに４個の礫が散らばっている。石材は安山岩の円・角礫が多く，他には砂岩の円・角礫が多い。被熱による赤化，破砕した礫は少ない。礫総重量は約 3.1kg，平均約 139g である。形態分類はⅡ類である。

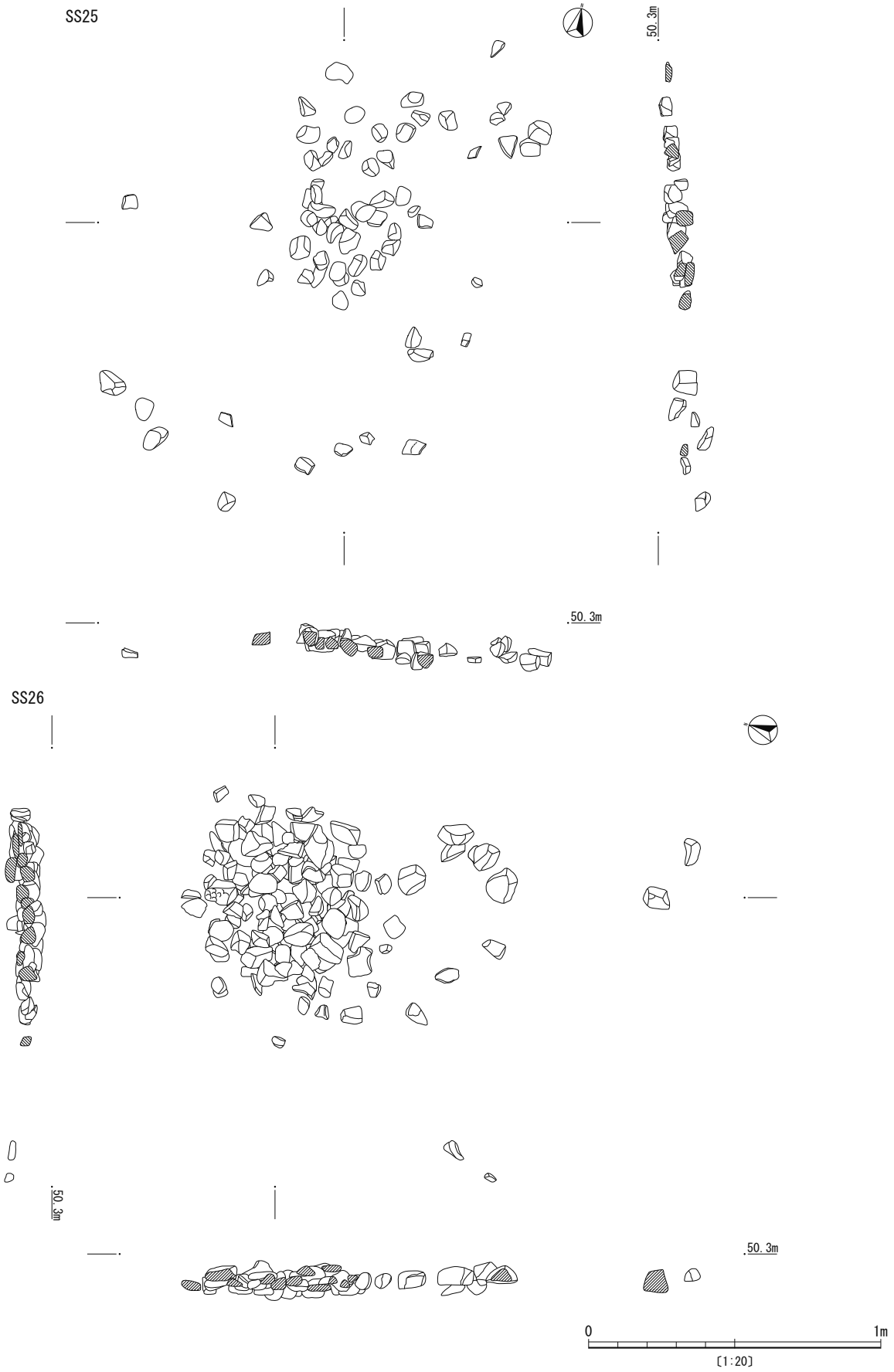
周辺では前平系土器と思われる土器が出土している。

集石 29 号（第 56 図）

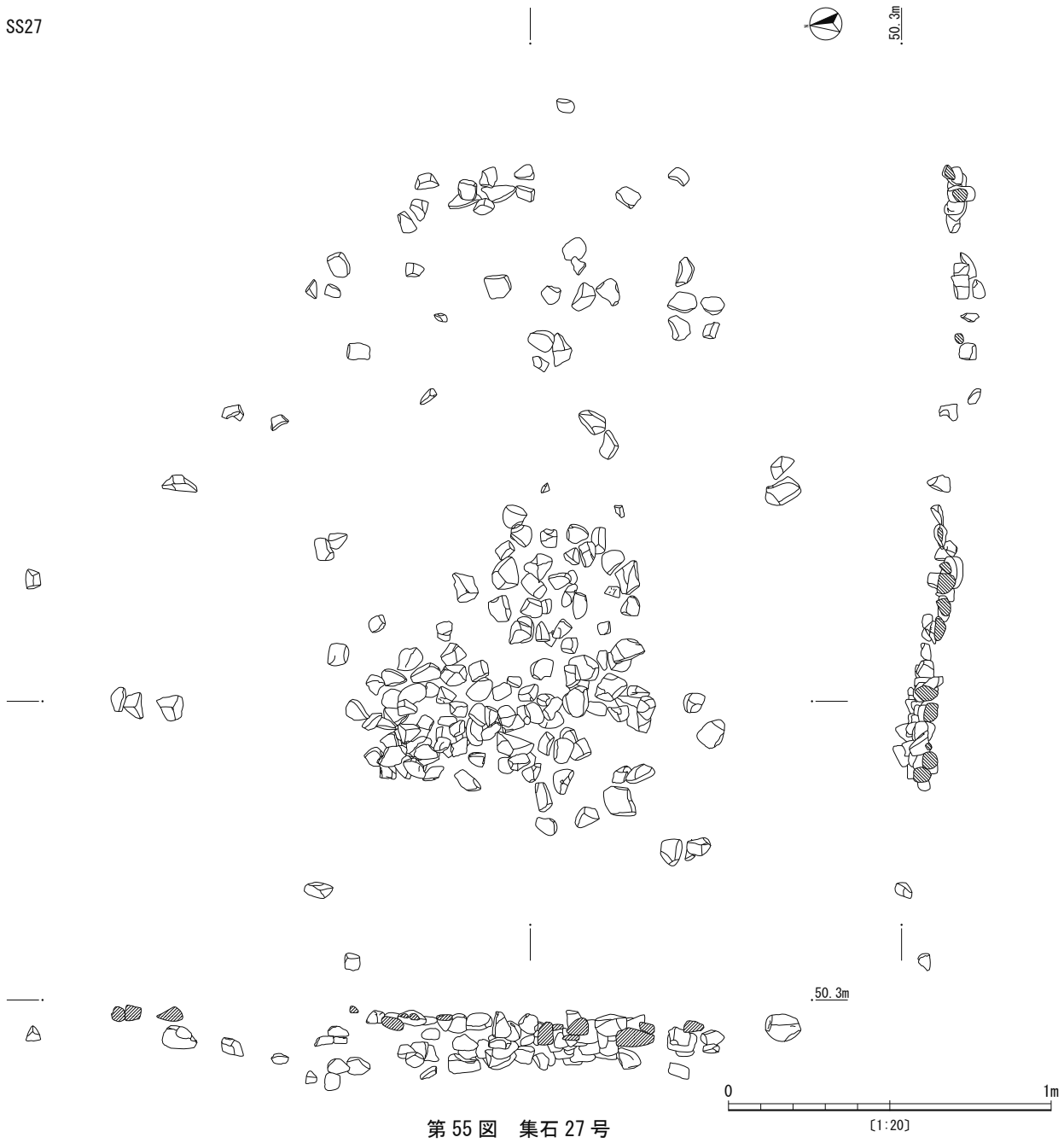
Ｈ－ 52 区のＶｂ層で検出された。５㎝大の小礫で構



第53図　集石23・24号



第54図　集石25・26号



第 55 図　集石 27 号

成される集石である。径１ｍの範囲に，32 個が集中している。石材は砂岩円礫を主体とし安山岩は少ない。被熱により赤色化した礫，破砕礫が多く，使用後必要な礫が取り去り，廃棄されたものと考えられる。礫総重量は約 3.3kg，平均約 102g である。形態分類はⅢ類である。

集石 30 号（第 56 図）

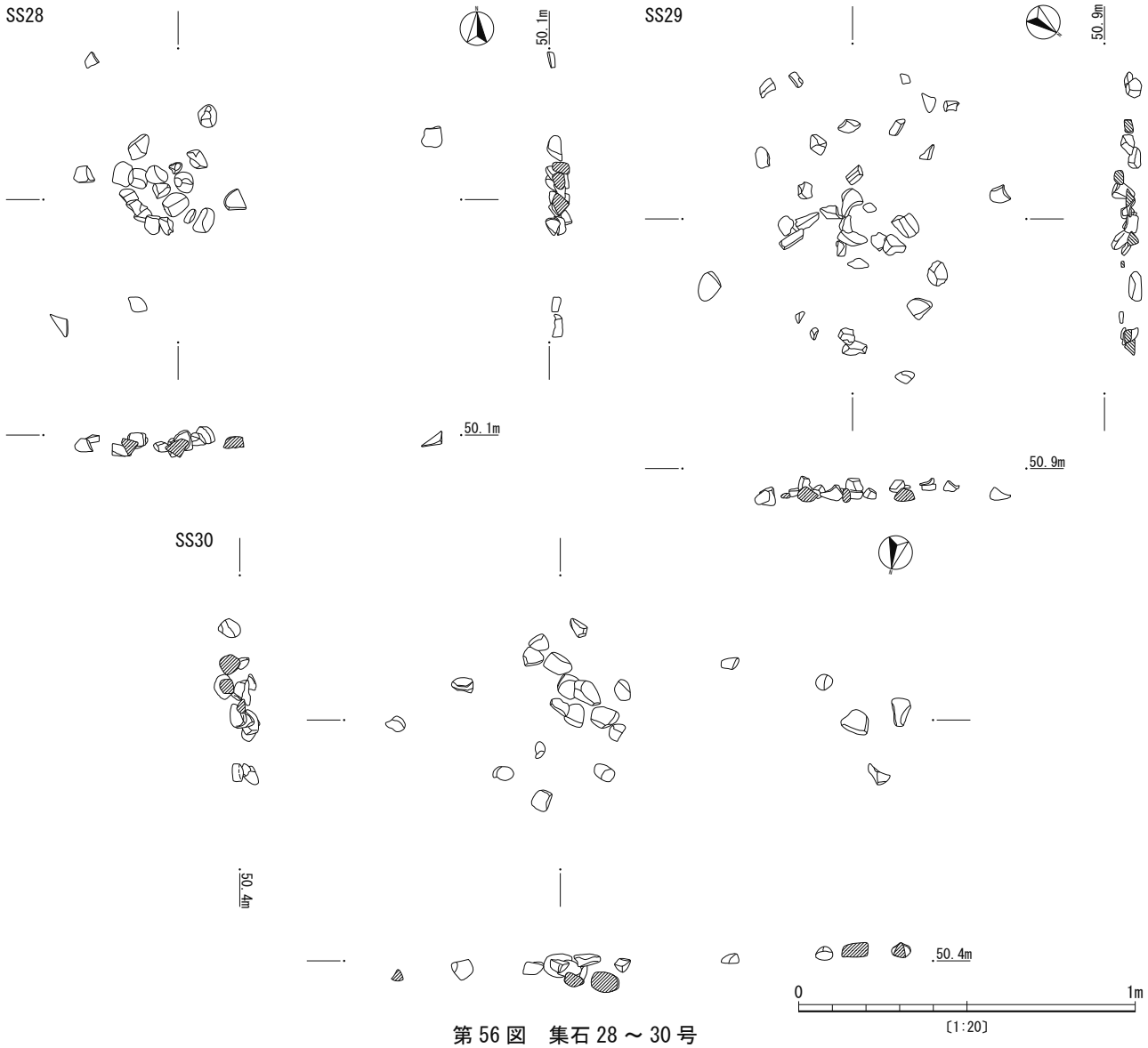
Ｉ・Ｊ－ 51 区のＶｂ層で検出された。60cm の範囲に，16 個の小礫が集中し，その西側に５個，東側に１個の小礫が散在している。石材は５cm 大の安山岩角礫が多い。多くの礫に被熱の痕跡があり，破砕したものもある。礫総重量は約 2.6kg，平均約 116g である。形態分類はⅢ類である。

集石 31 号（第 57 図）

Ｊ－ 51 区のＶｂ層で検出された。150 × 100cm の範囲に，拳大の礫 23 個が広がる集石である。石材は安山岩角礫が多く，少数の円礫がある。被熱痕のあるものや破砕礫が多い。礫総重量は約 7.8kg，平均約 340g である。形態分類はⅢ類である。

集石 32 号（第 57 図）

Ｋ－ 54 区のＶｂ層下面で検出された。中心部は一部がⅥ層上面に接している。130 × 112 cmの範囲に，71 個の礫が集中している。中心部の径 80cm の範囲に，拳大の礫 61 個が集中しており，そのまわりに 10 個の散礫がある。石材は，５～ 10cm 大の安山岩の円・角礫が主で，



第 56 図　集石 28 ～ 30 号

砂岩の円・角礫が 20 個弱，凝灰岩角礫２個ある。礫総重量は約 12.0kg，平均約 169g である。形態分類はⅡ類である。

南西側に集石 26 号が隣接している。

集石 33 号（第 58 図）

Ｅ－ 51 区のＶｂ層で検出された。135 × 100 ㎝の範囲に，49 個の礫が集中している。安山岩の円礫・角礫が主で，砂岩が少数含まれる。ほとんどが 200g を超える拳大の礫で，1200g ある礫が西側に配置されている。礫総重量は約 15.2kg，平均約 311g である。形態分類はⅡ類である。

集石 34 号－１（第 58 図）

Ｅ－51 区のＶｂ層で検出された。90 × 42 ㎝の範囲に，やや散在した状態の集石である。５～ 10㎝ 大のやや大きな 13 個の安山岩角礫・砂岩で構成されている。

集石 34 号－２（第 58 図）

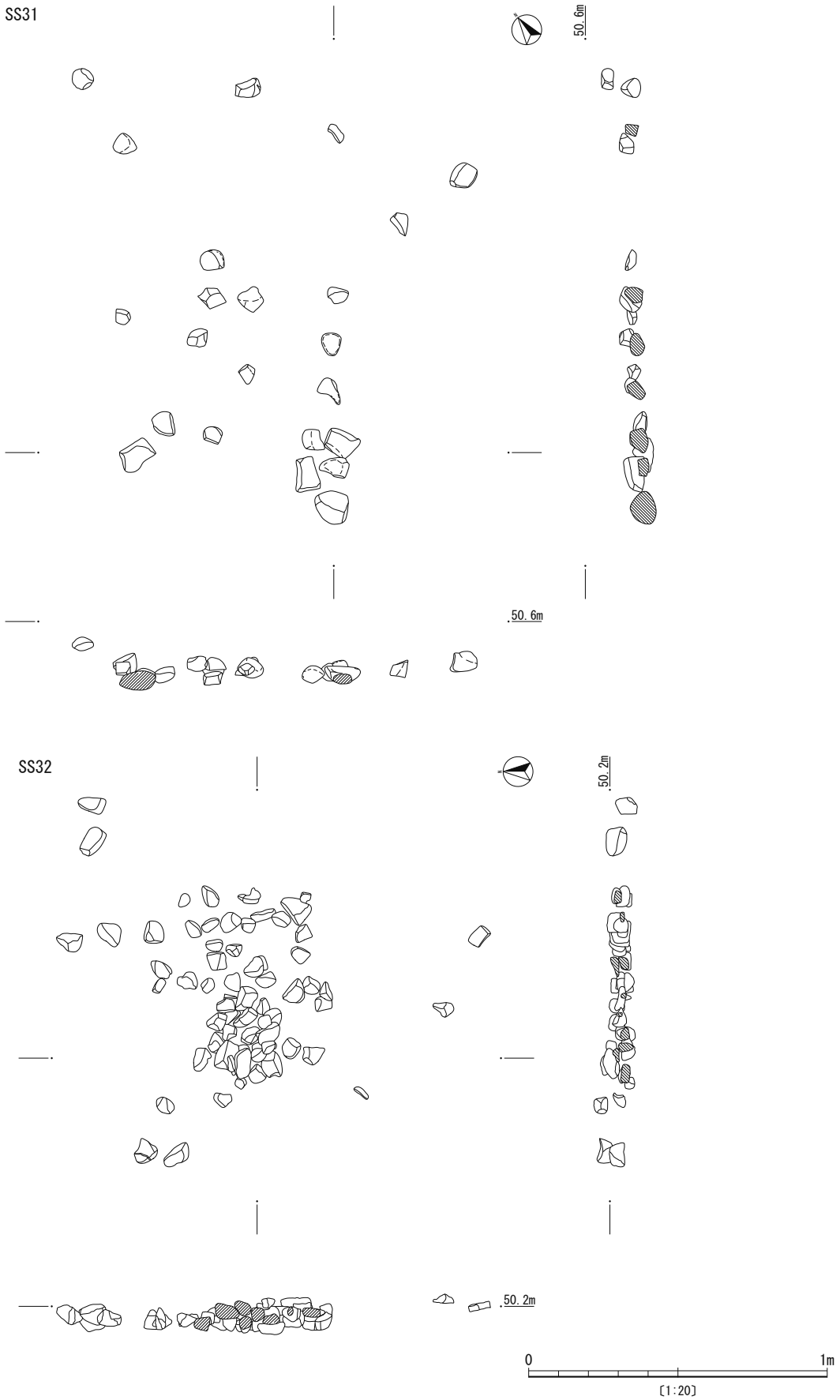
Ｅ－ 51 区のＶｂ層で検出された。 40 × 30㎝ の範囲内に５～ 10㎝ 大の大きめの安山岩角礫・砂岩 13 個で構成されている集石である。

集石 34 号－１・２については，隣接し礫構成もほぼ同一であるため，元々単一の集石を構成していたものと考えられる。双方合わせての礫総重量は約 4.0kg，平均約 152g である。形態分類はⅢ類である。

集石 35 号（第 59 図）

Ｅ－ 51 区のＶｂ層で検出された。230 × 180 ㎝の範囲に，36 個の礫がみられる。石材は安山岩角礫が主で，砂岩が少数含まれる。中央部 70 × 50㎝ の範囲に，礫がやや集中し，北側と南側に散在している。被熱で赤色化しているものは少ない。礫総重量は約 6.6kg，平均約 184g である。形態分類はⅢ類である。

構成礫中には，磨石と思われる石器１点（47）が含ま



第57図　集石31・32号

第 58 図　集石 33・34 号

れ，敲石を再度使用したものと考えられる。

集石 36 号（第 59 図）

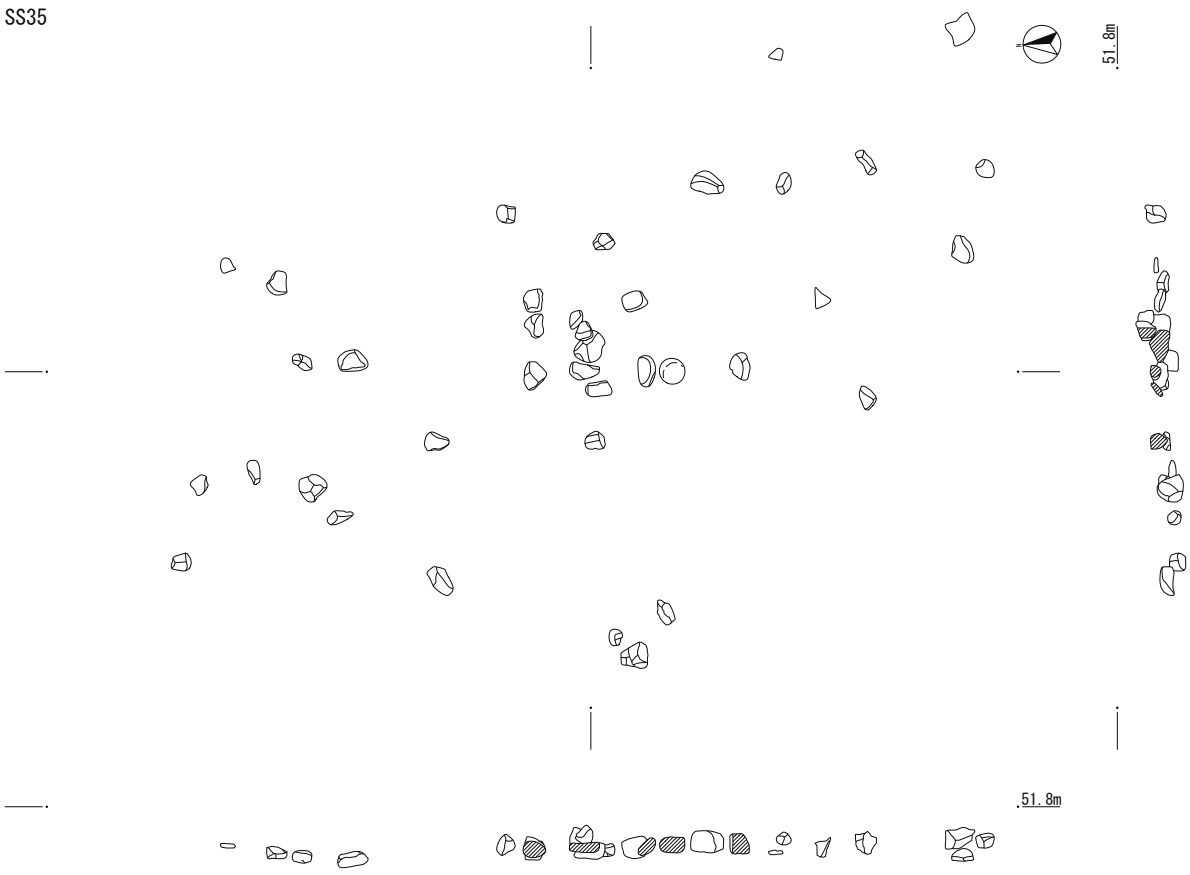
Ｅ－ 48 区のＶｂ層で検出された。210 × 170cm の範囲に，49 個の礫がある。中央部と思われる径 80cm の範囲に，28 個の礫が集中しており，その周辺に 21 個の礫が散礫状に広がっている。拳大の礫が多い。石材は砂岩の円礫が多いが，安山岩円礫，凝灰岩角礫も少量含まれる。礫総重量は約 8.0kg，平均約 162g である。形態分類はⅢ類である。

集石 37 号（第 60 図）

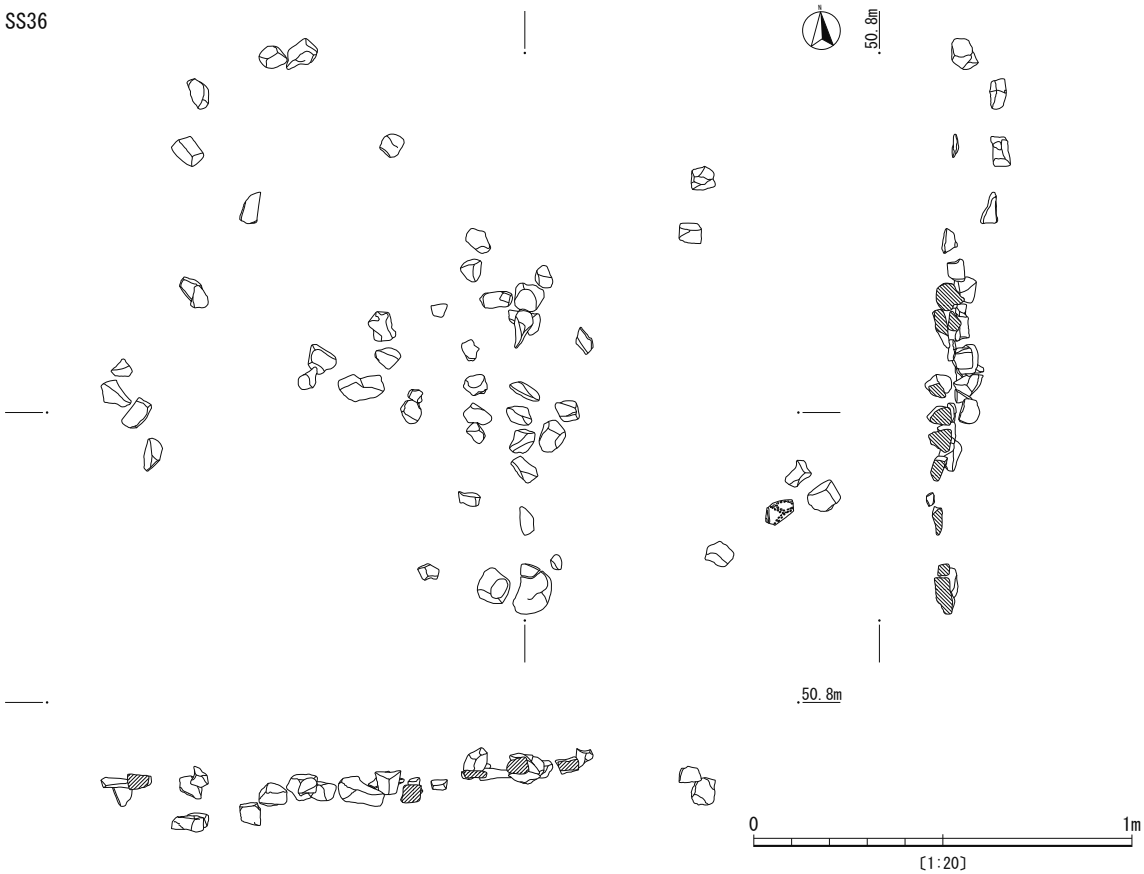
Ｆ－ 50 区のＶｂ層で検出された。160 × 120cm の範囲に，81 個の礫が集中している。ほとんどが拳大以上の礫で構成され，１kgを超えるものも６点ある。石材は安山岩の円・角礫が主で，砂岩は４点のみである。被熱により赤色化，破砕した礫はあまり見られない。礫総重量は約 36.3kg，平均約 448g である。形態分類はⅡ類である。

本遺跡の集石の中では，礫の大きさ，集中度ともに異質な集石である。

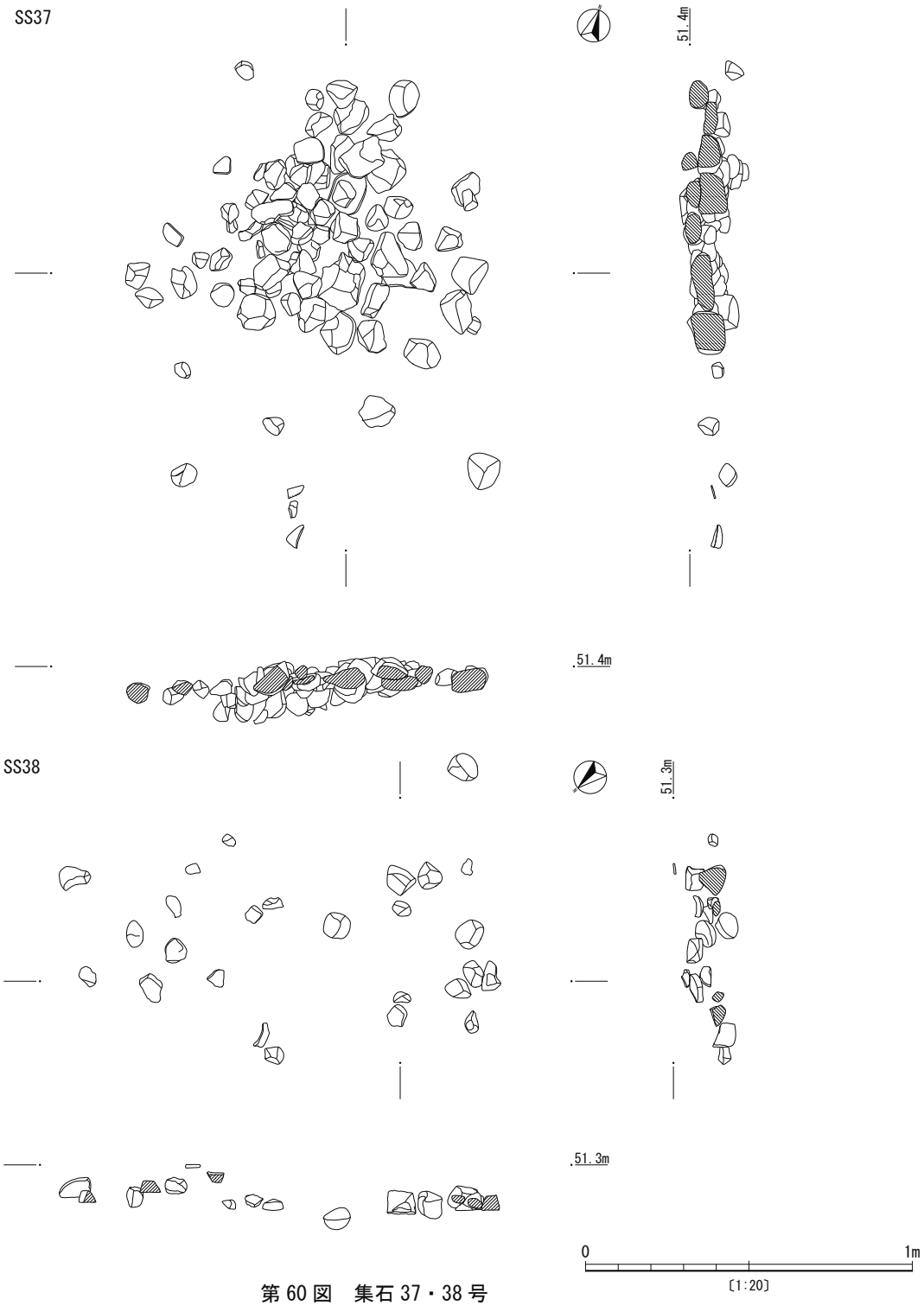
SS35



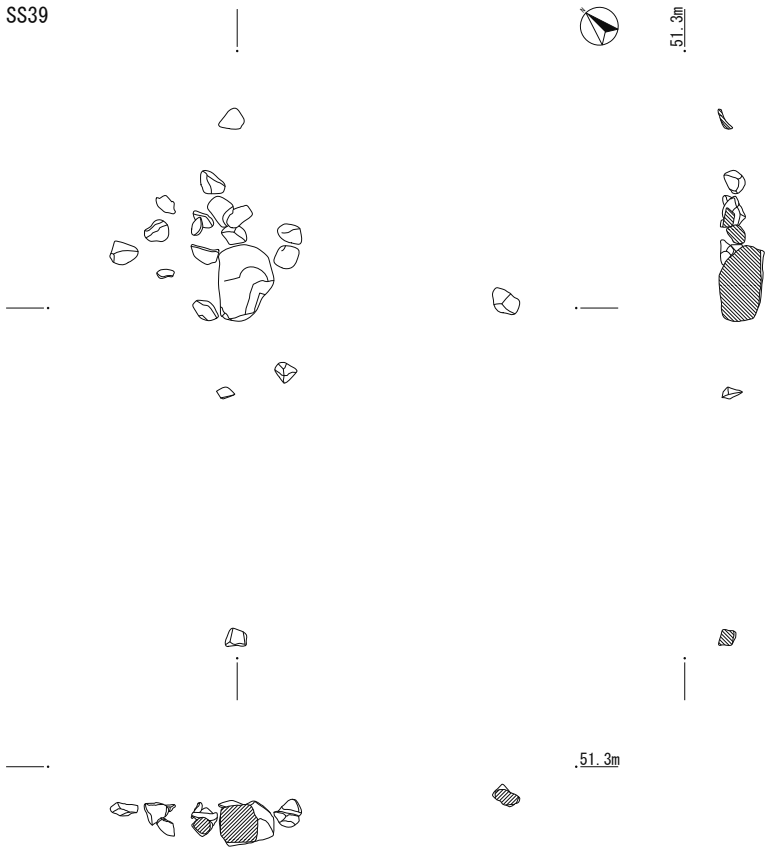
SS36

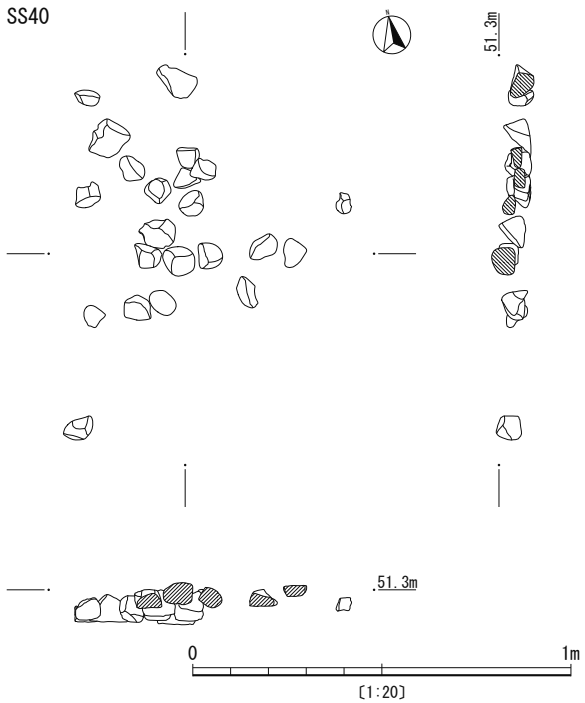


第59図　集石35・36号



第 60 図　集石 37・38 号





第 61 図　集石 39・40 号

集石 38 号（第 60 図）

Ｆ－49 区のＶｂ層で検出された。143 × 75cm の範囲に，24 個の礫からなる集石である。南西側 60 × 70cm の範囲に，11 個の礫が比較的集中し，その北東側に散礫がみられる。400g 以上の比較的大きなものもあるが，300g 以下のものが多い。石材は安山岩角礫が主である。礫総重量は約 5.7kg，平均約 237g である。形態分類はⅡ類である。

集石 39 号（第 61 図）

Ｆ－49 区のＶｂ層で検出された。南端に重さ 5.2 kg の大きな礫を置き，その周囲 60 × 40cm の範囲に，５～10cm 大の安山岩の角礫 18 個が集中している。礫総重量は約 8.3kg，平均約 460g である。形態分類はⅡ類である。

集石 40 号（第 61 図）

Ｅ－50 区のＶｂ層で検出された。110 × 90cm の範囲に，22 個の礫が集中している。安山岩，砂岩が中心で，拳大サイズの礫で構成されており，他の集石とは構成礫のサイズが一回り大きい。被熱のため赤色化したものや破砕したものが多い。500g を超す大型のものも３個含まれている。礫総重量は約 6.4kg，平均約 290g である。形態分類はⅡ類である。

構成礫中には，磨石と思われる石器１点（48）が含まれ，磨石を再度使用したものと考える。

集石 41 号－１（第 62 図）

Ｄ－51 区のＶｂ層で検出された。135 × 115 cmの範囲に，礫 41 個からなる集石である。石材は安山岩角礫が主である。

構成礫中には，二次加工剥片が１点（52）含まれる。

第 62 図　集石 41・42 号

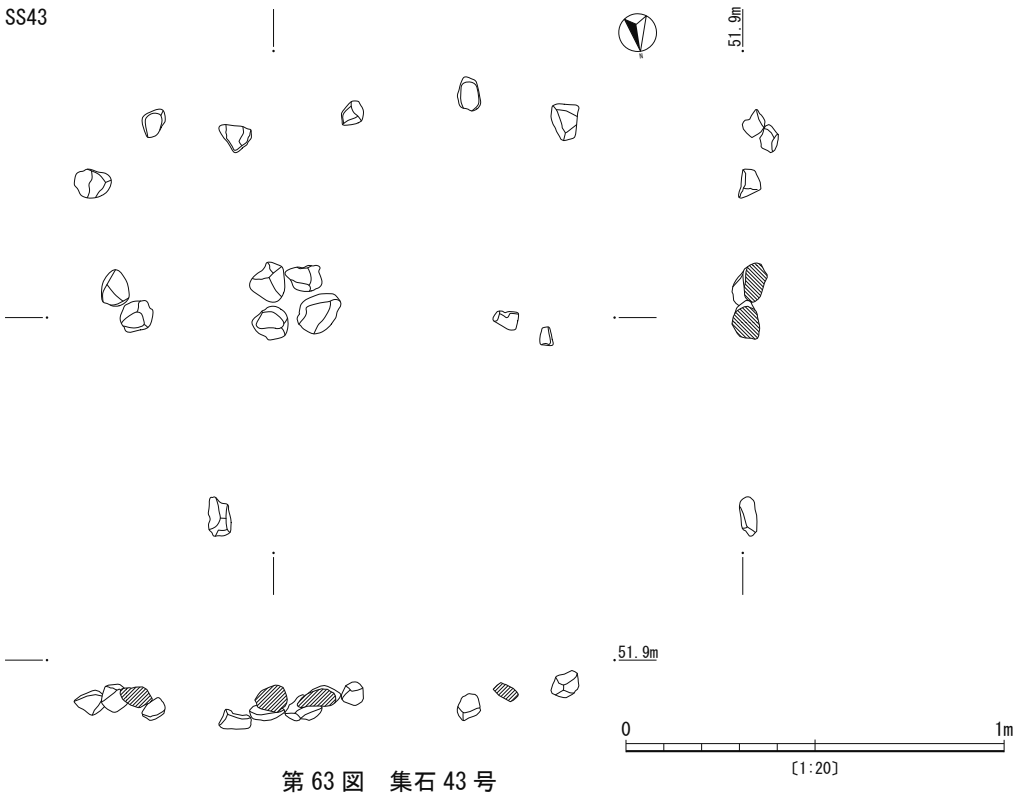
集石 41 号－２（第 62 図）

Ｄ－51 区のＶｂ層で検出された。140 × 90 ㎝の範囲に，礫 21 個からなる集石である。石材は安山岩角礫を主とし，多くが小礫である。

集石 41 号－１・２については，隣接し礫構成もほぼ同一であるため，本来単一の集石を構成していたものと考えられる。双方合わせての礫総重量は約 10.9kg，平均約 176g である。形態分類はⅢ類である。

集石 42 号（第 62 図）

Ｄ－51 区のＶｂ層で検出された。230 × 90 ㎝の範囲に，33 個からなる集石である。北西側の径 70㎝の範囲に，20 個程度の礫集中箇所があり，ここから東側に散在している。石材は安山岩が主で，３～６㎝大の小さい礫で構成されている。被熱による赤化・破砕したものは少



第 63 図　集石 43 号

ない。礫総重量は約 4.9kg，平均約 149g である。形態分類はⅢ類である。

構成礫中には，磨石と思われる石器２点（49・50）が含まれ，磨石を再度使用したものと考える。

集石 43 号（第 63 図）

Ｄ・Ｅ－ 52 区のＶｂ層で検出された。140 × 130 ㎝の範囲に，礫 15 個からなる集石である。拳大の比較的大きな４個の礫を中心として構成されていた集石と考えられ，この近辺に 10 個ほどの礫が散在している。石材は安山岩角礫で，多孔質である。礫総重量は約 5.7kg，平均約 383g である。形態分類はⅢ類である。

集石 44 号（第 64 図）

Ｄ－ 52 区のＶｂ層で検出された。380 × 290 ㎝の範囲に，208 個の拳大の礫を主とした集石である。そのうち東側の径 150 ㎝の範囲に，130 個ほどの礫が集中している。中心部では２～３段に礫が重なりあっている。安山岩の円礫が中心であるが，安山岩の角礫や砂岩の円礫が少量，他に球果岩円礫と軽石が各１個ずつ含まれる。東側斜面付近の礫がないため，西側の礫が元々の構成礫と考られ，東側の集石はかき出されたものと推測される。本遺跡の集石の中では，集中度が高く規模の大きい集石である。礫総重量は約 44.6kg，平均約 214g である。形態分類はⅡ類である。

集石 45 号－１（第 65 図）

Ｄ－ 52 区のＶｂ層で検出された。210 × 115 ㎝の範囲に，礫 17 個からなる集石である。40 × 60㎝の範囲に，まとまった８個の礫を中心として，その周辺に９個の礫が散在している。石材はほとんどが 300g 以上ある大きな安山岩角礫を用いており，中には 800 ～ 900g ある大きな礫が４個ある。

集石 45 号－２（第 65 図）

Ｄ－ 52 区のＶｂ層で検出された。190 × 140 ㎝の範囲に，礫 15 個からなる集石である。径 50㎝の範囲に，まとまった９個の礫を中心として，そのまわりに数個の礫が散在している。石材は 200g 以下の小さな安山岩角礫だけで構成されている。

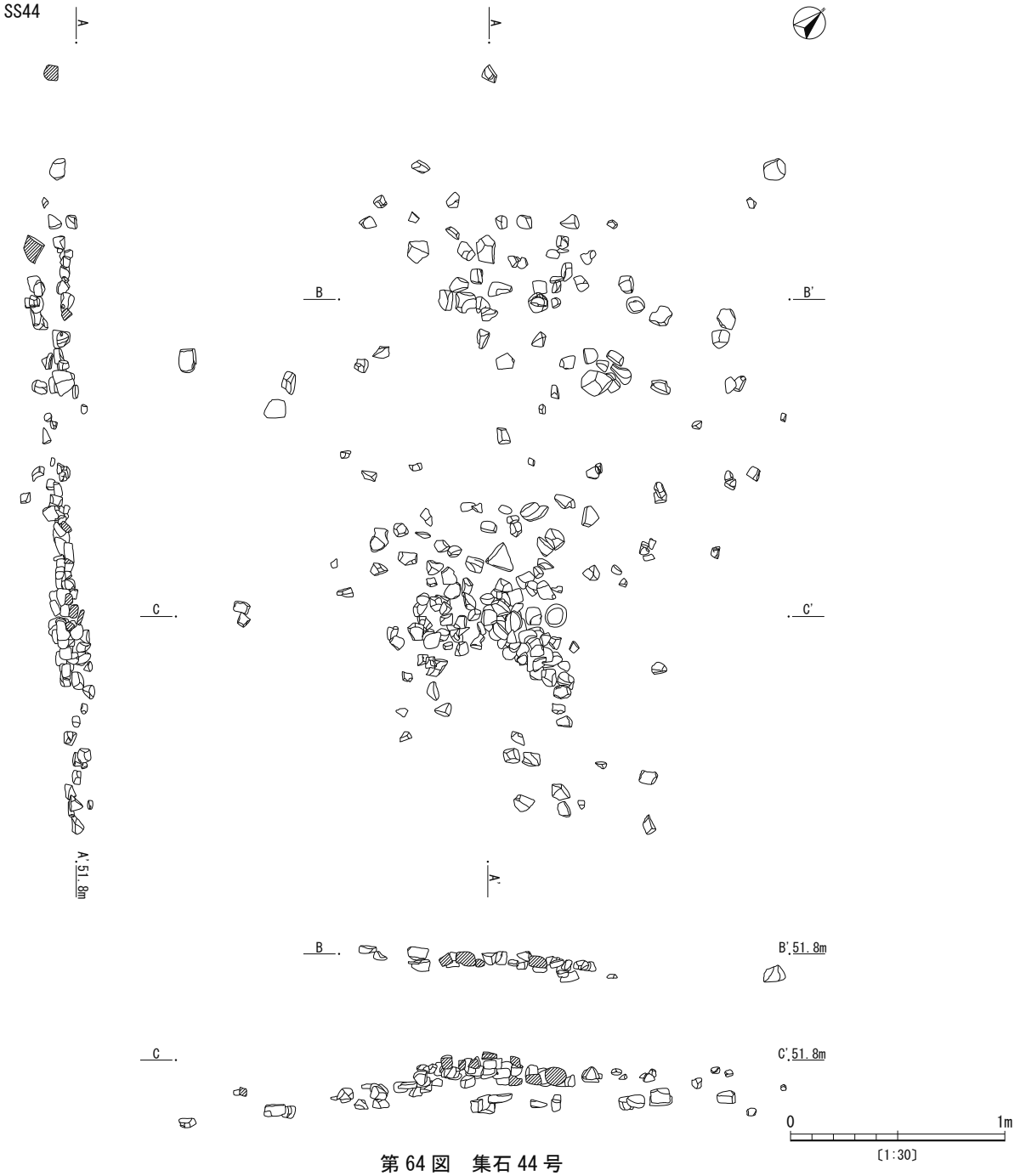
集石 45 号－１・２については，隣接し石材もほぼ同一であるため，元々単一の集石を構成していたものと考えられる。双方合わせての礫総重量は約 12.9kg，平均約 403g である。形態分類はⅢ類である。

集石 46 号（第 66 図）

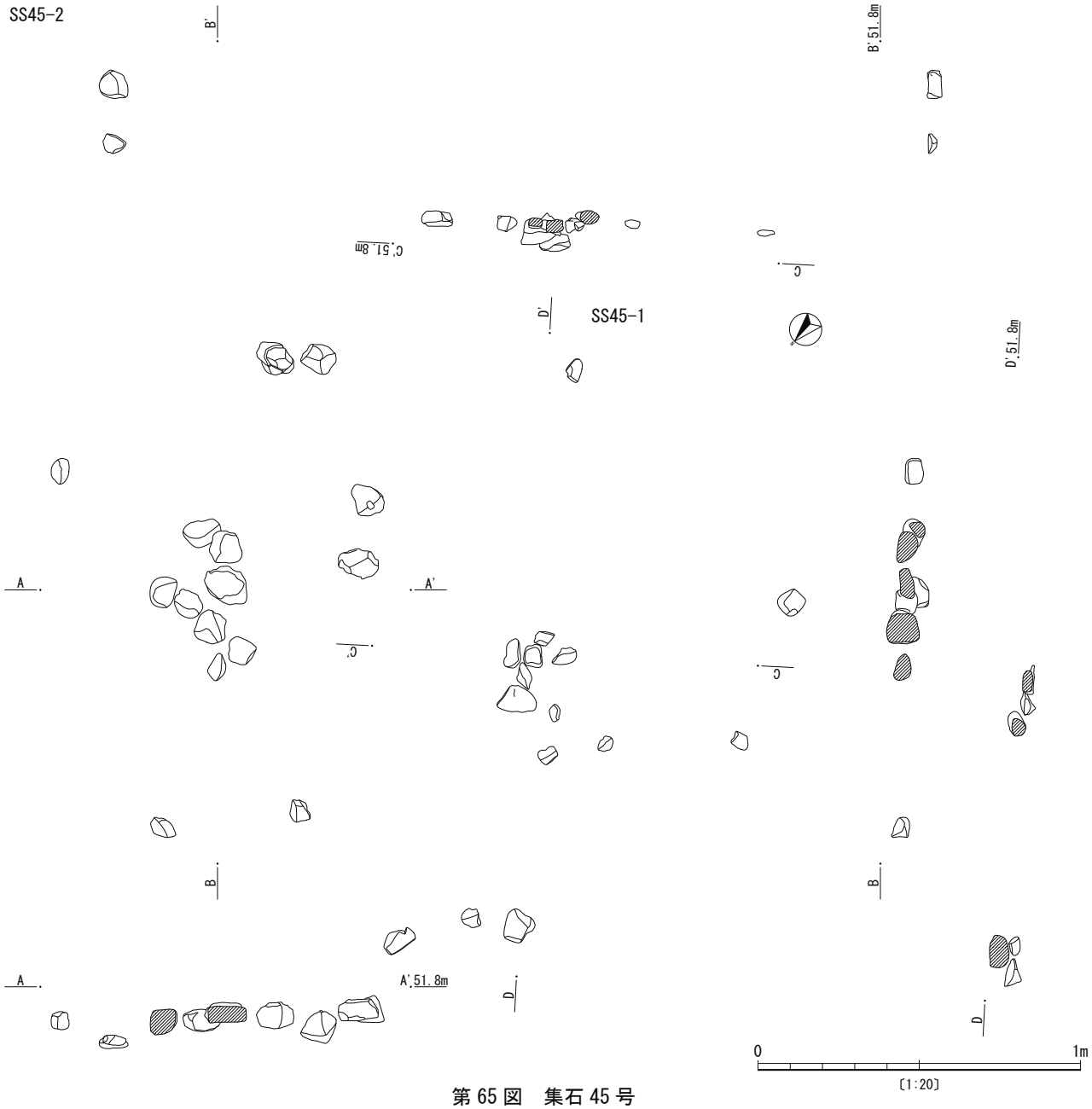
Ｄ－ 51 区のＶｂ層で検出された。110 × 60 ㎝の範囲に，拳大の礫や小石 12 個からなる集石である。石材は安山岩と砂岩の円礫が主だが，砂岩礫のほとんどが小礫である。顕著な被熱痕のあるものはないが，破砕礫は多い。礫総重量は約 1.3kg，平均約 108g である。形態分類はⅢ類である。

集石 47 号（第 66 図）

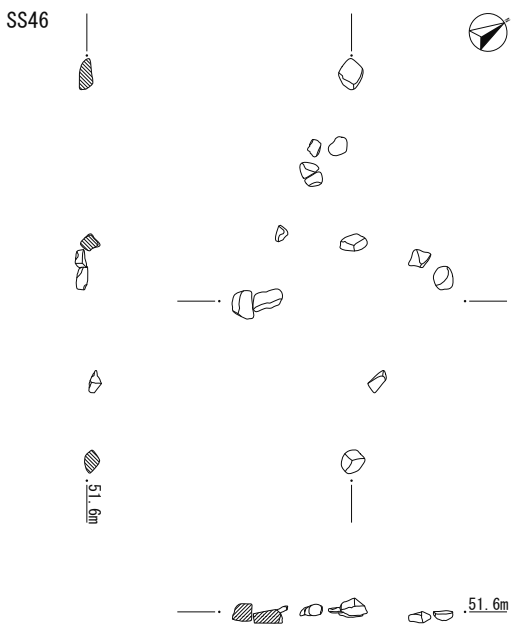
Ｄ－ 51 区のＶｂ層で検出された。130 × 75㎝の範囲に，拳大の礫 12 個からなる集石である。石材は安山岩の円・角礫が多く，他に砂岩の小円礫が２点ある。被熱の目立つもの，破砕礫はほとんどない。礫総重量は約

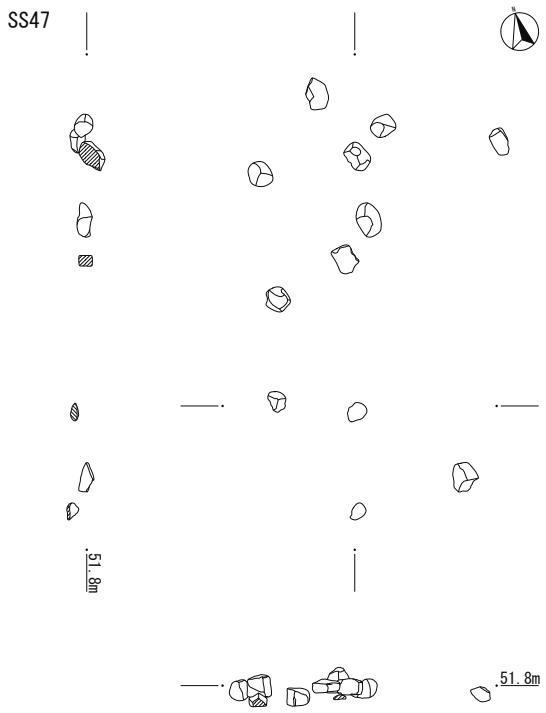


第 64 図　集石 44 号



第 65 図　集石 45 号





2.2kg，平均約 183g である。形態分類はⅢ類である。

すぐ南側で手向山式土器が出土している。

集石 48 号（第 66 図）

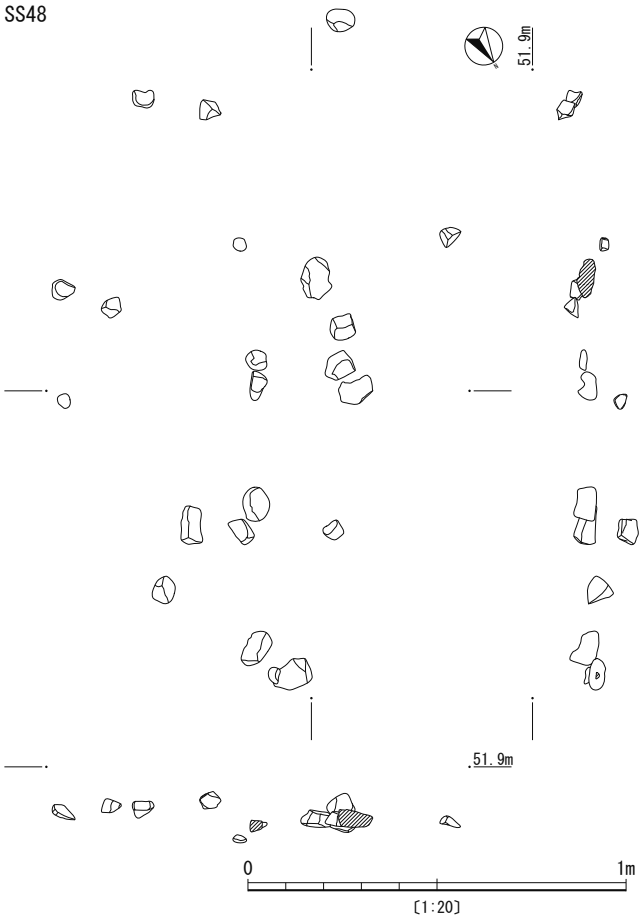
Ｄ－ 51 区のＶｂ層で検出された。180 × 115cm の範囲に，22 個の拳大あるいは小さな礫からなる集石で，５cm ～８cm 大の礫から構成されている。石材はほとんどが安山岩の円礫で，他に安山岩の角礫や砂岩の円礫が少数ある。礫総重量は約 4.3kg，平均約 193g である。形態分類はⅢ類である。

集石 49 号（第 67 図）

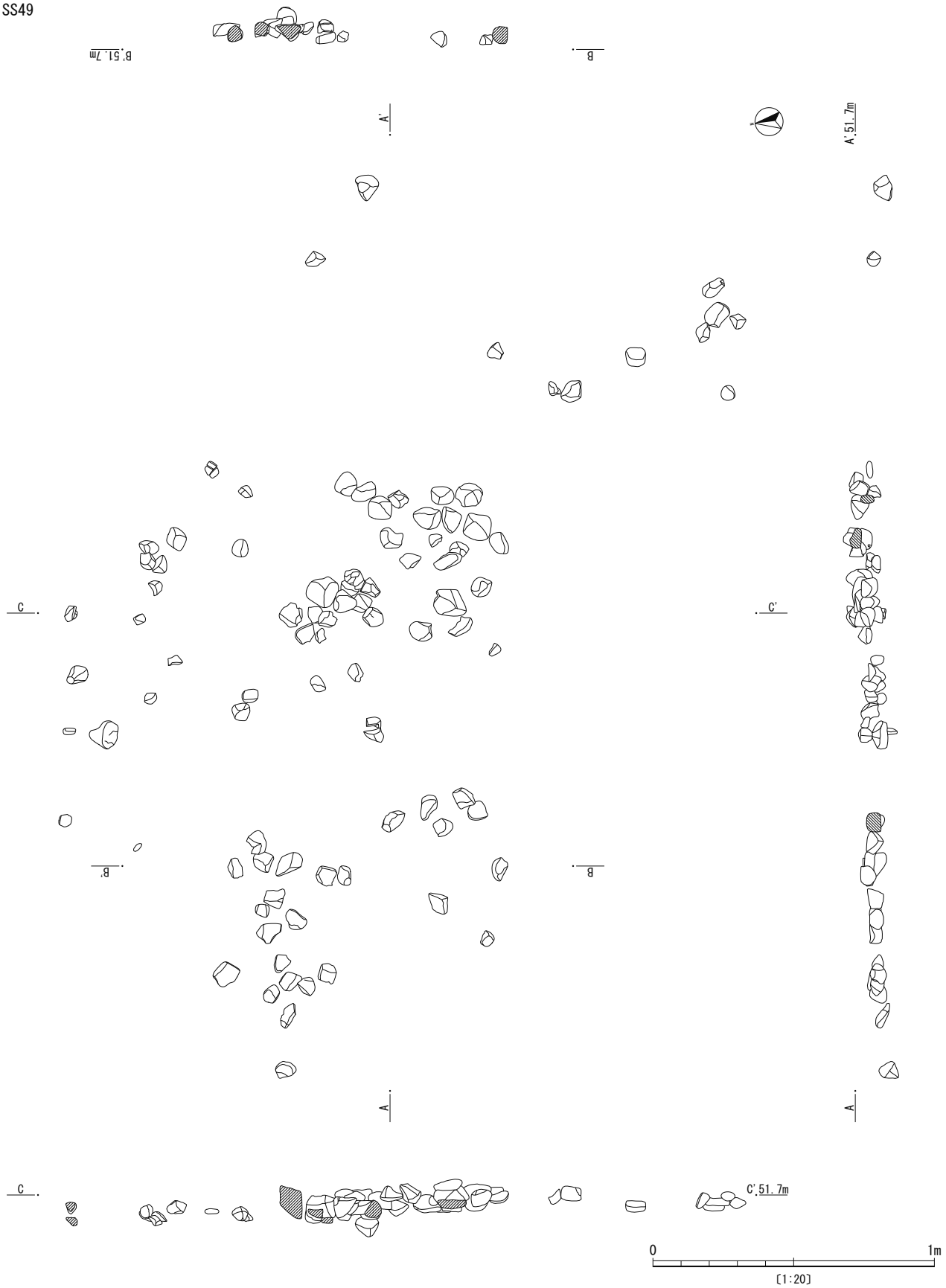
Ｃ・Ｄ－ 51・52 区のⅥ層上面で検出された。340 × 260 cmの範囲に，礫 93 個からなる集石である。東側の径 110cm の範囲に，40 個近くの礫が集中している。ほとんどが安山岩円礫で，他に砂岩の円礫・安山岩の角礫が少数あり，破砕した花崗岩が１個ある。15 cm大の 850g ある大きな礫が３個ある。礫総重量は約 22.1kg，平均約 238g である。本遺跡の他の集石と比較して，集中度が高く，比較的規模の大きい集石である。形態分類はⅡ類である。

集石 50 号（第 68 図）

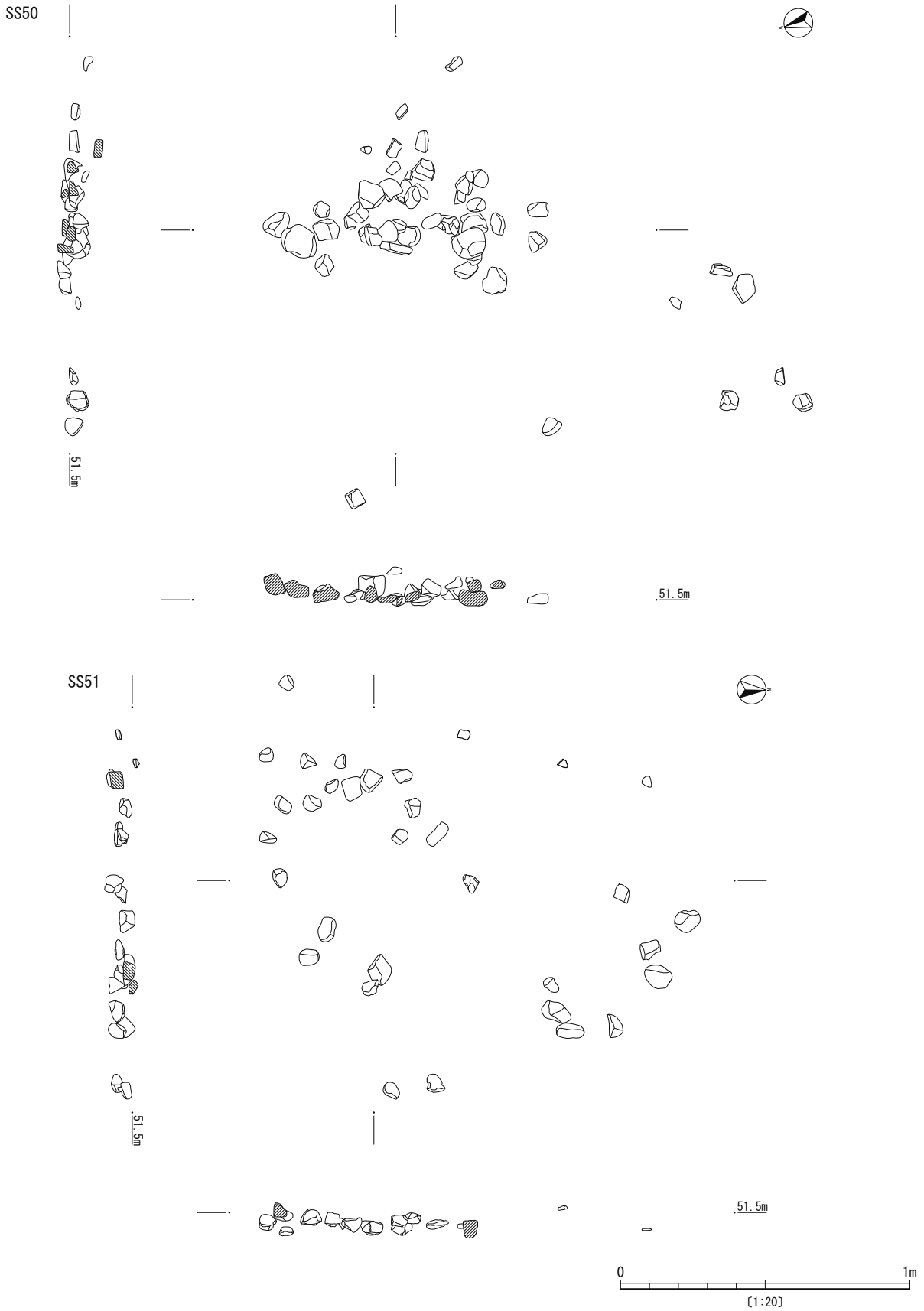
Ｅ－ 51 区のⅥ層上面で検出された。220 × 180 cmの範囲に，拳大の礫 51 個が集中しているが，列状に広がる部分もある。ほぼ平坦面にあり，礫が２段に重なりあっている。110 × 80cm の範囲に，30 個ほどの集中があり，中心部と考えられる。安山岩角礫が多く，他に少数の安山岩と砂岩の円礫が含まれる。小礫も多いが，中央には１kgを越す大きな礫が配置されている。礫総重量は約 10.8kg，平均約 212g である。形態分類はⅡ類である。



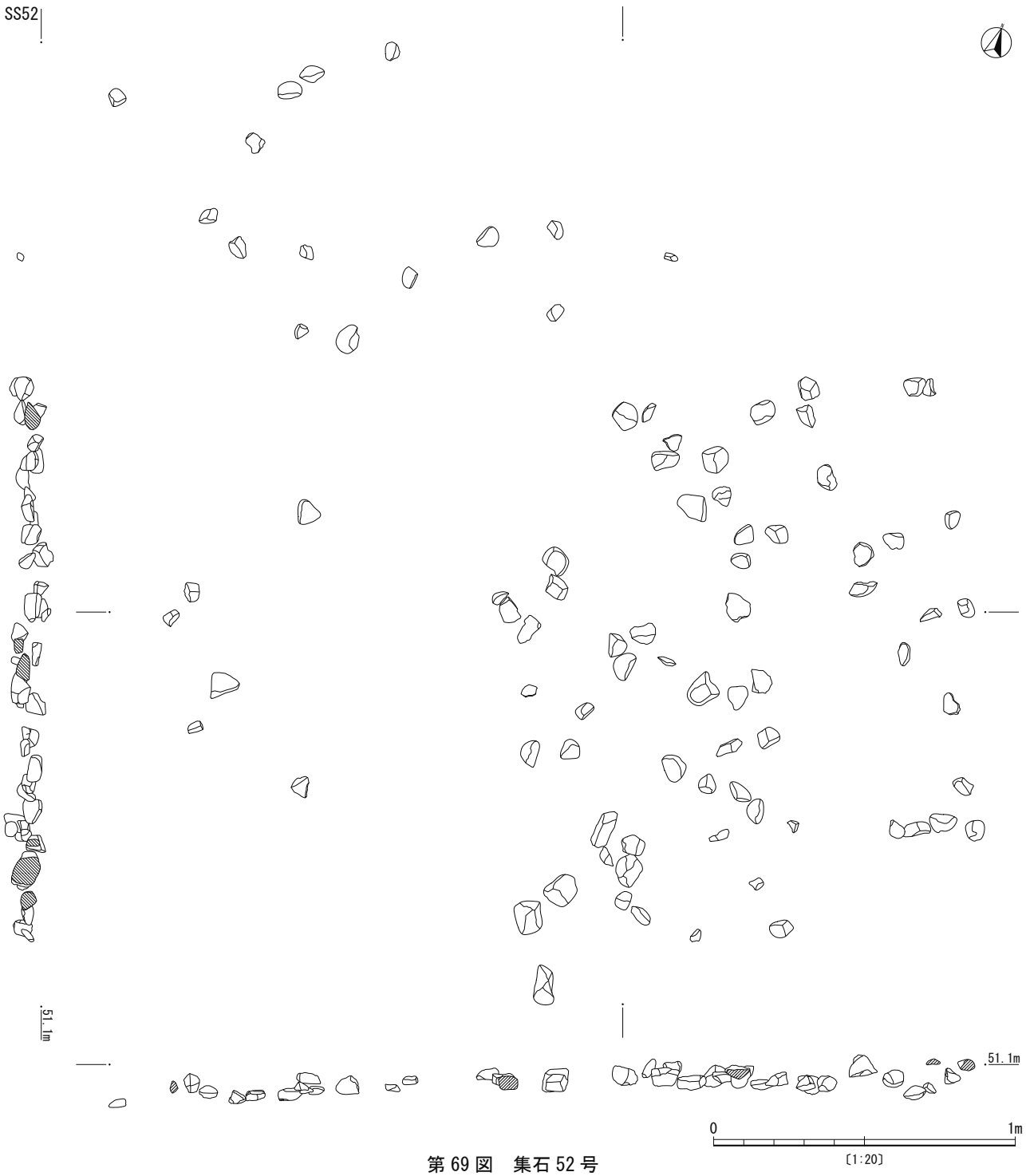
第 66 図　集石 46 ～ 48 号



第67図　集石49号



第 68 図　集石 50・51 号



第 69 図　集石 52 号

集石 51 号（第 68 図）

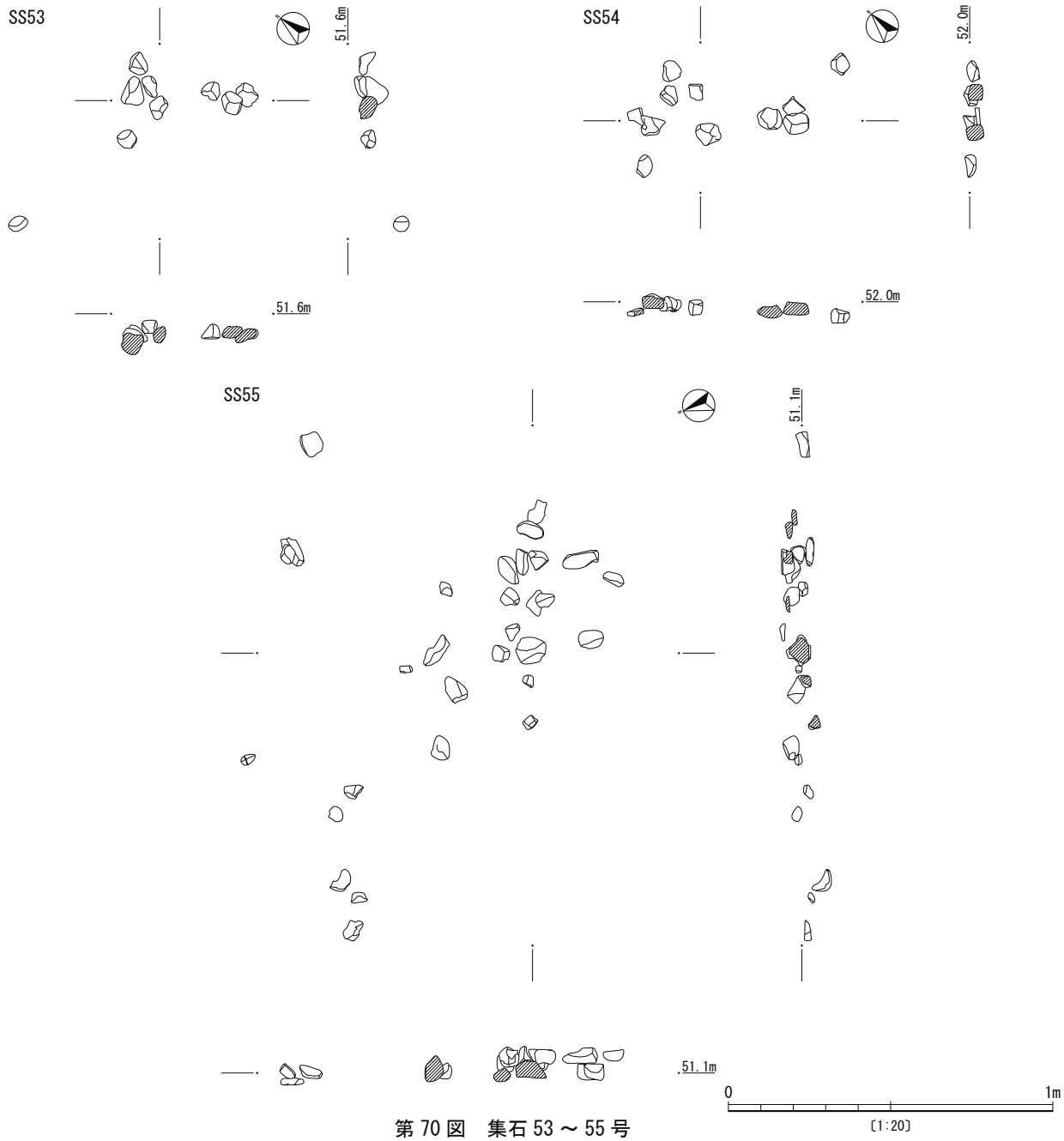
Ｄ－ 51 区のＶｂ層で検出された。170 × 150 ㎝ほどの範囲に，拳大の礫 31 個からなる集石である。石材はほとんどが安山岩の円礫で，他に少数の砂岩の円礫・凝灰岩の円礫がある。被熱痕のある礫や破砕した礫は少ない。礫総重量は約 5.7kg，平均約 185g である。形態分類はⅢ類である。

集石 52 号（第 69 図）

Ｅ・Ｆ－ 49 区のＶｂ層で検出された。330 × 290 ㎝の範囲に，拳大の礫 86 個からなる集石である。南側に大きな礫が集中している。石材は安山岩の円礫が多いが，安山岩角礫もあり，他に砂岩の円礫がある。被熱により赤色化，破砕した礫はあまり見られない。礫総重量は約 20.5kg，平均約 238g である。形態分類はⅢ類である。

集石 53 号（第 70 図）

Ｄ－ 51 区のＶｂ層で検出された。90 × 60 ㎝の範囲に，拳大の礫 9 個からなる集石である。石材は安山岩円礫が主で，他に安山岩角礫，砂岩円礫がみられる。被熱によ



第 70 図　集石 53 ～ 55 号

り赤色化，破砕した礫はない。礫総重量は約 1.7kg，平均約 191g である。形態分類はⅢ類である。

周辺には多くの礫が散在している。

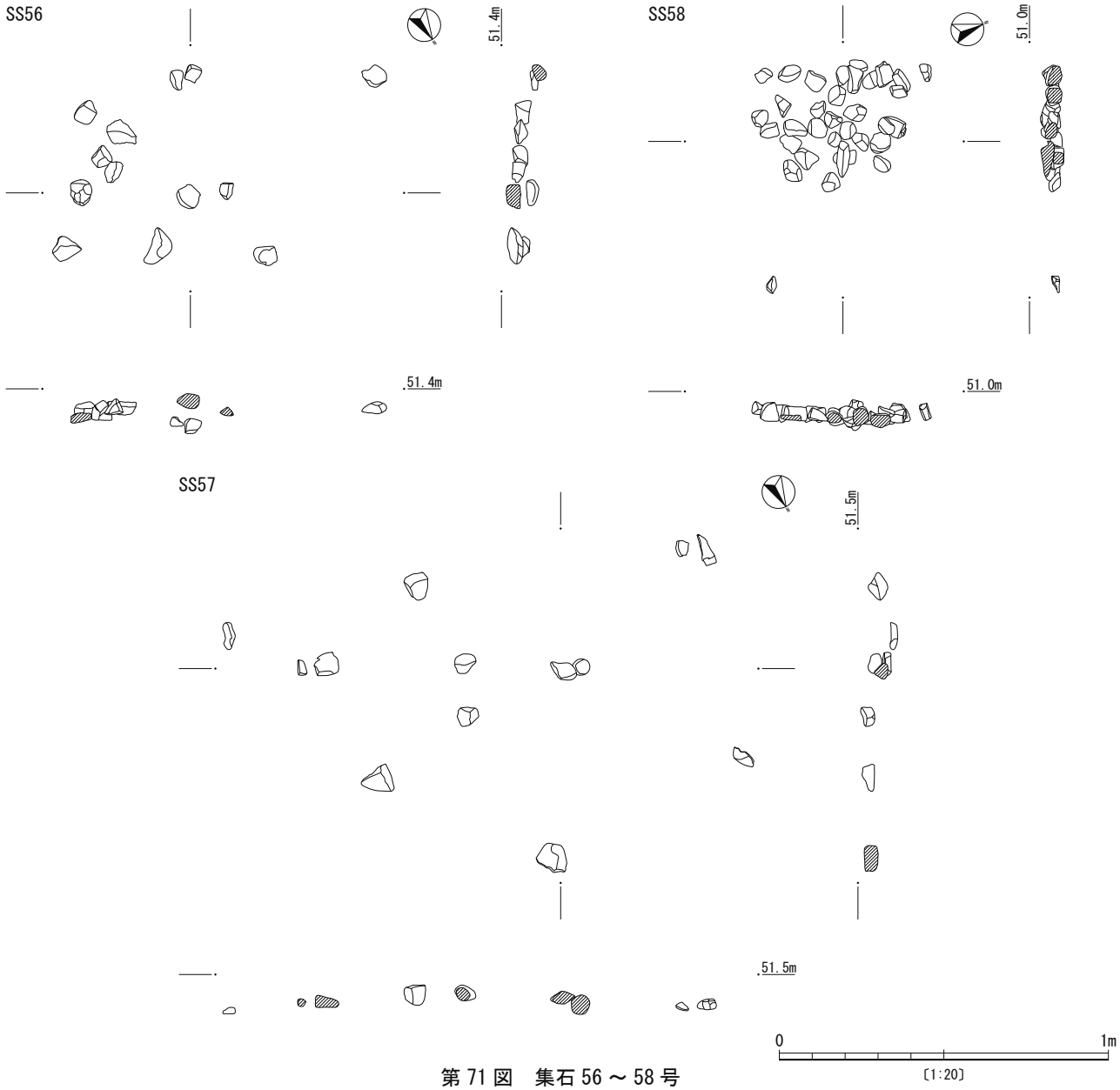
集石 54 号（第 70 図）

Ｆ－ 48 区のＶｂ層で検出された。70 × 40 ㎝の範囲に，拳大より少し小さな礫 11 個からなる集石である。石材は安山岩の円礫と角礫からなり，砂岩円礫も少量ある。被熱した礫，破砕礫はほとんどない。礫総重量は約 1.6kg，平均約 146g である。形態分類はⅢ類である。

集石 55 号（第 70 図）

Ｆ－ 49 区のＶｂ層で検出された。160 × 120㎝の範囲に，拳大の礫 30 個からなる集石である。南西側の一部が，弥生時代の竪穴建物跡による削平をうけており，本来はもう少し礫があったものと思われる。石材は安山岩や砂岩の円礫が多くを占める。礫総重量は約 4.0kg，平均約 138g である。形態分類はⅢ類である。

周辺からは縄文時代早期後葉の土器である苫浜式土器，塞ノ神式土器が出土している。



第 71 図　集石 56 ～ 58 号

集石 56 号（第 71 図）

Ｆ－51 区のⅥ層上面で検出された。110 × 80cm の範囲に，拳大の礫 13 個からなる集石である。東側の径 70cm ほどの範囲に 12 個が集中している。石材は安山岩と砂岩の円礫で構成されている。被熱により赤色化，破砕した礫が少数ある。礫総重量は約 2.3kg，平均約 179g である。形態分類はⅢ類である。

すぐ北側には集石 57 号があり，同様の規模・形態の集石である。

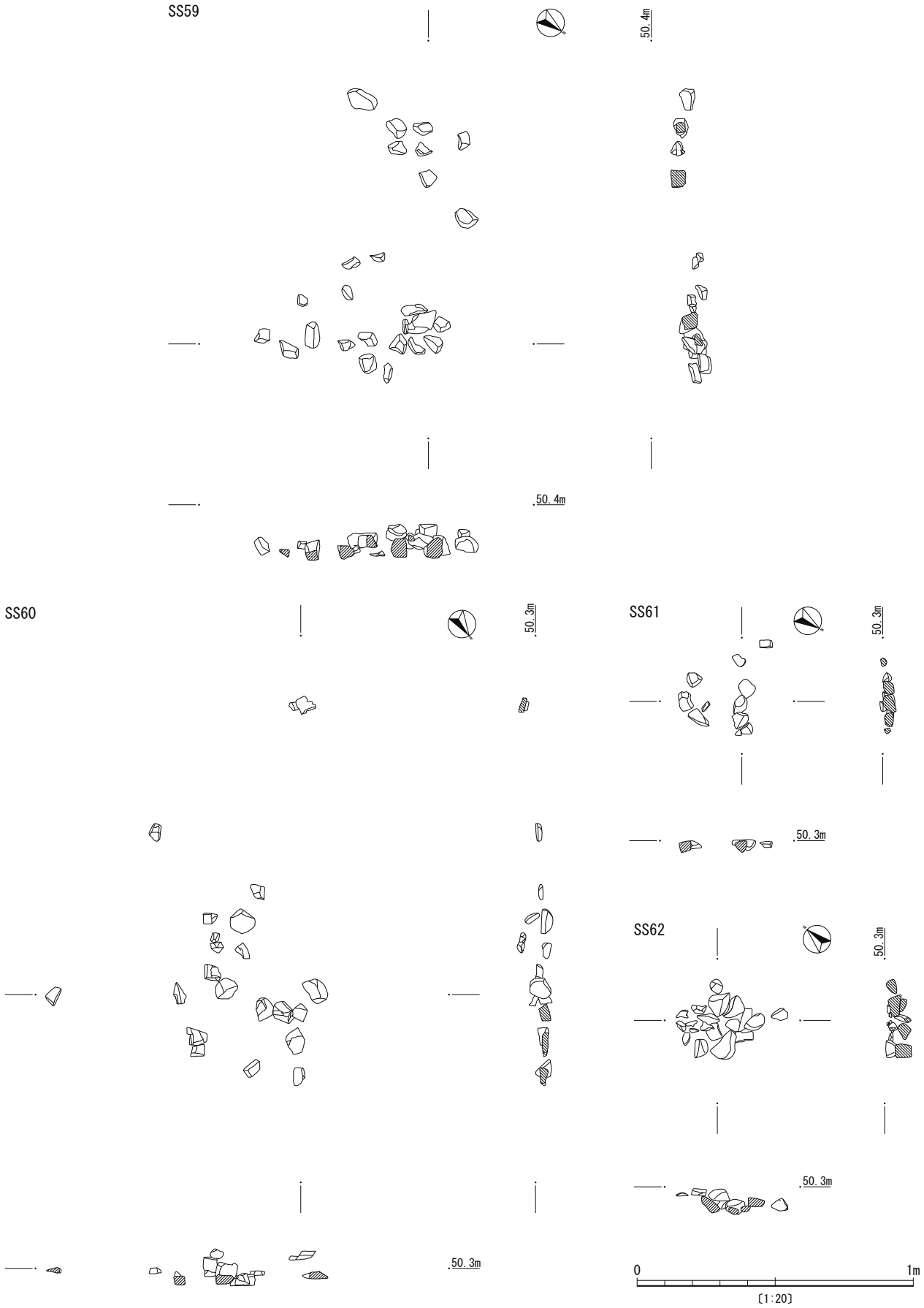
集石 57 号（第 71 図）

Ｆ－51 区のⅥ層上面で検出された。165 × 110cm の範囲に，拳大の礫 13 個からなる集石である。石材は安山岩の円・角礫が主で，他に砂岩の小円礫などが含まれている。被熱により赤色化，破砕した礫は少ない。礫総重量は約 2.3kg，平均約 174g である。形態分類はⅢ類である。

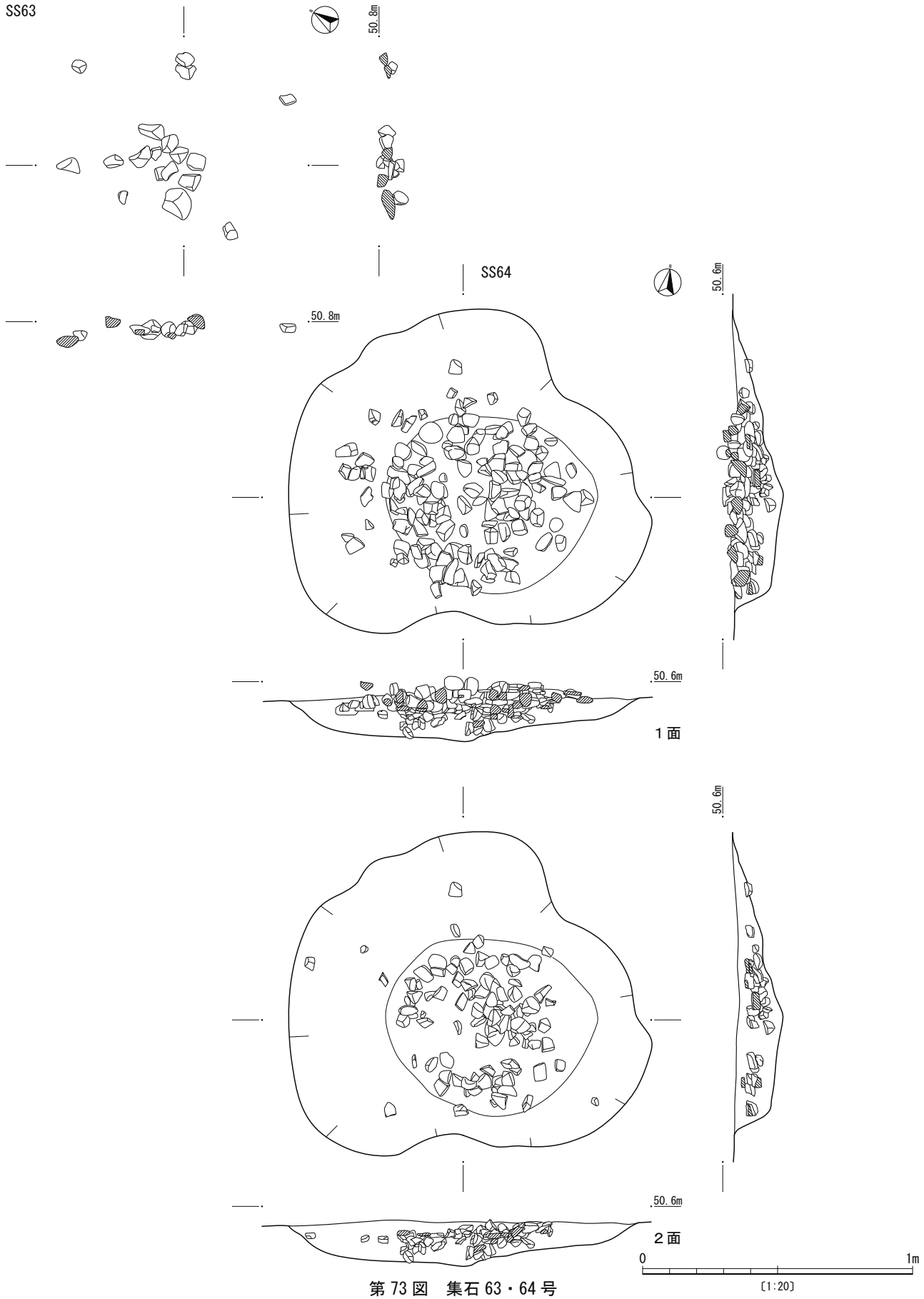
すぐ南側には集石 56 号があり，同様の規模・形態の集石である。

集石 58 号（第 71 図）

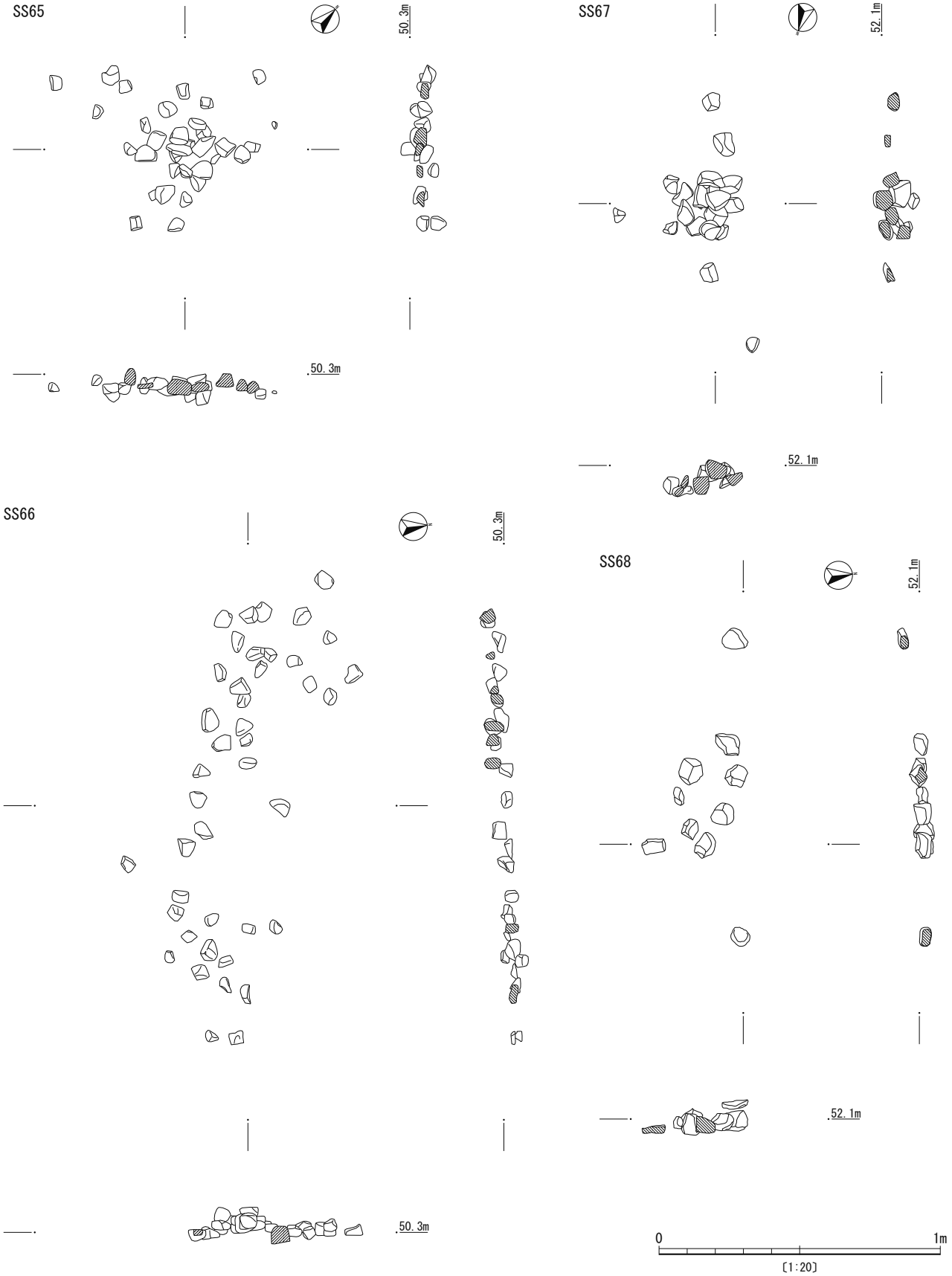
Ｅ－49 区のＶｂ層で検出された。80 × 73cm の範囲に，34 個の小礫が集中している。石材は安山岩と砂岩の円礫から構成され，被熱により赤色化したものが少数ある。礫総重量は約 4.3kg，平均約 128g である。形態分類はⅡ類である。



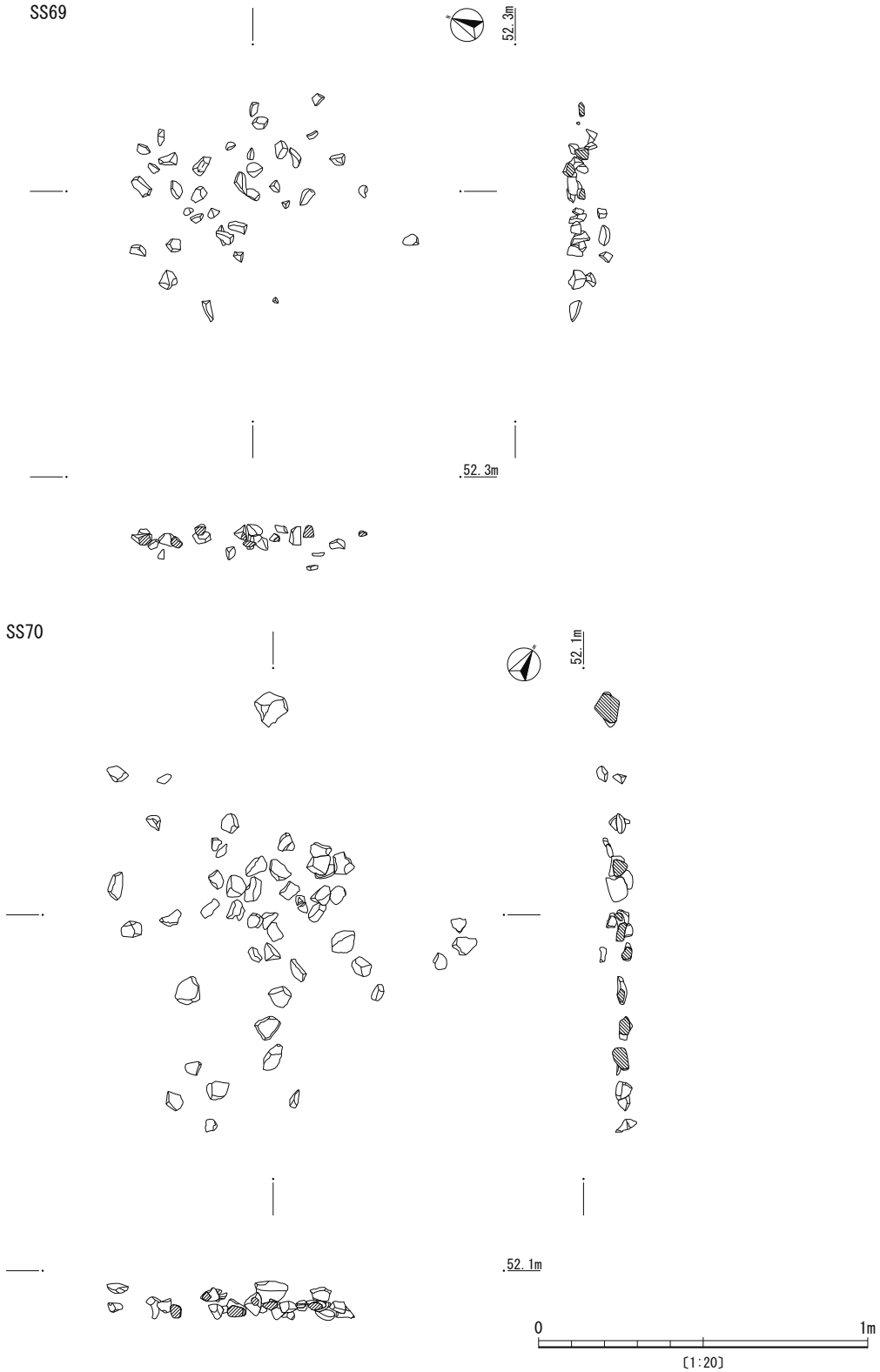
第 72 図　集石 59 ～ 62 号



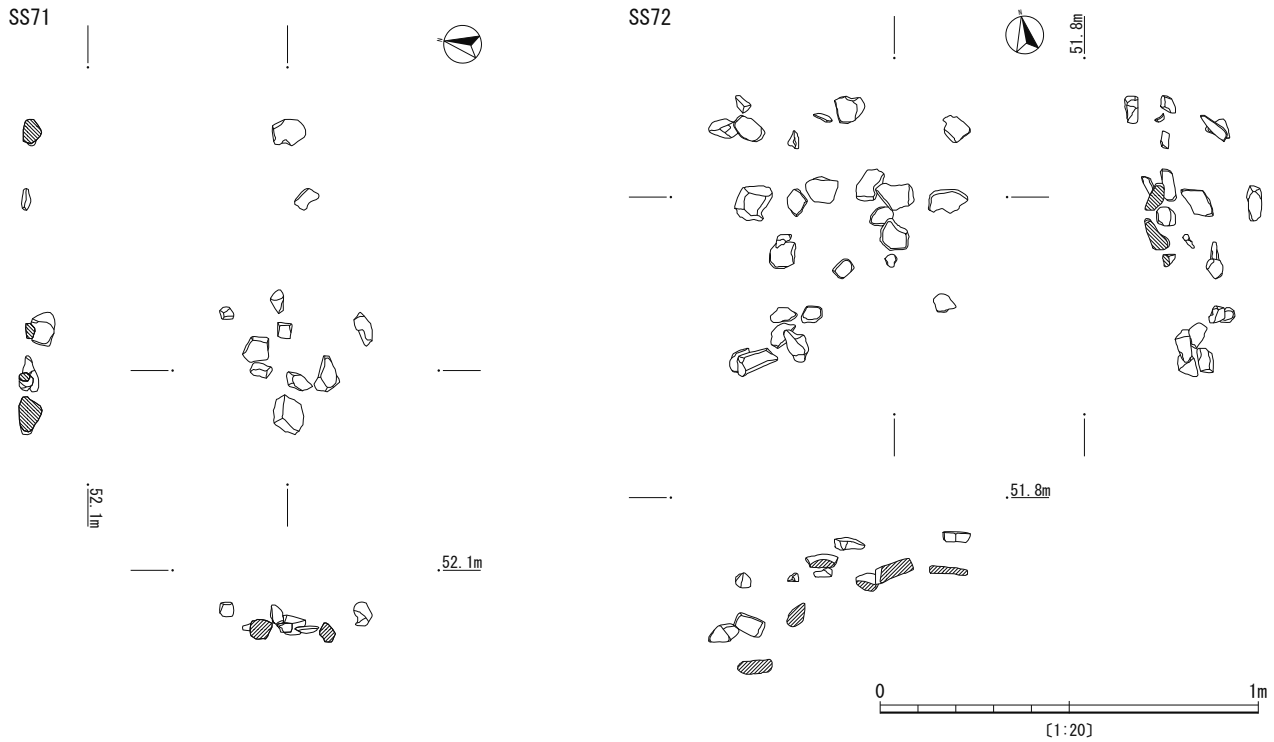
第73図　集石63・64号



第 74 図　集石 65 ～ 68 号



第75図　集石69・70号



第 76 図　集石 71・72 号

集石 59 号（第 72 図）

Ｅ－45 区のⅥ層上面で検出された。115 × 100cm の範囲に，礫 26 個からなる集石である。50 cmの範囲に，礫 10 個が集中しており，この部分に中心部があったと思われる。３～５cm大の安山岩の角礫が主である。若干，被熱し赤化した礫がみられる。礫総重量は約 3.7kg，平均約 141g である。形態分類はⅢ類である。

集石 60 号（第 72 図）

Ｅ－46 区のⅥ層上面で検出された。150 × 110cm の範囲に，礫 21 個からなる集石である。石材は安山岩の被熱破砕礫が多い。礫総重量は約 2.5kg，平均約 120g である。形態分類はⅢ類である。

集石 61 号（第 72 図）

Ｆ－46 区のＶｂ層で検出された。径 40cm の範囲に，10 個の小礫からなる集石である。石材はすべて安山岩で,円礫と角礫が半々である。被熱痕のないものが多い。礫総重量は約 1.0kg，平均約 101g である。形態分類はⅢ類である。

集石 62 号（第 72 図）

Ｆ－46 区のＶｂ層で検出された。40 × 30cm の狭い範囲に，礫 20 個が集中している。拳大のものもあるが，細石も含まれている。石材は，安山岩と砂岩の円礫と角礫からなるが，ほとんどの砂岩は被熱痕が顕著で破砕している。安山岩の中にも被熱痕のあるものが多い。礫総重量は約 2.8kg，平均約 138g である。形態分類はⅡ類である。

集石 63 号（第 73 図）

Ｆ－47 区のＶｂ層で検出された。90 × 70cm の範囲に，拳大の礫 18 個からなる集石である。中央部の径 45cm の範囲に，12 個の礫が集中しており，ここに中心部があったと思われる。石材は砂岩円礫が１個のみで，他は安山岩で，円礫と角礫が半々である。被熱の目立つものが多い。礫総重量は約 3.3kg，平均約 183g である。形態分類はⅢ類である。

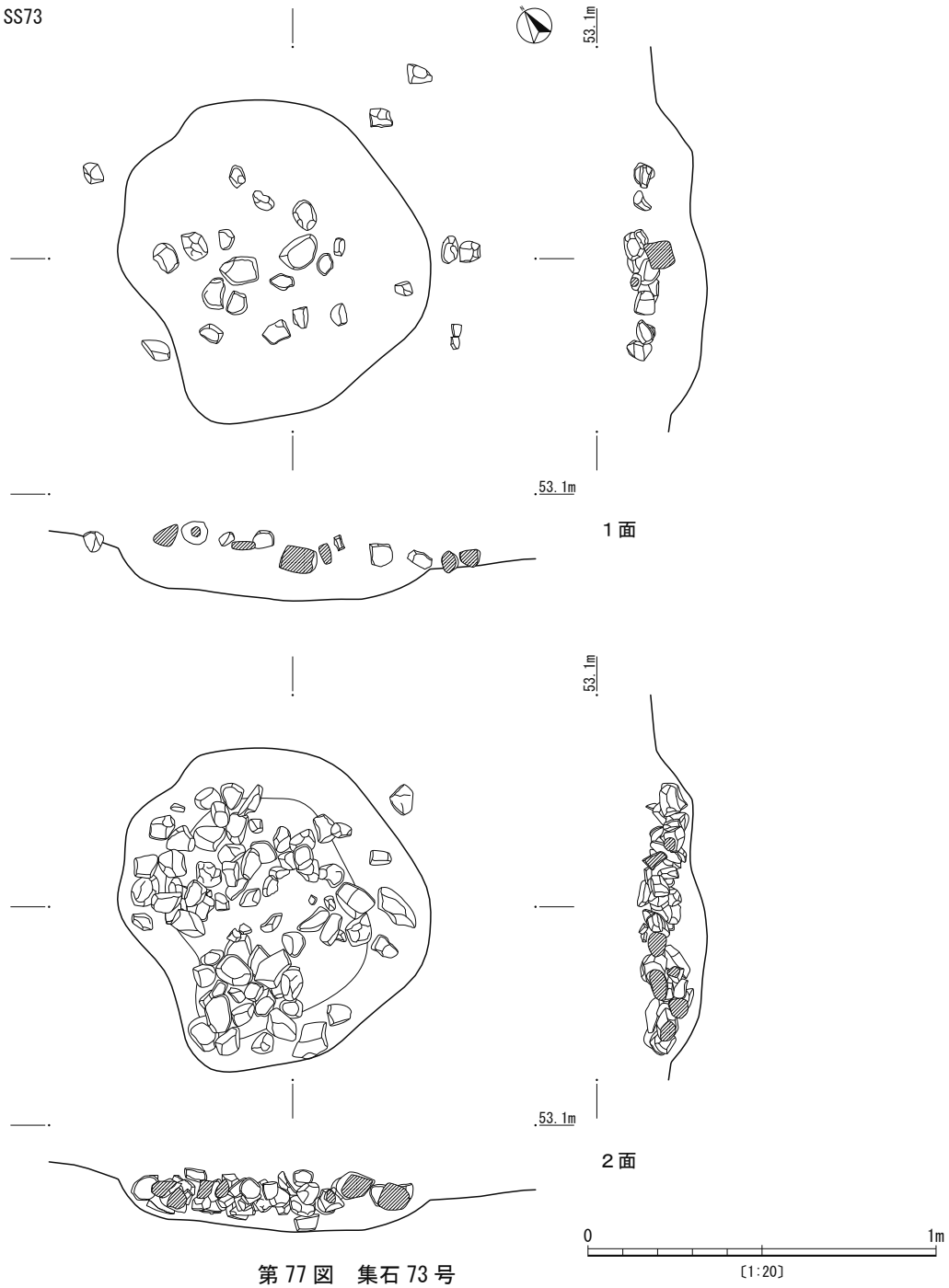
集石 64 号（第 73 図）

Ｆ－47 区のＶｂ層で検出された。平面形は 130 × 112cm，深さ 16 cmの偏楕円形の掘り込みがあり，礫 231 個が集中している。上層は完形の礫が多いが，下層は破砕し，被熱痕が見られるものもある。下層になるほど，礫が小さくなる傾向がある。安山岩の円・角礫が主であるが，砂岩円礫も多い。頁岩の角礫が２個含まれる。

本遺跡の集石としては礫数が最大である。礫総重量は 23.3kg，平均約 101g である。形態分類はⅠ類である。

集石 65 号（第 74 図）

Ｆ－42 区のＶａ層で検出された。80 × 65cm の範囲に，拳大の礫 32 個からなる集石である。安山岩の円・角礫が中心で，他に砂岩円礫が２個ある。被熱痕は見られない。Ⅳｂ層（アカホヤ火山灰）直下で検出し，集石内にアカホヤパミスがみられた。縄文時代早期末葉の可能性がある。礫総重量は約 4.3kg，平均約 135g である。形態分類はⅡ類である。



第77図　集石73号

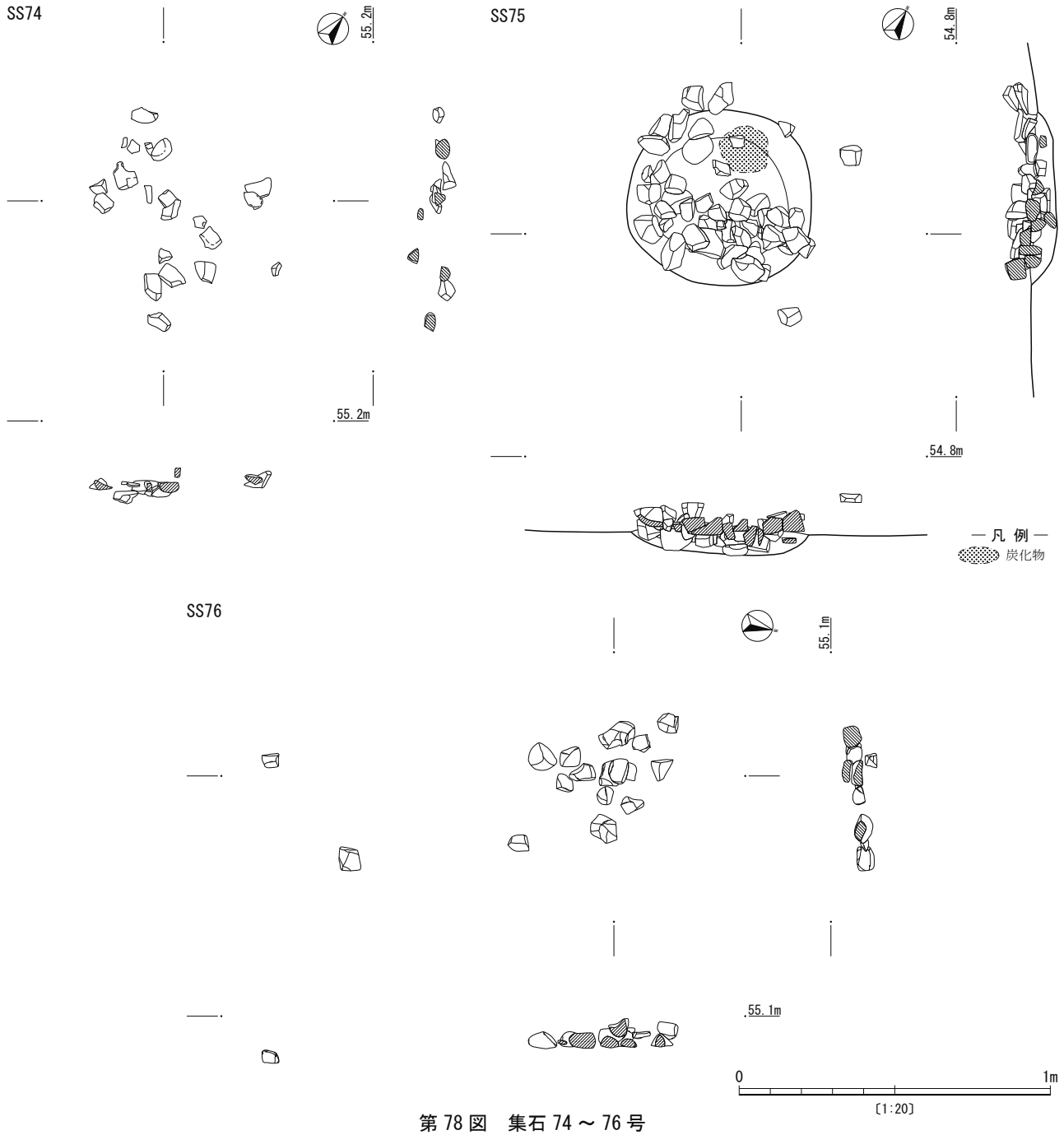
集石66号（第74図）

Ｆ－42区のＶａ層で検出された。180×100cmの範囲に，拳大の礫41個からなる集石である。西側90×70cmの範囲に，25個の礫が集中していることから，ここが中心部と思われる。石材は安山岩円礫が中心で，他に安山岩角礫，砂岩円礫がある。被熱痕のあるもの，破砕したものは少ない。礫総重量は約4.9kg，平均約120gである。形態分類はⅢ類である。

集石67号（第74図）

Ｆ－38区のＶｂ層で検出された。100×55cmの範囲に，礫19点が集中している。安山岩の角礫が中心で，大きさも一定している。被熱痕が見られない礫が多い。礫総重量は約4.5kg，平均約239gである。形態分類はⅡ類である。

周辺から礫等の出土はあまりなく，本集石と集石68号が他の集石とは孤立して検出されている。周辺からは石坂式土器と思われる土器片が出土している。



第 78 図　集石 74 ～ 76 号

集石 68 号（第 74 図）

Ｈ－ 37・38 区のⅥ層上面で検出された。120 × 50 ㎝の範囲に，礫 10 個からなる集石である。石材は 10㎝大の安山岩角礫が中心である。礫総重量は約 2.6kg，平均約 260g である。形態分類はⅢ類である。

周辺からは礫等の出土もあまりみられず，本集石と集石 60 号が他の集石とは孤立して検出されている。周辺からは石坂式土器と思われる土器片が出土している。

構成礫中には，ホルンフェルスの剥片が１点（53）含まれている。

集石 69 号（第 75 図）

Ｈ－ 37 区のⅥ層上面で検出された。85 × 70㎝の範囲に，３～７㎝大の礫 38 個からなる集石である。石材は安山岩角礫がほとんどで，頁岩が少数含まれている。被熱の痕跡が認められる礫が多い。礫総重量は約 2.8kg，平均 70g である。形態分類はⅢ類である

第 79 図　集石 77・78 号

集石 70 号（第 75 図）

Ⅰ－37 区のⅥ層上面で検出された。135 × 113cm の範囲に，５～10cm 程度の礫 48 個からなる集石である。礫の集中度は低い。使用後，必要な礫だけを取り出し廃棄された礫群と考える。５cm 大の角礫が多く，石材は砂岩が主体で他には安山岩が見られる。全体の半数程度が破砕礫で，被熱により赤化しているものが半数程度見られる。礫総重量は約 7.2kg，平均約 150g である。形態分類はⅢ類である。

集石 71 号が南東２m の位置にあり，石材もほぼ同一であるため，元々単一の集石を構成していたものと考えられる。

集石 71 号（第 76 図）

Ⅰ－37 区のⅥ層上面で検出された。83 × 40cm の範囲に，３～５cm 程度の礫 11 個からなる集石である。石材は砂岩が主体で他には安山岩もある。破砕礫は半数ほどで被熱痕はあまり目立たない。礫総重量は約 1.9kg，平均約 174g である。形態分類はⅢ類である。

集石 70 号が南東２m の位置にあり，石材もほぼ同一であるため，元々単一の集石を構成していたものと考えられる。

集石 72 号（第 76 図）

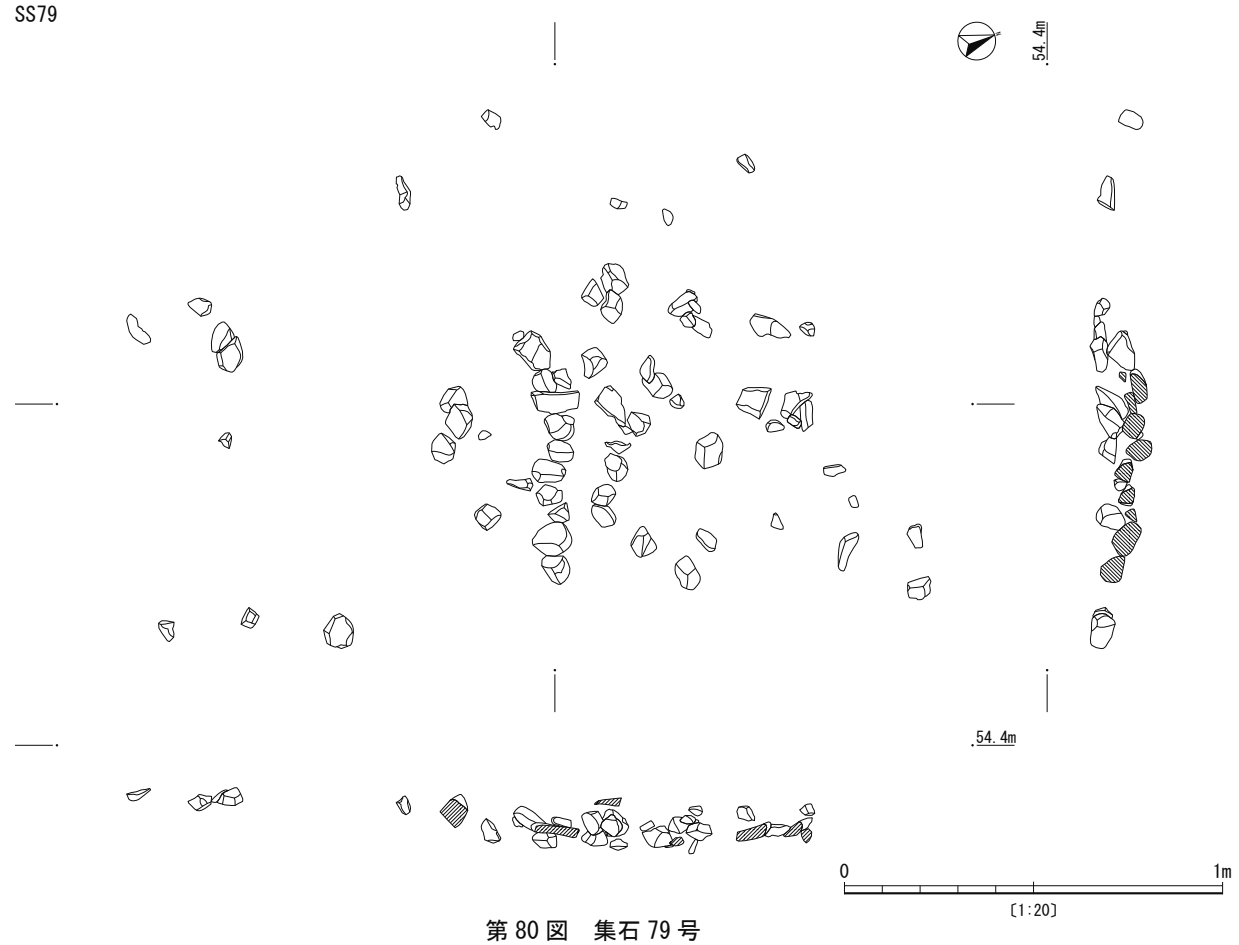
Ｊ－38 区のⅥ層上面から検出された。89 × 80cm の範囲に，５～12cm 程度の礫 26 個からなる集石である。石材は砂岩が多く，ほかに安山岩の角礫がみられる。礫の半数程度に被熱の痕跡が見られる。高低差のある状況で検出されたが，斜面の落ち際のため，礫が散乱した可能性がある。石材は砂岩・安山岩から構成される。礫総重量は約 5.0kg，平均約 192g である。形態分類はⅢ類である。

集石 73 号（第 77 図）

Ｋ－33 区のⅥ層で検出された。平面形は 93 × 83cm，深さ 24cm の偏楕円形の掘り込みがあり，礫は 112 個が集中している。石材はほとんどが安山岩角礫で，他には花崗岩，泥岩の角礫が少数含まれている。被熱の痕跡があるもの，破損しているものが多い。300g を超す大型礫があり，中には１kg 超のものも２点ある。礫総重量は約 34.2kg，平均は約 305g である。形態分類はⅠ類である。

集石 74 号（第 78 図）

Ⅰ－26 区のⅤ層で検出された。80 × 80cm の範囲に，５～10cm 程度の礫 21 個からなる集石である。使用後に必要な礫だけを取り出し，廃棄された礫群と考える。凝灰岩角礫の被熱破砕礫が多い。礫総重量は約 1.8kg，平均約 85g である。形態分類はⅢ類である。



第 80 図　集石 79 号

集石 75 号（第 78 図）

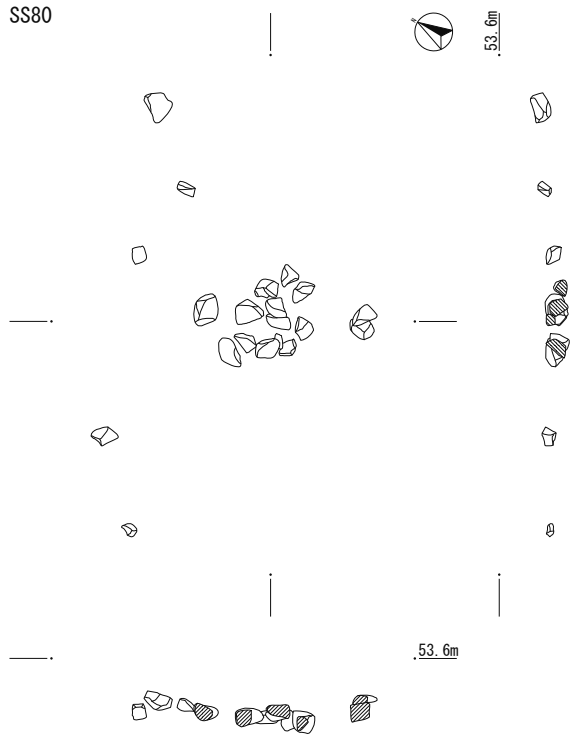
Ｇ・Ｈ－ 27 区のＶ層で検出された。70 × 60cm のほぼ円形の範囲に，５～15cm程度の礫49個が検出された。検出面からの深さ８cm の浅い掘り込みがある。礫集中部の北西側に炭化物の集中が認められた。この炭化物を年代測定した結果，8120 ± 25 年ＢＰの年代値が得られた。石材はすべて安山岩で，角礫が多くほとんどの礫に被熱の痕跡がある。礫総重量は約 14.0kg，平均約 287g である。形態分類はⅠ類である。

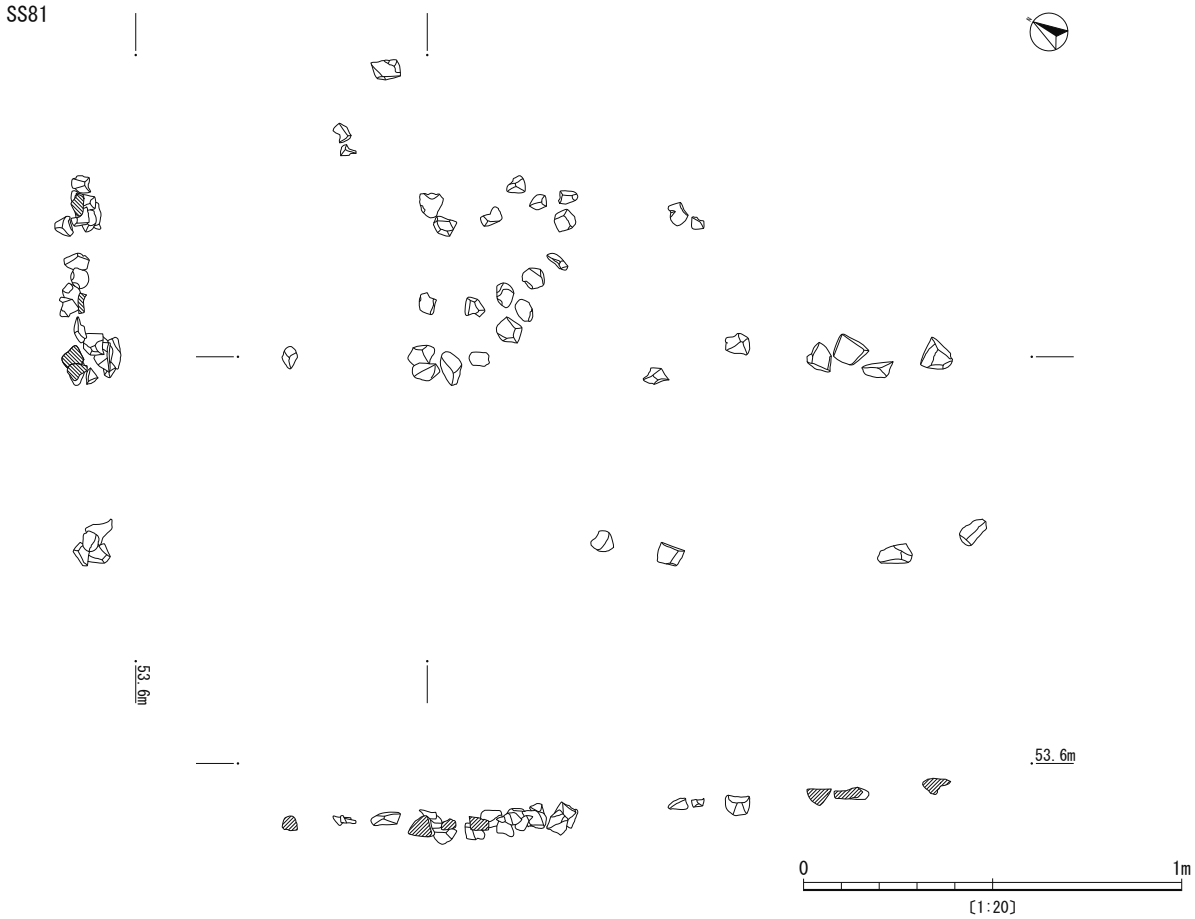
集石 76 号（第 78 図）

Ｈ・Ｉ－ 26・27 区のⅥ層で検出された。微高地最頂部の南東側斜面に位置し，131 × 42cm の範囲に，５～10cm の礫 17 個からなる集石である。径 50cm の範囲に，15 個の礫が集中し，ほぼ平坦に配置されている。石材はすべて安山岩で川原石が多く，破砕しているものが多い。やや赤色化した礫も見られるが，多くは被熱痕が目立たない。礫総重量は約 3.7kg，平均約 218g である。形態分類はⅢ類である。

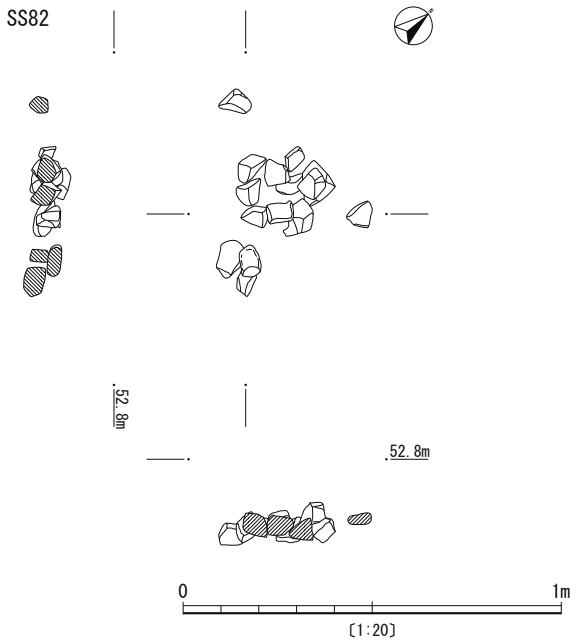
集石 77 号（第 79 図）

Ｈ－ 25 区のⅥ層で検出された。185 × 162cm の範囲に，５cm 大の礫 72 個からなる集石である。100 × 80cm の範囲に，60 個ほどの礫が集中しその周りに数個の礫が散





第 81 図　集石 80・81 号



第 82 図　集石 82 号

在している。使用後必要な礫だけを取り出し，廃棄された礫群と考える。石材は凝灰岩，安山岩の角礫が多く，中心部に被熱の痕跡がある礫が集中している。小礫が多い。礫総重量は約 2.6kg，平均約 36g である。形態分類はⅢ類である。

集石 78 号（第 79 図）

Ｆ－25 区のⅥ層上面で検出された。142 × 88cm の範囲に，５～10cm 程度の礫 78 個からなる集石である。石材は安山岩角礫がほとんどで，他には砂岩や凝灰岩，ホルンフェルスの角礫がある。被熱破砕礫が非常に多い。使用後必要な礫だけを取り出し，廃棄された礫群と考える。礫総重量は約 4.2kg，平均約 54g である。形態分類はⅢ類である。

周辺からは下剥峯式土器と思われる貝殻刺突文土器が検出されている。

集石 79 号（第 80 図）

Ｋ－23 区のⅥ層上面から検出された。224 × 158cm の範囲に，５～10cm程度の礫67個からなる集石である。中心部の東西方向に，列状の礫配置が見られ，ある程度密集している 125 × 100cm の範囲が集石の中心部と考えられる。石材は安山岩角礫が主で，凝灰岩も見られる。ほとんどの礫に被熱痕がある。礫総重量は約 11.3kg，平均約 169g である。形態分類はⅡ類である。

構成礫中には，磨石と思われる石器１点（51）が含まれ，磨石を再度使用したものと考える。

集石 80 号（第 81 図）

Ｋ－20 区のⅥ層上面で検出された。118 × 73cm の範囲に，20 個の礫からなる集石である。そのうち 50 × 30cm の範囲に，５～10cm 大の礫 15 個がある程度集中している。石材はほとんどが安山岩角礫で，破損したものは少なく，被熱の痕跡は目立たない。礫総重量は約 2.5kg，平均約 123g である。形態分類はⅢ類である。

ほぼ同規格の集石 81 号が北西約２ｍの位置にある。周辺に塞ノ神Ｂ式土器に比定される土器片が見られることから，縄文時代早期後葉の集石と思われる。

集石 81 号（第 81 図）

Ｊ－19 区のＶａ層で検出された。検出 180 × 130cm の範囲に，34 個からなる集石である。50 × 70cm の範囲に，18 個の礫が集中し，その北側に４個，南側に 12 個の礫が散在している。ほとんどが安山岩角礫で，破損したものは少ない。いずれも被熱しているが，顕著に赤化しているものは少ない。礫総重量は約 4.8kg，平均約 140g である。形態分類はⅢ類である。

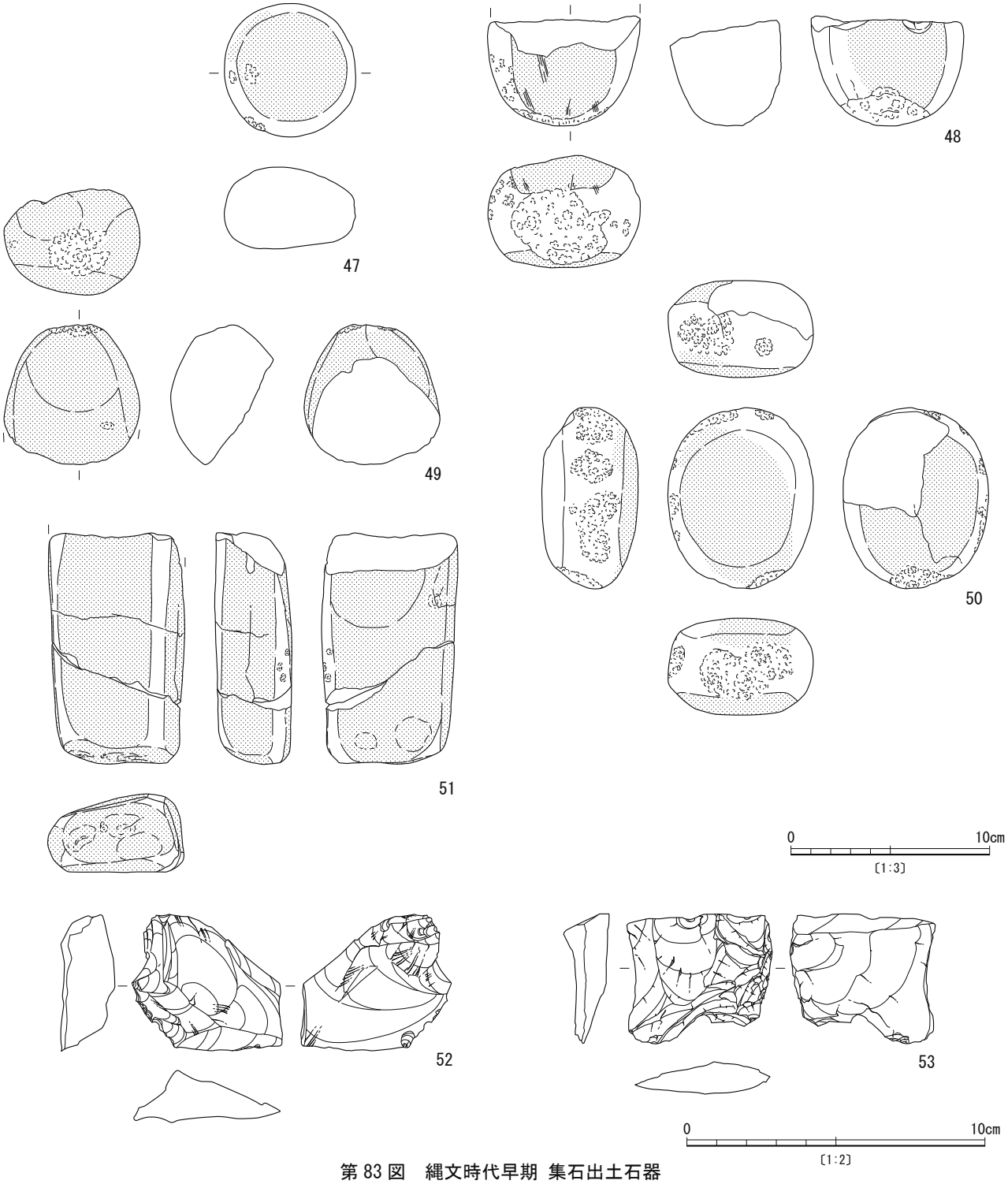
ほぼ同規格の集石 80 号が南東約２ｍの位置にある。周辺からは塞ノ神Ｂ式土器に比定される土器片が出土している。

集石 82 号（第 82 図）

Ｉ－20 区のⅥ層上面で検出された。51 × 39cm の範囲に，10cm 程度の礫 15 個からなる集石である。石材はすべて安山岩角礫で被熱の痕跡は目立たない。礫総重量は約 3.9kg，平均約 257g である。形態分類はⅢ類である。この周辺にはほかに集石はなく，散礫もほとんどなかった。

３　集石出土石器（第 83 図 47 ～ 53）

一部の集石内にて若干の石器類がみられている。包含層中における分布，あるいは集石の構成礫として利用されたものであるが，ある程度の帰属を考慮して７点を抽出した。内訳は，集石 35 号に磨石類１点（47），集石 40 号に磨石類１点（48），集石 41 号に二次加工剥片１点（52），集石 42 号に磨石類２点（49・50），集石 68 号に剥片１点（53），集石 79 号に磨石類１点（51）である。47 ～ 51 の５点は磨石類である。47 は小型の円礫に磨り面をもつ。48 ～ 50 は欠損品であり，磨り面の他，敲打痕を端部ないし側面部に併せ持つ。これらの石材は 47・49・50 が安山岩，48 が砂岩であり，いずれも幾らかの被熱痕がみられる。51 は円形の形態とは異なり，角の落ちた角柱状の礫を用いた磨石である。敲石としての敲打痕はみられなが，破損して三分し，そのうち２点が集石 79 号内で接合している。被熱赤化は非常に弱く，破片それぞれの被熱度合にも差異がある。石材は砂岩である。52 は削器ともいえる珪質頁岩製の二次加工剥片である。厚みのある不定形剥片を用いて，その打面を除く整形剥離を腹面側に施しており，刃部となる鋭い左側縁から下縁にかけて微小剥離痕が生じている。特に被熱痕はみられない。53 はホルンフェルス製の不定形剥片である。薄く鋭い側縁をもち，同一打面からの剥離痕による背面構成にある。特に被熱痕はみられない。



第 83 図　縄文時代早期 集石出土石器

第４表　縄文時代早期埋設土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	層	取上番号	部位	分類番号	調整 外面	調整 内面	文様	色調 外面	色調 内面	胎土 白石	胎土 茶石	胎土 黄白石	胎土 雲母	胎土 石英	胎土 灰石	胎土 黒石	胎土 赤石	胎土 角閃石	焼成	備考
37	46	SK1	①	－	ほぼ完形	Ⅸ	横ナデ	横・縦ナデ	貝殻条痕による斜格子文，沈線文，口唇：刻目	明黄褐	にぶい黄褐	○	○	○			○				良	口径 15.0cm，底径 5.0cm，器高 13.8 cm

第５表　縄文時代早期集石出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	遺構名	層	取上番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
83	47	磨石類	SS35	Ⅴb	13138	6.7	6.6	4.1	277.6	安山岩	
83	48	磨石類	SS40	Ⅴb	13281	(5.5)	(7.7)	(5.6)	281.9	砂岩	
83	49	磨石類	SS42	Ⅴb	13142	(7.0)	6.9	(5.2)	289.6	安山岩	
83	50	磨石類	SS42	Ⅴb	13280	9.1	7.3	4.8	426.7	安山岩	
83	51	磨石類	SS79	Ⅵa	(79-21・53)	(11.5)	(6.8)	3.9	513.7	砂岩	
83	52	二次加工剥片	SS41	Ⅴb	13150	4.6	5.0	1.8	37.7	ホルンフェルス	
83	53	剥片	SS68	Ⅴa	(68-2)	4.3	4.9	1.5	27.5	ホルンフェルス	

３　遺構外出土土器

（１）概要

遺構外からは縄文時代早期前葉から後葉までの土器が出土した。総点数は1,909点を数え，その内，277点を図化し掲載する。図化した土器は形態と文様構成から，様相不明なものを含めて26類に分類した。小片などで分類が行えなかったものは，XIII類不明土器としてカウントを行い，分布図に反映させた。

掲載については前節に引き続き，調査区東部55～41ライン，中央部40～30ライン，西部29～19ラインという順で行う。調査区東部では集石遺構の検出数と比例するように土器の出土も本遺跡当該期で最も多く，型式幅も広い傾向がみられた。

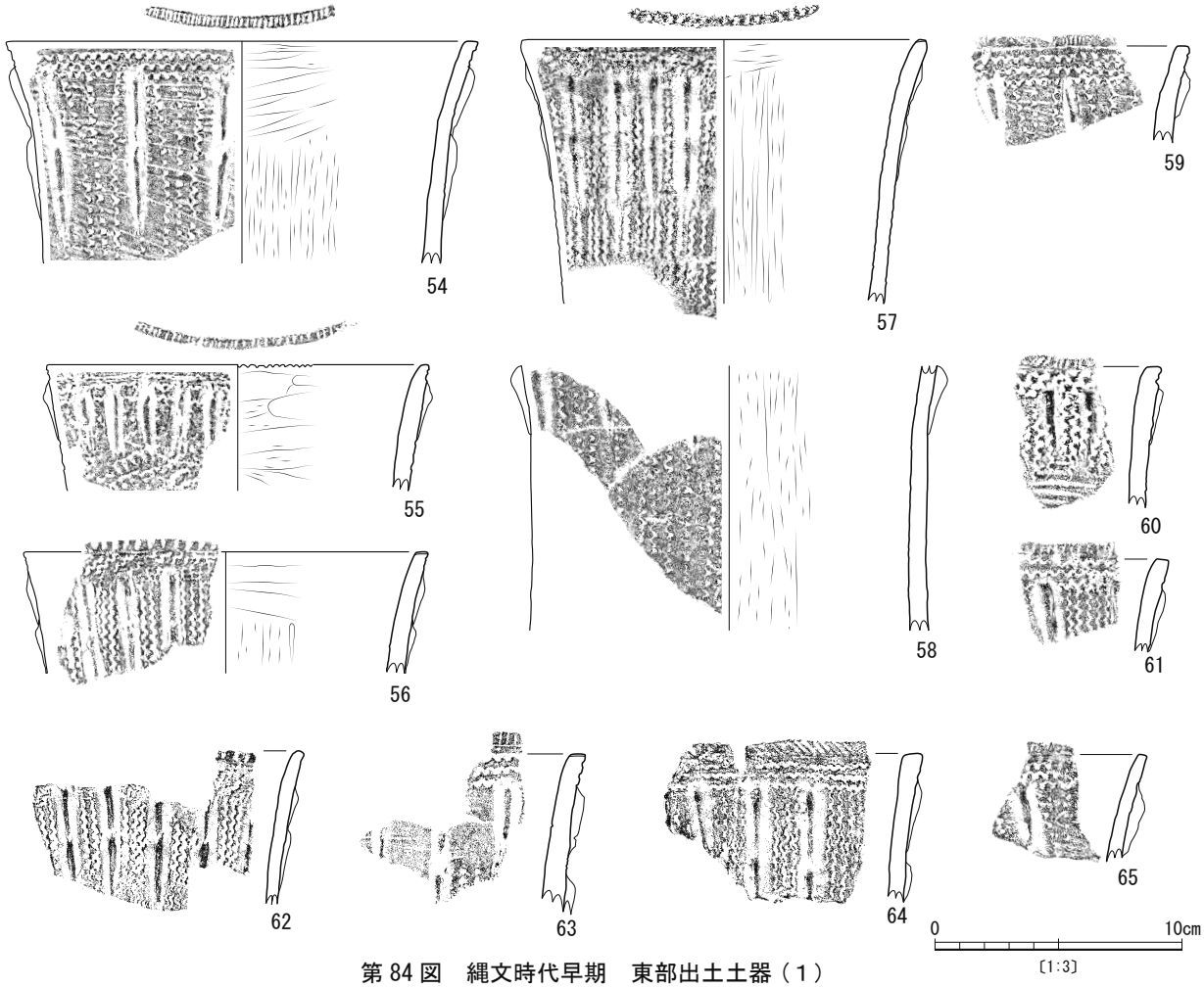
（２）調査区東部（第85図）

Ⅰ類（第84・86・87図54～100）

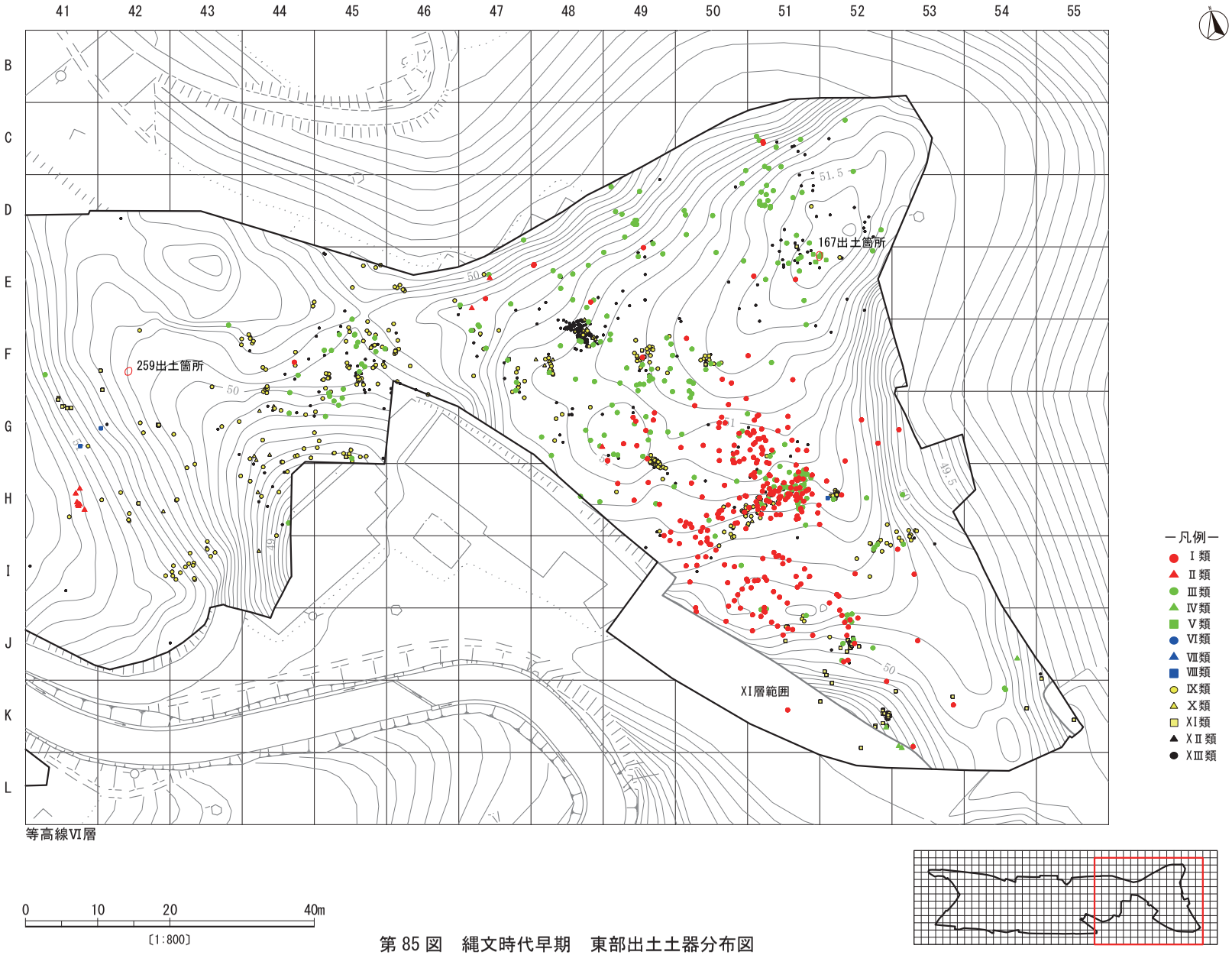
鹿児島市前平遺跡を指標とする前平式土器に比定される。貝殻腹縁による刺突や，条痕により施文した後，一から三段の楔形突帯を貼付けるのが特徴である。資料によって楔形突帯貼付け後の調整が異なることから，型式的な差異を推測させるが,資料も限られていることから，ここでは同一類型として扱い各項目で特徴、型式名を報告する。

54・55は口縁から胴部にかけての資料である。口縁端は平坦で，胴部から口縁にむかって緩やかに外反する。貝殻腹縁による連続刺突を横位に２条から３条施した後，楔形突帯を縦位に一から二段貼付ける。口径は15.4cm～19cmである。突帯は貼り付け後，両端をヘラ状工具によって，丁寧に整形される。

56･57は口径がいずれも16.4cmで，口縁は外反する。口唇部は刻目が施され，口唇下外面には斜位の貝殻腹縁の刺突による施文がみられる。口縁，胴部は縦位の刺突を施した後，二段の楔形突帯を貼り付け，両端をヘラナデで沈線状に仕上げる。58は口縁部が欠損している胴部資料である。縦位に貝殻腹縁の刺突による施文を１条と３条単位で施し，楔形突帯を貼付ける。内面はケズリ調整である。59～65は口縁部資料である。内面は，横ナデ調整で仕上げられ，文様は口唇下に三段の貝殻縁の刺突を横位に施すことを基本とし，その下に縦方向に貝殻腹縁刺突文を施す。そのあと楔形突帯を一から二段貼付ける。60は横方向の貝殻腹縁刺突三段の下位に縦方向刺突を施し，さらにその下位に横方向の条痕文がみら



第84図　縄文時代早期　東部出土土器（１）



等高線Ⅵ層

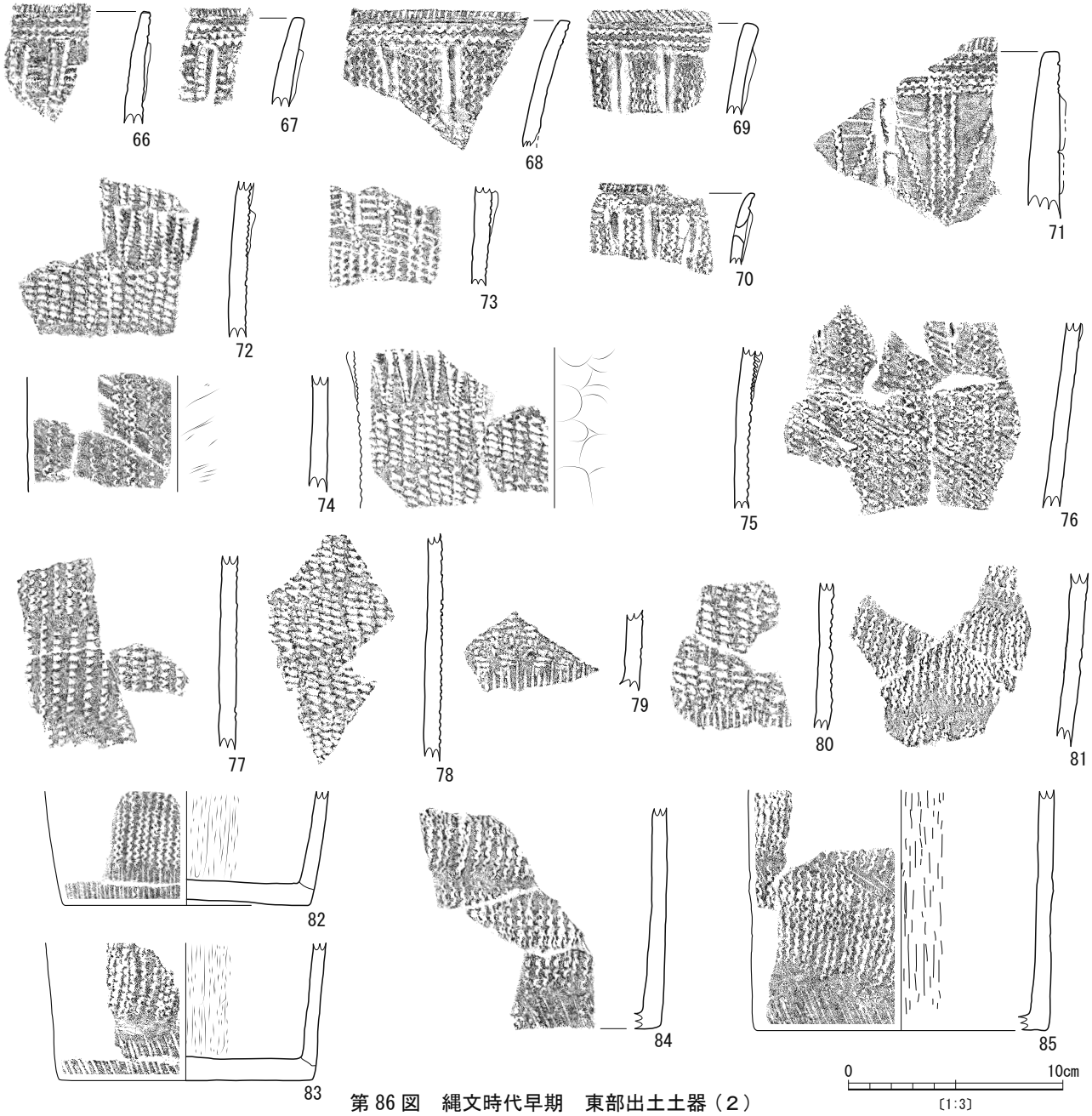
0 10 20 40m
〔1:800〕

第 85 図　縄文時代早期　東部出土土器分布図

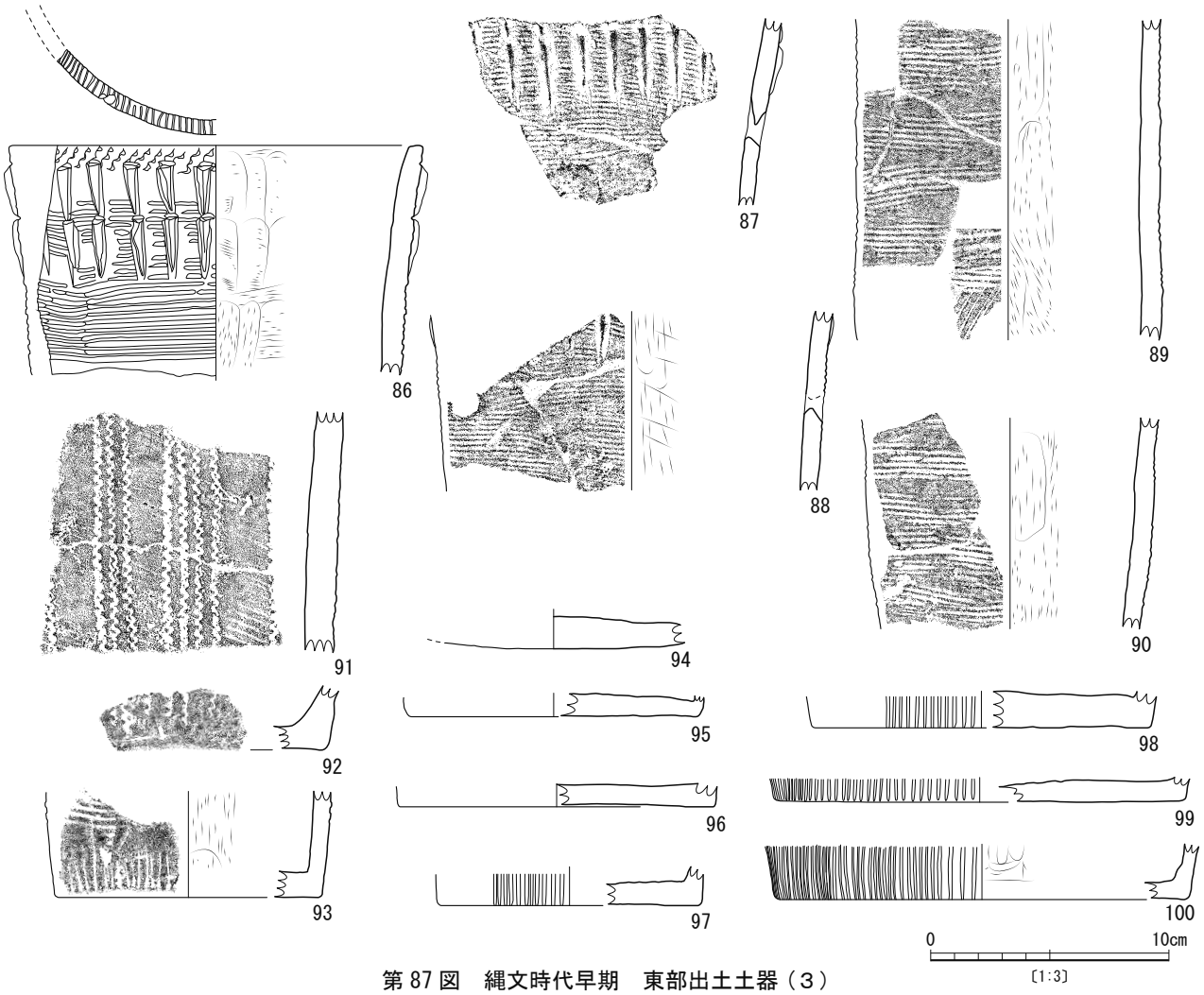
れる。63 は楔形突帯の間に施した刺突文をナデ消す特徴を有する。66・67 は楔形突帯を貼付けた後、脇を貝殻腹縁刺突を施す。68・69 は同様の施文である。68 はやや反りが強い。楔形突帯が欠損するが貼付け部が残存し，ヘラ状工具による調整が伺える。69 はナデ調整が丁寧である。70 はその他の口縁資料と異なり，若干薄い器厚になる。 器面には二段の楔形突帯を施し，上に貝殻刺突文，脇に沈線状の調整を行う。突帯そばに外面から，すり切りの補修孔が認められる。71 は口縁上部に四段の貝腹縁刺突，下位には，鋸歯状の刺突で幾何学文様を施す。楔形突帯は欠損している。加栗山タイプと呼称される資料である。72 ～ 81 は胴部資料である。72 は，貝殻縦連続刺突を胴部に施す。口縁近くは二段の楔形突帯を貼付け，突帯両脇に貝殻刺突を施す。

73 は楔形突帯付近に短い貝殻条痕文が施され，その下位は縦方向の刺突による施文がみられる。

74 は貝殻腹縁の刺突と条痕による施文をする。75 は横方向に縦方向連続貝殻刺突で連点状となる文様を施す。そのあとナデによって器面を整える。楔形突帯は上部が欠損しているため、一段しか確認できない。突帯脇は貝殻刺突による仕上げを行う。76 は二枚貝腹縁の刺突を１条と３条単位で縦方向に施し，１条部分上部に楔形突帯を貼り付ける。突帯両脇は押圧調整よって沈線状に仕上げられる。77 は内面を，ケズリ様の縦ナデによって調整し，文様は二枚貝腹縁による縦の連続刺突を施す。施文後，部分的にナデによる調整が一部にみられる。



第 86 図　縄文時代早期　東部出土土器（２）

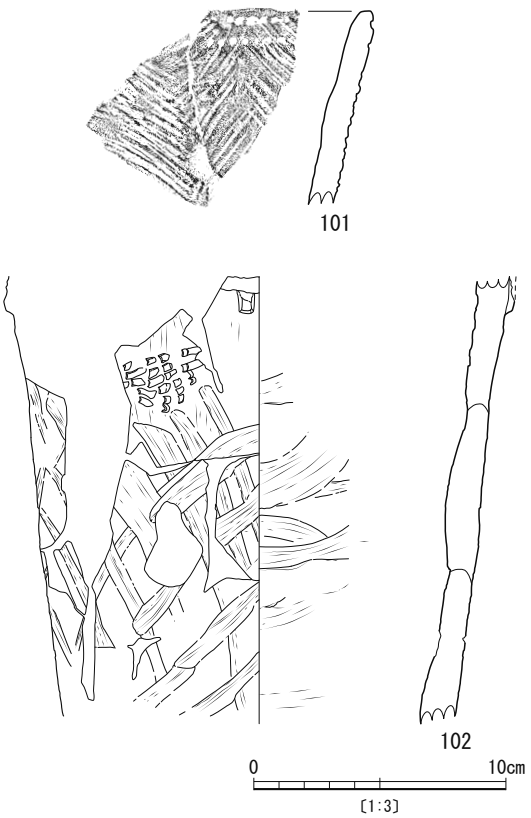


第 87 図　縄文時代早期　東部出土土器（３）

78 は貝殻腹縁の縦方向の押引きによる施文。79・80 は胴部下半の資料で、縦方向貝殻連続刺突のあとナデ調整を行い，そのあと底部近くは縦沈線を施す。81 ～ 85 は縦方向の貝殻腹縁刺突で施文し，底部近くは上部同様貝殻腹縁による斜方向のナデがみられる。82・83 は貝殻腹縁の縦方向刺突を繰り返して施文し，その下位，底近くでは縦・斜条線が施される。85 は復元底径が 13.6cm である。86 ～ 90 は横方向の貝殻腹縁の押引き文様が施される資料である。86 ～ 90 は宮崎県札ノ元遺跡で多く出土している，札ノ元Ⅶ類土器比定される。86 は口径が 17.4cm で横方向の深い貝殻条痕が施され，その後楔形突帯文を二段貼り付ける。87 は二段の楔形突帯が確認できる。沈線部に丹が塗布される。楔形突帯の下位には外面からすり切りによる楕円形を呈した補修孔が確認できる。88 はすり切りの補修孔がみられる。89・90 は横方向の貝殻腹縁による条痕が顕著で，90 はやや口縁へ向かって外反する。91 は他の同類土器と比べて器壁が厚い。貝殻条痕とナデ調整のあと，貝殻腹縁による縦方向刺突を施した３条あるいは４条の施文単位が確認できる。92 は残存部位からやや外傾する器形と推定される。文様は，貝殻腹縁の縦方向刺突文がかろうじて確認できる。93 は貝殻腹縁による横位条痕を施したあとナデによる調整を行い，その下位は縦沈線による施文がみられる。94 ～ 100 は底部資料である。復元底径は 11.2cm ～ 17.2cm である。94 は断面がややレンズ状になり，その他の同類系と異なる特徴を示すが，色調や，胎土からⅠ類に位置づけた。97 ～ 100 はいずれも縦方向の条線がみられる。

Ⅱ類（第 88 図 101・102）

南九州市石坂上遺跡を標式とする，石坂式土器に比定される。円筒形で，Ⅰ類同様貝殻腹縁による押引き，押圧での施文がみられる。本遺跡第２地点での出土は掲載する２個体のみである。101 は口縁に向かってやや外反し，にぶい橙色を呈す。内外面ともにナデによる調整で，口縁近くに二段の貝殻腹縁の押圧，その下に条痕による綾杉文が施される。102 は胴部約半分が残存した状況で，口縁と底部が欠損している。口縁付近には幅６㎜の長方形状の突帯を縦位に貼り付け，貝殻腹縁刺突と押引きによる連点文を突帯下位に施す。胴部には貝殻腹縁による条痕を施し，格子文を描く。外面は丁寧なナデ調整によ



第 88 図　縄文時代早期　東部出土土器（４）

り，やや光沢を帯びるが，内面は輪積痕が明瞭に残り凹凸が目立つ。

Ⅲ－１類（第 89 図 103 ～ 113）

Ⅲ類は西之表市下剥峯遺跡を標識とする，下剥峯式土器に比定される。口縁形状が直立するもの，内湾するものがある。貝殻による鋸歯文や綾杉文などを全体に施し，瘤状突帯を有するものなどが見られる。文様構成などから６類に細分した。

Ⅲ－１類は口縁上部に横位に押圧文又は刺突文を巡らし，その下位に同じ手法による鋸歯文を施すものである。焼成は良好で，胎土に雲母が混入されるものが多い。

103 は口縁上部に貝殻腹縁による三段の押圧を巡らし第一文様帯とする。下位には同じく貝殻腹縁の押圧による鋸歯文が施される。口径 19.8cm である。104 は口径 23.5cm である。口縁は内湾するが，逆ハの字状に開いた器形である。105 は口径 17.2cm である。にぶい赤褐色を呈し，内面は丁寧なナデ調整である。106 は上部が横，下部が縦方向の鋸歯文がみられる。107 ～ 112 は胴部である。縦方向と横方向の鋸歯文がみられる。107 は上部に，横位の貝殻腹縁押圧文の一端が確認できる。112 は胴部資料の中で残存率が高い。内面が縦方向の丁寧なナデ調整である。113 はほぼ直立する器形で，口縁は緩やかな波状を呈す。波状口縁頂部下に５㎝の長さで縦位に１㎝幅の粘土帯を貼り付ける。口縁形状に沿って横位に３条の貝殻押圧文が巡り，下位には鋸歯文が施される。特殊だが、文様構成から同類型として扱った。

Ⅲ－２類（第 90 図 114 ～ 132）

口縁は内湾し，口唇を丁寧に整形する。調整は内外面ともに横もしくは斜めのナデが基本となり胎土には雲母が目立つ。土器外面全体を貝殻による押圧施文を縦，横位に連続して施す。その際，格子状の区画を設定し，中に文様を充填するものがみられる。

なお，同類系資料の施文表現に関しては押引きと表現される報告書もあるが，線状にならず，連点になることから，他の資料との差異を明確にするために押圧と記載する。114 は復元口径 19.2cm である。文様は，口縁から胴部にかけて同様で，貝殻腹縁を横向きにして縦位に押圧を繰り返し，一定の単位で横方向に施文を行う。115 は口縁上部から内湾屈曲部まで横向きの横位連続押圧文が施され，下位には縦向きの横位押圧による施文がみられる。復元口径は 29.0cm である。116 ～ 120 は口縁の破片資料である。いずれも，口唇は丁寧に整形される。117 は横位，斜位の押圧文が施され，補修孔と思われる穿孔がみられる。119 は口縁上部１㎝ほどに無文部がみられ，下位には他の資料同様，押圧文が横位に展開する。120 は口縁上部から屈曲部までは，横向きの横位押圧文が施され，下位には，格子状の区画を設定した後，押圧文が充填される。

121 ～ 126 は胴部である。121 は内外面共に，丁寧なナデ調整で，文様は貝殻腹縁を横向きにして横位に押圧施文する。122 も横向きの貝殻腹縁押圧であるが，文様間に４㎜ほどの間隙があり，他資料に比べ文様密度が薄い。123・124 は横向きにした貝殻腹縁を縦方向へ押圧し横位に文様を展開させる。126 は押圧の間に隙間があり，122 と類似する。

127 は波状口縁である。波状部は付け足す形で造形されている。文様は，二枚貝腹縁の横方向押圧で口縁上部は形状に合わせた施文である。口径は 20.7cm である。128 は胴部から底部にかけての資料である。底部から胴部に向かって外反する。文様は貝殻腹縁の刺突文が底付近まで施されている。

129 ～ 132 は底部資料であるがほぼ底部分しか残存していない状況である。129 は底部中央に向かってやや厚さが増す。外面に貝殻押圧文の痕跡が若干みられたため同分類とした。130 は復元底径が 8.0 ㎝で底面に木葉圧痕がみられる。131 も若干ながら押圧施文がみられる。内底部は剥落している。そのため，粘土を貼り付けている状況が観察できる。復元底径 14.4 ㎝である。

Ⅲ－３類（第 90 図 133 ～ 138）

口縁には横位に貝殻腹縁の押圧が巡り，その下位には縦位の刺突が施される土器群である。133 は口縁で，内湾する形と平坦に整形された口唇はⅢ－２類と共通する。文様は，口縁に２条の押圧文が巡り，その下に縦向

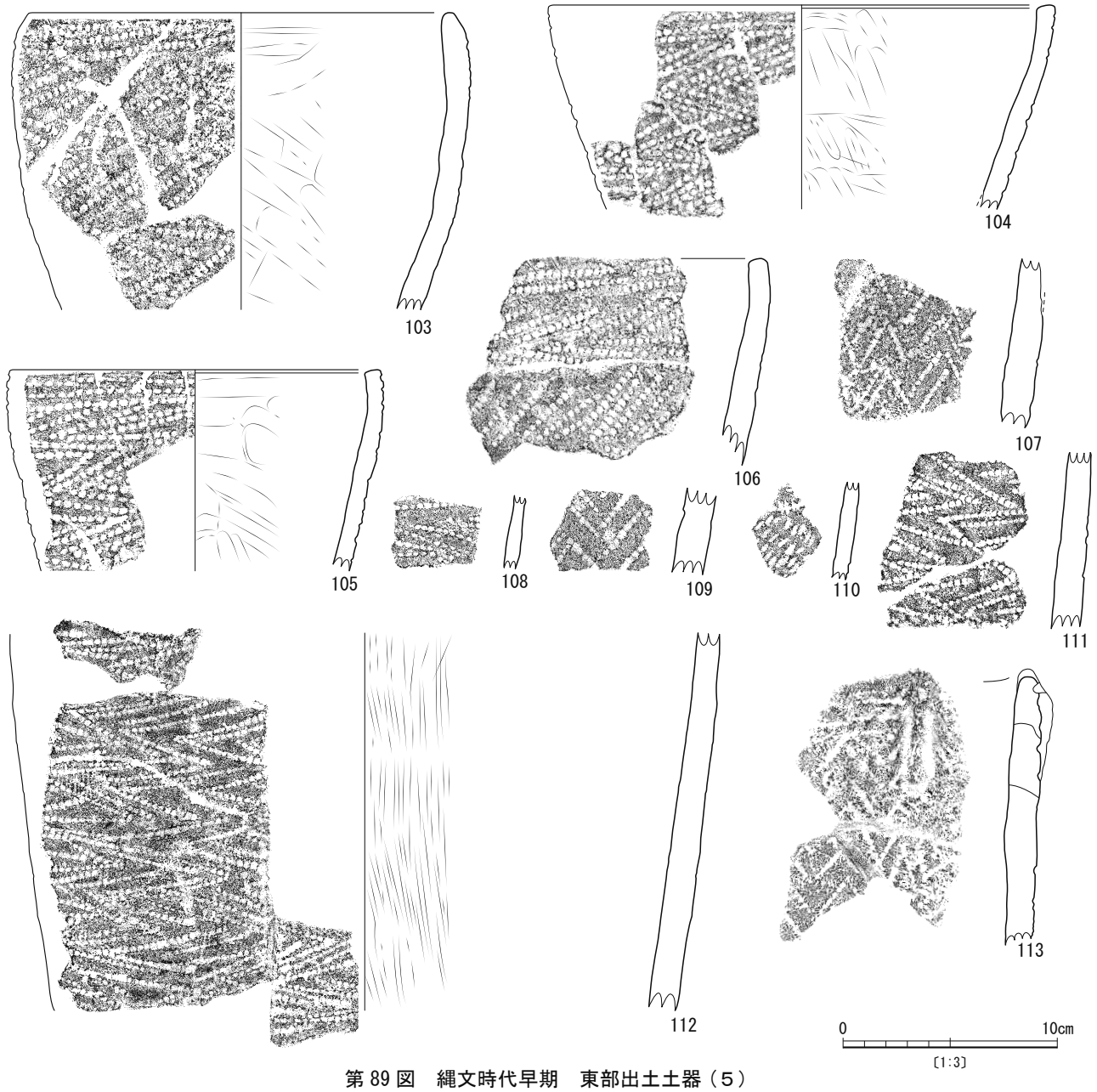
き刺突文さらに３条の押圧文，縦向き刺突文という形で施文される。134 ～ 138 は胴部である。134 は横位の押圧がみられるがその他の資料は縦位の刺突文のみである。137 は刺突文が３～４条１単位で施文されている。

Ⅲ－４類（第 91 図 139 ～ 145）

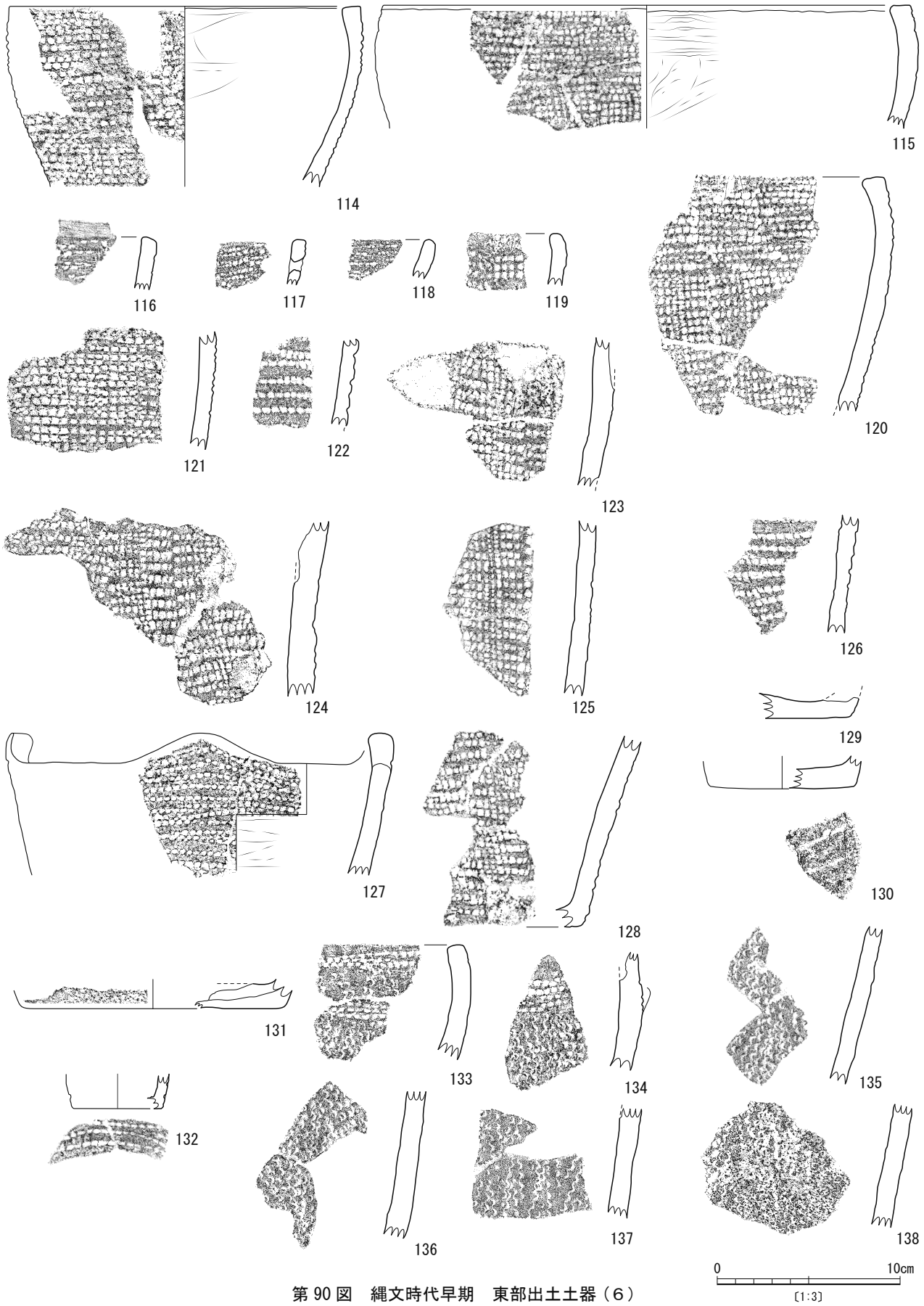
３～４条の横位条痕文と鋸歯状押圧文のセットで施文される。調整は内外面ともナデ調整である。139 は口縁がやや内湾し，横位の貝殻条痕文が４条巡る。下位には３条１単位の鋸歯文が上下に施され菱形様となる。140 は口縁に横位に３条の押圧文と，下位に同じく押圧の鋸歯文と思われる施文の一端が窺える。口唇は平坦で，内湾しない。141 は口縁下に断面三角形状の粘土を横位に貼り付けて肥厚させ，やや内湾する器形となる。上部には貝殻腹縁条痕文が３条施され，その下には横位の押圧及び,鋸歯文がみられる。142 も 141 同様の施文である。143 は口縁端部が若干内傾する器形で，口縁には横位の沈線が施される。144 は胴部である。中央部に４本の条痕文があり，その上位下位に３条の貝殻腹縁による鋸歯文が施される。145 は胴部から底部付近の資料である。内面はヘラによる縦方向へのナデで調整される。文様は貝殻腹縁押圧により，鋸歯文が施されるが底部付近には施文が達していない。

Ⅲ－５類（第 91 図 146 ～ 154）

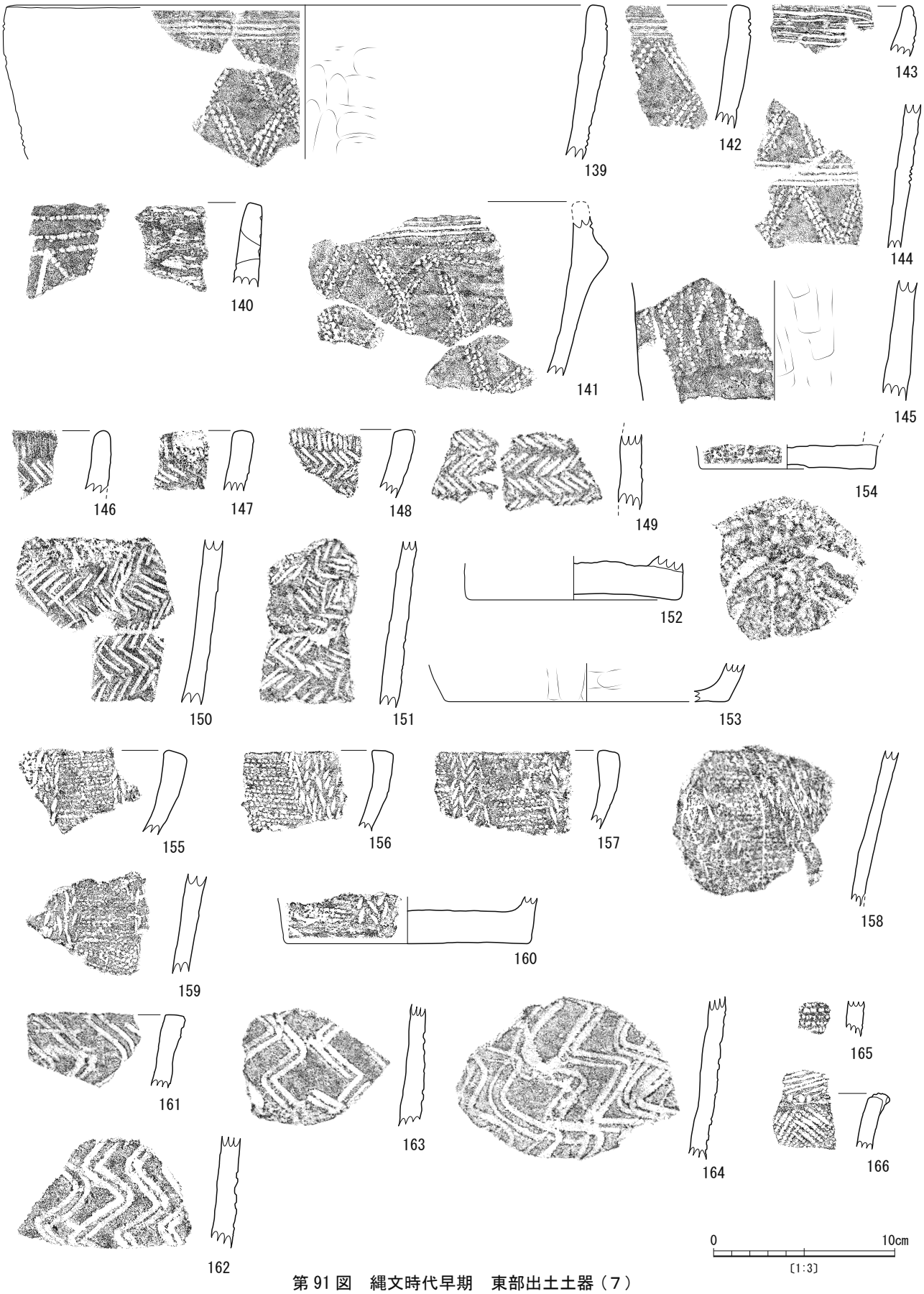
Ⅲ－５類は貝殻腹縁による短い条痕で綾杉文が施される。口縁は小さく内湾し，口唇は平坦なものと、丸みを帯びるものがみられる。146 は口唇が丸く，ほぼ直立する。上部には縦方向の条痕による１㎝弱の短い沈線が施され，下位には綾杉文が施される。147・148 も文様構



第 89 図　縄文時代早期　東部出土土器（５）



第 90 図　縄文時代早期　東部出土土器（６）



第 91 図　縄文時代早期　東部出土土器（７）

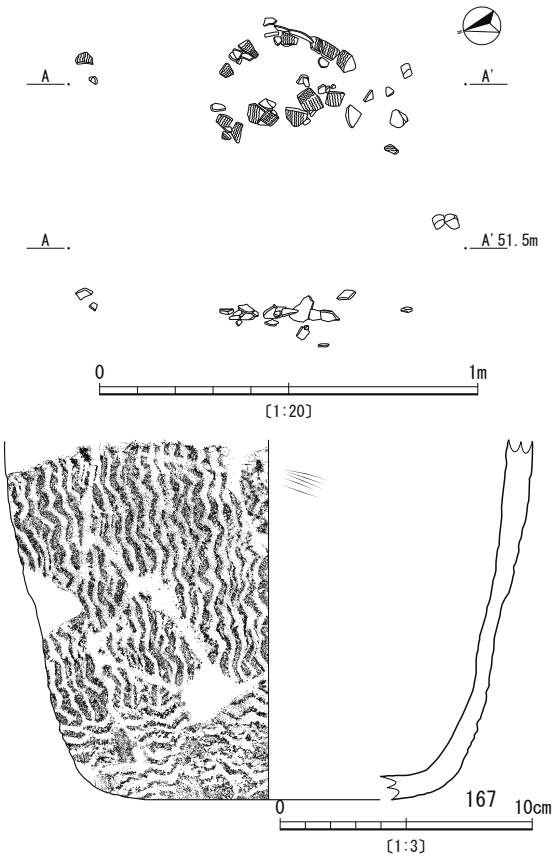
成は146とほぼ同様であるが，口縁端部がやや内傾し，口唇が平坦に整形される。149～151は胴部資料である。いずれも貝殻腹縁による短い条痕により，綾杉文が施される。151は施文がやや乱雑である。

152は上げ底となる底部である。底径は11.6㎝である。153は底径15.4㎝でやや外傾する。内外面ともにナデ調整である。154は底径9.6㎝で底には木葉痕と思われる圧痕がみられる。外面は無文。

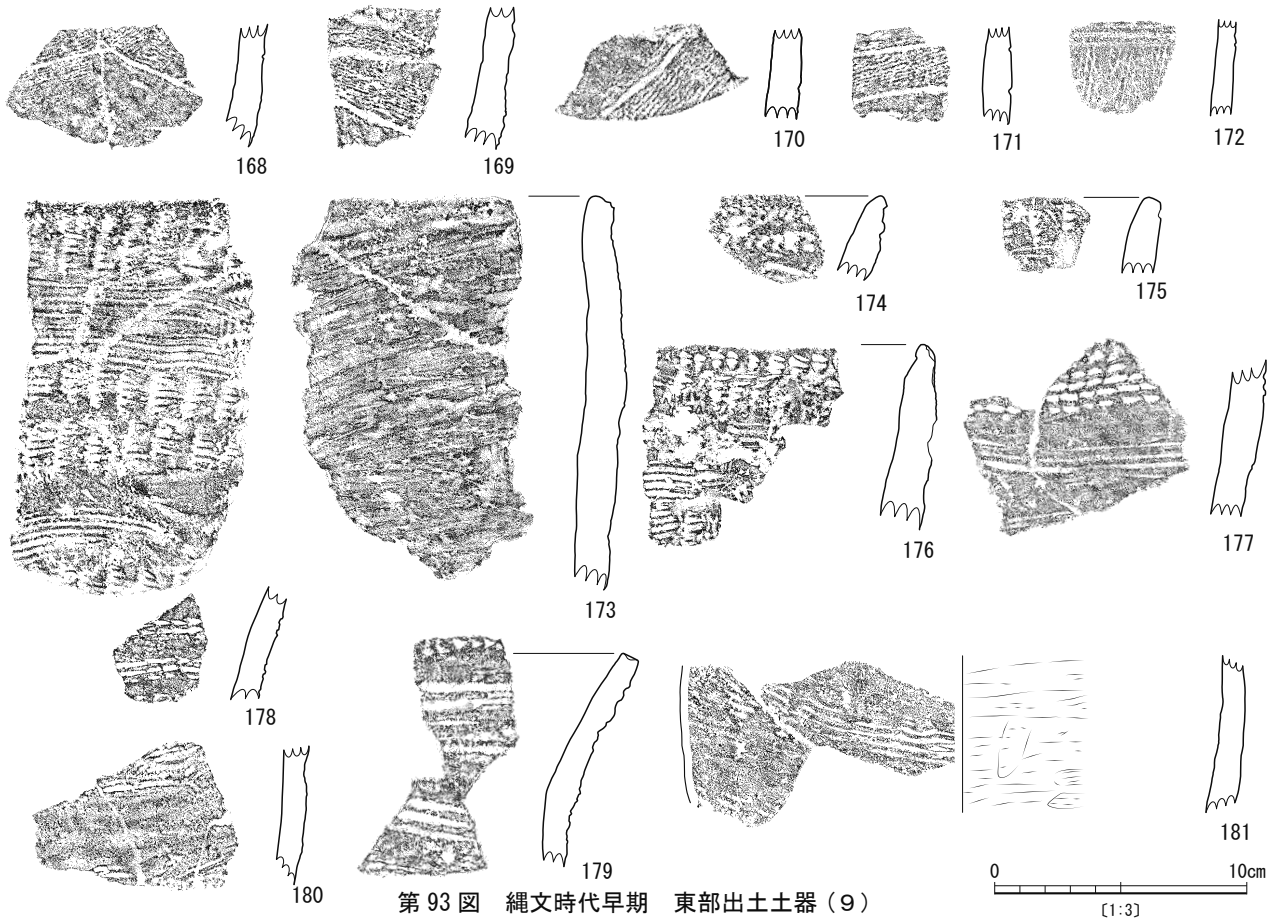
Ⅲ－６類（第91図155～160）

同類型は辻タイプと呼称される土器群と考えられるが，ここでは，下剥峯式土器の一バリエーションの可能性も考慮し，細分類とした。

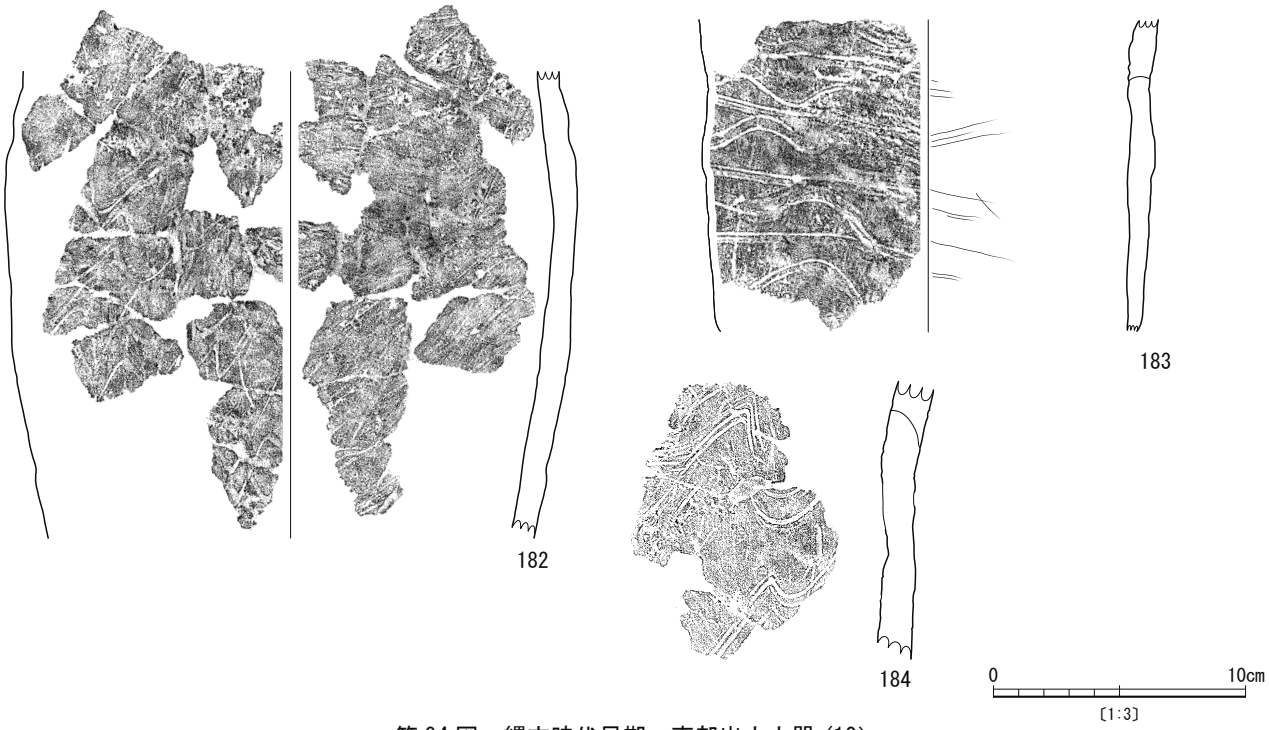
器形は内湾し，口唇部を平坦に整形する。色調は赤褐色を呈し，雲母などの混和材も各個体で近似するため同一個体の可能性が高い。155～157の口縁資料は縦位に羽状文を約３㎝間隔で施し，間には横位に貝殻腹縁の押圧文を加える。157は一部押圧文をナデ消す部分もみられる。158・159は胴部であるが，口縁とほぼ同じ文様構成である。160は底部で，底径13.5cmである。文様は縦位の羽状文と横位の押圧文で構成される。



第92図　縄文時代早期　東部出土土器及び出土状況図（８）



第93図　縄文時代早期　東部出土土器（９）



第 94 図　縄文時代早期　東部出土土器 (10)

Ⅳ類（第 91 図 161 ～ 164）

161 ～ 164 は霧島市溝辺町桑ノ丸遺跡を標識とする，桑ノ丸式土器に比定される土器である。口縁は直立し，口唇は平坦に整形される。色調はにぶい赤褐色を呈し，文様は縦位に流水文を施す。東部出土の同類系は少数であった。掲載の４点も同一個体と考えられる。

Ⅷ類（第 91 図 165・166）

霧島市国分平栫貝塚を標識とする，平栫式土器に比定される。永吉天神段遺跡第２地点で出土した点数は東部では２点である。いずれも小破片である。

166 は口縁に粘土帯を貼り付けて肥厚部を作り出し，口唇部には刻目を施す。胴部には縄文を斜位交互に転がし施文する。

Ⅴ類（第 92 図 167）

山形押型文の胴部から底部にかけての資料である。Ｅ－ 52 区で底部を上向きにした状態で検出されたが遺構は確認できなかったため，包含層出土遺物として扱った。器形は，底部から胴部に緩やかな外傾がみられ，底部端がやや丸みを帯びるのが特徴である。文様は，底から 3.4cm ほどまでは，横方向に山形押型原体を転がし，上位は縦方向に同様の原体を転がしている。復元底径は 14.0cm で，内面は横方向の丁寧なナデ調整である。胎土には白色の鉱物が目立つ。

Ⅸ－１類（第 93 図 168 ～ 172）

Ⅸ類は伊佐市菱刈町塞ノ神遺跡を標識とする，塞ノ神式土器に比定される。本類型は，施文具や施文方法，器面調整の差異により，計９類に細分した。168 ～ 171 は無節縄文を斜位に転がし，縄文施文の範囲を沈線で区画する。172 は上部に横位の沈線が２条確認でき，下位には網目撚糸文を縦位に施している。器面が摩滅し，撚糸文の幅などは判然としない。

Ⅸ－２類（第 93 図 173 ～ 179）

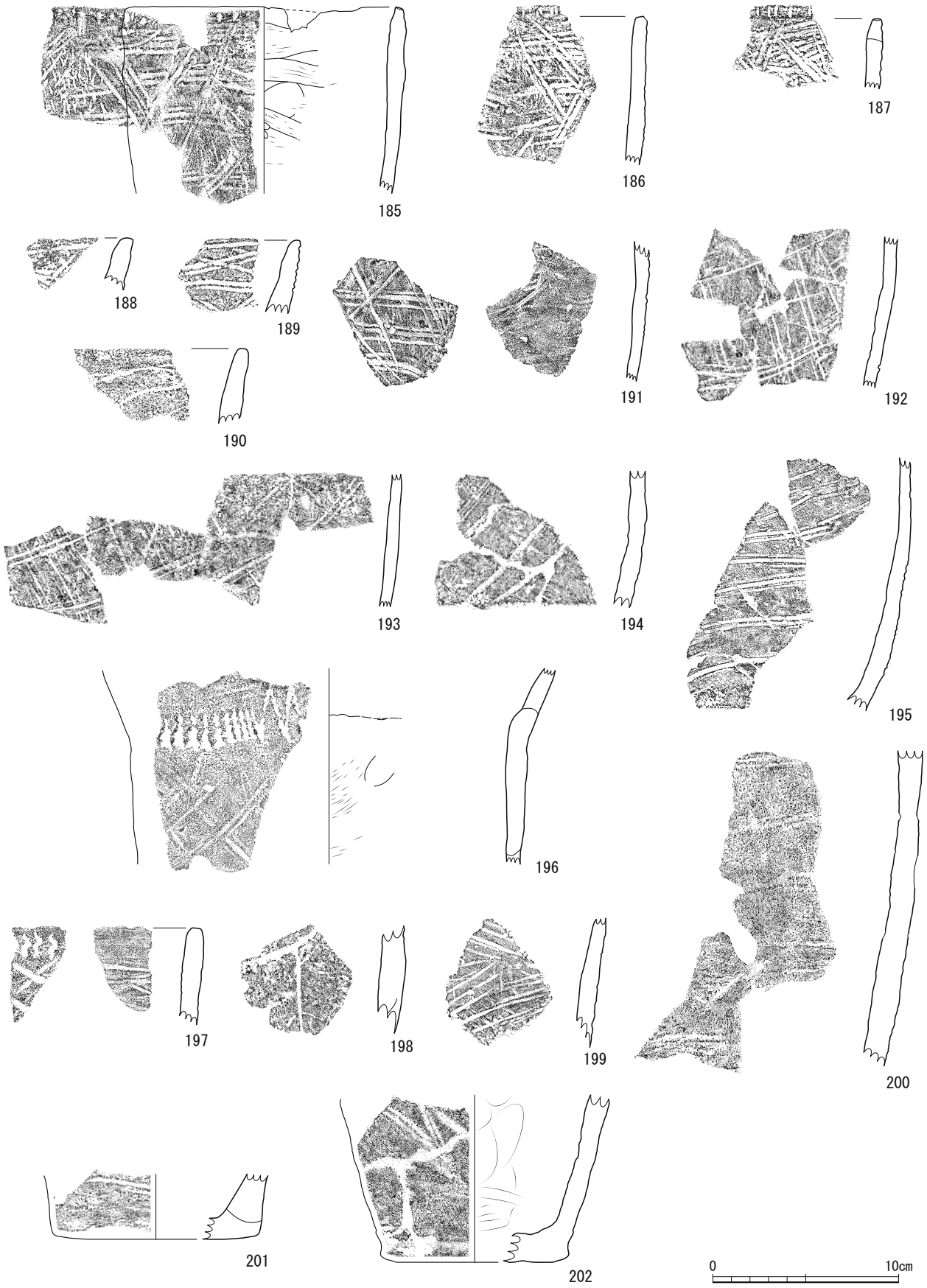
口縁部は直立するものと，頸部から外反するものがある。器面調整が粗く，全体に凸凹しているが，焼成は良好である。文様は貝殻腹縁の縦方向の横位押圧文と押引き文，又は条痕文がみられる。173 は口縁から下位に向かって貝殻腹縁の押圧を二段と，条痕二段が施文される。内面は横ナデ調整で，条痕様となる。混和材の鉱物粒子が大きい。174 は口縁部断面形が三角形状となる。二段の貝殻押圧文を施し，その下位に条痕がみられる。175 は口唇が平坦に整形される。貝殻腹縁の押圧を横位に連続して施す。押圧文の下位には条痕がみられる。176 は口唇部に貝殻腹縁刺突による刻目が施され，口縁にはやや押引き様となる押圧文が横位に施される。177 は貝殻腹縁による四段の連続押圧と下位の横方向の貝殻条痕で構成される。178 は 177 と施文が近似する。179 は頸部から屈曲し口縁は外反する。口唇は平坦で貝殻押圧による刻目がみられる。口縁部は貝殻による横位の条痕文が施される。

Ⅸ－３類（第 93 図 180・181）

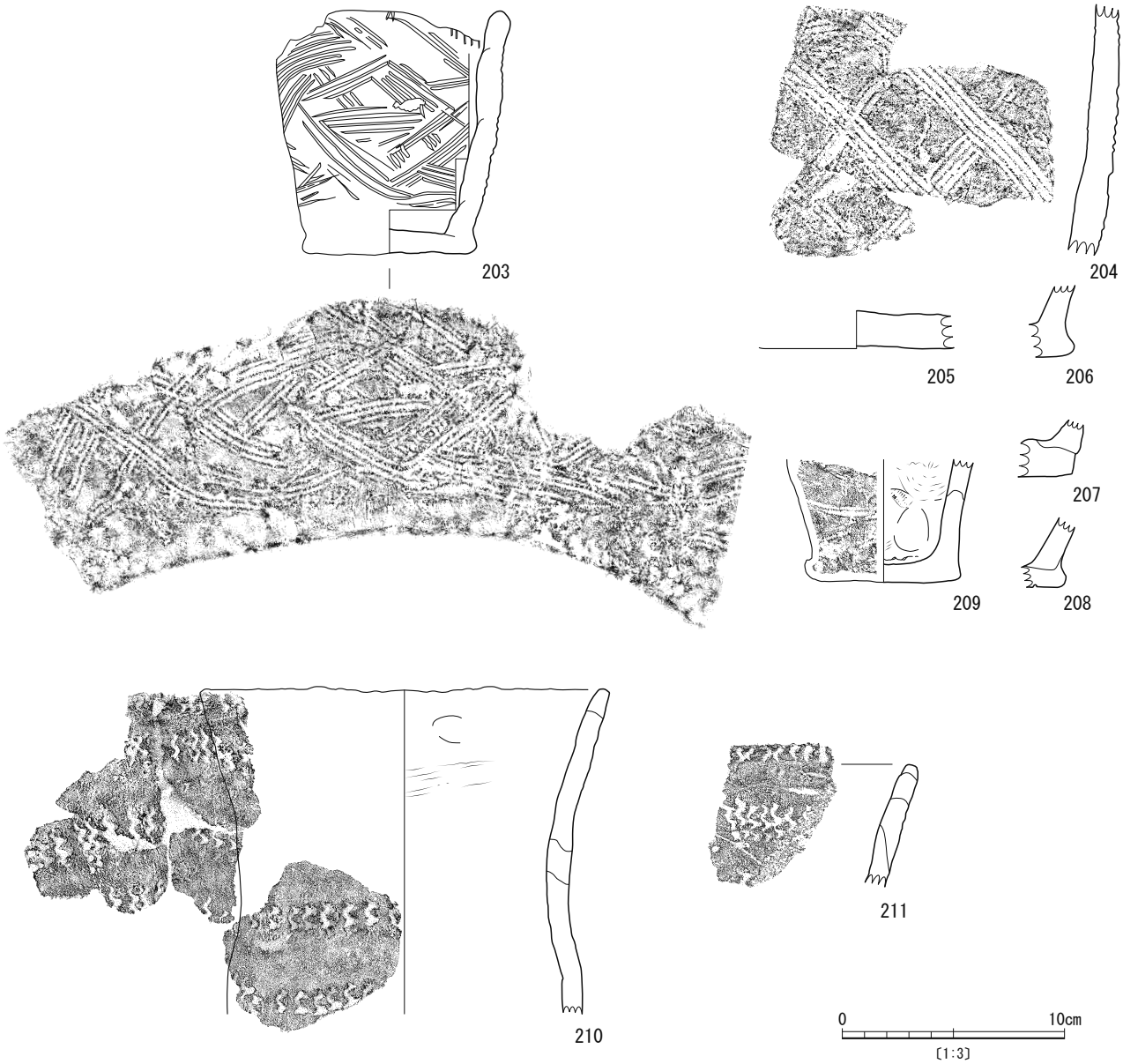
180・181 は貝殻条痕文を施す。施文は２～３cm 間隔をあけて上下に連続して横位に巡る。

Ⅸ－４類（第 94 図 182 ～ 184）

沈線１～４条により鋸歯文及び流水文を描く。182 は



第 95 図　縄文時代早期　東部出土土器 (11)



第 96 図　縄文時代早期　東部出土土器 (12)

横位に流水文を施す。曲線に角度がつくため，鋸歯様となる部分もみられる。183 は横位の条痕を約２㎝間隔で施し，区画帯としてその中に流水文を施す。184 は頸部から胴部にかけての資料である。口縁に向かって屈曲してやや外傾する。

Ⅸ－５類（第 95・96 図 185 ～ 209）

185 ～ 187 は直立する口縁資料である。口唇部はやや丸みを帯び，刻目が施される。外面には貝殻条痕によって斜格子文を描く。185 は復元口径が 14.9㎝で斜格子文と半月状の刺突文が並存する。刺突文は幅３㎝で縦位に施される。188 は上位横沈線，下位条痕によって施文される。189 は口縁端部に向かって窄まる。施文は横位貝殻条痕文の間に斜位条痕を施す。190 は口唇部が平坦に整形され，斜位の沈線で施文される。191 ～ 193 は胴部である。貝殻条痕によって斜格子文が施される。内面は斜位のナデ調整である。194 は条痕による施文が粗く，条線にばらつきがある。焼成は良である。195 は斜位の条痕で施文される。196 は頸部から口縁に向かって外傾する。屈曲部付近から横位で縦方向の貝殻腹縁刺突が施され，連続して同じく刺突による鋸歯文がみられる。下位には，斜格子文もみられる。197 の内面には，貝殻による条痕が明瞭である。文様は，口縁上部に貝殻腹縁による刺突を横位に連続して施す。その下部は格子状沈線文を施す。198 は斜位に沈線が施される。199 は胴部に沈線にて，綾杉もしくは羽状文が施される。沈線が非常にシャープである。200・201 は同一個体と考えられる，胴部と底部である。200 は明赤褐色を呈し，貝殻腹縁による条痕が横位に施されるが，風化が著しく，不明瞭である。201 は復元底径 11.2㎝で横位の条痕が一部確認できる。202 は復元底径 10.0㎝の底部である。

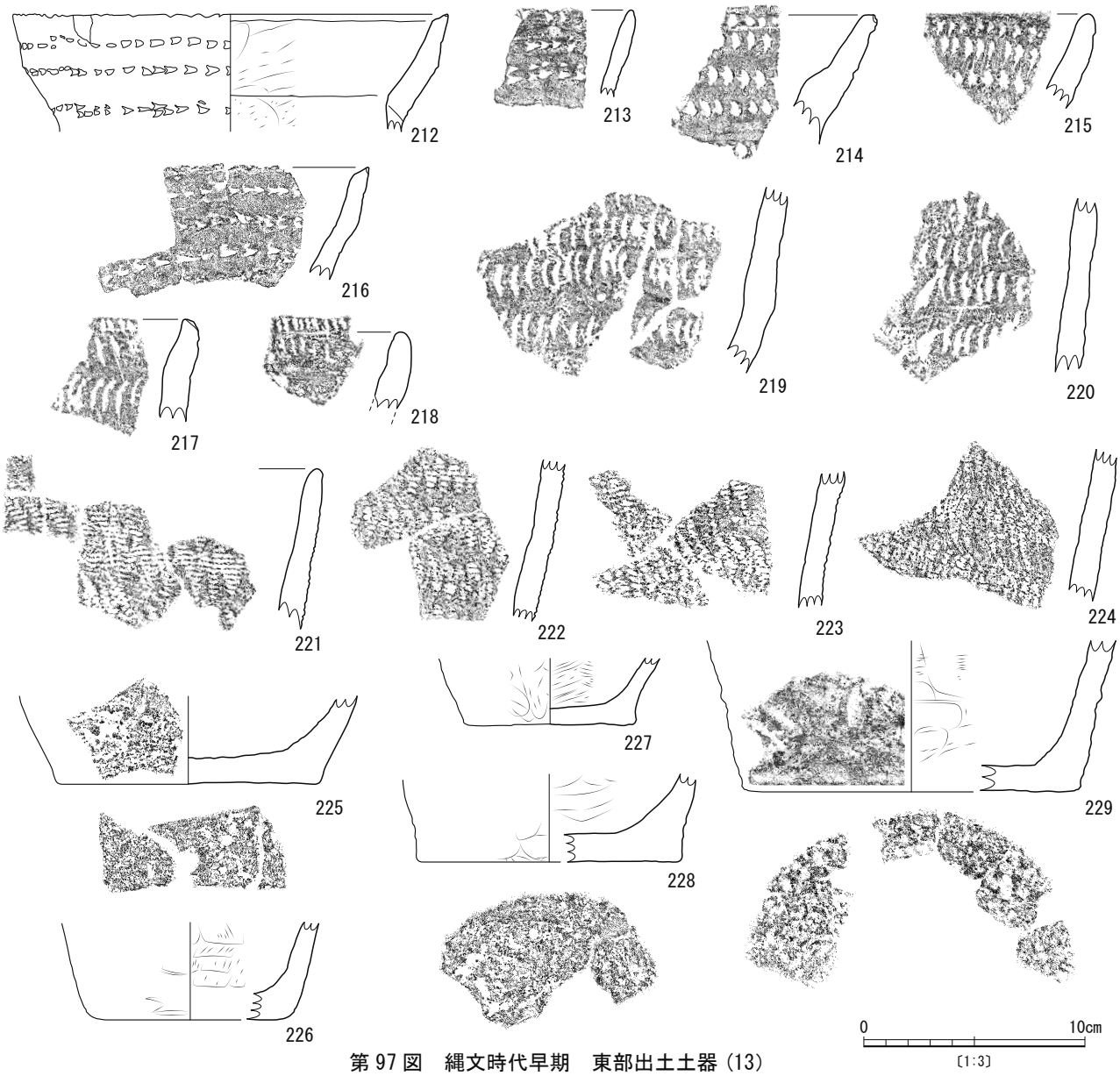
底付近に若干の窪みを有す。内外面ともにナデ調整で，文様は貝殻腹縁による斜位の条痕文である。203 は口縁部から胴部にかけての資料である。底径は 7.8cm で，最大張出部から若干窄まる。上部には頸部と思われる緩やかな屈曲部を有す。口縁は風化による影響が著しい。文様は貝殻条痕による，斜格子文が基調となるが底部付近には施文されない。輪積み痕跡が顕著である。204 は貝殻条痕による斜格子文が丁寧に施される。205 ～ 209 は底部資料である。全て,底から一旦窄まりをみせてから，胴部に向かって外反する特徴を有す。207・208 は底部を円形に作出し，粘土を積み上げた工程が明瞭である。209 は底径 7.0cm で横位の条線が若干確認できる。

Ⅸ－６類（第 96 図 210・211）

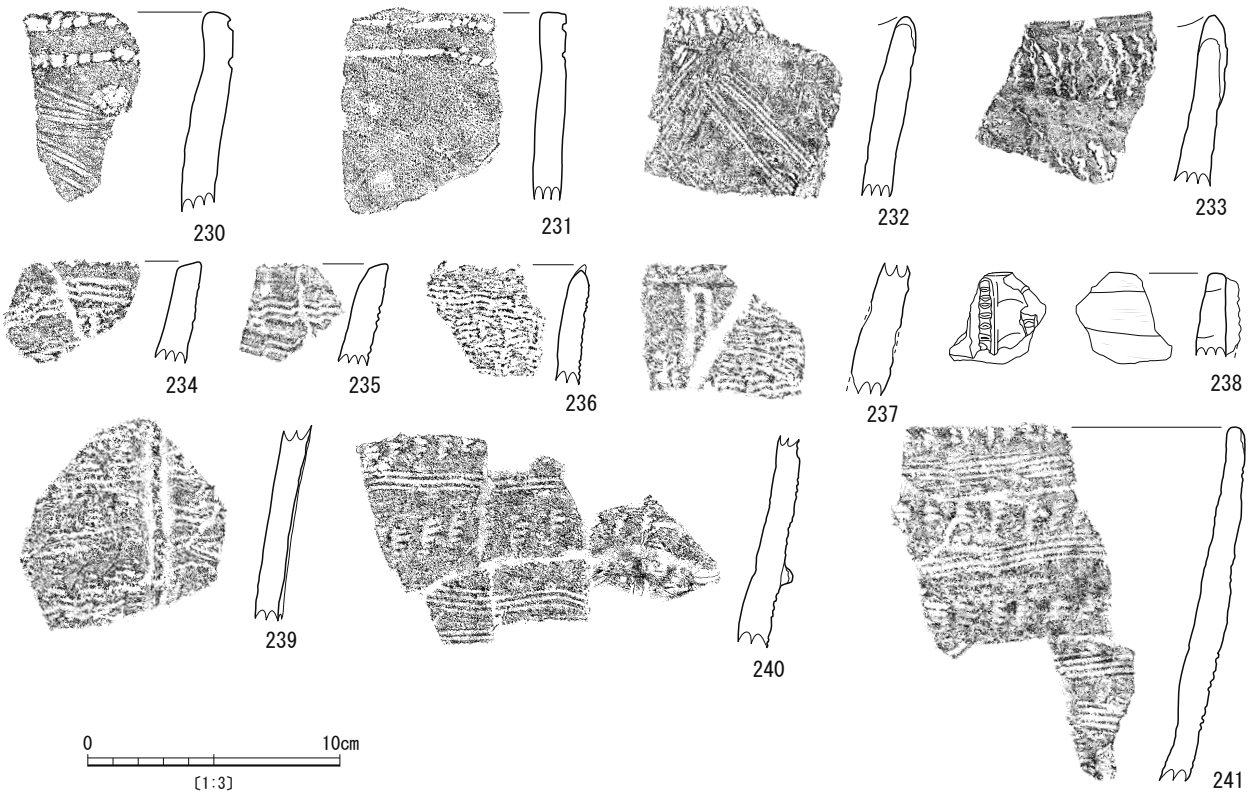
210・211 は貝殻腹縁を縦向きにし，横位に刺突施文する資料である。210 は口縁から胴部にかけて残存し，復元口径が 18.4cm である。頸部から口縁に向かって外反する。口唇部から胴部には貝殻腹縁による連続刺突が縦幅３cm ほどの間隔を空けて施される。

Ⅸ－７類（第 97 図 212 ～ 220）

本類型は貝殻を用いた押圧施文を施す。焼成は良好なものが多い。212 は外反する頸部から口縁である。口唇には貝殻押圧によって刻目が施され，口縁には同一施文具により，横位の押圧文が三段みられる。213 は 212 と同様の文様構成であるが器壁が薄く，口縁上部までストレートに立ち上がり口唇はやや丸みを帯びる。214 は内面側に器壁が厚くなる。横位の貝殻押圧文が五段みられる。215 は口唇が丸みを帯びる。外面は四段の貝殻押圧によって施文される。216 は外反する口縁である。口縁部中央付近で一旦張り出し，口縁上端に至る。貝殻による三段の押圧文が観察できる。文様，胎土の観察点で



第 97 図　縄文時代早期　東部出土土器 (13)



第 98 図　縄文時代早期　東部出土土器 (14)

212 と近似する。217・218 は貝殻腹縁の縦向き押圧により，爪形文様を施す。219・220 は胴部である。貝殻腹縁を縦向きにして横位に連続押圧を施す。

Ⅸ－８類（第 97 図 221 ～ 229）

221 はやや外傾する口縁資料である。口縁上端は貝殻押圧文，胴部は貝殻腹縁の横位押し引き文が施される。内外面とも貝殻を使用したナデが施される。222・223 は胴部である。221 と同じ施文であるが 222 は押引きとならない。224 は連続した貝殻腹縁押圧によって器面全体が施文される。225 ～ 229 は底部資料である。225 は復元底径が 12.0cm で外面は貝殻押圧により施文される。底面に植物圧痕有り。226 は復元底径 9.2cm で底が丸みを帯びる。内面は縦方向のナデ調整が確認できるが，外面は摩滅が激しく判然としない。227 は底径 7.8cm で，若干くびれを有す。228 は底に何らかの圧痕が残存するが，素材は判断できなかった。229 は貝殻腹縁による押圧文とみられる部分が確認できるが摩滅が著しい。

Ⅸ－９類（第 98 図 230 ～ 233）

Ⅸ類型に属すが，他の細分資料に含められないもので，貝殻条痕と押圧による施文を施すものである。

230・231 は口縁上部に貝殻腹縁を横向きにして横位に二段，押圧施文する。その下位には斜位の条痕を施す。内面はナデ調整で，指頭圧痕が残る。232 は波状口縁を呈す。上部には貝殻腹縁の押圧による刻目，その下位には斜格子状に条痕を施す。233 も波状口縁資料である。波状部は体部に粘土帯を貼り付けて作出している。縦向きにした貝殻腹縁を横位に押圧施文する。

Ⅹ類（第 98 図 234 ～ 241）

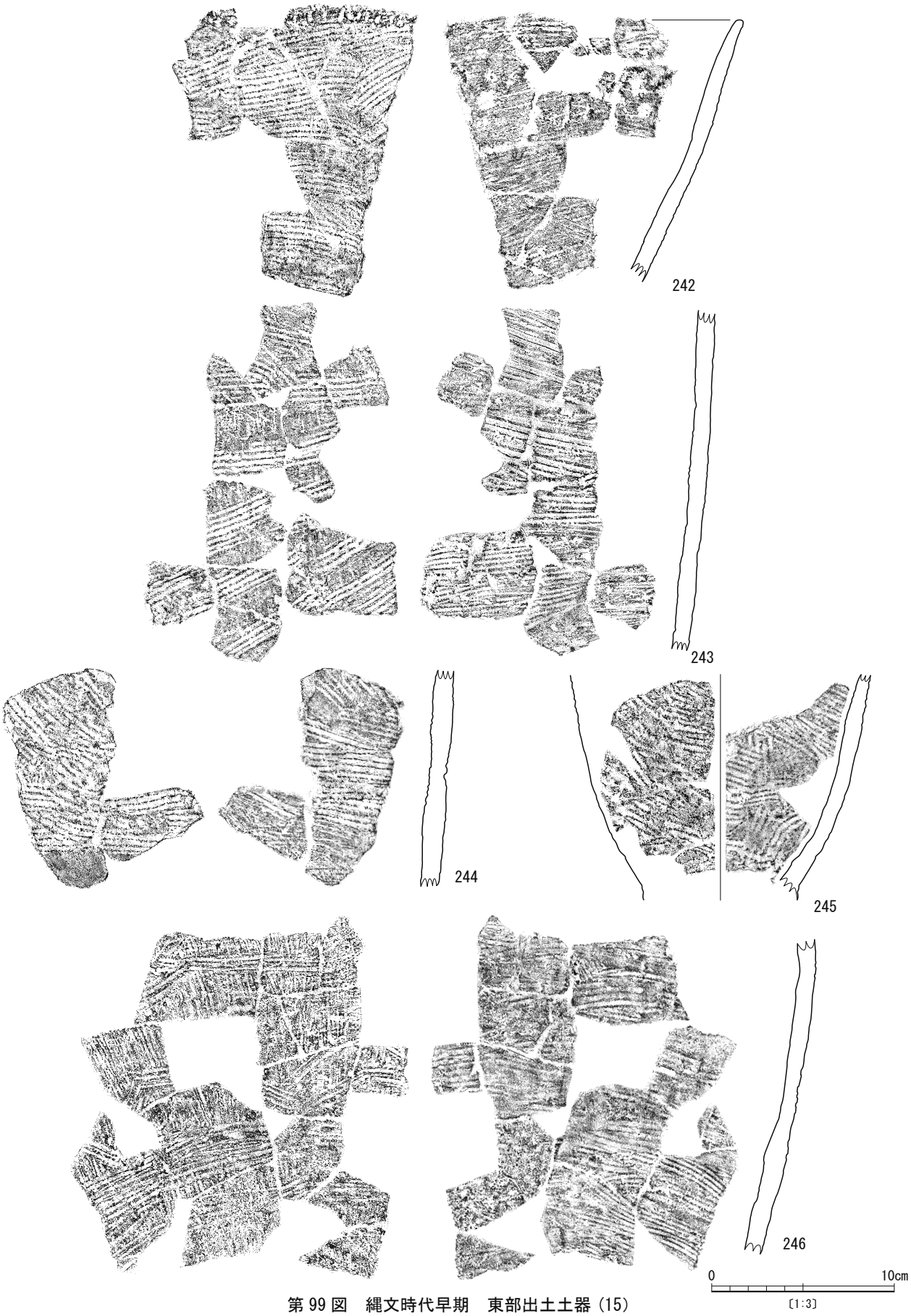
中種子町苦浜貝塚を標識とする，苦浜式土器に比定される。

外反した器形で，口縁は平坦に整形するものと，丸みを帯びるものがある。文様は貝殻腹縁による押圧文と条痕文を基本として，突帯を縦位、横位に貼り付ける。

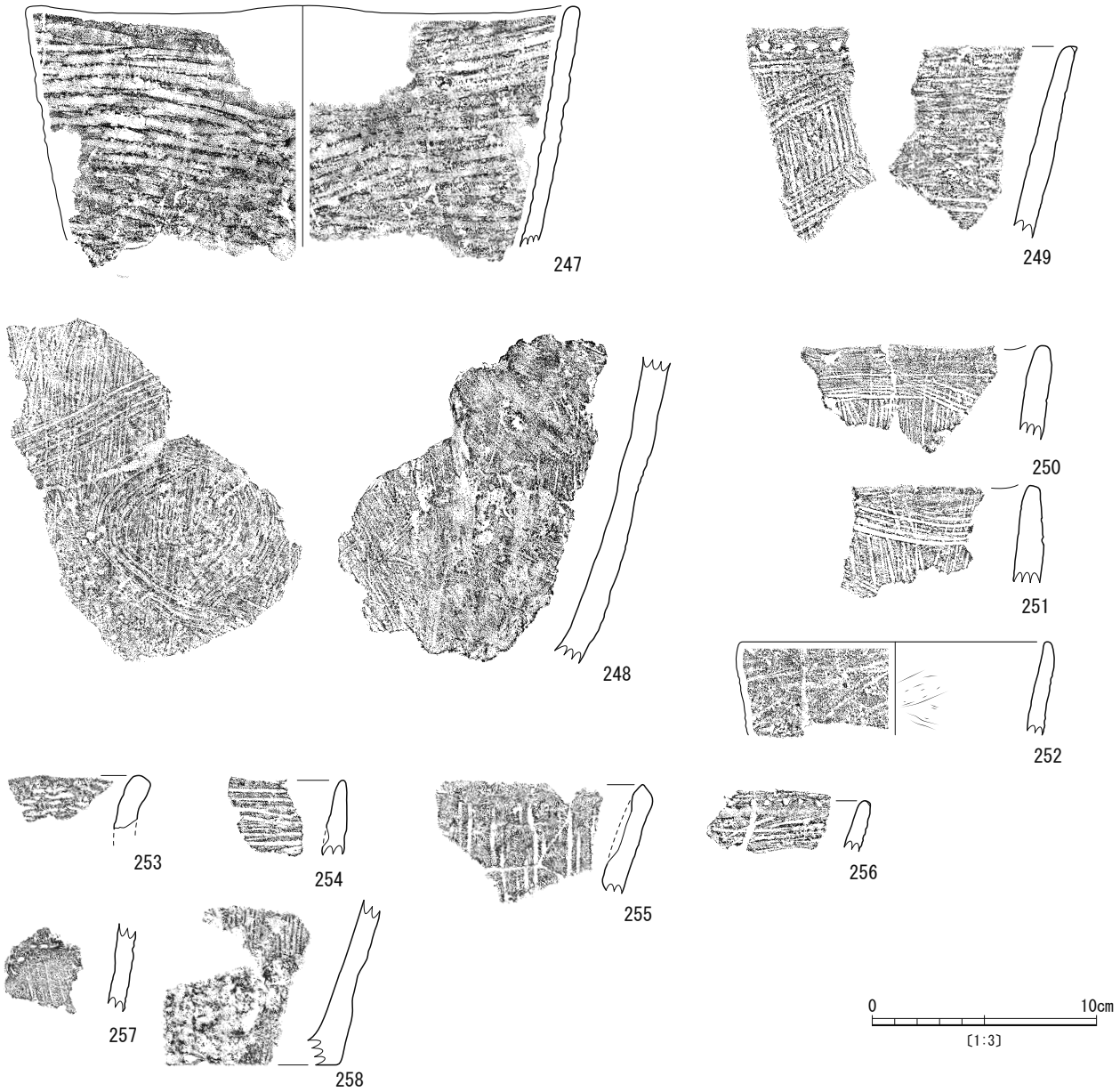
234・235 は口唇が平坦に整形され，貝殻条痕によって波状文を描く。236 は口唇部がやや突出する。237 は上部に２条の小突帯が巡り，その下位に縦突帯が垂下する。その左右は波状文が施文される。238 は口縁上端から突帯を垂下させ，突帯上に刻目が施される。左右に文様はみられない。239 は横位に条痕文を施した後に，縦方向に突帯を貼り付けるが，突帯部は摩滅して，貼り付け部の痕跡が確認できる程度である。240・241 は同一個体と想定する資料である。いずれも文様は貝殻押圧文と条痕文を上下に繰り返して施す。240 は下部にやや湾曲する形で突帯を貼り付ける。241 は口縁に押圧による刻目が施される。体部外面には横位の条痕文が４段と条痕間に貝殻押圧がみられる。胎土に雲母が多く含有され，良好な焼成である。

Ⅺ類（第 99 ～ 101 図 242 ～ 259）

縄文時代早期後葉の条痕文土器と呼称される土器群である。内面、外面ともに貝殻による条痕が明瞭に残る。



第 99 図　縄文時代早期　東部出土土器 (15)

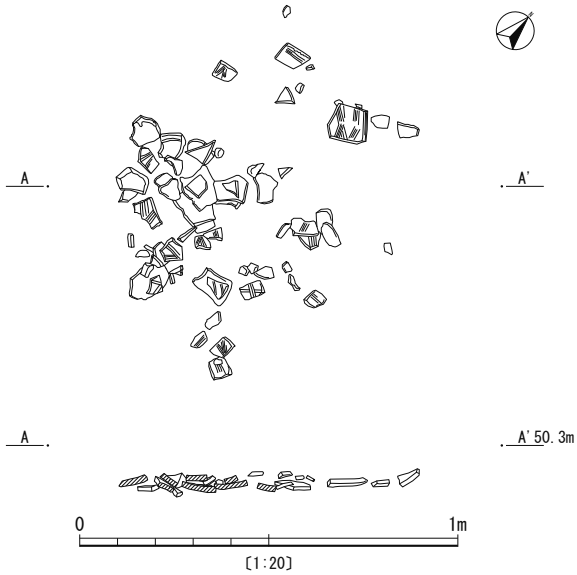


第 100 図　縄文時代早期　東部出土土器 (16)

242 は口縁から胴部にかけて残る。わずかに「く」の字状に屈曲する。内面外面ともに貝殻条痕による調整痕が明瞭に残る。口唇部には巻貝による押圧により刻目が作出される。胎土には雲母が多い。243・244 も内外面に貝殻条痕調整痕が明瞭にみられるが部分的にナデ消される。245 は下部に向かい窄まる形状から底部に近い部位と思われる。条痕は土器内外面に施される状況がみられる。同類型は高吉Ｂ遺跡の小山タイプ土器と紹介される資料に近似する。246 は条痕を横位と斜位に施し，型崩れした格子文を描く。247 は口縁がゆるやかな波状を呈す。器形や条痕などから轟Ｂ式と捉えられそうであるが，Ⅳ層（アカホヤ該当層）からの出土であるため，条痕文系として扱った。復元口径は 24.6cm で内面，外面は横位の貝殻条痕による調整である。248 は縦位の貝殻条痕を施した後，曲線文を描く。内面は縦，横位の条痕が若干残る。249 ～ 256 は口縁の破片資料である。249 は外面に縦位，斜位の貝殻条痕が施され，口縁端部に刻目がみられる。内面も横方向の条痕調整である。250・251 は同一個体である。波状口縁で，縦，斜めの条痕を施し，口縁上部に横方向の条痕を追加施文する。252 は復元口径 13.8cm で外面には貝殻条痕が斜位に施されるが，摩滅し凹線が不明瞭である。253 は指頭による調整痕が明瞭で，外面は凹凸がある。貝殻腹縁による押引き施文がみられるが，条線が短い。254 は口縁上部から横位の条痕が施される。255 は２条１組の縦沈線が施される。256 は口縁端に刻目，外面には横位と斜位の条線が施される。258 は底部である。外面には縦位の条痕がみられる。胎土に雲母が多く含有されている。259 はＦ－ 42

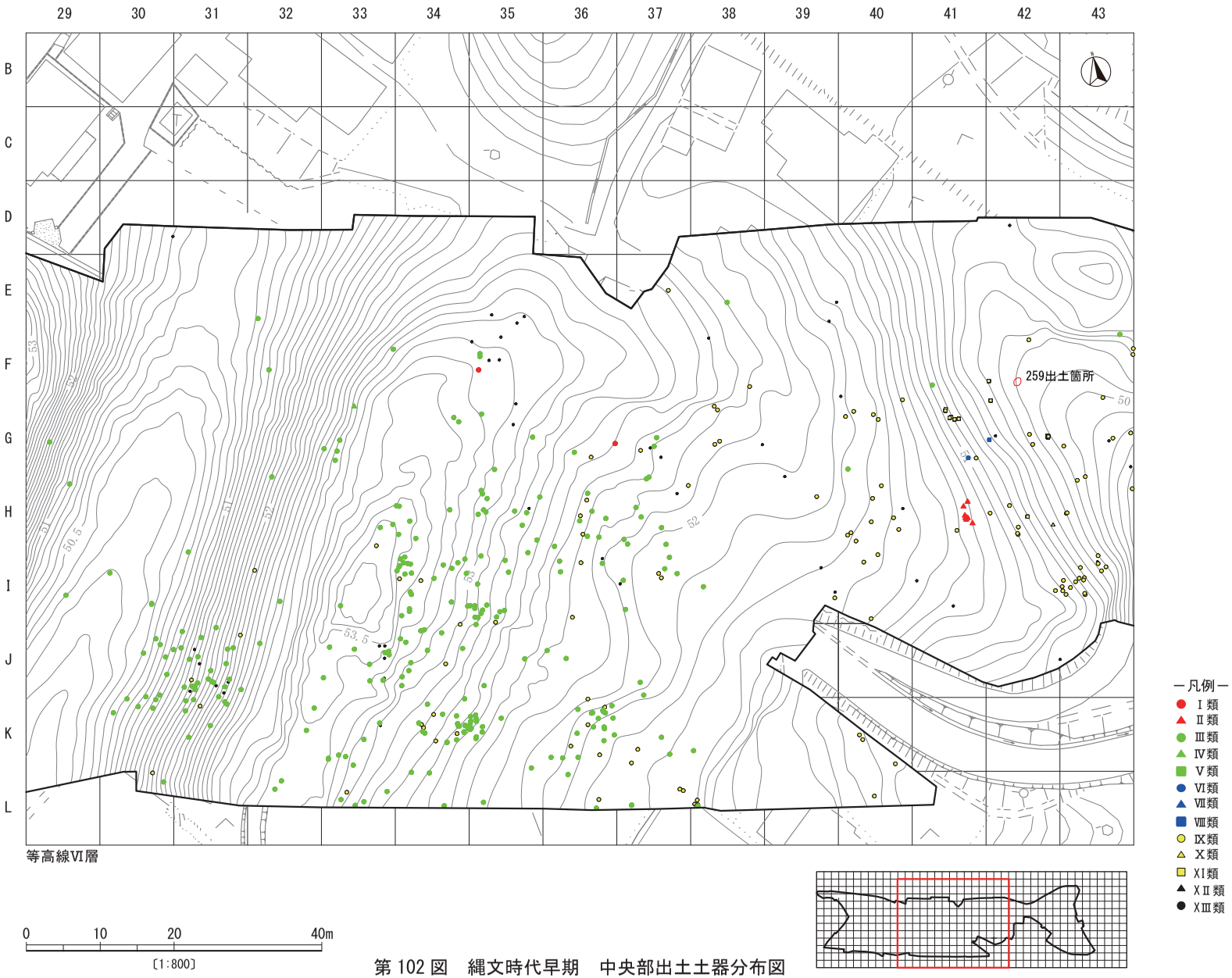
259

0　10cm
〔1:3〕

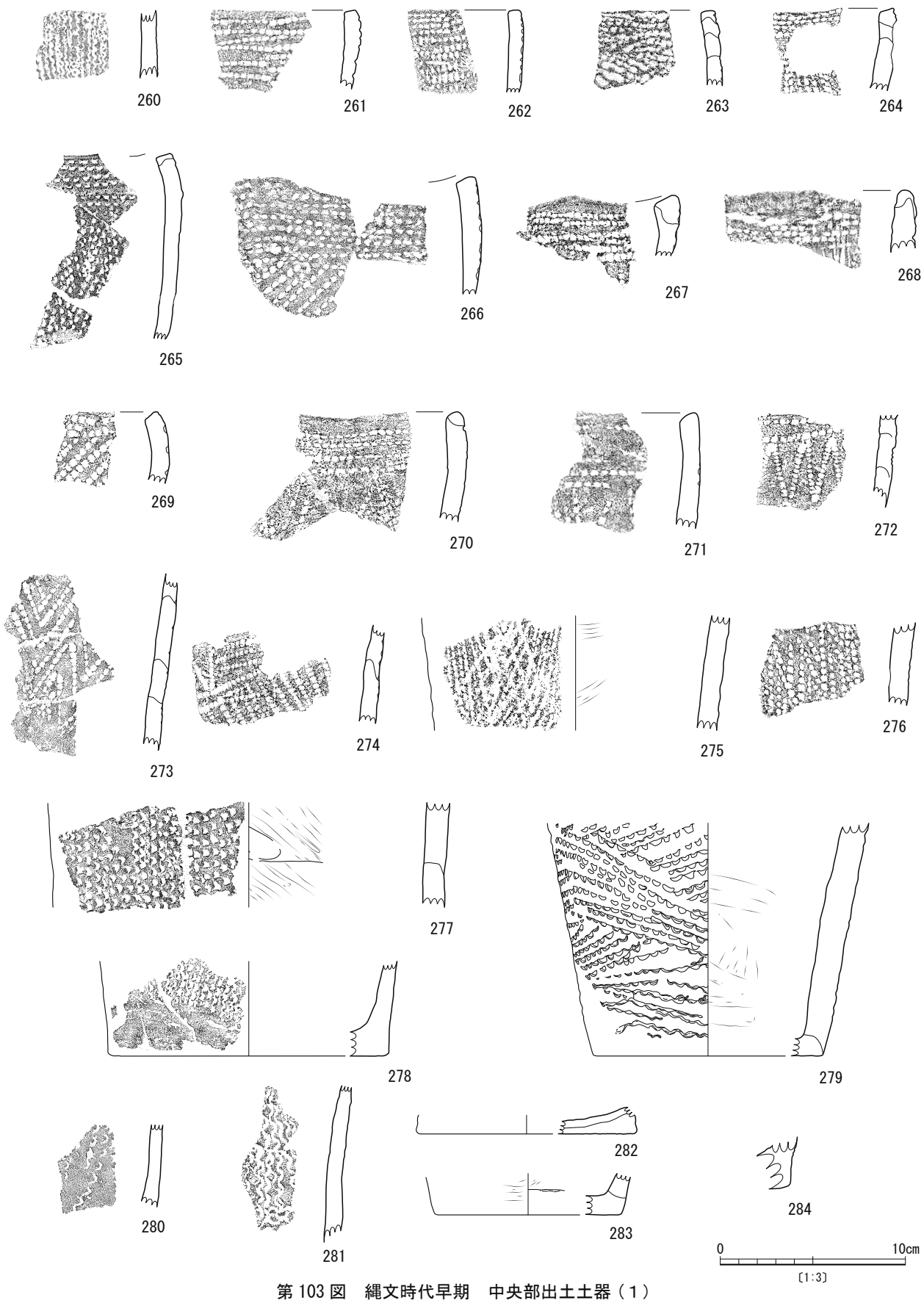


区Ⅳb層直下で検出された。検出範囲北側に底部があり，地形に沿って南側へ破片がみられた。口径は36.6cm，底径7.2cm，器高34.6cmである。体部の厚さにばらつきがある。底部は2.7cmの厚みがあり比較的厚手である。内面は，貝殻腹縁による横主体の条痕が明瞭で，口唇部内面は小さな段を有し，巻貝押圧による刻目が施される。胴部には貝殻腹縁による斜格子及び縦方向の条痕文がみられるが底部付近には届いていない。胎土は砂質土で，混和材として石英や白色鉱物，雲母が多く混入されている。口縁上部の外面にはススが付着し黒色を呈すが，全体的に赤褐色である。非常に脆く，器面の剥落が目立つ。

第101図　縄文時代早期　東部出土土器及び出土状況図(17)



第 102 図　縄文時代早期　中央部出土土器分布図



第 103 図　縄文時代早期　中央部出土土器（1）

（３）調査区中央部（第 102 図）

Ⅰ類（第 103 図 260）

中央部ではこの一点のみの出土である。260 は，貝殻腹縁による刺突を縦位に連続して施す。

Ⅲ－１類（第 103 図 261 ～ 284）

261 ～ 271 は口縁である。261 は横位に貝殻腹縁の押圧文を施す。262 はわずかに内湾し，横位に貝殻押圧文を施す。263・264 は断面に輪積痕が明瞭に残る。265 ～ 267 は波状口縁資料である。いずれも，横位に貝殻腹縁の押圧を数段施し，下に縦・斜位の押圧文がみられる。265 は押圧による凹部形状が半截状竹管に似る。268 は上部に，粘土帯を巻きつけるように貼り付ける。269 は内湾し，口唇が内側に傾く。ナデ調整がミガキ様で光沢を帯びる。270 は口唇を丸くおさめ，横位と斜位に貝殻腹縁押圧を施すが，文様間に空白部が多くなる。271 は外面に摩滅がみられる。272 は胴部である。横位と斜位の貝殻押圧により鋸歯文を描く。273 は底部付近までの残存資料で，施文が底まで至っていない状況が確認できる。文様は鋸歯文を数段重ねて施す。274 は斜位貝殻押圧，下位は縦位の押圧文が施される。275・276 は斜位の貝殻押圧文による施文を重複して施す。277 は縦位の貝殻刺突を施した後，斜位に施す。焼成が良く硬質。278 はほぼ直立する器形の底部資料である。貝殻腹縁による押圧を斜位に施す。下部はミガキ様のナデにより，光沢を帯びる。279 は貝殻押圧を斜位に施し，綾杉文を描く。280・281 貝殻腹縁を縦位に連続して刺突して施文する。280 は施文の間隔が広い。

282・283 は底部で，282 は内底部に粘土を重ねた痕跡が明瞭である。283 は内面が黒色で，外面は丁寧な横ナデである。284 は外面に斜位の貝殻押圧が若干確認でき，胎土中に雲母が多いことから本類と判断した。

Ⅲ－５類（第 104 図 285 ～ 287）

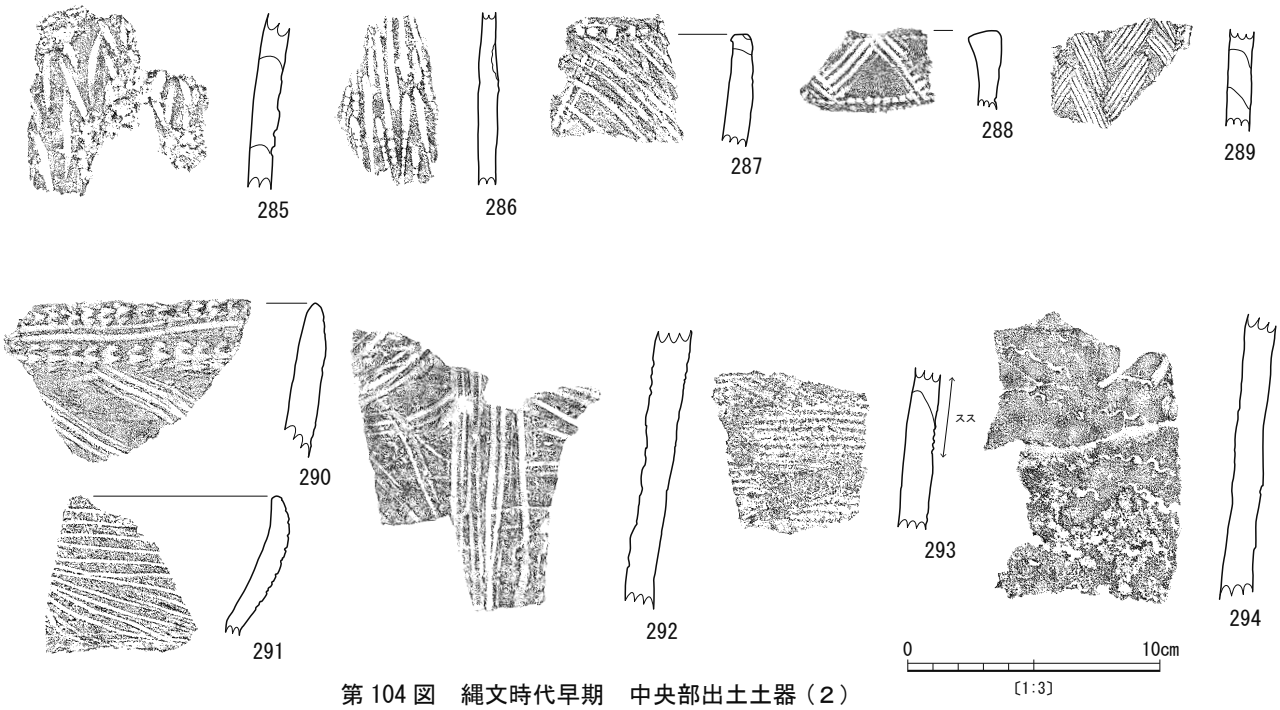
285 は短い沈線で縦向きの羽状文を施す。286 は貝殻腹縁を縦向きに刺突し，羽状文となる。焼成は良好である。287 は口縁端に刻目を施す。文様は貝殻腹縁によって右,左上がりの条痕を施す。内面は丁寧なナデ調整で，やや内湾口縁を意匠した輪積みが見られる。

Ⅳ類（第 104 図 288・289）

288 は口縁内側に肥厚し，内湾口縁となる。口唇部は平坦に整形される。２㎝幅で横位の貝殻刺突文を施し，その間に４条単位の貝殻条痕で鋸歯文を施す。289 は５条を単位とし羽状文を描く。

Ⅸ－５類（第 104 図 290 ～ 294）

290 は貝殻押引き文を口縁下に２段横位に施す。押引き文の間には貝殻条痕がみられる。胴部にかけては斜位の貝殻条痕を施す。291 は頸部から大きく外反し徐々に内傾する。文様は頸部に横沈線を施し，上位に横と斜めの沈線をさらに施す。292 は焼成良く，硬質である。文様は貝殻条痕の縦位直線と曲線文によって構成される。293 は横位の貝殻条痕が施されるがナデ調整で一部消失している。上部にはススが付着する。294 は貝殻腹縁による斜位の押圧文が施されるが，下部は器面が剥離して観察できない。



第 104 図　縄文時代早期　中央部出土土器（２）

（４）調査区西部（第 105 図）

Ⅲ－１類（第 106 図 295）

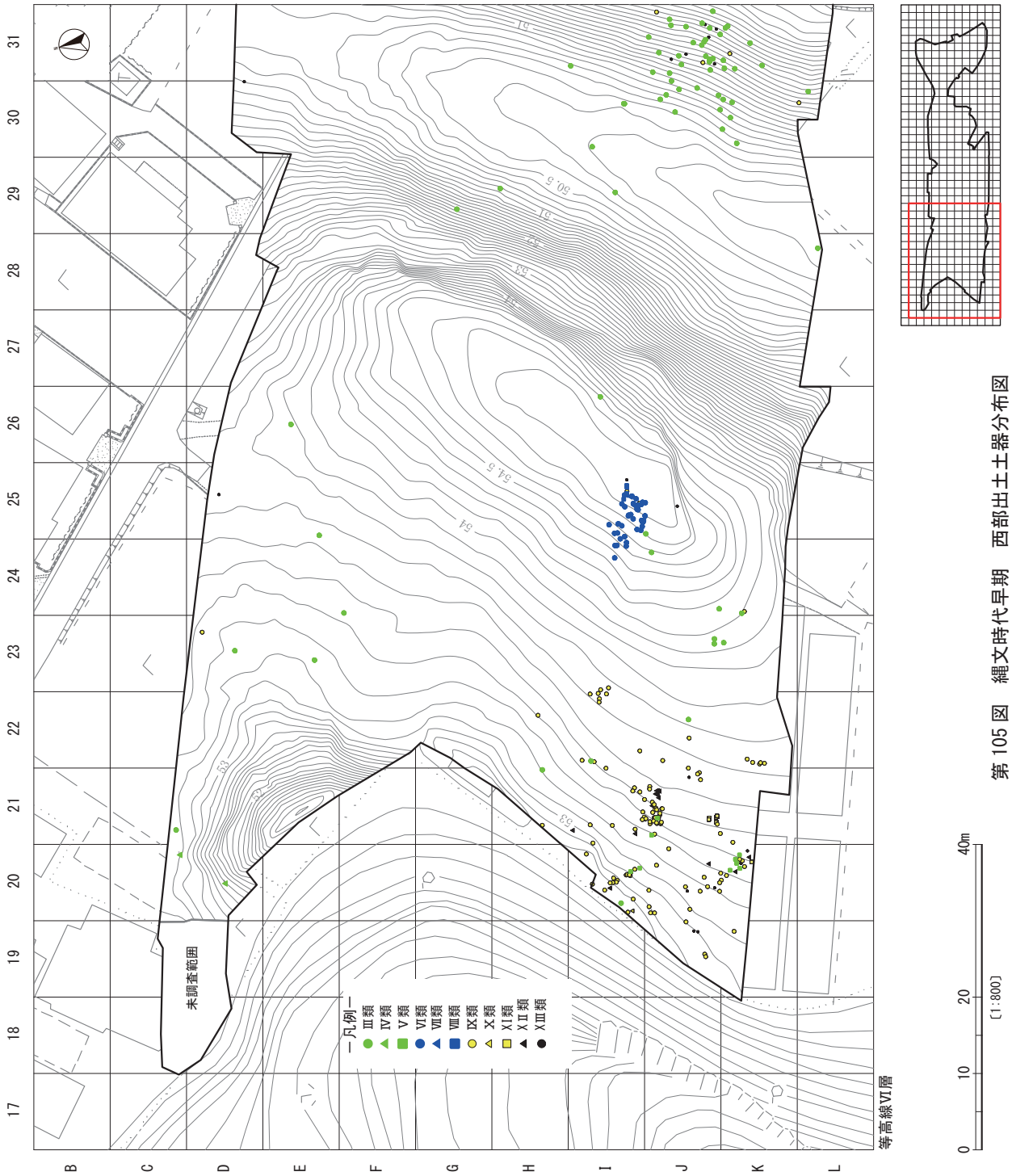
295 は口縁から胴部にかけての資料で復元口径は 25.2cm である。口唇部は丸く，若干内湾する。文様はまず貝殻腹縁刺突を口縁に２条横位に施し、その下位には同手法で羽状文を施す。また口縁上部から下に４cm の箇所に横長の突帯を貼り付ける。

Ⅲ－２類（第 106 図 296 ～ 298）

296 は口縁から五段の押圧文が横位に施される。口唇は平坦に整形される。297 も押圧文による施文である。内面の調整がケズリ様である。298 は斜位に押圧施文される。

Ⅳ類（第 106 図 299 ～ 301）

299 は口縁が波状を呈す。口縁端から貝殻腹縁の押圧及び条痕による施文がみられる。横位に押圧した後，条



第 105 図　縄文時代早期　西部出土土器分布図

痕による鋸歯文を施す。300は５条単位の貝殻条痕により羽状文を施す。301は資料上部に横位の肥厚帯を作り貝殻押引き文を施す。その上位にも1.5㎝程の長さの押引きを施す。肥厚部下位には、５条単位の条痕により鋸歯文を描く。

Ⅴ類（第106図306・307）

306は楕円の押型文を施す。原体を斜位に転がし施文している。307は山形押型文を縦位に転がし施文する。破片のみで接合資料は確認できなかった。

Ⅵ類（第106図302・303）

伊佐市手向山遺跡を標識とする手向山式土器に比定される。

302と303は同一個体である。302は復元口径が25.8cmである。器形は底部から外傾し胴中部から「く」の字状に屈曲し口縁に向かって外反する。口縁上部には粘土帯を貼り付けて肥厚させ，肥厚部に刻目を施す。胴部上半には縄目がみられるが，凹部が浅く，単位などが観察できない。内面は横位のナデ調整で、下部は条痕がみられる。303は復元底径6.8cmで上げ底となる。

Ⅶ類（第106図304・305）

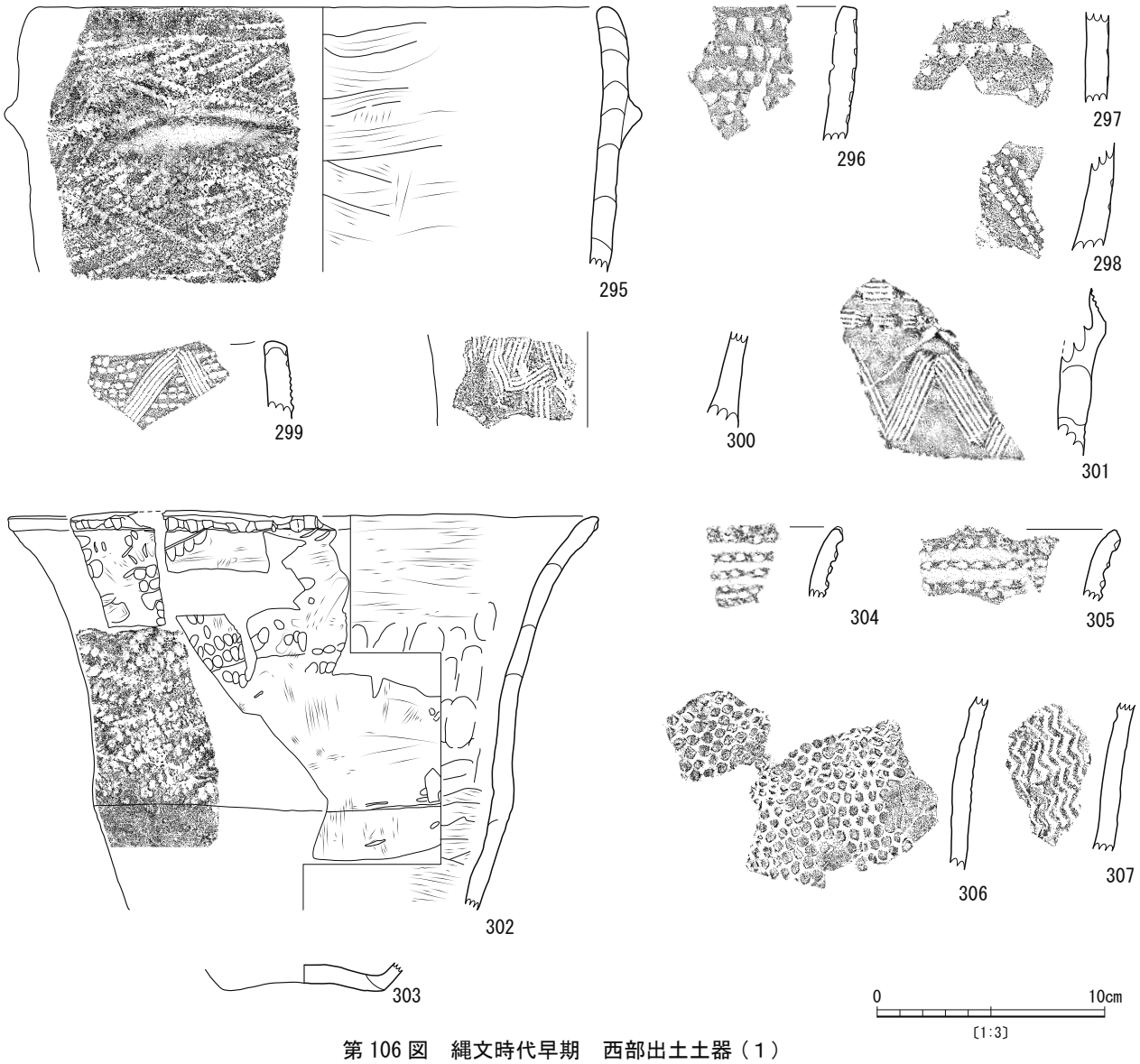
宮崎県えびの市妙見遺跡を標識とする，妙見式土器に比定される。

304は突帯を口縁に４条巡らし、突帯上に棒状工具で連続刺突を施す。内面は比較的丁寧な横ナデ調整である。

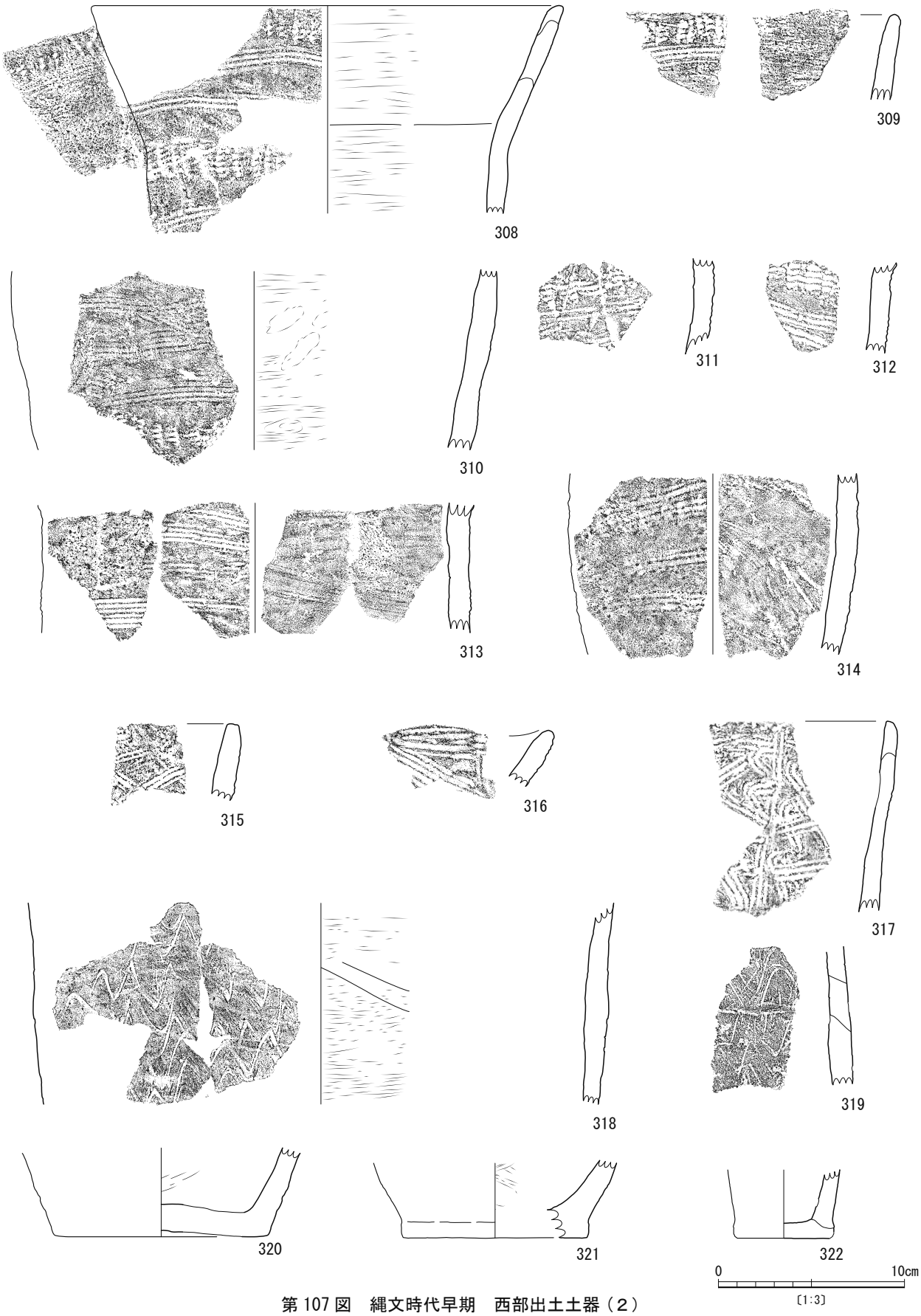
305は突帯が３条残る。突帯上に304同様に刺突が施される。口縁上部は突帯が一部突出し，波状口縁を呈していた可能性がある。

Ⅸ－２類（第107図308～314）

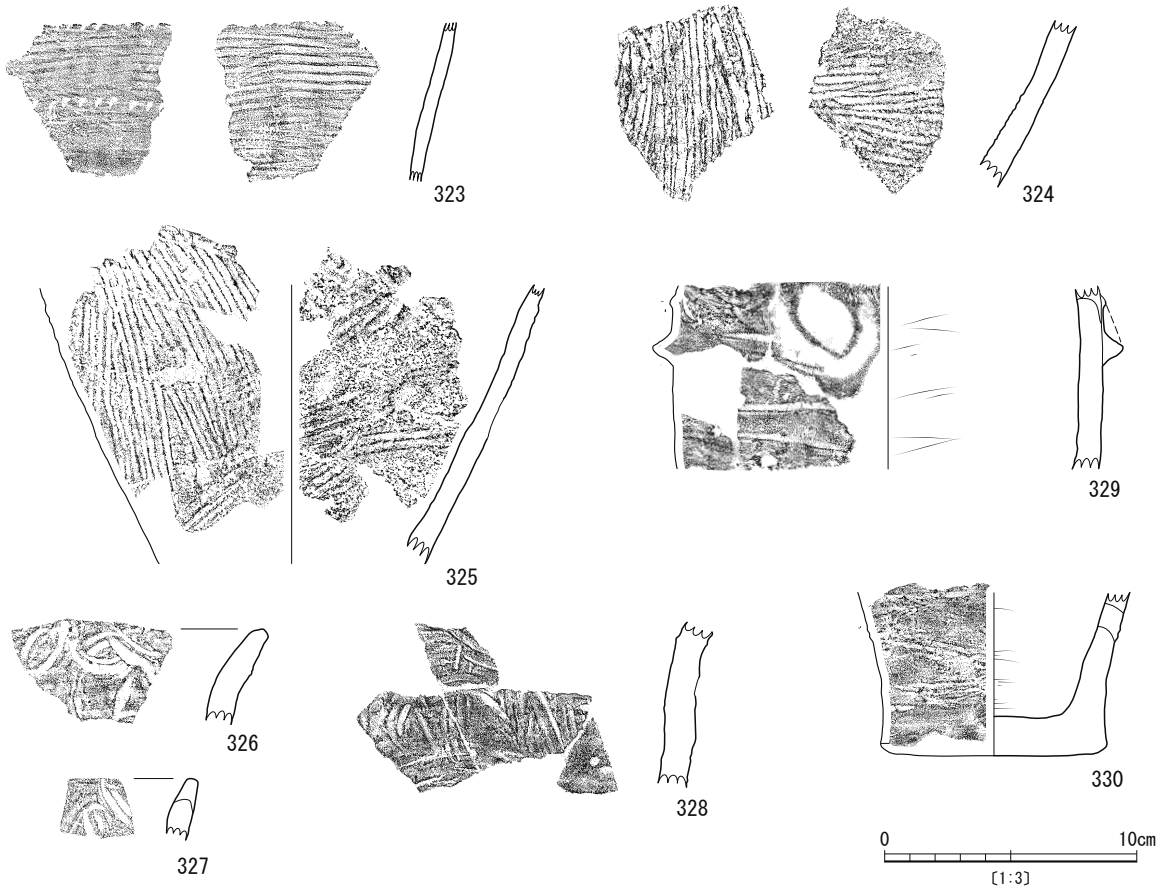
308は頸部から口縁に向かって外反し，口縁に縦向きの貝殻腹縁を横位に連続押圧する。頸部は押引き文で区画を作出し，その中に貝殻条痕を横位に二段施す。外面は風化がみられる。復元口径は25.4㎝。309は内面調整



第106図　縄文時代早期　西部出土土器（１）



第 107 図　縄文時代早期　西部出土土器（２）



第 108 図　縄文時代早期　西部出土土器（３）

が丁寧で，焼成もよい。310 も４条単位の横位条痕が施され，下部には押引き文がみられる。一部風化によって，条線が不明瞭である。311 ～ 314 は胴部資料で，貝殻腹縁条痕が施される。311 は内面に調整時の粘土溜がみられる。312 は上部文様がやや押引き気味である。313 は３～６条単位の横位条痕が施される。中央付近は器面が風化し条痕がみえない。314 は内面調整が左上がりの斜位調整である。

Ⅸ－４類（第 107 図 317 ～ 322）

317 はほぼ直立する器形で口縁端に刻目が施される。外面には縦，横に条痕を施し区画として，その中に同じく貝殻条痕の流水文を縦に施す。318・319 は貝殻条痕による横位の流水文を施す。混和材の鉱物が大きい。320 は復元底径が 11.4cm で上げ底である。鉱物粒が大きく，器面も凹凸がみられる。321 は底部から胴部にかけてややくびれを有す。内面は貝殻腹縁によるナデで，条痕が若干残る。復元底径 10.0cm。322 は底部調整が粗く，輪積みの痕跡が顕著に残る。復元底径 5.2cm。

Ⅸ－５類（第 107 図 315・316）

315 は口唇部を平坦に作り出し，外面には条痕による斜格子文を描く。316 は波状口縁の破片である。上部に横位の条痕，下位には斜位の条痕を施す。

XI 類（第 108 図 323 ～ 325）

323 は厚さ５㎜と薄く，胎土はきめ細かい。内外面ともに横位の条痕が明瞭に残る。外面には貝殻腹縁端部による刺突が横方向に二段施される。324・325 は外面に縦位，内面に横位の条痕調整がみられる。同一個体であるが，接合点はなかった。

XII 類（第 108 図 326 ～ 330）

型式不明な土器群である。326･327 は外反する口縁で，口唇はヘラ状工具で平坦に仕上げる。外面は貝殻条痕で半弧状の曲線が絡み合うような文様が描かれる。328 は屈曲部を持つ胴部である。外面は貝殻条痕文で縦、横位に施文する。内面は横ナデで丁寧に調整される。329・330 は同一個体と思われるが，接合点がなかった。329 は胴部にリング状の突帯を貼り付け，浮文を作出する。その後，横位の条痕を施す。330 は若干のくびれを持つ。復元底径は 9.0cm で，外面に横方向の条痕が施される。浮文を有する土器は類例が少なく様相が判然としないが，当該土器が出土しているＩ・Ｊ－ 20・21 区付近ではⅨ類土器が多くみられたことや，器形などからⅨ類土器の範疇に収まる可能性も考えられる。

第６表　縄文時代早期出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位（残存部）	分類番号	調整		文様	色調		胎土								焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石	赤石	角閃石		
84	54	G50	Ⅴb	11341	口縁～胴上半	Ⅰ	－	横ナデ，縦ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，口唇：刻目	にぶい橙	橙		○	○	○					○	良	口径（19.0）cm
84	55	H51,I53	Ⅴb	10467 他	口縁	Ⅰ	－	横ナデ	貝殻腹縁刺突文，貝殻押引き文，楔形突帯，口唇：刻目	赤	赤	○		○						○	普	口径（15.4）cm
84	56	G50	Ⅴb	10581	口縁	Ⅰ	縦ケズリ	縦ケズリ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，口唇：刻目	橙	橙	○				○	○			○	良	口径（16.4）cm
84	57	H50・51, I51	Ⅴb	10448 他	口縁～胴上半	Ⅰ	縦ナデ	縦ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，口唇：刻目	にぶい赤褐	赤	○								○	普	口径（16.4）cm
84	58	E51,G53, H49	Ⅴb，Ⅵ	10630 他	胴	Ⅰ	－	縦ケズリ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯	淡赤橙・にぶい橙	赤橙	○		○						○	普	胴径 16cm
84	59	F50	Ⅴb	13040	口縁	Ⅰ	－	横ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，口唇：刻目	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○					良	
84	60	G51	Ⅴb	11309	口縁～胴	Ⅰ	ナデ	ナデ	貝殻腹縁刺突文，横条痕文，楔形突帯，口唇：刻目	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			○	普	
84	61	I50	Ⅴb	10622	口縁～胴	Ⅰ	ナデ	ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，口唇：刻目	にぶい赤褐	赤褐	○		○			○			○	普	
84	62	G・H51	Ⅴb	8602 他	口縁	Ⅰ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯（脇：貝殻刺突），口唇：刻目	にぶい褐・一部赤褐	にぶい赤褐	○			○	○					良	
84	63	G50,H51	Ⅴb	8550 他	口縁	Ⅰ	－	ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，口唇：刻目	明赤褐	にぶい橙	○		○	○					○	普	
84	64	H51	Ⅴb	10481 他	口縁	Ⅰ	ナデ	ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，口唇：刻目	にぶい橙	赤	○				○	○			○	良	
84	65	G50	Ⅴb	10572	口縁	Ⅰ	ナデ	ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，口唇：刻目	赤	赤	○		○						○	普	
86	66	G50	Ⅴb	11320	口縁	Ⅰ	－	横ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯（脇：貝殻腹縁刺突）	赤褐	赤褐	○	○	○		○					普	
86	67	G50	Ⅴb	10567	口縁	Ⅰ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯（脇：貝殻刺突文＋沈線），口唇：刻目	にぶい橙	にぶい橙	○			○		○				普	
86	68	K51	Ⅴb	11944	口縁	Ⅰ	横ナデ	横ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，口唇：刻目	赤	赤	○	○	○	○						良	
86	69	I52	Ⅴb	14555	口縁	Ⅰ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，口唇：刻目	にぶい橙	赤	○		○						○	良	
86	70	H51	Ⅴb	10480	口縁	Ⅰ	－	丁寧なナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯（脇：凹線），口唇：刻目	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○								○	良	すり切り補修孔
86	71	G49	Ⅴb	11330	口縁	Ⅰ	－	横ナデ	貝殻腹縁刺突文，鋸歯文，楔形突帯（脇：凹線），口唇：刻目	赤	にぶい赤褐	○								○	良	器壁厚い 1.4cm 他 0.6 ～ 0.9cm 程度
86	72	I50,J51	Ⅴb	10621 他	胴上半	Ⅰ	－	丁寧な斜ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯（脇：貝殻腹縁刺突）	にぶい橙	橙	○		○		○				○	普	
86	73	G51	Ⅴb	11310	胴上半	Ⅰ	－	横ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯	明赤褐	明赤褐	○		○		○	○				良	
86	74	G50・51	Ⅴa・b	8625 他	胴	Ⅰ	－	横ナデ	条痕文文，貝殻腹縁刺突文	にぶい橙	にぶい橙	○								○	普	胴径 14cm
86	75	E48,G49	Ⅴb	10634 他	胴上半	Ⅰ	－	丁寧なナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯（脇：貝殻腹縁刺突文）	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○				○	良	胴径（19.2cm）
86	76	G50	Ⅴb	10574	胴	Ⅰ	－	縦ケズリ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯（脇：凹線）	橙・にぶい橙	橙	○	○							○	良	
86	77	H51	Ⅴb	10475 他	胴	Ⅰ	ケズリ様縦ナデ	ケズリ様縦ナデ	貝殻腹縁刺突文	明赤褐	明赤褐	○	○	○		○				○	普	
86	78	G,H49	Ⅴb	10635 他	胴	Ⅰ	－	丁寧なナデ	貝殻腹縁刺突文（押引き様）	橙	橙	○		○		○	○			○	良	外面スス
86	79	I51	Ⅴb	10450	胴下半（底近く）	Ⅰ	－	ナデ	貝殻腹縁刺突文，条痕文	にぶい赤褐	にぶい赤褐			○			○			○	普	内面コゲ
86	80	J51	Ⅴb	11384 他	胴下半（底近く）	Ⅰ	－	丁寧なナデ	貝殻腹縁刺突文，条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○		○	○					○	普	
86	81	H51・52	Ⅴb	8577 他	胴	Ⅰ	ナデ	ケズリ	貝殻腹縁刺突文	赤褐	赤褐	○			○	○				○	良	81・84・85 は同一
86	82	G52,H51 I50,J52	Ⅴb	10524 他	底	Ⅰ	ナデ	ナデ	貝殻腹縁刺突文，底近くに縦条痕文	赤	赤	○	○			○				○	普	底：ナデ 底径 11.4 cm
86	83	H・I51, J53	Ⅴ, Ⅴb	7695 他	底	Ⅰ	－	ヘラケズリ	貝殻腹縁刺突文，条痕文	赤	赤	○		○	○	○				○	良	底丁寧なナデ，内底ナデ，底径 11.8 cm
86	84	H51	Ⅴb	10469 他	胴～底	Ⅰ	ナデ	ケズリ	貝殻腹縁刺突文，条痕文	赤褐	赤褐	○			○	○				○	良	81・84・85 は同一
86	85	G49,H51	Ⅴb	10498 他	胴～底	Ⅰ	ナデ	ケズリ	貝殻腹縁刺突文，条痕文	赤褐	赤褐	○			○	○				○	良	81・84・85 は同一 底径（13.6）cm
87	86	F・G・H51	Ⅴ，Ⅴb，Ⅵ	8574 他	口縁～胴上半	Ⅰ	貝殻条痕	縦ナデ→横ナデ	貝殻腹縁刺突文，楔形突帯，条痕文，口唇：刻目	赤褐	赤褐	○		○		○	○			○	普	口径（17.4）cm
87	87	G50,H49	Ⅴb	8630 他	胴上半	Ⅰ	貝殻条痕	横ナデ	条痕文，楔形突帯(脇:凹線)，凹線部：丹塗り	にぶい橙・一部黒褐	にぶい橙				○	○	○			○	良	補修孔有り 縦長楕円形
87	88	G・I50,H51	Ⅴb	10594 他	胴上半	Ⅰ	横ナデ	横ナデ	条痕文，楔形突帯(脇:凹線)	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○			○	普	補修孔有り 外側穿孔
87	89	G・H・I50, J51	Ⅴb	10445 他	胴	Ⅰ	－	縦ナデ	条痕文	赤褐	暗赤灰			○		○	○			○	普	89・90 は同一
87	90	G・I50	Ⅴb	10568 他	胴	Ⅰ	－	縦ナデ	条痕文	赤褐	暗赤灰			○		○	○			○	普	89・90 は同一
87	91	K53	Ⅴb	12995	胴	Ⅰ	貝殻条痕→ナデ	縦ナデ	貝殻腹縁刺突文，条痕文	橙	赤			○		○	○	○		○	普	
87	92	F35	Ⅴ	17595	底	Ⅰ	ナデ	ナデ	貝殻腹縁刺突文	にぶい黄橙	褐灰	○								○	普	
87	93	G50	Ⅴb	11317	底	Ⅰ	縦ナデ	縦ナデ	条痕文	明赤褐	明赤褐	○		○		○				○	普	底径（11.0）cm
87	94	C51	Ⅴb	14724 他	底	Ⅰ	ナデ	ナデ	－	暗赤褐	黒褐	○	○	○	○	○					普	
87	95	G51	Ⅴb	12415	底	Ⅰ	丁寧なナデ	ナデ	縦条痕文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○					普	底径（12.2）cm
87	96	G51	Ⅴb	10556 他	底	Ⅰ	丁寧なナデ	ナデ	縦条痕文	赤	赤	○	○	○	○	○					普	底径（13.2）cm
87	97	I51	Ⅴb	8538	底	Ⅰ	ナデ	ナデ	縦条痕文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○	○					○	普	底径（11.2）cm

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位（残存部）	分類番号	調整		文様	色調		胎土								焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石	赤石	角閃石		
87	98	K53	Ⅴb	11973	底	Ⅰ	丁寧なナデ	ナデ	縦条痕文	にぶい橙	赤	○			○		○			○	普	底径（14.2）cm
87	99	J51	Ⅴb	11367	底	Ⅰ	ナデ	ナデ	縦条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○		○						○	普	丁寧ナデ，内は粗 底径（17.2）cm
87	100	J50	Ⅴb	12002	底	Ⅰ	ナデ	ナデ	縦条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○						○	普	底径（17.2）cm
88	101	E47	Ⅴb，Ⅵ上	7390 他	口縁	Ⅱ	ナデ	ナデ	貝殻押圧文，綾杉状条痕	赤褐色	にぶい橙	○		○	○						良	
88	102	H41	Ⅴb	17279 他	胴	Ⅱ	縦ナデ	横ナデ，斜ナデ	長方形状突帯，貝殻腹縁刺突，格子状条痕	にぶい黄橙	黒褐	○		○	○	○					良	
89	103	C52,D52,G44	Ⅱb，Ⅴb	12936 他	口縁～胴	Ⅲ-1	ナデ	横・斜め丁寧なナデ	貝殻押圧文，鋸歯文	褐	褐	○		○	○	○					良	口径（19.8）cm
89	104	E48･49,F49	Ⅴa･b,Ⅵ	8316 他	口縁～胴	Ⅲ-1	ナデ	ミガキ様丁寧なナデ	貝殻押圧文，鋸歯文	暗赤褐	暗赤褐・一部黒褐	○			○	○					良	口径（23.5）cm
89	105	E47,F48	Ⅴb	7375 他	口縁～胴	Ⅲ-1	丁寧なナデ	ミガキ様丁寧なナデ	貝殻押圧文，鋸歯文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○					良	口径（17.2）cm
89	106	F50	Ⅴb	13046 他	口縁	Ⅲ-1	ナデ	丁寧な横ナデ	貝殻押圧文，鋸歯文	にぶい赤褐	褐	○			○						良	口唇：丁寧な横ナデ
89	107	G48	Ⅴb	10642	胴	Ⅲ-1	丁寧なナデ	丁寧なナデ	貝殻押圧文，鋸歯文	にぶい赤褐	赤褐	○		○	○		○				良	
89	108	E48	Ⅴa	8317	胴	Ⅲ-1	ナデ	ナデ	貝殻押圧文，鋸歯文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○	○						普	
89	109	F47	Ⅴ	17656	胴	Ⅲ-1	丁寧なナデ	丁寧なナデ	鋸歯文	褐灰・にぶい橙	にぶい褐	○			○	○	○				良	
89	110	D51	Ⅴb	13034	胴	Ⅲ-1	丁寧なナデ	丁寧なナデ	貝殻押圧文	赤褐	黒褐	○		○	○						良	
89	111	C50･51	Ⅴb	14723 他	胴	Ⅲ-1	ナデ	丁寧な縦ナデ	鋸歯状文	にぶい黄褐	灰黄褐	○	○							○	良	111・112 は同一
89	112	C51,E52	Ⅴb	12903 他	胴	Ⅲ-1	ナデ	丁寧な縦ナデ	鋸歯状文	にぶい橙	褐灰	○	○	○	○						良	111・112 は同一
89	113	F･G45	Ⅴ，Ⅵ	17526 他	口縁	Ⅲ-1	横ナデ	横ナデ	貼付突帯，鋸歯文	明褐	褐	○	○		○	○					普	波状口縁
90	114	H～J52	Ⅴa･b	5947 他	口縁～胴上半	Ⅲ-2	ナデ	ナデ	連点文	にぶい赤褐	にぶい赤褐				○	○	○			○	良	口唇：ナデ 口径（19.2）cm
90	115	F48,G49 H51,I42	Ⅴa･b	8194 他	口縁	Ⅲ-2	ナデ	横ナデ	連点文	にぶい褐	にぶい褐	○		○	○	○					良	口径（29.0）cm
90	116	E51	Ⅴb	13005	口縁	Ⅲ-2	横ナデ	横ナデ	横貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい橙	○					○			○	普	
90	117	E51	Ⅴa	8387	口縁	Ⅲ-2	横ナデ	横ナデ	横貝殻押圧文	赤灰	赤灰	○		○		○				○	普	補修孔あり
90	118	D51	Ⅴa	8382	口縁	Ⅲ-2	横ナデ	横ナデ	横貝殻押圧文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○	○			○	普	
90	119	G49	Ⅴa	11012	口縁	Ⅲ-2	ナデ	ナデ	横貝殻押圧文	にぶい褐	にぶい褐	○			○		○				普	
90	120	H51	Ⅴb	8580 他	口縁～胴	Ⅲ-2	ナデ	横ナデ	横貝殻押圧文	褐灰	褐灰	○				○				○	良	
90	121	J52	Ⅴb	11579	胴	Ⅲ-2	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	横貝殻押圧文	にぶい褐	黒褐	○				○					良	内面コゲ
90	122	F50	Ⅴb	13044	胴	Ⅲ-2	丁寧なナデ	横ナデ	横貝殻押圧文	にぶい黄褐	黒褐	○			○	○	○				普	
90	123	H51	Ⅴb	10497 他	胴	Ⅲ-2	ナデ	横ナデ	横・縦貝殻押圧文	にぶい橙	灰褐	○		○	○	○					良	
90	124	F47,G･H51	Ⅴ・Ⅴb	10493 他	胴	Ⅲ-2	ナデ	丁寧な横ナデ	横・縦貝殻押圧文	にぶい褐	灰褐	○		○	○	○					良	
90	125	H51	Ⅴb	10486 他	胴	Ⅲ-2	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	横・縦貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい橙	○				○	○				良	
90	126	G50	Ⅴb	11316	胴	Ⅲ-2	ナデ	－	横貝殻押圧文	にぶい褐	にぶい褐	○		○	○						良	
90	127	D51	Ⅴb	13010 他	口縁	Ⅲ-2	ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	横貝殻押圧文	にぶい橙	黒	○		○	○						良	口径（20.7）cm 波状口縁
90	128	H･I51	Ⅴb	10472 他	胴～底	Ⅲ-2	横ナデ	横ナデ	横・縦貝殻押圧文	にぶい橙	灰褐	○		○		○					良	
90	129	J52	Ⅴa	11284	底	Ⅲ-2	ヘラナデ	ヘラナデ	貝殻押圧文	灰褐	灰褐	○	○			○					良	底丁寧なナデ
90	130	D51	Ⅴa	8379	底	Ⅲ-2	ナデ	ナデ	底：木葉痕	にぶい赤褐	灰褐	○	○	○						○	普	底径（8.0）cm
90	131	F50	Ⅴb	13043	底	Ⅲ-2	丁寧なナデ	丁寧なナデ	貝殻押圧文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○	○				良	底径（14.4）cm
90	132	D49	Ⅱb，Ⅴb	14736	底	Ⅲ-2	ナデ	ナデ	横貝殻押圧文	褐灰	黒褐	○			○		○				普	
90	133	F･G49	Ⅴb	13060 他	口縁	Ⅲ-3	ナデ	丁寧な横ナデ	貝殻押圧文，縦刺突文交互	黒	黒褐	○		○	○					○	良	外面スス
90	134	F49	Ⅴb	13056	胴	Ⅲ-3	ナデ	縦ナデ	横長の瘤，横押圧文，縦刺突文	にぶい橙	にぶい橙	○			○	○					良	
90	135	F49	Ⅴa･b	11025 他	胴	Ⅲ-3	ナデ	丁寧なナデ	縦貝殻刺突文	褐灰	褐灰・一部は褐	○			○	○					良	
90	136	G50	Ⅴb	11322 他	胴	Ⅲ-3	ナデ	丁寧な縦ヘラナデ	縦貝殻腹縁刺突文（爪形状）	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○		○				良	
90	137	F49	Ⅴb	13055 他	胴	Ⅲ-3	ヘラナデ	丁寧なヘラナデ	縦貝殻腹縁刺突文（爪形状）	にぶい赤褐	にぶい赤褐			○	○		○				良	
90	138	H49	Ⅴb	10633	胴	Ⅲ-3	ナデ	縦・斜めナデ	縦貝殻腹縁刺突文（爪形状）	にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○				○	普	摩滅が顕著
91	139	F48,H51	Ⅴb	8589 他	口縁	Ⅲ-4	ナデ	横ナデ	条痕文，押圧による鋸歯文	赤褐	赤褐			○	○	○					良	139・141・142・144 は同一
91	140	F45	Ⅴ	17873	口縁	Ⅲ-4	ナデ	横ナデ	横押圧文による鋸歯文	明褐	褐	○			○	○					良	
91	141	G49	Ⅴb	8628 他	胴上半口縁近く	Ⅲ-4	ナデ	横ナデ	条痕文，押圧文，押圧による鋸歯文，瘤横貼付	赤褐	赤褐			○	○	○					良	139・141・142・144 は同一
91	142	G51	Ⅴb	10557	口縁	Ⅲ-4	丁寧なナデ	丁寧なナデ	横条痕文，押圧による鋸歯文	赤褐	赤褐			○	○	○					普	139・141・142・144 は同一
91	143	F47	Ⅴ	17633 他	口縁	Ⅲ-4	ナデ	ナデ	横条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○							良	
91	144	G49,H48	Ⅴb	10638 他	胴	Ⅲ-4	ナデ	ナデ	鋸歯文，横条痕文	赤褐	赤褐			○	○	○					良	139・141・142・144 は同一
91	145	G49	Ⅴb	8462 他	胴	Ⅲ-4	丁寧なナデ	ヘラ縦ナデ	鋸歯文	にぶい黄橙	褐灰	○		○	○	○				○	良	

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位（残存部）	分類番号	調整		文様	色調		胎土								焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石	赤石	角閃石		
91	146	G50	Ⅴb	10575	口縁	Ⅲ-5	-	丁寧なナデ	貝殻条痕文，綾杉文	にぶい赤褐	褐灰	○	○	○							良	146～148は同一
91	147	H51	Ⅴb	8642	口縁	Ⅲ-5	ナデ	丁寧なナデ	貝殻条痕文，綾杉文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○	○				普	146～148は同一
91	148	H51	Ⅴb	8568	口縁	Ⅲ-5	ナデ	ナデ	貝殻条痕文，綾杉文	にぶい赤褐	褐灰	○				○					良	146～148は同一
91	149	G50,H51	Ⅴb	10511他	胴	Ⅲ-5	丁寧なナデ	丁寧なナデ	綾杉文	灰褐	褐灰	○				○	○			○	良	
91	150	H51	Ⅴb，Ⅵ	8587他	胴	Ⅲ-5	丁寧なナデ	丁寧なナデ	綾杉文	灰褐	灰褐	○	○		○	○	○				良	
91	151	G･J51	Ⅴb	11303他	胴	Ⅲ-5	ナデ	ナデ	綾杉文	にぶい褐	にぶい褐	○				○	○				良	
91	152	H53	Ⅴb	14552	底	Ⅲ-5	丁寧なナデ	丁寧なナデ	-	にぶい褐	にぶい褐	○			○	○	○				良	内底部欠損 底径11.6㎝
91	153	C51	Ⅴb	14420	底	Ⅲ-5	ナデ	ナデ	-	にぶい赤褐	褐灰	○					○			○	普	底径（15.4）㎝
91	154	H52	Ⅴb	13038	底	Ⅲ-5	ナデ	ナデ	底：圧痕	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○		○				普	底に白粘土 底径9.6㎝
91	155	D49	Ⅴb	14865	口縁	Ⅲ-6	ナデ	ナデ	縦短沈線羽状文，横貝殻押圧文	赤褐	黒褐	○			○		○				普	口唇：丁寧なナデ 155～160は同一
91	156	D51	Ⅴb	14856	口縁	Ⅲ-6	ナデ	ナデ	縦短沈線波状文，横貝殻押圧文	赤褐	黒褐	○			○		○				普	155～160は同一
91	157	C51	Ⅴb	14730	口縁	Ⅲ-6	ナデ	ナデ	縦短沈線羽状文，横貝殻押圧文	赤褐	黒褐	○			○		○				普	155～160は同一
91	158	D49	Ⅴb	14737	胴	Ⅲ-6	ナデ	ナデ	縦短沈線波状文，横貝殻押圧文	赤褐	黒褐	○			○		○				普	155～160は同一
91	159	D49	Ⅴb	14879	胴	Ⅲ-6	ナデ	ナデ	縦短沈線波状文，横貝殻押圧文	赤褐	黒褐	○			○		○				良	155～160は同一
91	160	C50	Ⅴb	-	底	Ⅲ-6	ナデ	ナデ	縦短沈線波状文，横貝殻押圧文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○	○						普	155～160は同一 底丁寧なナデ 底径13.5㎝ 内面コゲ
91	161	K52･53	Ⅴb	11967他	口縁	Ⅳ	横ナデ	横ナデ	縦流水文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○				○	普	161～164は同一
91	162	K53	Ⅴa	11971	胴	Ⅳ	横ナデ	横ナデ	縦流水文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○				○	普	161～164は同一
91	163	K53	Ⅴa	11972	胴	Ⅳ	横ナデ	横ナデ	縦流水文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○				○	普	161～164は同一
91	164	J54	Ⅴb	11980	胴	Ⅳ	横ナデ	横ナデ	縦流水文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○				○	良	161～164は同一
91	165	H52	Ⅴb	14874	胴	Ⅷ	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	横連点文	にぶい褐	にぶい褐	○				○				○	良	
91	166	G42	Ⅴb	17257	口縁	Ⅷ	ナデ	ナデ	貼付肥厚帯，撚糸文， 口唇：刻目	橙	橙	○			○						普	
92	167	E51･52	Ⅴa，b	8396他	胴下半～底	Ⅴ	-	丁寧な横ナデ	山形押型文	赤褐	赤灰	○	○				○			○	普	器厚5㎜～10㎜ 底径（14.0）㎝
93	168	I53	Ⅴb	14764	胴	Ⅸ-1	ナデ	ナデ	無節縄文，沈線	明赤褐	暗赤褐	○		○		○					良	
93	169	I53	Ⅴb	14768他	胴	Ⅸ-1	ナデ	ナデ	無節縄文，沈線	明赤褐	暗赤褐	○		○		○				○	良	
93	170	J51	Ⅴb	11381	胴	Ⅸ-1	丁寧なナデ	丁寧なナデ	無節縄文，沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○	○					良	
93	171	H53	Ⅴb	14759	胴	Ⅸ-1	ナデ	ナデ	無節縄文，沈線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○					不良	
93	172	I43	Ⅴb	17221	頸～胴	Ⅸ-1	-	-	横沈線，撚糸文	明黄褐	明黄褐	○				○		○			良	風化による剥離
93	173	F47	Ⅴ	17658	口縁～胴上半	Ⅸ-2	-	横ナデ	貝殻押圧文，貝殻条痕文	にぶい橙	灰褐	○	○	○		○					普	胎土の粒子大
93	174	F47	Ⅴ	17631	口縁	Ⅸ-2	-	横ナデ	貝殻押圧文，下：条痕文	赤黒	にぶい赤褐	○	○				○				良	
93	175	H44	Ⅴ	17567	口縁	Ⅸ-2	-	横ナデ	貝殻押圧文，下：条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○					普	
93	176	E46	Ⅴb	17002他	口縁	Ⅸ-2	-	横ナデ，一部ケズリ	貝殻刺突文，貝殻押引き様押圧文	にぶい黄褐	明赤褐	○	○		○						良	風化による剥落
93	177	I43	Ⅴb	17222	胴	Ⅸ-2	丁寧なナデ	丁寧なナデ	貝殻押圧文，横貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○				○	良	
93	178	F47	Ⅴ	17639	胴	Ⅸ-2	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	横貝殻条痕文	赤灰	赤灰	○				○	○			○	普	内外スス
93	179	I52	Ⅴ	7670	口縁～胴上半	Ⅸ-2	ナデ	ナデ	口唇：刻目，横貝殻条痕文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○			○	○					良	
93	180	H42	Ⅴb	17286	胴	Ⅸ-3	-	斜ナデ	横貝殻条痕文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○			○						良	
93	181	G45	Ⅵ	17682	胴	Ⅸ-3	-	横ナデ	横貝殻条痕文	橙	にぶい褐	○	○			○					良	胎土に黒曜石含む
94	182	J20･21	Ⅴ，Ⅵ	22261他	胴	Ⅸ-4	粗いナデ	粗いナデ・ケズリ様	横沈線による流水文	明赤褐	黒褐	○			○	○			○		良	
94	183	F42	Ⅴ	17854	胴	Ⅸ-4	横ナデ	横・斜ナデ	横貝殻条痕による流水文	明黄褐	にぶい黄	○				○					良	
94	184	F44	Ⅴ	17780	胴	Ⅸ-4	ナデ	ナデ	横貝殻条痕により流水文	にぶい褐	灰褐	○	○			○					良	
95	185	G44,H43	Ⅴb，Ⅵ	17246他	口縁	Ⅸ-5	縦，横ナデ	ケズリ様横ナデ	口唇：刻目，横・斜条痕文，爪形文	にぶい黄橙	褐灰	○	○			○					普	口径（14.9）㎝ 185～187・191は同一
95	186	H44	Ⅴ	17565	口縁	Ⅸ-5	-	横ナデ	口唇：刻目，横・斜条痕文	明黄褐	褐灰	○						○			良	185～187・191は同一
95	187	H44	Ⅴ	17569	口縁	Ⅸ-5	-	横ナデ	口唇：刻目，横・斜条痕文	明黄褐	褐灰	○				○		○			良	185～187・191は同一
95	188	G47	Ⅴ	17677	口縁	Ⅸ-5	横ナデ	横ナデ	横沈線，条痕文	暗褐	暗褐	○	○			○	○			○	良	
95	189	F47	Ⅴ	17674	口縁	Ⅸ-5	-	横ナデ	横・斜条痕文	暗褐	暗褐	○	○	○			○			○	良	
95	190	E45	Ⅴb	17014	口縁	Ⅸ-5	横ナデ	横ナデ	斜沈線	にぶい黄褐	褐	○	○		○						良	
95	191	H43	Ⅴ	17646	胴	Ⅸ-5	-	横ナデ	条痕による斜格子文	にぶい黄橙	褐灰	○				○		○			普	185～187・191は同一

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位（残存部）	分類番号	調整		文様	色調		胎土								焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石	赤石	角閃石		
95	192	F50	Ⅴa	8204 他	胴	Ⅸ-5	横ナデ	横ナデ	条痕による斜格子文	灰褐	灰褐	○		○				○		○	良	
95	193	F49	Ⅴa，b	8224 他	胴	Ⅸ-5	－	横ナデ	条痕による斜格子文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○	○			○	普	
95	194	G･H49	Ⅴb	8496 他	胴	Ⅸ-5	丁寧な横ナデ	斜ナデ	条痕文	にぶい黄橙	灰白	○		○		○				○	良	
95	195	H52	Ⅴa，b	12747 他	胴	Ⅸ-5	横ナデ	横ナデ	斜条痕文	明赤褐	赤灰	○				○	○			○	普	
95	196	G44	Ⅴ	17542	胴	Ⅸ-5	横ナデ	斜ナデ	貝殻刺突文，鋸歯文，格子文	明褐	褐	○	○			○		○			普	胴：補修孔有り　胎土に黒曜石含む
95	197	E44	Ⅴb	17021	口縁	Ⅸ-5	－	条痕	貝殻腹縁刺突文，沈線による格子文	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○		○	○					良	
95	198	I53	Ⅴb	14771	胴	Ⅸ-5	丁寧なナデ	丁寧なナデ	斜沈線文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○		○	○				良	
95	199	F49	Ⅴb	13133	胴	Ⅸ-5	丁寧なナデ	丁寧なナデ	沈線による綾杉・羽状文	にぶい橙	褐灰	○	○	○	○		○			○	良	
95	200	F45･46	Ⅴ	17694 他	胴	Ⅸ-5	－	－	横貝殻条痕文	明赤褐	明赤褐	○	○			○					良	胎土に黒曜石含む　200・201は同一
95	201	F45	Ⅴ	17712	底	Ⅸ-5	横ナデ	横ナデ，一部斜め	横貝殻条痕文	赤褐	黒	○				○					良	底径（11.2）cm 胎土に黒曜石含む 200・201は同一
95	202	I52	Ⅴ	7668 他	底	Ⅸ-5	ナデ	ナデ	斜貝殻条痕文	橙	灰褐	○		○						○	良	底径（10.0）cm
96	203	E47	Ⅴ	7381	口縁～底	Ⅸ-5	ナデ（手づくね風）	ナデ（手づくね風）	貝殻条痕による斜格子文	赤・にぶい橙	赤・褐灰・にぶい橙			○							良	口径（10.0）cm 底径 7.8cm
96	204	F･G47	Ⅴ	17582 他	胴	Ⅸ-5	横ナデ	ナデ	貝殻条痕による斜格子文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		○					良	
96	205	E44	Ⅴb	17020	底	Ⅸ-5	ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○					良	胎土に黒曜石含む
96	206	G45	Ⅴ	17505	底	Ⅸ-5	横ナデ	横ナデ	－	明褐	明褐	○			○	○			○		良	
96	207	H42	Ⅴb	17282	底	Ⅸ-5	－	－	－	にぶい褐	明褐	○				○		○			普	
96	208	G42	Ⅱb	10972	底	Ⅸ-5	横ナデ	横ナデ	－	にぶい橙	褐灰	○				○		○			良	
96	209	H42	Ⅴb	17288 他	底	Ⅸ-5	縦ナデ	ヘラナデ	横貝殻条痕文	にぶい黄	黄灰	○	○								普	底径 7.0 cm
96	210	F45	Ⅴ，Ⅵ	17755 他	口縁～胴	Ⅸ-6	縦・横ナデ	横ナデ	口唇：刻目，横貝殻刺突文	褐	にぶい黄褐	○						○			普	外面にススロ径（18.4）cm
96	211	F45	Ⅵ	17758	口縁	Ⅸ-6	－	横ナデ	口唇：刻目，横貝殻刺突文	褐	にぶい黄褐	○						○			普	
97	212	H52	Ⅴb	14748 他	口縁	Ⅸ-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○	○						普	
97	213	F47	Ⅴ	17671	口縁	Ⅸ-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○	○					普	
97	214	H52	Ⅴ	5884	口縁	Ⅸ-7	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○					普	
97	215	H53	Ⅴb	14761	口縁	Ⅸ-7	丁寧なナデ	丁寧なナデ	貝殻押圧文	褐	にぶい褐	○				○				○	普	
97	216	H52	Ⅴb	14744 他	口縁	Ⅸ-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○	○						普	
97	217	J52	Ⅴa	11503	口縁	Ⅸ-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧による爪形文	にぶい橙	灰褐	○	○	○				○		○	普	
97	218	I52	Ⅴ	7669	口縁	Ⅸ-7	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○						○	普	
97	219	I52	Ⅴ	7666	胴	Ⅸ-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧による爪形文	にぶい橙	灰褐	○	○	○				○		○	普	219・220は同一
97	220	I52	Ⅴ	7662	胴	Ⅸ-7	ナデ	ナデ	貝殻押圧による爪形文	にぶい橙	灰褐	○	○	○				○		○	普	219・220は同一
97	221	G50,H51	Ⅴb	10550 他	口縁	Ⅸ-8	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧，貝殻押引き文	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○				○	普	ススス
97	222	H51	Ⅴb	8547 他	胴	Ⅸ-8	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○				○	普	ススス
97	223	H51	Ⅴb	8553 他	胴	Ⅸ-8	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○				○	良	ススス
97	224	H51	Ⅴb	8549	胴	Ⅸ-8	横ナデ（左→右）	横ナデ（左→右）	貝殻押圧文	橙	にぶい橙・黒	○		○		○	○	○		○	良	
97	225	H･I50	Ⅴb	8533 他	底	Ⅸ-8	ナデ	ナデ	貝殻押圧文，底面：植物圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○				○	普	底径（12.0）cm
97	226	E45,F47	Ⅴ，Ⅴb	17023 他	底	Ⅸ-8	横ナデ	横・縦ナデ	－	明赤褐	にぶい橙	○	○			○	○			○	普	底径（9.2）cm
97	227	F49	Ⅴb	11028	底	Ⅸ-8	ナデ	ナデ	底：筋状圧痕	にぶい橙	にぶい橙	○		○		○				○	普	底丁寧なナデ 底径 7.8 cm
97	228	G49	Ⅴb	8463 他	底	Ⅸ-8	ナデ	ナデ	－	にぶい橙	褐灰	○				○	○			○	普	底に白粘土 底径（11.8）cm
97	229	G48	Ⅴb	8668 他	底	Ⅸ-8	横・斜ナデ	横ナデ	貝殻押圧文	赤・にぶい橙	にぶい橙	○			○	○		○		○	普	底に白粘土 底径（15.4）cm 胎土に黒曜石含む
98	230	F44	Ⅵ	17827	口縁～胴	Ⅸ-9	横ナデ，貝殻条痕	横ナデ	貝殻押圧文，条痕文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			○					普	
98	231	E45	Ⅱb	17011	口縁～胴	Ⅸ-9	ヘラナデ	粗いナデ	貝殻押圧文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○			○			○			良	
98	232	F47	Ⅴ	17657	口縁	Ⅸ-9	ナデ	ナデ	貝殻押圧文，条痕による斜格子文	にぶい褐灰	褐灰・にぶい赤褐	○		○	○		○				良	波状口縁
98	233	F47	Ⅴ	17629	口縁	Ⅸ-9	ナデ	ナデ	貝殻押圧文	灰褐	褐灰	○	○				○			○	良	波状口縁
98	234	F48	Ⅴa，b	8425 他	口縁	Ⅹ	横ナデ	横ナデ	貝殻条痕による波状文，口唇：刻目	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○				○	良	
98	235	F48	Ⅴa	8252 他	口縁	Ⅹ	丁寧なナデ	丁寧なナデ	貝殻条痕による波状文	橙	橙	○	○	○			○				良	
98	236	H51	Ⅴb	8540	口縁	Ⅹ	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文，貝殻条痕による波状文	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○				○	良	ススス
98	237	F48	Ⅴb	12722 他	胴上半	Ⅹ	横ナデ	横ナデ	横・縦貼付突帯，貝殻条痕による波状文	にぶい橙	灰褐	○	○							○	良	摩滅目立つ
98	238	G44	Ⅴ	17552	口縁	Ⅹ	－	ナデ	縦貼付突帯（突帯上に刻目）	にぶい橙	にぶい橙	○	○								良	
98	239	F48	Ⅴa	8261	胴	Ⅹ	横ナデ	横ナデ	横貝殻条痕文，縦貼付突帯	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○	○			○	良	表面，突帯摩滅

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位（残存部）	分類番号	調整		文様	色調		胎土								焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石	赤石	角閃石		
98	240	F48	Ｖａ・ｂ	8280 他	胴	X	横ナデ	ナデ	貝殻押圧文，条痕文，横押圧文のある瘤状突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○	○					良	雲母が多い 240・241 は同一
98	241	F48	Ｖａ・ｂ	8290 他	口縁～胴	X	横ナデ	ナデ	貝殻条痕文，貝殻押圧文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○		○	○					良	雲母が多い 240・241 は同一
99	242	K52	Ｖｂ	11956 他	口縁～胴	XI	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻押圧文，貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○					普	
99	243	K52	Ｖｂ	11950 他	胴	XI	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○					普	
99	244	K52	Ｖｂ	11948 他	胴	XI	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○					普	
99	245	K52	Ｖｂ	11951 他	胴下半	XI	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○					普	
99	246	J52	Ｖａ・ｂ	11491 他	胴	XI	縦条痕	貝殻条痕	横・斜条痕文	にぶい褐・褐灰	にぶい褐・褐灰	○		○	○	○				普	
100	247	G42	Ⅳ	17115 他	口縁	XI	横条痕	横条痕	緩やかな波状口縁 口縁下径 1.1 ㎝の補修孔（ドリル）	黒褐	黒褐	○	○			○				良	口径（24.6）㎝ Ⅳ層（アカホヤ）
100	248	J･K52	Ｖａ	11535 他	胴	XI	条痕	縦・横ナデ	条痕による曲線文，直線文	橙	赤灰	○	○	○		○				普	
100	249	K55	Ｖｂ	11977	口縁	XI	貝殻条痕	貝殻条痕	口唇：刻目，条痕文	にぶい橙	明赤褐	○		○		○			○	良	
100	250	J51･52	Ｖａ	11369 他	口縁	XI	貝殻条痕	横ナデ	条痕文，低い波状口縁	にぶい橙・一部に黒褐	にぶい橙・一部に黒褐	○				○	○		○	良	250・251 は同一
100	251	K52	Ｖａ	11533	口縁	XI	ナデ・条痕	横ナデ	条痕文，低い波状口縁	にぶい橙・部分的に褐灰	にぶい橙・部分的に褐灰	○				○			○	良	250・251 は同一，内外ススス
100	252	F49	Ｖａ	8232 他	口縁	XI	ナデ	ナデ	横・斜沈線文	灰褐	灰褐	○	○	○		○				良	口径（13.8）㎝
100	253	H42	Ｖａ	17284	口縁	XI	－	横ナデ	横条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○				○	良	
100	254	F47	Ｖ	17633	口縁	XI	条痕	横ナデ	横沈線文，条痕文	にぶい褐	にぶい褐	○		○			○			良	
100	255	K53	Ｖｂ	12994	口縁	XI	横ナデ	粗い横ナデ	縦沈線文	にぶい褐	にぶい褐	○			○	○				良	
100	256	F50	Ｖｂ	14081	口縁	XI	横ナデ・条痕	横ナデ	刻目，横・斜条痕文	灰褐	灰褐	○	○	○		○		○		普	
100	257	E51	Ｖｂ	13140	胴	XI	ナデ	ナデ	刺突文，右下がり沈線文	にぶい橙	にぶい橙	○	○			○			○	普	
100	258	K52･54	Ｖａ・ｂ	11970 他	胴～底	XI	縦条痕	縦ナデ	条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○	○	○			良	内外面剥落
101	259	F42, G41･45	Ｖ，Ｖｂ	17260 他	完形	XI	ナデ・条痕	貝殻条痕（横主体斜方向あり）	貝殻押圧文，貝殻条痕斜格子文，縦条痕文	赤褐・上部はススにより黒色化	赤褐	○		○	○	○				良	口径 36.6㎝ 底径 7.2㎝ 器高 34.6 ㎝ 底面ナデ
103	260	G36	Ｖｂ	17076	胴	I	ナデ	ナデ	貝殻腹縁刺突文	にぶい橙	黒	○				○		○			良
103	261	K36	Ⅵ	33643	口縁	Ⅲ-1	横ナデ	横ナデ	横貝殻押圧文	明褐	赤褐	○			○	○					良
103	262	K32	Ⅵ	35620	口縁	Ⅲ-1	－	斜ナデ	横貝殻押圧文	浅黄	にぶい黄橙	○	○			○					良
103	263	I34	Ⅴ	40891	口縁	Ⅲ-1	－	ナデ	横貝殻押圧文，綾杉状の貝殻押圧文	にぶい赤褐	黒褐	○	○		○	○					良	口唇丁寧なナデ
103	264	G35	Ⅴ	17586	口縁	Ⅲ-1	－	横ナデ	貝殻押圧文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○			○	○					良
103	265	H35,K33	Ⅴ	34279 他	口縁～胴	Ⅲ-1	ナデ	斜ナデ	横・斜貝殻押圧文	黒褐・褐	にぶい褐	○	○		○						良	波状口縁
103	266	J33,K34	Ⅵ	34333 他	口縁	Ⅲ-1	ナデ	横縦ナデ	横・斜貝殻押圧文	にぶい黄橙	橙	○			○	○			○		良	波状口縁，口唇：丁寧なナデ指頭痕
103	267	J31,K32	Ⅴ，Ⅵ	32435 他	口縁	Ⅲ-1	横ナデ	丁寧な横ナデ	横貝殻押圧文	灰褐	褐	○			○	○					良	波状口縁
103	268	J34	Ⅰ	－	口縁	Ⅲ-1	ナデ	ナデ	横貝殻押圧文	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○		○	○					良	貼付突帯して波状口縁風
103	269	H36	Ⅴ	41078	口縁	Ⅲ-1	ナデ	ミガキ様ナデ	横・斜貝殻押圧文	明褐	黒	○			○						良
103	270	J31,L33	Ⅴ，Ⅵ	29801 他	口縁	Ⅲ-1	横ナデ	ナデ	横・斜貝殻押圧文	明黄褐	明黄褐	○	○					○			良	胎土のキメ細かい
103	271	K31	Ⅵ	32442	口縁	Ⅲ-1	横ナデ	横ナデ	横・縦貝殻押圧文	明黄褐	明黄褐	○			○	○					良
103	272	J34	Ⅵ	40711	胴	Ⅲ-1	ナデ	ナデ	貝殻押圧文，貝殻押圧による鋸歯文	褐	にぶい褐	○	○		○						良
103	273	K36	Ⅴ，Ⅵ	33631 他	胴	Ⅲ-1	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧による鋸歯文	明赤褐	明赤褐	○	○		○	○					良
103	274	J33	Ⅵ	38570	胴	Ⅲ-1	ナデ	ナデ	貝殻押圧文	褐	暗褐	○	○			○					良	器壁薄い
103	275	G34	Ⅵ	36381	胴	Ⅲ-1	－	丁寧な斜ナデ	貝殻押圧文（重複施文）	褐	灰黄褐	○			○						良
103	276	K30	Ⅵ	34359	胴	Ⅲ-1	横ナデ	丁寧な横ナデ	貝殻押圧文（重複施文）	明褐	灰褐	○			○	○					良
103	277	J31･32	Ⅴ，Ⅵ	32420 他	胴	Ⅲ-1	ナデ	斜ナデ	貝殻腹縁による斜連続刺突文	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○						○			良
103	278	K34･35	Ⅵ	34302 他	底	Ⅲ-1	ミガキ様ナデ	ミガキ様ナデ	貝殻押圧文	赤褐・褐	赤褐・灰黄褐	○			○						良	底径（15.1）㎝
103	279	J33	Ⅵ	37978 他	胴～底	Ⅲ-1	ナデ	斜ナデ→横ナデ	貝殻押圧による綾杉文	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○					良	底径（12.4）㎝
103	280	J34	Ⅵ	40707	胴	Ⅲ-1	縦ナデ	斜ナデ	貝殻腹縁による斜刺突文	にぶい橙	にぶい橙	○				○		○			普
103	281	J･K23	Ⅴ	33624 他	胴	Ⅲ-1	ナデ	横ミガキ様ナデ	貝殻腹縁による縦連続刺突，斜突	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○		○						普
103	282	F32	Ⅱｂ	36669	底	Ⅲ-1	底面の形に沿ナデ	横ナデ	－	明褐	黒褐	○	○					○			良	底径（11.9）㎝
103	283	I37,K34	Ⅵ	34326 他	底	Ⅲ-1	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	にぶい褐	灰褐	○	○		○							底径（10.0）㎝
103	284	G40	Ｖｂ	17266	底	Ⅲ-1	ナデ	－	貝殻押圧文	明褐	褐	○	○		○						良
104	285	H35･37	Ⅴ	39722 他	胴	Ⅲ-5	ナデ	丁寧なナデ	短沈線羽状文	にぶい褐	黒褐	○	○		○						良
104	286	G33	Ⅵ	40931	胴	Ⅲ-5	ナデ	斜ナデ	縦貝殻刺突による羽状文	明赤褐	にぶい黄橙	○									普
104	287	J37	Ⅴ	33329	口縁	Ⅲ-5	－	横ナデ	口唇：刻目，貝殻条痕文	灰黄褐・口縁上端は黒	黄褐	○			○	○					良
104	288	I35	Ⅴ	－	口縁	Ⅳ	ナデ	ナデ	貝殻刺突文，条痕による鋸歯文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○		○	○					普
104	289	J36	Ⅵ	33327	胴	Ⅳ	－	ナデ	貝殻条痕による羽状文	にぶい黄褐	褐	○	○		○						良

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位（残存部）	分類番号	調整		文様	色調		胎土									焼成	備考
							外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石	赤石	角閃石		
104	290	K40	V	22746	口縁	IX-5	横ナデ	横ナデ	貝殻押引き文，貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○		○			普	
104	291	J38	I	－	口縁	IX-5	－	丁寧なナデ	横・斜沈線文	灰黄	にぶい黄				○	○		○			良	
104	292	K36	V	33630 他	胴	IX-5	ナデ	ナデ	直・曲線の貝殻条痕文	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○			○					良	
104	293	D32	Ⅲb	－	胴	IX-5	ナデ	横条痕→ナデ消し	横貝殻条痕文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○				○					普	スス
104	294	H40	Vb	17273 他	胴	IX-5	横ナデ	ナデ	斜貝殻押圧文	にぶい橙	灰褐	○			○	○					普	胴下半は器面剥落
106	295	H21	VI	22859	口縁～胴	Ⅲ-1	ナデ	横ナデ	横貝殻刺突文，貝殻刺突による羽状文，粘土帯貼付	にぶい黄橙	黄橙	○			○	○					良	口径（25.2）cm
106	296	D26	VI	29663	口縁	Ⅲ-2	横ナデ	ケズリ様ナデ	横押圧文	にぶい褐	にぶい黄褐	○			○	○					普	
106	297	C21	V	23054	胴	Ⅲ-2	－	横ケズリ様ナデ	横・斜押圧文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○			○	○			○		普	鉱物粒移動顕著
106	298	E25	VI	29661	胴	Ⅲ-2	横ナデ	横ナデ	斜押圧文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○		○						良	
106	299	H26	I	－	口縁	IV	ナデ	ナデ	横貝殻押圧文，貝殻条痕による鋸歯文	明赤褐	明赤褐	○	○		○						普	
106	300	F33	VI	41061	底	IV	ナデ	ナデ	貝殻条痕による羽状文	褐	灰褐	○	○		○	○					普	
106	301	C・D20	V	23051 他	胴	IV	ナデ	ナデ	貝殻押引き文，条痕による鋸歯文	灰黄褐	にぶい黄橙	○	○		○						良	
106	302	I24・25	V，VI	29668 他	口縁～胴	VI	縦横ナデ	横ナデ，条痕	貼付突帯，口縁：刻目，縄文	にぶい褐	にぶい褐	○	○		○	○				○	良	口径（25.8）cm 302・303 は同一
106	303	I24・25	V，VI	29848	底	VI	ナデ	ナデ	－	黄褐	黄褐	○	○		○	○					良	上げ底 底径（6.8）cm 302・303 は同一
106	304	I25	V	29842	口縁	VII	－	横ナデ	突帯４条，棒状工具による刺突文	にぶい褐	にぶい褐	○						○	○		良	
106	305	I25	V	29845 他	口縁	VII	ナデ	ナデ	突帯３条，棒状工具による刺突文	にぶい黄褐	橙	○			○				○		普	
106	306	I20・21	V，VI	22898 他	頸～胴	V	－	横ナデ	楕円押型文	明褐	褐	○	○		○	○					普	
106	307	K20	V	22408	胴	V	－	横ナデ	山形押型文	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○									良	
107	308	I20・21	V，VI	22883 他	口縁	IX-2	ナデ	ナデ	貝殻押圧文，貝殻押引き文，条痕文	にぶい褐	橙	○	○			○					良	口径（25.4）cm 胎土に黒曜石含む
107	309	J20	V	22258	口縁	IX-2	横ナデ	横ナデ	貝殻押圧文，貝殻押引き文，条痕文	にぶい黄褐	黄褐	○				○			○		良	口唇：内→外へラナデ整形，三角形状
107	310	I21	V	22864	口縁	IX-2	－	横ナデ	貝殻押引き文，条痕文	明赤褐	明赤褐	○	○			○		○			良	
107	311	I20	V	22895	胴	IX-2	横ナデ	横ナデ	横貝殻条痕文	明黄褐	橙	○	○			○		○			良	
107	312	I20	V	22900	胴	IX-2	ナデ	横ナデ	貝殻押引き文，貝殻条痕文	明黄褐	橙	○				○		○			良	
107	313	I20	V	22887 他	胴	IX-2	斜ナデ	条痕・ナデ	横貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○		○			良	胎土に黒曜石含む
107	314	I20	V	22887	胴	IX-2	－	斜ナデ	横貝殻条痕文	橙	明黄褐	○	○			○					良	胎土に黒曜石含む
107	315	K20	V	22298	口縁	IX-5	ナデ	横ナデ	斜貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○		○			良	
107	316	I20	VI	22879	口縁	IX-5	ナデ	横ナデ	斜横貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○					良	波状口縁
107	317	I・J21	V，VI	22384 他	口縁～胴	IX-4	ナデ	横ナデ，斜ナデ	横貝殻条痕文区画，貝殻条痕の流水文	にぶい黄橙	明黄褐	○	○			○						
107	318	J21	V，VI	22262 他	口縁	IX-4	ナデ	ケズリ様のナデ	沈線による横鋸歯文	褐	褐	○	○		○							
107	319	I21	VI	22874 他	胴	IX-4	斜ナデ	横ナデ	沈線による横流水文	褐	褐	○	○		○	○						
107	320	I21, J21・22	V，VI	22382 他	底	IX-4	－	斜ナデ	－	明赤褐	にぶい黄褐	○	○		○							底径（11.4）cm
107	321	J21	VI	22403	底	IX-4	横・斜ナデ	条痕・ナデ	－	明赤褐	暗赤褐	○	○			○		○				底径（10.0）cm
107	322	I20	V	22939	底	IX-4	縦ナデ	縦ナデ	－	浅黄	明黄褐	○				○		○				底径（5.2）cm
108	323	K20	Ⅲb	17941	頸	XI	条痕，ナデ	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕文，貝殻刺突文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○							○			
108	324	J21	V	22332	胴	XI	貝殻条痕	横貝殻条痕	縦貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○						324・325 は同一
108	325	J21	V	22309 他	胴	XI	貝殻条痕	貝殻条痕によるナデ	縦横貝殻条痕文	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○			○						324・325 は同一
108	326	J20	V	22283	口縁	XII	横ナデ	横ナデ	貝殻条痕による曲線文	明赤褐	にぶい褐	○	○			○		○				
108	327	J21	V	22272	口縁	XII	横ナデ	横ナデ，口唇丁寧	貝殻条痕による曲線文	赤褐	褐	○						○				
108	328	I・J21, K20	V，VI	22273 他	胴	XII	横ナデ	横ナデ	縦・横貝殻条痕文	明褐	褐	○	○									胎土のキメ細かい
108	329	I・J21	V，VI	22268 他	胴	XII	横ナデ	横ナデ	横貝殻条痕文，貼付突帯	明赤褐	にぶい褐	○	○					○				329・330 は同一
108	330	I20, J21, K20	V，VI	22300 他	底	XII	条痕→横ナデ	横ナデ	横貝殻条痕文	赤褐	にぶい赤褐	○	○			○						底径（9.0）cm 329・330 は同一

４　遺構外出土石器

（１）概要

当該期の遺構外石器類は総数 496 点であり，その殆どが包含層であるＶ・Ⅵ層から出土したものである。早期を主体とした遺構の占地性及び土器分布域を踏襲し，調査区の東部,中央部,西部の各分布を示し内訳を述べる。剥片・砕片の大多数を除き，原形を留める石器をほぼ全て,188 点図示した。なお,石材鑑定は肉眼観察による。

（２）調査区東部（第 109 図）

Ｂ～Ｌ－ 41 ～ 55 区を一括する。出土石器類は合計 374 点である。器種別の内訳は，石鏃 29 点，尖頭状石器１点，石錐１点，異形石器１点，石匙２点，削器・掻器類９点，二次加工剥片 11 点，剥片・砕片 215 点，石核３点，打製石斧７点，磨製石斧３点，石錘状石器１点，敲石１点，磨石類 54 点，石皿類 20 点，砥石 12 点，軽石製品３点，その他に棒状礫１点である。

分布状況は，早期出土石器の約 3/4 を占めるが全体として密ではなく，Ｄ－ 52 区を頂部とする微高地から西側の緩斜面に比較的広く纏まっている。この内，剥片石器類は偏りなく分布し，打製石斧・磨製石斧は分布域の周辺部に点在する。磨石類は集石の多い微高地頂部付近からの西側斜面一帯と，南北の崖線に挟まれたＧ－ 46 区付近に多くみられ，石皿類ではＦ－ 47 区から近接して出土した大型品２点（444・445）が注目される。他に完形１点（443）がＧ－ 49 区より出土している。剥片類では，黒曜石が約 1/2，黒色安山岩が約 1/4 を占め，黒曜石はＪ－ 52 区を中心に全域に，黒色安山岩は微高地周辺にほぼ分布が限られている。異形石器（358）については，Ｊ－ 52 区の崖線際に位置し，その周囲２ｍの範囲に姫島産黒曜石製の石鏃１点（342）と調整剥片 70 点程によるブロックが存在する。また，この西側約４ｍより，特異な磨石１点（442）が出土している。

以下，個々の特徴について述べる。実測図の並びは出土区での分布状況に関係なく，順不同である。

石鏃（第 110・111 図 331 ～ 355）

25 点図化した。全て打製石鏃であり，類型は基部形状から,いわゆる平基の１類と凹基の２類に大別される。

331 ～ 334 は平基である。二等辺三角形を呈して，長幅比がやや縦長のものから，334 の大型に２：１のものがみられる。この内 332・333 は非常に先鋭な先端をもつが，いずれも表裏の一部に素材面を留めている。

335 ～ 352 は凹基である。全体的に素材改変度が高く，335 ～ 342 は長幅比がほぼ等しく，343 ～ 352 は長幅比が 1.5：１の縦長に形作られている。これらの内，347 ～ 349 は基部の抉り込みが比較的深く，348 では１点のみ鉄石英を石材として精密な調整が施されている。また，350 ～ 352 の３点は直線側縁にして脚部に「肩」を持つ特徴的な形態を呈する。

欠損については，339･344･349･350･352 が脚部を欠き，342・345 ～ 347 は先端部と脚部を欠いている。特に 342 は二次加工によって損なわれており，裏面の基部中軸への調整により先端部まで剥離されている。また，346 の表面には砕けた先端方向からの剥離が生じており，使用による衝撃剥離痕と見受けられる。その他に 353 ～ 355 は先端側上半部の欠損品としてみられる。

石材は，黒色安山岩と黒曜石が大半を占めるが多様である。黒色安山岩製が 10 点（334・337・338・341・344・345・347・351・353・355），黒曜石製が８点（332・333・335・342・343・350・352・354），チャート製が４点（339･340･346･349),ホルンフェルス製が１点（331），頁岩製が１点（336），鉄石英製が１点（348）であり，石材による形態差といった傾向はみられない。

尖頭状石器（第 111 図 356）

１点図化した。356 は素材剥片の末端側に尖頭となる二次加工を施すが，やや厚く左右非対称形にして，石鏃とするには曖昧な整形にある。基部の片側に折れ面を残置している。黒色安山岩製。

石錐（第 111 図 357）

１点図化した。357 は三角に不整形を呈し，摘み部から突き出した短い錐先部をもつ。二次加工は素材剥片の折れ面を左側縁に取り込み，残る縁辺に表裏から粗い調整剥離を施している。黒色安山岩製。

異形石器（第 111 図 358）

１点図化した。358 はチャート製の薄手の剥片を素材とし，表裏から剥離された抉入によって，石匙の摘み状の突起が三叉に形作られている。また，上端は折れ面をあて，下縁は細かな調整剥離により整形されている。なお，この種の異形石器について，雁股状に上下が逆向きとなる可能性がいわれている。

石匙（第 111 図 359・360）

２点図化した。359 は小さな摘み部が形作られた小型品である。周縁部への比較的丁寧な二次加工により，横長楕円形の整った形状を呈する。

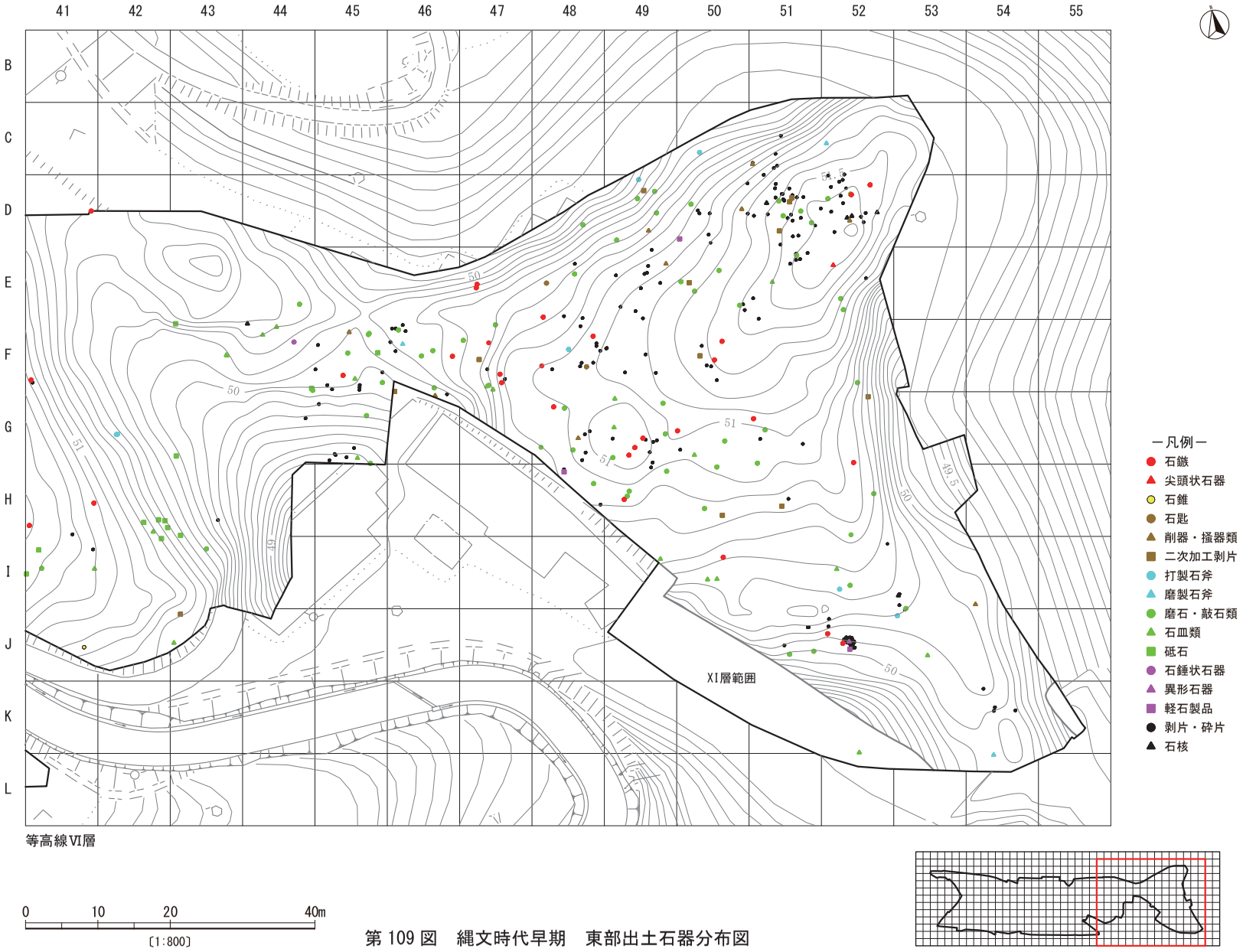
360 は不整形に簡単な二次加工によって形作られており，摘み部の抉入にのみ調整剥離を施して，両側縁は素材打面と折れ面を残置している。下縁の刃部は非常に鋭く，表裏に微小剥離痕が連続してみられる。石材は 359・360 のどちらも黒色安山岩である。

削器・掻器類（第 112・113 図 361 ～ 369）

９点図化した。361 ～ 365 は直線状の刃部が器体の一辺に作出されたものである。

361 は板状長方形の礫片を用いており，浅い調整剥離を加えた下縁の刃部に磨滅が生じている。安山岩製。

362 は砂岩，363 は黒色安山岩の幅広剥片を素材とし，



等高線Ⅵ層

0 10 20 40m
〔1:800〕

第 109 図　縄文時代早期　東部出土石器分布図

二等辺三角形の似通った形状を呈する。下縁刃部の二次加工は，362 は背面からやや急斜度に，363 は折れ面を残置して背腹両面から部分的に行われている。

364 も三角形状を呈するとみられるが欠損している。表裏からの刃部調整は比較的丁寧である。黒色安山岩製。

365 は不定形剥片の腹面に連続した刃部調整がみられ，下半部を欠損している。黒色安山岩製。

366 ～ 369 は略円形として，刃部が作出された小型のものである。

366 は角張った形状に浅い周縁調整が全周する。薄い右側縁は片面からの調整とし，頂部に小さく素材打面を残置する。珪質頁岩製。

367 も二次加工が全周するが，一部側縁に素材折れ面が取り込まれている。拇指状に整った刃縁を呈する。黒色安山岩製。

368 は粗い調整剥離を背腹両面から施して，左側縁を弧状の刃縁に形作っている。上面に表皮，右側縁に折れ面を残置する。黒色安山岩製。

369 も調整が粗く，大振りな剥離面によって整形されており，一部背面に表皮を留める。上部を幾らか欠損する。珪質頁岩製。

二次加工剥片（第 113 図 370 ～ 372）

３点図化した。370 は三船産黒曜石の剥片を用いている。調整は粗く背腹両面から行われ，右側縁のほかは折れ面を呈する。

371 は薄い横長剥片を用いており，片方の側縁に幾らかの調整剥離がみられ，加えて連続した微小剥離痕が生じている。反対側縁は折れ面である。黒色安山岩製。

372 は日東系黒曜石の比較的大きな横長剥片である。縁辺の所々に不規則な剥離がみられるが，偶発的に意図した加工ではない可能性もある。

剥片（第 113・114 図 373 ～ 375）

３点図化した。373 は珪質頁岩製の末端側が肥厚した縦長剥片であり，鋭い側縁の一部に微小剥離痕が生じている。石材別の単独個体である。

374 は姫島産黒曜石を用いた剥片であり，打面を除く全縁に微小剥離痕が生じている。

375 は表皮をもつ珪質頁岩製のやや大きな縦長剥片であり，石材別の単独個体である。

石核（第 114 図 376 ～ 378）

３点図化した。376 は黒色安山岩製の石核で，打面転移を行って不規則に小型の不定形剥片を剥離した残核である。裏面に表皮を留め不整な板状を呈する。

377 はチャート製の石核であり，表皮と節理面に覆われた，縦断面が三角形を呈する分割礫を用いている。剥片剥離は節理面を打面として主に正面で行われており，底面側を除いた周縁部に数枚の不定形な剥離痕を留める。まだ石核原形の段階にあるともいえる。

378 は珪質頁岩製の石核である。正面に一枚大振りな剥片剥離面を留め，平らな表皮を打面としている。石核はその後の作業によって幾つかに破砕し，その内４点の破片が接合したものである。

打製石斧（第 115・116 図 379 ～ 385）

７点図化した。形態は一定しておらず，礫器状のものをも含めている。

379 は表裏に平坦な表皮と節理面をもつ頁岩製の剥片を用いており，素材形状をそのままに幅広の胴部をもつ。二次加工は粗く背腹両面から行われ，刃部のほか，周縁に部分的な整形剥離を加えている。調整による縁辺は鋭く，加撃による潰れはみられない。

380 は楔形の断面をもつホルンフェルス礫を素材として，その一端を刃部側にあてている。加工は両側縁の調整剥離を切る大きな剥離面によって，器体の厚みを減じさせている。しかし，刃部の末端は未調整で礫面のままに鈍く，おそらくは未製品であるとみられる。

381 はホルンフェルス製の剥片を素材とした小型品である。加工は厚みのある一方の側縁に行われており，使用によるものか刃部を欠く。

382 は長楕円の扁平なホルンフェルス礫を素材としている。加工は素材形状を活かし，刃部から一方の側縁にかけて片面への粗い調整剥離が施されており，刃部の整形が弱い礫器的な製品かとみられる。

383 も 382 同様，加工による改変が弱い器体であり，ホルンフェルスの扁平礫を用いている。下端に表裏からの粗い剥離による斜行した刃部を留める。

384 は砂岩製の剥片を素材として，台形に厚みのある形状を呈する。加工はやや粗く，主に腹面側の周縁に整形剥離を施しており，縁辺にジグザグの稜線を留める。

385 は基部側に抉り部をもつ定形的な形態を呈し，尖頭状の刃部を有する。ホルンフェルス製の剥片を素材として，周縁に整形剥離を施しており，下半部は腹面側を未調整として形作られている。

磨製石斧（第 116 図 386 ～ 388）

３点図化した。386 は比較的小型のもので，加工は厚みをもたせた表面に対して裏面を平坦に研磨しており，側縁への研磨はなく，調整剥離痕を留める。被熱赤化が著しい。安山岩製。

387 はやや広い刃部の撥形を呈する。打製石斧同様の粗い調整剥離によって形作られており，整った刃部から器体の中軸にかけて部分的に研磨が施されている。基部の末端には敲打調整による整形がみられる。ホルンフェルス製で，著しく風化している。

388 は胴部から基部を欠損した刃部側であるが，おそらくは再生品とみられる。全面に丁寧な研磨が施されており，整った刃部に横方向の研磨痕が顕著である。また，折れ面から生じた表裏の剥離面にも微弱な研磨が認めら

れる。石材は重量感のある砂岩である。

石錘状石器（第 116 図 389）

１点図化した。389 は砂岩の扁平長方形の破片であり，短軸の両極に簡単な剥離の加工がみられるものである。

敲石（第 117 図 390）

１点図化した。390 は長楕円形の扁平な礫を用いており，上下両端を作業面として後退した著しい敲打痕が生じている。また裏側は平らな磨り面としている。砂岩製。

磨石類（第 117 ～ 123 図 391 ～ 442）

52 点図化した。図上，凡そ大きい物順に並べ，最大径 13 ㎝までの８㎝以上あるものを大～中型品，それ未満のものを小型品として便宜的に大別した。また，これらには，磨り痕・敲打痕・凹痕にみる各機能を併せ持ったものが存在することから，磨石・敲石・凹石を一括して扱った。以下に分類する。

１類：磨り面のみで，片面か両面，全面に及ぶもの

２類：磨り面と敲打痕をもつもの

３類：磨り面と表裏中央に凹痕をもつもの

４類：磨り面と敲打痕，表裏中央に凹痕をもつもの

391 ～ 425 の大～中型の磨石類は，１類 21 点，２類９点，３類２点，４類３点となっており，１類が全体の 2/3 を占めている。１類は，391 ～ 394 等の磨りが表裏にみられるものが大半で，その中で 391 ・392 のように円礫の表裏の作業面が平坦なものと，396 や 400 などの丸みを帯びているものに分かれる。他方 395 は，全周磨り面とみられるが，被熱による剥落が著しい。２類は，397・399・405・409 ～ 411・417・424・425 の９点である。411 は欠損品であるが，表裏の磨りと全周に及ぶ著しい敲打により石鹸形を呈するものとみられる。その他は，敲打の痕跡が弱く，原礫の不整な形状を留めている。405 は細長く連なる敲打痕が上面，側面にみられる。３類は，412・413 の２点で，磨りによる平坦な表裏面を持つ円ないし楕円礫で，凹痕は顕著ではない。４類は，414 ～ 416 の３点で，416 は全周の磨りと側面の敲打により石鹸形を呈している。凹痕は３点とも顕著ではない。

426 ～ 441 の小型の磨石類は，１類 12 点，２類３点，４類１点と，１類が 3/4 を占めている。426 ～ 428 等の１類は，円ないし楕円礫を用いており，磨りは概ね表裏にみられるが，436 を除き丸みを帯びた原礫の形状を留めている。２類は 429・432・438 で，敲打が側面又は下面にみられる。磨り，敲打ともに顕著ではなく，やはり原礫の形状を留めている。４類は 434 の１点のみで，表裏の磨りと側面の敲打により石鹸形を呈する。四隅に残る原礫面から，小ぶりな円礫を用いたとみられる。表面の凹痕は比較的深い。被熱により著しく赤化している。

442 は黒光りした表裏の中心部に黄褐色斑が目立ち，１点のみ特殊である。角の落ちた算盤玉のような形状を呈し，滑らかな全面に短く放射状に生じた擦痕がみられる。石材は夾雑物を含まず重量感がある。透閃石岩とするが，黄褐色斑の貫入があり検討を要する。

石材は多いものから，安山岩（25 点 48%），花崗岩・花崗閃緑岩（13 点 25%），砂岩（9 点 17%），ホルンフェルス（２点４%），玄武岩・凝灰岩・透閃石岩（各１点６%）の利用がみられる。花崗岩・花崗閃緑岩は大型～中型品に多く，また，１類が 10 点と偏っている。安山岩は小型品の 2/3 を占めている。なお，原礫の形状もしくは石材の硬度によるものか，花崗岩類，砂岩は扁平な円形を呈するものが多く，安山岩，ホルンフェルスでは不整形もしくは断面形が曲面のものが多くみられる。

なお，赤化や黒色付着物など，被熱のみられるものは半数に近い 24 点である（392・395・399・402 ～ 405・410 ～ 414・416・419 ～ 421・424・426・427・433 ～ 435・440・441）。

石皿類（第 123 ～ 126 図 443 ～ 462）

20 点図化した。大小，不定形なものや台石の類いも含めて一括した。磨り窪みの顕著なもの 443 が１点ある他，444 ～ 462 はいずれも平石を用いた扁平石皿である。

443 は略長方形を呈し，表裏に比較的深く磨り窪んだ作業面を有する。図上，上方が掻き出し口とみられ，なだらかな磨り面が端部に及ぶ。石材は安山岩を用いる。

444 ～ 450 は不整形にして比較的大きく，欠損品であっても使用可能なものといえ，いずれも表裏両面を作業面としている。445 は敲打痕の凹面が広くみられ，作業面再生の可能性がある。449 は略三角形を呈して台石といえ，表面の磨り面中央に著しい敲打痕がみられる。また，三方の端部に敲打による粗い剥離が生じている。

451 ～ 462 は 460 を除いて欠損品である。その内 460 ～ 462 は小型品に入り，461 と 462 は同一個体片である。

なお，これらの約半数の９点には被熱赤化がみられている（445・447・450 ～ 452・455・456・461・462）。

石材は，砂岩（11 点 58%），花崗岩（６点 31%），安山岩（２点 11%）の利用がみられる。

砥石（第 126 図 463）

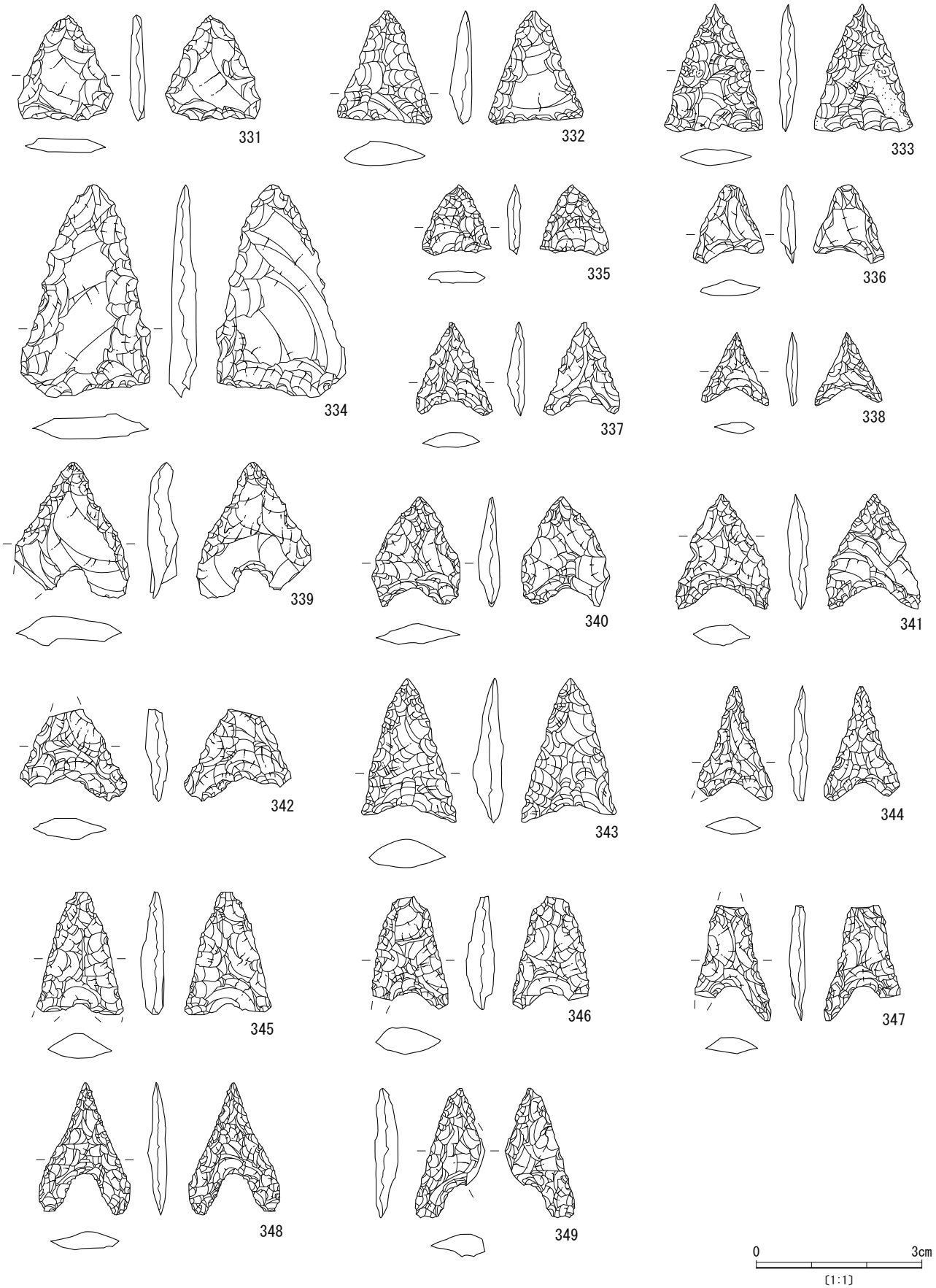
１点図化した。463 は上部を欠損する。作業面を違えた平滑な砥面をもち，長軸方向に複数の線状痕が生じたものである。石材は花崗閃緑岩である。

軽石製品（第 126 図 464）

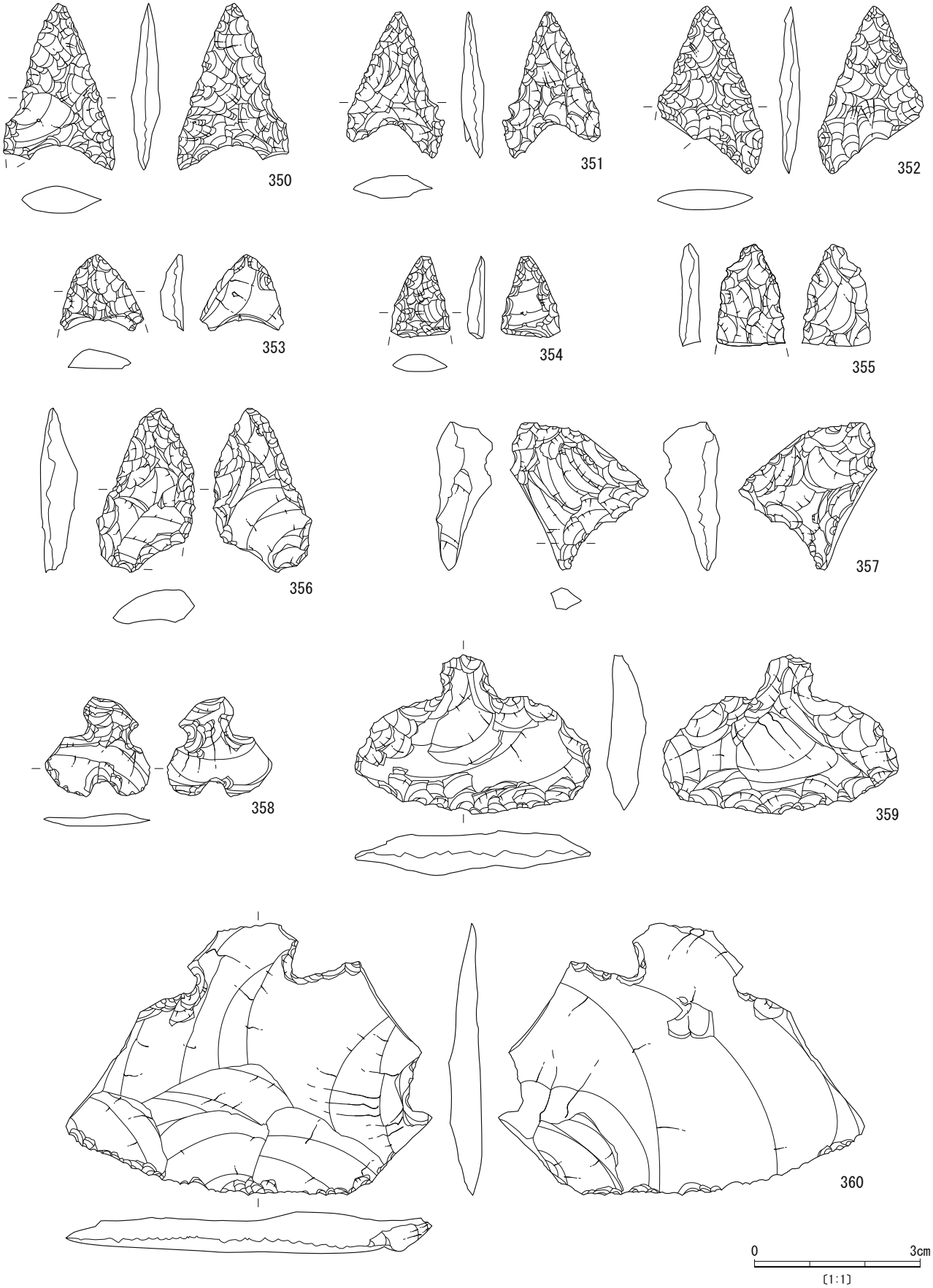
１点図化した。464 は不整な形態を呈し，整形痕は判然としない。ほぼ中心部に穿孔をもち，石材面から製品とみたが，孔が内部で深く横に逸れた形状にあることから，検討を要する。

棒状礫（第 126 図 465）

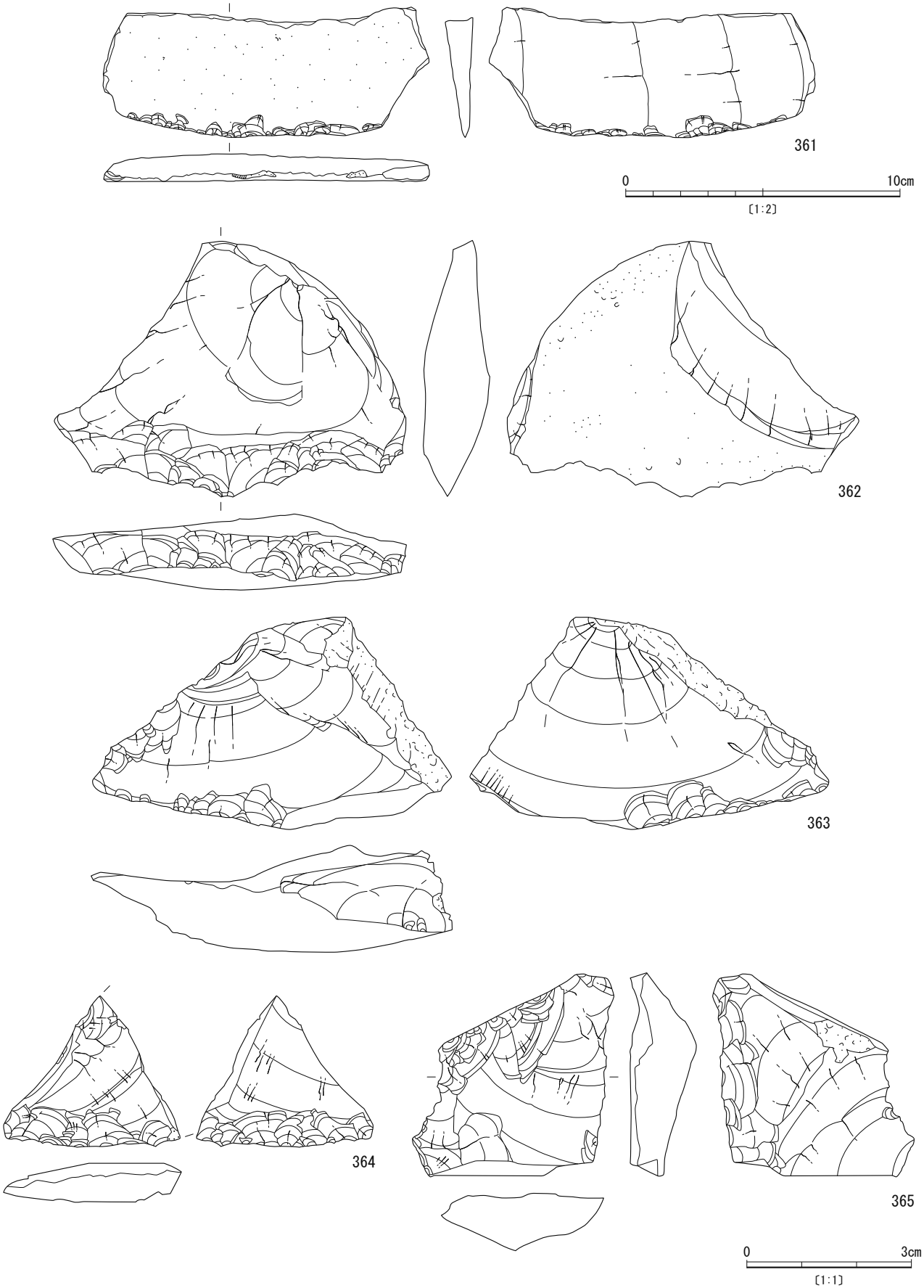
１点図化した。465 は横断面が菱形を呈する，稜線の通った棒状の砂岩礫である。これといった使用痕跡はないものの，形状から敲石の欠損品である可能性を持つ。被熱赤化している。



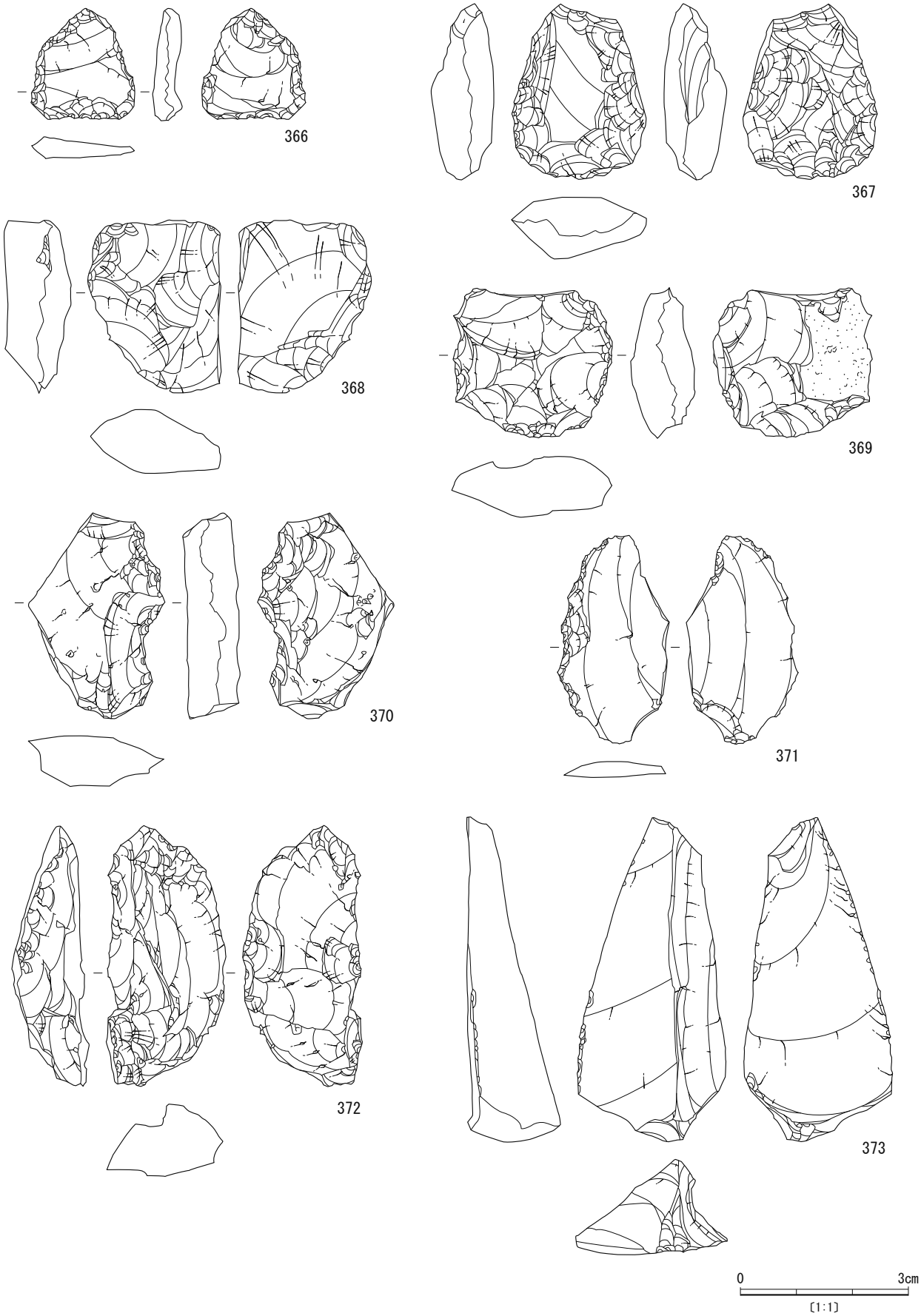
第 110 図　縄文時代早期　東部出土石器（1）



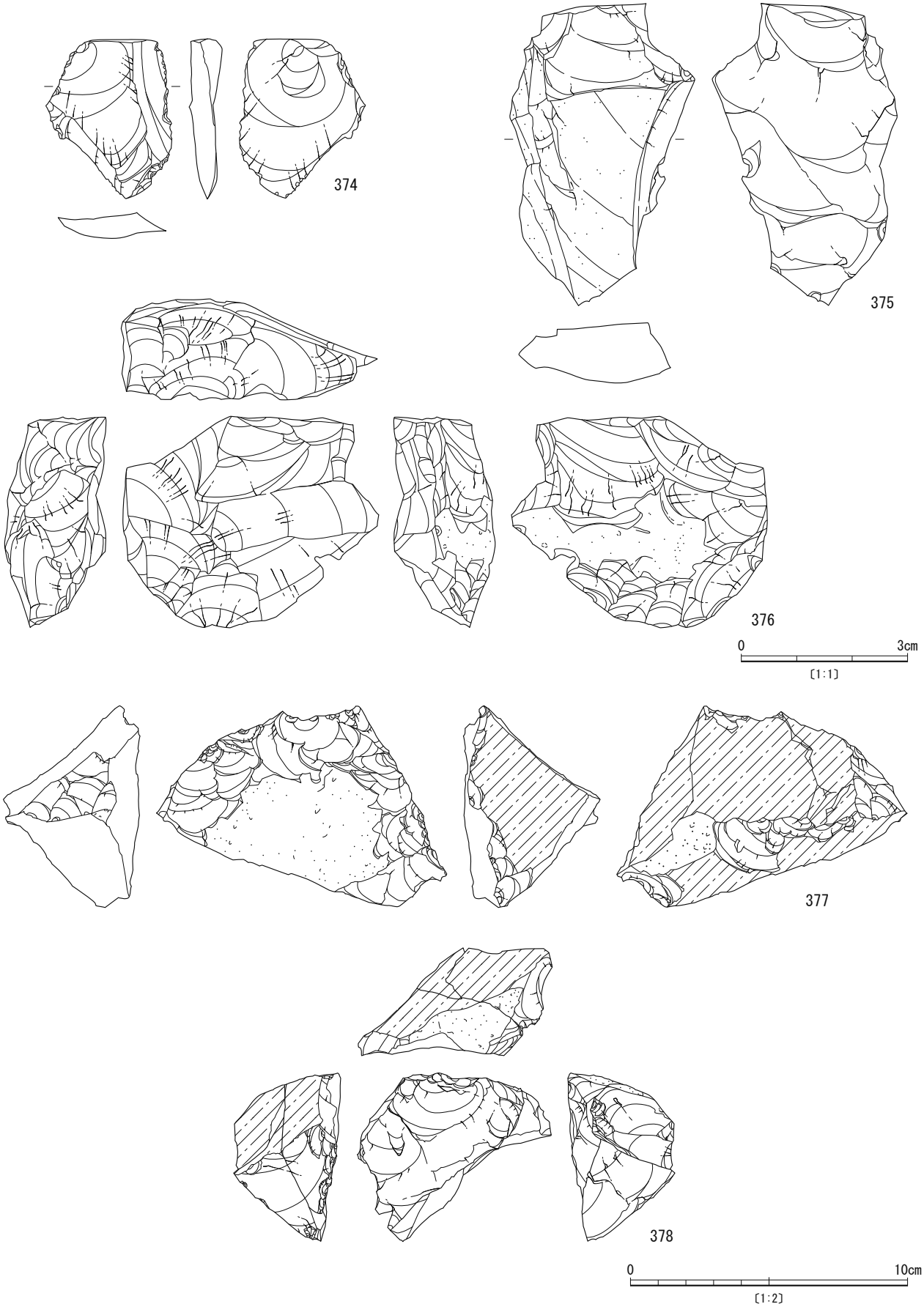
第 111 図　縄文時代早期　東部出土石器（２）



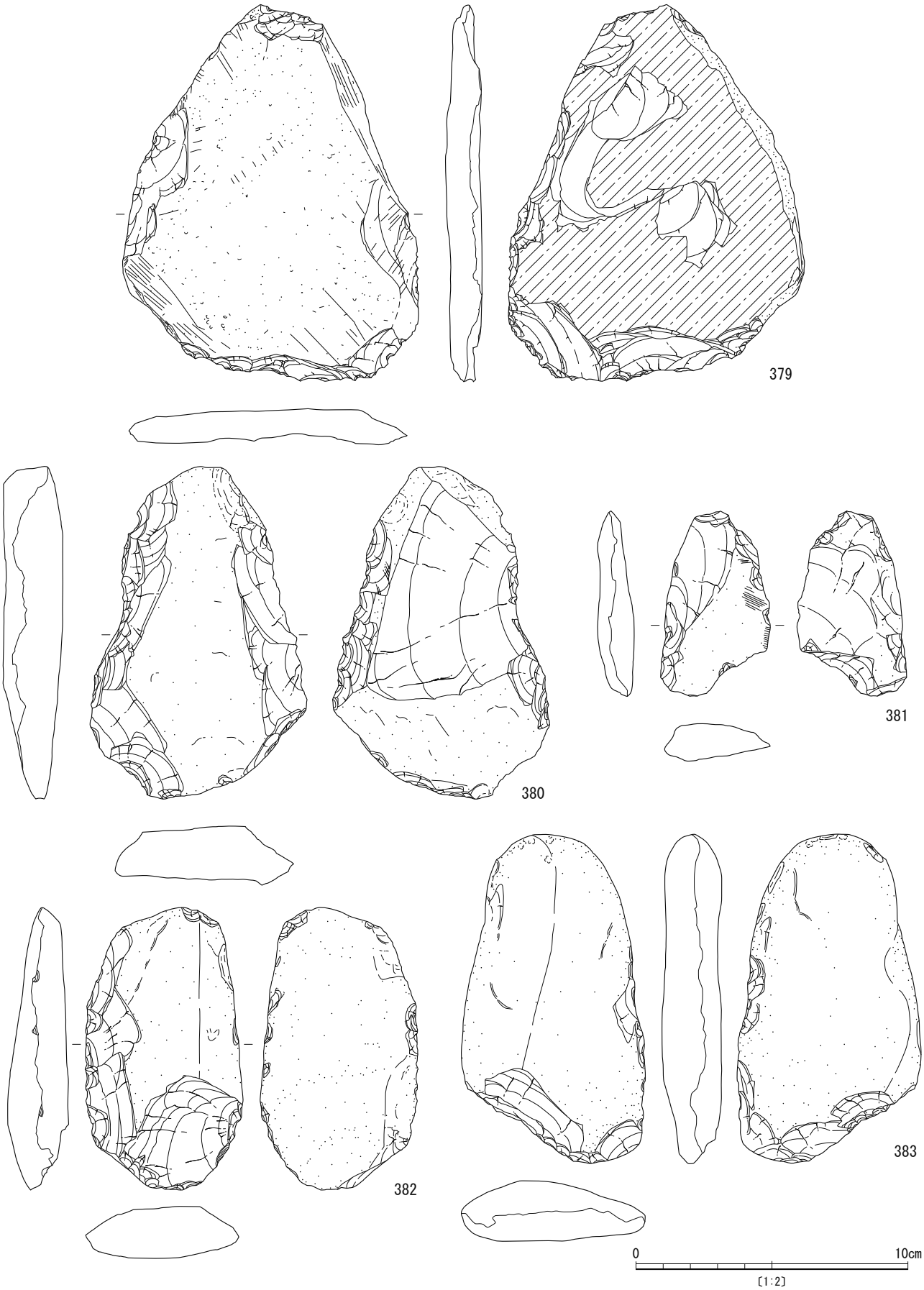
第 112 図　縄文時代早期　東部出土石器（３）



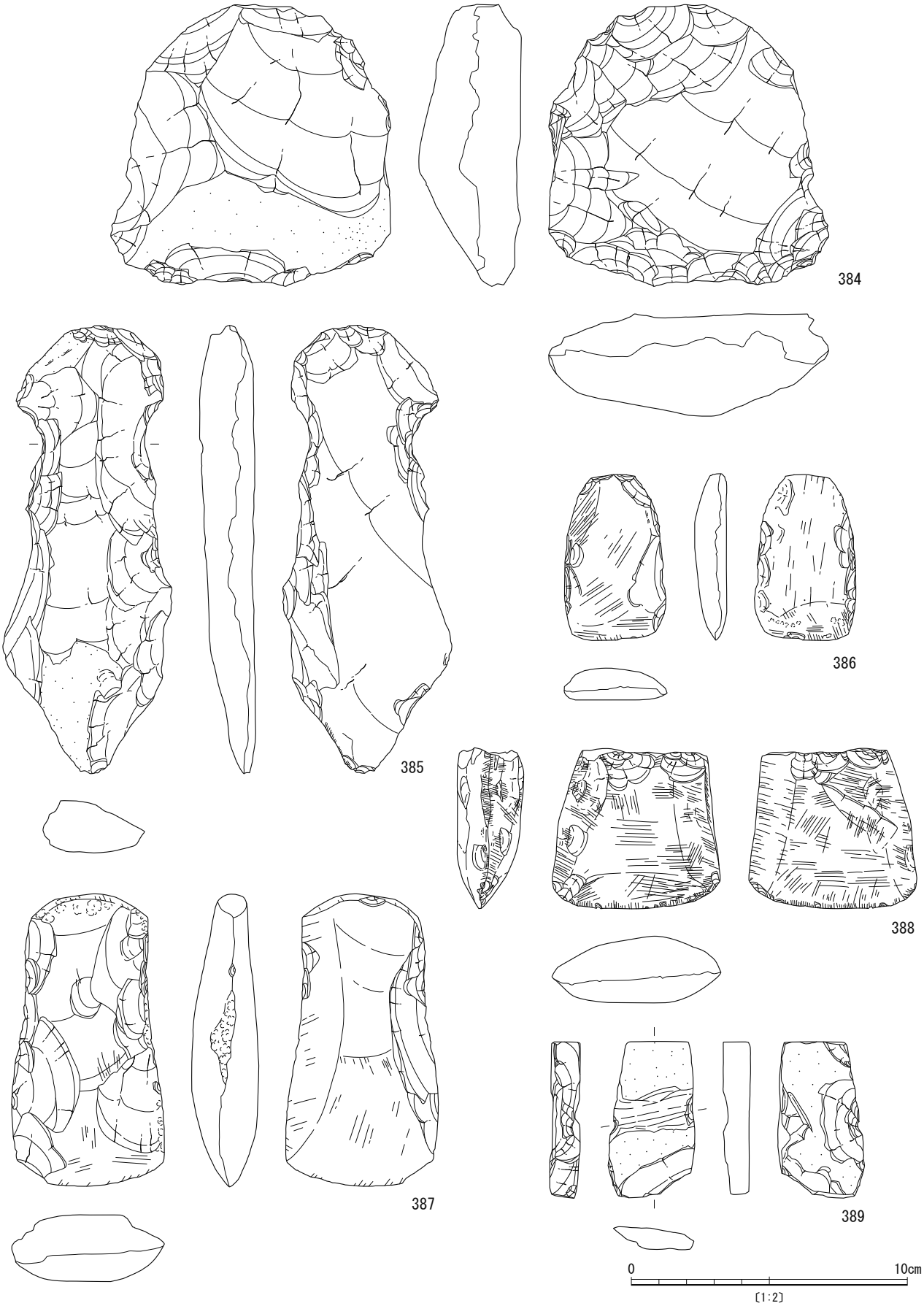
第 113 図　縄文時代早期　東部出土石器（4）



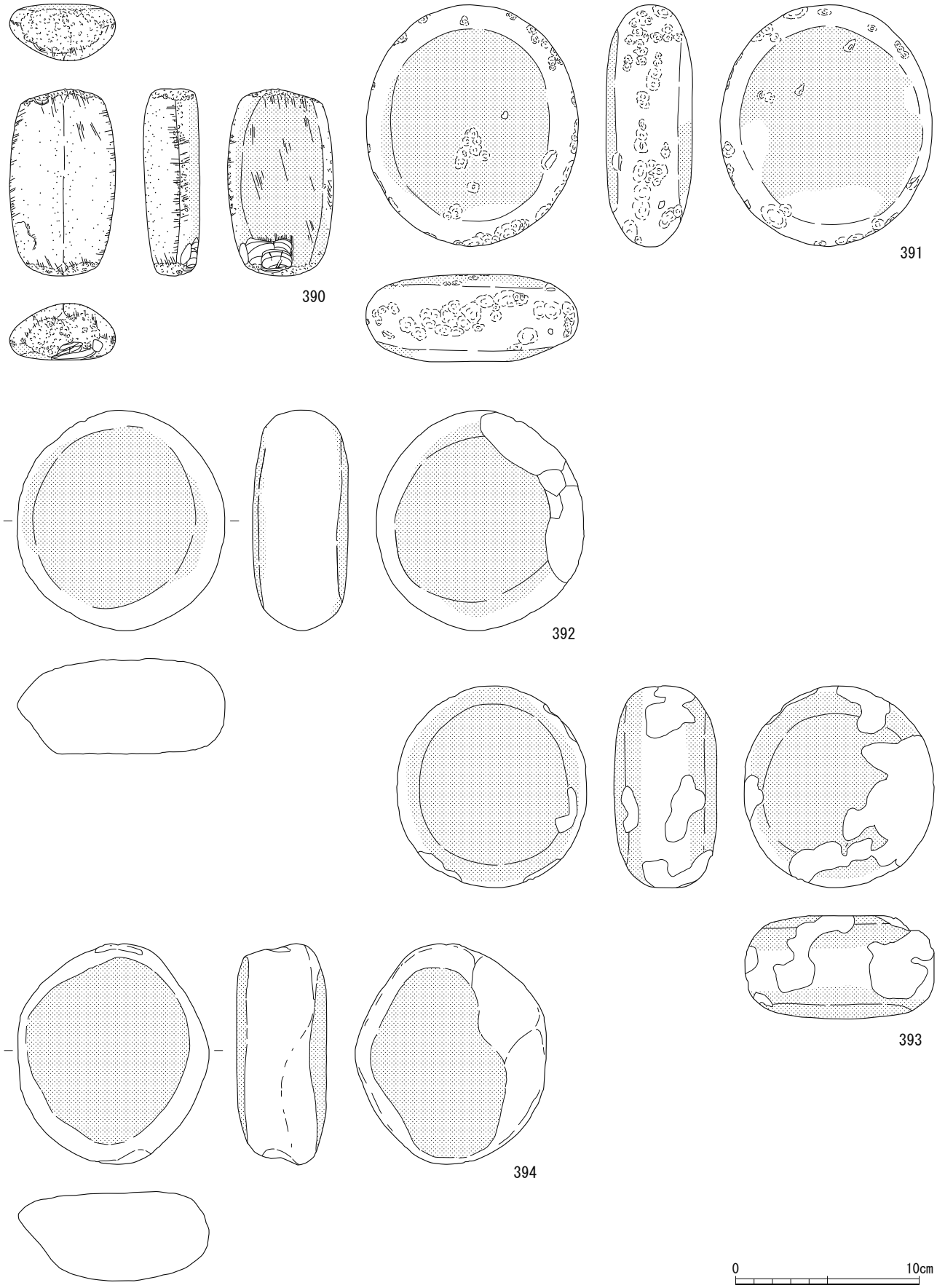
第 114 図　縄文時代早期　東部出土石器（５）



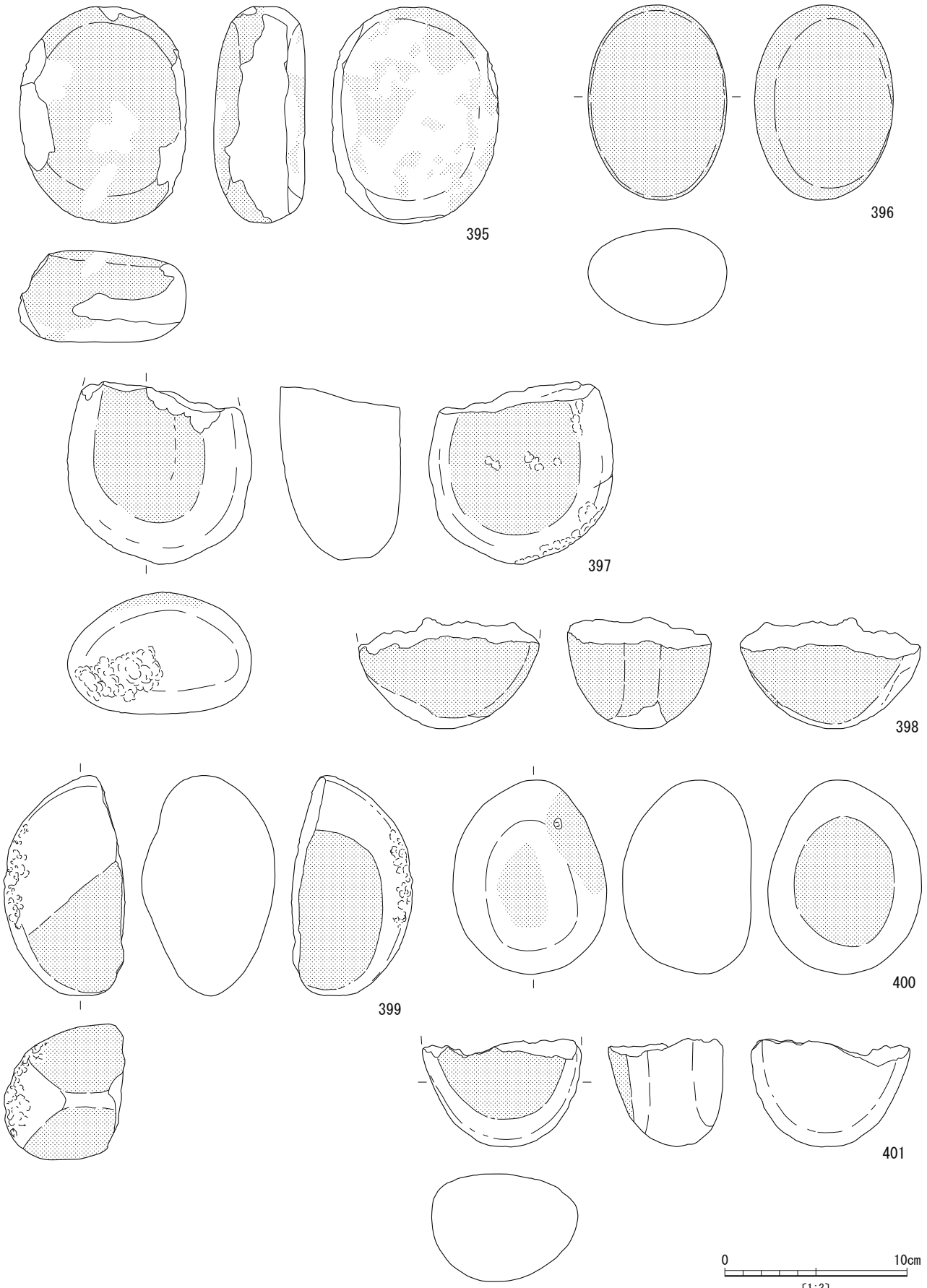
第 115 図　縄文時代早期　東部出土石器（6）



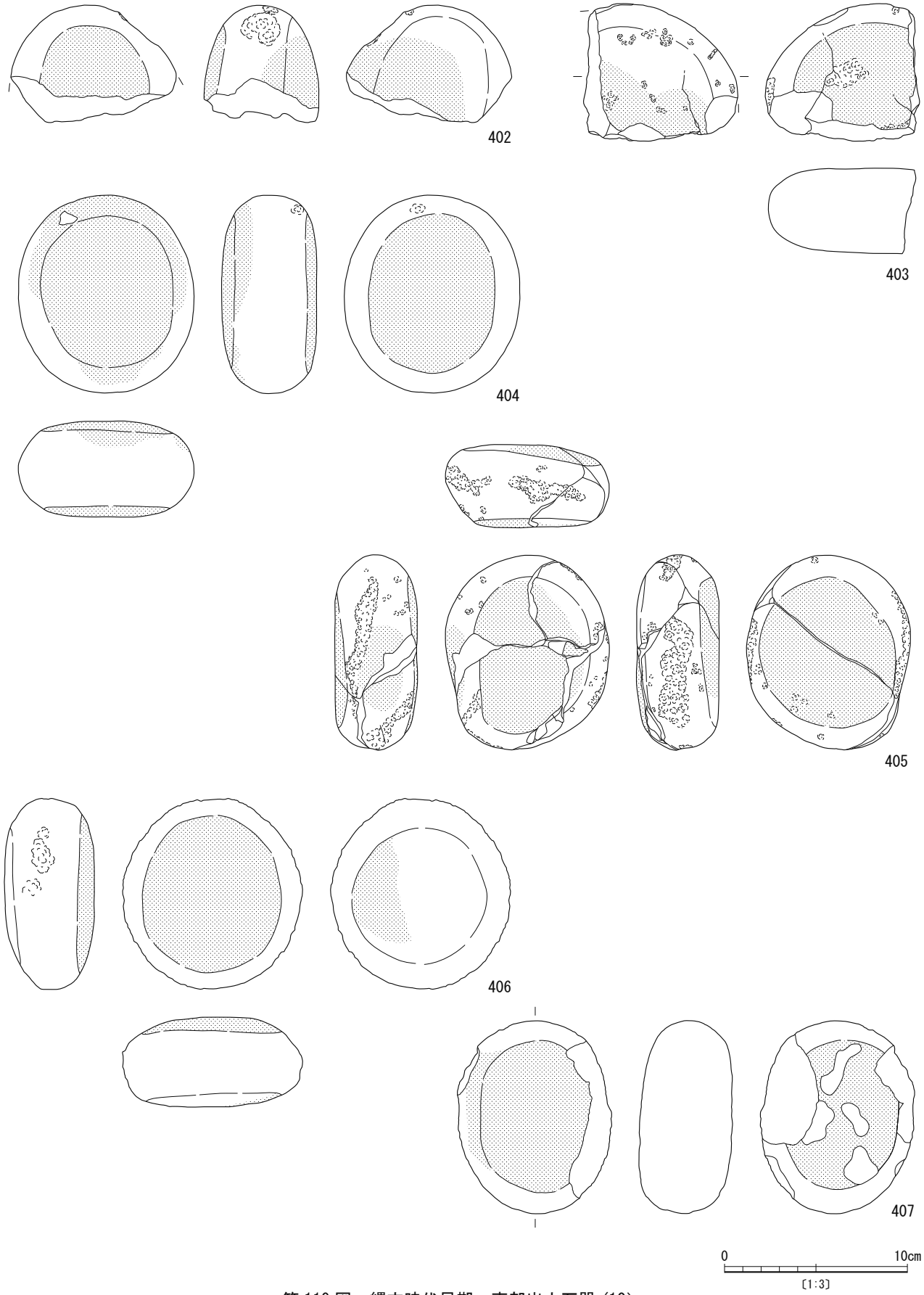
第 116 図　縄文時代早期　東部出土石器（7）



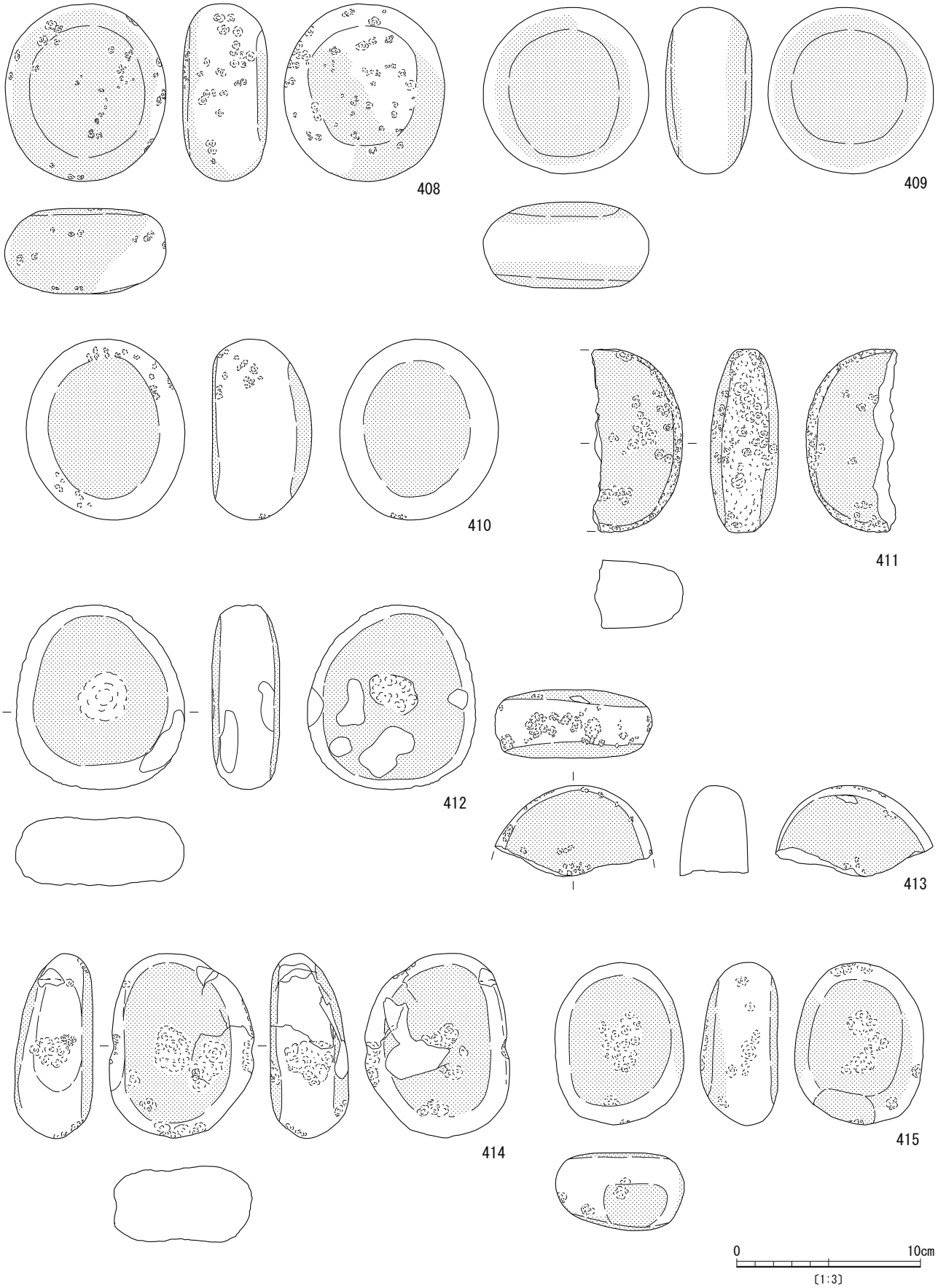
第 117 図　縄文時代早期　東部出土石器（８）



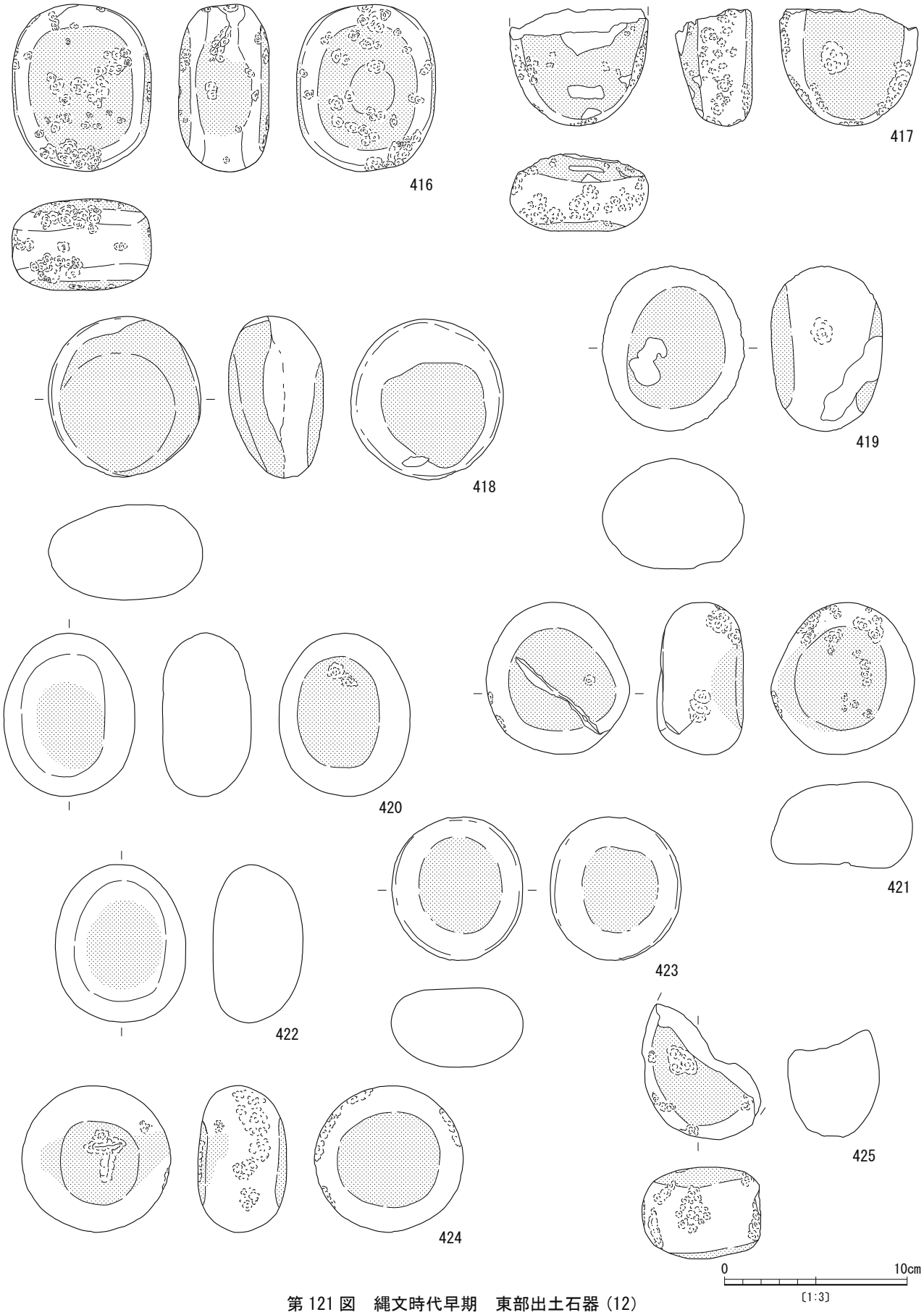
第 118 図　縄文時代早期　東部出土石器（９）



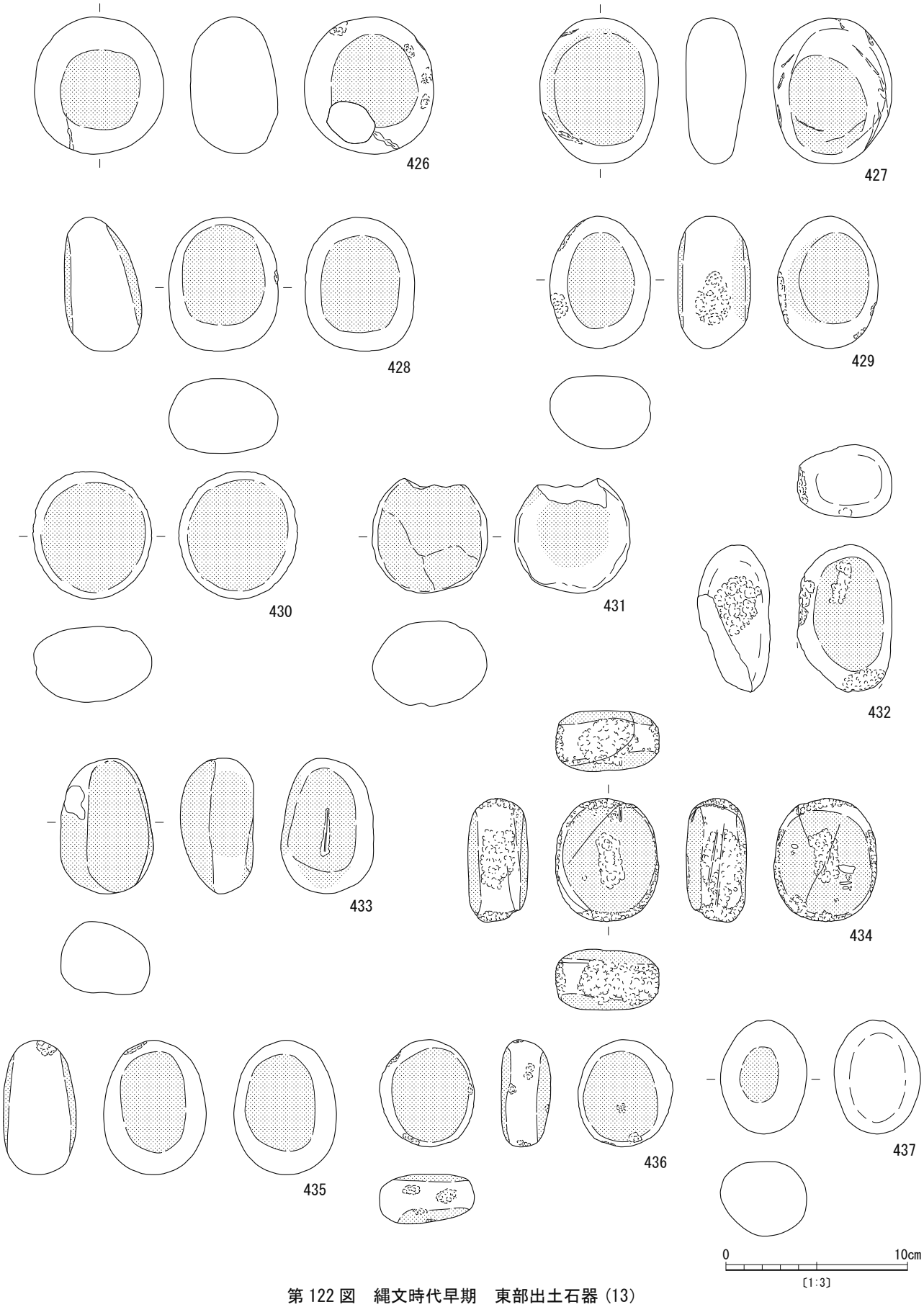
第 119 図　縄文時代早期　東部出土石器 (10)



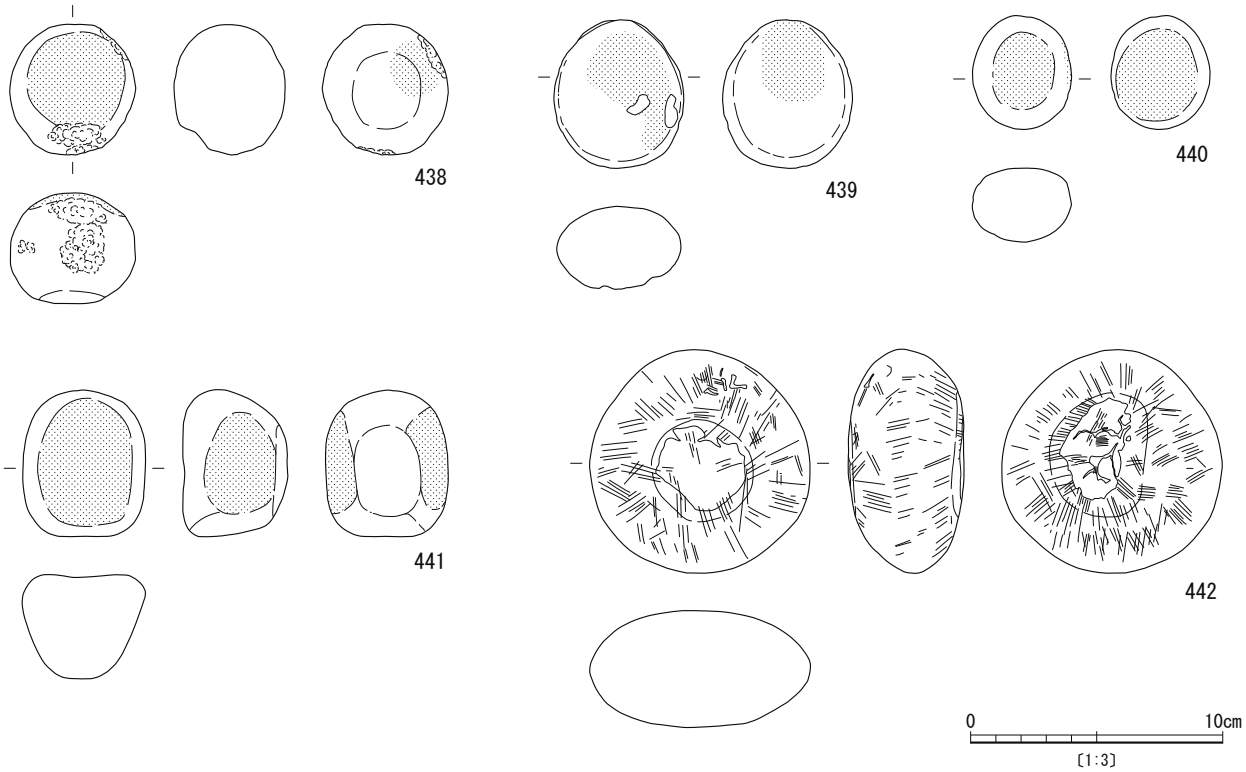
第 120 図　縄文時代早期　東部出土石器 (11)

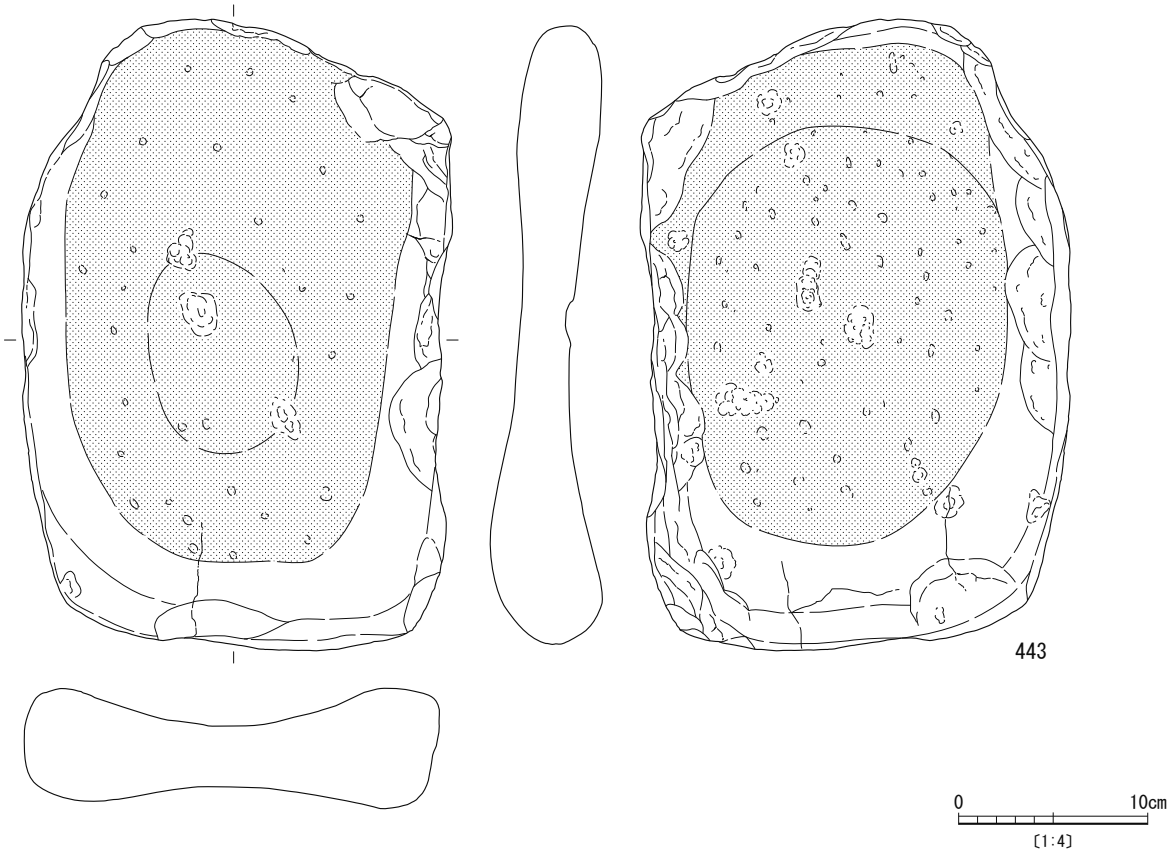


第 121 図　縄文時代早期　東部出土石器 (12)

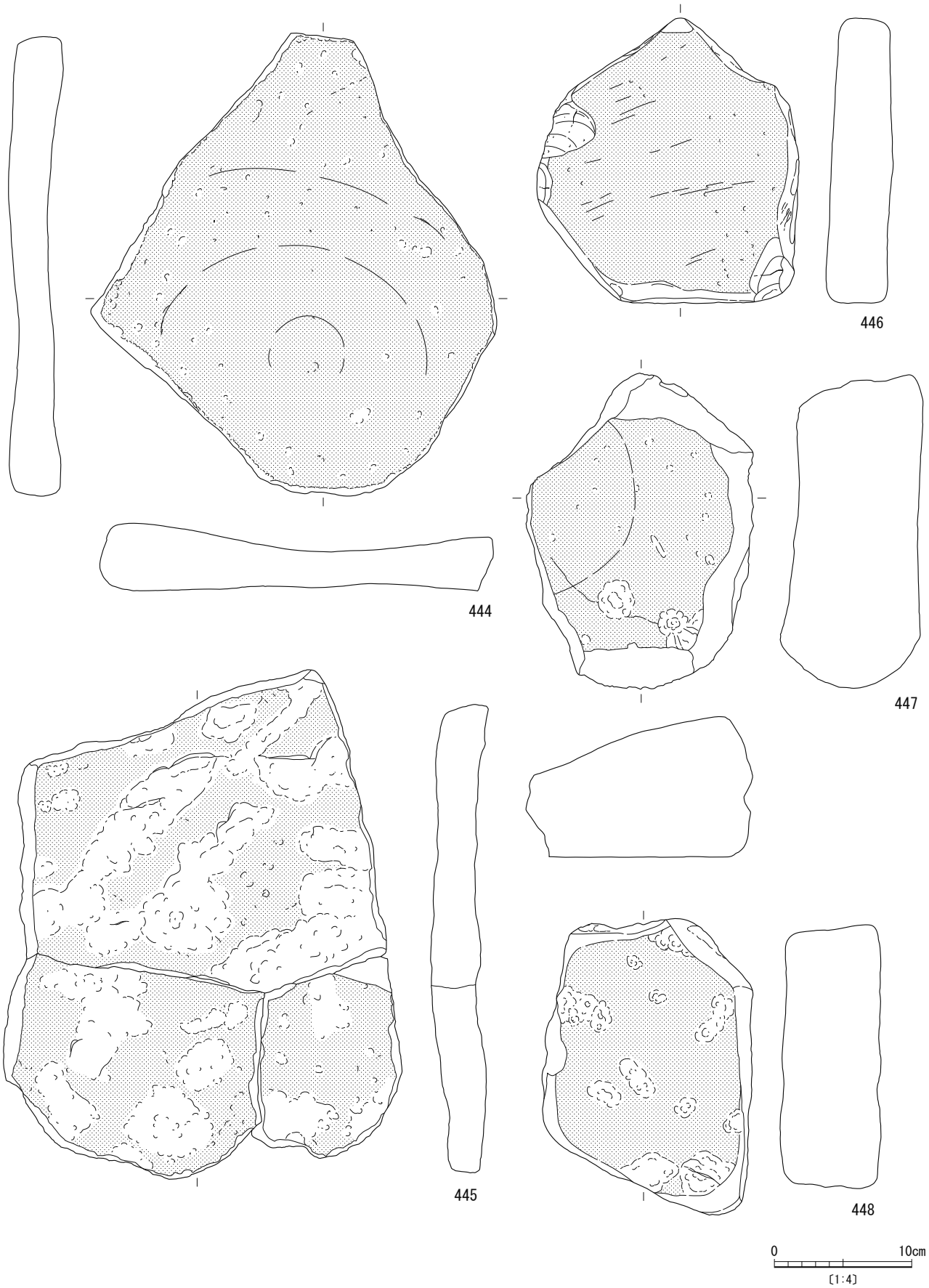


第 122 図　縄文時代早期　東部出土石器 (13)

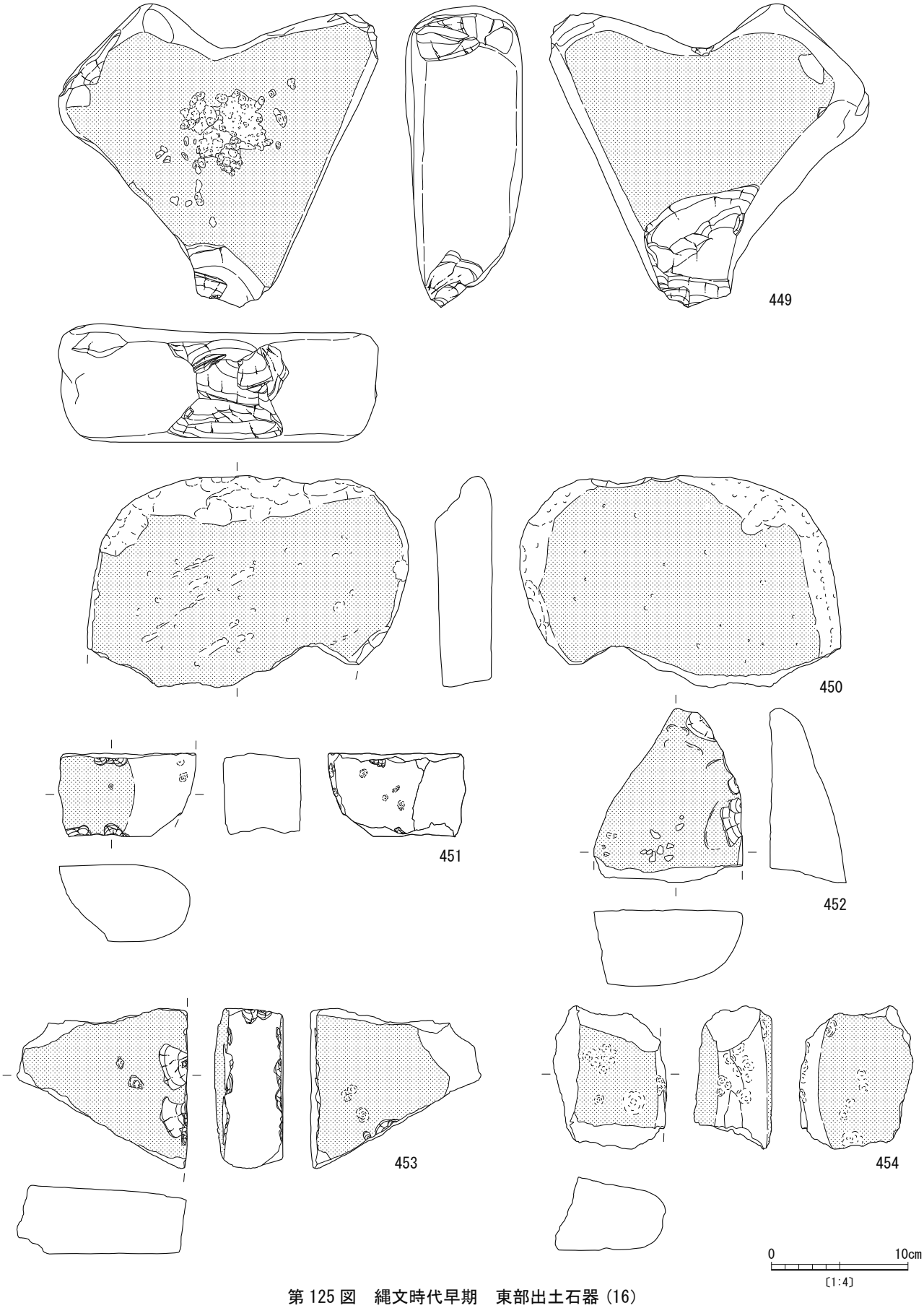




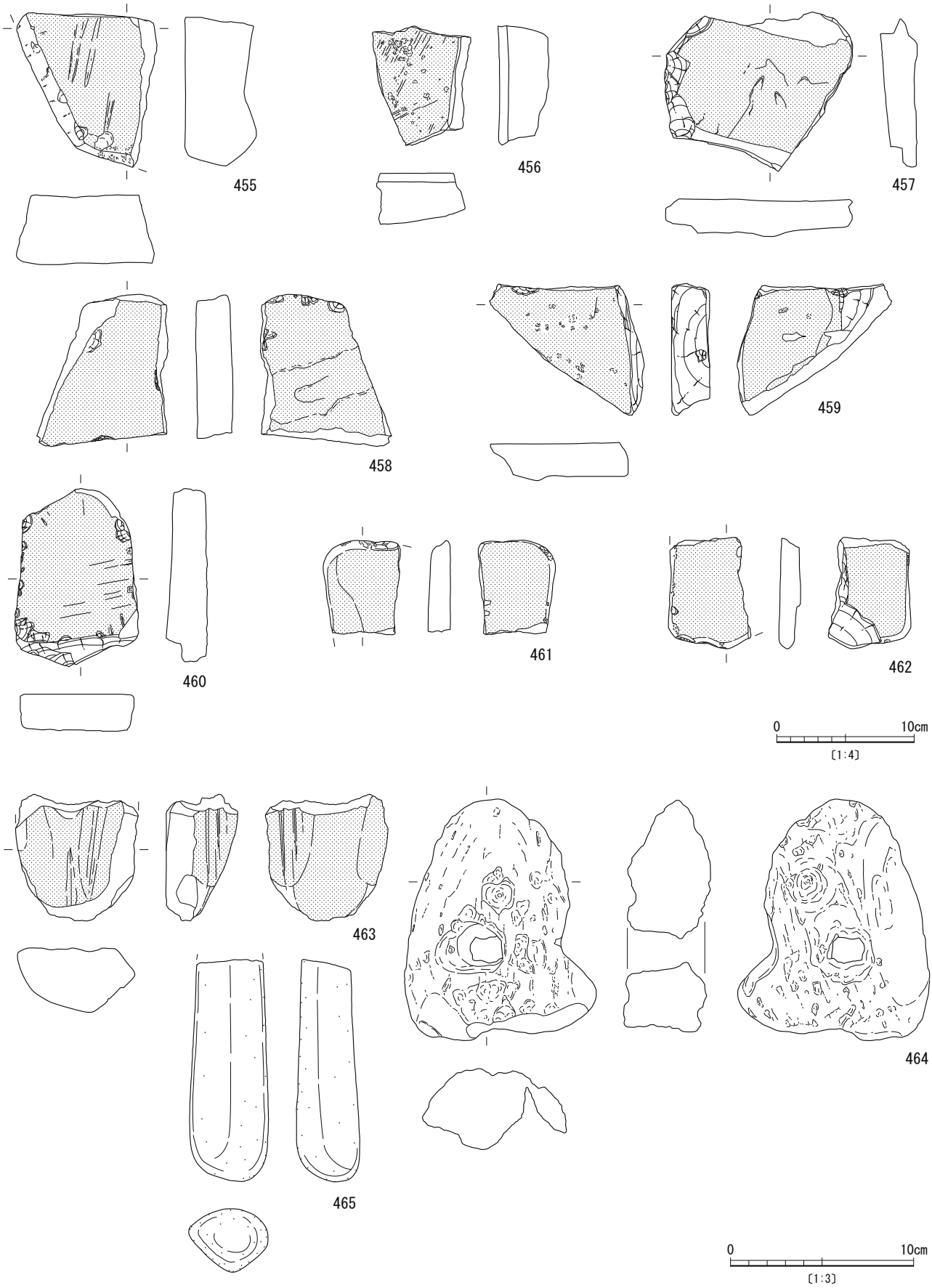
第 123 図　縄文時代早期　東部出土石器 (14)



第 124 図　縄文時代早期　東部出土石器 (15)



第 125 図　縄文時代早期　東部出土石器 (16)



第 126 図　縄文時代早期　東部出土石器 (17)

（３）調査区中央部（第 127 図）

Ｄ～Ｌ－ 30 ～ 40 区を一括する。出土石器類は合計 89 点である。器種別の内訳は，石鏃 10 点，尖頭状石器１点，石錐２点，石匙２点，削器・掻器類１点，二次加工剥片１点，剥片･砕片 45 点，石核３点，打製石斧３点，磨製石斧４点，敲石２点，磨石類 13 点，石皿類２点である。

分布状況は，東部に比べて散漫となり，Ｉ－ 33 区を中心とする微高地の東側の斜面に多い。このうち剥片石器類は点在しており，磨製石鏃１点（475）はＧ－ 38 区から出土した。磨石類と石皿類は，Ｋ－ 33 区とＨ－ 37 区周辺に纏まっている。剥片類では微高地東西のやや急傾斜の地点に多く，石材は約 2/3 を占めるチャートを主体とする。また，黒曜石剥片が１点あり，Ｊ－ 34・Ｋ－ 36 区から黒曜石製の石核２点（481・482）が出土している。

石鏃（第 128 図 466 ～ 475）

10 点図化した。打製石鏃の他，磨製石鏃が１点含まれる。平基の１類と凹基の２類に大別される。

466・467 は平基である。466 は部分的な調整により素材剥片の形状を留めている。

468 ～ 475 は凹基である。改変度の高いものが多く，468・469 は長幅比１：1.5 のやや幅広，470 ～ 474 はやや縦長に形作られている。

475 は頁岩製の磨製石鏃である。1.5：１の長幅比にあり，抉りの浅い基部をもつ。中軸に稜線を残した研磨がみられ，両側縁に鋸歯状剥離の刃縁を残置している。

欠損は，467 は先端部を，471･472･474 は脚部を欠き，468 は先端部と脚部を若干欠く。特に 474 には，先端から側縁片方に生じた樋状剥離の使用痕が認められる。

石材は多様である。黒曜石製が４点（466・468・471・474），チャート製が３点（469・470・472），黒色安山岩製が２点（467･473），頁岩製が１点（475）である。

尖頭状石器（第 128 図 476）

１点図化した。476 は中心部が肥厚した二等辺三角形を呈する。二次加工は素材面を残さず，粗い調整剥離が全面に及び，細部調整は一切みられない。赤色頁岩製。

石錐（128 図 477）

１点図化した。477 は摘み部から突き出した短い錐先部をもつ。二次加工は素材形状を活かして，錐先側縁に折れ面を取り込み，部分的な調整剥離で摘み部の整形を行っている。錐先部の先端を欠損する。チャート製。

石匙（128 図 478・479）

２点図化した。478 はチャート製の非常に小さな石匙である。砕片を素材としてその割れ口を背縁としており，二次加工は背縁からの調整，刃部への調整を行い，厚みのある一端をやや抉って摘み部としている。

479 は摘み部に対して斜刃となる形態を呈する。二次加工は表裏からやや粗い調整剥離を行い，細部調整を加えることなく，鋸歯状に比較的整った刃縁が形作られている。背縁に表皮を留めている。黒色安山岩製。

削器・掻器類（129 図 480）

１点図化した。480 は桑ノ木津留系とみられる黒曜石を用いた小型品であり，台形に整った平面形を呈する。二次加工は素材の背腹両面から全縁に施され，特に腹面からの調整剥離を急斜度に行う。鈍い刃縁をもつ。

石核（129 図 481・482）

２点図化した。481・482 は桑ノ木津留系とみられる黒曜石製の石核で，打面転移を繰り返して極限まで小片を剥離した不整形を呈する残核である。上位打面に平らな表皮を留める。

打製石斧（129 図 483）

１点図化した。483 は胴部から破損した欠損品である。加工途上の未製品である可能性があり，やや不整な形状を呈して，刃部か，基部側であるのか不明である。ホルンフェルス製。

磨製石斧（129 図 484 ～ 486）

３点図化した。484 は比較的小型のもので，刃部と基部が丸みを帯びた短冊形を呈する。加工は刃部を主として表裏に研磨を施し，研ぎ残した周縁部に粗い調整剥離痕と敲打調整痕を留めている。ホルンフェルス製。

485 も 484 と似通った形態のものであるが，やや先細りの刃部をもち，主に胴部から基部を欠損している。研磨は片面に施されており，先行する調整剥離痕と敲打調整痕を留めている。ホルンフェルス製。

486 は薄身に形作られた器体の基部側の破片である。板状を呈して，表裏の研磨はやや弱く，側縁及び基部末端に面的な研磨を施している。頁岩製。

敲石（129 図 487・488）

２点図化した。487 は周縁調整によって形作られており，下縁に細長く敲打作業面を有する。また，敲打面に接する右側縁の一部に研磨面を留めており，おそらくは破損した刃部磨製石斧を転用したものとみられる。

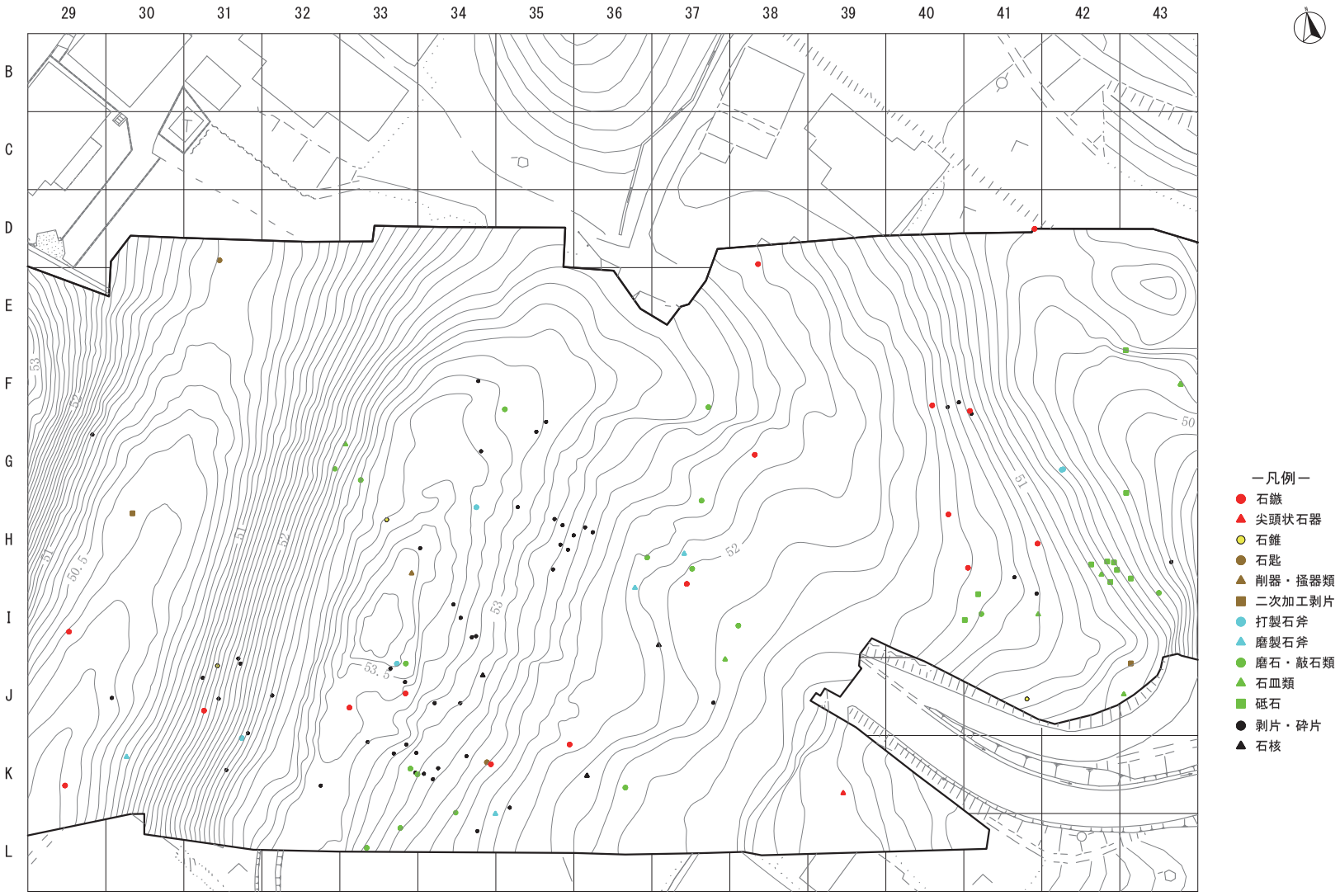
488 は樽形を呈するとみられる欠損品である。丸みを帯びた器体の末端から側縁にかけて，滑らかな敲打面が形成されており，表面にも弱い研磨がうかがわれる。

石材は 487･488 のどちらもホルンフェルス製である。

磨石類（第 130・131 図 489 ～ 498）

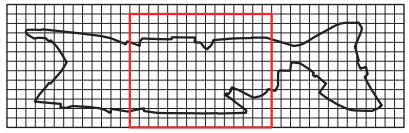
10 点図化した。大型の 497 を除き，径７～ 10 ㎝の中～小型品である。１類は 492・493・496 の３点で，494 は磨りが全周に及ぶ。その他は２類で，496・498 は石鹸形を呈しており，498 の右側面は著しい敲打により作業面が後退している。これらの内，半数の５点に被熱赤化がみられている（489・493 ～ 495・497）。

石材は，安山岩（６点）が多く，花崗岩・花崗閃緑岩

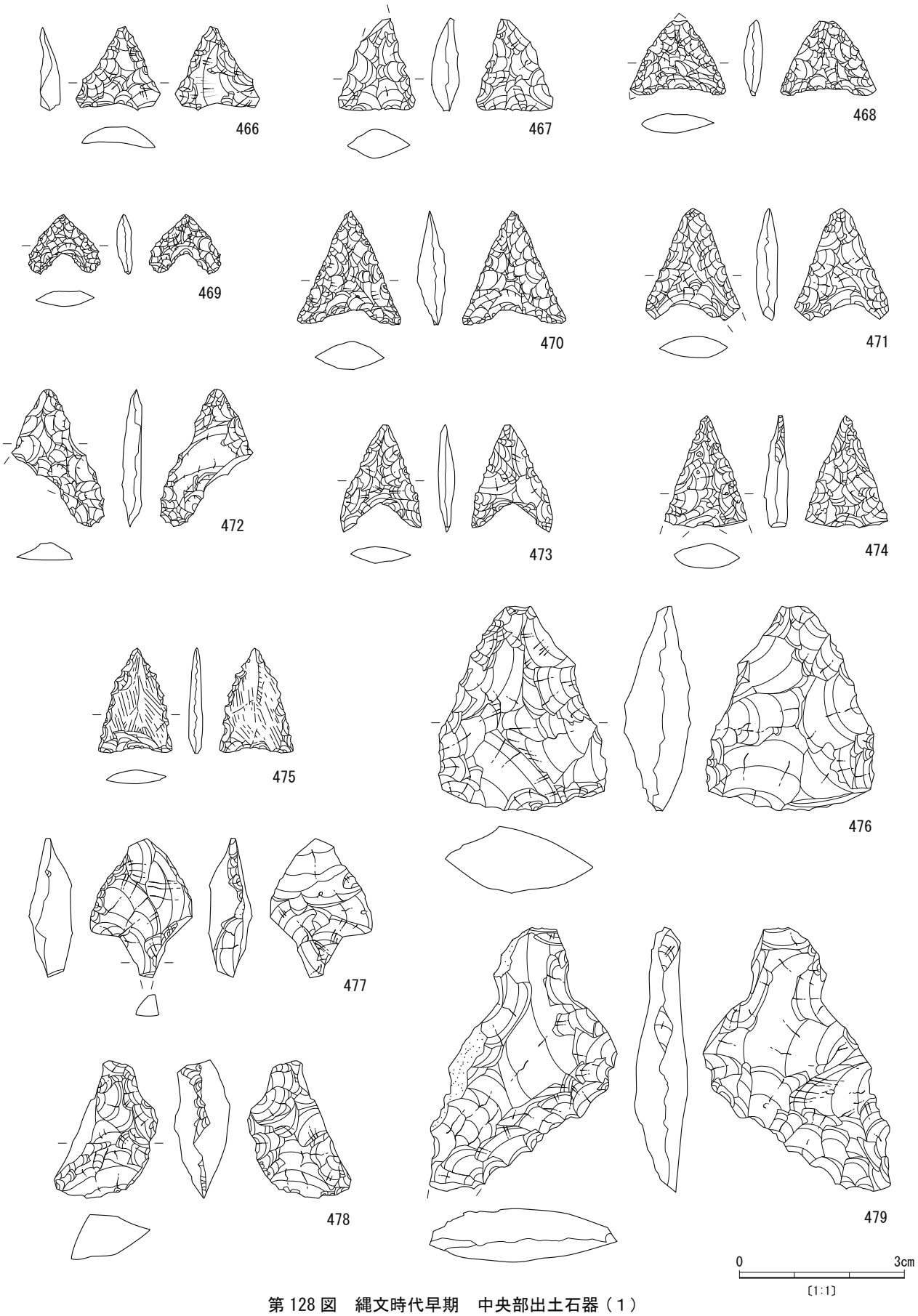


等高線Ⅵ層

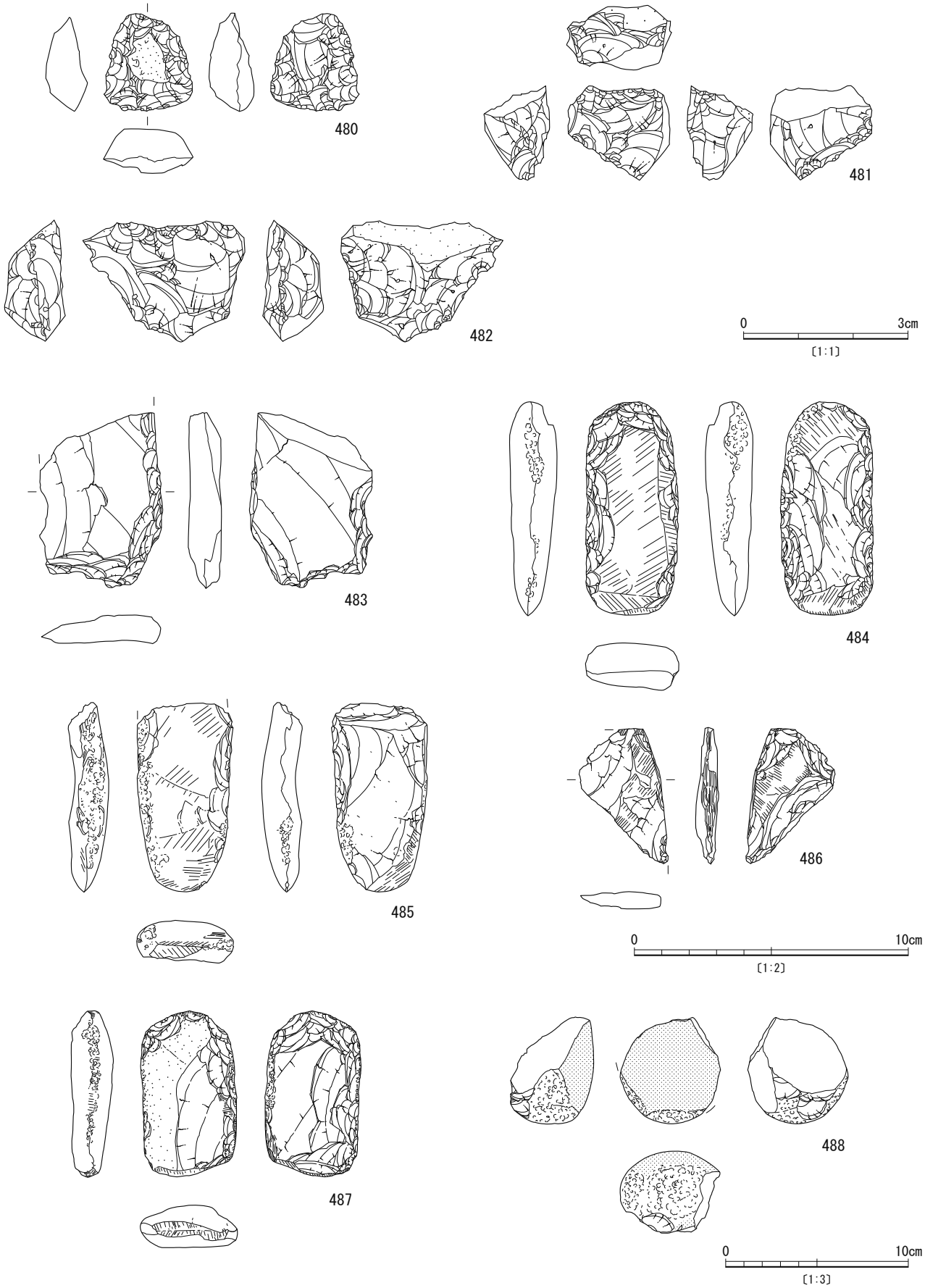
0 10 20 40m
〔1:800〕



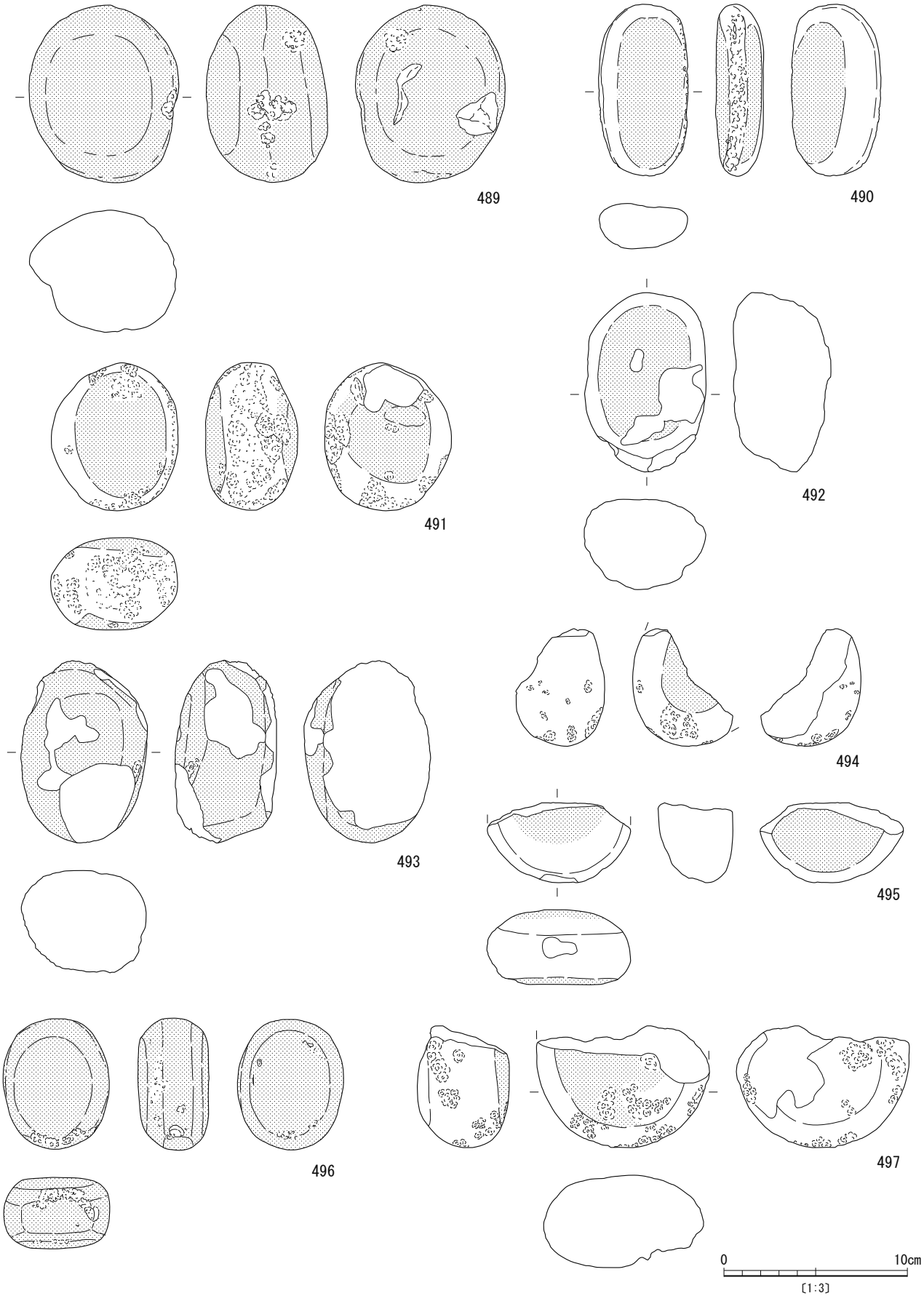
第 127 図　縄文時代早期　中央部出土石器分布図



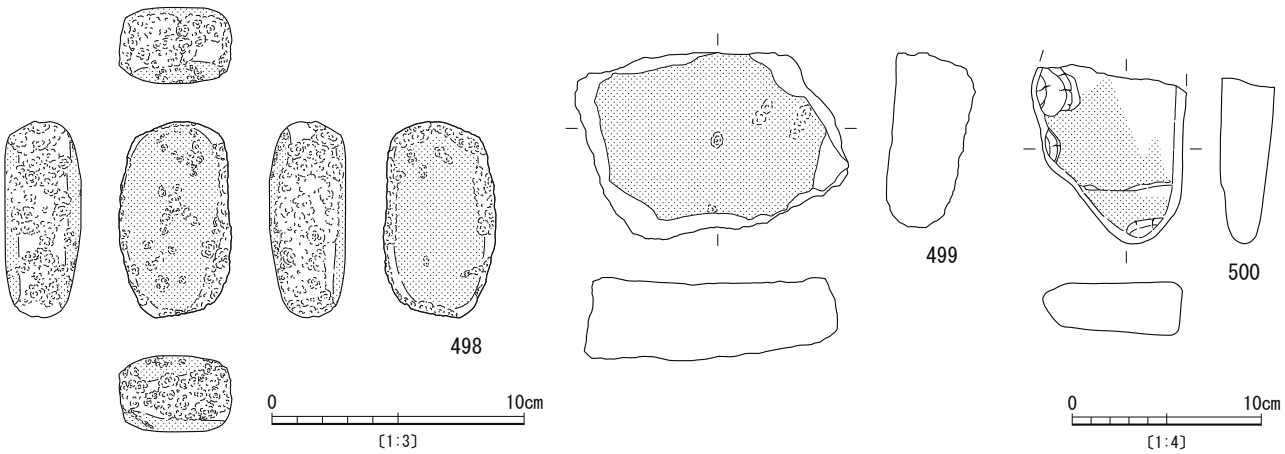
第 128 図　縄文時代早期　中央部出土石器（1）



第 129 図　縄文時代早期　中央部出土石器（２）



第 130 図　縄文時代早期　中央部出土石器（３）



第 131 図　縄文時代早期　中央部出土石器（４）

（２点），砂岩・玄武岩（各１点）であり，東部とほぼ同じ石材利用の傾向を示している。

石皿類（第 131 図 499・500）

２点図化した。499 は花崗岩，500 は砂岩を用いた扁平石皿片の欠損品である。499 は片面を作業面とする。

（４）調査区西部（第 132 図）

Ｃ～Ｌ－ 19 ～ 29 区を一括する。出土石器類は合計 33 点である。器種別の内訳は，石鏃７点，尖頭状石器１点，石錐１点，二次加工剥片２点，剥片・砕片 10 点，石核４点，磨製石斧３点，磨石類３点，石皿類２点である。

分布状況は，出土数も少なく散漫であるが，西側崖線付近の斜面部Ｉ～Ｋ－ 19 ～ 21 区でやや密である。特にＩ・Ｊ－ 21 区には，姫島産と上牛鼻産の黒曜石製石核４点が分布し，石核１点（511）の他，２㎝に満たない残核である。また，石鏃は 25 ～ 27 区の微高地から東側の谷部にかけて偏りなく点在し，Ｉ－ 29 区の１点（507）は磨製石鏃である。この一帯では他の器種が希薄である。

石鏃（第 133 図 501 ～ 507）

７点図化した。打製石鏃の他，磨製石鏃が１点含まれ，類型の基部形状は全て凹基の２類である。

501 ～ 503 はやや縦長の長幅比にあり，曲線側縁と抉り込みの浅い基部が形作られている。504 ～ 506 の３点は長幅比が 1.5：１以上となり，改変度が高く，東部の 350 ～ 352 同様に脚部に「肩」をもち特徴的である。

507 は頁岩製の磨製石鏃であり，長幅比 1.5：１の二等辺三角形に形作られている。二次加工は全面に研磨が施されており，周縁部では角度をつけて面を違えた整形を行っている。

欠損については，501・503・505・506 が脚部を欠く。特に 503 の裏面には先端部からの剥離も認められ，使用による衝撃剥離痕の可能性がある。

石材は多様である。黒色安山岩製が２点（501・505），黒曜石製が２点（503･504），玉髄製が１点（502），チャート製が１点（506），頁岩製が１点（507）である。

尖頭状石器（第 133 図 508）

１点図化した。508 は左右非対称に二等辺三角形を呈する。二次加工は素材剥片の背腹両面から行われ，刃縁の稜線がジグザグとなる粗い調整がみられる。基部末端に平坦な素材面を残置する。黒色安山岩製。

石錐（第 133 図 509）

１点図化した。509 は摘み部から先細る短身の左右対称形を呈する。日東系黒曜石の剥片を素材としており，二次加工は縁辺に折れ面を取り込んで，部分的に浅い調整剥離が施されている。

二次加工剥片（第 133 図 510）

１点図化した。510 は姫島産黒曜石の横長剥片を用いている。その打面側の側縁に幾らかの調整剥離を加えており，弧状の反対側縁に微小剥離痕が生じている。

石核（第 133 図 511）

１点図化した。511 は姫島産黒曜石を用いた石核であり，特に打面を設けることなく臨機的に不定形な小剥片が剥離された残核である。

磨製石斧（第 133 図 512・513）

２点図化した。512・513 は薄身の形状を呈する磨製石斧の刃部側の破片である。刃部は弧を描いて丁寧に研磨されており，使用によって剥離破損したとみられる。

石材は 512 がホルンフェルス，513 が頁岩である。

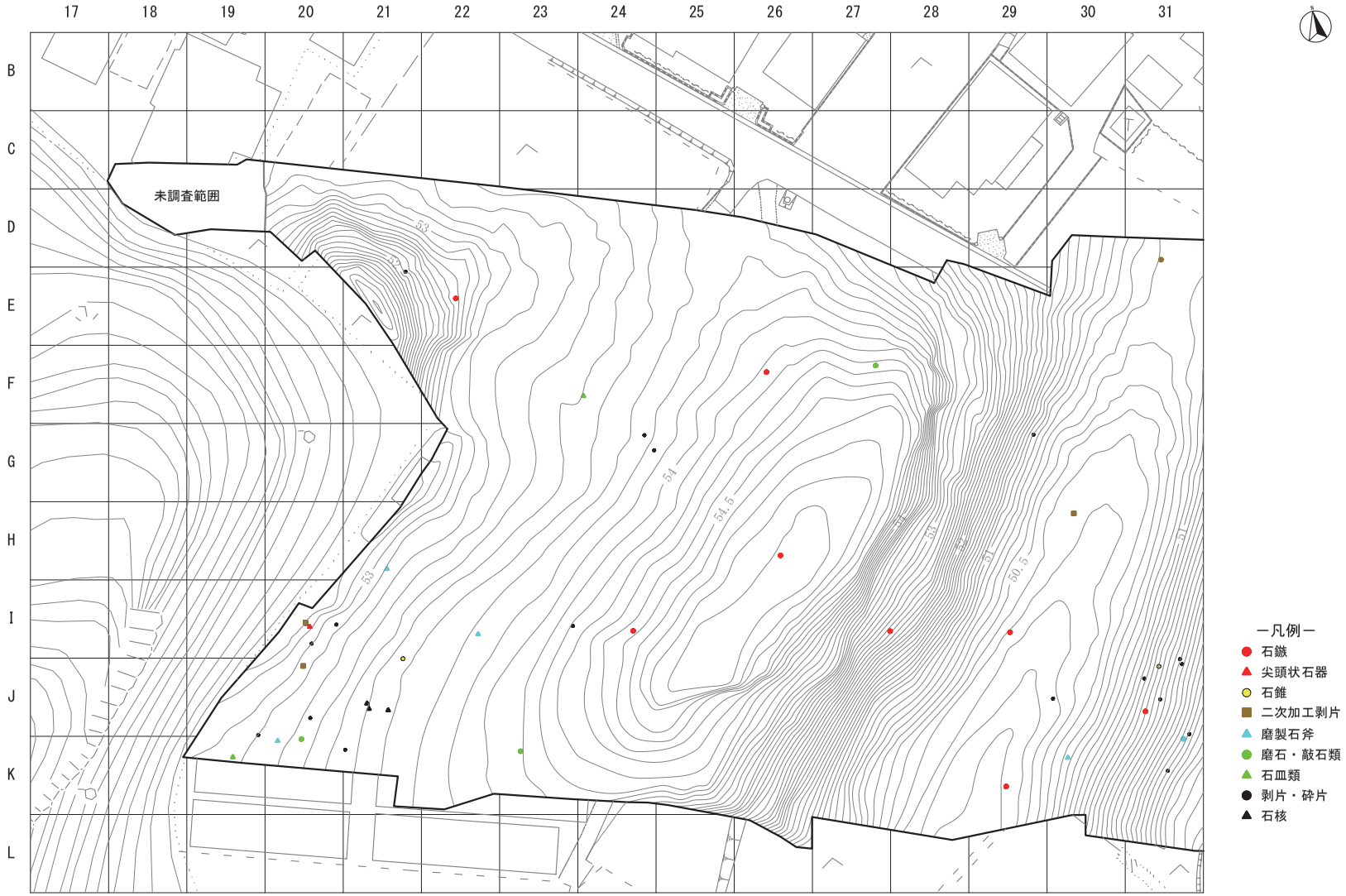
磨石類（第 134 図 514 ～ 516）

３点図化した。514 は２類に含まれる。安山岩製。515・516 は破損する。515 は被熱赤化が著しく，516 は比較的大型で，弱い磨り面を留める。砂岩と安山岩製。

石皿類（第 134 図 517・518）

２点図化した。517 は扁平石皿で，平坦な片面を作業面としている。花崗岩を用いる。

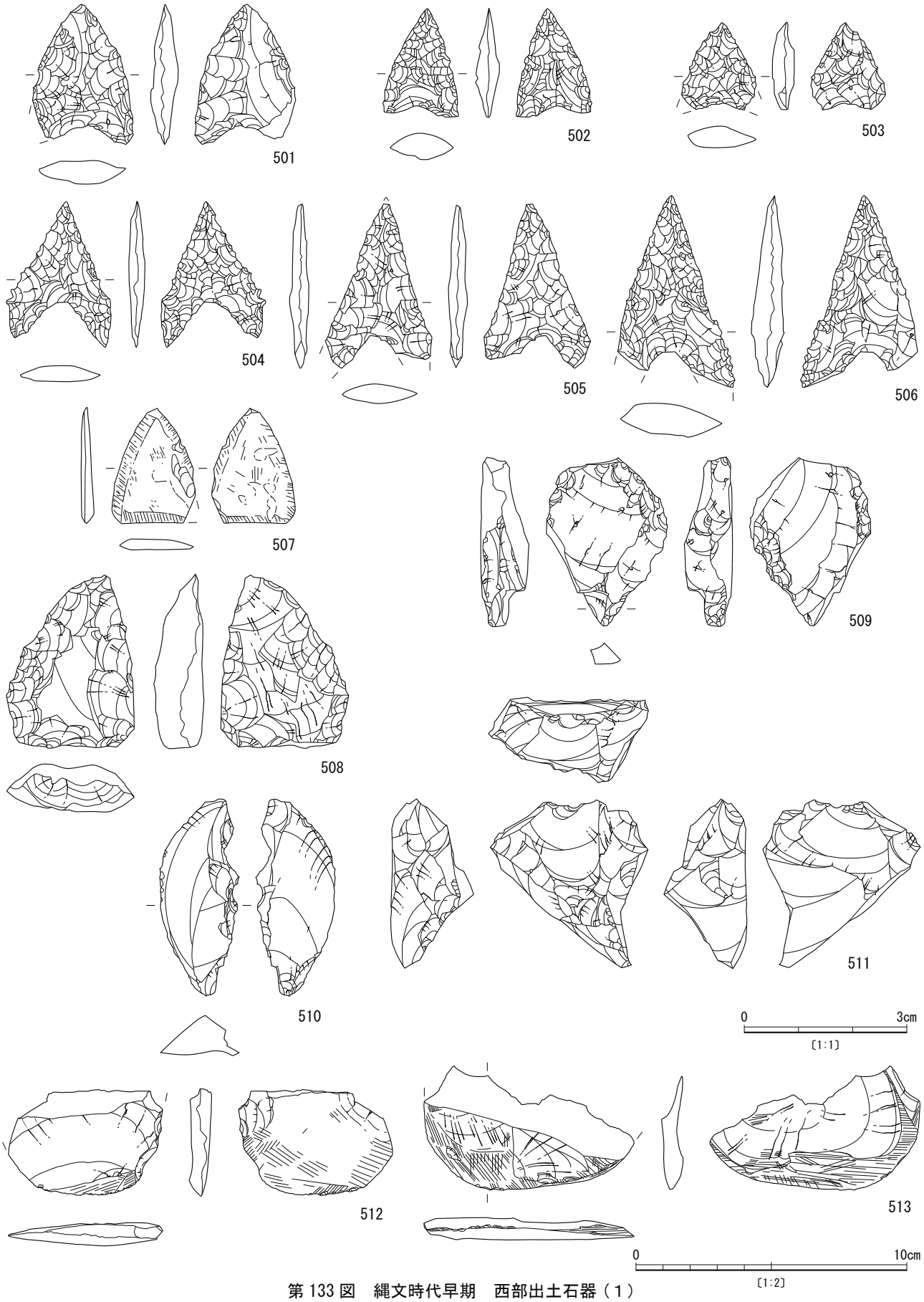
518 は略長方形の砂岩礫を用いており，主に片面を窪めた作業面とするが，平坦な裏面も磨り面としている。



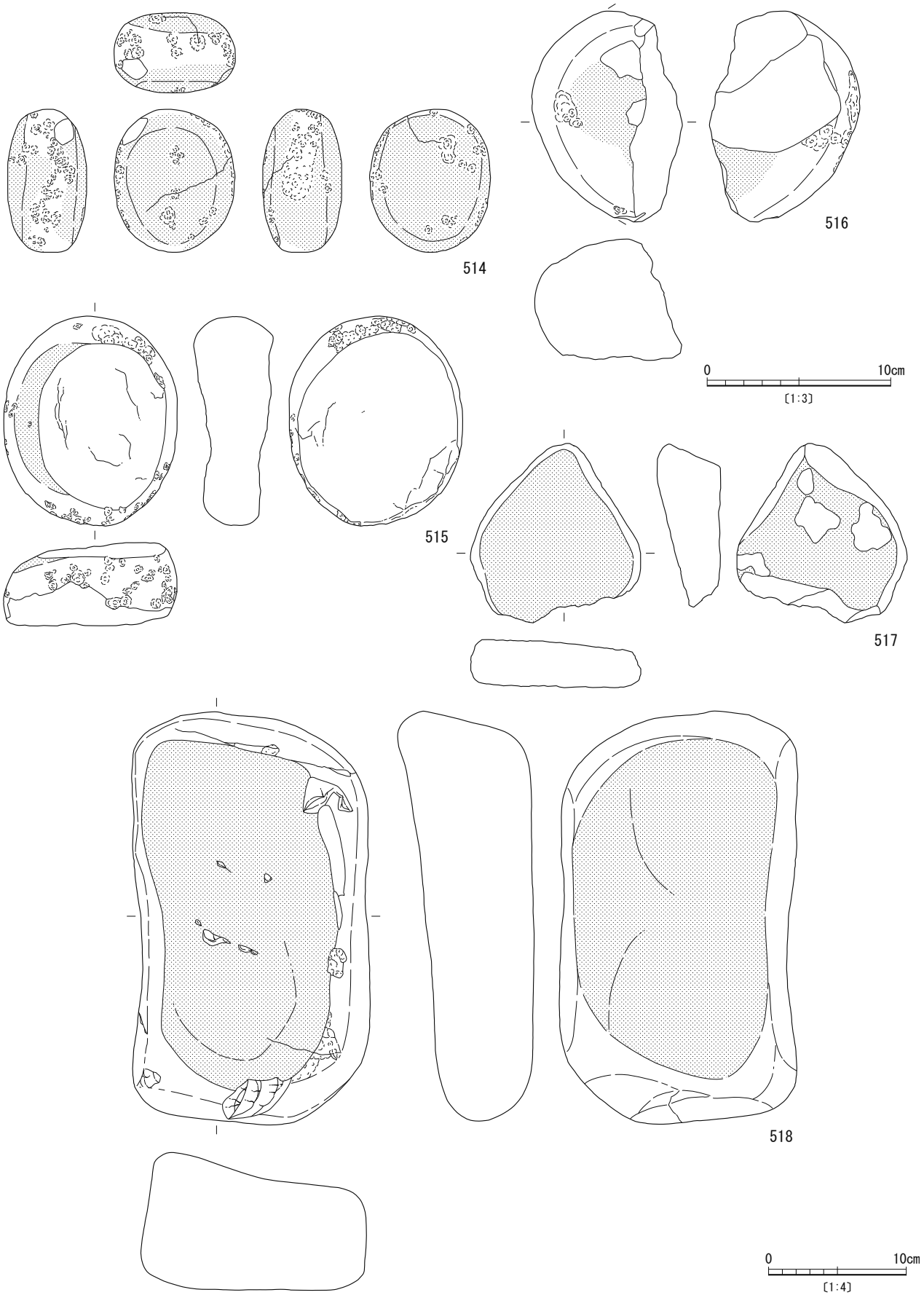
等高線Ⅵ層

0 10 20 40m
〔1:800〕

第 132 図　縄文時代早期　西部出土石器分布図



第 133 図　縄文時代早期　西部出土石器（1）



第 134 図　縄文時代早期　西部出土石器（２）

第７表　縄文時代早期出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
110	331	打製石鏃	I50	Ⅴb	10655	1.9	1.7	0.3	1.0	ホルンフェルス	
110	332	打製石鏃	F46	Ⅵ	16968	2.0	1.7	0.4	0.8	黒曜石	姫島産
110	333	打製石鏃	D41	Ⅴb	17028	2.3	1.8	0.3	0.9	黒曜石	上青木・桑ノ木津留系
110	334	打製石鏃	G49	Ⅴb	8481	3.8	2.4	0.5	4.1	黒色安山岩	
110	335	打製石鏃	H49	Ⅴb	10666	1.3	1.3	0.2	0.4	黒曜石	上青木・桑ノ木津留系
110	336	打製石鏃	F47	Ⅴ	17663	1.4	1.3	0.3	0.4	頁岩	
110	337	打製石鏃	F47	Ⅴ	17662	1.7	1.4	0.3	0.5	黒色安山岩	
110	338	打製石鏃	F48	Ⅴa	8309	1.3	1.2	0.2	0.2	黒色安山岩	
110	339	打製石鏃	G51	Ⅴb	11313	(2.5)	(2.1)	0.6	2.0	チャート	
110	340	打製石鏃	E47	Ⅴ	7380	2.0	1.6	0.4	0.9	チャート	
110	341	打製石鏃	G52	Ⅴb	12990	2.1	1.7	0.4	0.9	黒色安山岩	
110	342	打製石鏃	J52	Ⅴa	11532	(1.7)	(2.0)	0.4	0.8	黒曜石	姫島産
110	343	打製石鏃	F45	Ⅴ	17768	2.6	1.7	0.5	1.4	黒曜石	姫島産
110	344	打製石鏃	G48	Ⅴb	10681	(2.1)	(1.4)	0.3	0.6	黒色安山岩	
110	345	打製石鏃	D52	Ⅴb	12924	(2.2)	(1.6)	0.4	1.2	黒色安山岩	
110	346	打製石鏃	G50	Ⅴb	11323	(2.0)	(1.4)	0.5	1.3	チャート	
110	347	打製石鏃	E48	Ⅴb	13146	(2.1)	(1.4)	0.3	0.6	黒色安山岩	
110	348	打製石鏃	D52	Ⅴb	14302	2.4	1.7	0.4	0.9	鉄石英	
110	349	打製石鏃	G49	Ⅴb	8484	(2.4)	(1.3)	0.4	0.9	チャート	
111	350	打製石鏃	H41	Ⅴb	17281	(3.0)	(2.0)	0.5	1.7	黒曜石	針尾・淀姫系
111	351	打製石鏃	E47	Ⅴ	7379	2.6	1.8	0.4	1.3	黒色安山岩	
111	352	打製石鏃	F41	Ⅴ	17859	(3.0)	(1.9)	0.3	1.3	黒曜石	針尾・淀姫系
111	353	打製石鏃	G49	Ⅴb	8482	(1.4)	(1.5)	0.4	0.7	黒色安山岩	
111	354	打製石鏃	H41	Ⅴb	17277	(1.4)	(1.1)	0.3	0.4	黒曜石	針尾・淀姫系
111	355	打製石鏃	F50	Ⅴa	8215	(1.2)	(1.9)	0.4	0.9	黒色安山岩	
111	356	尖頭状石器	E52	Ⅴa	12908	(3.0)	(1.8)	0.7	2.9	黒色安山岩	
111	357	石錐	J41	Ⅴa	17307	2.7	2.5	1.0	4.4	黒色安山岩	
111	358	異形石器	J52	Ⅴa	11576	1.8	1.9	0.2	0.8	チャート	
111	359	石匙	E48	Ⅴb	13099	2.9	4.3	0.8	7.7	黒色安山岩	
111	360	石匙	F48	Ⅴb	13088	4.9	6.6	0.8	18.1	黒色安山岩	
112	361	削器・掻器類	G46	Ⅴ	17833	4.7	11.9	1.0	67.4	安山岩	
112	362	削器・掻器類	I54	Ⅴb	12996	4.7	6.4	1.3	36.3	砂岩	
112	363	削器・掻器類	E49	Ⅴb	13104	3.9	6.6	2.0	37.0	黒色安山岩	
112	364	削器・掻器類	D49	Ⅴa	8353	(2.8)	(3.2)	(0.7)	5.2	黒色安山岩	
112	365	削器・掻器類	D50	Ⅴa	8355	3.7	3.7	1.2	12.6	黒色安山岩	
113	366	削器・掻器類	D52	Ⅴa	12928	2.0	1.8	0.5	1.8	珪質頁岩	
113	367	削器・掻器類	F45	Ⅴ	17770	3.1	2.4	1.1	8.4	黒色安山岩	
113	368	削器・掻器類	G48	Ⅴb	8686	3.1	2.4	1.2	10.0	黒色安山岩	
113	369	削器・掻器類	C51	Ⅴb	14424	2.5	2.8	1.1	8.7	珪質頁岩	
113	370	二次加工剥片	J43	Ⅴb	17239	3.7	2.4	1.0	9.0	黒曜石	三船産
113	371	二次加工剥片	E50	Ⅴa	8422	3.7	2.0	0.3	2.5	黒色安山岩	
113	372	二次加工剥片	G52	Ⅴb	14551	4.7	2.2	1.4	11.7	黒曜石	日東・五女木系
113	373	微小剥離痕剥片	D51	Ⅴa	14714	5.8	2.7	1.7	14.7	珪質頁岩	
114	374	微小剥離痕剥片	J52	Ⅴa	11526	2.8	2.2	0.6	2.4	黒曜石	姫島産
114	375	剥片	I53	Ⅴb	14562	5.5	3.4	1.1	18.5	珪質頁岩	
114	376	石核	F44	Ⅴ	17800	3.8	4.6	1.8	28.9	黒色安山岩	
114	377	石核	I53	Ⅵ	14565	7.2	10.6	5.0	327.6	チャート	
114	378	石核	D52	Ⅴb	12926	6.0	7.0	3.9	87.2	珪質頁岩	
115	379	打製石斧	J52	Ⅴb	11580	13.8	11.0	1.3	238.3	頁岩	
115	380	打製石斧	G42	Ⅴb	17309	12.1	7.9	2.1	241.3	ホルンフェルス	
115	381	打製石斧	C50	Ⅴb	14742	6.8	4.0	1.4	38.1	ホルンフェルス	
115	382	打製石斧	G42	Ⅴb	17308	10.3	5.8	2.2	151.6	ホルンフェルス	
115	383	打製石斧	I52	Ⅴb	14560	12.1	6.8	2.2	238.9	ホルンフェルス	
116	384	打製石斧	F48	Ⅴb	13084	10.2	10.2	3.7	408.3	砂岩	
116	385	打製石斧	D49	Ⅴb	14735	16.2	6.1	2.0	195.5	ホルンフェルス	
116	386	磨製石斧	C52	Ⅴb	14740	6.0	3.7	1.2	35.4	安山岩	
116	387	磨製石斧	L54	Ⅴb	11990	10.6	5.5	2.4	177.4	ホルンフェルス	
116	388	磨製石斧	F46	Ⅴ	17704	(5.8)	6.1	2.4	125.2	砂岩	
116	389	石錘状石器	F44	Ⅴ	17798	5.6	3.1	1.1	31.4	砂岩	
117	390	敲石	G48	Ⅴb	11032	10.2	5.8	3.1	282.3	砂岩	
117	391	磨石類	I41	Ⅴb	17299	13.1	11.5	4.7	1,035.6	砂岩	
117	392	磨石類	F46	Ⅵ	17708	11.9	11.3	5.2	979.1	安山岩	

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
117	393	磨石類	H49	Ⅴb	10662	11.0	10.3	5.6	962.2	花崗岩	
117	394	磨石類	E52	Ⅴb	12899	12.0	10.5	4.9	879.8	安山岩	
118	395	磨石類	F44	Ⅵ	17796	11.8	9.1	5.0	839.5	花崗閃緑岩	
118	396	磨石類	D49	Ⅴb	14862	10.8	7.7	5.3	627.8	ホルンフェルス	
118	397	磨石類	D52	Ⅴb	12923	(10.1)	(10.1)	(6.7)	980.3	安山岩	
118	398	磨石類	H49	Ⅴb	10664	(6.1)	(10.0)	(7.9)	542.1	安山岩	
118	399	磨石類	G45	Ⅴ	17537	12.0	6.6	7.3	681.1	安山岩	
118	400	磨石類	E50	Ⅴb	13106	10.6	8.4	7.1	905.8	ホルンフェルス	
118	401	磨石類	D48	Ⅴb	14883a	(5.9)	(8.8)	(6.3)	338.9	安山岩	
119	402	磨石類	D48	Ⅴb	14883b	(6.4)	(9.1)	(6.3)	411.9	安山岩	
119	403	磨石類	E44	Ⅴb	17022	(7.5)	(8.4)	(4.7)	404.8	砂岩	
119	404	磨石類	J53	Ⅴb	14564	10.8	9.6	5.2	845.0	花崗岩	
119	405	磨石類	H50	Ⅴb	10657	10.6	9.0	4.5	594.8	砂岩	
119	406	磨石類	E52	Ⅴa	12907	10.4	9.9	4.9	718.2	花崗閃緑岩	
119	407	磨石類	F47	Ⅴ	17668	10.5	(8.4)	5.1	699.3	花崗閃緑岩	
120	408	磨石類	F46	Ⅴ	17707	9.6	8.7	4.6	590.1	花崗岩	
120	409	磨石類	D52	Ⅴa	12921	9.0	9.0	4.7	553.8	砂岩	
120	410	磨石類	J51	Ⅴa	11344	9.8	8.7	5.4	664.6	砂岩	
120	411	磨石類	G51	Ⅴb	12414	9.9	(4.9)	(3.7)	248.8	安山岩	
120	412	磨石類	H49	Ⅴb	10665	10.0	9.1	3.7	540.6	花崗閃緑岩	
120	413	磨石類	F47	Ⅴ	17670	(4.9)	(8.5)	(3.7)	202.0	砂岩	
120	414	磨石類	G45	Ⅴ	17528	10.0	8.0	4.0	329.3	透閃石岩	
120	415	磨石類	F46	Ⅴ	17702	8.8	7.0	4.2	390.8	花崗閃緑岩	
121	416	磨石類	I43	Ⅴb	17237	9.1	7.6	5.0	525.4	砂岩	
121	417	磨石類	D50	Ⅴb	14878	(6.4)	(7.6)	(4.2)	227.1	安山岩	
121	418	磨石類	G49	Ⅴb	10685	8.8	8.3	5.2	538.3	安山岩	
121	419	磨石類	F47	Ⅴ	17851	9.1	7.8	6.1	546.8	花崗閃緑岩	
121	420	磨石類	G50	Ⅴb	11338	8.9	7.2	4.9	483.0	安山岩	
121	421	磨石類	F45	Ⅴ	17771	8.3	7.8	4.7	445.1	花崗閃緑岩	
121	422	磨石類	G51	Ⅴb	11336	8.6	7.1	4.9	418.3	安山岩	
121	423	磨石類	E50	Ⅴb	13035	7.9	7.2	4.3	325.7	安山岩	
121	424	磨石類	G49	Ⅴb	13277	8.0	8.2	4.9	430.7	安山岩	
121	425	磨石類	G48	Ⅴb	10679	(7.4)	(6.5)	(5.0)	271.7	安山岩	
122	426	磨石類	F52	Ⅴa	12896	7.5	7.1	4.8	386.3	安山岩	
122	427	磨石類	F46	Ⅴ	17706	8.0	6.5	3.3	246.6	砂岩	
122	428	磨石類	H48	Ⅴb	10674	7.5	6.0	4.2	253.7	安山岩	
122	429	磨石類	G48	Ⅴb	10680	7.3	5.6	4.0	236.7	花崗岩	
122	430	磨石類	E48	Ⅴb	13100	7.1	6.6	4.2	237.6	安山岩	
122	431	磨石類	H50	Ⅴb	10659	(6.4)	6.4	4.7	220.0	玄武岩	
122	432	磨石類	G49	Ⅴb	11339	(8.1)	(5.2)	(4.0)	206.2	安山岩	
122	433	磨石類	F45	Ⅴ	17815	7.4	5.1	4.0	210.3	花崗閃緑岩	
122	434	磨石類	I52	Ⅴb	14561	6.8	5.7	3.3	198.5	砂岩	
122	435	磨石類	D49	Ⅴb	14882	7.4	5.7	4.0	244.7	安山岩	
122	436	磨石類	D51	Ⅴb	13036	5.9	5.2	2.7	105.1	安山岩	
122	437	磨石類	D49	Ⅴb	13114	6.3	4.8	4.2	176.6	安山岩	
123	438	磨石類	E50	Ⅴb	13105	5.2	5.0	4.4	152.0	安山岩	
123	439	磨石類	F45	Ⅵ	17765	5.9	5.2	3.3	128.9	安山岩	
123	440	磨石類	D51	Ⅴb	13016	4.5	4.0	3.0	75.7	安山岩	
123	441	磨石類	F45	Ⅴ	17816	5.8	4.8	4.1	175.0	花崗閃緑岩	
123	442	磨石類	J51	Ⅴb	11346	8.8	8.8	4.6	540.3	凝灰岩	
123	443	石皿類	G49	Ⅴb	11034	33.5	22.9	6.4	5,718.6	安山岩	
124	444	石皿類	F47	Ⅴ	17850	33.2	29.3	4.9	5,331.6	花崗岩	
124	445	石皿類	F47	Ⅴ	17852	37.2	29.1	3.8	6,073.9	花崗岩	
124	446	石皿類	G49	Ⅴb	11033	20.8	19.2	4.5	3,172.7	砂岩	
124	447	石皿類	G50	Ⅵ	10660	(23.0)	(16.5)	11.2	5,447.0	花崗岩	
124	448	石皿類	E51	Ⅴb	13147	21.5	15.4	7.4	4,116.7	花崗岩	
125	449	石皿類	F44	Ⅵ	17797	22.2	23.4	8.6	5,212.8	砂岩	
125	450	石皿類	J53	Ⅴ	7694	(15.5)	23.6	4.2	2,599.4	花崗岩	
125	451	石皿類	F45	Ⅵ	17772	(6.1)	(10.1)	(5.7)	516.8	砂岩	
125	452	石皿類	F43	Ⅴ	17878	(12.7)	(10.9)	(5.6)	822.3	砂岩	
125	453	石皿類	K52	Ⅴa	11981	(11.7)	(12.5)	(5.0)	787.8	安山岩	
125	454	石皿類	I49	Ⅴb	8518	(10.5)	(8.4)	(5.7)	608.1	花崗岩	
126	455	石皿類	F43	Ⅴ	17877	(11.2)	(10.2)	(5.2)	793.9	砂岩	

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	取上番号	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材	備考
126	456	石皿類	J43, I41	Ⅴa・b	17241・17301	(8.7)	(7.1)	(3.7)	274.5	砂岩	
126	457	石皿類	G45	Ⅴ	17529	(11.6)	(13.6)	(2.7)	485.5	砂岩	
126	458	石皿類	I52	Ⅴa	12752	(11.1)	(9.6)	(2.7)	412.5	砂岩	
126	459	石皿類	H42	Ⅴb	17293	(9.5)	(11.2)	(2.8)	307.5	砂岩	
126	460	石皿類	F44	Ⅴ	17799	(12.9)	(9.0)	(3.0)	519.2	砂岩	
126	461	石皿類	I50	Ⅴb	10656	(6.8)	(5.6)	(1.6)	103.6	砂岩	
126	462	石皿類	I50	Ⅴb	8525	(8.1)	(6.0)	(1.6)	125.1	砂岩	
126	463	砥石	F43	Ⅴ	17876	(6.9)	(6.7)	(3.9)	192.8	花崗閃緑岩	
126	464	軽石製品	H48	Ⅴb	10676	13.2	10.5	4.6	123.3	軽石	
126	465	棒状礫	H52	Ⅴb	14554	(12.1)	4.3	3.4	243.9	砂岩	
128	466	打製石鏃	D38	Ⅴb	16504	1.5	1.5	0.3	0.4	黒曜石	針尾・淀姫系
128	467	打製石鏃	F40	Ⅴ	17862	(1.7)	1.4	0.5	0.8	黒色安山岩	
128	468	打製石鏃	H37	Ⅴ	40603	(1.4)	(1.8)	0.3	0.7	黒曜石	針尾・淀姫系
128	469	打製石鏃	J33	Ⅴ	37715	1.1	1.3	0.3	0.3	チャート	
128	470	打製石鏃	J33	Ⅴ	37716	2.1	1.9	0.5	1.1	チャート	
128	471	打製石鏃	K35	Ⅵ	34291	(2.0)	(1.7)	0.4	1.0	黒曜石	姫島産
128	472	打製石鏃	J31	Ⅵ	32455	(2.5)	(1.7)	(0.3)	1.0	チャート	
128	473	打製石鏃	H40	Ⅴb	17276	1.9	1.5	0.3	0.6	黒色安山岩	
128	474	打製石鏃	K34	Ⅵ	34327	(2.0)	(1.5)	0.4	1.0	黒曜石	日東・五女木系
128	475	磨製石鏃	G38	Ⅶb	219	1.9	1.3	0.3	0.6	頁岩	
128	476	尖頭状石器	K39	Ⅵa	22962	3.7	3.0	1.2	11.5	赤色頁岩	
128	477	石錐	J31	Ⅴ	32450	(2.5)	(1.8)	(0.8)	2.5	チャート	
128	478	石匙	K34	Ⅵ	34328	2.5	1.9	1.0	3.5	チャート	
128	479	石匙	E31	Ⅴa	17102	(4.8)	(3.4)	0.9	10.7	黒色安山岩	
129	480	削器・掻器類	H33	Ⅵ	40595	1.8	1.6	0.8	2.3	黒曜石	上青木・桑ノ木津留系
129	481	石核	J34	Ⅴ	40712	1.7	1.9	1.2	3.3	黒曜石	上青木・桑ノ木津留系
129	482	石核	K36	Ⅴ	33652	2.2	3.0	1.1	5.4	黒曜石	上青木・桑ノ木津留系
129	483	打製石斧	H34	Ⅵ	39170	(6.4)	(4.5)	(1.2)	45.3	ホルンフェルス	
129	484	磨製石斧	H37	Ⅴ	40600	7.8	3.4	1.8	65.6	ホルンフェルス	
129	485	磨製石斧	K34	Ⅵ	34311	(6.8)	(3.5)	(1.6)	48.8	ホルンフェルス	
129	486	磨製石斧	I36	Ⅴ	33256	(5.0)	(3.3)	(0.8)	10.6	頁岩	
129	487	敲石	G32	Ⅵ	40927	9.1	5.2	2.3	155.5	ホルンフェルス	
129	488	敲石	K34	Ⅵ	34312	(5.9)	(5.5)	(4.5)	145.7	ホルンフェルス	
130	489	磨石類	F35	Ⅴ	17593	9.6	8.2	6.7	671.0	安山岩	
130	490	磨石類	H37	Ⅴ	40606	9.4	4.9	2.6	161.5	玄武岩	
130	491	磨石類	F37	Ⅵ	17119	8.0	6.9	5.0	404.5	安山岩	
130	492	磨石類	K33	Ⅴ	34284	9.7	6.6	5.3	434.2	花崗岩	
130	493	磨石類	G37	Ⅴb	17074	9.9	6.9	5.5	488.4	花崗閃緑岩	
130	494	磨石類	L33	Ⅵ	34285	(6.3)	(5.5)	(4.8)	125.4	安山岩	
130	495	磨石類	K33	Ⅴ	34283	(4.3)	(7.8)	(4.0)	153.9	砂岩	
130	496	磨石類	I37	Ⅵ	37713	7.1	5.8	3.8	265.8	安山岩	
130	497	磨石類	K36	Ⅵ	33650	(6.6)	(9.4)	5.0	362.1	安山岩	
131	498	磨石類	L33	Ⅵ	34287	7.7	4.4	3.0	159.5	安山岩	
131	499	石皿類	J37	Ⅵ	33700	(9.9)	(14.4)	(4.4)	895.5	花崗岩	
131	500	石皿類	G33	Ⅵ	40926	(9.5)	(8.2)	(2.9)	326.3	砂岩	
133	501	打製石鏃	K29	Ⅴ	34362	(2.6)	(1.9)	0.5	1.9	黒色安山岩	
133	502	打製石鏃	F26	Ⅴ	30121	2.0	1.4	0.4	0.8	玉髄	
133	503	打製石鏃	I24	Ⅵ	29673	(1.6)	(1.4)	0.4	0.6	黒曜石	針尾・淀姫系
133	504	打製石鏃	I27	Ⅵ	34275	2.7	1.9	0.3	0.9	黒曜石	針尾・淀姫系
133	505	打製石鏃	H26	Ⅵ	23171	(3.0)	(1.9)	0.4	1.3	黒色安山岩	
133	506	打製石鏃	E22	Ⅴ	23056	(3.5)	(2.1)	0.6	2.8	チャート	
133	507	磨製石鏃	I29	Ⅵ	34273	2.1	(1.5)	0.2	1.0	頁岩	
133	508	尖頭状石器	I20	Ⅴ	22889	2.4	3.4	0.9	7.4	黒色安山岩	
133	509	石錐	I21	Ⅵ	22912	3.1	2.3	0.9	5.4	黒曜石	日東・五女木系
133	510	二次加工剥片	I20	Ⅴ	22896	3.6	1.5	1.0	2.9	黒曜石	姫島産
133	511	石核	J21	Ⅴ	22281	3.1	2.8	1.5	8.7	黒曜石	姫島産
133	512	磨製石斧	K20	Ⅴ	22295	(3.9)	(5.6)	(0.8)	21.6	ホルンフェルス	
133	513	磨製石斧	H21	Ⅴ	22860	(4.6)	(7.7)	(0.8)	21.2	頁岩	
134	514	磨石類	K22	Ⅴ	22334	7.8	6.6	4.3	289.0	安山岩	
134	515	磨石類	F27	Ⅵ	30021	11.3	9.5	(4.3)	613.8	砂岩	
134	516	磨石類	K23	Ⅵ	33628	(11.4)	(8.2)	(6.3)	718.3	安山岩	
134	517	石皿類	K19	Ⅴ	22293	(13.0)	12.4	4.6	800.5	花崗岩	
134	518	石皿類	F24	Ⅴ	30123	30.1	17.2	10.0	8420.0	砂岩	

第３節　縄文時代後期の調査

１　調査の概要

縄文時代後期の調査は，永吉天神段遺跡の全調査範囲で行った。包含層は，池田降下軽石層に該当するⅢｂ層と，弥生時代・古代・中世の包含層であるⅡ層との間に挟まれた黒色土のⅢａ層である。

この調査では，縄文時代後期相当の遺構は確認できなかった。

遺物については，土器がⅡ層～Ⅲ層で混在して出土する状況であったため，形式的に該当時期と判断したものを取り上げることとした。石器についても同様だが，形式的に該当時期を分類することが困難であるため，今後刊行予定である縄文時代晩期編で一括して取り扱う予定である。遺物量は少なく，散在して出土する状態であった。その中でも遺跡中央部のＥ～Ｇ－41～43区付近にある程度の集中が見られる。図化したものは22点である。

２　出土土器

XIV類土器（第136図　519～521）

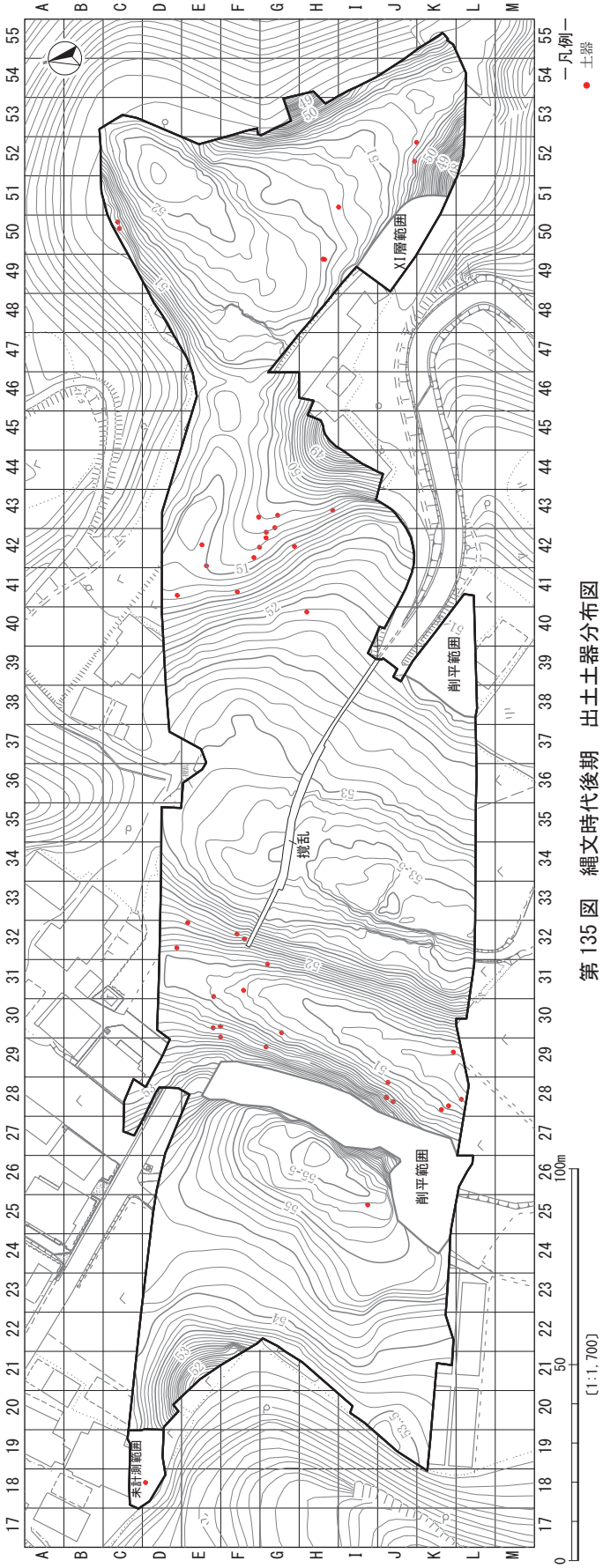
519は，肥厚させた口縁に押圧による刻目突帯を施す。口縁下に径４㎜程度の穿孔がある。口唇部はナデにより平坦に調整され，その上に瘤状突起が付着している。520は，口縁部を肥厚させ，ヘラ状工具を用いて，幅広で深い凹線を斜位に施している。口唇部はナデにより平坦に調整されている。内面は貝殻腹縁による斜位のナデ調整が施されている。521は，胴部に２条の浅い凹線を屈曲させながら施文している。色調は外面が黒褐色，内面が暗赤褐を呈する。胎土に雲母の含有が目立つ。

XV類土器（第136図　522～527）

522～524は肥厚させた口縁部文様帯に，ヘラ状工具により，連続してくの字状に短い凹線を押圧し，その後くの字の屈曲部に凹線を１条巡らせている。525はわずかに内湾する口縁部文様帯に深い凹線を横位に２条，その間に浅い凹線を１条施す。その上下に縦位の刻目を連続して押圧している。526・527は，525と同様の文様を胴部に施す。525～527は，同様の施文方法であることや近接した地点から出土していることから，同一個体である可能性が高い。

XVI類土器（第136図　528～537）

528～530は，肥厚させた口縁部文様帯に，浅く幅広の凹線を２条巡らせている。531は，口縁部に凹線を２条巡らせた後，その凹線間に棒状工具による楕円形の押圧文を，ほぼ等間隔に連続して施している。532は，口縁部に凹線を２条巡らせた後，凹線上に楕円形の押圧文を施している。533は，口縁下部を肥厚させている。無文である。内面，外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。胎土に金雲母が認められる。534は，わずかに肥



第135図　縄文時代後期　出土土器分布図

厚させた口縁部文様帯に１条の凹線を巡らせ，胴部にも２条の凹線を巡らせている。535・536 は，胴部の張り出し部に凹線を２条施している。537 は，胴部の張り出し部に１条の凹線を巡らせ，その直下に三日月文を連続して施文している。

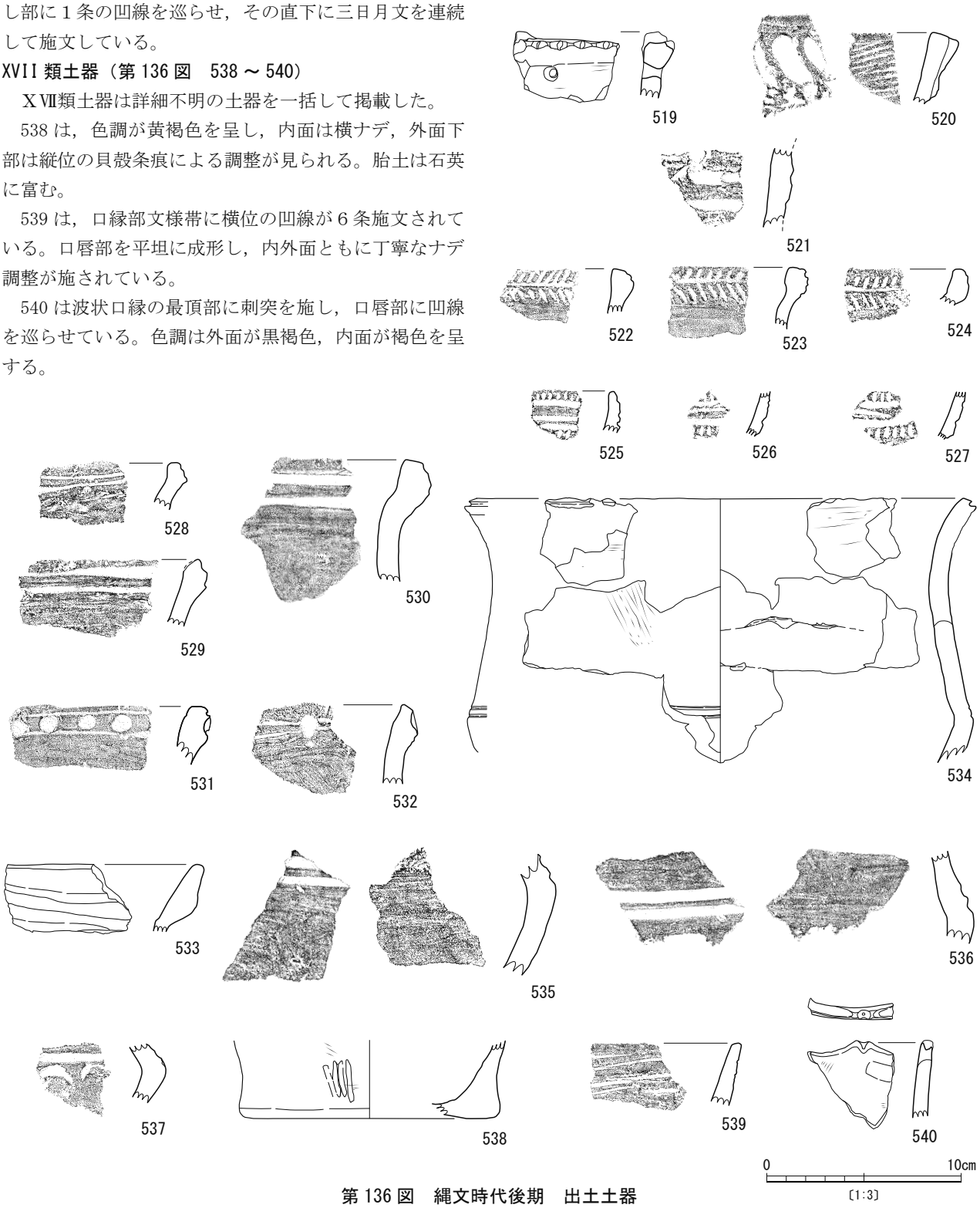
XVII 類土器（第 136 図　538 ～ 540）

ⅩⅦ類土器は詳細不明の土器を一括して掲載した。

538 は，色調が黄褐色を呈し，内面は横ナデ，外面下部は縦位の貝殻条痕による調整が見られる。胎土は石英に富む。

539 は，口縁部文様帯に横位の凹線が６条施文されている。口唇部を平坦に成形し，内外面ともに丁寧なナデ調整が施されている。

540 は波状口縁の最頂部に刺突を施し，口唇部に凹線を巡らせている。色調は外面が黒褐色，内面が褐色を呈する。



第 136 図　縄文時代後期　出土土器

第８表　縄文時代後期出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層	取上番号	部位	分類番号	器種	調整		文様	色調		胎土								焼成	備考
								外面	内面		外面	内面	白石	茶石	黄白石	雲母	石英	灰石	黒石	長石	角閃石		
136	519	G43	Ⅱb	11769	口縁	XIV	深鉢	ナデ	ナデ	口縁：押圧刻目突帯	橙	橙	○	○			○					普	
136	520	C52	Ⅰ	－	口縁	XIV	深鉢	－	貝殻条痕	貼付肥厚部：凹線＋巻貝殻頂刺突文	にぶい橙	赤橙	○				○	○			○	普	後期初頭
136	521	D52	Ⅰ	－	肩	XIV	深鉢	横ナデ	横ナデ	矩形凹線	赤褐	赤褐	○	○	○	○						良	内外スス
136	522	G30	Ⅲa	－	口縁	XV	鉢	横ミガキ	ミガキ	口縁肥厚帯：横位凹線，上下斜位凹線	赤褐	黒褐		○			○		○			良	
136	523	E30	Ⅲa	38006	口縁	XV	深鉢	－	－	口縁：斜位凹線，沈線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○				○		○			良	
136	524	G29	Ⅲa	－	口縁	XV	深鉢	－	ナデ	口縁：斜位凹線，沈線	赤褐	赤褐	○	○			○					良	
136	525	F32	Ⅲb	16226	口縁	XV	鉢	ナデ	ナデ	沈線，刻目	褐灰	褐灰	○				○			○		普	
136	526	E31	Ⅱ	－	胴	XV	鉢	ナデ	ナデ	沈線，刻目	褐灰	褐灰	○				○			○		普	
136	527	E32	Ⅲb	16717	胴	XV	鉢	ナデ	ナデ	沈線，縦位刻目	にぶい褐	褐灰	○				○			○		普	
136	528	F31	Ⅲa	38869	口縁	XVI	鉢	横ナデ	横ナデ	口縁：凹線	赤褐	赤褐	○				○			○		良	
136	529	H50	Ⅲ	6009	口縁	XVI	深鉢	横ナデ	丁寧な横ナデ	口縁端：横線＋縦短絡線	橙・一部に黒褐	橙・一部に黒褐		○	○			○				良	
136	530	C51	Ⅰ	－	口縁	XVI	深鉢	横ナデ	横ナデ	口縁端：凹線	にぶい褐	褐灰	○	○		○	○				○	普	
136	531	K29	Ⅲa	34238	口縁	XVI	深鉢	横ナデ	－	口縁：凹線＋球状工具による押圧文	黒褐・一部褐	黒褐	○	○					○			普	
136	532	J28	Ⅱb	27090	口縁	XVI	鉢	口縁ナデ、頸部縦ミガキ→横ナデ	横ナデ	口唇：凹線→刺突	褐	褐	○			○						良	
136	533	E31	Ⅲa	38802	口縁	XVI	深鉢	丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	－	橙	にぶい褐	○	○		○						良	
136	534	J28	Ⅱb，Ⅲa	27091他	口縁～胴	XVI	深鉢	ミガキ様ナデ	－	口唇：凹線，胴部：凹線	褐	橙・灰褐	○			○	○					良	
136	535	C50	Ⅱ	7160	胴	XVI	深鉢	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	凹線	にぶい橙	黒褐	○	○			○					良	536と同一個体
136	536	C50	Ⅱ	7165	胴	XVI	深鉢	貝殻条痕→ナデ	貝殻条痕→ナデ	凹線	にぶい橙	黒褐	○	○			○					良	535と同一個体
136	537	G30	Ⅲa	33578	胴	XVI	深鉢	ナデ	ナデ	沈線	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○					○			普	
136	538	L28	Ⅱ，Ⅲa	33840他	底	XVII	鉢	貝殻条痕	横ナデ	－	黄褐・一部に橙	黄褐・一部に橙	○	○			○					普	底径(13.4)cm
136	539	E42	Ⅱa	9938	口縁	XVII	鉢	ナデ，口唇丁寧なナデ	丁寧なナデ	条痕	茶褐	茶褐	○			○	○					良	
136	540	H43	Ⅱa	13397	口縁	XVII	深鉢	ナデ	ナデ	口縁最頂部に刺突	黒褐	褐	○	○					○			普	

第５章　自然科学分析

第１節　自然科学分析の種類と目的

本報告書に関する自然科学分析は,平成25年度に「永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析」を，平成28年度に「永吉天神段遺跡出土の炭化物分析」を行った。

炭化物分析では，集石75号から検出された炭化物の年代を測定することにより，遺構の年代を知る手がかりとすることを目的とした。

植物珪酸体分析では，Ｆ-44区の土層内に残存している植物珪酸体（プラント・オパール）を検出・分析し，古植生・古環境を推定することを目的とした。

なお，今回は本報告書に関わる，第２地点の縄文時代早期に関する科学分析のみを掲載する。第２地点の縄文時代晩期以降と，第３地点については今後刊行の報告書において報告する予定である。このため，納品された報告書を基に，第２地点の縄文時代早期の分析結果のみ再編を行い，体裁を整えて掲載している。

第２節　永吉天神段遺跡出土の炭化物分析

株式会社　パレオ・ラボ

１　はじめに

鹿児島県大崎町に位置する永吉天神段遺跡から出土した試料について，加速器質量分析法（ＡＭＳ法）による放射性炭素年代測定を行った。

２　試料と方法

試料は，集石遺構である集石75号出土の１点（試料Ｎｏ．１:ＰＬＤ-32481)の炭化材である。試料Ｎｏ．１は最終形成年輪は残っていなかった。測定試料の情報，調製データは第９表のとおりである。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトＡＭＳ：ＮＥＣ製 1.5ＳＤＨ）を用いて測定した。得られた^{14}Ｃ濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}Ｃ年代，暦年代を算出した。

３　結 果

第10表に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}Ｃ)，同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}Ｃ年代を第137図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}Ｃ年代はＡＤ1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}Ｃ年代（ｙｒＢＰ）の算出には，^{14}Ｃの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}Ｃ年代誤差（±１σ）は測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}Ｃ年代がその^{14}Ｃ年代誤差内に入る確率が68.2％であることを示す。なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}Ｃ年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動，および半減期の違い（^{14}Ｃの半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}Ｃ年代の暦年較正にはＯｘＣａｌ4.2（較正曲線データ：ＩｎｔＣａｌ13）を使用した。なお，１σ暦年代範囲は，ＯｘＣａｌの確率法を使用して算出された^{14}Ｃ年代誤差に相当する68.2％信頼限界の暦年代範囲であり，同様に２σ暦年代範囲は95.4％信頼限界の暦年代範囲である。( )内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}Ｃ年代の確率分布を示し,二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４　考 察

集石75号から出土した試料Ｎｏ．１（ＰＬＤ－32481）は，^{14}Ｃ年代で8120±2514ＣＢＰ，２σ暦年代範囲(確率95.4%)で7175－7056ｃａｌＢＣ（95.4%)の暦年代を示した。これは，小林（2008)，工藤（2012)，八木澤（2008）を参照すると，縄文時代早期後半に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C.(2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51（１）, 337-360.

小林謙一(2008)縄文時代の暦年代.小杉 康･谷口康浩･西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学２ 歴史のものさし」:257-269, 同成社.

工藤雄一郎（2012）旧石器・縄文時代の環境文化史―高精度放射性炭素年代測定と考古学―. 373p, 神泉社.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の^{14}Ｃ年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}Ｃ年代」:３-20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W.,Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Che ng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P. M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M, and van der Plicht, J.(2013)

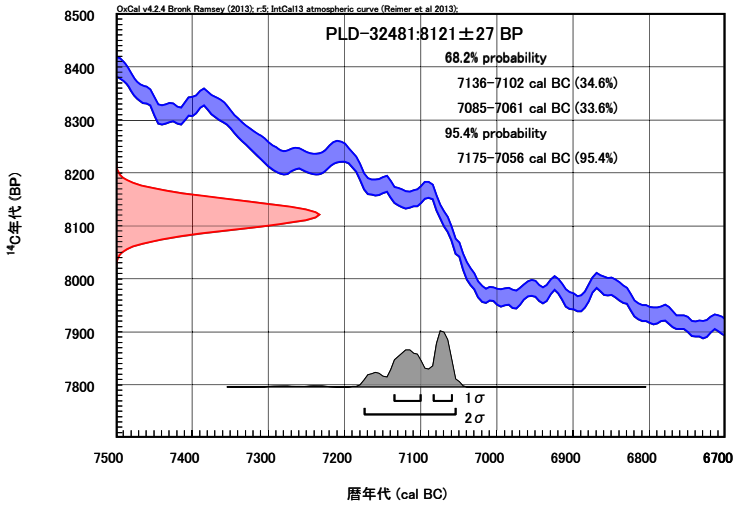
IntCal13 and Ma rine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

第９表　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-32481	試料 No. 1 調査区：第２地点 グリッド：G・H27 遺構：SS75 層位：Ⅵ層	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

第 10 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C (‰)	暦年較正用年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代 (yrBP ± 1 σ)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-32481 SS75 試料 No. 1	-25.17 ± 0.15	8121 ± 27	8120 ± 25	7136-7102 cal BC (34.6%) 7085-7061 cal BC (33.6%)	7175-7056 cal BC (95.4%)



第 137 図　暦年較正結果

第３節　永吉天神段遺跡出土の植物珪酸体分析

株式会社　古環境研究所

１　はじめに

植物珪酸体は，植物の細胞内に珪酸（SiO ２）が蓄積したもので，植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は，この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり，イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

ここでは，当時の周辺の植生や環境および農耕に関する情報を得る目的で，植物珪酸体分析を行った。

２　試 料

分析試料は，Ｆ -44 区の土層断面から採取された８点である。試料採取箇所を分析結果図に示す。

３　分析法（土壌試料）

植物珪酸体の抽出と定量は，ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて，次の手順で行った。

1)　試料を 105℃で 24 時間乾燥（絶乾）試料約１g に対し直径約 40 μ m のガラスビーズを約 0.02g 添加（0.1mg の精度で秤量）

2)　電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

3)　超音波水中照射（300W・42KHz・10 分間）による分散

4)　沈底法による 20 μ m 以下の微粒子除去

5)　封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

6)　検鏡・計数

同定は，400 倍の偏光顕微鏡下で，おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は，ガラスビーズ個数が 400 以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１g あたりのガラスビーズ個数に，計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて，試料１g 中の植物珪酸体個数を求めた。

また，おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0 と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重）をかけて，単位面積で層厚１cm

あたりの植物体生産量を算出した。これにより，各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000)。タケ亜科については，植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

４　分析結果

（１）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い，その結果を第11表および第138・139図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕イネ，ヨシ属，キビ族型，ススキ属型（おもにススキ属），ウシクサ族Ａ（チガヤ属など)，ウシクサ族Ｂ（大型）

〔イネ科－タケ亜科〕メダケ節型(メダケ属メダケ節･リュウキュウチク節，ヤダケ属)，ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節)，チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節･チシマザサ節など)，ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など)，マダケ属型（マダケ属，ホウライチク属)，未分類等

〔イネ科－その他〕表皮毛起源，棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来)，未分類等

〔樹木〕ブナ科（シイ属)，クスノキ科，マンサク科（イスノキ属)，その他

（２）植物珪酸体の検出状況

１）Ｆ－44区（土層断面）

下位のＶａ層（試料10）では，ススキ属型，ウシクサ族Ａが比較的多く検出され，キビ族型，ウシクサ族Ｂ，メダケ節型，ネザサ節型，チマキザサ節型，ミヤコザサ節型なども認められた。また，樹木起源のクスノキ科，樹木(その他)なども検出された。Ｋ－Ah混のⅣａ層(試料８，９）では，イネ科は各分類群とも大幅に減少しているが，樹木起源のクスノキ科，樹木（その他）は大幅に増加し,ブナ科（シイ属）も出現している。Ik混層（試料７）ではススキ属型，ウシクサ族Ａが増加し，Ⅲｂ層（試料４，５）ではメダケ節型，ネザサ節型も増加している。なお，Ⅲｂ層上部（試料４）では樹木起源のクスノキ科や樹木（その他）が減少している。

５　考 察

鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約7,300年前）直下のＶａ層の堆積当時は，ススキ属やウシクサ族（チガヤ属など）を主体として，キビ族，メダケ属（メダケ節やネザサ節）なども生育する日当たりの良い草原的な環境であったと考えられ，遺跡周辺にはクスノキ科などの樹木(照葉樹）が分布していたと推定される。

その後，鬼界アカホヤ火山灰（Ｋ－Ah，約7,300年前）の堆積によって，当時の植生は一時的に大きな影響を受けたと考えられるが，Ｋ－Ah混のⅣａ層の時期にはクスノキ科をはじめシイ属なども生育する森林植生（照葉樹林）が分布拡大したと推定される。鬼界アカホヤ噴火に伴う幸屋火砕流が及ばなかった鹿児島県中部以北では，鬼界アカホヤ火山灰の直上で照葉樹林が分布拡大する傾向が認められるが（杉山，2002)，このことの原因として，テフラ降灰が生態系の秩序を撹乱することによって生態的順位の交代が誘発され（辻，1993)，結果的に照葉樹林の分布拡大が促進された可能性が考えられる。また，照葉樹林の分布拡大には，年平均気温が現在よりも約２℃前後高かったとされる当時の温暖湿潤な気候環境も影響したと考えられる。

池田湖テフラ（Ik，約6,400年前）混のⅢｂ層では，ススキ属やウシクサ族（チガヤ属など）を主体としてキビ族，メダケ属（メダケ節やネザサ節）なども生育する草原植生に移行したと考えられ，同層上部ではクスノキ科などの照葉樹林は減少したと推定される。また，Ⅲａ層ではメダケ属（メダケ節やネザサ節）が増加したと考えられる。これらのイネ科植物は陽当たりの悪い林床では生育が困難であり，ススキ属やチガヤ属の草原が維持されるためには定期的な刈り取りや火入れが必要である（堀田，1991，近藤，1995)。このことから，当時は火入れなど人間による植生干渉が行われていた可能性が考えられる。また，このような植生環境下で土壌中に多量の有機物が供給され，炭素含量の高い黒色土壌（黒ボク土）が形成されたと推定される（杉山ほか，2002)。

文献

近藤錬三（1995）日本における植物珪酸体研究とその応用．近堂祐弘教授退官記念論文集刊行会:p.31 － 56.

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69 － 84.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究，38（２)，p.109 － 123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント･オパール)．考古学と植物学．同成社，p.189 － 213.

杉山真二(2001)テフラと植物珪酸体分析．月刊地球，23，p.645 － 650.

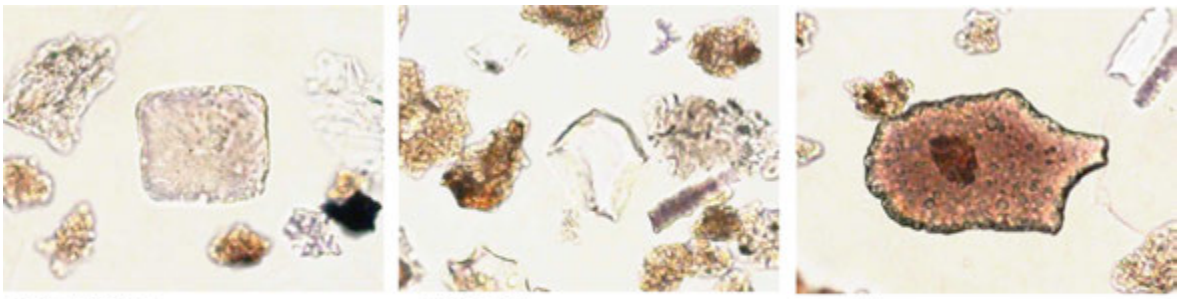
杉山真二・渡邊眞紀子・山元希里（2002）最終氷期以降の九州南部における黒ボク土発達史．第四紀研究．41（５)，p.361 － 373.

杉山真二（2010）更新世の植生と環境．旧石器時代．講座日本の考古学第１巻．青木書店，p.156 － 177.

藤森照信（2012）茅、その一．第４回建築の素．小雑誌「熱風」2012年10号．スタジオジブリ，p.91 － 95.

堀田満（1991）日本列島の植物．カラー自然ガイドⅡ，保育社：p.68 － 69.

町田洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－．東京大学出版会，336p.



第 138 図　永吉天神段遺跡の植物珪酸体

第 11 表　永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析結果（１）

検出密度（単位：×100個/g）

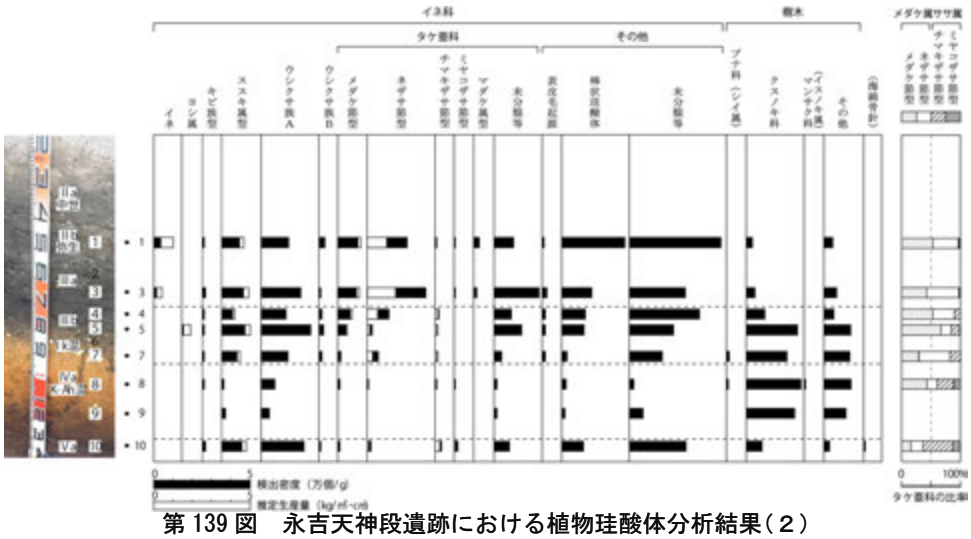
分類群	学名	1	3	4	5	7	8	9	10
	地点・試料	F-44区土層断面							
イネ科	Gramineae								
イネ	*Oryza sativa*	35	14						
ヨシ属	*Phragmites*				7				
キビ族型	Panicoae type	7	14	7	7	7	7		13
ススキ属型	*Miscanthus* type	92	113	54	121	78	7	14	104
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	142	204	128	256	137	69	41	221
ウシクサ族B	Andropogoneae B type	28	7	13	21	13			7
タケ亜科	Bambusoideae								
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	106	99	67	43	13	7		7
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	213	310	115	28	59	7		20
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	7		20	14	13	7		33
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	7	7				7		20
マダケ属型	*Phyllostachys*	28	14						
未分類等	Others	99	232	88	142	39	14	14	78
その他のイネ科	Others								
表皮毛起源	Husk hair origin	7	21	13	14	13			
棒状珪酸体	Rodshaped	326	155	121	114	26	21	14	111
未分類等	Others	475	289	364	228	170	21	69	293
樹木起源	Arboreal								
ブナ科（シイ属）	*Castanopsis*					13	7		
クスノキ科	Lauraceae	28	42	94	263	209	282	248	78
マンサク科（イスノキ属）	*Distylium*						7		
その他	Others	43	63	47	135	131	138	110	26
（海綿骨針）	Sponge spicules								7
植物珪酸体総数	Total	1645	1583	1133	1395	922	599	510	1008

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡・cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	1.04	0.41						
ヨシ属	*Phragmites*				0.45				
ススキ属型	*Miscanthus* type	1.14	1.40	0.67	1.50	0.97	0.09	0.17	1.29
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	1.23	1.14	0.78	0.50	0.15	0.08		0.08
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	1.02	1.49	0.55	0.14	0.28	0.03		0.09
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	0.05		0.15	0.11	0.10	0.05		0.24
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	0.02	0.02				0.02		0.06

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus	53	43	53	67	29	43		16
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	44	56	37	18	53	18		20
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.	2		10	14	18	28		52
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi	1	1				11		12
メダケ率	Medake ratio	97	99	90	86	82	61	0	36



第 139 図　永吉天神段遺跡における植物珪酸体分析結果（２）

第６章　総括

第１節　旧石器時代

旧石器時代の遺構・遺物については，持留川に近接する遺跡東部の舌状台地上に集中して検出された。礫群１基，ブロック７か所が検出され，その周辺から石器・剥片等の遺物が出土した。遺跡中央部・西部でそれぞれ１点ずつ石器が出土したが，全体としては調査面積に比べて少ない状態であった。遺物はすべてＸ層で出土しており，ナイフ形石器の時期の遺物である。

第２節　縄文時代早期

１　遺構

（１）土器埋設遺構

永吉天神段遺跡第２地点では，縄文時代早期後葉の土器埋設遺構が１基検出された。

土器埋設遺構は縄文時代後期に隆盛するが，一方で縄文時代早期の土器埋設遺構も少数ながら存在する。

土器埋設遺構は，土器埋納遺構とも呼ばれる遺構であり，両者は土器が埋められた目的・意図によって区別されるべきものであるが，ここでは一括して土器埋設遺構として取り扱うこととする。

第 140 図　県内の埋設土器検出遺跡位置図

県内において著名なものは，霧島市上野原遺跡で検出された一対の壺形土器の土器埋設遺構であるが，上野原遺跡ではそれを含めて 11 基 12 個体が検出されている。器種は壺形土器が 11 個体，深鉢が１個体である。型式は早期後葉に位置づけられる天道ヶ尾式土器と，平栫式土器がそれぞれ６個体である。遺構は，遺跡内でも標高の高い場所で検出されている。

霧島市城ヶ尾遺跡では，４基の土器埋設遺構が検出され，壺形土器３個体，深鉢１個体が出土した。４個体とも早期後葉に位置づけられる塞ノ神Ａ式土器である。遺構は遺跡内でも標高の高い位置に配されており，遺構周辺は遺物が極端に少ない状態であった。

肝付町鐘付遺跡では，５基の土器埋設遺構が検出され，壺形土器１個体，深鉢４個体が出土した。５個体とも早期後葉に位置づけられる，平栫様式の石坂上式土器（いわゆる塞ノ神Ａａ式土器）である。遺構は，上野原遺跡，城ヶ尾遺跡と同様に遺跡内でも標高の高い場所で検出されている。

志布志市高吉Ｂ遺跡では１基の土器埋設遺構が検出され，壺形土器１個体が出土した。土器は，文様が菱形状になる山形押型文土器である。押型文土器は他遺跡の埋設土器より時期が古く，既知の県内の埋設土器の中では最も古いものになる。

これまでの発掘調査の例では，縄文時代早期の土器埋設遺構は薩摩半島側での検出例がなく，すべて大隅半島で検出されている。また，本遺跡のものを含めて，県内の土器埋設遺構はすべて早期後半のものと思われる。その中で高吉Ｂ遺跡の山形押型文土器が最も古く，次いで上野原遺跡の天道ヶ尾式・平栫式土器，城ヶ尾遺跡の塞ノ神Ａ式土器，鐘付遺跡の石坂上式土器が続き，その次に永吉天神段遺跡の塞ノ神Ｂ式土器となる。

第 12 表　県内の土器埋設遺構一覧表

遺　跡　名	遺構数	土器個数		土器型式	特記事項
		壺	鉢		
①　上野原遺跡	11	11	1	天道ヶ尾式土器　6 平栫式土器　6	遺跡内で標高の高い地点 周辺は遺物が少ない
②　城ヶ尾遺跡	4	3	1	塞ノ神Ａ式土器　4	遺跡内で標高の高い地点 周辺は遺物が少ない
③　鐘付遺跡	5	1	4	石坂上式土器 （塞ノ神Ａａ式土器）　5	遺跡内で標高の高い地点
④　高吉Ｂ遺跡	1	1	0	山形押型文土器　1	台地縁辺 西側に安楽川
⑤　永吉天神段遺跡	1	0	1	塞ノ神Ｂ式土器　1	検出地点西側は急な崖 周辺は遺物が少ない
合計	22	16	7		

器種に着目すると，壺形土器が 16 個と全体の約 72％を占める。また時期別に見ると，古い時期は壺形土器が多く埋設され，新しくなるにつれて深鉢が増加していく傾向がある。

本遺跡と各遺跡の埋設土器遺構を比較すると，共通点として遺構周辺では遺物の出土があまり見られないという点がある。これは土器埋設遺構の性格と関わる部分であると思われる。また，他の遺跡では遺跡内でも標高の高い地点で検出されている事例が多いが，本遺跡の遺構

は特に高い地点で検出されたというわけではない。ただ，周辺地形を考慮すると，遺構西側には急傾斜の崖があり，崖下から見ると標高の高い地点であるという見方もできる。これは高吉Ｂ遺跡の立地に似ている。

ここで問題となるのが，土器埋設遺構の性格である。上野原遺跡の土器埋設遺構の発見以来，それについては論じられてきている。

上野原遺跡の埋設土器については，八木澤一郎氏が，自然科学分析の結果より，棺・再葬墓・貯蔵具ではないと判断し，土器埋設遺構を含めた遺物出土希薄域を「特別な場」とし，祭祀を行う広場であったと述べている（八木澤 2003）。

また新東晃一氏は上野原遺跡・城ヶ尾遺跡の土器埋設遺構の立地は遺跡の中でも高所に位置し，埋設土器は精神的あるいは祭祀的行為で埋められたものであることが想定されるとしている（新東 2003）。

永吉天神段遺跡の土器埋設遺構の性格については，①埋設土器のサイズが小さく，棺・墓・貯蔵具としての機能を果たすのは難しいと考えられる。②遺構周辺に遺物が少ない。③周辺より標高の高い地点で検出された等，他の遺跡と共通する点があることから，上野原遺跡・城ヶ尾遺跡・鐘付遺跡と同様に，祭祀的行為の意味合いの強い遺構であったと思われる。

（２）集石

ここでは集石の各該当層ごとの分析と，形態分類別の分析を述べる。層位・形態分類については 57 ページを参照してもらいたい。

該当層ごとの分析

本遺跡の縄文時代早期の遺物包含層は，Ⅴ（ａ，ｂ）層，Ⅵ層である。集石もⅤ層，Ⅵ層上面で検出されているが，ここでは各層ごとについてまとめる。なおⅤ層検出の集石の中にはａ，ｂ層の，検出面の判断ができなかったものが２基あるが，Ⅴ層該当集石として取り扱う。

①Ⅴ層該当集石（全２基）

Ⅰ類集石１基，Ⅲ類集石１基の計２基である。どちらも集石が集中して検出された，遺跡東側の台地縁辺部から離れた遺跡中央部に近い地点で検出されている。

②Ⅴａ層該当集石（全３基）

Ⅱ類集石１基，Ⅲ類集石２基の計３基である。これらは遺跡中央部に近い地点から２基，遺跡西端から１基検出されている。

③Ⅴｂ層該当集石（全 47 基）

Ⅰ類集石１基，Ⅱ類集石 17 基，Ⅲ類集石 29 基の計 47 基である。Ⅴｂ層検出の集石は全体の 57％で，本遺跡の主体を占める。

掘り込みを持つものは１基で，それ以外は掘り込みを持たない。礫集中度が高いⅠ・Ⅱ類は，全体の約 22％，礫集中度の低いⅢ類は，全体の約 35％を占める。これらは，遺跡東側の持留川に近い台地縁辺部から多く検出されている。

④Ⅵ層上面該当集石（全 30 基）

Ⅰ類集石１基，Ⅱ類集石６基，Ⅲ類集石 23 基の計 30 基である。

掘り込みを持つものは１基で，それ以外は掘り込みを持たない。

礫集中度が高いⅠ・Ⅱ類は，全体の約９％，礫集中度の低いⅢ類は，全体の約 28％を占める。

第 13 表　各層・形態別集石遺構分類

	Ⅰ類集石	Ⅱ類集石	Ⅲ類集石	計
Ⅴ層	1 基（1.2%）	0 基（0.0%）	1 基（1.2%）	2 基（2.4%）
Ⅴａ層	0 基（0.0%）	1 基（1.2%）	2 基（2.4%）	3 基（3.7%）
Ⅴｂ層	1 基（1.2%）	17 基（20.7%）	29 基（35.4%）	47 基（57.3%）
Ⅵ層	1 基（1.2%）	6 基（7.3%）	23 基（28.0%）	30 基（36.6%）
計	3 基（3.7%）	24 基（29.3%）	55 基（67.1%）	82 基（100%）

形態分類別の分析

形態分類別の集計では，全 82 基中，Ⅰ類集石は３基（3.7％），Ⅱ類集石は 24 基（29.3％）Ⅲ類集石は 55 基（67.1％）である。本遺跡の集石のほとんどは，掘り込みを持たない，礫集中度の低い集石である。

Ⅰ類集石（３基）

集石の集中する 48 区以東にはなく，３基が遺跡西部・中央部・東部に分散して検出されている。

Ⅱ類集石（24 基）

遺跡東端部に集中域が見られ，22 基が検出された。中央部に２基検出されているが，西部では１基も検出されなかった。

Ⅲ類集石（55 基）

44 区以東の遺跡東部に 41 基，中央部に６基，西部に８基検出された。遺跡東部に集中している。遺跡中央部，西部でも検出されたが，基数は少ない。

本遺跡の集石は，持留川に面した遺跡東側の台地縁辺部に集中して検出され，川からの距離が離れるにつれて減少する傾向にある。また，集石は多数検出されたものの，第２地点の調査区内からは住居跡は１軒も検出されていない。これらのことから，本遺跡第２地点は住居が周辺の調査区外に構築されていたか，または住居を構築しないキャンプサイト的な役割を果たしていた可能性が考えられる。ただし，住居跡が薩摩火山灰層まで掘り込まれていなかった場合，遺構埋土と検出層との相違がほとんどみられず，検出できなかった可能性がある。

２　遺物

（１）土器

土器分類について

ここでは縄文時代早期・後期の全17類の土器分類のうち，型式不明の土器を一括したⅫ・ⅩⅢ・ⅩⅦ類を除いた14分類について述べる。

Ⅰ類

前平式土器に比定される土器群である。前平式土器は，鹿児島市前平遺跡出土土器を標識とする土器である。角筒形と円筒形，レモン形の３種類が存在する。本遺跡ではレモン形は出土していない。器壁は薄く，貝殻条痕を施した後，貝殻腹縁刺突により施文を行う。口縁部下には楔形突帯を貼り付ける。この土器はほぼ遺跡東部から出土している。他の型式と比較して出土数は多い。

さらに細分すると，66～70，72・73，75～85は小牧３Ａタイプに比定される土器群である。楔形突帯を密に貼り付け，貝殻刺突文も密に施文される。前平式土器と後に続く吉田式土器の要素を併せ持つ。また，86～90は札ノ元Ⅶ類土器に比定される土器群である。札ノ元Ⅶ類土器は，宮崎市札ノ元遺跡において多数出土している土器で，二重施文を行わず，シャープさに欠ける楔形突帯を貼り付ける。71・74は加栗山式土器に比定される土器である。

Ⅱ類

石坂式土器に比定される土器群である。石坂式土器は，南九州市石坂上遺跡出土土器を標識とする土器である。口縁部は外反するものと直行するものとがあり，胴部には綾杉文が施される。本遺跡での出土数は少ない。

Ⅲ類

下剥峯式土器に比定される土器群である。下剥峯式土器は，西之表市下剥峯遺跡出土土器を標識とする土器である。口縁部は直行またはわずかに内湾し，瘤状突起が付くものもある。文様は口縁部から底部まで貝殻刺突文のみで構成される。本報告書では，施文や器面調整の差異により，さらに６類に細分している。本遺跡では多数出土し，主体となる土器型式の１つである。出土地点も遺跡全体に広がっている。

Ⅳ類

桑ノ丸式土器に比定される土器群である。桑ノ丸式土器は，霧島市溝辺町桑ノ丸遺跡出土土器を指標とする土器である。口縁部は直行ないし内湾し，口縁部内面が肥厚するものが多い。文様は短い貝殻条痕や沈線により羽状文や流水文を施す。全域で出土しているが遺物数は少ない。

Ⅴ類

押型文土器に比定される土器群である。押型文土器は木の軸に楕円や山形の文様を彫り，土器の表面にそれを回転させて施文する。東北地方から九州まで，日本の東西へ分布圏が拡大した広域な土器型式である。本遺跡では山形押型文と楕円押型文があり，東部と西部で少数出土している。

Ⅵ類

手向山式土器に比定される土器である。手向山式土器は，伊佐市手向山遺跡出土土器を指標とする土器で，九州における押型文土器の終末型式である。胴部で内側に屈曲し，大きく外反しながら口縁部に至る。平底を呈するものが多い。文様は押型文と，ミミズ腫れ突帯や沈線文などそれ以外の施文が施される。本遺跡では西部で１個体に接合できる破片が出土している。

Ⅶ類

妙見式土器に比定される土器である。妙見式土器は，宮崎県えびの市妙見遺跡出土土器を指標とする土器である。口縁に横位の突帯を数条巡らせ，縄文を押圧する。本遺跡では西部で口縁部小片が２個出土している。

Ⅷ類

平栫式土器に比定される土器である。平栫式土器は霧島市平栫貝塚出土土器を指標とする土器である。口縁部は外反し，やや肥厚する。外面に連点文や凹線による羽状文や山形文，波状文などを施し，その間に刻目突帯を巡らす。本遺跡では東部で小片が２個出土している。

Ⅸ類

塞ノ神式土器に比定される土器群である。塞ノ神式土器は伊佐市菱刈町塞ノ神遺跡出土土器を指標とする土器である。塞ノ神式土器は，河口貞徳氏により塞ノ神Ａ（ａ，ｂ）・Ｂ（ｃ，ｄ）式土器に細分され，南九州における縄文時代早期土器を代表する土器型式の一つである。塞ノ神Ａ式土器は撚糸文を，塞ノ神Ｂ式土器は貝殻文を施すものとに大別される。本報告書では，施文や器面調整の差異により，塞ノ神Ａ式土器を１，塞ノ神Ｂ式土器を８，計９類に細分している。本遺跡では多数出土し，主体となる土器型式の１つである。出土地点も遺跡全体に広がっている。

Ⅹ類

苦浜式土器に比定される土器群である。苦浜式土器は，中種子町苦浜貝塚出土土器を指標とする土器である。口縁下から突帯を垂下させ，刻み目を施す。底部は弱い張り出しを持つ。本遺跡では東部でのみ出土している。

Ⅺ類

条痕文土器に比定される土器である。259は，本遺跡最大の復元土器である。平底だが接地面が小さく，尖底土器に近い器形をしている。小山タイプに類似している。小山タイプの土器は，鹿児島市宮之浦町小山遺跡出土土器を標識とする土器である。東部で多く出土し，西部でも少数出土している。

ⅩⅣ類

岩崎上層式土器に比定される土器である。岩崎上層土

器は，錦江町岩崎遺跡出土土器を標識とする土器である。同時期の指宿式土器との類似性が認められるが，口縁部の刻みがなく，頸部に平行曲線文が施される。本報告書掲載地点での出土は３点のみで，本遺跡第１地点で比較的多く出土した。

ＸＶ類

北久根山式土器に比定される土器である。北久根山式土器は，熊本市北久根山遺跡出土土器を標識とする土器である。口縁部が肥厚し，そこに文様が施される。深鉢形が多数である。本遺跡では中央部で７点出土した。

ＸⅥ類

中岳Ⅱ式土器に比定される土器である。中岳Ⅱ式土器は，曽於市末吉町中岳洞穴出土土器を標識とする土器である。口縁部を肥厚させ,そこに２～３条の凹線を施す。胴部でくの字に内側に屈曲し，頸部は外反しながら口縁部に至る。本遺跡では中央部で 10 点出土した。

札ノ元Ⅶ類土器について

86 ～ 90 は札ノ元Ⅶ類土器に比定される土器群である。黒川忠広氏は，加栗山式土器や吉田式土器に類似するが，二重施文を行わず，シャープさに欠ける楔形突帯を貼り付けるなどの相違点に着目，札ノ元Ⅶ類土器の集成を行い，南九州貝殻文系土器における地域的な特徴を示す事例ではないかと述べている。(黒川 2004)。

その後の都城志布志道路建設，東九州自動車道建設に伴う発掘調査により，志布志湾沿岸部において札ノ元Ⅶ類土器が出土している遺跡が増加している。

高吉Ｂ遺跡では１点が報告されている。口縁下には貝殻腹縁刺突が施され，器面調整は左上がりの貝殻条痕である。口唇部には短沈線状の刻みが斜位に施される。「縦に２段楔形突帯が施されているがシャープさはみられず,器面の色調が淡く胎土に透明な鉱物を含むことから，宮崎地方との関係が窺える。」としている。

次五遺跡でも出土しているとの報告があるが，報告書未刊行のため詳細は不明である。

永吉天神段遺跡では６点が出土している。どれも横位の貝殻条痕による器面調整を行う。楔形突帯が認められる土器は２点で，どちらもシャープさに欠ける楔形突帯が貼り付けられる。

黒川氏は，札ノ元Ⅶ類土器と同時期に東南九州で盛行していた別府原タイプの土器との比較を行い，両者がほぼ同時期であることや類似点が多数指摘できること，前平式から吉田式土器までは円筒・角筒・レモン形の器形が認められるが，札ノ元Ⅶ類・別府原タイプ土器は円筒形の器形しか出土していないことから，札ノ元Ⅶ類土器は，別府原タイプを主体とする集団と南九州貝殻文系土器を有する集団とが接触することで作り出されたと考えられ，それにより，南九州貝殻文系土器の主な分布圏と東南九州とでは異なった様相がみられ，地域性が存在するとしている（黒川 2004)。

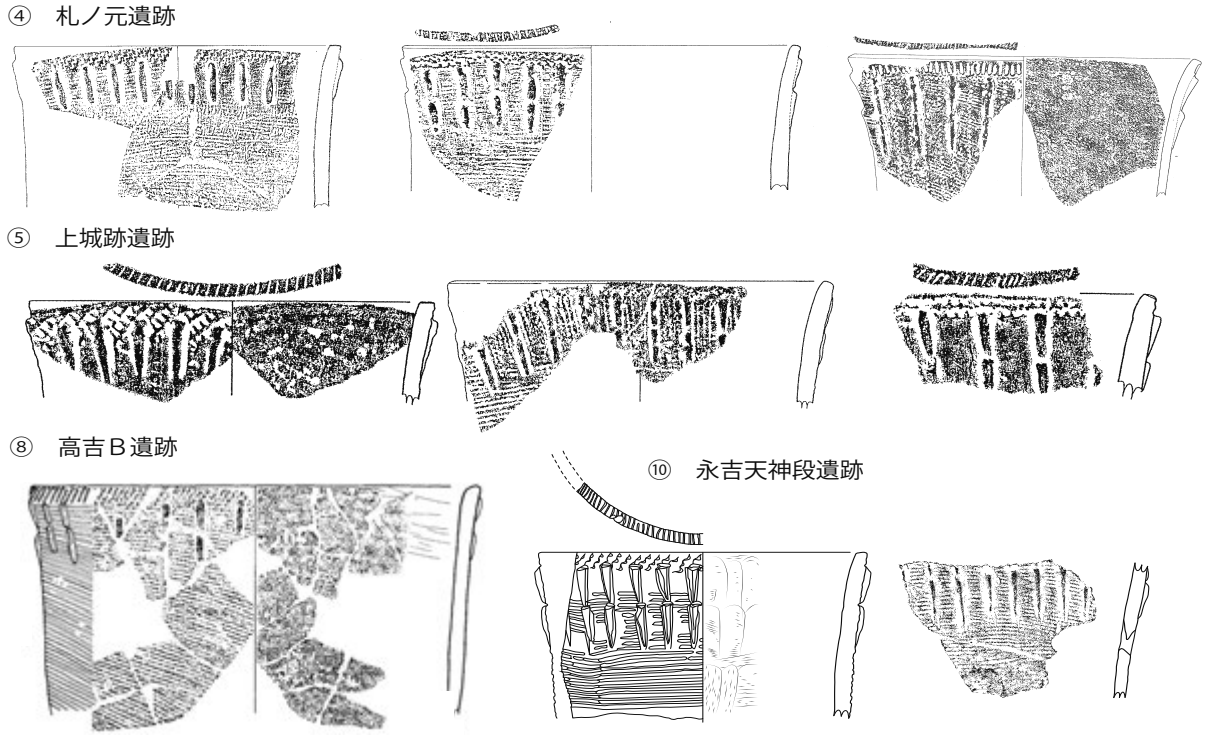
一方で，札ノ元Ⅶ類土器が出土する東南九州地域内での土器伝播の可能性について考察する。

札ノ元Ⅶ類土器出土遺跡地図では，鹿児島・宮崎両県境付近に札ノ元Ⅶ類土器が検出されていない空白部があることが分かる。ここには標高 900m を超える鰐塚山地の山々が連なっており，峻険な地形である。また，宮崎県日南市の上城跡遺跡は日向灘に比較的近い場所に立地している。同様に，高吉Ｂ・次五・永吉天神段遺跡は志布志湾岸に近接している。これらのことから，札ノ元Ⅶ類土器が急峻な鰐塚山地を迂回し，日向灘・志布志湾の海岸沿いをルートにして伝播した可能性が考えられる。そして，現在までの札ノ元Ⅶ類土器の出土量と別府原タイプとの類似性から，鹿児島側からの北上ルートより宮崎側からの南下ルートの可能性が高いと考える。

第 14 表　札ノ元Ⅶ類土器出土遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地
1	天ヶ城跡	宮崎県宮崎市高岡町大字内３００３－５６
2	権現原第２遺跡	宮崎県宮崎市清武町船引字安ヶ野
3	杉木原遺跡	宮崎県宮崎市清武町大字今泉字杉木原
4	札ノ元遺跡	宮崎県宮崎市田野町字札ノ元
5	上城跡遺跡	宮崎県日南市楠原字北平
6	宮田遺跡	鹿児島県曽於市大隅町月野岩元宮田
7	高篠坂遺跡	鹿児島県曽於市財部町南俣高篠坂
8	高吉Ｂ遺跡	鹿児島県志布志市志布志町安楽字宇都上
9	次五遺跡	鹿児島県志布志市有明町野井倉字次五
10	永吉天神段遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町永吉字天神

第 141 図　札ノ元Ⅶ類土器出土遺跡地図



第 142 図　各遺跡出土の札ノ元Ⅶ類土器（縮尺不同）

（２）石器

石器の器種別数と割合

本遺跡の縄文時代早期石器の器種別割合は以下のとおりである。

第 15 表　縄文時代早期石器の器種別数と割合

磨石	65（34.6%）	磨製石斧	8（4.3%）	石錐	3（1.6%）
石鏃	42（22.3%）	石核	6（3.2%）	剥片	3（1.6%）
石皿	24（12.8%）	石匙	4（2.1%）	敲石	3（1.6%）
削器・掻器類	10（5.3%）	二次加工剥片	4（2.1%）	その他	5（2.7%）
打製石斧	8（4.3%）	尖頭状石器	3（1.6%）		

石皿，磨石・敲石等の，調理具としての石器の比率が高い。集石と近接した位置に石皿が配置され，その脇に磨石が置かれていたものもあり，調理施設と調理道具のセットとして考えられる例である。

黒曜石製石器の産地割合

第 16 表　黒曜石製石器別の産地割合

	姫島	上青木・桑ノ木津留	針尾・淀姫	三船	日東・五女木	計
打製石鏃	4（17.4%）	2（8.7%）	7（30.4%）	0（0.0%）	1（4.3%）	14
二次加工剥片	1（4.3%）	0（0.0%）	0（0.0%）	1（4.3%）	1（4.3%）	3
微小剥離痕剥片	1（4.3%）	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）	1
削器・掻器類	0（0.0%）	1（4.3%）	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）	1
石核	1（4.3%）	2（8.7%）	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）	3
石錐	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）	0（0.0%）	1（4.3%）	1
計	7（30.4%）	5（21.7%）	7（30.4%）	1（4.3%）	3（13.0%）	23

第 16 表は黒曜石製石器の産地割合である。姫島産，針尾・淀姫産の黒曜石がそれぞれ７点，30.4%である。鹿児島・熊本の上青木・桑ノ木津留，日東・五女木，三船産が合計９点，39.1%である。比較的近距離にある鹿児島北部・熊本南部産の黒曜石より，遠隔地の黒曜石を多く使用しており，当時の広範な黒曜石流通の様子が窺える。

引用・参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000『上野原遺跡（第 10 地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（27）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001『上野原遺跡（第 10 地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（28）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2003『城ヶ尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（60）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2013『船迫遺跡・高吉Ｂ遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（180）

肝付町教育委員会 2012『鐘付遺跡』肝付町埋蔵文化財発掘調査報告書（12）

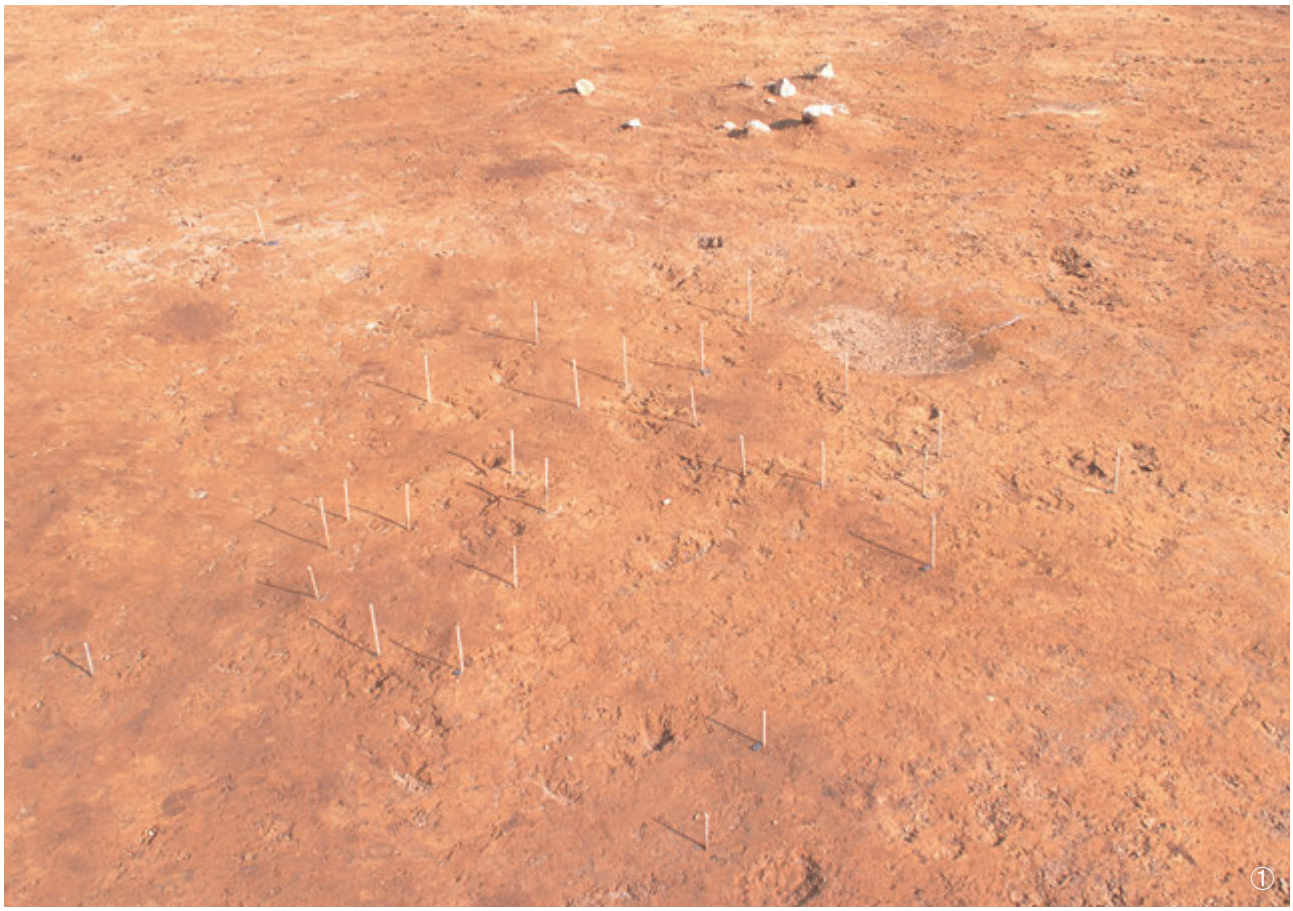
八木澤一郎 2003「上野原遺跡第 10 地点検出の『環状遺棄遺構』について」『研究紀要 縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

新東晃一 2003「縄文時代早期の壺形土器出現の意義」『研究紀要 縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

黒川忠広 2004「南九州貝殻文形土器に見られる地域性について」『研究紀要 縄文の森から』第２号 鹿児島県立埋蔵文化財センター

写　真　図　版

① C～F－50～53区 X層完掘状況　② G－50～53区 X層遺物出土状況



① 第１礫群と第２ブロック 遺物出土状況（西から）　② 第４ブロック 遺物出土状況（南西から）

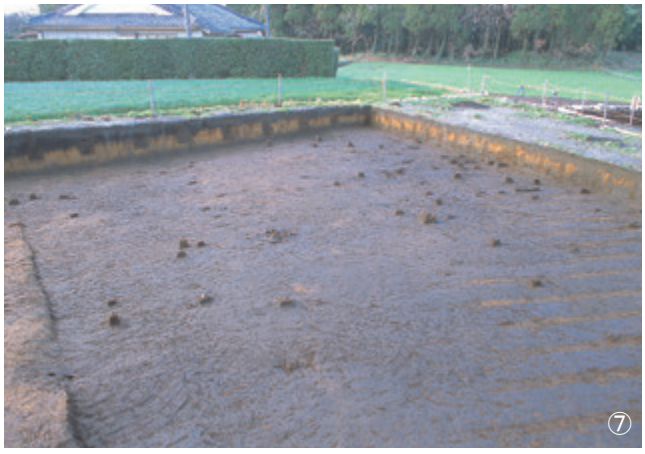
① 第１礫群（東から）　② 敲石出土状況（15）　③ 台形石器出土状況（16）　④ ナイフ形石器出土状況（20）
⑤ 槍先形尖頭器出土状況（25）　⑥ Ｈ・Ｉ－40・41 区 Ｘ層完掘状況（北から）
⑦ Ｇ－23・24 区 Ｘ層完掘状況（南東から）　⑧ Ｇ－23 区 削器・掻器類出土状況（45）

① G～Ⅰ－48～51区 Ⅴb層遺物出土状況（西から）　② G～Ⅰ－48～51区 Ⅵ層上面完掘状況（西から）

① Ⅰ・Ｊ－49～51 区境 Ⅲｂ～Ⅵ層上面の土層断面と集石群（南西から）　② 石匙出土状況（359）
③ 石皿出土状況（443）　④ 棒状礫出土状況（465）　⑤ 打製石斧出土状況（379）

図版６　縄文時代早期の調査

① 磨製石斧出土状況（484）　② 集石 64 号周辺の遺物出土状況　③ 磨石・石皿出土状況（419・445）
④ 集石 61・62 号周辺の遺物出土状況　⑤ Ｇ－ 44 ～ 46 区　Ｖ層遺物出土状況　⑥ 集石 65・66 号周辺の遺物出土状況　⑦ Ｇ～Ｉ－ 36 ～ 40 区　Ｖ層遺物出土状況　⑧ Ｇ～Ｊ－ 40 ～ 43 区　Ｖ層遺物出土状況

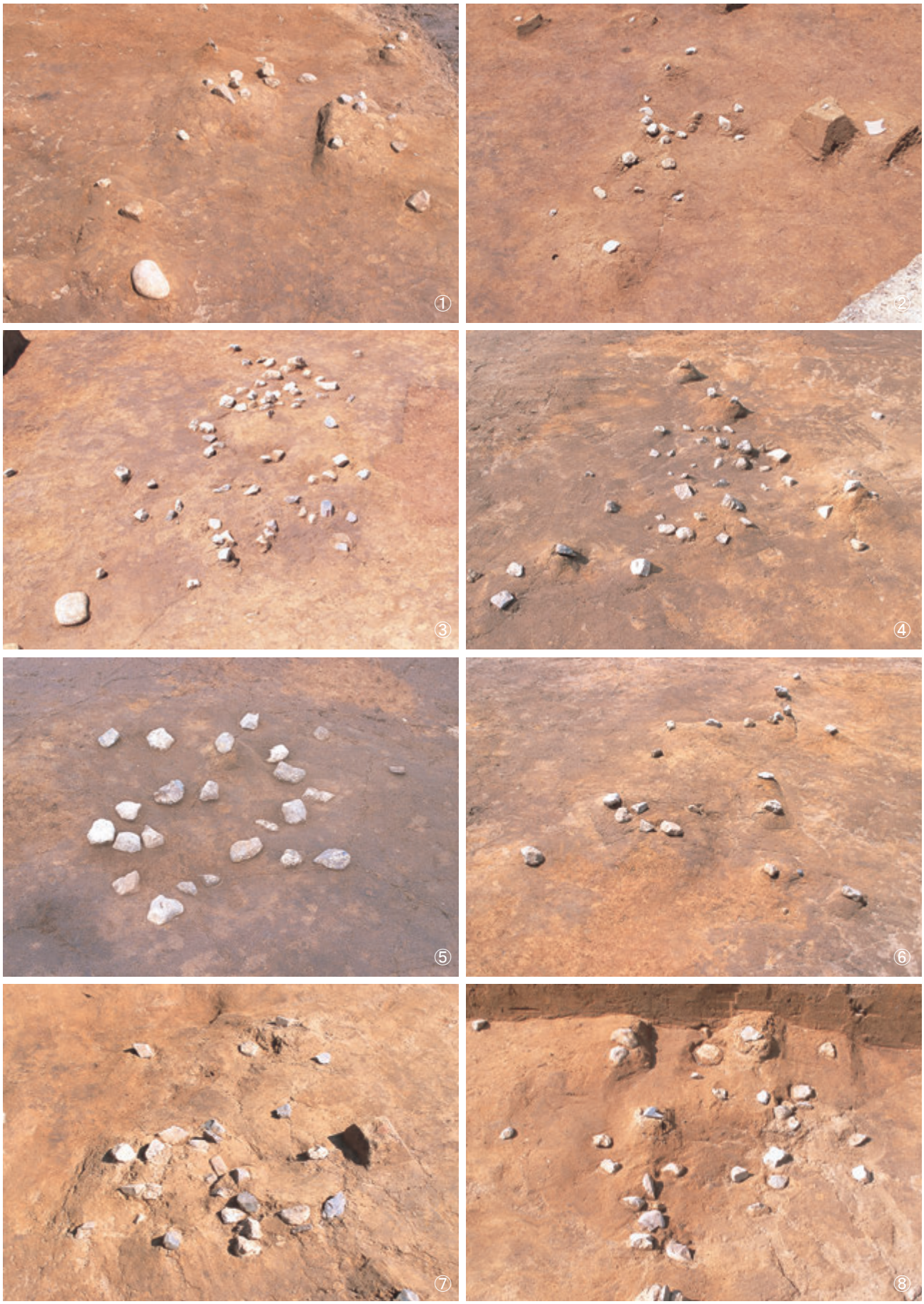


① Ｈ－41 区 Ⅵ層土器出土状況（102）　② Ｇ・Ｈ－36 ～ 38 区 Ⅴ層遺物出土状況　③ Ｈ・Ｉ－36 ～ 38 区 集石 70・71 号周辺の遺物出土状況　④ Ｊ～Ｌ－39・40 区 Ⅵ層上面完掘状況　⑤ Ｋ・Ｌ－39 区 Ⅵ～Ⅹ層の土層断面（西から）　⑥ Ｉ－34 区 Ⅵ層遺物出土状況　⑦ Ｋ・Ｌ－33・34 区 集石 73 号周辺の遺物出土状況
⑧ Ｄ・Ｅ－30 ～ 34 区 Ⅵ層上面完掘状況

① Ｈ・Ｉ－23～26区　Ⅴ層遺物出土状況と地割れの様子（東から）　② Ｈ－28～30区　Ⅵ層上面完掘状況（西から）
③ Ｄ・Ｅ－20～22区　Ⅴ層遺物出土状況（東から）　④ 石鏃出土状況（504）　⑤ 石皿出土状況（518）

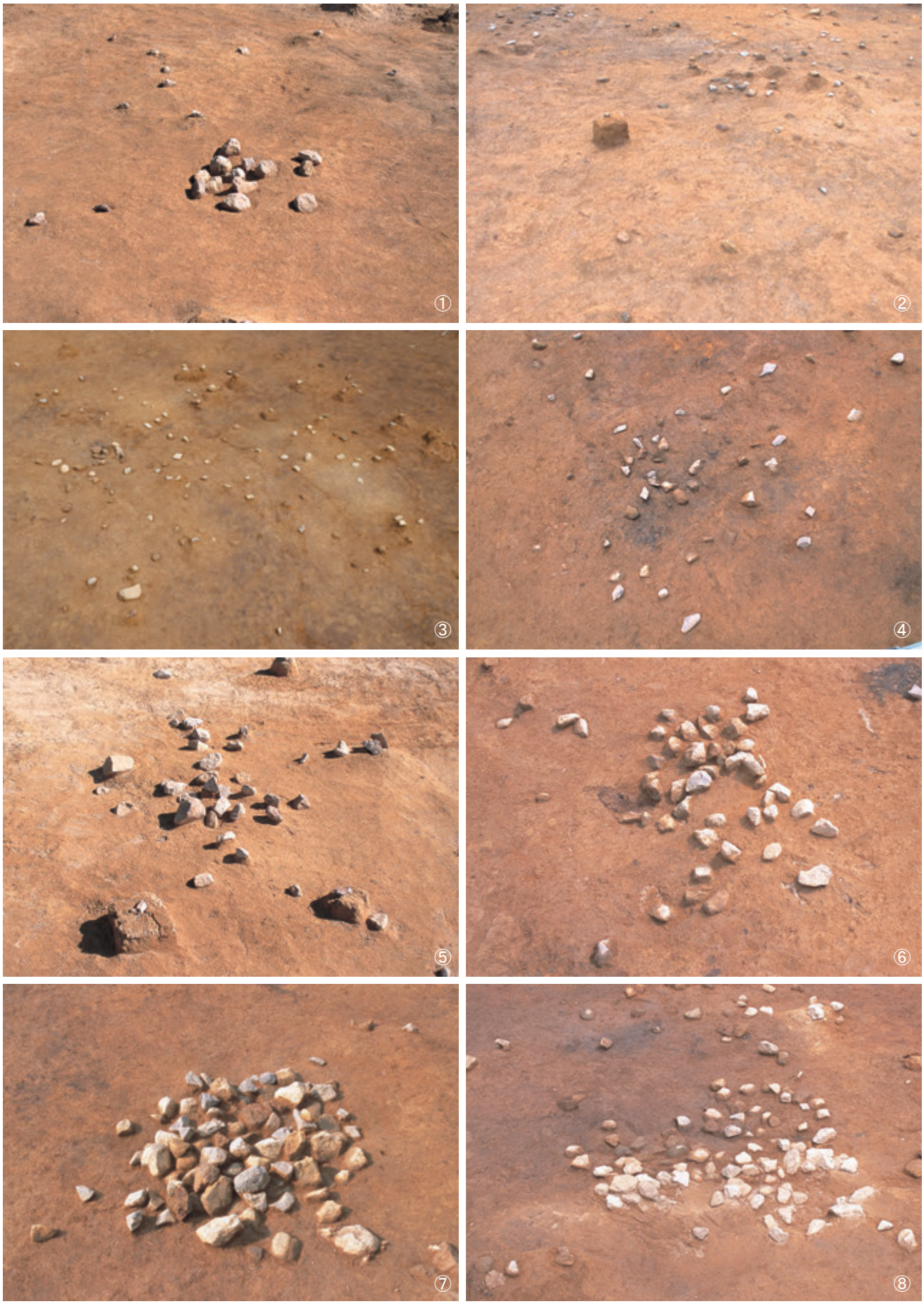
① 土器埋設遺構　② 集石１号　③ 集石２号　④ 集石３号　⑤ 集石４号

図版10　縄文時代早期の調査



① 集石５号　② 集石６号　③ 集石７号　④ 集石８号　⑤ 集石９号　⑥ 集石 10 号
⑦ 集石 11 号　⑧ 集石 12 号

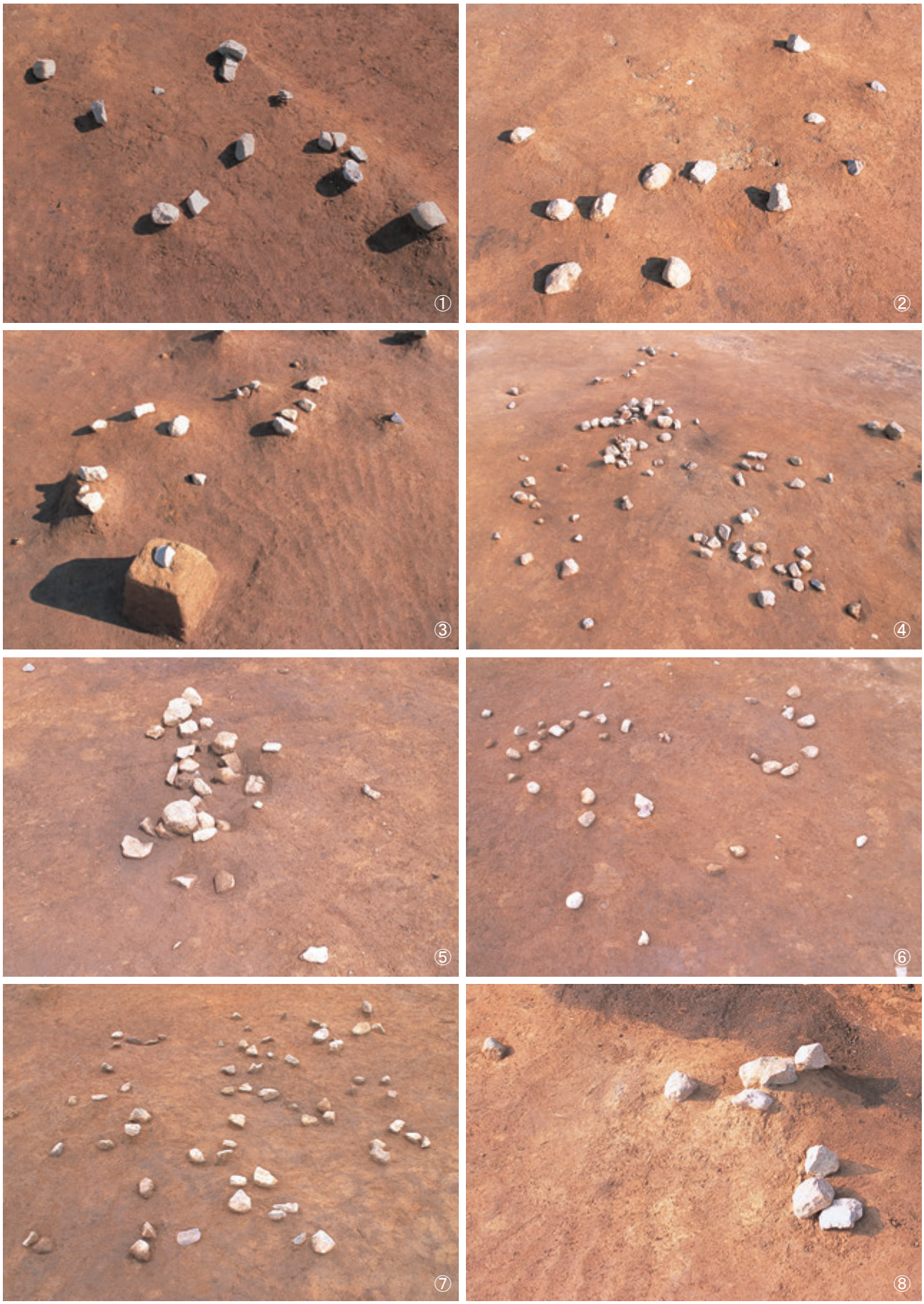
① 集石 13 号　② 集石 14 号　③ 集石 15 号　④ 集石 16 号　⑤ 集石 17 号
⑥ 集石 17 号（遠景）　⑦ 集石 18 号　⑧ 集石 19 号



① 集石 20 号　② 集石 21 号　③ 集石 22 号　④ 集石 23 号　⑤ 集石 24 号　⑥ 集石 25 号
⑦ 集石 26 号　⑧ 集石 27 号

① 集石 29 号　② 集石 30 号　③ 集石 31 号　④ 集石 26 号(右)・32 号（左）　⑤ 集石 33 号
⑥ 集石 34 号　⑦ 集石 35 号　⑧ 集石 36 号

① 集石 37 号　② 集石 38 号　③ 集石 39 号　④ 集石 40 号　⑤ 集石 41 号　⑥ 集石 42 号
⑦ 集石 43 号　⑧ 集石 44 号(右)・45 号(左)

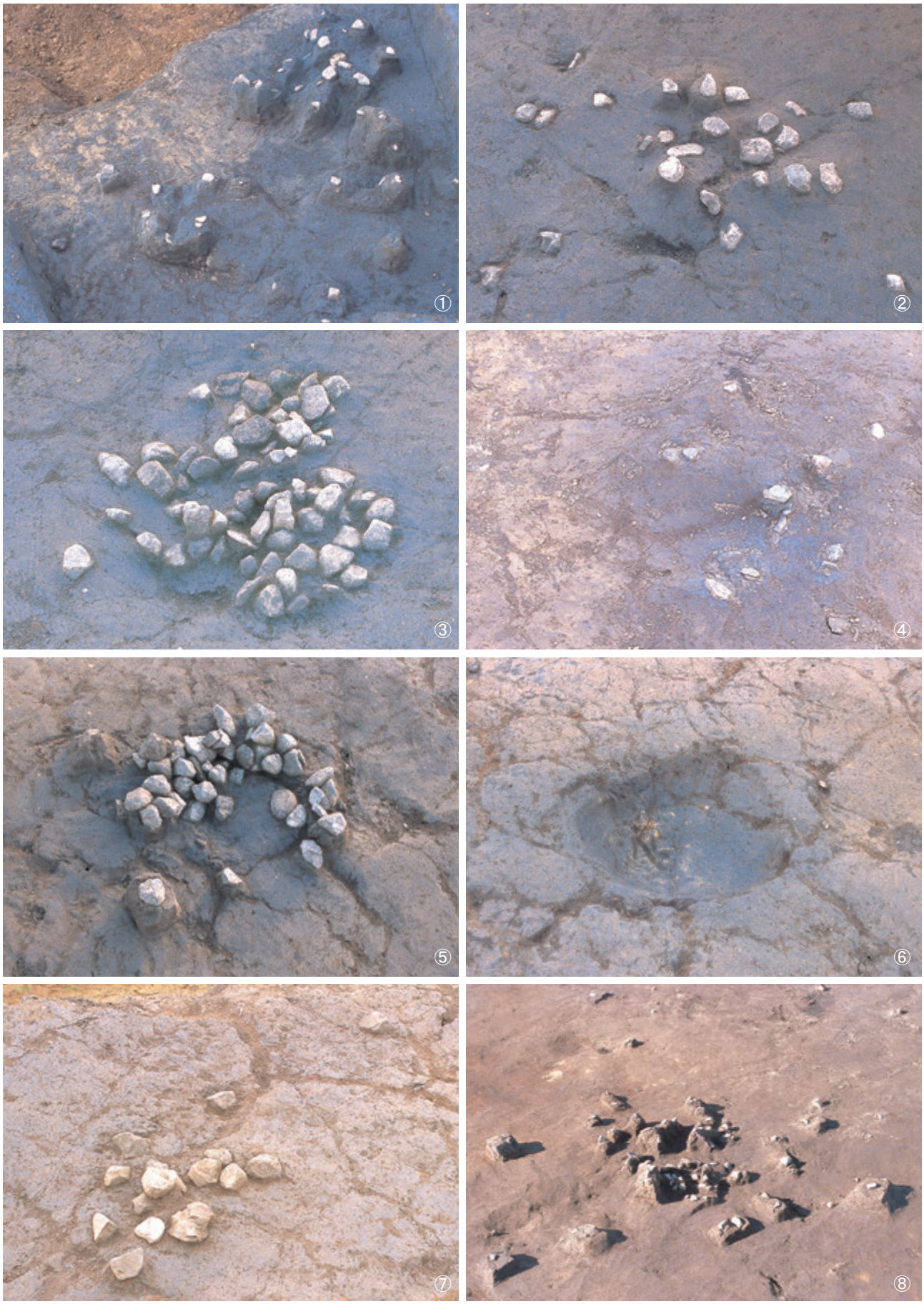


① 集石 46 号　② 集石 47 号　③ 集石 48 号　④ 集石 49 号　⑤ 集石 50 号　⑥ 集石 51 号
⑦ 集石 52 号　⑧ 集石 53 号

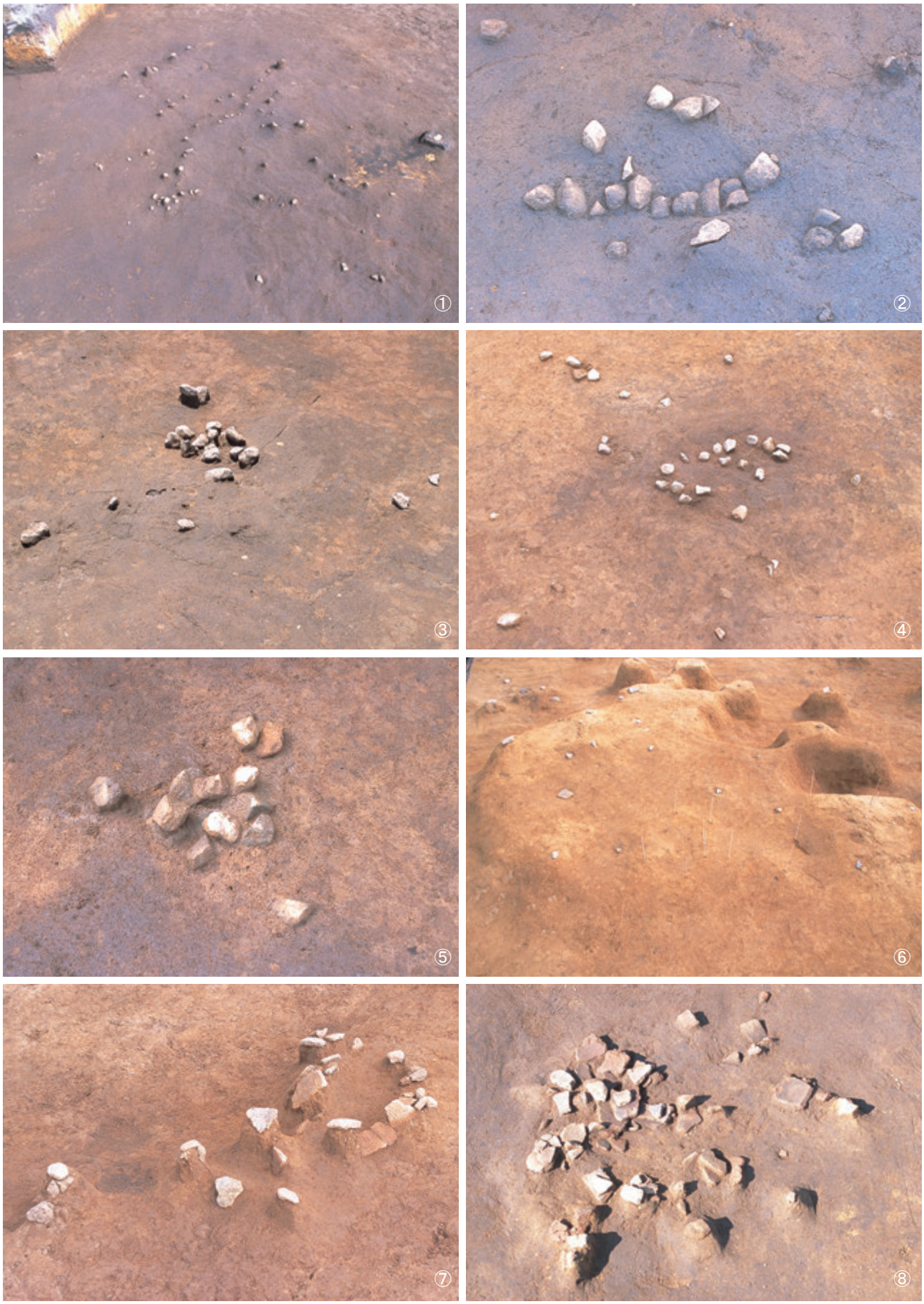
図版16　縄文時代早期の調査

① 集石 54 号　② 集石 55 号　③ 集石 56 号(奥)・57 号(前)　④ 集石 58 号　⑤ 集石 59 号
⑥ 集石 60 号　⑦ 集石 61 号　⑧ 集石 62 号

① 集石 63 号　② 集石 64 号　③ 集石 65 号　④ 集石 66 号　⑤ 集石 67 号　⑥ 集石 68 号
⑦ 集石 69 号　⑧ 集石 70 号(左)・71 号(右)



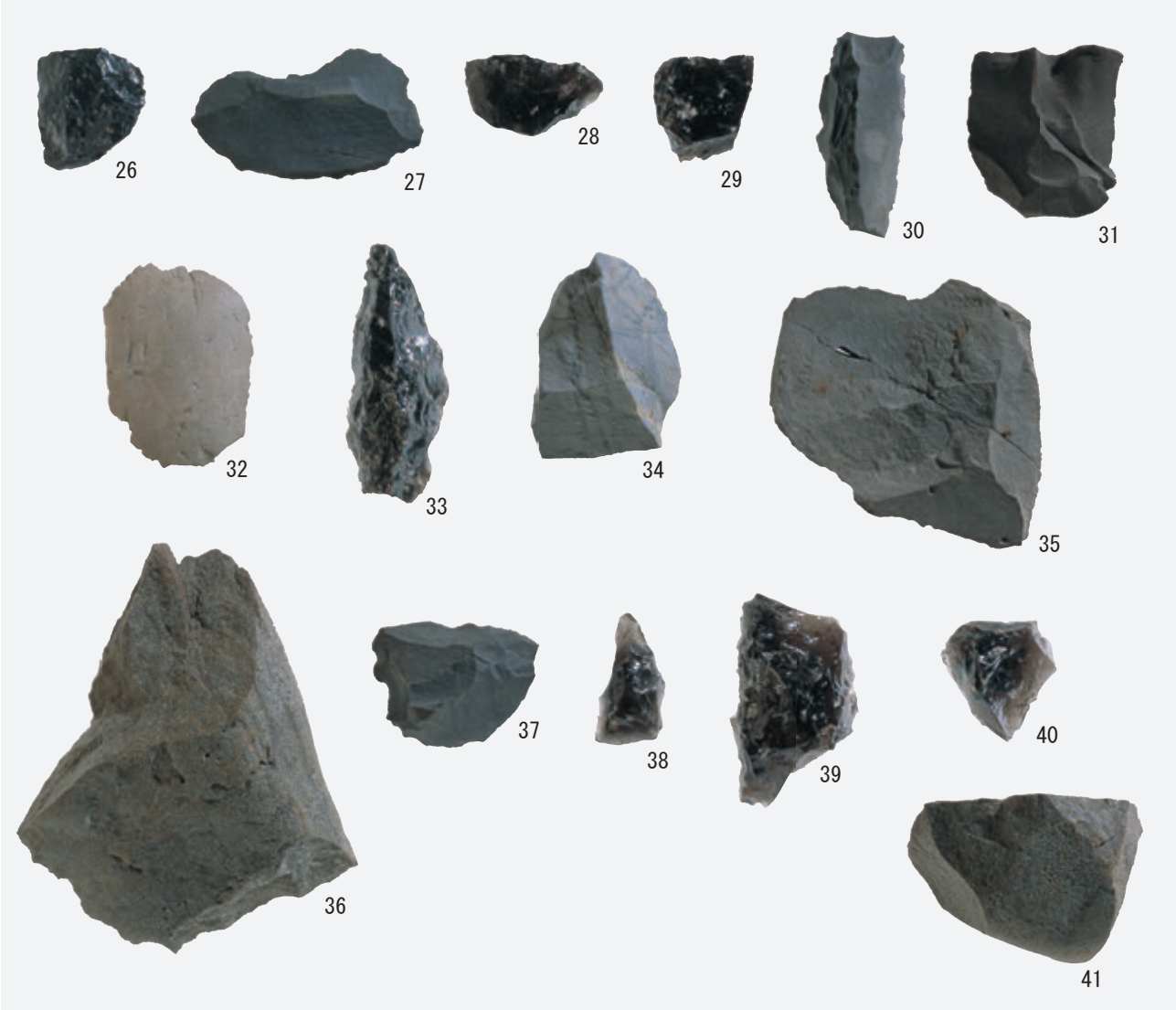
① 集石 72 号　② 集石 73 号（１面目）　③ 集石 73 号（２面目）　④ 集石 74 号　⑤ 集石 75 号
⑥ 集石 75 号完掘　⑦ 集石 76 号　⑧ 集石 77 号



① 集石 78 号　② 集石 79 号　③ 集石 80 号　④ 集石 81 号　⑤ 集石 82 号
⑥ Ｊ－52 区 黒曜石砕片出土状況　⑦ 土器出土状況（167）　⑧ 土器出土状況（257）

図版20　旧石器時代出土石器（1）

図版21　旧石器時代出土石器（2）



図版22　縄文時代早期出土土器（1）

46

86

102

259

167

図版23　縄文時代早期出土土器（2）

203

302

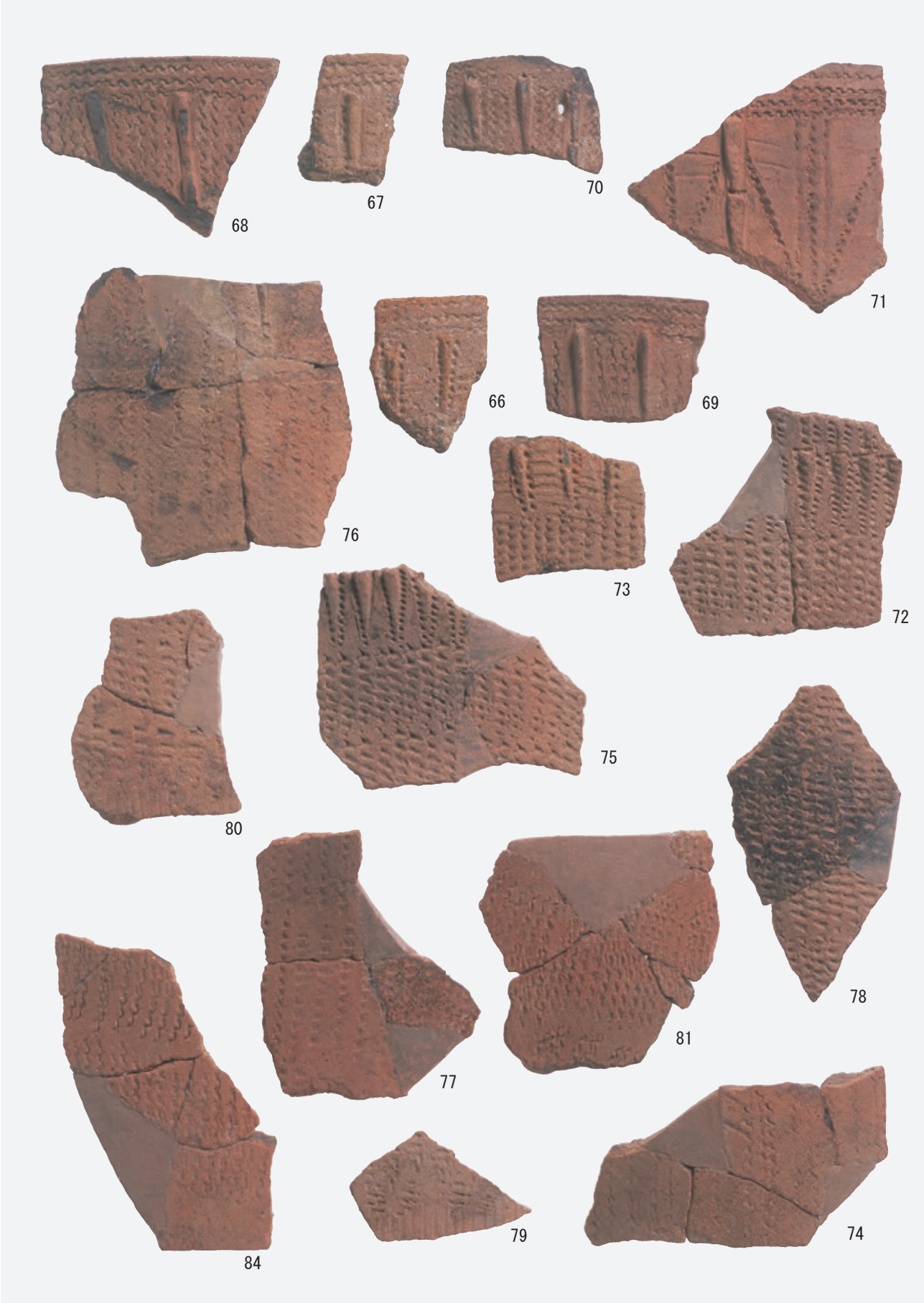
279

209

229
227
226
228
225

図版24　縄文時代早期出土土器（3）

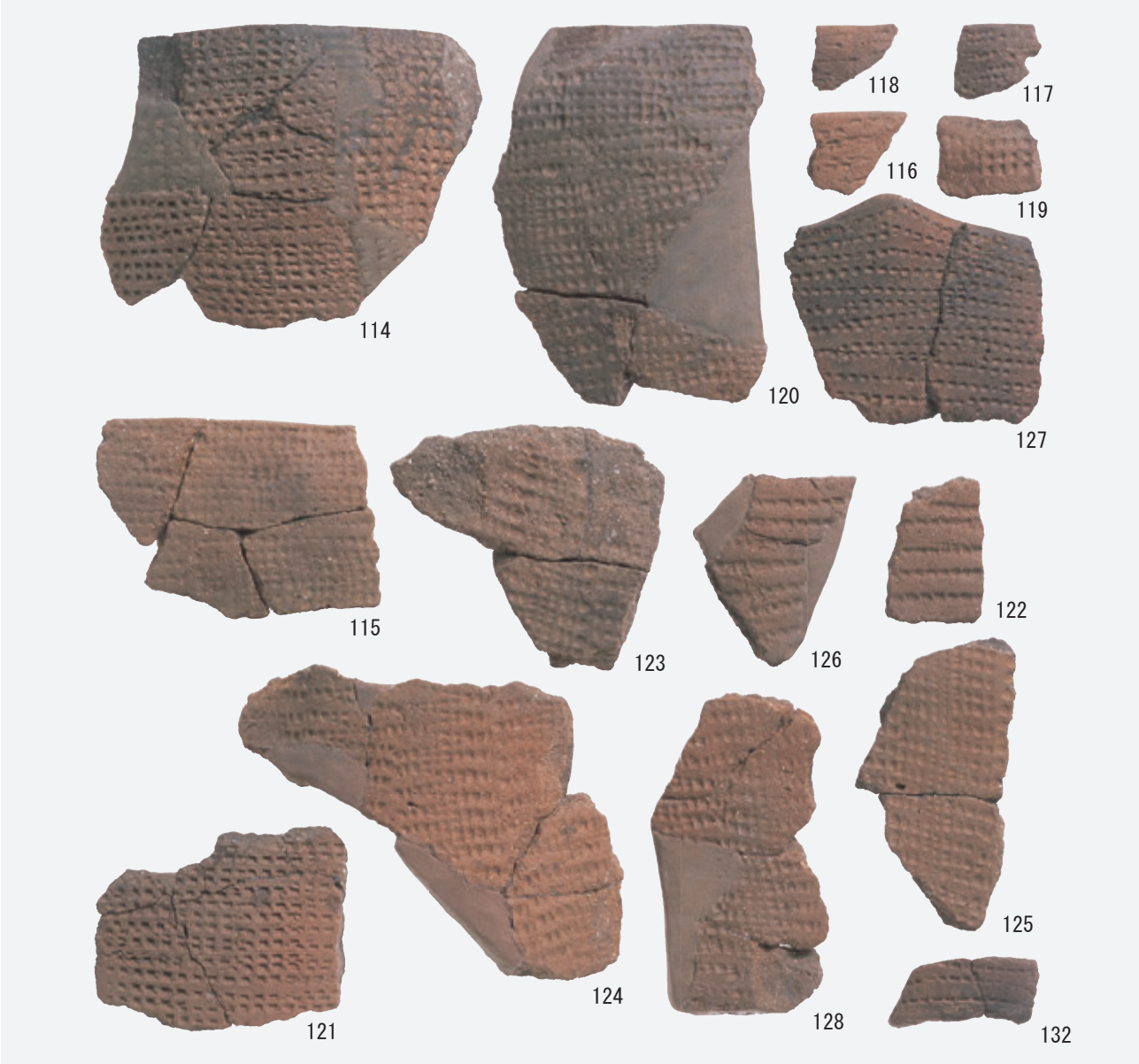
図版25　縄文時代早期出土土器（4）



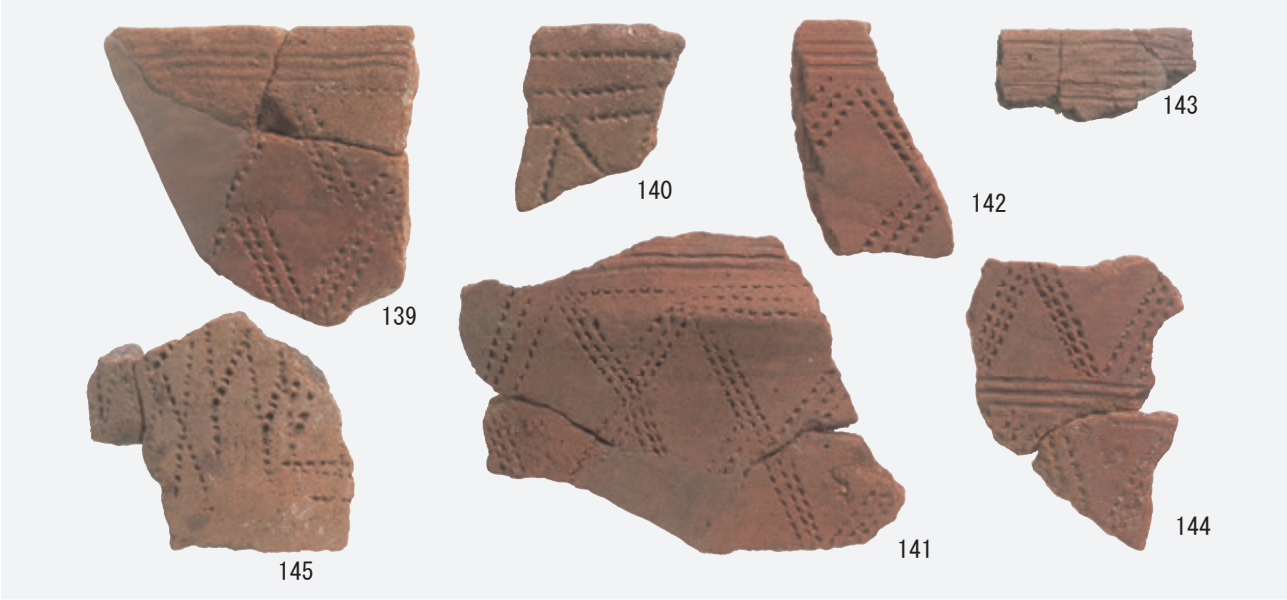
図版26　縄文時代早期出土土器（5）

図版27　縄文時代早期出土土器（6）

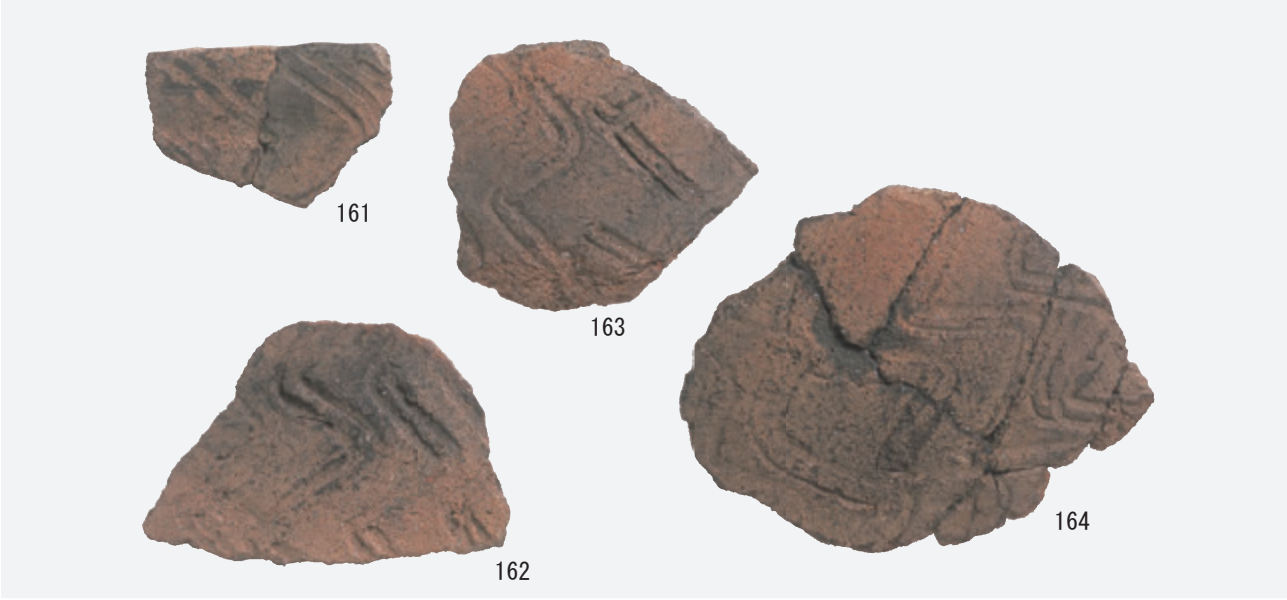
図版28　縄文時代早期出土土器（7）



図版29　縄文時代早期出土土器（8）

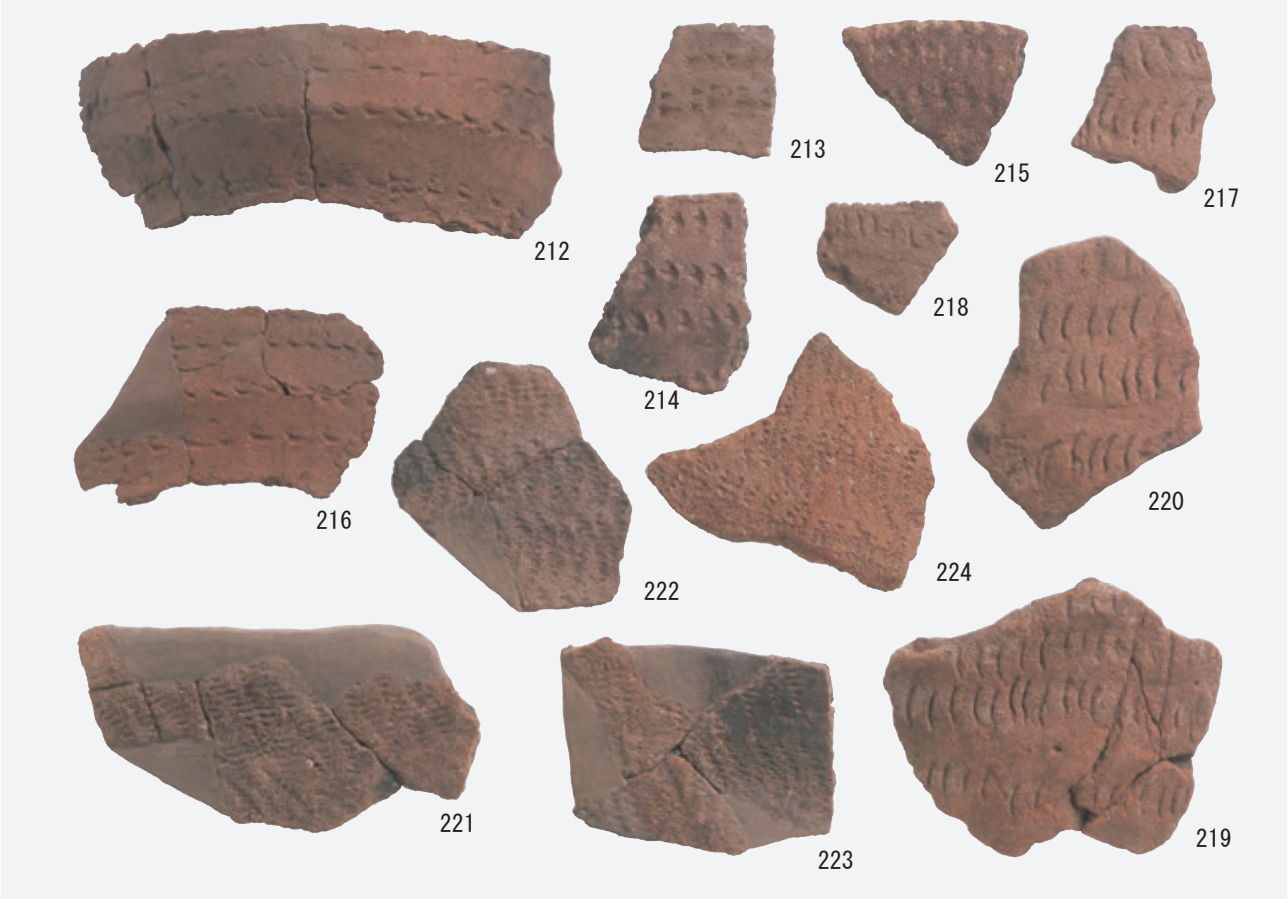


図版30　縄文時代早期出土土器（9）



図版31　縄文時代早期出土土器（10）

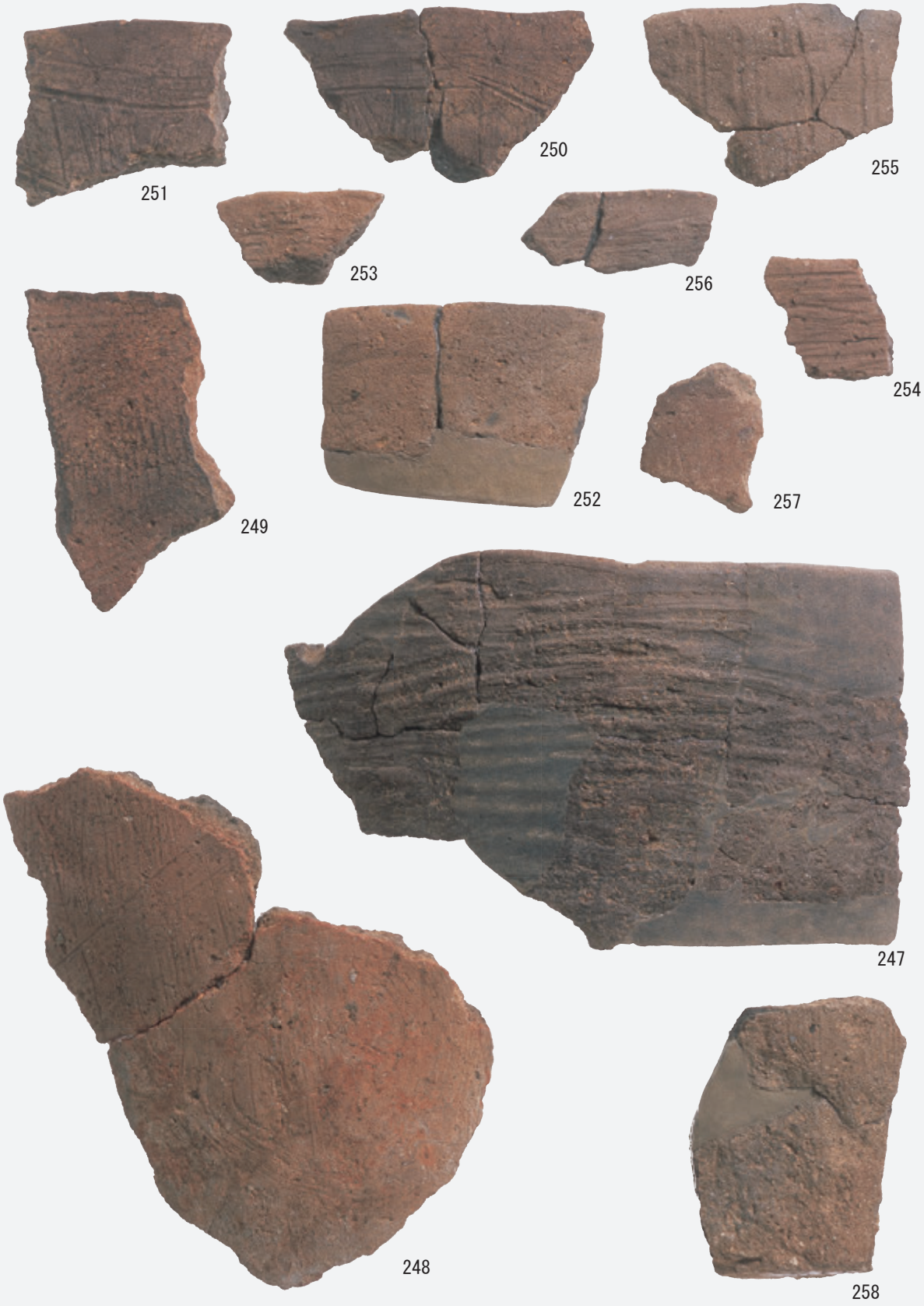
図版32　縄文時代早期出土土器（11）



図版33　縄文時代早期出土土器（12）

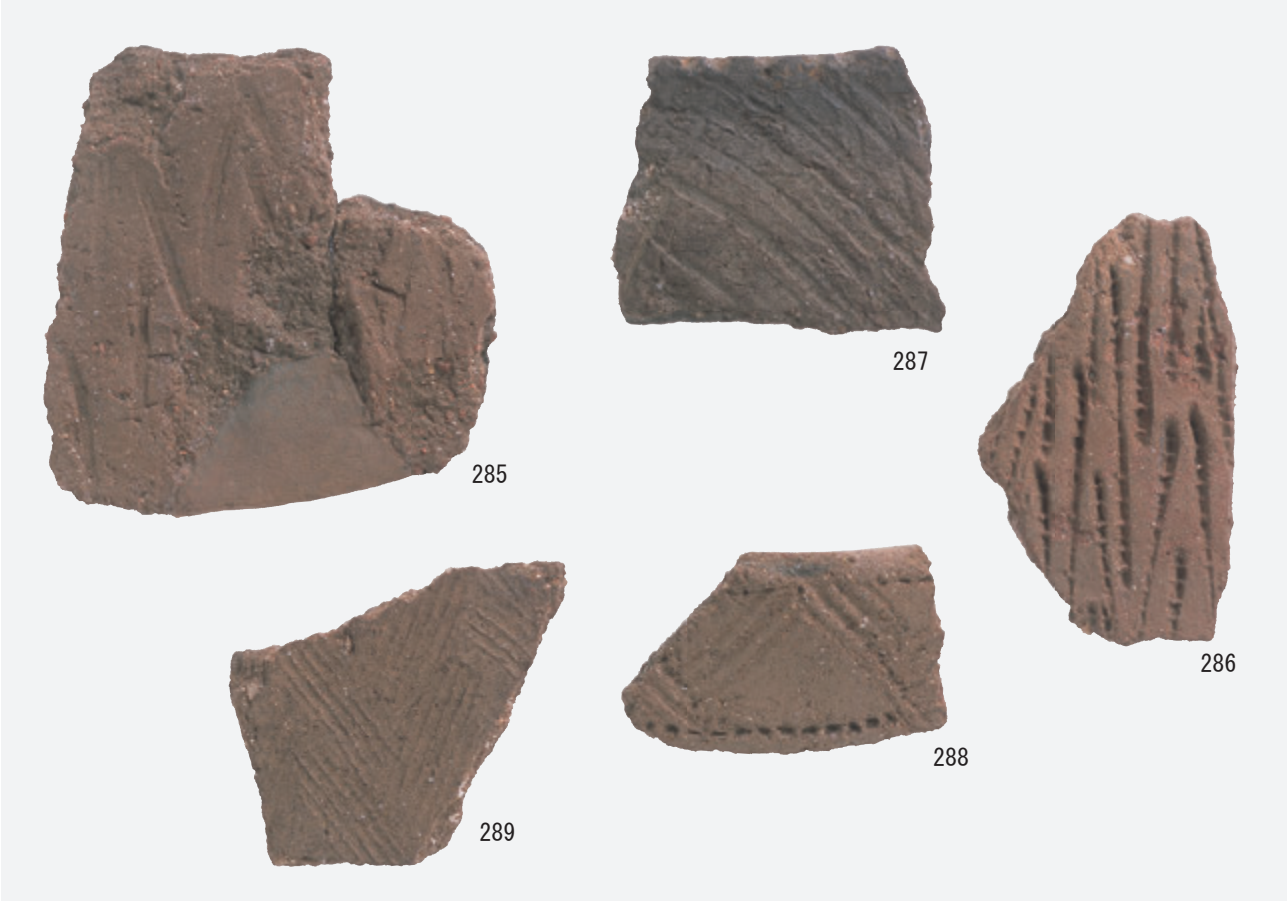
図版34　縄文時代早期出土土器(13)

図版35　縄文時代早期出土土器（14）



図版36　縄文時代早期出土土器（15）

図版37　縄文時代早期出土土器（16）



図版38　縄文時代早期出土土器（17）

295

296

298

297

299

301

305

304

306

307

300

図版39　縄文時代早期出土土器（18）

図版40　縄文時代早期出土土器・集石出土石器（19）

図版41　縄文時代早期出土石器（1）

図版42　縄文時代早期出土石器（2）

図版43　縄文時代早期出土石器（3）

379

361

381

380

383

382

384

388

385

387

386

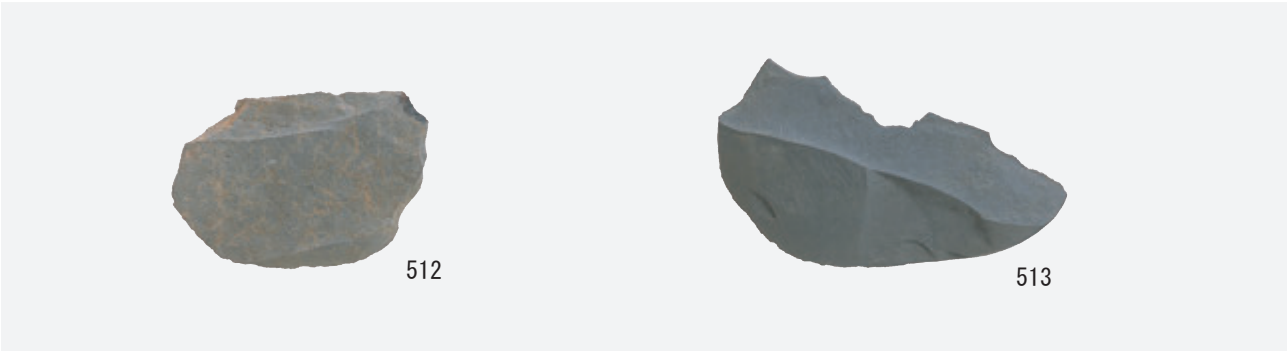
389

図版44　縄文時代早期出土石器（4）

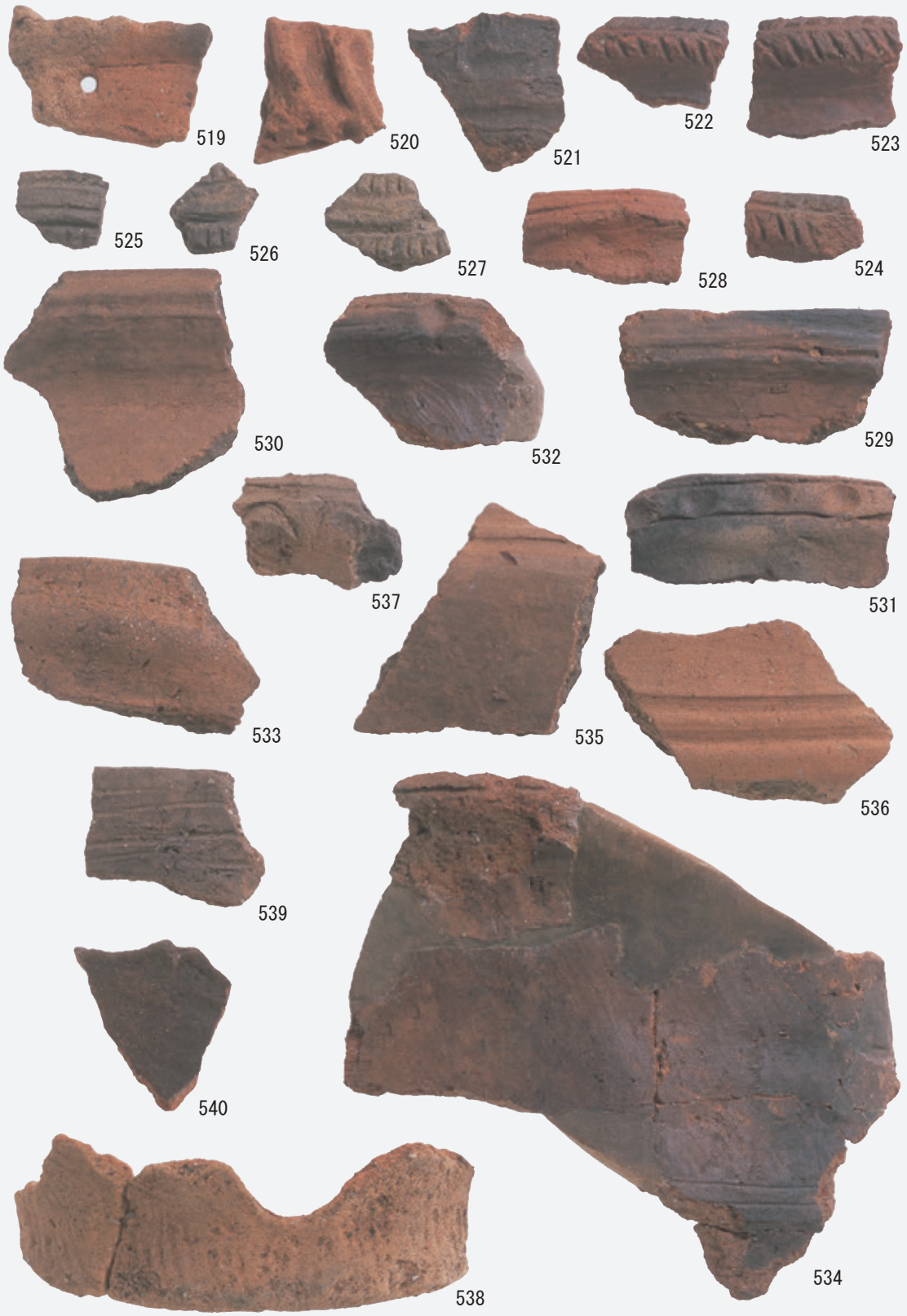
図版45　縄文時代早期出土石器（5）

図版46　縄文時代早期出土石器（6）

図版47　縄文時代早期出土石器（7）



図版48　縄文時代後期出土土器



公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（13）
東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良 ＪＣＴ）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

永吉天神段遺跡２
第２地点-１

発 行 年 月　　２０１７年３月
編集・発行　　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576
印　刷　所　　濱島印刷株式会社
〒890-0052　鹿児島市上之園町17番２号
TEL　099-255-6121　　FAX　099-259-1629

鹿児島県